九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書③

西原遺跡

1983年3月

佐賀県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書 (3)

西　原　遺　跡

1983年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第66集
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 (3)

西　原　遺　跡

西原遺跡（にしばる）
浦田遺跡（うらた）
西一本杉遺跡（にしいつぽんすぎ）
上三津栗原遺跡（かみみつくりはら）
山古賀遺跡（やまこが）

1983年3月

佐賀県教育委員会

序

この報告書は，佐賀県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて，昭和51年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は，昭和53年度から昭和56年度までに発掘調査を実施した佐賀市所在の西原遺跡，神埼郡東脊振村所在の浦田遺跡・上三津栗原遺跡・山古賀遺跡・西一本杉遺跡のもので，九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1)・(2)に続くものであります。

本報告書を通して埋蔵文化財に対するご理解をいただくとともに，今後の学術文化の向上に少しでも役立てば幸いと思います。

なお，発掘作業に従事していただきました地元の方々をはじめ，関係各位のご協力により本書を発行するはこびになりましたことを，心から感謝申し上げます。

昭和58年3月

佐賀県教育委員会

教育長　古藤　浩

例　　言

1．本書は九州横断自動車道建設に伴う事前調査のうち，昭和53年度から昭和56年度にかけて発掘調査した佐賀市所在の西原遺跡，神埼郡東脊振村所在の浦田遺跡・上三津栗原遺跡・山古賀遺跡・西一本杉遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，日本道路公団の委託事業として佐賀県教育委員会が実施した。

3．発掘調査にあたっては佐賀市，東脊振村の各教育委員会，並びに地元の方々の助力を得た。

4．本書の執筆者は次のとおりである。

I　調査の概要……樋渡　敏暲・東中川忠美

II　遺　　跡

西原遺跡……福田　義彦・藤井　伸幸・田平　徳栄

浦田遺跡　1．遺跡の概要……堤　安信

2．遺　構……立石　泰久

3．遺　物……堤　安信

4．小　結……堤　安信

西一本杉遺跡……松尾　吉高

上三津栗原遺跡……種浦　修

山古賀遺跡……藤井　伸幸

5．遺物の実測，製図は各調査員の指導のもとに山本タカ子，島孝子，古賀啓子，藤原倫子，永ノ間ひとみ，西村信子，大島もと子，中島成子，泉清子，中村真由美，野口悦子，馬場悦子，友清淑子，栗山留美子，野口百合子，池田覚子，松崎恭子，尾形郁子，畑瀬直子，吉浦みどり，貞包洋子，武藤直子，松尾直子，徳永千代美，上滝光子，増田庸子が行った。

復元作業は，宮崎礼子，高畠澄子，山崎美紀子，広滝敏子，古川万鶴代，緒方泰子，熊本富美子，平野澄子，新井久美，村瀬邦子，土井マサ子が行った。

その他，多くの方々の協力を得た。

遺構写真撮影は各調査員が行った。遺物写真撮影は原口定が，現像，焼付は原口定，古賀栄子が行った。

6．本書の作成，編集は文化財資料室の蒲原宏行，本田京子，友貞菜穂子，矢野佳代子の協力を得て東中川忠美が行った。

凡　　例

1．遺構については各遺跡ごとに一連番号を付し，その前にＳＢ：建物・住居跡，ＳＣ：石棺墓，ＳＤ：溝，ＳＪ：甕棺墓，ＳＫ：土壙・貯蔵穴・穴，ＳＰ：土壙墓，ＳＲ：祭祀遺構，ＳＴ：古墳，ＳＸ：その他の遺構の分類記号を標記する。

2．遺構の寸法数字はｍ単位，遺物の寸法数字はcm単位を原則とする。

3．実測図基準は国土座標にする。

4．遺物番号は挿図，図版とも原則として同一とする。

目　　次

I　調査の概要 …… 1
1．調査に至る経過 …… 3
2．調査組織 …… 4
3．調査の経過 …… 5
II　遺　　跡 …… 7

西原遺跡 …… 9
1．遺跡の概要 …… 10
2．遺　　構 …… 17
(1)　縄文時代 …… 17
(2)　古墳時代 …… 18
(3)　歴史時代 …… 64
3．遺　　物 …… 65
(1)　旧石器時代 …… 65
(2)　縄文時代 …… 65
(3)　弥生時代 …… 71
(4)　古墳時代 …… 72
(5)　歴史時代 …… 108
4．小　　結 …… 109

浦田遺跡 …… 113
1．遺跡の概要 …… 114
2．遺　　構 …… 118
(1)　古墳時代 …… 119
(2)　歴史時代 …… 142
3．遺　　物 …… 152
(1)　縄文時代 …… 152
(2)　古墳時代 …… 158
(3)　歴史時代 …… 187
4．小　　結 …… 200

西一本杉遺跡 ……207
1．遺跡の概要 ……208
2．遺　　構 ……211
3．遺　　物 ……226
4．小　　結 ……247

上三津栗原遺跡 ……249
1．遺跡の概要 ……250
2．遺　　構 ……250
3．遺　　物 ……256
4．小　　結 ……267

山古賀遺跡 ……269
1．遺跡の概要 ……270
2．遺　　構 ……270
3．遺　　物 ……274
4．小　　結 ……278

挿　図　目　次

Fig. 1　西原遺跡周辺遺跡分布図 ……11
〃 2　西原遺跡周辺地形図 ……12
〃 3　西原遺跡B区遺構配置図 ……14
〃 4　西原遺跡D区遺構配置図 ……15
〃 5　西原遺跡ＳＪ031甕棺墓実測図……17
〃 6　西原遺跡ＳＪ032甕棺墓実測図……17
〃 7　西原遺跡ＳＴ001古墳墳丘実測図……18
〃 8　西原遺跡ＳＴ001古墳石室実測図……19
〃 9　西原遺跡ＳＴ002古墳石室実測図……21
〃 10　西原遺跡ＳＴ003古墳石室実測図……23
〃 11　西原遺跡ＳＴ004古墳石室実測図……25
〃 12　西原遺跡ＳＴ005古墳墳丘実測図……26
〃 13　西原遺跡ＳＴ005古墳石室実測図……27
〃 14　西原遺跡ＳＴ006古墳墳丘実測図……28
〃 15　西原遺跡ＳＴ006古墳石室実測図……29
〃 16　西原遺跡ＳＴ007古墳墳丘実測図……30
〃 17　西原遺跡ＳＴ007古墳石室実測図……32
〃 18　西原遺跡ＳＴ009古墳石室実測図……33
〃 19　西原遺跡ＳＴ010古墳石室実測図……34
〃 20　西原遺跡ＳＴ011古墳石室実測図……36
〃 21　西原遺跡ＳＴ012古墳墳丘実測図……37
〃 22　西原遺跡ＳＴ012古墳墳丘断面図……38
〃 23　西原遺跡ＳＴ012古墳石室実測図……39
〃 24　西原遺跡ＳＴ013古墳墳丘実測図……40
〃 25　西原遺跡ＳＴ013古墳石室実測図……41
〃 26　西原遺跡ＳＴ014古墳墳丘実測図……43
〃 27　西原遺跡ＳＴ014古墳盛土下遺物出土状況……44
〃 28　西原遺跡ＳＴ014古墳石室実測図……45
〃 29　西原遺跡ＳＴ016古墳石室実測図……47
〃 30　西原遺跡ＳＴ017古墳石室実測図……48
〃 31　西原遺跡ＳＴ018古墳石室実測図……50
〃 32　西原遺跡ＳＴ019古墳石室実測図……52
〃 33　西原遺跡ＳＴ020古墳石室実測図……53
〃 34　西原遺跡ＳＴ021古墳石室実測図……54
〃 35　西原遺跡ＳＣ022石棺墓実測図……56

Fig. 36　西原遺跡ＳＣ023石棺墓実測図……57
〃 37　西原遺跡ＳＣ024石棺墓実測図……58
〃 38　西原遺跡ＳＢ025住居跡実測図……59
〃 39　西原遺跡ＳＢ026住居跡実測図……60
〃 40　西原遺跡ＳＢ027住居跡実測図……61
〃 41　西原遺跡ＳＢ028住居跡実測図……62
〃 42　西原遺跡ＳＫ030竪穴実測図……63
〃 43　西原遺跡ＳＪ033壺棺墓実測図……64
〃 44　西原遺跡ＳＪ034中世墓実測図……64
〃 45　西原遺跡石器実測図(1)……66
〃 46　西原遺跡縄文土器実測図……67
〃 47　西原遺跡石器実測図(2)……68
〃 48　西原遺跡石器実測図(3)……68
〃 49　西原遺跡石鏃実測図……70
〃 50　西原遺跡磨製石器，紡錘車実測図……71
〃 51　西原遺跡須恵器蓋・杯分類表……73
〃 52　西原遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器，土師器実測図……75
〃 53　西原遺跡ＳＴ002古墳出土須恵器実測図……76
〃 54　西原遺跡ＳＴ004古墳出土須恵器，土師器実測図……78
〃 55　西原遺跡ＳＴ006古墳出土須恵器，土師器実測図……79
〃 56　西原遺跡ＳＴ007古墳出土須恵器，土師器実測図……81
〃 57　西原遺跡ＳＴ007古墳出土須恵器実測図……82
〃 58　西原遺跡ＳＴ009古墳出土須恵器実測図……83
〃 59　西原遺跡ＳＴ011古墳出土須恵器，土師器実測図……84
〃 60　西原遺跡ＳＴ012古墳出土須恵器実測図(1)……85
〃 61　西原遺跡ＳＴ012古墳出土須恵器実測図(2)……86
〃 62　西原遺跡ＳＴ012古墳出土須恵器実測図(3)……87
〃 63　西原遺跡ＳＴ012古墳出土須恵器実測図(4)……88
〃 64　西原遺跡ＳＴ012古墳出土須恵器実測図(5)……89
〃 65　西原遺跡ＳＴ012古墳出土須恵器実測図(6)……90
〃 66　西原遺跡ＳＴ012古墳出土土師器実測図……92
〃 67　西原遺跡ＳＴ014古墳出土須恵器実測図(1)……94
〃 68　西原遺跡ＳＴ014古墳出土須恵器実測図(2)……95
〃 69　西原遺跡ＳＴ014古墳出土土師器実測図……96
〃 70　西原遺跡ＳＴ015～ＳＴ018・ＳＴ020古墳出土須恵器，土師器実測図……98
〃 71　西原遺跡鉄器実測図……100
〃 72　西原遺跡銅釧・耳環実測図……101
〃 73　西原遺跡玉類実測図……102
〃 74　西原遺跡ＳＢ026住居跡，ＳＫ030竪穴出土土師器実測図……103
〃 75　西原遺跡ＳＢ027住居跡出土土師器実測図(1)……105
〃 76　西原遺跡ＳＢ027住居跡出土土師器実測図(2)……106

Fig. 77　西原遺跡ＳＪ033壺棺墓出土土師器実測図……107
〃 78　西原遺跡ＳＪ034中世墓出土土師器実測図……109
〃 79　浦田遺跡周辺遺跡分布図……115
〃 80　浦田遺跡周辺地形図……116
〃 81　浦田遺跡遺構配置図……117
〃 82　浦田遺跡ＳＢ005住居跡実測図……119
〃 83　浦田遺跡ＳＢ008住居跡実測図……120
〃 84　浦田遺跡ＳＢ012住居跡実測図……121
〃 85　浦田遺跡ＳＢ011住居跡実測図……121
〃 86　浦田遺跡ＳＢ014住居跡実測図……122
〃 87　浦田遺跡ＳＢ013住居跡実測図……122
〃 88　浦田遺跡ＳＢ015住居跡実測図……123
〃 89　浦田遺跡ＳＢ016住居跡実測図……124
〃 90　浦田遺跡ＳＢ019住居跡実測図……125
〃 91　浦田遺跡ＳＢ017住居跡実測図……125
〃 92　浦田遺跡ＳＢ018住居跡実測図……126
〃 93　浦田遺跡ＳＢ020住居跡実測図……127
〃 94　浦田遺跡ＳＢ021住居跡実測図……128
〃 95　浦田遺跡ＳＢ023住居跡実測図……129
〃 96　浦田遺跡ＳＢ024住居跡実測図……130
〃 97　浦田遺跡ＳＢ025住居跡実測図……131
〃 98　浦田遺跡ＳＢ027住居跡実測図……131
〃 99　浦田遺跡ＳＢ029住居跡実測図……132
〃 100　浦田遺跡ＳＢ028住居跡実測図……132
〃 101　浦田遺跡ＳＢ036住居跡実測図……133
〃 102　浦田遺跡ＳＢ037住居跡実測図……134
〃 103　浦田遺跡ＳＢ038住居跡実測図……135
〃 104　浦田遺跡ＳＢ041住居跡実測図……136
〃 105　浦田遺跡ＳＢ039住居跡実測図……136
〃 106　浦田遺跡ＳＢ040住居跡実測図……137
〃 107　浦田遺跡ＳＢ042住居跡実測図……138
〃 108　浦田遺跡ＳＢ043住居跡実測図……138
〃 109　浦田遺跡ＳＢ030掘立柱建物跡実測図……139
〃 110　浦田遺跡ＳＢ031掘立柱建物跡実測図……139
〃 111　浦田遺跡ＳＢ032掘立柱建物跡実測図……140
〃 112　浦田遺跡ＳＢ035掘立柱建物跡実測図……140
〃 113　浦田遺跡ＳＢ034掘立柱建物跡実測図……141
〃 114　浦田遺跡ＳＢ033掘立柱建物跡実測図……141
〃 115　浦田遺跡ＳＢ001住居跡実測図……142
〃 116　浦田遺跡ＳＢ002住居跡実測図……143
〃 117　浦田遺跡ＳＢ003住居跡実測図……144

Fig. 118　浦田遺跡ＳＢ004住居跡実測図 ……145
〃 119　浦田遺跡ＳＢ006住居跡実測図 ……146
〃 120　浦田遺跡ＳＢ009住居跡実測図 ……147
〃 121　浦田遺跡ＳＢ022住居跡実測図 ……148
〃 122　浦田遺跡ＳＢ026住居跡実測図 ……149
〃 123　浦田遺跡ＳＤ010溝土層図 ……149
〃 124　浦田遺跡ＳＫ007土壙実測図 ……150
〃 125　浦田遺跡縄文土器実測図(1)……153
〃 126　浦田遺跡縄文土器実測図(2)……154
〃 127　浦田遺跡石器実測図(1)……155
〃 128　浦田遺跡石器実測図(2)……156
〃 129　浦田遺跡石器実測図(3)……157
〃 130　浦田遺跡須恵器実測図(1)……159
〃 131　浦田遺跡須恵器実測図(2)……161
〃 132　浦田遺跡須恵器実測図(3)……161
〃 133　浦田遺跡土師器実測図(1)……164
〃 134　浦田遺跡土師器実測図(2)……167
〃 135　浦田遺跡土師器実測図(3)……169
〃 136　浦田遺跡土師器実測図(4)……170
〃 137　浦田遺跡土師器実測図(5)……172
〃 138　浦田遺跡土師器実測図(6)……174
〃 139　浦田遺跡土師器実測図(7)……176
〃 140　浦田遺跡土師器実測図(8)……178
〃 141　浦田遺跡土師器実測図(9)……179
〃 142　浦田遺跡土師器実測図(10)……180
〃 143　浦田遺跡土師器実測図(11)……181
〃 144　浦田遺跡土師器実測図(12)……182
〃 145　浦田遺跡土師器実測図(13)……183
〃 146　浦田遺跡土師器実測図(14)……185
〃 147　浦田遺跡土師器実測図(15)……189
〃 148　浦田遺跡土師器実測図(16)……191
〃 149　浦田遺跡土師器（黒色土器）実測図(17)……193
〃 150　浦田遺跡石器実測図(4)……196
〃 151　浦田遺跡石器実測図(5)……197
〃 152　浦田遺跡紡錘車・玉類実測図……198
〃 153　浦田遺跡煙道付カマド実測図(1)……202
〃 154　浦田遺跡煙道付カマド実測図(2)……203
〃 155　西一本杉・上三津栗原・山古賀遺跡周辺地形図……208
〃 156　西一本杉遺跡遺構配置図(1)……209
〃 157　西一本杉遺跡遺構配置図(2)……210
〃 158　西一本杉遺跡ＳＴ006古墳石室実測図 ……212

Fig. 159　西一本杉遺跡ＳＴ007古墳石室実測図 ……213
〃 160　西一本杉遺跡ＳＴ008古墳墳丘測量図 ……214
〃 161　西一本杉遺跡ＳＴ008古墳内部主体実測図……215
〃 162　西一本杉遺跡ＳＴ008古墳墳丘土層図 ……216
〃 163　西一本杉遺跡ＳＴ009古墳内部主体実測図 ……217
〃 164　西一本杉遺跡ＳＴ010古墳内部主体実測図……218
〃 165　西一本杉遺跡ＳＴ012古墳石室実測図(1) ……220
〃 166　西一本杉遺跡ＳＴ012古墳石室実測図(2) ……221
〃 167　西一本杉遺跡ＳＴ013古墳石室実測図 ……222
〃 168　西一本杉遺跡ＳＴ012・013古墳墳丘土層図 ……折り込み
〃 169　西一本杉遺跡ＳＣ003石棺墓実測図 ……223
〃 170　西一本杉遺跡ＳＣ004石棺墓実測図 ……224
〃 171　西一本杉遺跡ＳＣ005石棺墓実測図 ……225
〃 172　西一本杉遺跡ＳＪ001壺棺墓実測図 ……225
〃 173　西一本杉遺跡ＳＪ002壺棺墓実測図 ……225
〃 174　西一本杉遺跡ＳＴ006・ＳＴ007古墳出土須恵器実測図……227
〃 175　西一本杉遺跡ＳＴ012古墳出土須恵器実測図(1) ……229
〃 176　西一本杉遺跡ＳＴ012古墳出土須恵器実測図(2) ……230
〃 177　西一本杉遺跡ＳＴ012古墳出土土師器実測図 ……231
〃 178　西一本杉遺跡ＳＴ012古墳出土須恵器ヘラ記号拓影……232
〃 179　西一本杉遺跡ＳＴ013古墳出土須恵器実測図(1) ……234
〃 180　西一本杉遺跡ＳＴ013古墳出土須恵器実測図(2) ……235
〃 181　西一本杉遺跡ＳＴ013古墳出土土師器実測図 ……236
〃 182　西一本杉遺跡ＳＴ013古墳出土須恵器ヘラ記号拓影 ……237
〃 183　西一本杉遺跡西丘陵南斜面出土一括土師器(1)，ＳＪ001・002壺棺実測図……240
〃 184　西一本杉遺跡西丘陵南斜面出土一括土師器(2)……241
〃 185　西一本杉遺跡ＳＴ008古墳溝・西丘陵表土層出土土師器実測図 ……242
〃 186　西一本杉遺跡ＳＴ007・008・010・012古墳，ＳＣ004石棺墓出土鉄器，装身具実測図 ……243
〃 187　西一本杉遺跡ＳＴ009古墳出土鉄器，鏡実測図 ……245
〃 188　西一本杉遺跡ＳＴ009古墳出土鉄器，装身具実測図 ……246
〃 189　上三津栗原遺跡地形測量図……251
〃 190　上三津栗原遺跡ＳＴ001古墳石室実測図 ……252
〃 191　上三津栗原遺跡ＳＴ002古墳石室実測図(1) ……254
〃 192　上三津栗原遺跡ＳＴ002古墳石室実測図(2) ……255
〃 193　上三津栗原遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器実測図(1) ……257
〃 194　上三津栗原遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器実測図(2) ……259
〃 195　上三津栗原遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器実測図(3) ……260
〃 196　上三津栗原遺跡ＳＴ001古墳出土土師器実測図 ……262
〃 197　上三津栗原遺跡ＳＴ001古墳出土鉄器，青銅製品，装身具類実測図 ……264
〃 198　上三津栗原遺跡ＳＴ002古墳出土須恵器，土師器実測図 ……265
〃 199　山古賀遺跡地形測量図……270

Fig. 200　山古賀遺跡遺構配置図……271
〃 201　山古賀遺跡ＳＪ001・002壺棺墓実測図……272
〃 202　山古賀遺跡ＳＣ003石棺墓実測図……273
〃 203　山古賀遺跡S.T004古墳石室実測図……273
〃 204　山古賀遺跡縄文土器実測図……274
〃 205　山古賀遺跡ＳＪ001・002壺棺実測図……275
〃 206　山古賀遺跡弥生土器実測図……276
〃 207　山古賀遺跡須恵器・土師器・白磁実測図……278

表　目　次

Tab. 1　西原遺跡遺構一覧表……16
〃 2　西原遺跡古墳編年表……111
〃 3　浦田遺跡住居跡一覧表……151
〃 4　浦田遺跡掘立柱建物跡一覧表……151
〃 5　浦田遺跡遺物出土地点表(1)……171
〃 6　浦田遺跡遺物出土地点表(2)……186
〃 7　浦田遺跡遺物出土地点表(3)……194
〃 8　浦田遺跡住居跡出土遺物番号表……199
〃 9　西一本杉ＳＴ009古墳出土玉類計測表……247

図 版 目 次

PL. 1　西原遺跡〈航空写真〉
〃 2　西原遺跡B区全景，D区全景
〃 3　西原遺跡D区東部，D区西部
〃 4　西原遺跡ＳＴ001・ＳＴ002古墳石室
〃 5　西原遺跡ＳＴ003・ＳＴ004古墳石室
〃 6　西原遺跡ＳＴ005古墳全景，同石室
〃 7　西原遺跡ＳＴ006・ＳＴ007古墳全景
〃 8　西原遺跡ＳＴ009・ＳＴ010・ＳＴ011古墳石室
〃 9　西原遺跡ＳＴ012古墳全景，同石室
〃 10　西原遺跡ＳＴ012古墳石室，同墳丘西側，同墳丘東側
〃 11　西原遺跡ＳＴ013古墳全景，同石室
〃 12　西原遺跡ＳＴ014古墳全景，同石室
〃 13　西原遺跡ＳＴ014古墳盛土下遺物出土状況，同墓道遺物出土状況
〃 14　西原遺跡ＳＴ016・ＳＴ017古墳石室
〃 15　西原遺跡ＳＴ018・ＳＴ019古墳石室
〃 16　西原遺跡ＳＴ020・ＳＴ021古墳石室
〃 17　西原遺跡ＳＣ022石棺墓
〃 18　西原遺跡ＳＣ023・024石棺墓
〃 19　西原遺跡ＳＣ023石棺墓鉄剣副葬状況，ＳＣ024石棺墓身部，同人骨検出状況
〃 20　西原遺跡ＳＢ025・ＳＢ026住居跡
〃 21　西原遺跡ＳＢ027住居跡
〃 22　西原遺跡ＳＢ028・ＳＢ029住居跡，ＳＫ030竪穴
〃 23　西原遺跡ＳＪ031・ＳＪ032甕棺墓，ＳＪ034中世墓
〃 24　西原遺跡ＳＪ033壺棺墓
〃 25　西原遺跡出土石器
〃 26　西原遺跡ＳＪ031・ＳＪ032甕棺，ＳＪ034中世墓出土土師器
〃 27　西原遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器・土師器，ＳＴ002古墳出土須恵器
〃 28　西原遺跡ＳＴ004古墳出土須恵器
〃 29　西原遺跡ＳＴ006古墳出土須恵器・土師器，ＳＴ009古墳出土須恵器
〃 30　西原遺跡ＳＴ007古墳出土須恵器
〃 31　西原遺跡ＳＴ012古墳出土須恵器
〃 32　西原遺跡ＳＴ012古墳出土須恵器
〃 33　西原遺跡ＳＴ012古墳出土須恵器
〃 34　西原遺跡ＳＴ012古墳出土須恵器
〃 35　西原遺跡ＳＴ012古墳出土須恵器・土師器

PL. 36　西原遺跡ＳＴ014古墳出土須恵器
〃 37　西原遺跡ＳＴ014古墳出土須恵器・土師器
〃 38　西原遺跡ＳＴ015・ＳＴ016・ＳＴ017・ＳＴ018・ＳＴ020古墳出土須恵器，土師器
〃 39　西原遺跡ＳＢ026住居跡，ＳＫ030竪穴出土土師器
〃 40　西原遺跡ＳＢ027住居跡出土土師器
〃 41　西原遺跡ＳＢ027住居跡出土土師器
〃 42　西原遺跡ＳＪ033壺棺墓出土土師器
〃 43　西原遺跡出土鉄器
〃 44　西原遺跡出土装身具類
〃 45　浦田遺跡〈航空写真〉
〃 46　浦田遺跡全景
〃 47　浦田遺跡Ａ区近景
〃 48　浦田遺跡Ｂ区
〃 49　浦田遺跡Ｃ区
〃 50　浦田遺跡ＳＢ005・ＳＢ008住居跡，ＳＢ008住居跡カマド
〃 51　浦田遺跡ＳＢ011住居跡，同カマド，ＳＢ012住居跡
〃 52　浦田遺跡ＳＢ013・ＳＢ014・ＳＢ016住居跡
〃 53　浦田遺跡ＳＢ015・ＳＢ017住居跡
〃 54　浦田遺跡ＳＢ018・ＳＢ019住居跡，ＳＢ019住居跡カマド
〃 55　浦田遺跡ＳＢ020住居跡，同カマド
〃 56　浦田遺跡ＳＢ021住居跡，同カマド，ＳＢ024住居跡
〃 57　浦田遺跡ＳＢ023住居跡，同カマド，ＳＢ025住居跡
〃 58　浦田遺跡ＳＢ028住居跡，同カマド，ＳＢ026住居跡
〃 59　浦田遺跡ＳＢ029住居跡，同カマド，ＳＢ027住居跡
〃 60　浦田遺跡ＳＢ036・ＳＢ037・ＳＢ038住居跡
〃 61　浦田遺跡ＳＢ039・ＳＢ040・ＳＢ041住居跡
〃 62　浦田遺跡ＳＢ042住居跡，同カマド，ＳＢ031掘立柱建物跡
〃 63　浦田遺跡ＳＢ032～034掘立柱建物跡遠景，同近景
〃 64　浦田遺跡ＳＢ001住居跡，同カマド，ＳＢ002住居跡
〃 65　浦田遺跡ＳＢ002住居跡，同カマド，ＳＢ003住居跡
〃 66　浦田遺跡ＳＢ004住居跡，同カマド，ＳＢ006住居跡
〃 67　浦田遺跡ＳＢ006住居跡，同カマド，ＳＢ009住居跡
〃 68　浦田遺跡ＳＢ022住居跡，同カマド，ＳＤ010溝
〃 69　浦田遺跡ＳＴ045古墳遠景，同近景
〃 70　浦田遺跡出土縄文土器
〃 71　浦田遺跡ＳＢ021・ＳＢ015・ＳＢ017・ＳＢ018住居跡出土須恵器
〃 72　浦田遺跡ＳＢ021・ＳＢ020・ＳＢ023・ＳＢ018・ＳＢ027・ＳＢ016住居跡出土須恵器
〃 73　浦田遺跡ＳＢ021・ＳＢ018・ＳＢ028・ＳＢ012住居跡出土土師器
〃 74　浦田遺跡ＳＢ011・ＳＢ021・ＳＢ017・ＳＢ020・ＳＢ012・ＳＢ024・ＳＢ023住居跡出土土師器
〃 75　浦田遺跡ＳＢ012・ＳＢ021・ＳＢ023・ＳＢ027・ＳＢ028住居跡出土土師器

PL. 76　浦田遺跡ＳＢ023・ＳＢ015・ＳＢ003・ＳＢ021・ＳＢ037・ＳＢ011・ＳＢ022住居跡出土土師器
〃 77　浦田遺跡ＳＢ021・ＳＢ027・ＳＢ009・ＳＢ011住居跡，Ｃ区周溝内，Ｂ区出土土師器
〃 78　浦田遺跡ＳＢ021・ＳＢ011・ＳＢ023住居跡出土土師器
〃 79　浦田遺跡ＳＢ008・ＳＢ027・ＳＢ021・ＳＢ001・ＳＢ022住居跡出土土師器
〃 80　浦田遺跡ＳＢ011・ＳＢ004・ＳＢ028・ＳＢ027・ＳＢ021・ＳＢ017・ＳＢ023住居跡出土土師器
〃 81　浦田遺跡ＳＢ002・ＳＢ027・ＳＢ011・ＳＢ020・ＳＢ022・ＳＢ008・ＳＢ001・ＳＢ003住居跡出土土師器
〃 82　浦田遺跡ＳＢ009・ＳＢ001・ＳＢ027・ＳＢ011・ＳＢ022・ＳＢ002・ＳＢ003住居跡出土土師器
〃 83　浦田遺跡ＳＢ026・ＳＢ006・ＳＢ003・ＳＢ011・ＳＢ028・ＳＢ009・ＳＢ012住居跡出土土師器
〃 84　浦田遺跡ＳＢ042・ＳＢ001・ＳＢ022・ＳＢ026・ＳＢ002・ＳＢ015住居跡出土黒色土器
〃 85　浦田遺跡出土石器
〃 86　西一本杉遺跡全景〈航空写真〉
〃 87　西一本杉遺跡ＳＴ006古墳〈航空写真〉
〃 88　西一本杉遺跡ＳＴ007古墳〈航空写真〉
〃 89　西一本杉遺跡ＳＴ008古墳〈航空写真〉
〃 90　西一本杉遺跡ＳＴ008古墳張り出し部調査前，調査後
〃 91　西一本杉遺跡ＳＴ008古墳内部主体
〃 92　西一本杉遺跡ＳＴ008古墳内部主体，同古墳溝出土壺
〃 93　西一本杉遺跡ＳＴ009古墳内部主体，同古墳遺物出土状況
〃 94　西一本杉遺跡ＳＴ009古墳遺物出土状況
〃 95　西一本杉遺跡ＳＴ010古墳
〃 96　西一本杉遺跡ＳＴ012古墳全景
〃 97　西一本杉遺跡ＳＴ012古墳石室内
〃 98　西一本杉遺跡ＳＴ013古墳全景，同古墳石室
〃 99　西一本杉遺跡ＳＴ013古墳石室，同古墳石室内遺物出土状況
〃 100　西一本杉遺跡ＳＣ003石棺墓
〃 101　西一本杉遺跡ＳＣ004石棺墓
〃 102　西一本杉遺跡ＳＣ005石棺墓
〃 103　西一本杉遺跡ＳＪ001・ＳＪ002壺棺墓
〃 104　西一本杉遺跡ＳＴ008古墳出土土師器壺
〃 105　西一本杉遺跡ＳＴ007古墳出土須恵器
〃 106　西一本杉遺跡ＳＴ012古墳出土須恵器
〃 107　西一本杉遺跡ＳＴ012古墳出土須恵器
〃 108　西一本杉遺跡ＳＴ013古墳出土須恵器
〃 109　西一本杉遺跡ＳＴ013古墳出土須恵器
〃 110　西一本杉遺跡ＳＴ012・ＳＴ013古墳出土土師器
〃 111　西一本杉遺跡ＳＪ001・ＳＴ002壺棺，西丘陵南斜面出土土師器一括，ＳＴ008古墳出土土師器壺

PL. 112　西一本杉遺跡出土鉄器，鏡，耳環
〃 113　西一本杉遺跡ＳＴ009古墳出土鉄器，玉類
〃 114　上三津栗原遺跡ＳＴ001古墳玄室内遺物出土状況，同羨道内遺物出土状況
〃 115　上三津栗原遺跡ＳＴ002古墳石室全景
〃 116　上三津栗原遺跡ＳＴ002古墳
〃 117　上三津栗原遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器
〃 118　上三津栗原遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器
〃 119　上三津栗原遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器
〃 120　上三津栗原遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器
〃 121　上三津栗原遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器，土師器
〃 122　上三津栗原遺跡ＳＴ001古墳出土土師器，鉄器，青銅製品，装身具類
〃 123　上三津栗原遺跡ＳＴ002古墳出土須恵器，土師器
〃 124　上三津栗原遺跡・山古賀遺跡・西一本杉遺跡〈航空写真〉
〃 125　山古賀遺跡ＳＪ001壺棺墓，ＳＴ004古墳石室
〃 126　山古賀遺跡出土縄文土器，ＳＪ001壺棺
〃 127　山古賀遺跡出土弥生土器，土師器，白磁

Ⅰ　調査の概要

調　査　の　概　要

1．調査に至る経過

九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査が開始されたのは，昭和51年度末の昭和52年1月18日からである。

昭和51年度は佐賀市の久保泉丸山・藤附E・F遺跡，大和町の惣座遺跡の調査を実施した。久保泉丸山遺跡は，縄文時代晩期末から弥生時代初めの支石墓群と，5～6世紀の古墳群からなる重要な遺跡であることが判明し，その保存問題についてさまざまな協議が行われるようになる。

昭和52年度は，前年度の遺跡に加えて佐賀市の十本杉・六本黒木・大門西・藤附A～D遺跡の調査を実施した。

昭和53年度は，前年度からの六本黒木・大門西遺跡の他に，佐賀市の長尾・金立開拓（～昭和56年度まで）・藤附G・H・西原遺跡，中原町の綾部城跡・綾部八本松・一本杉遺跡の調査を実施した。

昭和54年度は，前年度からの西原遺跡の他に，佐賀市の三郎山・六本黒木B・藤附I～K・E（残）・鈴熊・元大日遺跡，神埼町と東脊振村にまたがる戦場遺跡，東脊振村の寺ヶ里・浦田・上三津栗原・西一本杉・下石動遺跡，中原町の白虎谷・獅々喰・香田遺跡，佐賀市から西では多久市の松瀬・西田A・B・C・米満・三本松遺跡などの調査を実施した。東脊振村西一本杉遺跡の前期古墳や，中原町香田遺跡の支石墓など，昭和54年度は特筆される調査成果があった。

また，佐賀市久保泉丸山遺跡の保存問題について，日本道路公団との間で「全面移設」が決定したのも昭和54年度のことであった。

昭和55年度は，前年度からの鈴熊・浦田・下石動遺跡の他に，多久市の十井手・今出川A・山の上・池の平遺跡，大和町の春日・礫石A・久池井一本松遺跡，神埼町の猿嶽A・B・上志波屋遺跡，東脊振村の西石動・堤一本黒木・山古賀遺跡，中原町の谷渡・一本桜遺跡などの調査が実施された。

昭和56年度は，前年度からの春日・礫石A・久池井一本松遺跡の他に，多久市の山王・撰分・今出川B・原田・大工田遺跡，大和町の久池井・礫石B遺跡，神埼町の猿嶽C・D・朝日・切畑A・上志波屋B遺跡，東脊振村の石動二本松遺跡,武雄市の後田遺跡などの調査が実施された。

なお，56年度末の昭和57年1月から，佐賀市久保泉丸山遺跡の本格的な移設工事が開始され，58年3月の完成を目指して，現在，急ピッチで工事が進められている。

昭和57年度は，前年度からの山王・撰分・礫石B・久池井一本松・春日・久池井遺跡の他に，大和町の惣座遺跡，神埼町の切畑B・朝日北・的遺跡などが調査されている。また，久保泉丸山遺跡では，移設工事に伴う発掘調査で100基を越す支石墓群が検出されている。

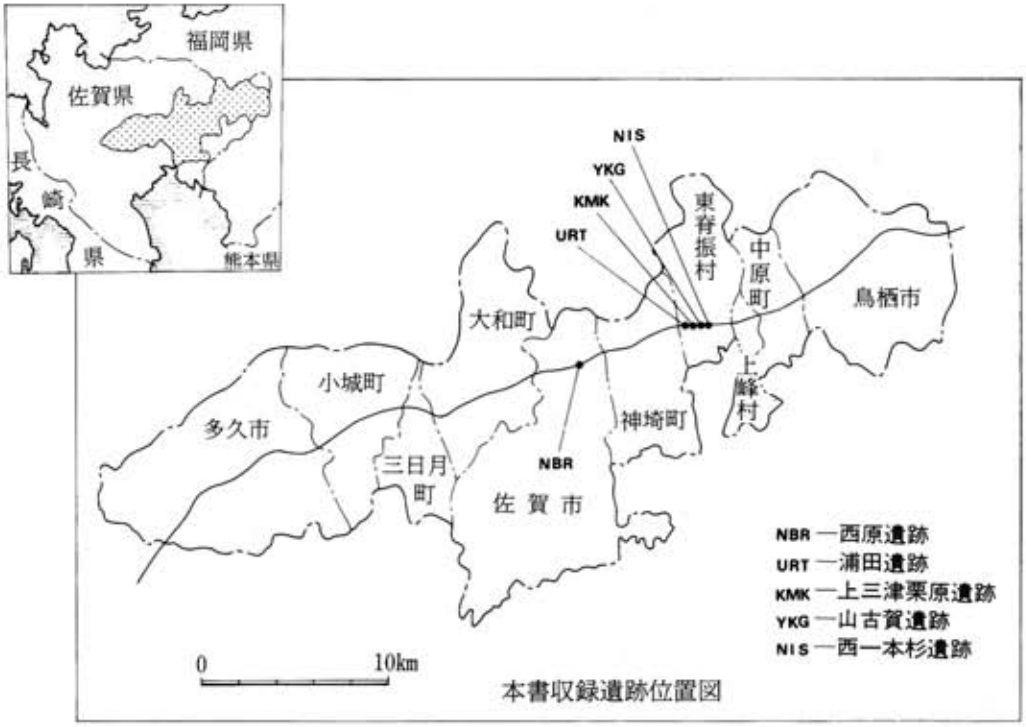
2．調査組織

昭和53年度からの関係者は次のとおりである。

佐賀県教育委員会

総括	教育長	古藤　浩	
	教育次長	小西　亘	（昭53・54年度）
	同	大坪　実	（昭53・54年度）
	同	川副　道夫	（昭55年度）
	同	野村　綱明	（昭55年度）
	同	宇田川勝之	（昭56年度）
	同	大塚　正道	
	同	高橋　一之	
	文化課課長	田中寿義雄	（昭53～55年度）
	同	藤山　巌	
	文化課参事	古賀　礼三	（昭53・54年度）
	同	藤山　巌	（昭55年度）
	文化課課長補佐	川久保松広	（昭56年度）
	同	高島　忠平	
	同	山田　陸三	
庶務	文化課専門員	廣川　昇	（昭55年度）
	文化課庶務係長	片渕　正美	（昭53・54年度）
	同	中野　安正	
	文化課主事	伊崎　憲二	（昭54年度）
	同	北島　和男	（昭55年度）
	同	野口　茂実	（昭53～56年度）
	同	森　由紀子	（昭53～56年度）
	同	山口　勝	
	同	山下　行夫	
	同	大串　裕子	
発掘調査総括	文化課課長補佐	高島　忠平	
	文化財専門員	高島　忠平	（昭55年度）
	文化財調査第1係長	高島　忠平	（昭53～55年度）
	同	樋渡　敏暲	
発掘調査	指導主事	樋渡　敏暲　杠　一義　岩永　政博　久保　和彦 高瀬　哲郎　蒲原　宏行　坂井　健二　藤井　伸幸	
	文化財保護主事	中牟田賢治　松尾　吉高　田平　徳栄　東中川忠美 立石　泰久　西田　和己	
	嘱託	立石　泰久　中島　直幸　盛　峰雄　高瀬　哲郎 西田　和己　川崎　吉剛　森田　孝志　福田　義彦 山田　正　堤　安信　種浦　修　久保　伸洋 後中筋正徳　東中川新子　高瀬久美子　本田　京子 矢野佳代子　友貞菜穂子　原口　定　松尾　法博 原田　保則　吉永　明	
	多久市	西村　隆司	
	調査補助員	岸本　義彦　田中　康教　松尾　直子　山口　弘 釘本　堅太　朝原　良寛　藤尾慎一郎	
	調査準補助員	蒲原　正幸　矢野　養　川谷　昭彦　江里口克己 野田　隆文　武広　正純　深町佐千子　鵜田　和仁 城野　一郎　中野　春男　山田　尚則　江頭　信哉 田代　成澄　熊手　達夫　熊谷　誠司	

3．調査の経過



本書収録遺跡位置図

西原遺跡（略号ＮＢＲ）

所　在　地　　佐賀市久保泉町大字川久保字西原

調査担当者　　中牟田賢治・福田　義彦

調 査 期 間　　昭和53年５月15日～昭和54年６月16日

調 査 面 積　　14,900㎡

遺跡の内容　　古墳時代後期を主体とする古墳群

浦田遺跡（略号ＵＲＴ）

所　在　地　　神埼郡東脊振村大字三津字上三津西

調査担当者　　杠　　一義・森田　孝志・立石　泰久・堤　　安信

調 査 期 間　　昭和55年１月21日～昭和55年10月31日

調 査 面 積　　7,000㎡

遺跡の内容　　古墳時代から歴史時代に至る住居跡群・掘立柱建物跡群

上三津栗原遺跡（略号ＫＭＫ）

所　在　地　　神埼郡東脊振村大字三津字栗原

調査担当者　　松尾　吉高・山田　　正・立石　泰久・吉永　　明・堤　　安信

調 査 期 間　　昭和55年１月８日～昭和55年３月31日，昭和56年５月～７月

調 査 面 積　　1,000㎡

遺跡の内容　　古墳２基

山古賀遺跡（略号ＹＫＧ）

所　在　地　　神埼郡東脊振村大字石動字西一本杉

調査担当者　　立石　泰久・堤　　安信

調 査 期 間　　昭和55年４月10日～昭和56年１月９日

調 査 面 積　　1,000㎡

遺跡の内容　　壺棺墓２基，石棺墓１基，古墳１基

西一本杉遺跡（略号ＮＩＳ）

所　在　地　　神埼郡東脊振村大字石動字西一本杉

調査担当者　　松尾　吉高・山田　　正・立石　泰久・吉永　　明

調 査 期 間　　昭和54年８月７日～昭和55年３月31日，昭和56年

調 査 面 積　　7,200㎡

遺跡の内容　　古墳時代前期を主体とする古墳群

II　遺　　跡

にし　　ばる

西　原　遺　跡

遺跡名：西　原（略号ＮＢＲ）
所在地：佐賀市久保泉町大字川久保字西原

西　原　遺　跡

1．遺跡の概要

西原遺跡は佐賀市久保泉町大字川久保字西原に所在する。地形からみると，遺跡の立地は佐賀平野の北部山麓，ちょうど脊振山塊が南側平野部に移行するあたりの緩斜面上に位置する。嘉瀬川からは約5㎞東方にあたる。また，この緩斜地形は脊振山塊の裾部にあたることもあって東西両側に小河川が発達し，比高差約10mの谷を形成している。そのため，遺跡はいくぶん平野部に張り出した台地的な景観をあたえている。両谷間の距離は約400mとかなり広い。

佐賀平野北部の山麓沿いには極めて濃密な遺跡の分布がみられるが，ことに大和町から佐賀市にかけて本遺跡を含む嘉瀬川の東側における密集度には著しいものがある。時代別には原始から古代，中世全般にわたっており，従来，古墳が目立っていたが，近年調査例が多くなるにつれ，そのほかの時代または時代の複合した遺跡が多く知られるようになってきている。遺跡の性格別には各時代を通じて墓地が圧倒的に多い。

本遺跡周辺の歴史的環境を概観すると(Fig 1)，まず旧石器時代では，今のところ大和町久池井一本松遺跡，佐賀市丸山遺跡[註1]，藤附遺跡[註2]，大門西遺跡[註3]など数箇所で石器が出土している程度にすぎない。しかし縄文時代になると，早・前期に大和町礫石遺跡や佐賀市では丸山遺跡，金立開拓遺跡，藤附遺跡，六本黒木遺跡[註4]，大門遺跡など多くが知られ，そのうち藤附遺跡や六本黒木遺跡では前期の土壙を検出している。中期の様相は今のところ不明であるが，後期になっても金立開拓遺跡や大門遺跡，大門西遺跡など，山麓一帯に分布がみられる。

この地域の特色が現われはじめるのは縄文時代晩期以降である。大門遺跡[註5]のほか，最近では先の礫石遺跡や丸山遺跡で縄文時代晩期から弥生時代前期の支石墓や壺棺がかなりの数発見されており，佐賀平野における農耕文化初期の様相を知るうえでのこの地域の重要性が問題となっている。弥生中期・後期では佐賀市琵琶原遺跡[註6]で近年集落跡が調査されている。埋葬遺構は主に甕棺が金立開拓遺跡[註7]，六木黒本遺跡[註8]などで調査されている。全体の様相は今のところ実態が不明確であるが，山麓一帯に分布の広がりが予想される。

古墳時代になると，やや平野部に下って，まず金立銚子塚古墳[註9]が出現する。底部穿孔壺を出土する前期型の100m級前方後円墳で県下でも最古の一つに目されるものである。しかしその後，この地域においては大型古墳の発達は顕著でない。前方後円墳にしても前隈山古墳，築山古墳，西原古墳，関行丸古墳等はいずれも50m以下にすぎない[註10]。だが，その一方で5世紀以降，首長墓の系譜に連なるであろう大型円墳を混えながら，はやくから群集墳が形成されはじめる。5世紀から7世紀にかかるこれら群集墳の造営は山麓部一帯を埋めつくすかのように東西帯状に

1	帯隈山神籠石	10	琵琶原遺跡	19	乱斗山古墳群	28	肥前国分寺跡
2	熊本山古墳	11	藤附遺跡	20	大門古墳群	29	築山古墳
3	神籠池窯跡	12	山王山古墳	21	六本黒木遺跡	30	肥前国分尼寺跡
4	小清兵衛山古墳	13	藤附K遺跡	22	大門西遺跡	31	礫石遺跡
5	関行丸古墳	14	藤附B・C遺跡	23	長尾遺跡	32	前隈山古墳
6	花納丸古墳	15	藤附A遺跡	24	三郎山遺跡	33	春日遺跡
7	鈴熊遺跡	16	金立開拓遺跡	25	西隈古墳	34	惣座遺跡
8	**西原遺跡**	17	三本黒木窯跡	26	権現原遺跡	35	肥前国府跡
9	丸山遺跡	18	黒土原古墳群	27	銚子塚古墳	36	高木城址

Fig. 1　西原遺跡周辺遺跡分布図

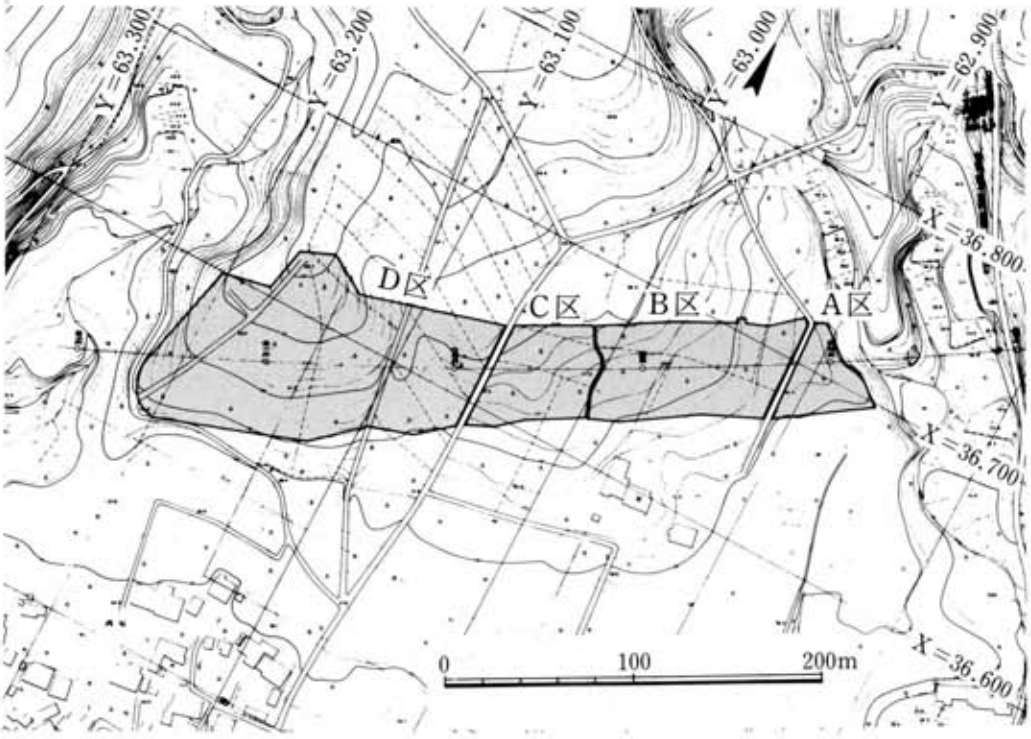


Fig. 2　周辺地形図

つづく。一時期の蜜柑奨励によって大半は上部を削平されてしまっているが，発掘調査によって明らかにされつつあるその数は，現在みえているものの数倍といわない。ただその中にも，大小のグループが認められ，大きな谷を中心に群が形成される傾向がある。西からいうと，礫石付近，大門付近，金立開拓付近[註11]という形で一応のまとまりをみせるようである。西原遺跡の古墳群は，全体的にみれば，そのうちの金立開拓付近の一群に置かれるであろう。

以後，本遺跡周辺の主要な遺跡としては約1.3km東方に帯隈山神籠石[註12]があり，西南方約9.5kmには8世紀になって嘉瀬川東岸に肥前国庁が置かれる。この時期，奈良・平安時代にかけての墓地は最近の調査で，やはり山麓沿いに集中してみつかってきており，国府の出現と見合わせたこの地域の変貌を探るうえでの貴重な資料を提供している。

以上，この山麓沿一帯の遺跡では，地形からしての各時期を通じて墓地が主体であり，集落跡は大和町春日遺跡，礫石遺跡，丸山遺跡，西原遺跡で数例知られている程度である。平野部に下って大型集落の存在確認が今後予想されるが，その平野部の開発の歴史的経緯をみてゆくうえで，墓地を中心とする山麓部の調査を重ね合わせて考える必要があろう。本遺跡もそのうちの重要な一つである。

今回の発掘調査はA・B・C・Dの4区にわけて行った（Fig. 2，PL. 1）。このうちA・C区については，蜜柑園造成の際の削平もあってか，明確に遺構と認められるものは検出され

なかった。しかし，B・D区では，やはり蜜柑園造成による上部削平はあるが，縄文時代晩期及び古墳時代の遺構がかなり密に検出された（Fig. 2・3，PL. 2・3）。両区を合わせた遺構総数は縄文時代の甕棺墓2基，古墳時代では竪穴5基，石棺墓3基，古墳21基である（Tab. 1）。すなわち主体を占めるのは古墳時代で，特に古墳が多い。古墳は竪穴式石室1基以外はすべて横穴式石室である。また，竪穴遺構はB区に限られる。

調査区別の分布傾向は，まずB区の場合，東南に向かう緩やかな傾斜面上に東側で縄文晩期の甕棺墓2基が並び，さらにその東側で石棺1基が単独で検出された。古墳は9基が同区全体にひろがり，ST005が竪穴式石室，他は横穴式石室である。削平のため，周溝の全体が知られるものは少ない。また，石室の遺存もあまりよくなく，内部主体が天井石まで遺存するものはなかった。ST008は路線外にあたるため，周溝の南部のみ調査した。調査区外の南北両側にはなお同一支群の古墳が存在するものと予想される。竪穴遺構のSK030は性格不明だが，他は住居跡である。同地区の北側にかたまっており，調査区外の北方にさらに広がると予想される分布傾向を示す。

D区はB区に比べると多少地形の傾斜が急で，南方に向かって下がる。遺構は調査区の南端で石棺が2基並ぶ以外，他は古墳が12基，すべて横穴式石室で全域に分布しており，群としては調査区外の南北両側にさらに広がると思われる。やはり削平により完全に周溝を残すものが少なく，また，傾斜面を段々に造成しているため，全体としてB区よりさらに石室の遺存状況がよくない。

出土遺物は古墳と住居跡を主に，須恵器と土師器が多量で，他に旧石器時代，縄文時代，弥生時代の石器および土器，中世から近世にかけての土器類，そのほか古墳から出土した鉄器，装身具類などがある。ただし，旧石器時代および弥生時代については，少量の遺物が出土しただけで，遺構は検出されなかった。

註1　佐賀県教育委員会「丸山遺跡概報」1979
註2　佐賀県教育委員会「藤附遺跡」（「大門西遺跡」）1980
註3　佐賀県教育委員会「大門西遺跡」（「大門西遺跡」）1980
註4　佐賀県教育委員会「六本黒木遺跡」（「大門西遺跡」）1980
註5　佐賀市教育委員会「大門遺跡」1973
註6　佐賀市教育委員会「琵琶原遺跡」1981
註7　佐賀県教育委員会「金立開拓遺跡」1974
註8　註4と同じ
註9　佐賀市教育委員会「金立銚子塚古墳」1976
註10　佐賀県立博物館「佐賀県立博物館調査研究書　第4集」1978
註11　佐賀県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報2」1980
註12　佐賀県教育委員会「帯隈山神籠石とその周辺」（「佐賀県文化財調査報告書　第16集」）1967

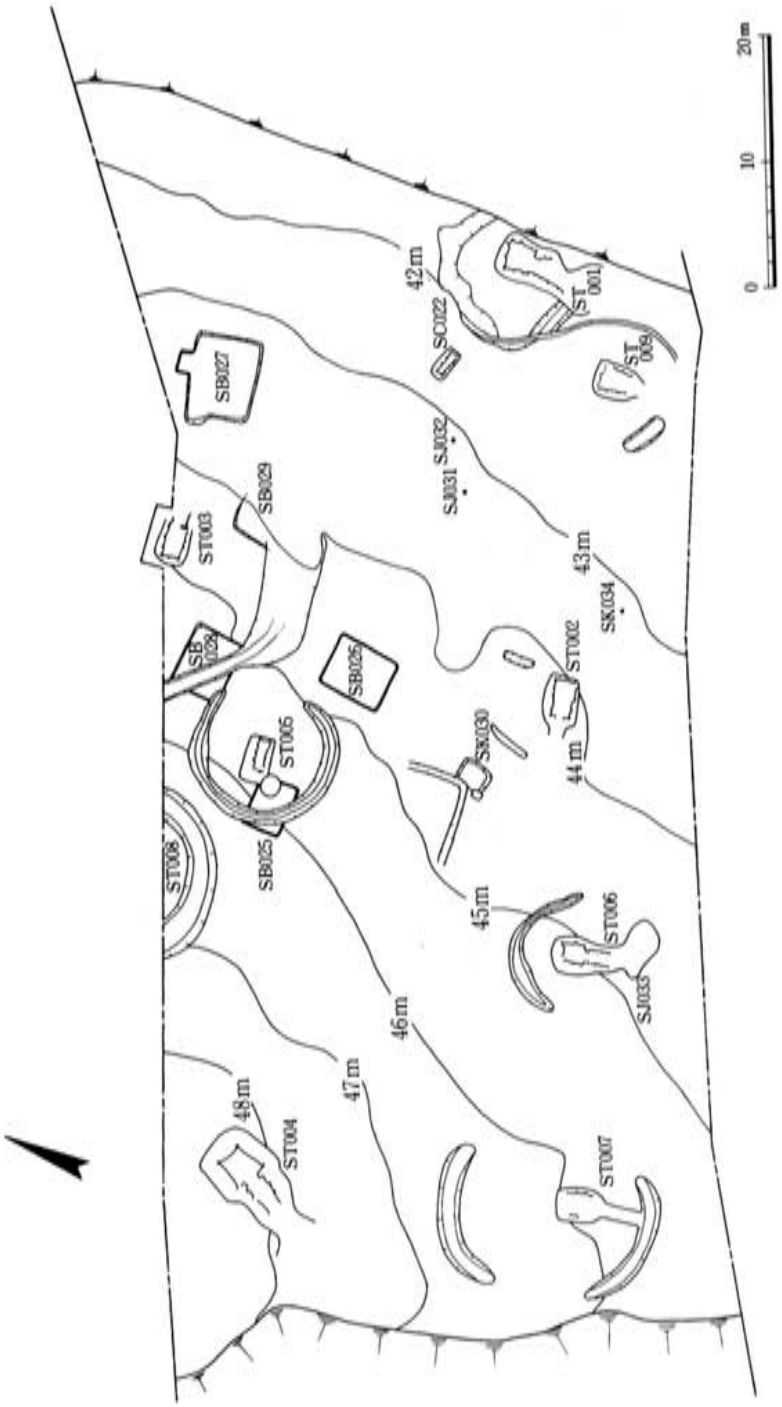


Fig. 3　B区遺構配置図

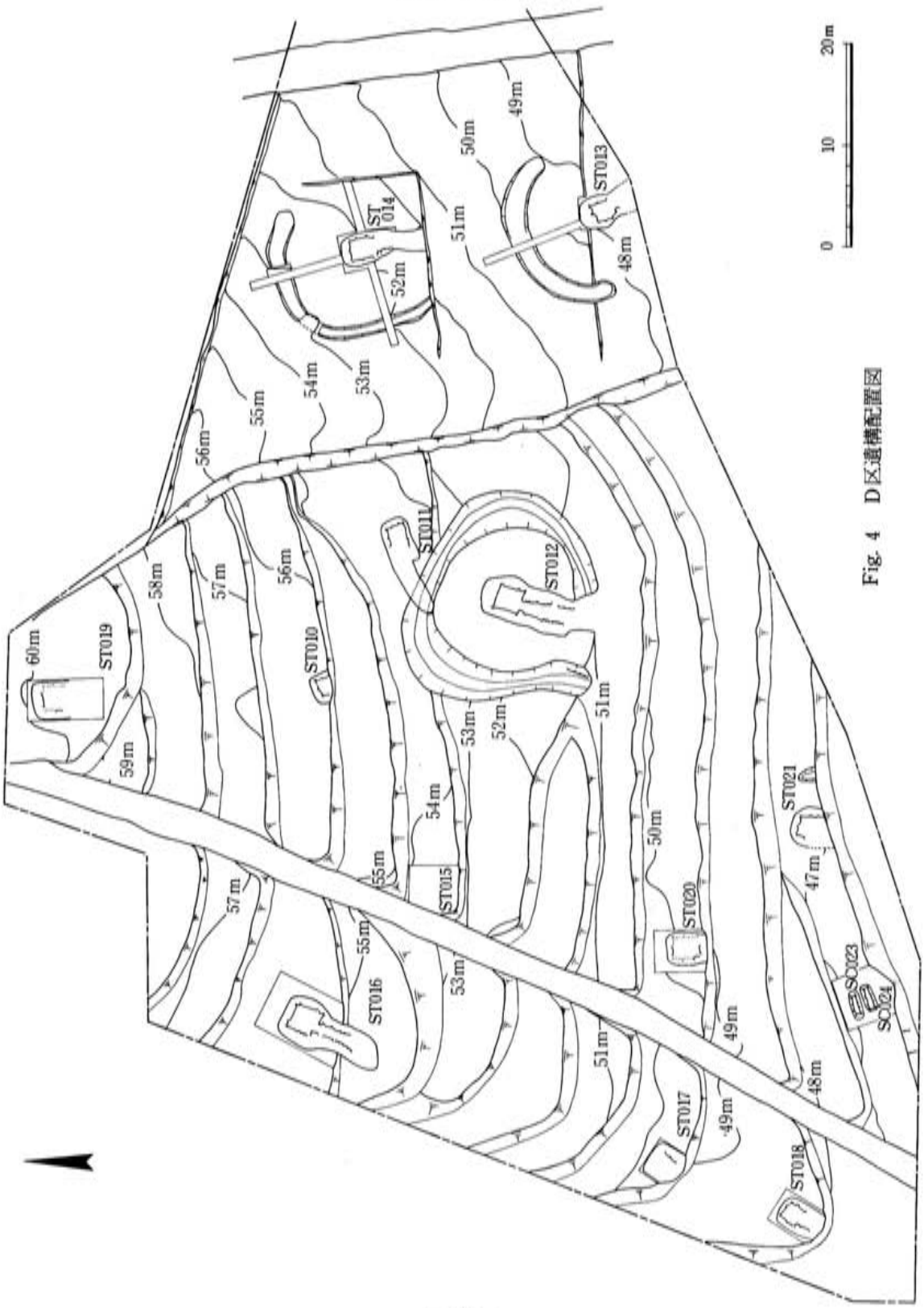


Fig. 4　D区遺構配置図

Tab. 1　西原遺跡遺構一覧表

遺構番号	形　態	墓　壙		共伴遺物	時　期	備　考
		径	深			
S J 031	甕棺	0.4m	0.35m	——	縄文晩期	底部打欠き
S J 032	甕棺	0.8m	0.5m	——	〃	
S J 033	壺棺	1.05m	0.4m	土師器甕・壺・椀	古墳時代前期	
S K034	鉢	1.7m	0.3m	土師器杯・皿	中世	

遺構番号	法　量			出土遺物	備　考
	縦	横	壁高		
S B025	3.16m	4.34m	0.19m	土師器杯	
S B026	5.03m	4.28m	0.20m	土師器鉢・甕	
S B027	5.33m	6.53m	0.40m	土師器坩・杯・高杯・甕	造り出し２ヵ所
S B028	4.10m	4.88m	0.16m	土師器	
S B029				土師器	一部残存
S K030	2.45m	2.15m	0.82m	土師器鉢	竪穴

遺構番号	墳　丘		内部主体							出土遺物
	形状	径	形　態	開口方位	全　長	玄室、長	玄室、幅	玄門、幅	羨道、長	
S T001	円墳	14.0m	横穴式石室	N 3°E	5.6m	2.0m	2.0m 1.8m	1.5m	3.0m	須恵器杯、刀子、土師器、銅釧
S T002			〃	N88°E	3.1m	2.8m	1.8 m 1.44m	0.5m		須恵器、土師器
S T003			〃	N98°W	3.9m	2.5m	1.5m 1.4m	0.4m	1.2m	刀子、鉄鏃、碧玉、管玉、土玉、須恵器片、土師器片
S T004			〃	N31°E	5.6m	2.5m	2.0m 2.5m	1.0m	1.2m	須恵器、土師器
S T005	円墳	11.6m	竪穴式石室	N96°W	2.3m×0.7m					古式土師器片
S T006	円墳	9.0m	横穴式石室	N 5°W	4.0m	1.6m	1.32m 1.4 m	0.84m	1.8m	須恵器、土師器、鉄鏃、管玉、土玉、耳環
S T007	円墳	17.5m	〃	N10°W		2.35m	1.8m	0.4m		須恵器、土師器、ガラス玉、管玉、切子玉
S T008	円墳									土師器
S T009	円墳	12.0m	横穴式石室	N 2°E	3.05m	2.35m	2.0m 1.2m	0.4m		須恵器、土師器
S T010	円墳	10~15m	〃	N17°W		2.0m	1.6m			須恵器片、土師器片
S T011			〃	N80°E	4.1m	2.36m	1.75m	0.8m	1.3m	須恵器、土師器
S T012	円墳	15.0m	〃	N23°E	7.8m	2.3m	2.3m	0.85m	5.2m	須恵器、土師器、銅釧、刀子、土玉、大型甕
S T013	円墳	16.0m	〃	N20°W	2.7m	2.1m	1.7m 1.5m	0.6m		須恵器片、土師器片
S T014	円墳	17.0m	〃	N15°W	4.0m	2.64m	2.07m 1.75m	0.6m	0.95m	須恵器、土師器、耳環、鉄鏃
S T015			〃							須恵器片、土師器片、鉄鏃、耳環
S T016			〃	N29°E	7.7m	2.7m	2.6m	0.8m	4.5m	須恵器、土師器、耳環、土玉、管玉
S T017			〃	N44°E	3.2m	1.5m	1.5m	0.8m	0.6m+α	勾玉、耳環、刀子、須恵器、土師器
S T018			〃	N46°E	39.0m	1.7m	1.7m	0.9m	1.2m	須恵器、土師器、紡錘車
S T019			〃	N 3°E		3.4m	2.4m			須恵器片、土師器片、耳環
S T020			〃	N12°E	4.0m	2.8m	1.95m 1.5 m	1.0m		須恵器、土師器、勾玉、切子玉
S T021			〃	N13°E		4m+α	2.0m			須恵器、土師器
S C022			石　棺	N109°E	1.95m×0.6m					
S C023			〃	N108°W	1.65m×0.45m					頭骨
S C024			〃	N72°E	1.9m×0.32m					鉄剣、刀子

2．遺　　構

(1) 縄 文 時 代

遺構としてはB区で検出されたＳＪ031甕棺墓とＳＪ032甕棺墓がある。B区では他に大型甕の破片が少量ではあるが出土しており，ほかにも甕棺があったと推定されるが，削平により遺構は残存していなかった。

ＳＪ031甕棺墓(Fig. 5，PL.23)

ＳＪ032甕棺墓と並んでB区の斜面下方にある。遺構上面の平面は円形で，径約0.4ｍ，深さ0.35ｍである。砂混りの淡褐色土層の地山に掘り込まれ，壁面は内傾して立ち上る。

甕はこの墓壙の中に直立して埋置されており、副葬品等の遺物は検出されなかった。単棺であったと考える。

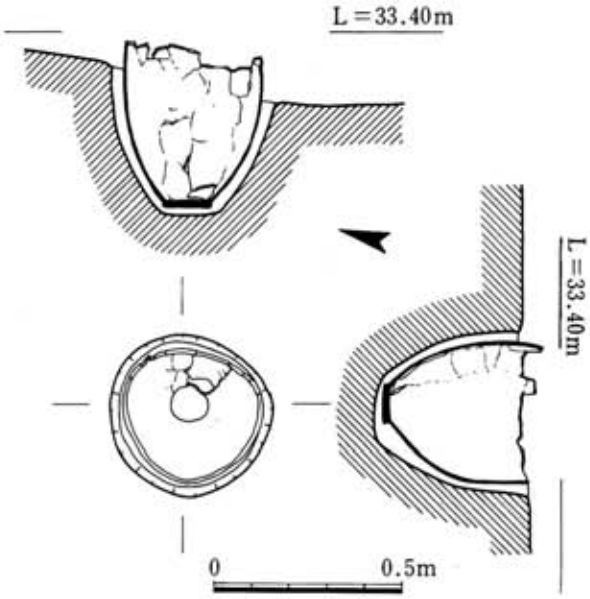


Fig. 5　ＳＪ031甕棺墓実測図

ＳＪ032甕棺墓(Fig. 6，PL.23)

ＳＪ032甕棺墓は調査区中央東寄りにあり，ＳＪ031甕棺墓とＳＣ022石棺墓の中央付近に位置する。

墓壙上面の平面は円形で，検出面での径0.8m，深さ0.5mである。淡褐色砂混りの地山に掘り込まれ，底部は中央部がわずかに低くなる。掘形の規模，甕の大きさともにＳＪ031甕棺墓をわずかに上まわる。

甕は墓壙の中に直立して埋置され，底部は打欠かれている。ＳＪ031甕棺墓同様，直立単棺と推定する。副葬品等の遺物は検出されなかった。

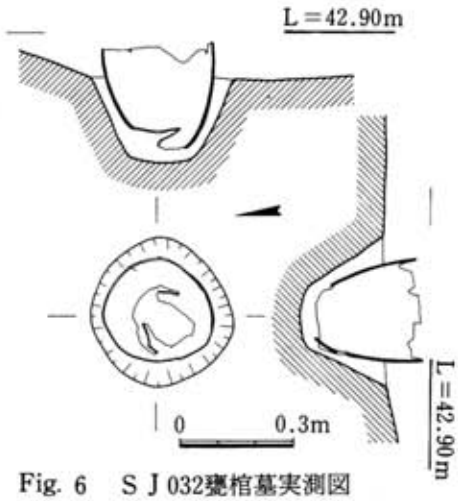


Fig. 6　ＳＪ032甕棺墓実測図

(2) 古 墳 時 代

B区，D区あわせて住居跡および竪穴6基，古墳21基，石棺3基が検出された。

住居跡はB区に限られ，緩傾斜面上を横方向に並ぶ。SB027住居跡が1箇所張り出しを付設するが，いずれも基本的には方形竪穴である。規模はSB027住居跡がやや大型の部類に入る。ただSK030は小形で，住居跡といえるか疑問である。6基は横長，縦長の違いはあるが，ほぼ方位を一定にしており，また，相互の間隔もほぼ一定である。出土遺物ともあわせ，同時期とみてよいであろう。古墳時代前期に属す。

古墳は21基中，残存する周溝から墳形のわかる8基はすべて円墳であり，他も円墳であったと推定される。内部主体はST005古墳1基が竪穴式石室，他はすべて横穴式石室である。横穴式石室は形態・構造等にかなりバラエティーがある。基本的に時期差に基づく変化とみられる。造営時期は5世紀後半から7世紀に及んでおり，本遺跡が古墳群として長期間にわたり墓地として使用されたことを示している。そのほか，3基の石棺は本遺跡で横穴式石室が出現する以前，おそらく住居跡群と並行する古墳時代前期と推定される。

したがって，B・C区のみでいうと，先の住居跡の一群及び少数の石棺が古墳時代前期でも5世紀前半とすれば，5世紀後半以降に横穴式石室の古墳が盛行をみせており，全体としてこの地区が居住地区から墳墓造営地区に変わっていったとみることができよう。

全体の分布ではB・D両区とも調査範囲の中ではかなり密で，地区外になお広範囲な遺存分布が予想される。

なお，出土遺物は2，3の古墳および住居跡などから，比較的多量の土師器，須恵器等が出土したが，削平，破壊が著しく，全体的に保存良好なものは少ない。

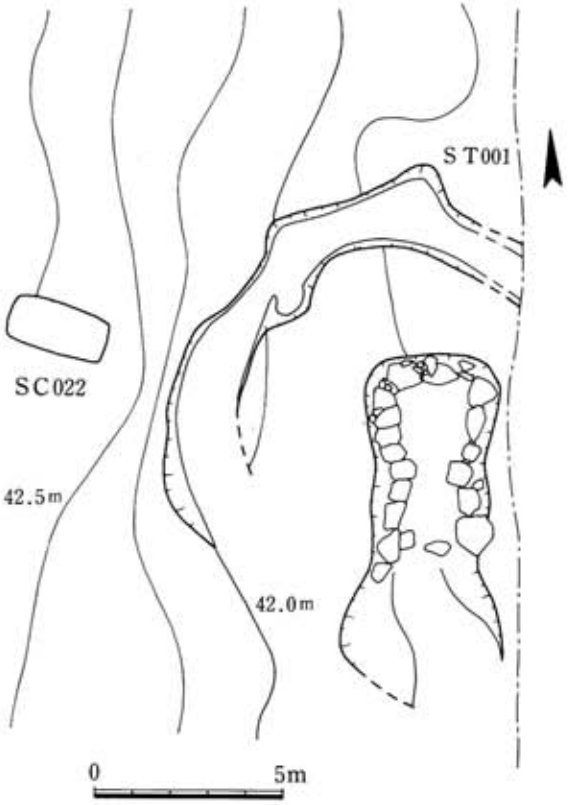


Fig. 7　ST001古墳墳丘実測図

ST001古墳(Fig. 7・8, PL. 4)

横穴式石室の円墳である。B区の東はずれにあって，周溝東側を農道で切られている。また削平により盛土は完

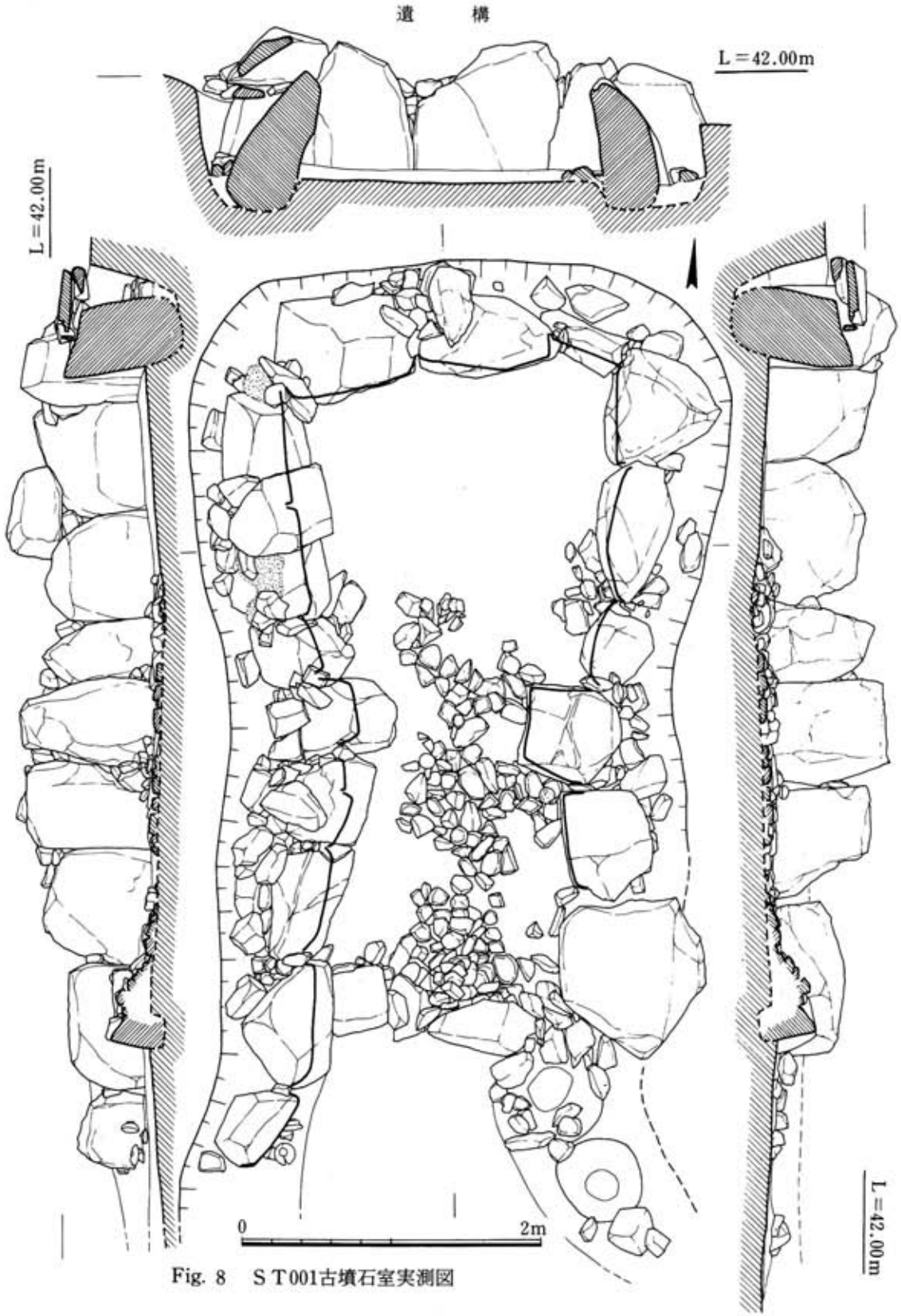


Fig. 8　ＳＴ001古墳石室実測図

全に失われ，周溝と石室腰石を残すばかりである。石室は一応両袖式の範疇に入り，比較的長い羨道が付く。

墳丘　周溝のみ残存しており，径約14mの円墳である。周溝は上部を削られていることもあって全体に不整形で，南側では直線的な箇所もみられる。幅約1.3m，深さ約0.3mと浅い。なお，周溝西側には周溝を切って１条，幅の狭い溝があるが，周溝との位置関係からみて，周溝が埋ったのち，墳丘西側裾部を回るように掘られてあったものと推定される。

内部主体　片袖式に近いが，一応両袖式の横穴式石室である。主軸はＮ３°Ｅでほぼ真南で斜面側方に開口する。墳丘との位置関係では玄室が墳丘のほぼ中央にあたり，墓道が周溝に通じている。全体として平面形では玄室と羨道が一体化したものとして設計され，特に西側壁でみると袖石付近をくびれさせるだけで，はっきり区分するような意図は稀薄である。

石材は花崗岩転石を使用する。削平により殆ど腰石しか遺存していないが，一部に２段目の石積みを残す。腰石は比較的大きめの石を立てて用い，２段目以上はやや小さい石材を平置にしてゆくようである。

石室規模は全長5.6m。玄室は長さ２m，幅は奥壁で２m，玄門側で1.8mとやや狭くなり，腰石は奥壁・側壁とも３枚ずつ使用する。床面は礫敷きであるが，荒らされて大部分失われている。玄門部は幅1.5mと広く，他腰石とあまり違いのない袖石を立てる。東袖のみはっきり内に出ているため，平面形は一見片袖式のようにみえる。框石は当初から無かったようである。

羨道は長さ約３m，南に向かってやや広くなり，開口部で「ハ」字形に開く。両側壁とも４枚の腰石を立てているが，ただし「ハ」字形に開くあたりの開口部の腰石２枚は平置きしており，また，ちょうどこの２枚目の位置に閉塞基部が残存している。したがって，天井石は開口部の先端には架かっていなかったものと思われる。羨道床面には玄室から続く礫敷きが残存しており，一時「前室」として屍体収容に供された可能性も考えられる。

荒らされていたため，原位置を保つ副葬品等は少なく，羨道東北隅床面で須恵器杯類と刀子３点，墓道西脇で須恵器杯類が出土した程度である。銅釧１点は玄室埋土中から出土した。ほかには石室，墓道および周溝の埋土中からで，須恵器は少なく，土師器がやや多い。

ＳＴ002古墳（Fig. 9，PL. 4）

Ｂ区の中央部やや南に位置する横穴式石室の古墳である。削平により盛土は殆ど失われ，周溝も検出されなかった。横穴式石室の基部のみ残存する。開口部がほぼ西に向いている点，他に比べ特異である。石室の形態および出土遺物からみて，調査された古墳の中では，ＳＴ009古墳と共に最古式に属すと考えられる。

墳丘　円墳と推定されるが，形状，規模とも全く不明である。

内部主体　羨道をもたず玄室だけの横穴式石室である。主軸はN88°Eで，ほぼ西に開口する。

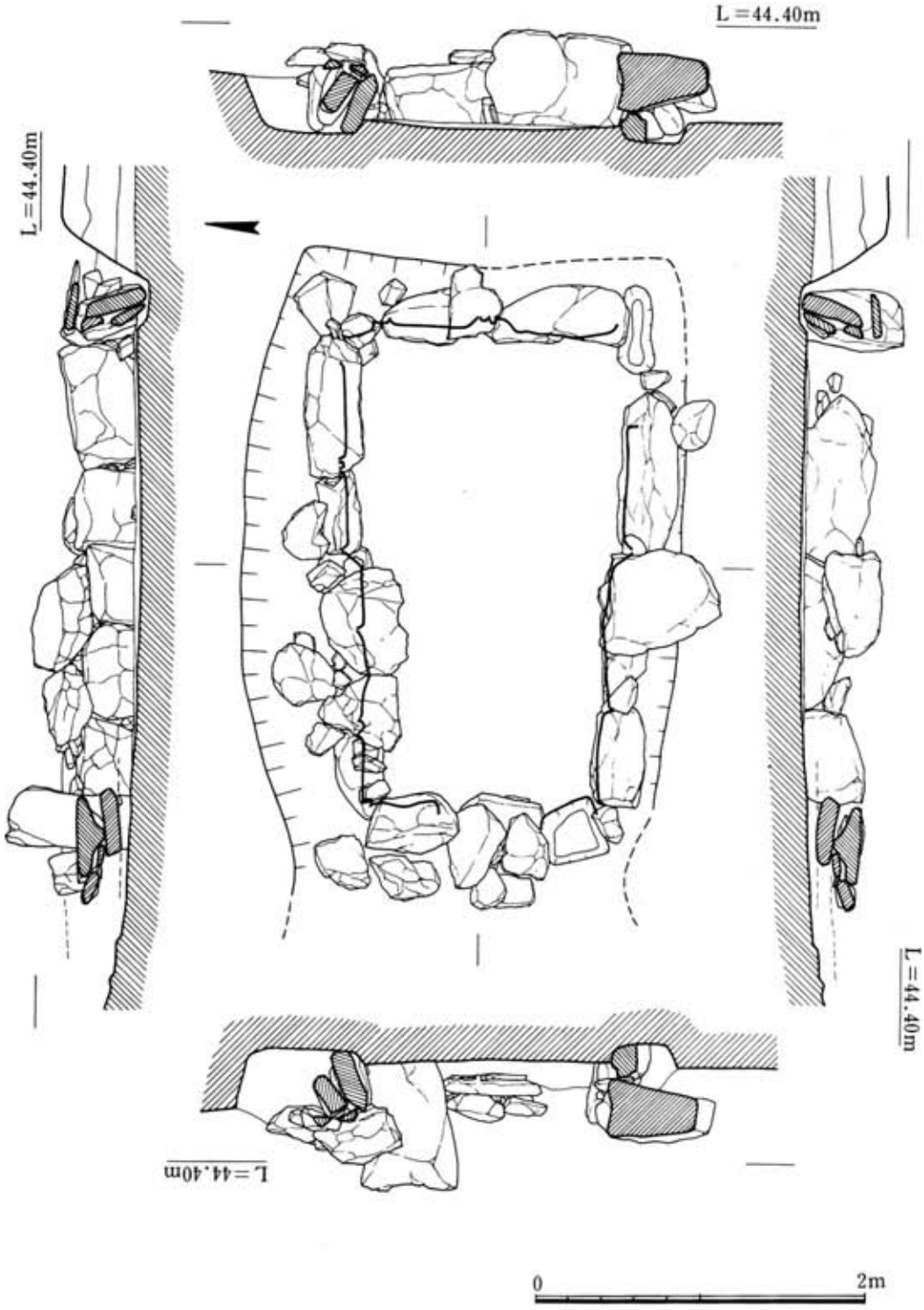


Fig. 9　ＳＴ002古墳石室実測図

これは斜面上方にあたるが，おそらく墓道は南に折れて斜面側方に向いていたと推定される。羨道にあたるものはあったとしても，天井石をもたない，おそらく「只」字形の墓道的なものであったであろう。墓道の掘形は玄室部の掘形からくびれて短く残存している。

石材は花崗岩転石を主として用い，閉塞部や側壁のすき間をふさぐのに一部緑泥片岩も使用している。腰石の場合，あまり厚味のない石材を選んで横長に立てて据え，2段目以上を小口をそろえ平置きして積み上げたと思われる。

石室規模は全長3.1m。玄室は長さ2.8m，幅が奥壁で1.8m，玄門側で1.44mといわゆる羽子板状を呈しており，平面形としてはかなり長い。腰石の構成は奥壁2枚，南側壁4枚，北側壁5枚で，石材の選び方，積み方にやや乱雑さが目立つ。床面には礫敷きはみられない。玄門部は両袖式で，南側は抜かれているが，袖石を両側に立てている。玄門の幅は0.5mと狭く，緑泥片岩の框石を置き，この部分で閉塞を行っている。また，框石は玄室床面より約6cm高く盛土した上にのっており，袖石を立てたあとの設置であることがわかる。玄室との高低差を設け，一段高い位置から玄室に降るようになっている点，古式の横穴式石室の特徴を残しているといえよう。

副葬品で原位置を保つものはなかったが，石室内，墓道および周溝埋土中より若干の須恵器と多量の土師器が出土した。

ＳＴ003古墳（Fig. 10; PL. 5）

Ｂ区の北辺際に位置する。横穴式石室の古墳である。削平をうけ，盛土，周溝は失われている。ただし，墓壙の掘形が深いこともあって壁体の遺存は奥壁側が比較的残っている。

墳丘　円墳と推定されるが，形状，規模とも全く不明である。

内部主体　片袖式の横穴式石室である。長方形の玄室と短い羨道部とからなり，主軸方位はN98°Wでほぼ真東，斜面下方に開口している。

石材は花崗岩転石で，玄室腰石以外は比較的小さ目の石を用い，基本的に小口積みにしている。腰石を含め，奥壁で3段，南北両側壁で3～4段ほど残存するところもある。

石室規模は全長3.9m。玄室はほぼ長方形にちかく，主軸長2.5m，幅は奥壁で1.5m，玄門で1.4mと若干狭い。腰石の構成は奥壁3枚，南北両側壁は各3枚であるが，奥壁は縦長，逆に側壁は横長に使用している。腰石，小口積石あわせて積み方がやや粗略の感は否めない。個々の石材が不揃いであることも一因であろう。玄門は南側に袖石を立てている。北側には抜き跡らしき掘り込みはあるが，袖石とすれば玄門幅は0.4mほどしかなく，あまりに狭い。何らかの玄門施設の可能性はあるが，北側壁体の構成をも勘案して，片袖式とみるのが妥当であろう。框石は置かれていない。玄門外側には閉塞石の基部が一部残存する。床面はかなり荒されているが，掘形地山面に約5cmの茶褐色粘質土を埋めならしており，一部に扁平な緑泥片岩の礫敷きが残

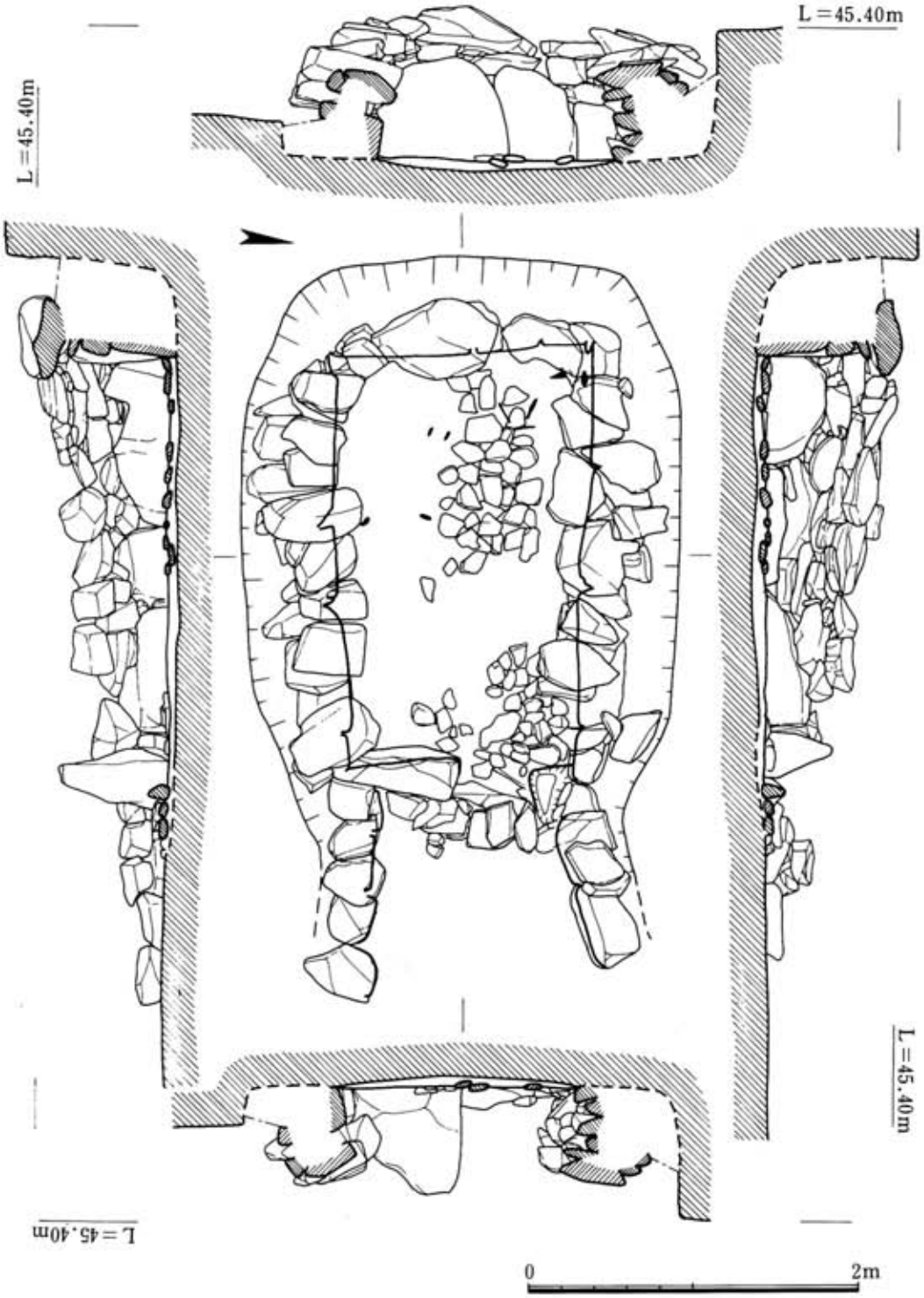


Fig. 10　ＳＴ003古墳石室実測図

存する。

羨道は1.2mと短く，幅は玄門部で1.1mで開口部に向かってやや拡がる。天井石はおそらく玄室のみと思われ，この羨道は機能上は墓道にあたるといえよう。墓道は，側壁の平面形からみて東北方，すなわち傾斜下方に向かうようである。

遺物は玄室内礫床のわずかな残存部付近を中心に刀子，鉄鏃，碧玉，管玉，土玉が散乱した状態で出土した。ほかに少量の須恵器片と多量の土師器片が石室内，墓道および周溝の埋土中から出土した。

ＳＴ004古墳（Fig. 11，PL. 5）

Ｂ区の西北隅に位置する。横穴式石室の古墳である。削平により墳丘・周溝は完全に失われ，石室の破壊も著しい。石室は複室形式で，花崗岩の巨石を使用している。Ｄ区のＳＴ012古墳も巨石墳といえるが，ただし単室で主に緑泥片岩を用いている点で本古墳と大きく異なる。

墳丘　円墳と推定されるが，規模・形状は不明である。ただ，古墳の石室規模から考え，径15m以上はあったと推定される。

内部主体　前・後室と短い羨道部とからなる複室形式の巨石横穴式石室である。主軸方位はＮ31°Ｅで，傾斜やや西側方に開口する。

玄室の奥壁と両側壁，それに前・後室２ヵ所の框石が残存する程度で，大部分の石材は取り去られている。石材は花崗岩転石ながら２×２m以上の１枚石も使用されており，まさに巨石墳の名にふさわしい。壁体はこれらの巨石を用いて基本的に１枚のみでつくっている。裏込めには入念に根石が置かれ，部分的には粘土を加えて基部の固定に工夫を凝らしている。

石室規模は全長5.6m。玄室は各壁とも巨石１枚のみでつくり，長さ2.5m，幅は奥壁で2.0mであるが，玄門側で2.5mと広くやや変則的である。前室との間には框石を置いて，両側から袖石がこれを挟んでいたと思われる。玄門幅は約１mである。

前室は抜き跡より，両側壁とも大石１枚のほか，羨道寄りに小さい石をもう１枚あてていたと思われる。羨道との間には，框石を置いているが，袖石が挟んでいた形跡はみられない。

羨道は両側壁とも１枚石で長さ1.2m，幅1.1mである。閉塞は羨道端に一部残存する。

石室は荒らされており，床面の状況は不明だが，敷石はもたなかったと思われる。

遺物は須恵器と多量の土師器が，主に石室前面および墓道から出土した。

ＳＴ005古墳（Fig. 12・13，PL. 6）

今回の調査区では唯一の竪穴式石室をもつ円墳であり，全体として，本遺跡ではよく遺存していた方である。ＳＢ025・028住居跡との切り合い関係からみて，両住居跡よりは新しい。

墳丘　径11.6mの円墳である。周溝のみ残存する。周溝は幅約1.3m，深さは西側で0.2mで

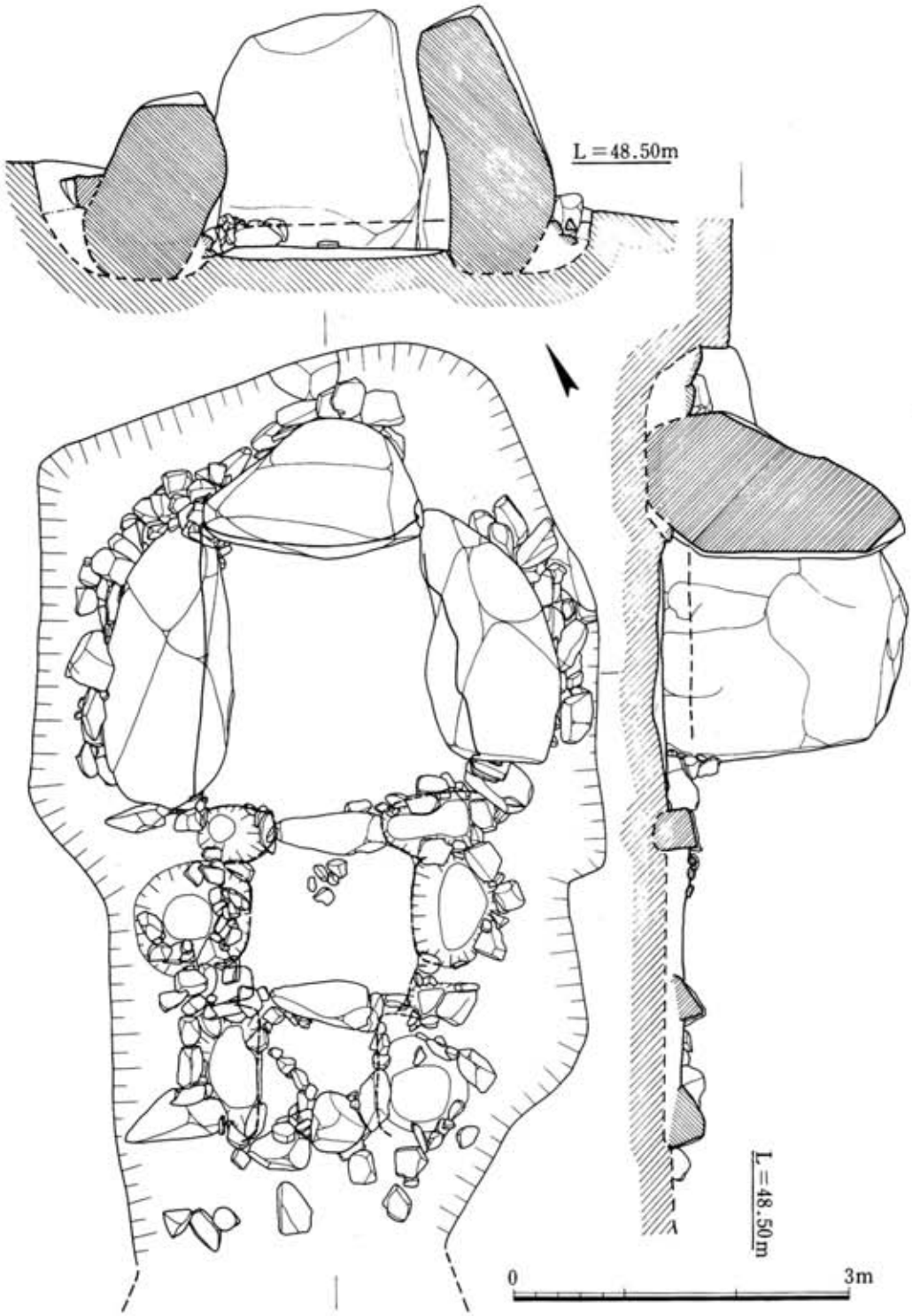


Fig. 11　ＳＴ004古墳石室実測図

ある。東側は全周の約5分の1が切れている。傾斜地形の下方にあたる箇所なので，完周していたとしても浅く掘られていたであろう。

石室は墳丘の中心にはなく，中心から西に約1m偏っている。

内部主体　小型の竪穴式石室である。天井石および壁体上部は破壊され，また掘形西南隅を荒されているが，東西両短辺で各1段，南北両側は各3段まで残存する。規模は平面形で2.3×0.7m，高さは，残りのよいところで約0.7mであり，この数値がほぼ当初の高さにちかいものと推定される。主軸方位はN96°Wである。

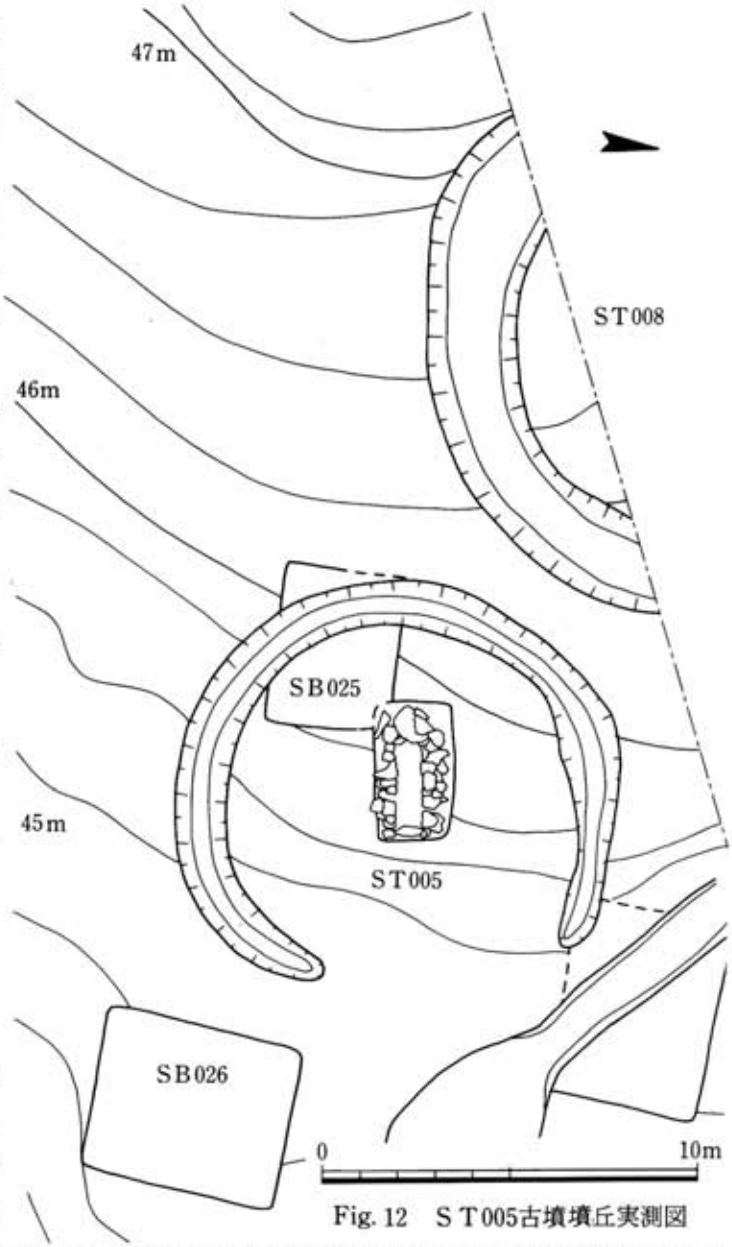


Fig. 12　ST005古墳墳丘実測図

石材は花崗岩を主とし，若干緑泥片岩を混じえる。構築順からいうと，まず長方形の土壙を掘り，これに比較的大きめの花崗岩転石を東西両短辺各1個，南北両側辺各4個並べて腰石としている。腰石はいずれも壙底を若干掘り込んで基部を埋めているが，ただし注意されるのは，両側辺と西側短辺が石材を平置にして安定させているのに対し，東側短辺のみ比較的薄い石材を立てて使っている点である。一見，いわゆる竪穴系横口式石室を思わせる手法である。しかしその基部が埋め込まれており，やはり竪穴式石室と考えておくのが穏当であろう。

次いで2段目以上を積み上げてゆく。基本的には小口積みであるが，壁面はほぼ直に立っているため，控積みは必要とせず，全体として雑である。北壁は幾分面がそろっているものの，

南壁では適当に間隙を埋めているような感すらある。東西両側壁は腰石しか残存していないが，同様にして２段程度の小口積みであったと思われる。

床面は掘形の黄褐色地山面をそのまま利用しており，特に施設をもたない。ただし床面上には1.9m×0.56mの長方形の範囲を黒褐色土が薄く覆っていたので，あるいは木棺が納められていた可能性も考えられる。

遺物は，石室内からは検出されなかった。周溝埋土中より土師器片が若干出土している。

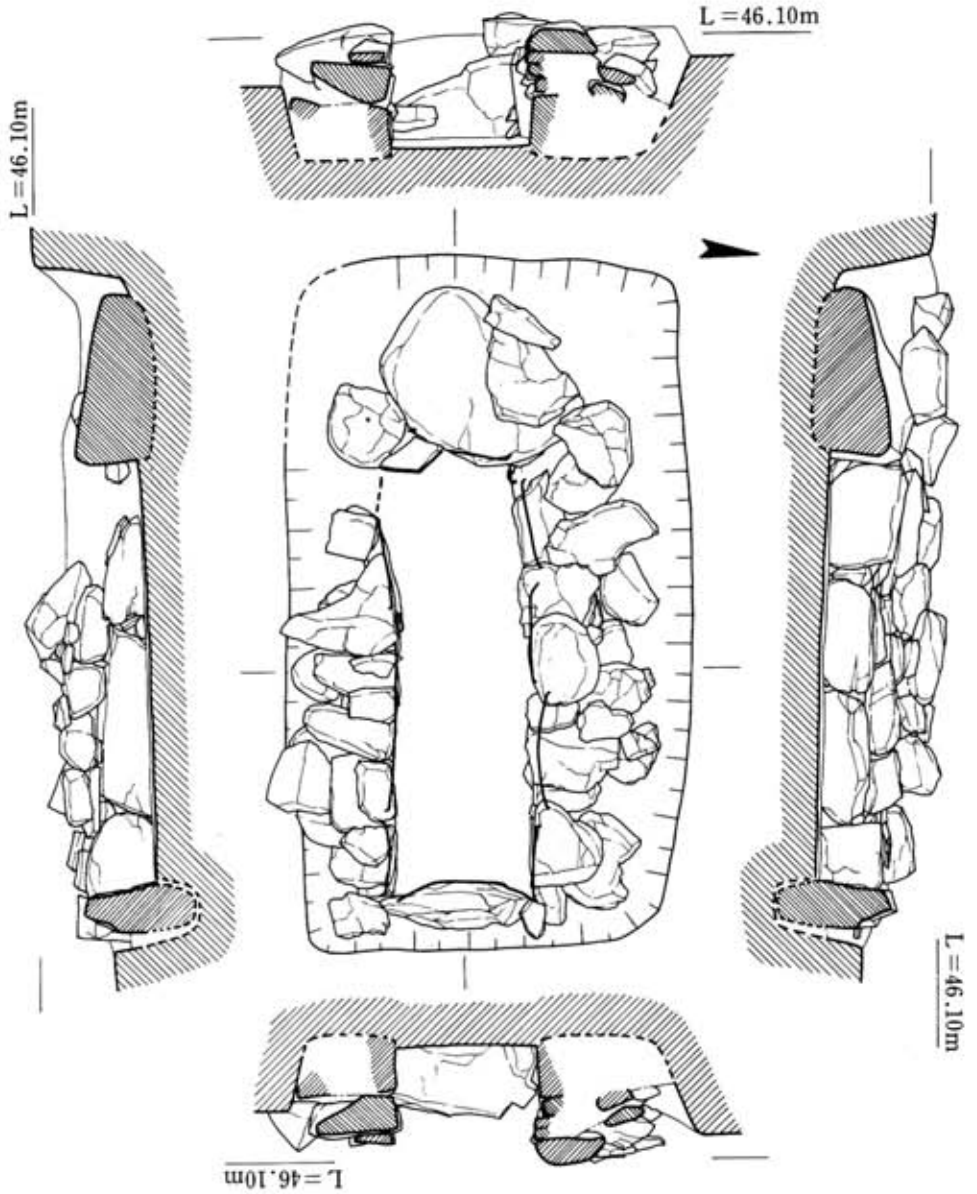


Fig. 13　ＳＴ005古墳石室実測図

ＳＴ006古墳（Fig. 14・15, PL. 7）

横穴式石室をもつ円墳である。削平により，周溝は北側一部，石室は腰石のみ残存する程度である。石室前面にはＳＪ033壺棺墓を切る幅のやや広い墓道があり，その先端は中位で折れて斜面下方の東に向かっている。

墳丘　わずかに残存する周溝から径約９ｍの円墳と推定される。周溝は斜面側方にあたる北側のみ全体の約３分の１残存する。南側は，墓道が途中ややくびれて東方に折れている付近を墳丘裾と考えてよいであろう。また，周溝は上部が削られて約0.2m程に浅くなっているが，幅も本来，現在の1.5m以上２ｍちかかったと思われる。石室との位置関係は玄室がそのほぼ中央にあたる。

内部主体　比較的幅の広くて長い羨道をもつ両袖式の横穴式石室である。開口は傾斜面の横方向からやや下方に向かい，Ｎ５°Ｗに主軸方位をおく。腰石のみ残存し，そのうち奥壁１枚は抜かれているが，全体の平面形はよくとどめている。

石材は花崗岩転石である。腰石についてのみいえば，通例どおり奥壁と袖石を立て，他は横長に用いて平置きしている。２段目以上は小口積みになるものと思われる。

石室は全長が4.0m。玄室は長さ1.6m，幅は奥壁側で1.32m，羨道部側で1.4mと若干広くなる。玄室腰石の構成は奥壁２枚，ただし西側の１枚は補助的に用いられており，用材が足りれば本来１枚で構成されていたとしてもおかしくない。両側壁は各２枚である。腰石の並べ方は全体として，斜面下方の東側壁の方の西壁に比してやや雑である。玄室床面には花崗岩円礫が敷かれている。

玄門は幅0.84mで，両側に袖石をもつが，東側の方の出がやや大きい。これは玄室東側壁南隅の腰石をやや後方に引いて置いたことによるものと思われ，平面形を決め用材を配するにあたり，袖石の配置がかなり優先的であったことを窺わせるものといえよう。框石は西側にもう１個あったとすれば，２個並べたと考えられ，変則的である。

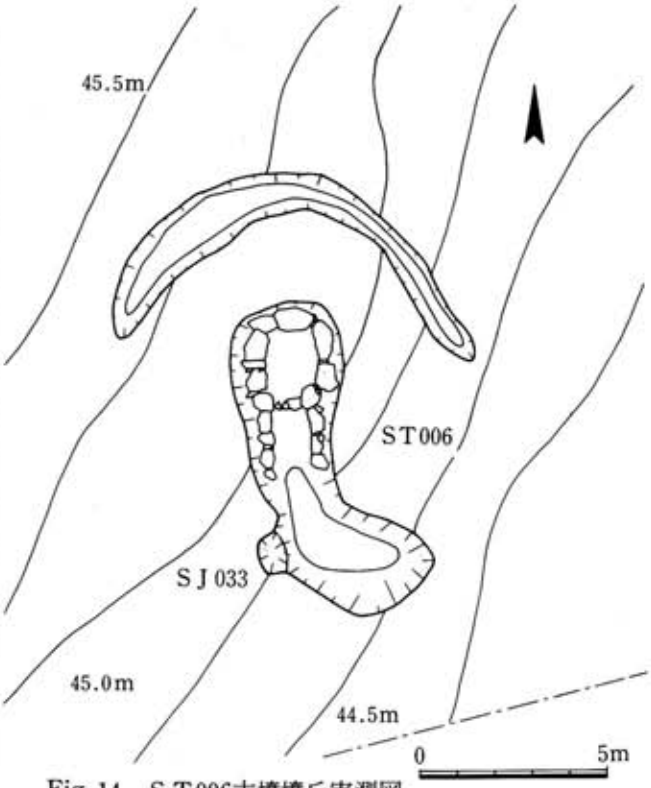


Fig. 14　ＳＴ006古墳墳丘実測図

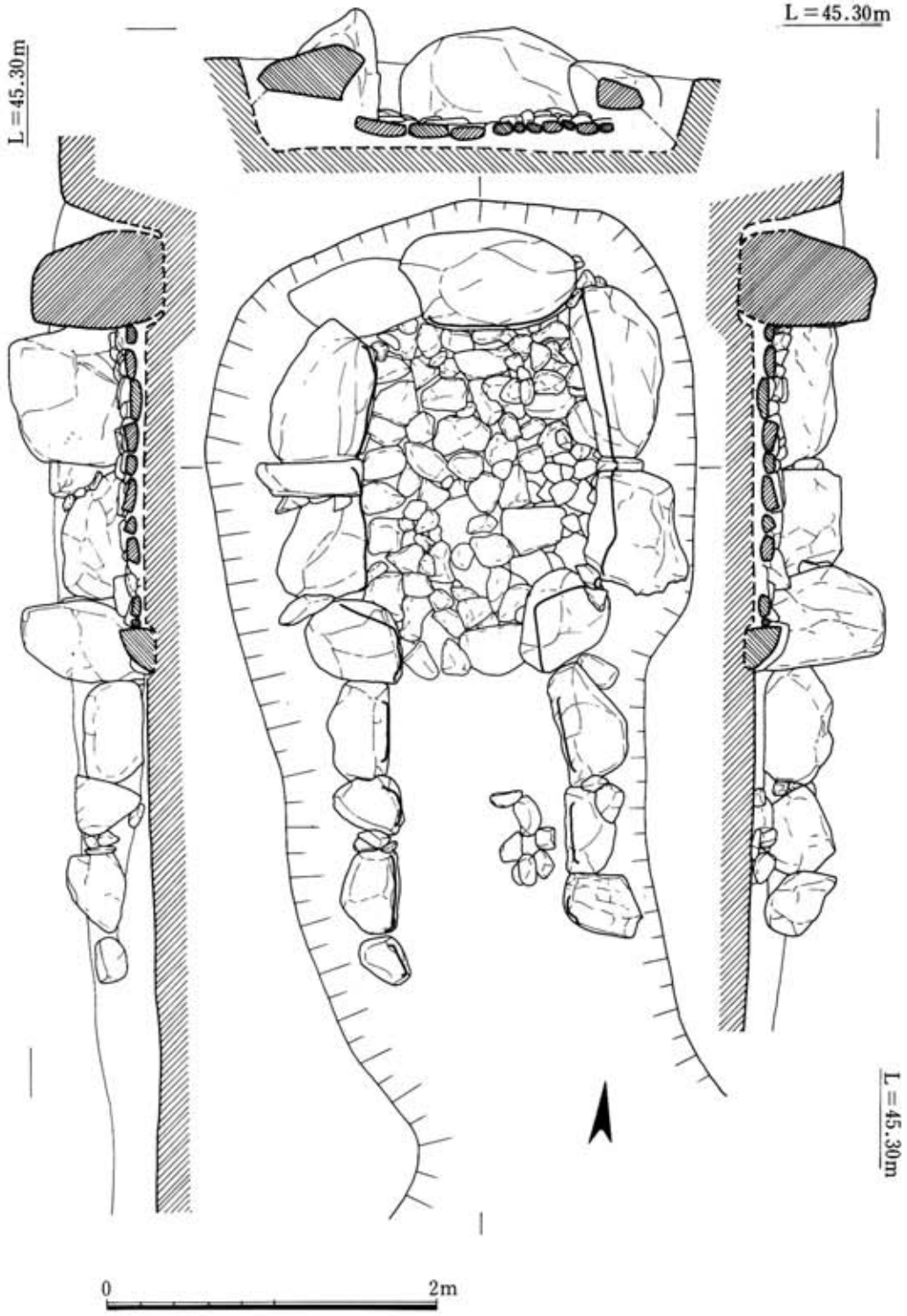


Fig. 15　ＳＴ006古墳石室実測図

羨道は長さ1.8m，幅は1.0mでほとんど開かず一定幅で主軸に沿っている。腰石の構成は西側壁4枚，東側壁3枚残存する。ただし両側壁とも，基部が安定しているのは袖石際の各1枚のみで，他は雑な並べ方で，しかも掘形からやや浮いている。羨道部に天井石が載っていたとしても玄室寄りの約0.5m程度で，南端部の石材は墓道壁の基部くらいしか用をなさなかったであろう。

墓道は羨道から1.2m先で東に折れている。長さ4.4m，幅は広いところで2.4mある。この墓道は石室の掘形とほとんど変化なくつながっており，石室の位置と墓道の方向は一連の作業としてはじめから決まっていたものとみられる。

遺物は少量の須恵器と多量の土師器片が主に墓道から，ほかに玄室床面ちかくで鉄鏃，管玉，土玉，耳環が出土した。

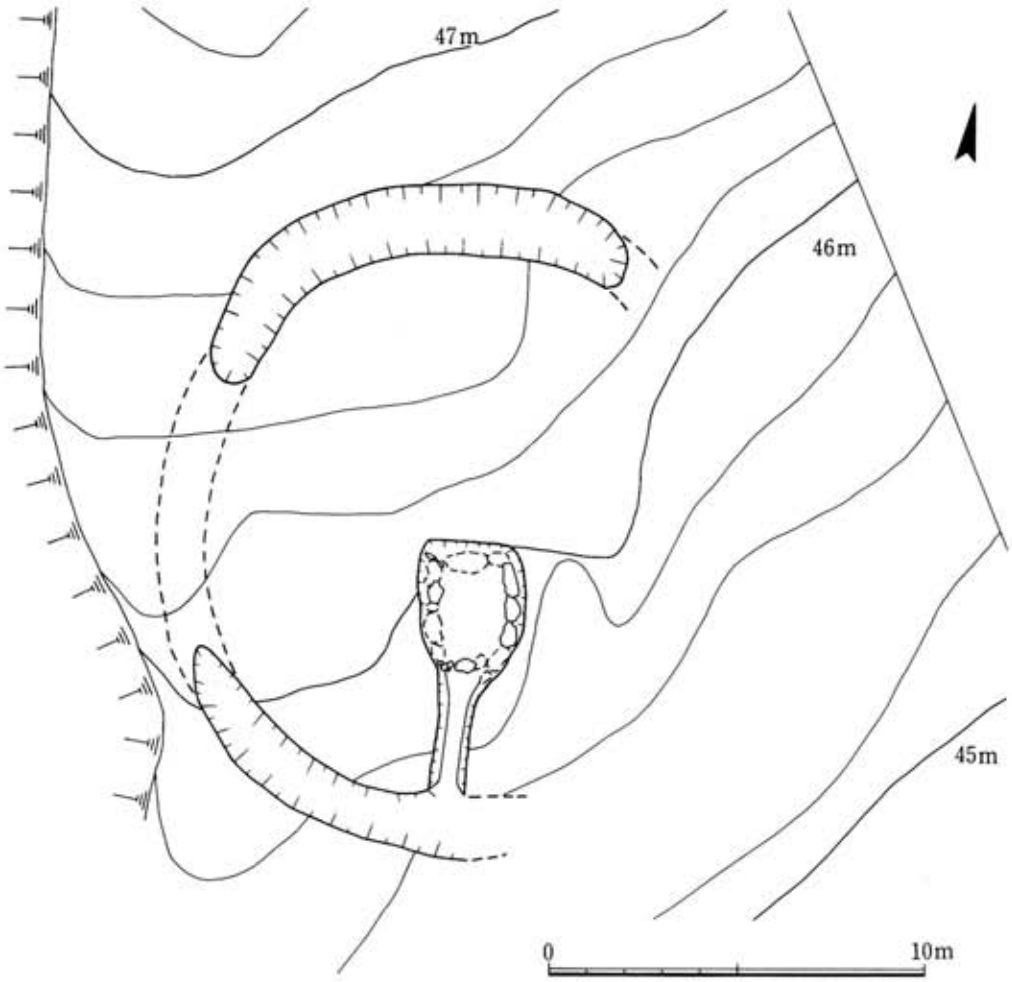


Fig. 16　ＳＴ007古墳墳丘実測図

遺　　構

ＳＴ007古墳（Fig. 16・17, PL. 7）

Ｂ区の西南端に位置する。その西側は現地形では崖が切れている。横穴式石室の円墳で，今回の調査では最大の墳丘規模をもつ。削平により全体に残りが悪く，周溝は南北両側の一部のみ残存，石室は用材の大部分が持ち去られていた。

墳丘　径17.5mの円墳である。削平により盛土は完全に無い。周溝は北側で約12m，南側で約10m残っているにすぎず，途中が削られて無くなっている。周溝幅は現在幅1.2～1.8m，深さ約0.2mである。

内部主体　羨道をもたず，玄室と細長い墓道とで構成された両袖式の横穴式石室である。主軸方位はN10°Wで，斜面下方よりやや西側方に向かって開口する。墳丘との位置関係では，石室全体が墳丘南半に納まって完全に寄っている。また，墓道は周溝とつながっている。

石材は花崗岩転石を使用するが，腰石にしても比較的小さめである。そのため石垣等に転用されたか，現在，西側壁１枚，東側壁３枚の各腰石を残すばかりである。しかし腰石の抜き跡は検出できたので，およその平面形だけは推定可能である。

石室規模は玄室のみで構成されると考えて，長さ2.35m，幅1.8m。ただし，斜面下方にあたる東側壁は腰石が一直線に並ばず，玄門側に至って隅部を自然に丸めている。腰石の構成は抜き跡からみて奥壁２枚，両側壁各４枚で，石材を横長に用いて平置きしている。玄門は幅0.4mで，框石を置き，両袖石がこれを挟む。床石はもともと無かったと思われる。玄門が，玄室に寄っていること，玄室南東隅を丸めていることは，地形の傾斜に対する構築時の工夫を示すものであろう。

墓道は玄室に直接付いて幅約１m，長さ約４mで周溝につながる。石室掘形とは一連の作業で造られており，羽子板状を呈して一体化している。

遺物は主に墓道からの出土で，須恵器，土師器が比較的多量である。ほかにガラス玉，管玉，切子玉が玄室床上から出土した。

須恵器をみるかぎりでは，本古墳群中にあっては珍しく時期が比較的単純で，使用された期間は短かったと考えられる。

ＳＴ008古墳（Fig. 3）

Ｂ区の発掘区北辺に位置する。工事予定区にかかる一部を調査した。径15.5mと推定される周溝をもつ円墳である。削平によって盛土は無い。周溝はその約⅓を調査した。幅2.2m，深さ0.1mと削られて浅くなっている。内部主体，時期については不明である。

周溝埋土中より土師器が若干出土した。

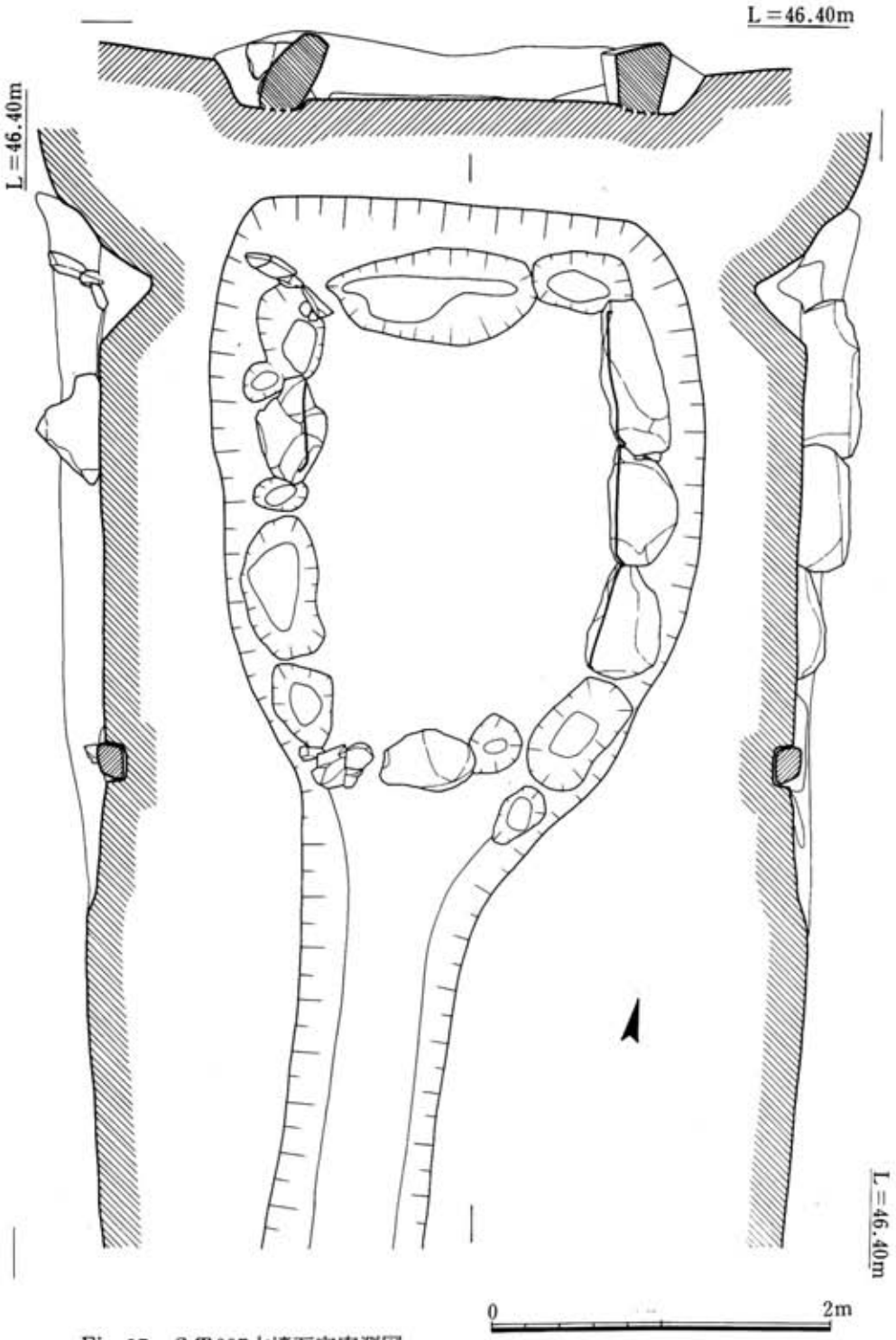


Fig. 17　ＳＴ007古墳石室実測図

ＳＴ009古墳（Fig. 18, PL. 8）

横穴式石室をもつ円墳である。Ｂ区の東南隅にあってＳＴ001古墳と接す。やはり削平によって盛土は完全に失われ，周溝一部それに石室の玄室側壁がわずかに残る程度である。周溝内より古式の須恵器が出土しており，ＳＴ002古墳と並んで，今回の調査における最も古い時期の横穴式石室の古墳である。

墳丘　西南側にわずかに残る周溝と東側の小溝から推して，径約12mの円墳と推定される。周溝は残存部で幅1.3mである。また東側の小溝は，本古墳に直接伴うものではないが，近接するＳＴ001古墳の西裾を通り本古墳の東側をＳ字状に巻いている。おそらく本古墳の盛土が削平される以前に，墳丘裾脇を通して掘られた排水溝であったと思われ，これから元の形状，規模

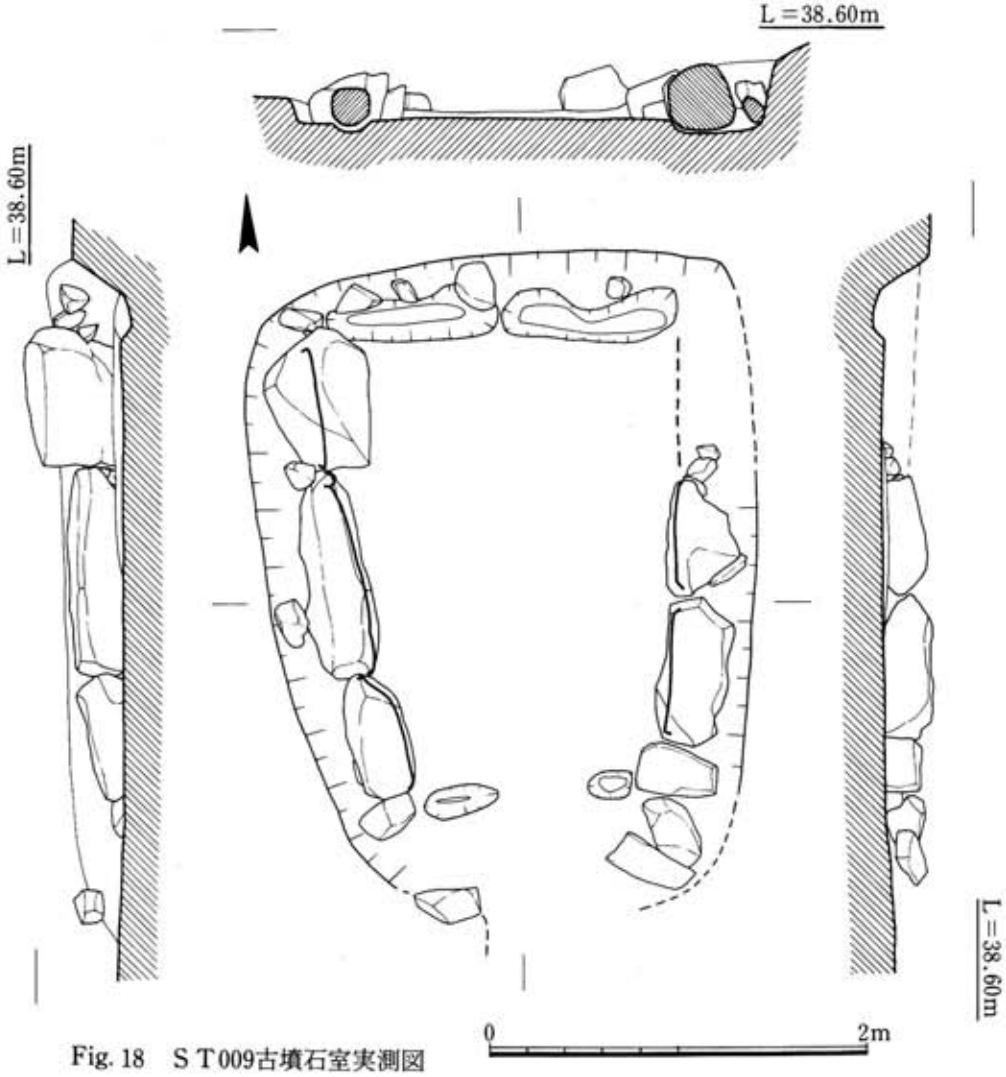


Fig. 18　ＳＴ009古墳石室実測図

が先のように推定できる。周溝内からは古式の須恵器杯が出土した。

内部主体　はっきりした羨道をもたず，玄室が平面形か台形状の横穴式石室である。墳丘との位置関係では，玄室がそのほぼ中央に位置するであろう。かなり破壊されており，奥壁，東側壁の一部および玄門袖石は取去されて他は腰石のみ残存するが，石材の抜き跡から，平面形はおよそ把握できる。石室主軸方位はN 2°Eでほぼ正南北に沿い，斜面に並行するように南に開口する。

石材は花崗岩転石で，腰石は横長で，立て気味であるため，やや不安定な感をうける。

石室規模は，玄門外の東側配石まで含めて全長3.05m，玄室は長さ2.35m，幅は奥壁で2.0m，玄門側で1.2mに狭まる。玄門は袖石が両側に立てられていたと思われる抜き跡があり，幅約0.4mと推定される。玄門外の東側にはいわゆる羨道側壁にあたる石材が1枚みられるが，天井石が架かるようなものではない。墓道に向かって八字形に開いている。したがって石室全体の平面形では九州の古式横穴式石室によくみられる「只」字形を呈す。

石室の構造は，玄室腰石についていうと，奥壁2枚，両側壁各3枚である。なお，墓道は石

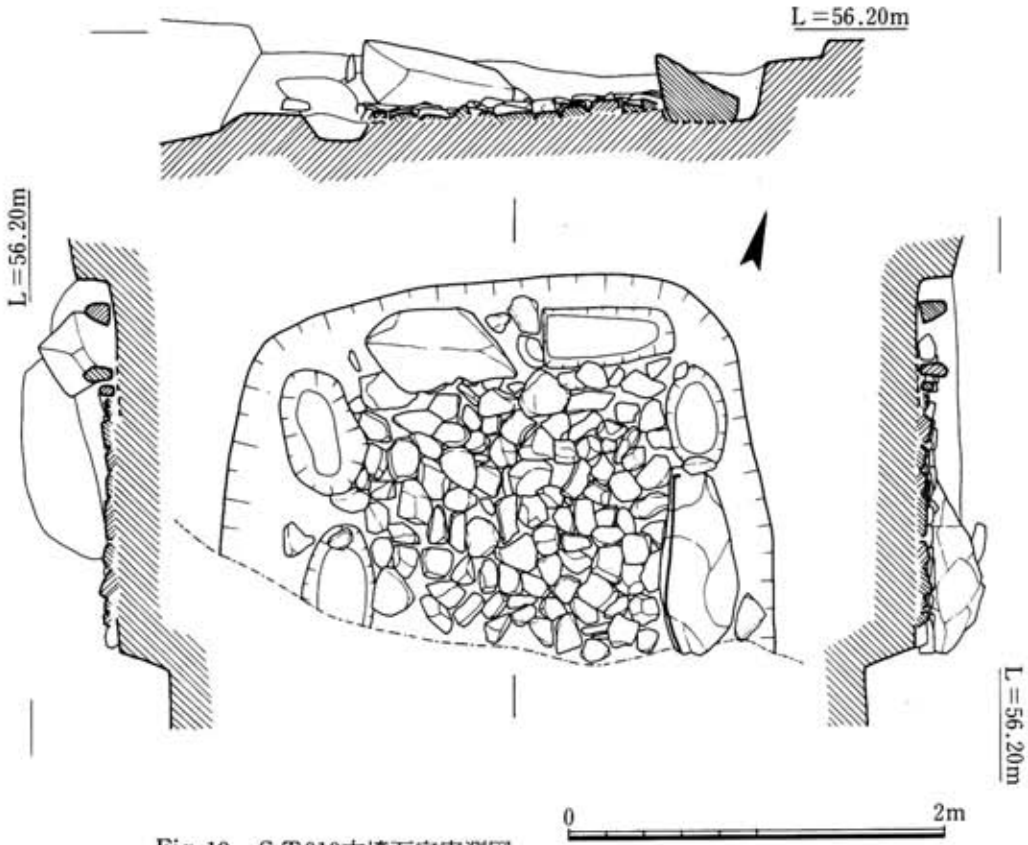


Fig. 19　ＳＴ010古墳石室実測図

室掘形とつながって羽子板状に掘られ，ＳＴ007古墳のように周溝と結ばれていたと推定されるが，前方が削られているため不明である。

遺物は周溝埋土中から若干の須恵器と土師器が出土した。

ＳＴ010古墳（Fig. 19, PL. 8）

横穴式石室をもつ古墳である。削平によって，石室もわずかに腰石と床石を残す程度である。また石室の玄室約⅓から前面を蜜柑園造成の際切り取られている。

墳丘　墳形，規模とも不明であるが，径10～15m程度の円墳と推定される。ＳＴ011古墳およびＳＴ012古墳と接していたとみられる。

内部主体　主軸方位はN17°Wで傾斜下方に開口する横穴式石室である。上部削平と前面切取りにより不明な点が多い。

石材は花崗岩転石で，腰石は横長に用いて平置きしている。玄室は約⅓が切り取られているとみられ，とすれば，抜き跡をも考え合わせて，その腰石の構成は奥壁２枚，両側壁は各３枚と推定される。ほぼ長方形で，規模は幅1.6m，長さは現存長1.4mに加えて，２m程度になろうか。

玄室床面には花崗岩礫が敷きつめられ，よく残っていた。

遺物は玄室内より若干の須恵器片と土師器片が出土したにすぎない。

ＳＴ011古墳（Fig. 20, PL. 8）

横穴式石室の古墳である。Ｄ区のほぼ中央にあって，墓道の先端がＳＴ012古墳の周溝を切っている。削平により盛土は失っており，また，石室も殆ど腰石を残す程度である。

墳丘　盛土，周溝は完全に失われており，墳形，規模は不明である。円墳とすれば，墓道がＳＴ012古墳の周溝を切るほどに近接している点からみて，径10m程度の小墳であったと推定される。

内部主体　両袖石の横穴式石室である。主軸方位はN80°E，傾斜面横方向に開口する。

石材は花崗岩である。腰石の場合，比較的小さめの転石を横長に用いて平置きしている。玄門部は腰石さえ取り去られているが，玄室南側壁では一部２段目まで石材が残存している。全体として，石材の選定，積み方に雑さが目立つ。

石室規模は全長4.1mである。玄室は長さ2.36m，幅は奥壁側で1.75m，玄門側で若干狭まるようである。平面形は，奥壁がやや斜行しているため，いくぶん変形している。腰石の構成は奥壁３枚，両側壁各３枚である。玄門は両袖石とも抜き取られているが，框石を１個埋めており，幅約0.8mと推定される。掘形からは一見，片袖式石室を思わせるが，特に意味は認められない。

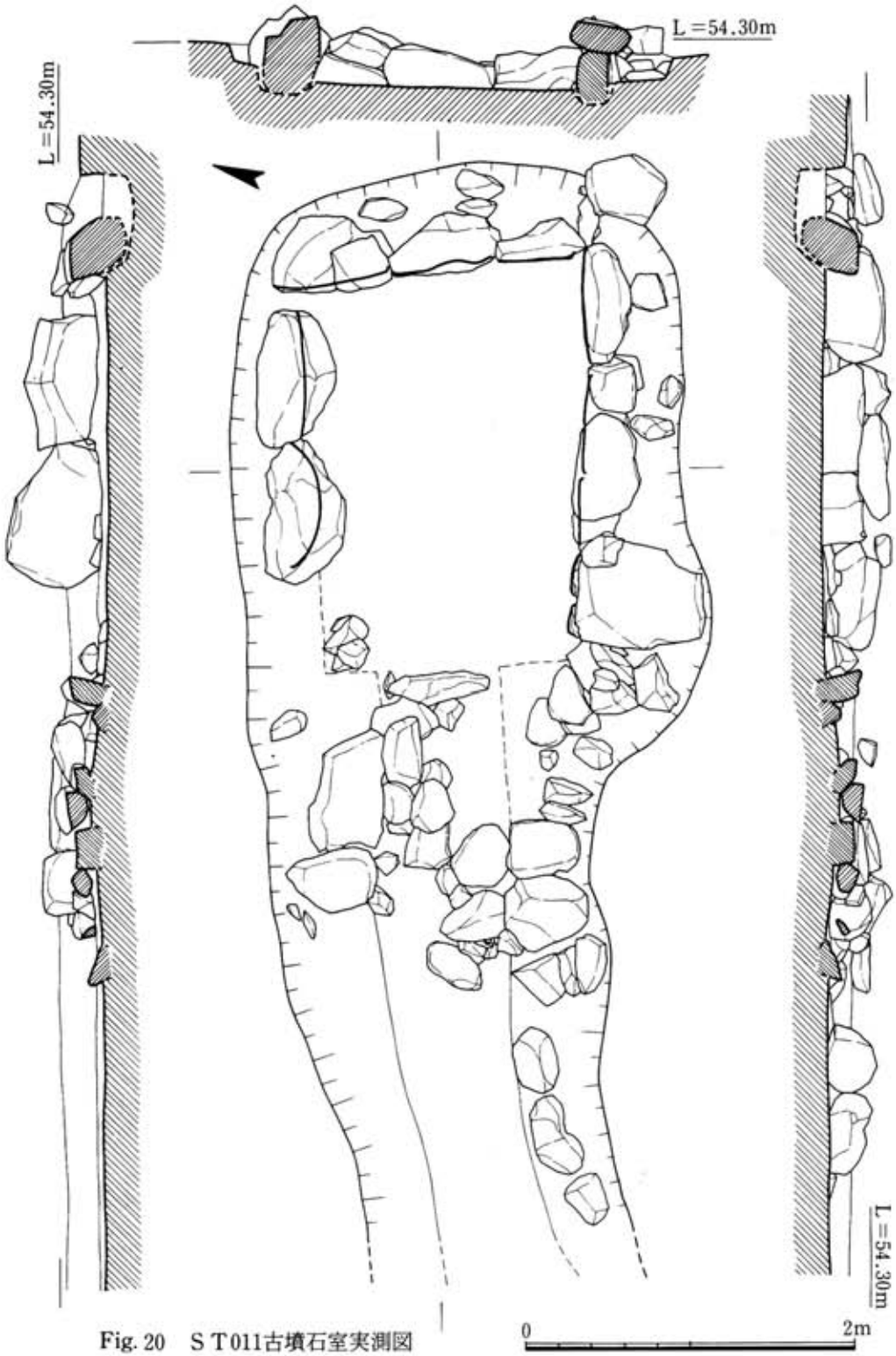


Fig. 20　ＳＴ011古墳石室実測図

羨道は長さ約1.3m，幅0.8mである。羨道といっても，墳丘規模からみて，天井石が載っていたとは考えにくく，さらにその先の墓道南側にみられる配石とあわせて墓道側壁の可能性がつよい。閉塞はこの羨道部に一部基礎が残存していた。

墓道は石室掘形と同時に造られ，ＳＴ012古墳の北側墳麓まで細長く伸びる。

遺物は原位置を保つものはなく，主に墓道から須恵器と少量の土師器が出土した。

ＳＴ012古墳（Fig. 21・22・23，PL. 9・10）

横穴式石室をもつ円墳である。D区の中央に位置し，調査された他の古墳に比べ，周溝，石室ともひときわ堂々としている。削平をうけてはいるが，わずかに盛土が残存していて，石室も比較的残りがよい。

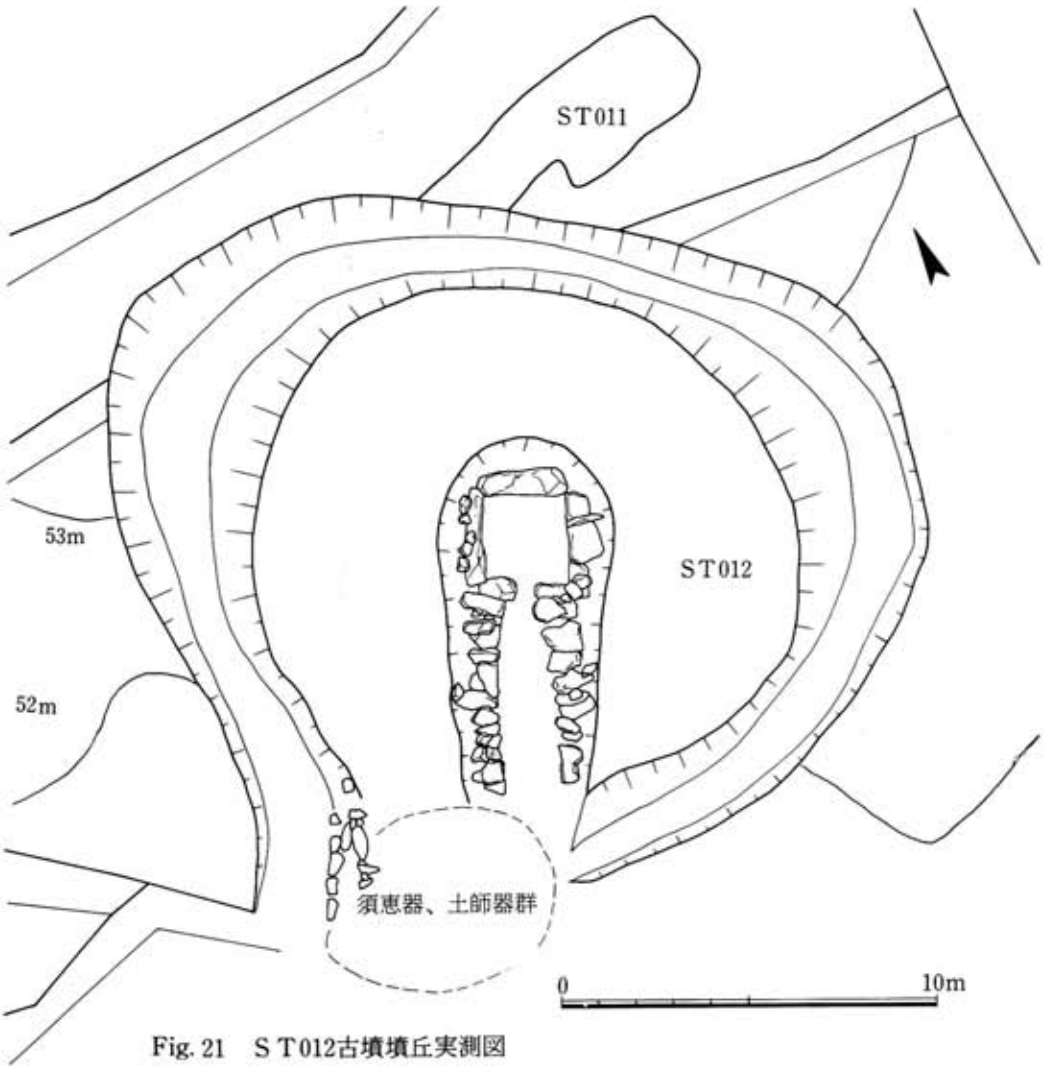


Fig. 21　ＳＴ012古墳墳丘実測図

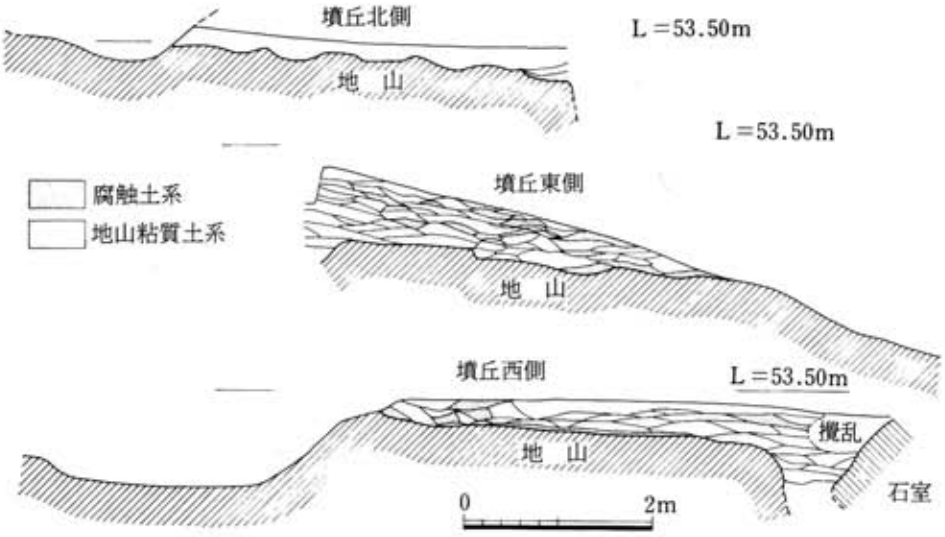


Fig. 22　ＳＴ012古墳墳丘断面図

墳丘　削平によって周溝の平面形は多少変形しているが，径15mの円墳である。周溝は幅２～５ｍと広く，その外側で測れば径20mをこえる。注意されるのは石室開口部の西側で，周溝はここで円周からはなれてやや南に向かい，その東側すなわち墳裾部に長さ約３ｍで２段の石積みを造っている。この箇所では周溝中より多量の須恵器が出土した。同時期の石積みとすれば，墓前祭に関わる施設の可能性が考えられる。石室との関係でみれば，東側から回った周溝は墓道とつながっているのに対し，その西側では墓道とつながらず，約４ｍの間隔をおいて切れている。

盛土は東側で最高0.8mほど残っている。腐触土系と地山粘質土系とをかなり細かく分けて盛っており，傾向としては石室裏込めに地山土系の粘質土を用いて固め，墳丘は主として黒色土系又は褐色土系の土を盛って造っている。

内部主体　方形の玄室と長大な羨道部とからなる両袖式の横穴式石室である。墳丘との位置関係では，玄室がほぼ墳丘の中心になるように造られている。主軸方位はN23°Eで，斜面下方に向かって開口している。

石材は主として緑泥片岩を使用，花崗岩はむしろ補助的に用いている。緑泥片岩の節理性を利して，玄室腰石は各壁面とも基本的に１枚石を立てて構成しようとしている。玄室は腰石のみ，羨道は小口積みまで３段残存する。

石室規模は全長7.8m。玄室は2.3m四方の正方形である。各壁面は腰石を障壁状に立てて奥壁と西側壁が各１枚，東側壁は２枚といっても用材の不備からで，本来１枚で構成されるべきところである。２段目以上は羨道壁面の残存部同様に小口積みで，さらに３段程度あったであろう。壁面の内傾角は約10°で，腰石からすでに内傾しはじめている。床面には緑泥片岩礫が敷

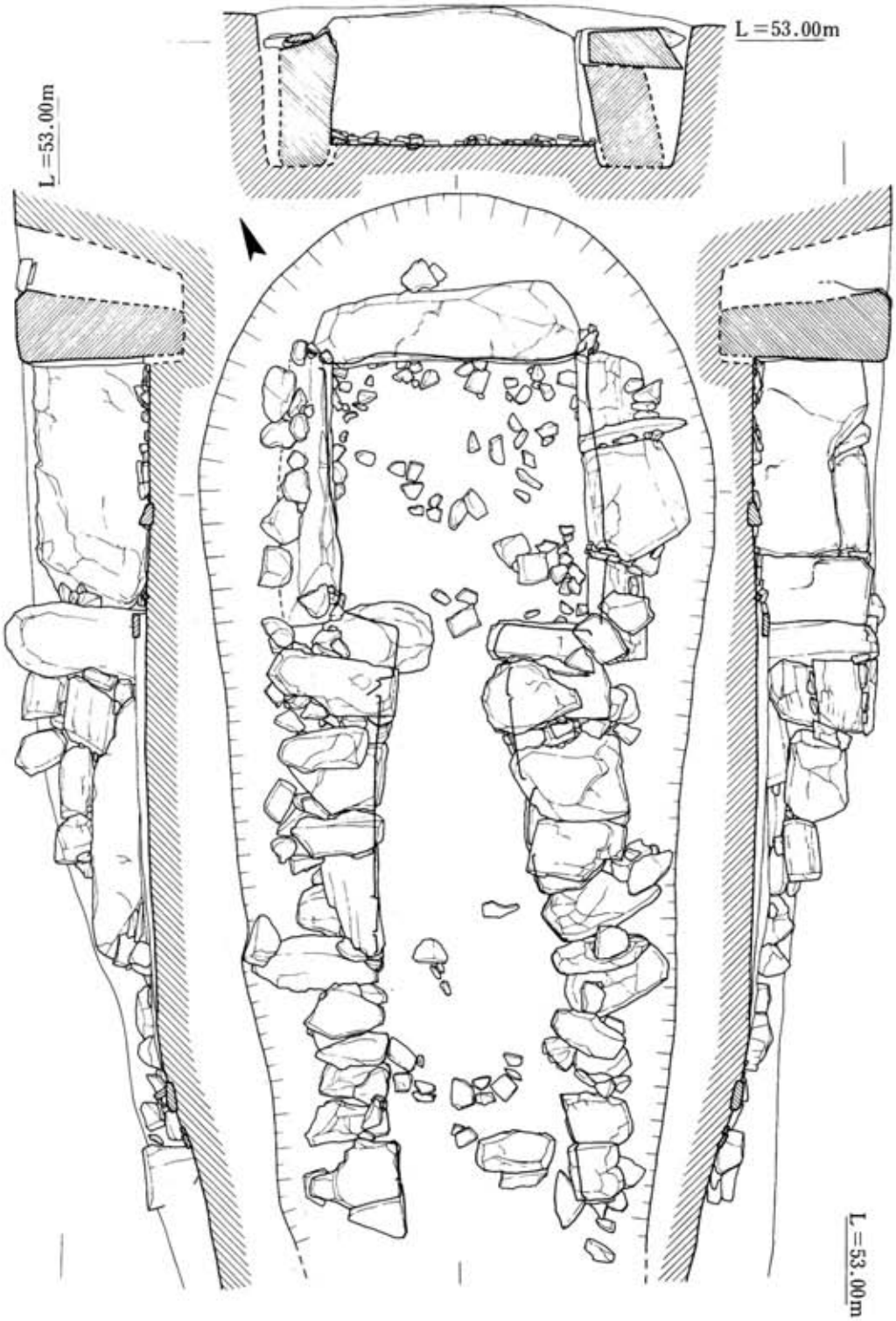


Fig. 23　ＳＴ012古墳石室実測図

乱しており，敷石があったとみられる。玄門は幅0.85mで，框石は置かれていない。

羨道は長さが5.2mある。玄室の一辺の長さの２倍以上である。ただし，その南半は基礎石が弱く，かつ南に向かい下がっているので墓道的な機能しかもたない可能性がつよい。幅は開口部に向かってやや開き気味で，玄門側1.25m，開口部端では1.62mである。また，全体として開口部をいくらか東側に向けようとしている意図が認められる。側壁は，西側壁ではやはり緑泥片岩の巨石を腰石にして上部を小口積み，東側壁もほぼ同様であるが，あまり大きな石材は用いられていない。玄室から羨道を通してみると，東側壁に対して西側壁の構築の方により優先的な配慮が感じられる。

閉塞の状況は明らかでないが，羨道開口部に散在していた礫群がその一部かと考えられる。

遺物は先の開口部西側周溝内と石室内とくに羨道を中心に極めて多量の須恵器と土師器が出土した。今回の調査では最も多量である。ほかに玄室内から銅釧，刀子，土玉なども出土している。とりわけ開口部西側周溝内でみられた大型甕の多量の出土が注目される。周溝から紡錘車１点が出土しているが，流れ込みであろう。

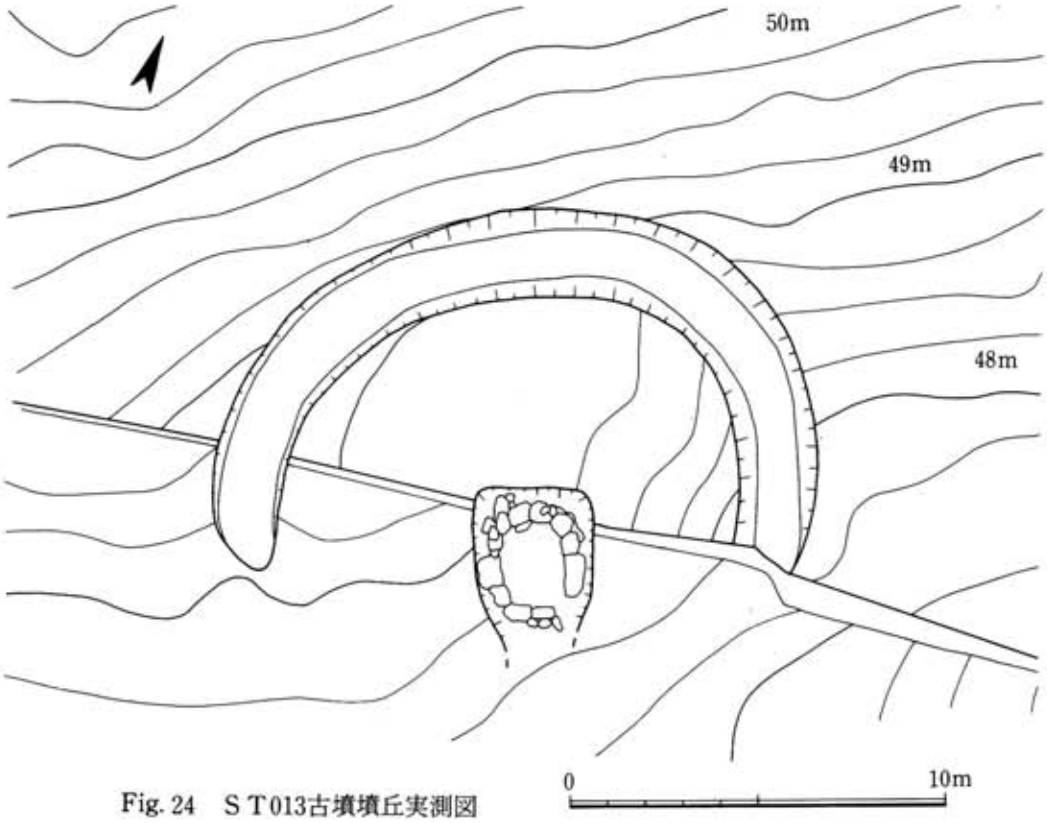


Fig. 24　ＳＴ013古墳墳丘実測図

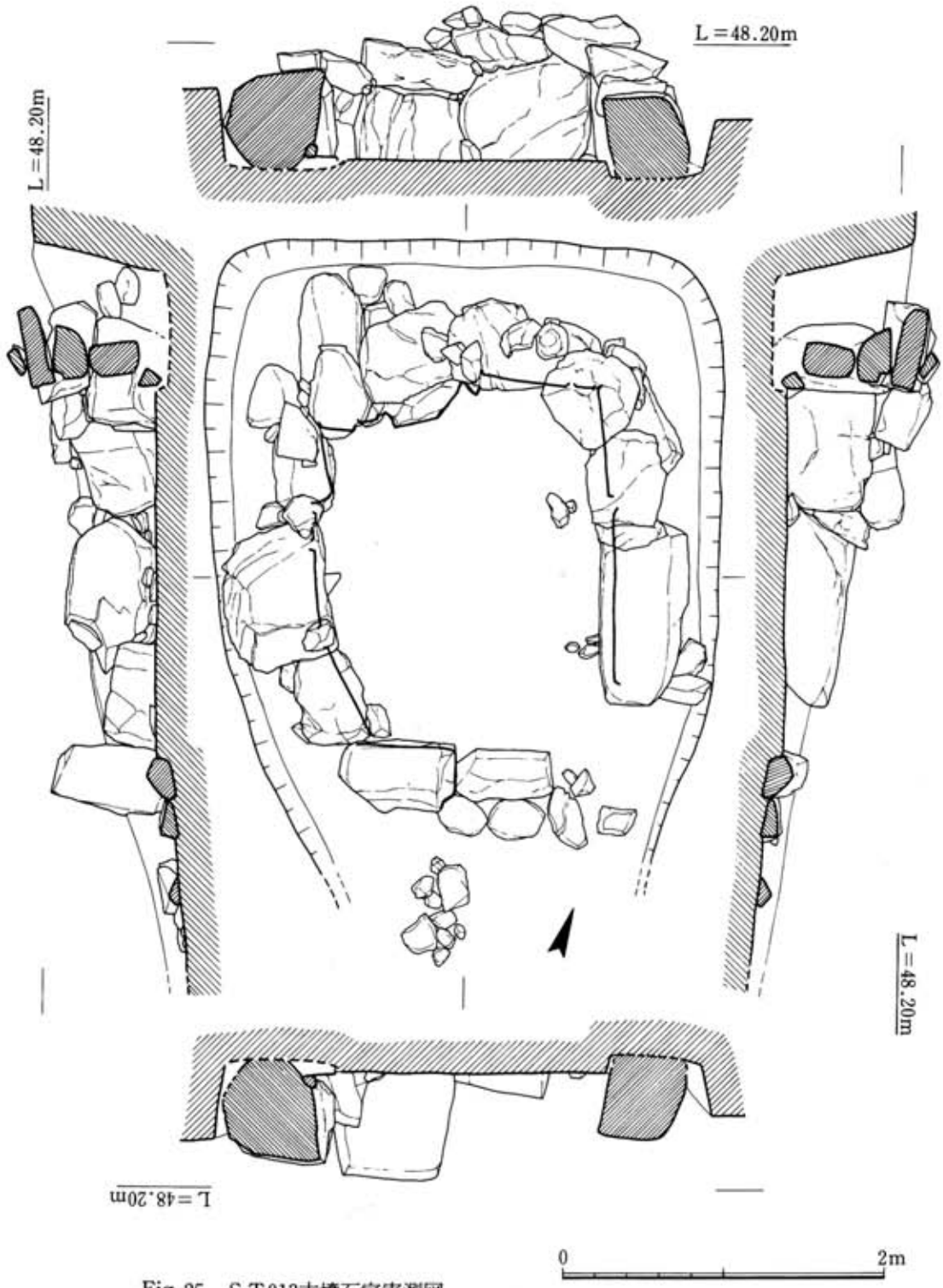


Fig. 25　ＳＴ013古墳石室実測図

ＳＴ013古墳（Fig. 24・25, PL. 11）

横穴式石室の円墳である。Ｄ区の東南隅にあたり，墳丘南端が一部調査区からはずれるが，全体はおよそ把握できる。削平をうけているため，石室はせいぜい２段まで，盛土はほんの一部しか残っていない。

墳丘　周溝が全体の約⅓ほど北側に残っており，径約16mの円墳と推定される。周溝は幅２m，掘込みは深いところで0.4m，溝底が平坦で全体に整った周溝である。

盛土は石室の裏側のみわずかに残存している。断面には盛土する際のかなり細かなブロックが観察でき，掘り上げた表土と地山土とを交互に盛って固めていることがわかる。また石室は，旧地形からみると，現在以上に急な斜面に造られている。

内部主体　羨道をもたない両袖式の横穴式石室である。墳丘との位置関係では，玄室奥壁が墳丘のほぼ中心になって，全体に南に寄っている。主軸方位はN20°Wで，斜面下方に開口している。もともと急な斜面を掘り込んで造られているため，奥壁側はかろうじて２段まで残存，しかし他は腰石を残すのみで，東側袖石付近は石材が抜き取られている。

石材は花崗岩転石を使用し，腰石の場合，横長に平置きしている。壁面は整合しているところが少なく，石材の選定および全体の積み方に雑さが目立つ。

石室規模は全長2.7m。玄室のみで構成されている。玄室は長さ2.1m，幅は奥壁側1.7m，玄門側1.5mで，西側壁はかなり外に膨んでいる。腰石の並べ方は奥壁２枚，両側壁各３枚である。礫床は認められない。玄門は框石を置いて，両側から袖石を立てている。幅約0.6mである。石室前面に礫群が若干みられるが，玄門部閉塞の痕跡であろう。

石室掘形は羽子板状を呈す。墓道が長く伸びる形式と思われるが，先端は不明である。

遺物は石室，墓道および周溝から若干の須恵器片と土師器片が出土したにすぎない。

ＳＴ014古墳　（Fig. 26・27・28, PL. 12・13）

横穴式石室の円墳である。ＳＴ013古墳の斜面上方に位置する。削平をうけているが，盛土は若干残存し，石室も傾斜上方にあたる掘り込みの深いところでは奥壁の場合３段まで壁体が残っていた。注意されるのは，石室開口部西側の盛土下，旧表土から出土した須恵器，土師器および玉類などの一群である。出土状況およびそれらの組み合わせからみて，古墳造営時の儀礼に関わるものと考えられる。

墳丘　径約17mの円墳である。周溝は傾斜上方にあたる西側から北側にかけて，全周の約½残存する。周溝はその西側でやや直線的な部分があり，円墳としては必ずしも整った形状をなしていない。周溝幅は現在1.2～２m，深さは約0.3m残存している。

盛土は石室掘形においては裏込めに地山の土を入れ，墳丘は主に褐色土系の土を盛る。層序より同質の土を基本的に横に流しながら盛り上げてゆく方法がとられているようである。

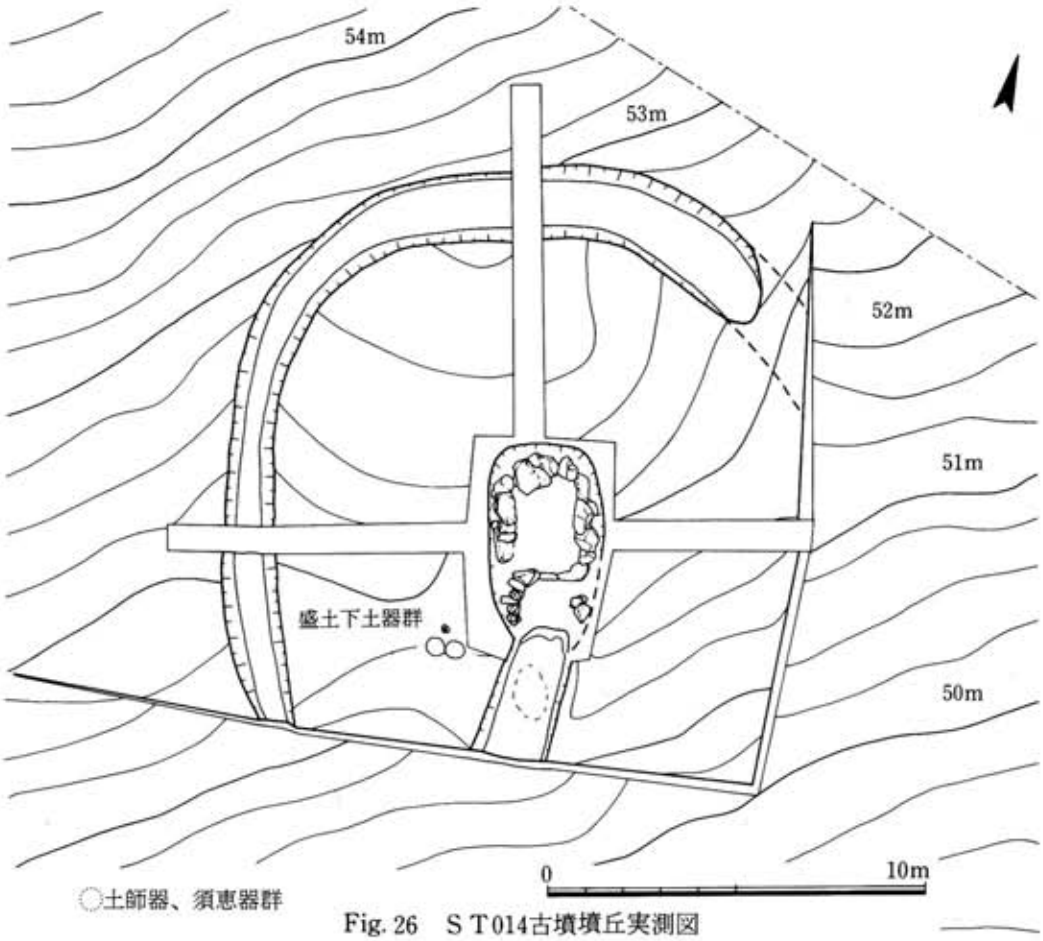


Fig. 26　ＳＴ014古墳墳丘実測図

石室開口部西側の盛土下で検出された土器群は，東西に並べられた須恵器大甕２個を中心に丹塗土師器壺１個，土師器杯類等が一群をなし，これら須恵器，土師器に混って土玉６個がみつかっている。須恵器等は盛土の際，あるいはそれ以前に破砕されたものと思われ，礫とともにかなり破片が散乱した状態であった。遺物の種類およびその出土状況からみて，墳丘盛土が開始される直前における，埋葬に関わる何らかの儀礼が行われたことを示している。ただし個々の遺物が完全に復元できなかったことからすれば，儀礼の場そのものであったというよりは，儀礼後の処理として解釈した方がよいように思われる。

内部主体　両袖式の横穴式石室である。玄室が墳丘のほぼ中心にくる位置に造られている。主軸方位はＮ15°Ｗで，斜面下方からやや西にそれる方向に開口している。

石材は花崗岩転石を使用し，腰石だけでなく壁体３段目まで横長に平置きして積み上げている。壁面の内傾は約15°で，持ち送りがかなりきつい。羨道西側壁以外，玄門部付近は殆ど破壊されてしまっている。

石室規模は全長4m。玄室は長さ2.64m，幅は奥壁側で2.07m，玄門側で1.75mといくらか狭くなる。壁体の構成は，腰石で奥壁2枚，両側壁各3枚，また積み上げの際の間隙は比較的丹念に小礫でふさいでいる。特に奥壁の東側腰石を浮かせて下に小礫を充填している点などは，全体の壁構成にちょっとした工夫のあとがみられ，やや変則的であるが気がきいている。床面は礫敷きであったと思われ，東北隅にその残欠が認められる。玄門は幅の薄い框石を置いて両側から袖石を立てて挟む。幅約0.6mで，羨道から入ると急に狭くなる感じをうける。

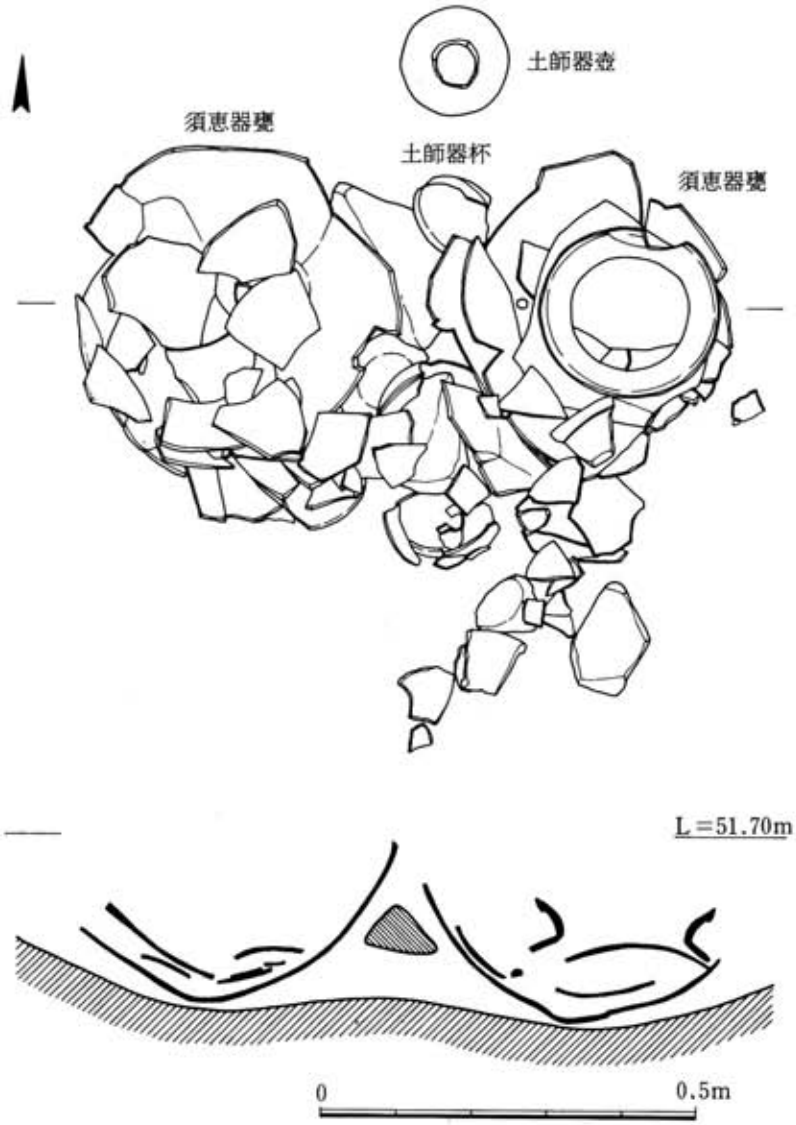


Fig. 27　ＳＴ014古墳盛土下遺物出土状況

羨道は長さ0.95m，幅は開口部先端で1.6mである。八字形に開いており，玄室と合わせてみれば平面形，「只」字形の石室に該当する。ただし羨道とはいっても西側壁をみるかぎりでは石積みが小礫で，天井石の載らないいわば墓道壁としてしか機能しなかった可能性がつよい。

墓道は幅約2.5mで，石室主軸からはやや西に振れて伸びるが，先端は不明である。

遺物は玄室床面から，荒らされた状態で金製垂飾残欠，耳環，鉄鏃が出土。石室および墓道埋土から土玉が出土した。須恵器，土師器は比較的多量で，石室開口部西側墳丘下の須恵器と土師器および土玉の一群以外は原位置を保つものはないが，主に墓道からまとまって出土した。

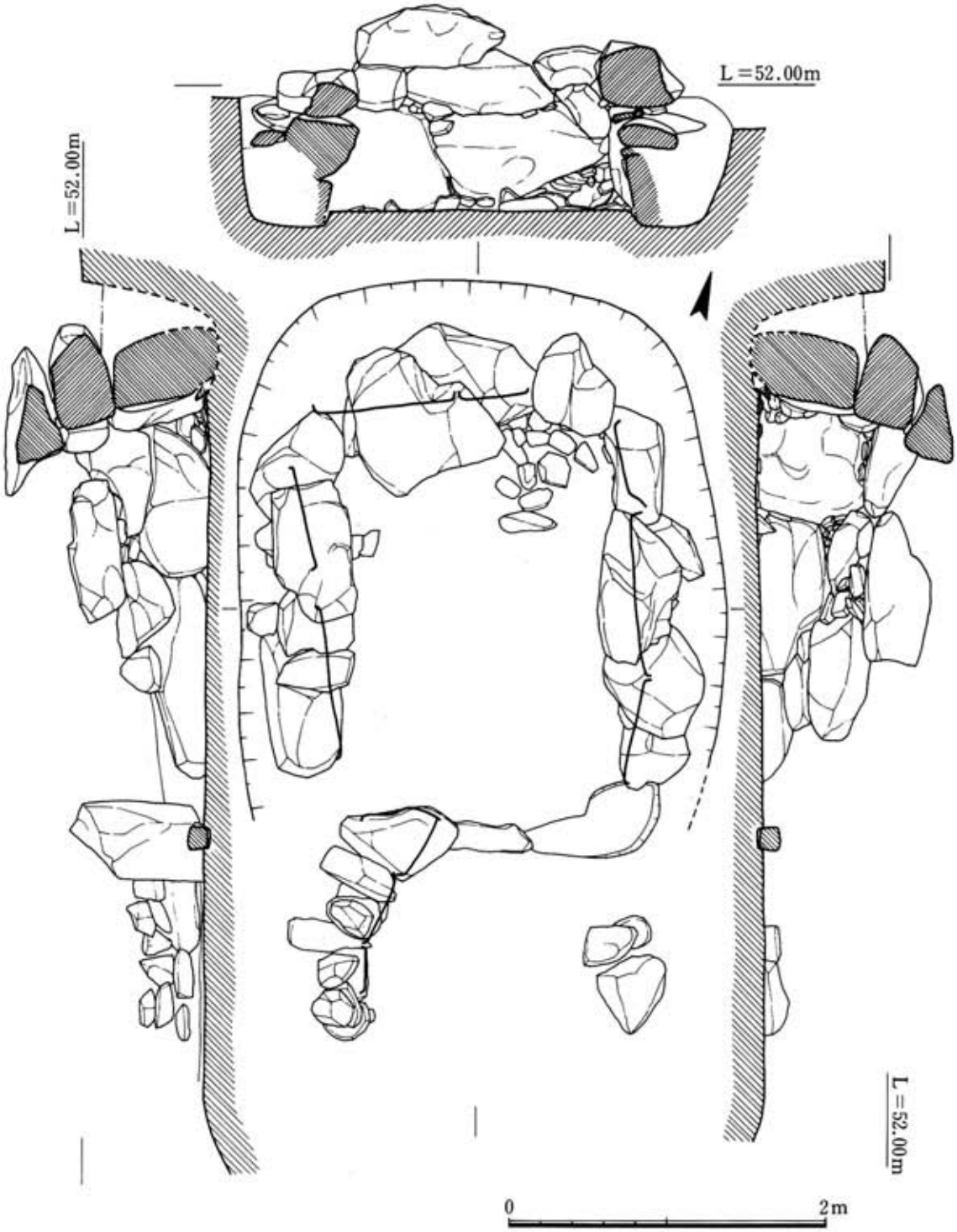


Fig. 28　ＳＴ014古墳石室実測図

ＳＴ015古墳（Fig. 4）

現在の山道脇にあって，礫床一部のみ残存する。礫床は横穴式石室にあたると思われる。削平によって周溝，墳丘，石室の形式等は全く不明である。

遺物は石室付近から，須恵器片と土師器片が若干，ほかに鉄鏃，耳環が玄室内より荒らされた状態で出土した。

ＳＴ016古墳（Fig. 29, PL. 14）

削平によって盛土は完全に失われているが横穴式石室は比較的よく残存していた。石室は方形の玄室に長大な羨道が付くもので，全体に先に述べたＳＴ012古墳とよく似ている。

墳丘　形状，規模については不明であるが，かなり大型の円墳と推定される。石室前面の地形をみると，段落ちがこの付近で弧を描くようにしている。これが旧地形をいくぶんとどめるとすれば，地形に合わせて墳丘が造られた可能性があり，その場合，径約20m程度であったと推定される。

内部主体　両袖式の横穴式石室である。方形の玄室と長大な羨道といった平面形，あるいはその規模，さらに緑泥片岩の巨石を用いた壁面の積み方，構造等，ＳＴ012古墳とよく似ている。ただしＳＴ012古墳に比べると，羨道が若干短く幅が狭いなどの違いはある。

石室の主軸方位はN29°Eで斜面下方に開口する。石材は緑泥片岩を主要な壁面構成に用い，花崗岩転石は補助的に使用する。腰石の場合はやはり基本的には障壁状に立てて用い，２段目以上を小口積みにしている。ただし羨道の南側半分は基礎からして比較的小さい用材を当てている。

石室規模は全長7.7mである。玄室は長さ2.7m，幅2.6mのほぼ正方形を呈し，各壁面は，腰石の場合，基本的に１枚で構成しようとしており，奥壁と西側壁が各１枚，東側壁は補助的に２枚使っている。西側壁で２段目，東側壁で３段目まで残存する。内傾角は約15°で，基礎の腰石からして内傾がはじまっている。床面には礫は敷かれていない。玄門は幅0.8m，ＳＴ012古墳にはみられなかったが，ここでは框石を置き両側から袖石を立てて挟む。

羨道は長さ4.5m，幅1.1mであるが，開口部はゆるやかに開く。ただしこの羨道もＳＴ012古墳同様，南側半分は壁体の基礎石としては小さく，やはり天井石が載った羨道というよりは，墓道壁としての機能を考えた方がよいであろう。開口部には花崗岩礫を主とした礫群があり，閉塞の名残りをとどめている。羨道からは墓道が長く伸び，石室掘形全体としては羽子板状を呈している。

遺物は原位置を保つものはないが，玄室から耳環，土玉，周溝埋土から管玉が出土した。須恵器，土師器は主に墓道から出土した。ただし少量である。

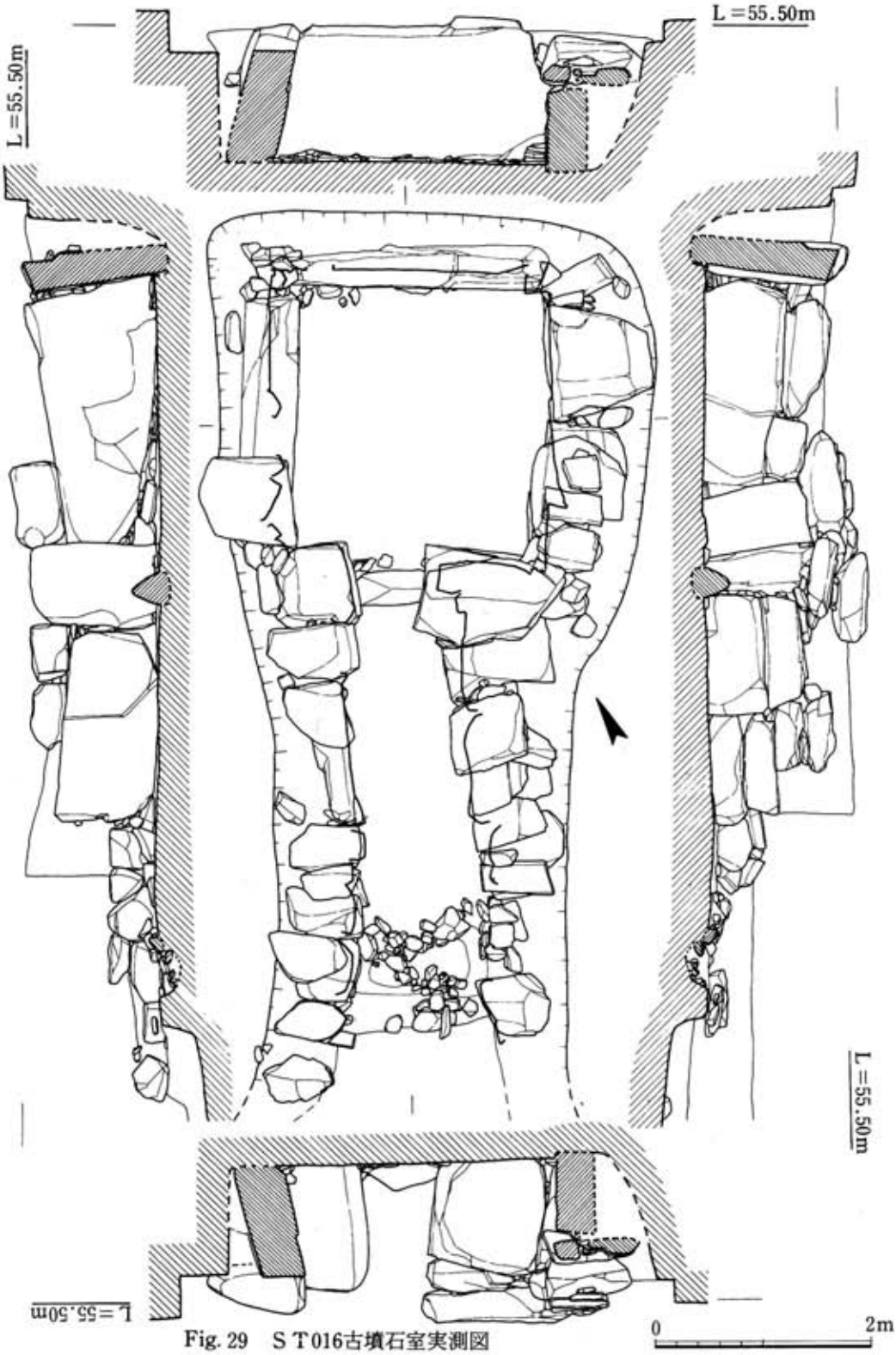


Fig. 29　ＳＴ016古墳石室実測図

ＳＴ017古墳（Fig. 30, PL. 14）

Ｄ区の西南隅に位置する横穴式石室の古墳である。削平により盛土は完全に失い，石室も北隅を全体の半分ちかく破損され，残存部が腰石を残す程度である。

墳丘　墳形，規模は不明であるが，小型の円墳と推定される。削平により，周溝の有無も不明であるが，西北側に谷に向かう傾斜がはじまる立地からみると，あったとしても東北側一部と思われる。

内部主体　玄室と羨道とからなる両袖式の横穴式石室である。石室の主軸方位はN44°E，ほぼ傾斜下方に開口している。腰石しか残存せず，しかも玄室北隅は破壊されているが，石材の抜き跡からおよその平面形は把握できる。石材は花崗岩転石を使用，腰石の場合は横長に用い

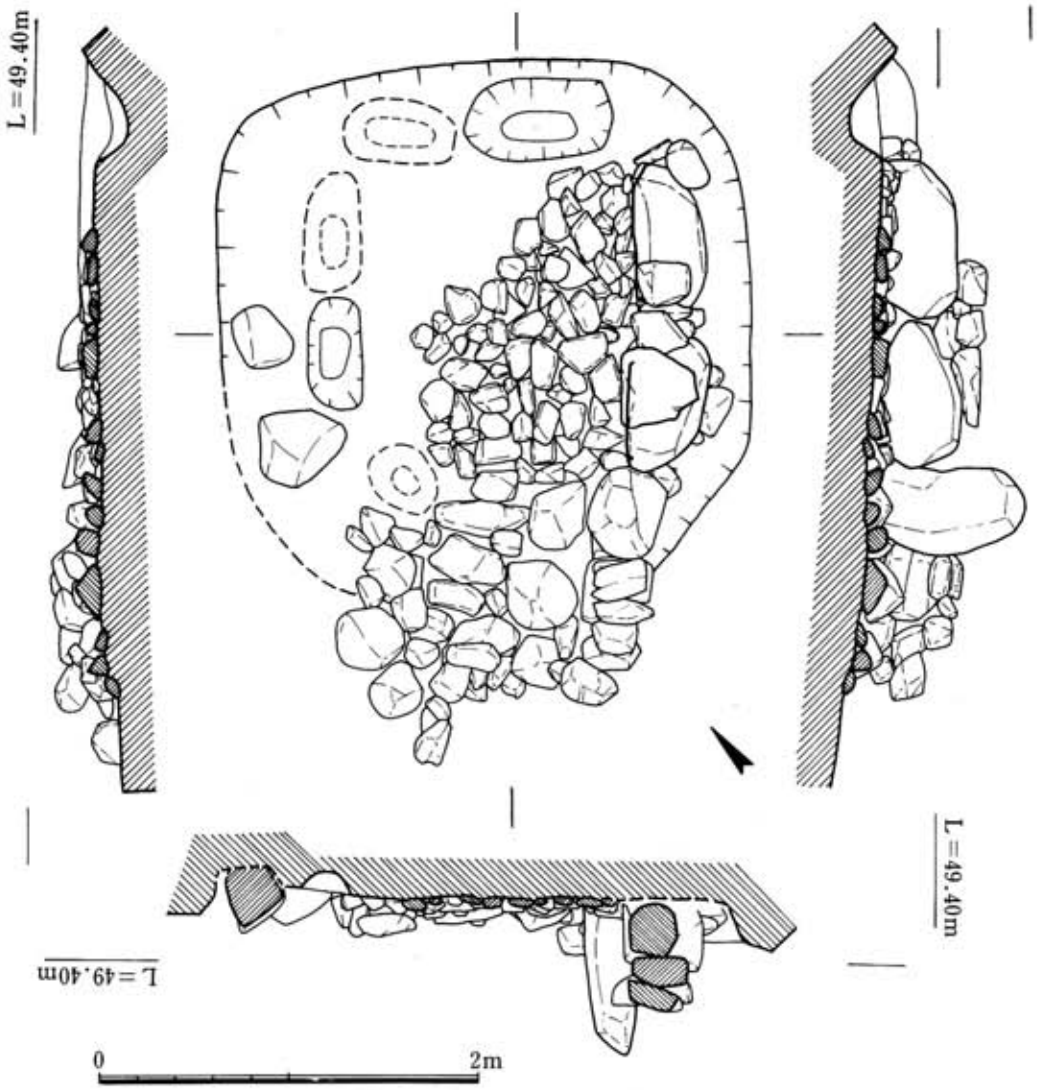


Fig. 30　ＳＴ017古墳石室実測図

て平置きしている。

石室規模は全長3.2m，ただし羨道前面がいくぶん削られているとすれば，若干これより長くなろう。玄室は腰石の抜き跡を合わせみて1.5m四方のほぼ正方形にちかいと推定される。壁面は腰石で奥壁２枚，両側壁各２枚である。東北壁では腰石上に壁面調整と思われる小礫がわずかに残存している。また，玄室床面は花崗岩円礫を敷いている。玄門は西北側の袖石を失っているが，両袖式とみられる。幅0.8m，ただし若干西北側からの出が大きい。玄門には框石がみられず，玄室から羨道に続いて敷石が施されており，框石はもともと無かったようである。

羨道は長さ0.6m以上，幅0.85mである。玄門の幅とほとんどかわらないで伸びているが，開口部に向かって若干広くなる傾向をみせる。残存する東南壁は腰石２枚で，その上に小礫が２，３載っている。腰石の大きさからみて，天井石が載っていたとしても，ごく短い羨道であったと考えられる。

掘形は石室の形状に合わせ，平面形が羽子板状に造られている。

遺物は玄室床面ちかくで勾玉，耳環，刀子が出土。須恵器，土師器は石室内埋土から，ほとんどが細片で少量出土している。

ＳＴ018古墳(Fig. 31，PL. 15)

横穴式石室の古墳である。D区の西南端に在ってＳＴ017古墳とほぼ傾斜面の上下に並んだ関係にある。削平により，盛土は完全に失っているが，石室の腰石は比較的よく残っている。全体として，石室の形態はＳＴ017古墳と類似する点が多い。

墳丘　墳形，規模とも不明であるが，やはり小形の円墳と推定される。西北側は谷傾斜にかかり，台地の裾端のやや突出した地形を利用しているものとみられる。削平によって周溝の有無は不明であるが，あったとしても東北側一部に限られよう。

内部主体　両袖式の横穴式石室である。ＳＴ017古墳同様，方形に近い玄室に，玄門とほとんど幅のかわらない羨道を付設する。石室主軸方位はN46°Eで，斜面下方に開口する。

石材は花崗岩転石を用い，腰石の場合，横長に立てて使用する傾向がみられる。

石室規模は全長3.9m。玄室は1.7m四方のほぼ正方形である。壁面は，腰石の場合，奥壁２枚，両側壁各２枚である。奥壁の２枚は上部が割られて現在低くみえる。床面には花崗岩礫を比較的丹念に敷いている。玄門は両側に袖石を立てているが，東側は抜き取られ，また西側は上部を割られている。幅0.9mと推定される。框石にはやや変則的に緑泥片岩の板石が用いられ，玄室寄りに立てて敷石を仕切り，玄室との区分を明確にしている。

羨道は長さ1.2m，幅は約0.9mで，玄門とほとんど変わらない。ただし玄室主軸より約10°東側に振れている。壁面は，東側のそれが抜かれているが，腰石の場合各１枚であったと思われる。東側壁の腰石はその先端にもう一石を平置きしているが，これはやや東に向かう開口部を

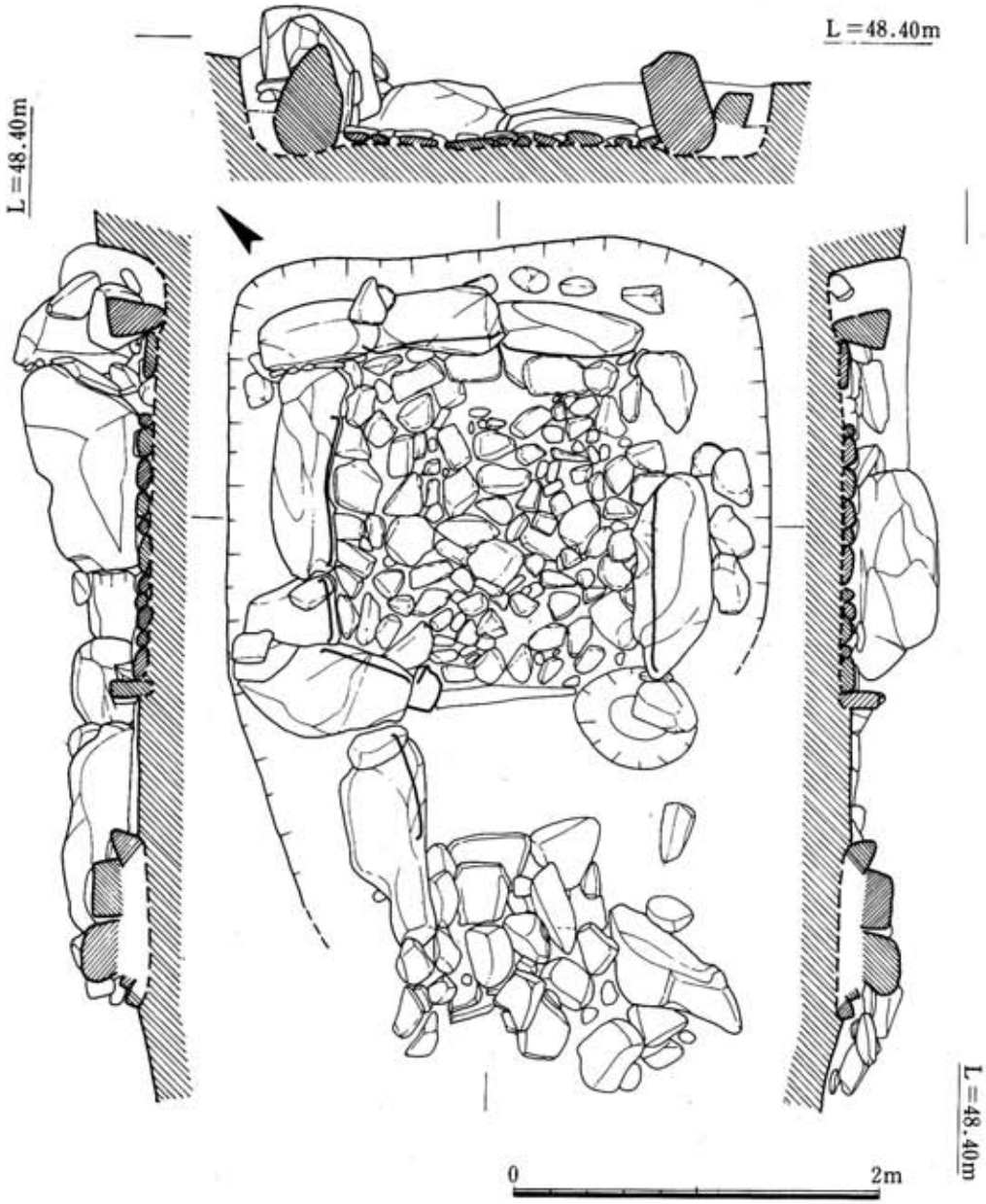


Fig. 31　ＳＴ018古墳石室実測図

明示する意味をもつかと考えられる。敷石はみられない。羨道前面には花崗岩礫による閉塞石の基部が残存している。

遺物は原位置を保つものはなく，玄室から須恵器と土師器が少量，付近で紡錘車も１点出土しているが，本墳に伴うかどうか不明である。

ＳＴ019古墳（Fig. 32, PL. 15）

Ｄ区の最高所を占める横穴式石室の古墳である。削平をうけて石室床石と腰石一部を残す程度である。

墳丘　盛土は完全に失っている。周溝の有無は不明であるが，立地からみて，周溝はあったとしても調査区外の北側一部に限られよう。墳形，規模ともに不明であるが，円墳と推定される。石室開口部南側の地形が一段落ちて弧状になっていることからすれば，墳丘整形を利した築造と考えられる。

内部主体　やや大型の横穴式石室である。削平により，玄門から羨道にかけてほぼ完全に破壊されており，玄室の床石側壁腰石の一部しか残存していない。石材は花崗岩である。

石室主軸方位はＮ３°Ｅで傾斜の下方に開口している。

石室規模は玄室の場合，幅2.4m，長さは明確でないが，残存する礫床を全て玄室の範囲とすれば約3.4mとなって，やや大型の長方形と推定される。玄室腰石は奥壁で３枚，側壁は不明である。床はやや不揃いな礫を敷いている。

遺物は耳環が玄室から，ほかは少量の須恵器片および土師器片である。

ＳＴ020古墳（Fig. 33, PL. 16）

横穴式石室の古墳である。削平により盛土を完全に失い，石室も殆ど破壊されて玄室床石と腰石一部を残すばかりである。

墳丘　墳形，規模とも不明であるが，円墳と推定される。

内部主体　玄室のみの羨道をもたない横穴式石室である。主軸方位はＮ12°Ｅで傾斜の下方に向いて開口している。

石材は緑泥片岩と花崗岩で，抜き跡からみると，比較的薄い石を横長に立てて用いているようである。全体として，石材の選定に統一性がなく，雑さが目立つ。

石室規模は全長４m。玄室は長さ2.8m，幅は奥壁側1.95m，玄門側1.5mで平面形は台形と推定される。西側壁腰石の場合，その玄門際の１箇所がやや内側に入り，袖石のような観はあるが，框石はこの箇所になく，やはり玄室側壁とみてよいであろう。玄室壁面構成は，腰石で奥壁３枚，側壁３枚ないしは４枚であろう。床面には緑泥片岩および花崗岩礫が敷かれている。玄門は特に袖石を設けず，平面形でみると玄室から自然にすぼまって開口部をつくる。すなわち玄門は玄室と一体化した構成を示す。これに対し袖石にあたる石材も緑泥片岩の板石を立てて用い，一見側壁のようである。框石は花崗岩の比較的大きな石を置いている。玄門の東側は破壊されているが，幅約１mと推定される。

遺物は玄室から少量の須恵器および土師器，勾玉，切子玉が出土したにすぎない。

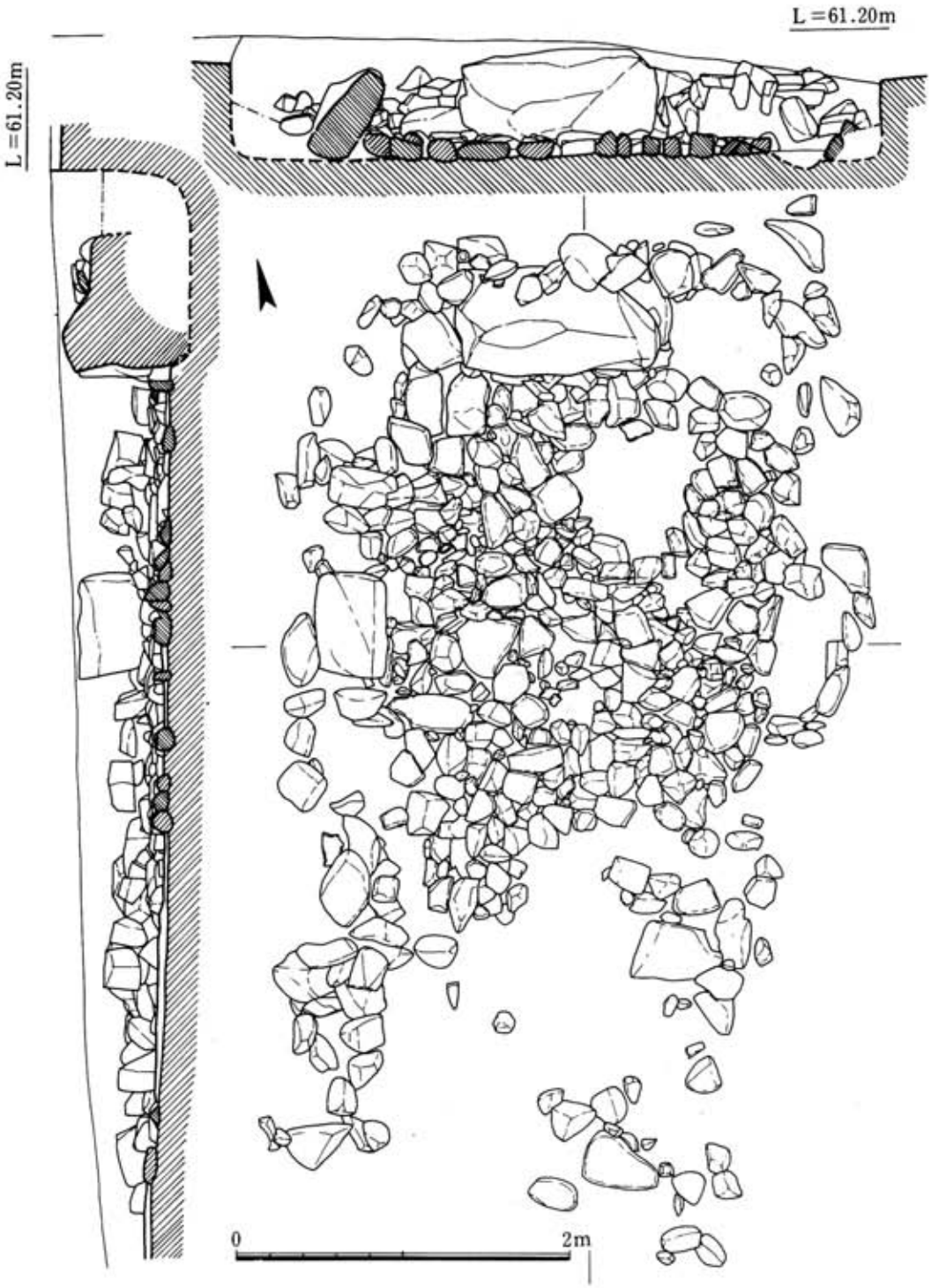


Fig. 32　ＳＴ019古墳石室実測図

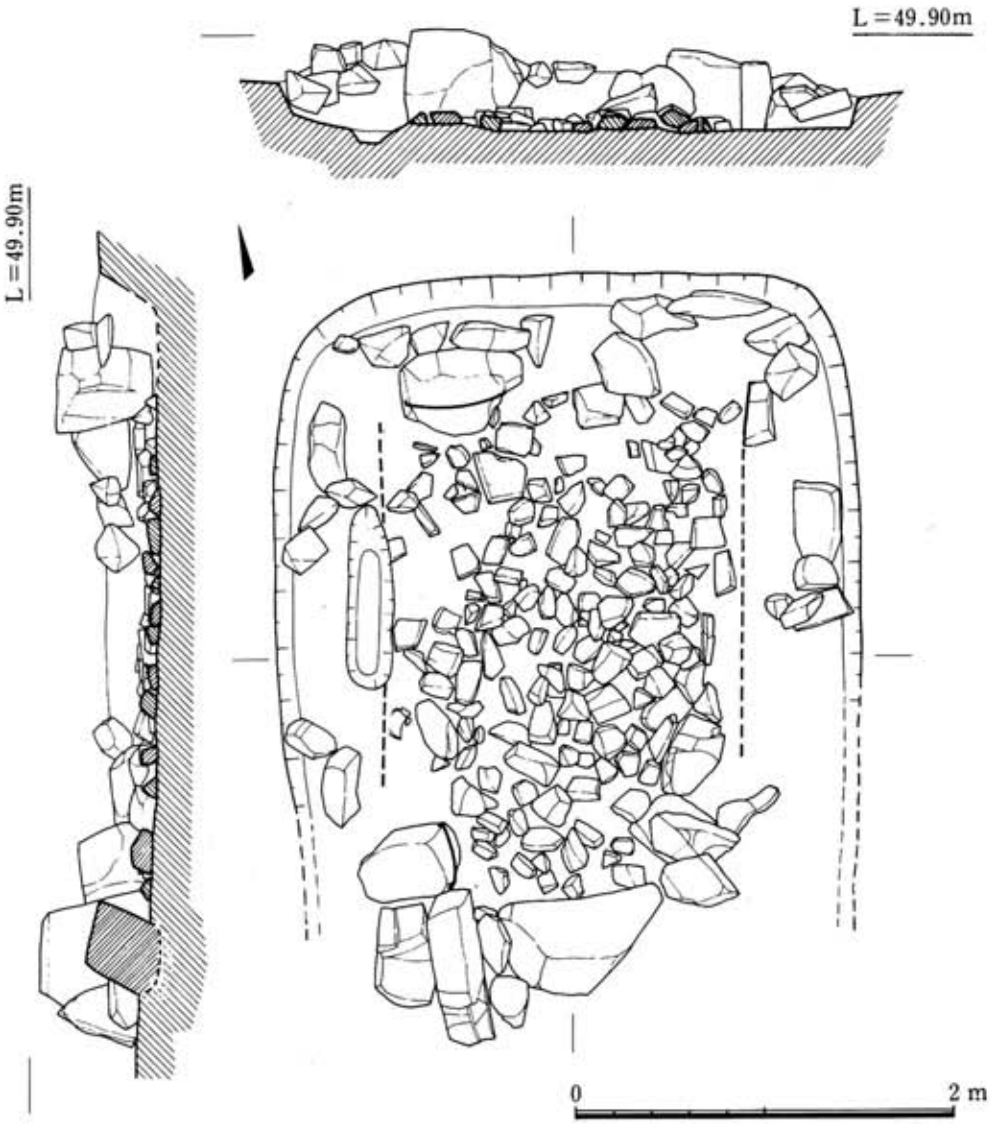


Fig. 33　ＳＴ020古墳石室実測図

ＳＴ021古墳（Fig. 34, PL. 16）

Ｄ区の古墳では最も南のはずれにある横穴式石室の古墳である。周溝のほんの一部が残存するものの，削平により盛土は完全に無く，石室も玄室の半分が腰石を残すばかりである。

墳丘　墳形は不明であるが，東側に約１ｍほど周溝が残存しており，これからは径約10ｍの小型円墳と推定される。

内部主体　横穴式石室である。ただし，奥壁と東側壁一部の腰石が残存するばかりで，全体は不明である。石室主軸はＮ13°Ｅで，斜面下方に開口している。

石材は花崗岩転石で，腰石の場合横長に立てて使用している。石材としては面は不揃いで，全体として選定，並べ方に雑さが目立つ。

石室規模は玄室が幅約2m，長さ4m＋αである。玄室の平面形は基本的に長方形であるが，奥壁は主軸に対して斜行している。玄室壁面構成は腰石でみて奥壁2枚，両側壁は各3枚と考えられる。玄室内には礫床の痕跡と思われる花崗岩礫が散らばっていた。

玄門及び羨道は完全に欠失する。

遺物は玄室残存部から，少量の須恵器および土師器が出土したにすぎない。

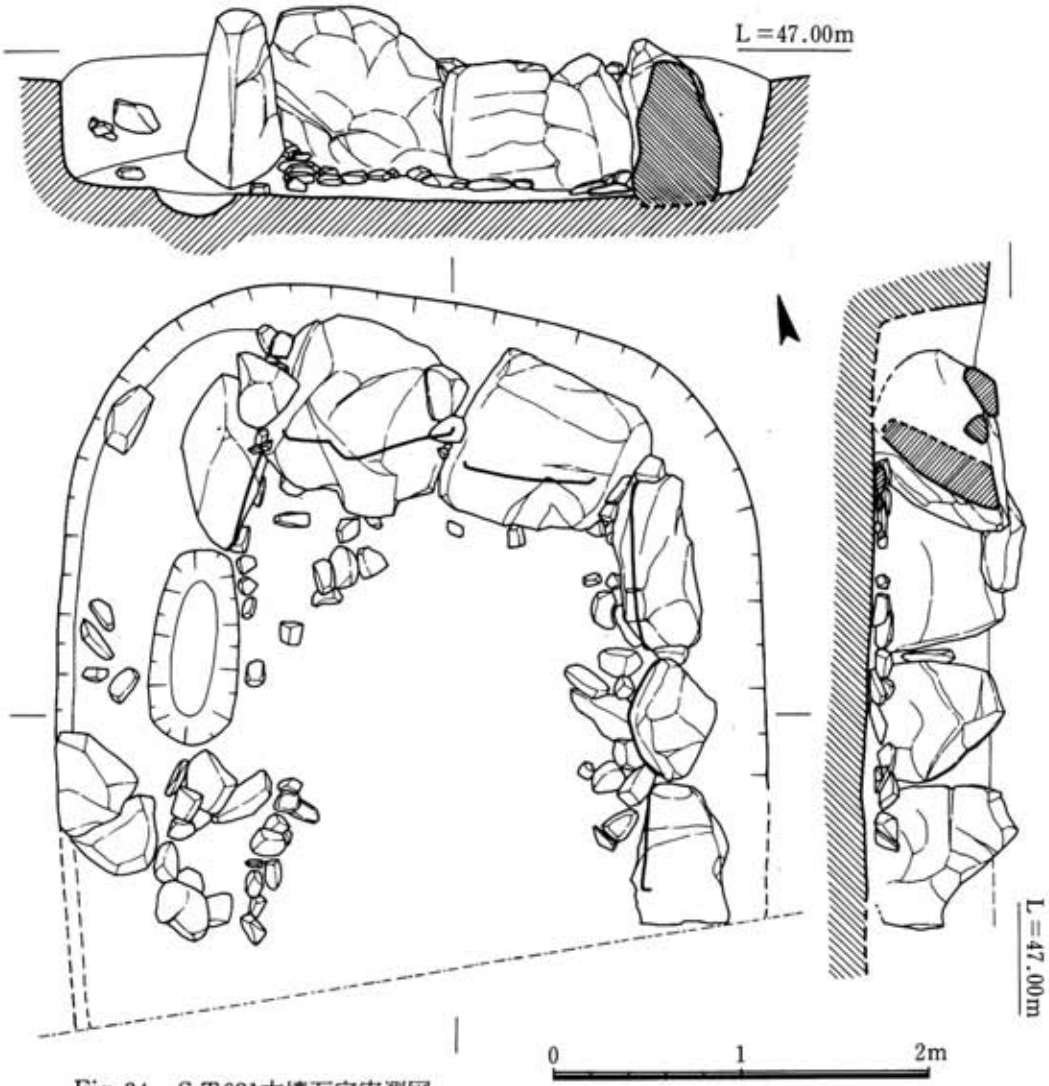


Fig. 34　ＳＴ021古墳石室実測図

ＳＣ022石棺墓（Fig. 35, PL. 17）

ＳＴ001古墳の西脇に単独で位置する組合式石棺である。蓋石は持ち去られ，棺身のみ残存する。棺身側壁は土圧でやや内傾するが，概ね残りはよい。主軸方位はN109°Eで，棺幅からみて，傾斜下方に向かう東が頭位と考えられる。

墓壙は平面形が2.65m×1.32mの隅丸長方形で，最深部0.4mである。

石棺は内法が長さ1.95m，幅は頭位側0.6m，足位側0.4m，高さは西側で0.52m，東側で0.38mと斜面上方の足方にあたると思われる西側を高くしている。壁内面には赤色顔料が塗られている。

石材は花崗岩転石と一部に緑泥片岩礫を使用，短辺各１枚，側辺は北側３枚，南側４枚で構成する。このうち頭位の東辺のみ石材を平置きするが，他は横長に立てている。また棺身の西端は壁高調整のため，西短辺と北側を２段，南側を３段まで小口積みしている。

墓壙と石棺との関係では，各石材の安定と高低調整のため，その基部の部分のみさらに壙底を掘り込んでいる。その場合，両短辺は墓壙底幅ギリギリであるが，両側辺ではまだ後に余裕がある。石棺床には格別の施設をもたず，墓壙底がそのまま石棺床面となっている。

棺内には埋土がつまったままの状態であったが，副葬品は検出されなかった。

ＳＣ023石棺墓（Fig. 36, PL18・19）

Ｄ区の南端，ＳＴ011古墳の西側に位置する組合式石棺である。ＳＣ024石棺墓と近接して並んでおり，密接な関係が考えられる。主軸方位はN108°Wで傾斜にほぼ並行しており，東側が頭位にあたる。天井石の東半分は持ち去られ，また側壁は土圧でやや内傾しているが，全体として保存良好である。

墓壙は2.3m×1.0mの隅丸長方形で，若干頭位の東側が幅広く掘られている。最深部0.25mである。

石棺は内法が長さ1.65m，幅は頭位の東側短辺0.45m，西側短辺0.4m，その中間部がくびれて0.27mとやや変則的である。深さは0.2mである。内面には赤色顔料が塗られている。

石材は頭位側壁南側で裏側の補強に１枚花崗岩を用いている以外，全て板状の緑泥片岩である。棺身は側壁に短辺各１枚，長辺は北側４枚，南側３枚をもって構成し，さらに裏側に板石をあて，補強と目づめを行っている。側壁の配石をみると，頭位に優先的に大きな石材を用いている。全体に手厚い石組みというよりは，補充材の多用のため多分にゴテゴテした感じがある。また床面には薄い安山岩系の片岩を敷いている。天井石は足方のみ４枚まで残存，本来５枚程度架せられていたであろう。緑泥片岩の板石である。天井石の上にはさらに板石ですき間を丹念にふさいでいる。目張りを用いないかわりに板石をもって補う傾向がつよい。

墓壙との関係では，壙底の下端四周を若干掘り込んで側石及び裏石を立てており，棺床石材は

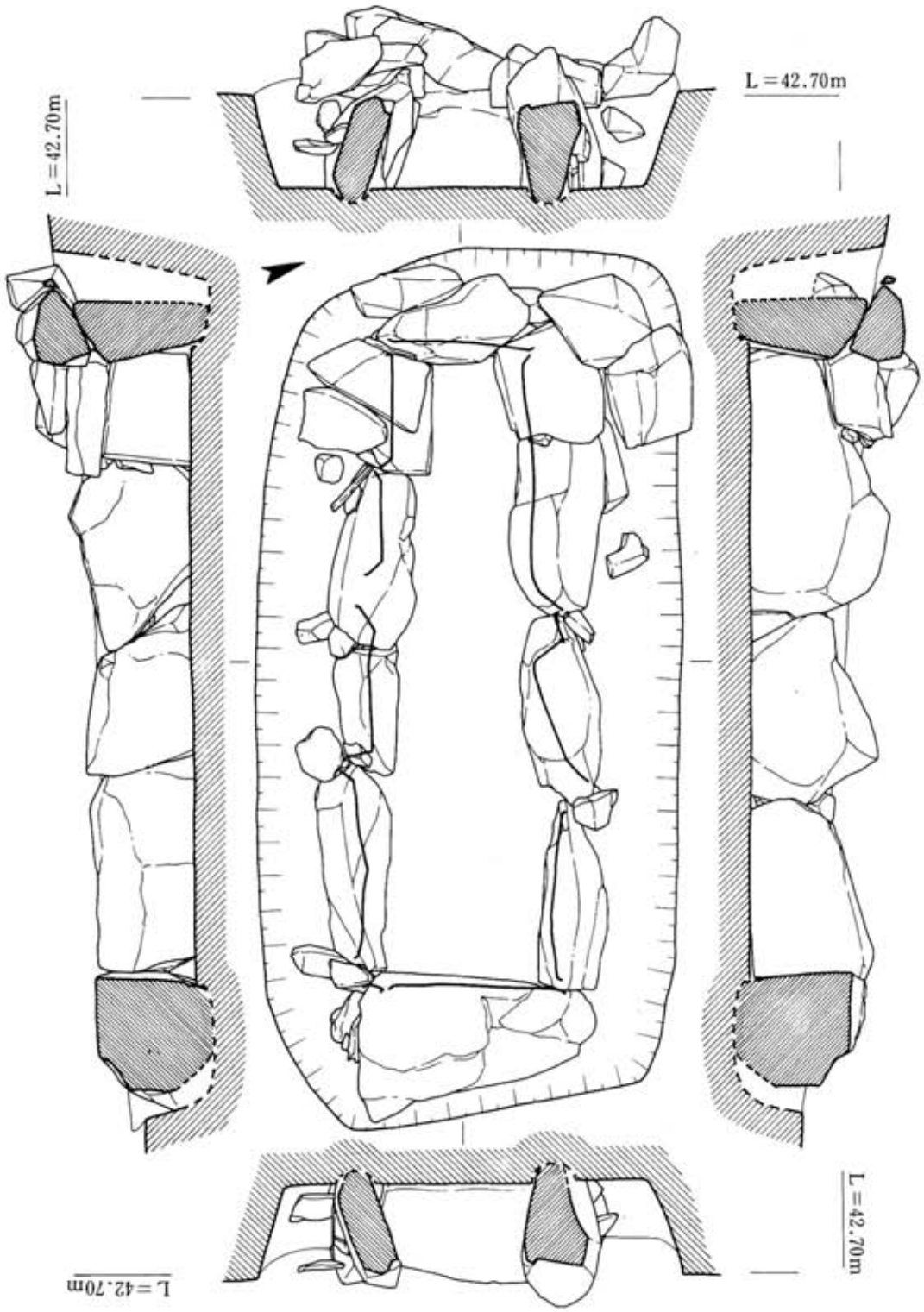


Fig. 35　S C 022石棺墓実測図

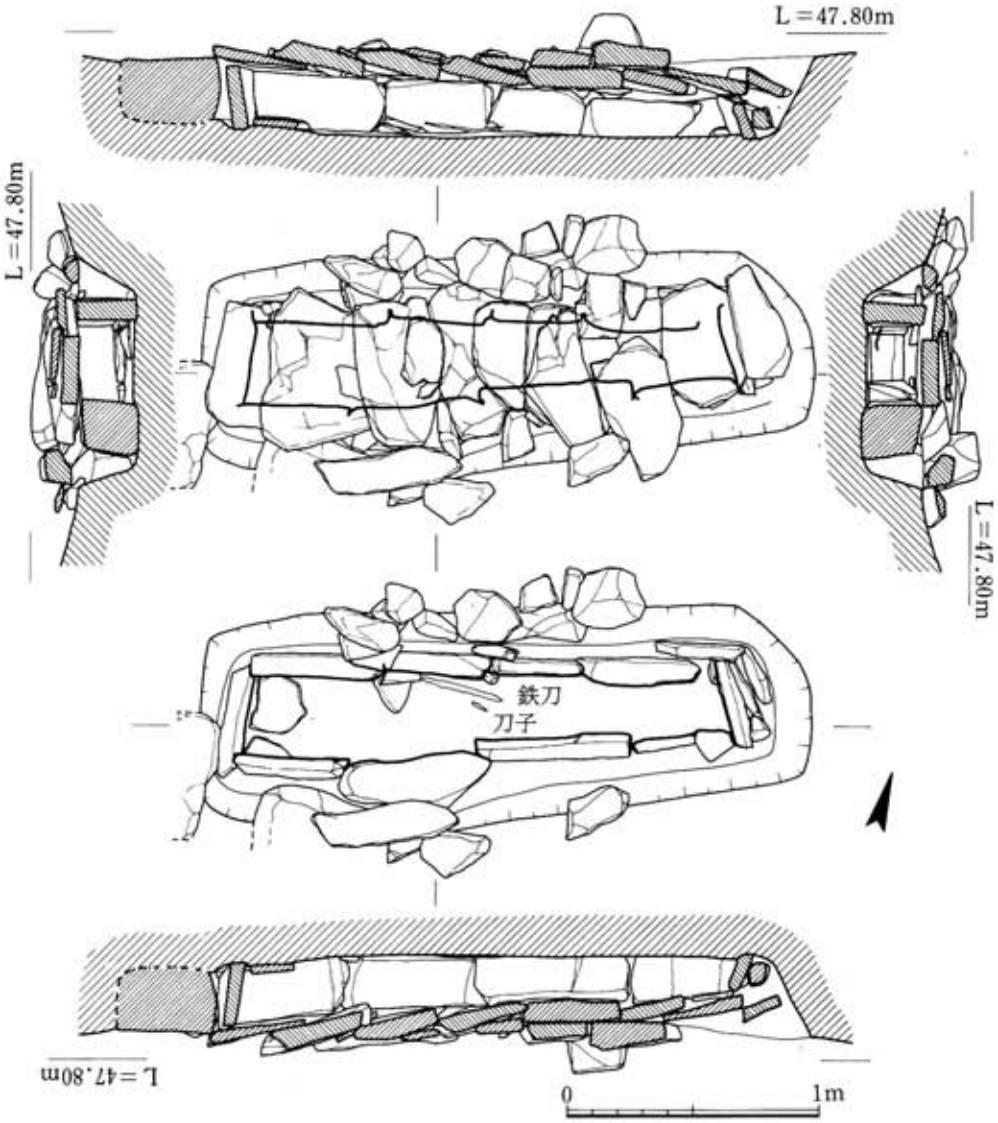


Fig. 36　ＳＣ023石棺墓実測図

直接，墓壙底にのっている。

棺内には副葬品はみられず，東側頭位に本来の位置を保って成人の頭骨が一部残存していた。風化のため性別，年齢等不明である。

ＳＣ024石棺墓（Fig. 37，PL. 18・19）

ＳＣ023石棺墓と並んでその南側に位置する。しかし主軸方位はＮ72°Ｅで，ＳＣ023石棺墓とは頭位を逆にして東におく。両者の間に切り合いはない。ＳＣ023石棺墓と比べると，床石や補強のため

の裏石はなく，全体に石組みに要領を得た簡素さが認められる反面，脆弱な感じをうける。3基の石棺中，唯一天井石まで完存していた。

石材は壁材及び天井石に主として緑泥片岩を用い，上石に花崗岩転石をのせている。南側壁に1箇用いられている花崗岩はいかにも間にあわせといった感がある。

墓壙は2.43m×0.85mの隅丸長方形ながら，頭位の東側で若干広くなる。深さは最深部で0.3mである。掘り込みでは西側で地山中の花崗岩に当たっている。

石棺は内法が長さ1.9m，幅は頭位の西短辺が0.32mで足方の東短辺が0.2m，深さは頭位で0.2m，足方でやや低くなる。全体として細長い棺身のつくりといえる。内面には赤色顔料が塗られている。

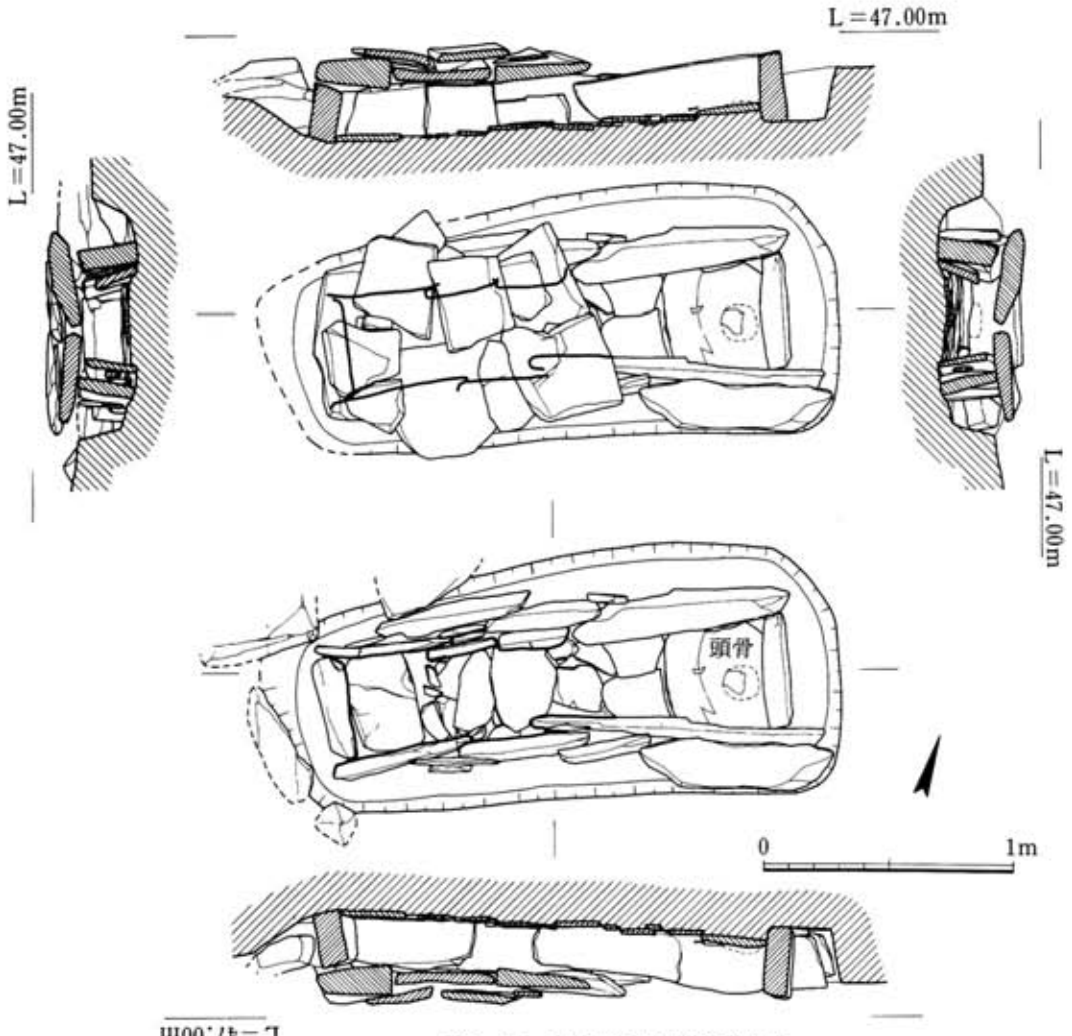


Fig. 37　S C024石棺墓実測図

棺身のつくりは両短辺各１枚，両側辺各４枚足方短辺ほか一部に補強あるいは目づめの板石を当てている。棺床は墓壙の掘形そのままを利用し，ただ頭位に板状の緑泥片岩を置いて枕をつくっている。天井石は８枚で，頭位から足方に向かって少し重ね部分をとりながら順次のせてゆき，最後の１枚は棺外にあって押えている。また，途中で重ね部分にすき間が生じたところはさらに板石をのせてこれを塞いでいる。両側辺には天井石とほぼ同じかあるいはそれより高く花崗岩の転石が比較的無造作に積まれている。

墓壙との関係では墓壙ほぼいっぱいに石棺が造られ，その壙底の四周下端をやや掘り込んで側石を立てている。

人骨は残存していなかったが，床一面に赤色顔料の散布がみられた。副葬品は鉄剣１本と刀子１本が鋒を足方に向けて，北側壁下に置かれていた。

ＳＢ025住居跡（Fig. 38，PL. 20）

ＳＢ025住居跡はＢ区の北部中央に位置し，隣接してＳＴ 005・008古墳等がある。平面形が長方形の竪穴住居跡である。東西4.34m，南北3.16m，壁高0.19mで，壁際には幅0.2m，深さ0.1m程度の溝を有する。

北西隅から南壁中央にかけてＳＴ005古墳の周溝，北東隅を同古墳主体部掘り込みによりそれぞ

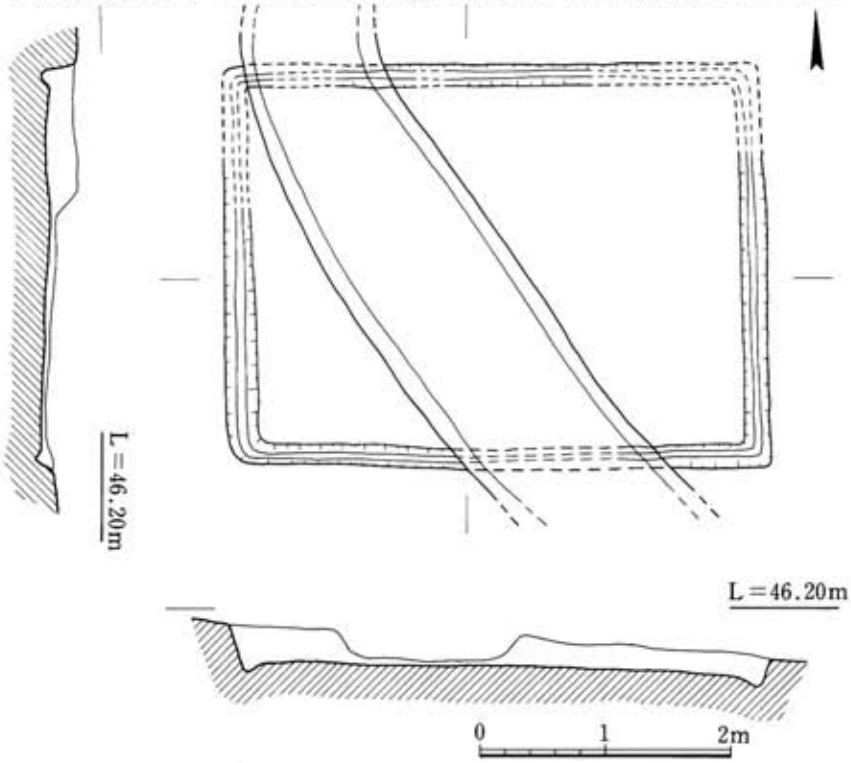


Fig. 38　ＳＢ025住居跡実測図

れ切られていて，残存状況はあまり良くない。床面は淡褐色の比較的柔らかな地山に掘り込まれ，おおむね平坦である。柱穴，炉跡等は全く確認できなかった。

埋土は二層に大別でき，黒褐色土層，淡褐色土層よりなり，若干の土器片を検出した。

ＳＢ026住居跡（Fig. 39, PL. 20）

平面形が長方形の竪穴住居跡である。東西5.0m，南北4.3m，壁高0.2mである。他の遺構との切り合い関係はないが，ＳＢ027住居跡と同様に後世の造成行為により壁が削平されているものと考える。遺構は淡黄褐色のやや砂混りの地山に掘り込まれ，中央部はわずかに低くなっている。床面には北壁中央付近と南壁西寄りに長さ１m程度の自然石を検出した。双方とも花崗岩質のものである。その他掘込みを北壁寄りと東壁で検出した。前者は柱穴にしてはあまりに浅くそ

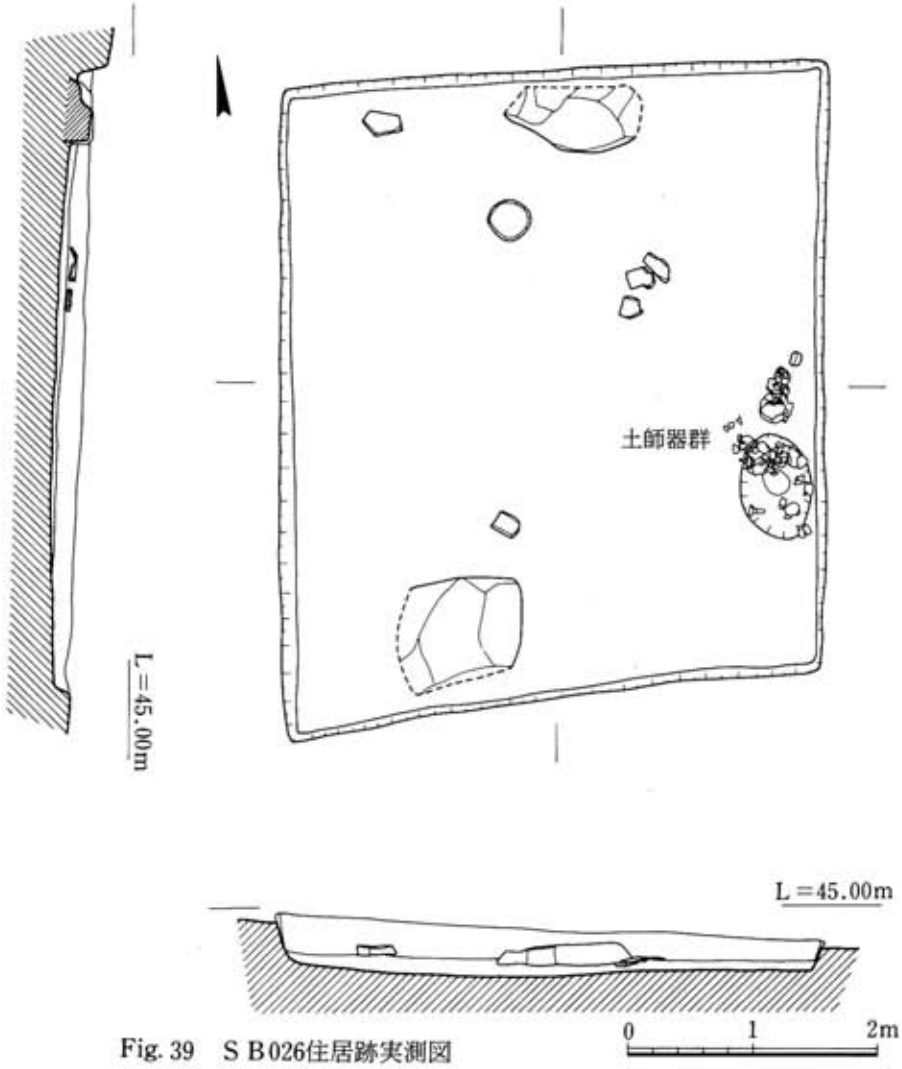


Fig. 39　ＳＢ026住居跡実測図

の用を足さず，またそれと対応する掘形もない。後者は長径約0.8m程度，床面からの深さ約0.1mで，その付近から土器を多数検出したことから貯蔵穴的性格を有するものと考える。炉跡，壁溝は全く検出できなかった。

遺物としては先述の貯蔵穴的性格の掘り込み付近の床面上で甕・鉢・高杯等多数検出した。

ＳＢ027住居跡（Fig. 40，PL. 21）

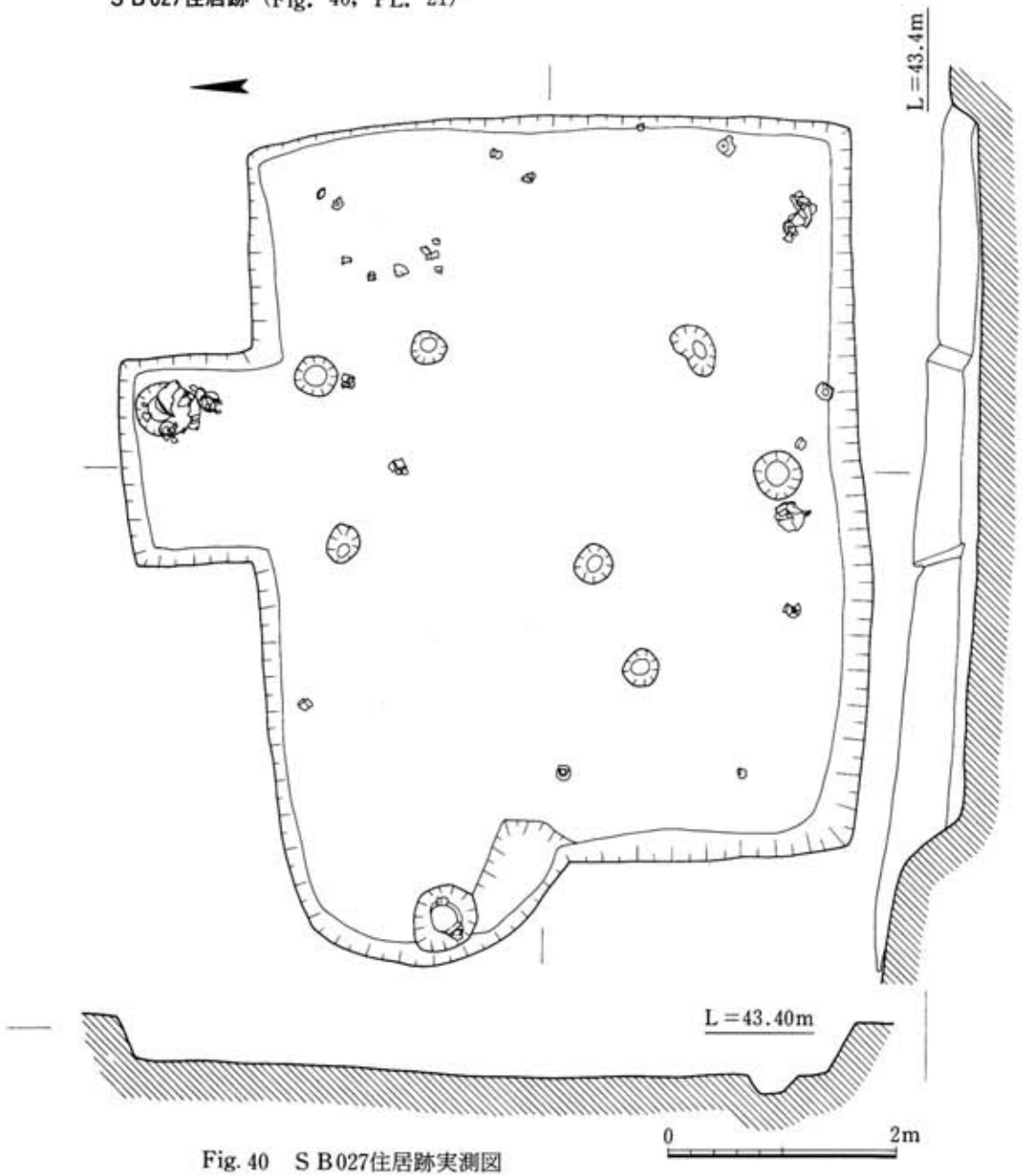


Fig. 40　ＳＢ027住居跡実測図

基本的には平面が長方形の竪穴住居跡である。南北約5.3m，東西6.5m，壁高0.4mで，当遺跡検出の住居跡の中で最も良好な残存状況で検出した。床面は砂混りの硬い淡褐色を呈する地山に掘り込まれ，壁は比較的角度をもって立ち上がる。北壁のほぼ中央付近と西壁の北端にはそれぞれ造り出しが設けられており，前者が南北約1.2m，東西約1.8mを計る方形のものに対して後者は西壁延長線から最長部において約0.8mほど西方に弧状に突出する。双方とも径約0.5m程度の掘り込みをその中に有する。掘形は床面上で合計9個検出したがはっきり柱穴に想定できるものはない。また，床面北西部に長さ約1.0m，幅約0.6m程度の自然石を検出したが，何らかの行為に使用したと思われるような痕跡はなかった。

遺物は床面より壺・甕・小形丸底坩等多数検出した。ことに北と西の両造り出し部それぞれの掘り込み中から，甕と共に，高杯，小形丸底坩，手捏土器など祭祀的性格のつよい土器類が出土したことが注意される。その他，土器は壁際で比較的まとまって検出された。

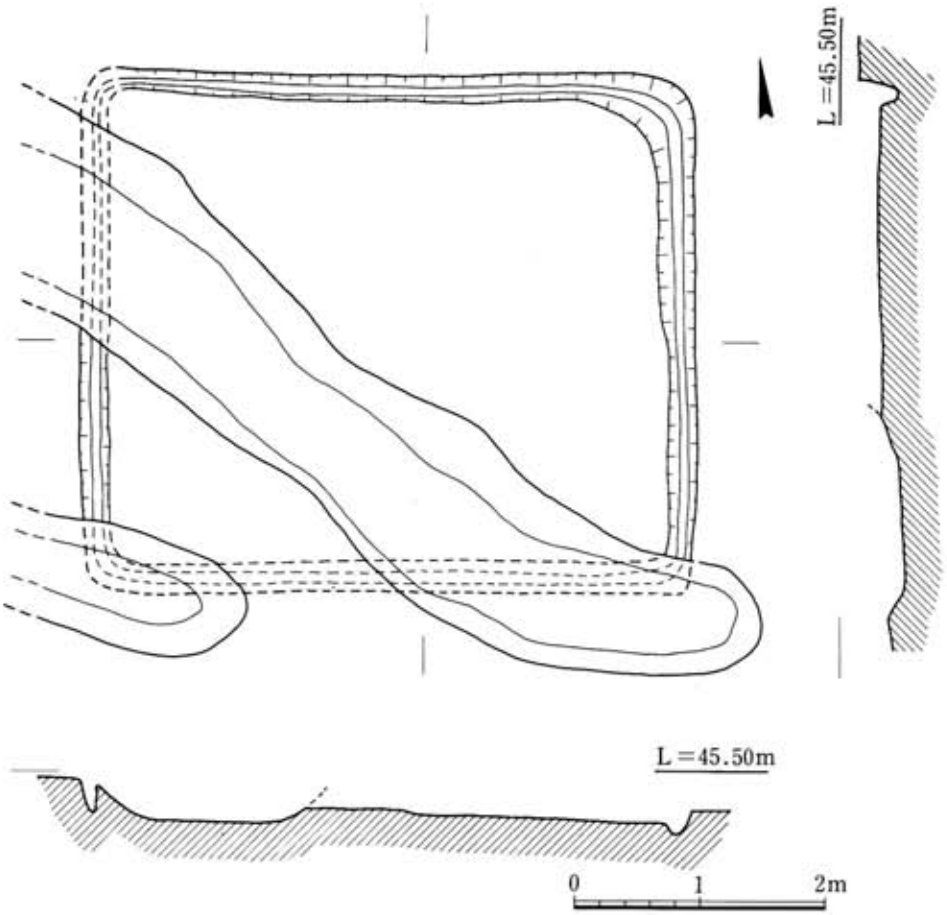


Fig. 41　ＳＢ028住居跡実測図

ＳＢ028住居跡（Fig. 41, PL. 22）

平面は長方形の竪穴式住居跡である。南北4.1m，東西4.9m，壁高0.16mを計る。西壁北端と南壁東端をＳＴ003古墳の周溝，西壁南端をＳＴ005古墳の周溝によりそれぞれ切られており，残存状態は良くない。また壁高も低いので後世の削平があったものと考える。遺構は淡黄褐色の比較的やわらかな地山に掘り込まれ床面はおおむね平坦で，壁は角度をもって立ち上がる。壁溝は上面幅で約0.25m，北・東・西壁では確認できたが，南壁では検出できなかった。深さは平均して床面より0.1m程度である。遺物は埋土中より数点の土師器杯片を検出したにすぎない。

なお，このＳＢ028住居跡の東方にはＳＢ029住居跡がある。方形でその西北隅のみ残存していた（PL. 22）。

ＳＫ030竪穴（Fig. 42, PL. 22）

Ｂ区のほぼ中央に位置する。平面は基本的には長方形の竪穴で，東西2.15m，南北2.45m，壁高約0.15m程度で南西部に西壁推定線より約0.3m西に突出した造り出し部分をもつ。北西隅と南西隅造り出し部分を後世に破壊されているが，残存状況は比較的良好である。床面はおおむね平坦，淡褐色砂混りの地山に掘り込まれている。南壁東寄りには径0.25m，深さ0.2m程度の掘形を検出したが，それに対応して柱穴と想定できる掘形は確認できなかった。

遺物は床面より甕・椀が出土した。

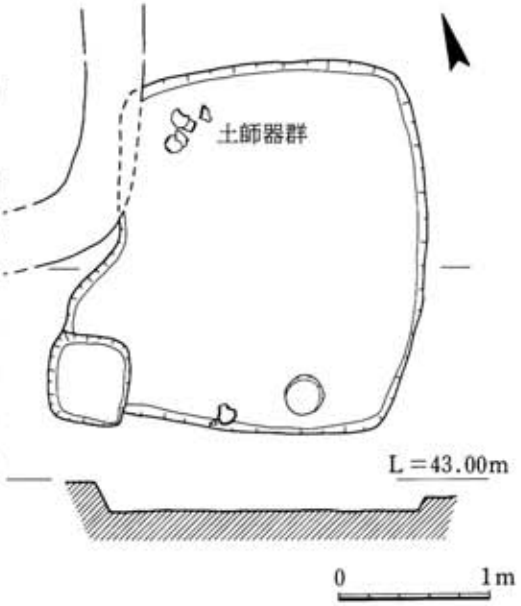


Fig. 42　ＳＫ030竪穴実測図

ＳＪ033壺棺墓（Fig. 43, PL. 24）

調査区の南部西寄りに位置し，ＳＴ006古墳の墓道に，その墓壙の東側を切られている。墓壙平面形は円形で，径は南北主軸で測って1.05m。深さは，上部を削られて約0.4m残る。墓壙底部は壺棺の口縁部にあたる北側をさらに0.1mほど掘りくぼめている。

壺棺には二重口縁の大型壺を使用し，北に口縁部を向けてほぼ水平に横たえている。壙底と壺との間には黒色土が約８cmほどつまっていた。注意されるのは，これに伴出した土師器で，壺１，甕３，丸底坩１，椀１を数える。出土状況は壺棺本体の周囲基部を固定させるかのように，大部分が割られた状態で敷かれていた。ただし，そのうち壺棺本体の口縁部下に潜り込むように置かれてあった二重口縁壺１点が胴部に穿孔をもっていることからすれば，これらの土器は単に棺を固定させるために利用されたとは思われない。供献の意味を兼ねたものであろう。

(3) 歴 史 時 代

中世から近世にかけての陶磁器片は少量出土したが，明確な遺構はB区のＳＪ 034中世墓だけであった。

ＳＪ034中世墓

(Fig. 44, PL. 23)

B区の南側，ＳＴ002古墳の東脇にある。大型の堀り込みから大型の鉢と椀，皿が出土しており，鉢を用いた埋葬遺構と考えられる。

墓壙は上部を削られているため規模がはっきりしないが，径約1.7mの円形で，深さは0.3m程度残存する。掘形としては壁の立ち上がりが緩やかである。

鉢は壙底と約6cm間層をおいて据えられ，小型の椀，皿9枚を伏せるようにしてこれを覆っていた。

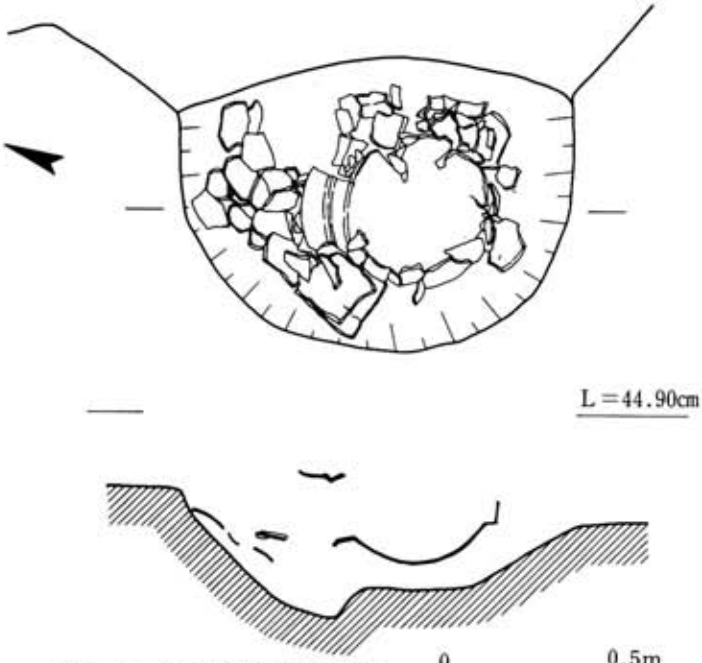


Fig. 43　ＳＪ033壺棺墓実測図

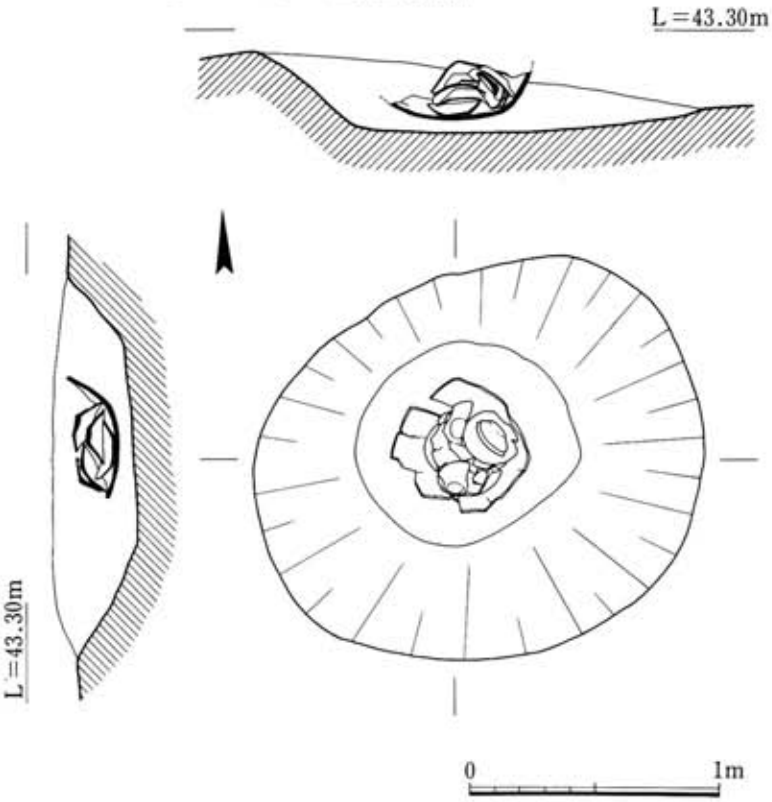


Fig. 44　ＳＪ034中世墓実測図

3．遺　　物

(1) 旧石器時代

すべて遺構検出中に出土したものである。ナイフ形石器と石核，その他剥片があるが，量は少ない。石材は黒曜石，サヌカイト，チャート各種がある。(Fig. 45, PL. 25)。

ナイフ形石器　1及び2は黒曜石製のナイフ形石器である。1は左側縁が主に裏面から，右側縁は裏面のみからプランティングを施している。基部は裏面にも薄い剥離調整が施されている。2は基端に自然面の打面をもち，左側縁下部に裏面からプランティングを施している。表，裏面の稜線はかなり摩滅しており，裏面には多数の削痕が走っている。

石核　3，4，5は黒曜石，サヌカイト，チャート製の石核である。3は3回以上の打面調整がみられ，下端は自然面となっている。4は基端に調整打面を持ち残核に近い。側面の剥離は石刃の調整を目的としたものと思われるが，それ以前の剥片剥離面とも考えられる。5は表面及び裏面から加撃され不定形剥片を剥離している。3，4とは異なり以前の剥片剥離面を利用して打面としている。

剥片　6は比較的大型の縦長剥片で表面に自然面を残している。

(2) 縄文時代

土器は甕棺に使用されたＳＪ031とＳＪ032の甕2点のほか，晩期の甕破片が少量，石器は刃器と石鏃が出土している。甕棺の2点以外，明らかな遺構に伴うものはない。

土器（Fig. 46, PL. 26）

9はＳＪ031甕棺。胴部は中位やや上に最大径をおいてゆるやかに体部がたちあがり，底部は外側周囲に粘土を巻いて小さめの平底をつくっている。口縁部は胴部から「く」字形に折れて直線的に開き，口唇部をナデて丸くしている。調整は内外面ともヨコ方向の条痕を残すが，外面はかるくナデ仕上げ，内面はほとんど条痕がみえないくらい丁寧にナデられている。全体にやや赤味のある褐色で，外面には部分的に煤の付着がみられる。粗砂粒を多く含む。口径40.1cm，器高48.3cmと大型である。もう1点のＳＪ032甕棺は底部と口縁部を欠くが，ほぼこれと同様の形態，特徴をもつ。ただし，器高約37cm前後でやや小型である。

10はＢ区検出面出土のもの。底部は不明であるが，胴部は途中で「く」字形に折れ，口縁部も2段に折れてたちあがる。調整は胴部下半がヨコ条痕，胴部上半から口縁部にかけてはヨコ条痕のあと比較的丁寧なヨコナデ，ただし口縁部外面のみはかるくナデ粗い条痕をよく残している。茶褐色で両面とも黒斑があり，粗砂粒を多く含む。口径39.8cm。

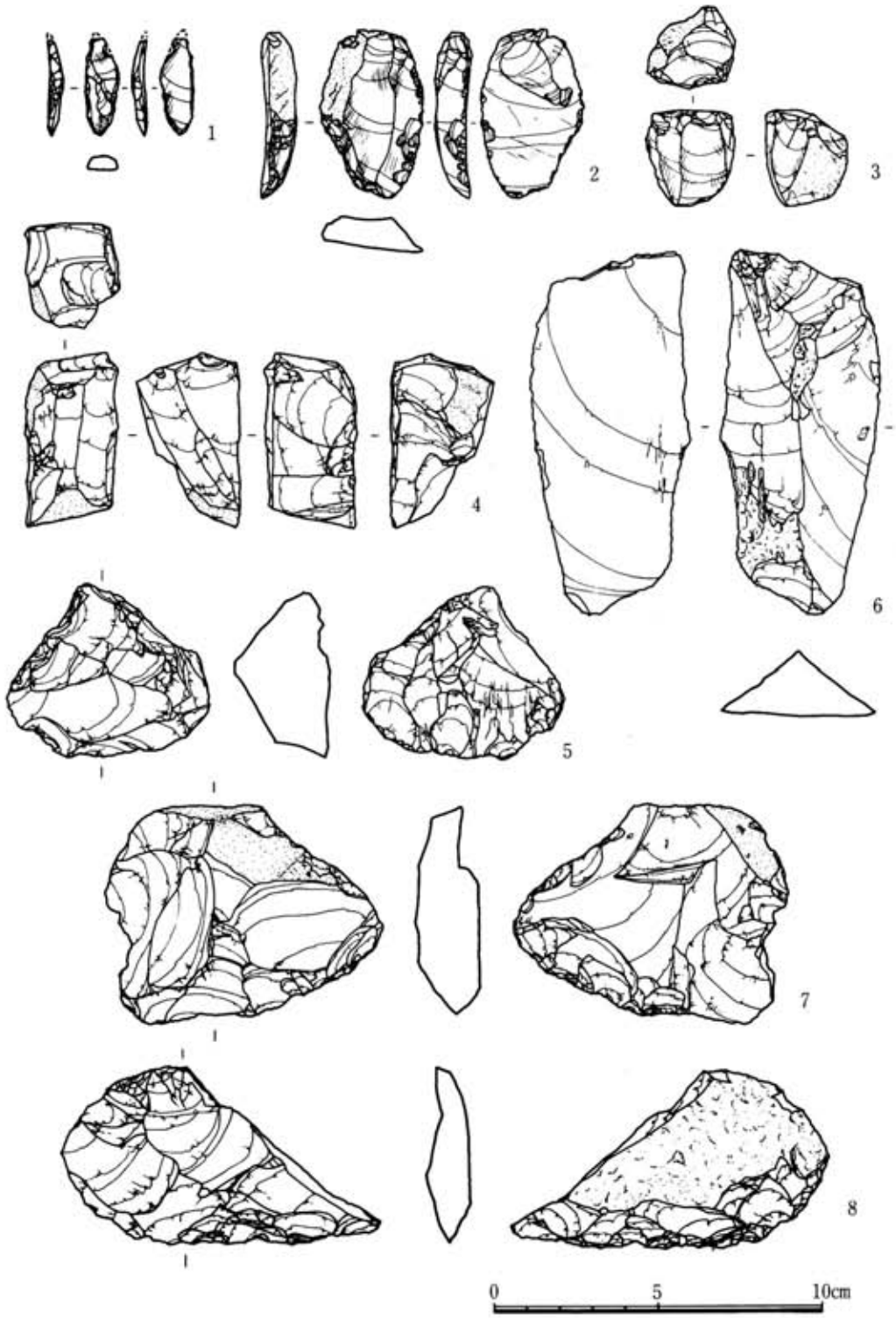


Fig. 45　石器実測図(1)

9，10の時期は共に縄文晩期前半であるが，10により古い要素を認めうる。

土器はほかに夜臼式の甕片などが出土している。

石器（Fig.47～50，PL.25）

刃器　7，8，11，12，14はサヌカイト製の削器。13はサヌカイト製の掻器である。7は上部に自然面を残し，器表は粗い剥離面で凹凸がはげしい。下端には細かい剥離調整を施しているが，未製品と考えられる。8は表，裏面から細かい剥離調整を施し刃部を成形しているが，裏面には広く自然面を残している。11は自然面を打面としており，打瘤の一部を除去している。左右の突出した部分は錐として利用された可能性もある。12は器表に粗い剥離調整が残り，

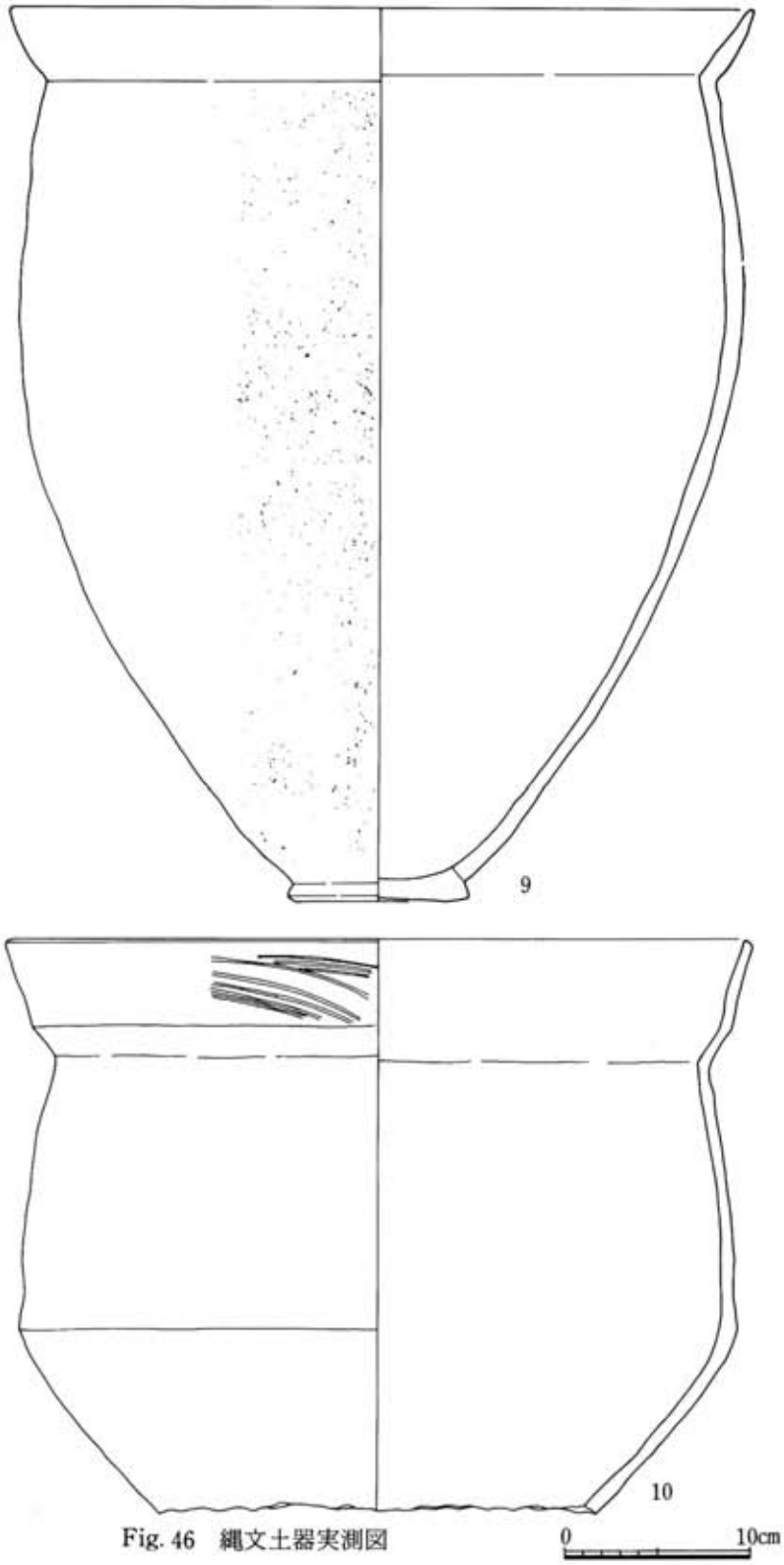


Fig. 46　縄文土器実測図

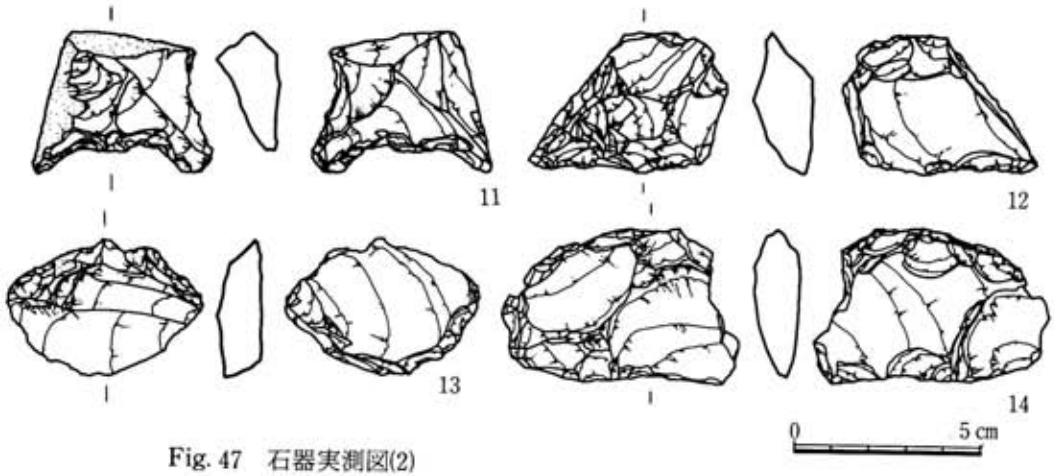


Fig. 47　石器実測図(2)

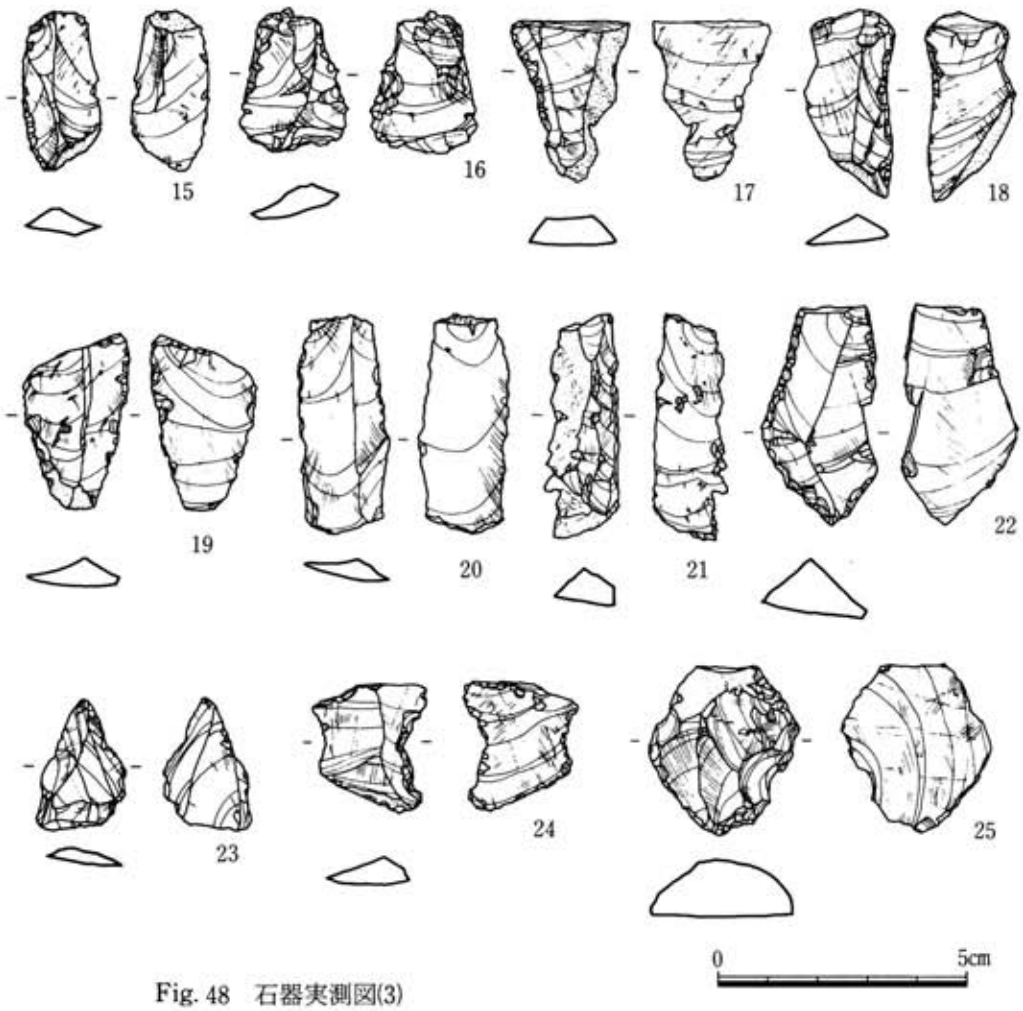


Fig. 48　石器実測図(3)

左側縁には加撃のためのつぶれがみられる。製作途中で放棄されたものと考えられる。13は上下縁辺にそれぞれ片面のみから厚形の剥離調整が施され刃部を形成している。14は両面からの粗い剥離で器形を成形した後，上下縁辺に細かい剥離調整を施している。打撃痕が多く残っており製作途中と考えられる。

15～19，21～25は黒曜石製，20はサヌカイト製の刃器類である。15は自然面を打面としており裏面には厚い打瘤を残している。16は打瘤を除去しており，下端は折損している。17は打面部分が折り取られ，右縁辺には自然面を残す。左側縁には使用痕がみられる。18も打面部分が折り取られる。右側縁には使用痕がみられ，それに対応した削痕が裏面に観察される。19は白濁した不純物を含み先端部に自然面を残す。20はサヌカイト製の石刃である。打面及び先端に自然面をもち，両側縁には使用痕がみられる。21は白濁した不純物を含む剥片で表面に自然面を残す。打面は自然面を利用している。22の削器は一部に自然面を残すが，左右縁辺及び先端部に細かい剥離調整を施している。打面部分は折り取られている。23の剥片は北端部がかなり摩滅しており，錐として利用されたと考えられる。24は打面部分が折り取られている削器で左右縁辺に細かい剥離がみられ，それに対応する削痕が裏面に観察される。25は打面部分を中心に厚形の剥離調整が施されており掻器と考えられる。上部に自然面を残している。

石鏃　西原遺跡で出土した石鏃は20点で，形態分類が可能なものは16点である。基部形態によって平基A，凹基Bに二分できる。

A．基部の抉りが無く二等辺三角形を呈するもの（26～30），基部が丸味を帯びるもの（31），基部の抉りが弓状に浅く入るもの（32～38）の三種類がある。いずれも表，裏面からの細かい剥離によって成形されている。28は長さが幅の2倍以上あり，33は鋸歯状の側縁をもち，35は表裏に一次剥離面を残している。黒曜石製のもの（26，30，31，37）が4点，サヌイカイト製のもの（27，28，29，32，33，34，35，36，38）が8点である。

B．基部の抉りが深く明確な脚部をもつものである。脚部の先端が尖るもの（39，40）と丸味をもつもの（41）があり，剥離は丁寧で細かく施されている。黒曜石製（41）が1点でサヌカイト製（39，40）が2点である。

その他に基部形態が不明であるもの（42～45）がある。45は未製品であると考えられる。黒曜石製（42）が1点，サヌカイト製（43～45）が3点である。

磨製石斧46は剥離調整が表，裏面，基部及び側面に残っており，粗い剥離による成形後に研磨を施している。両側面は丸く研磨されているが，基端は剥離面のままで研磨は施されていない。刃部は片刃に近い形態をもつ。蛇紋岩製である。

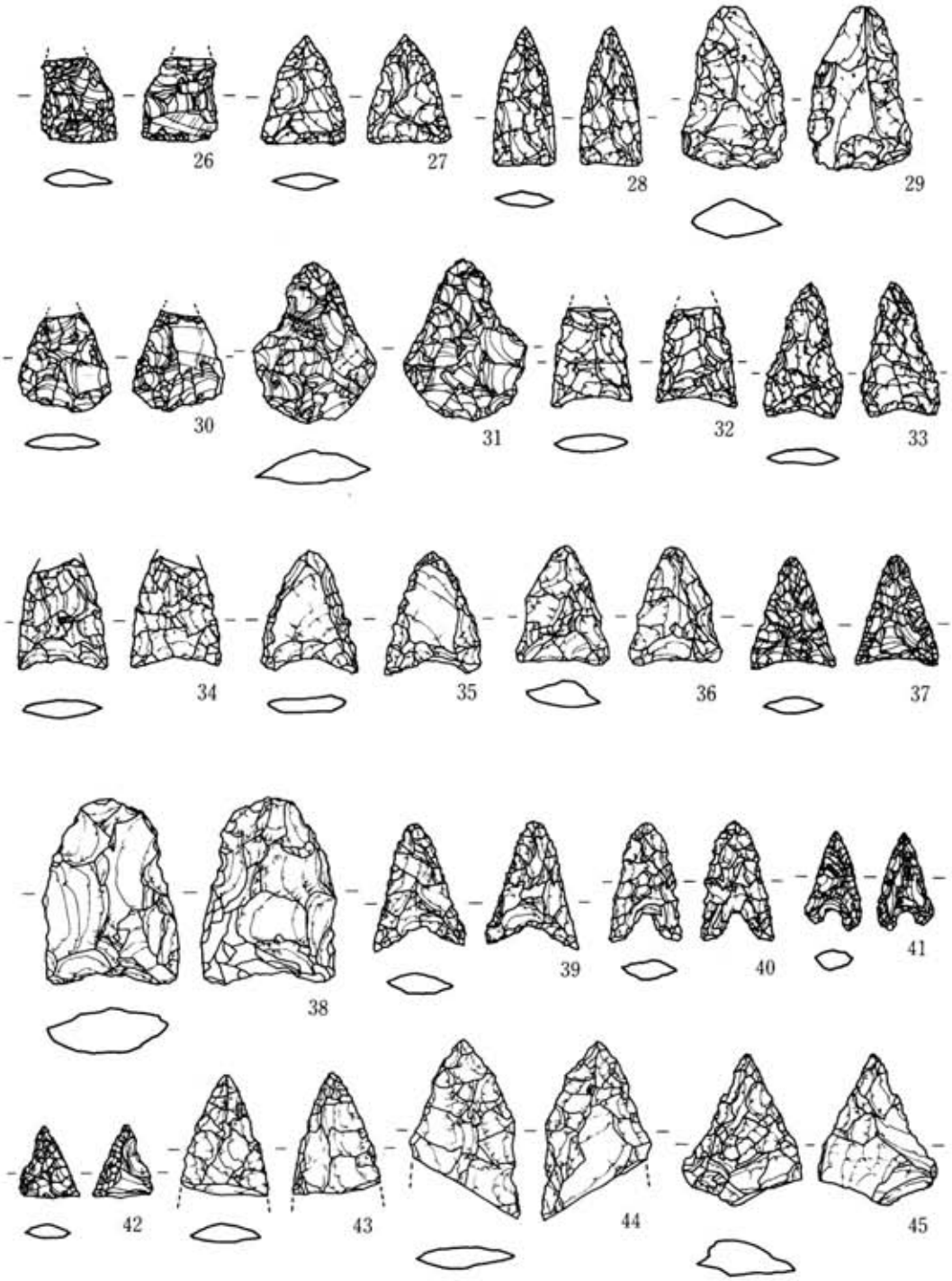


Fig. 49 石鏃実測図 (4)

0 5cm

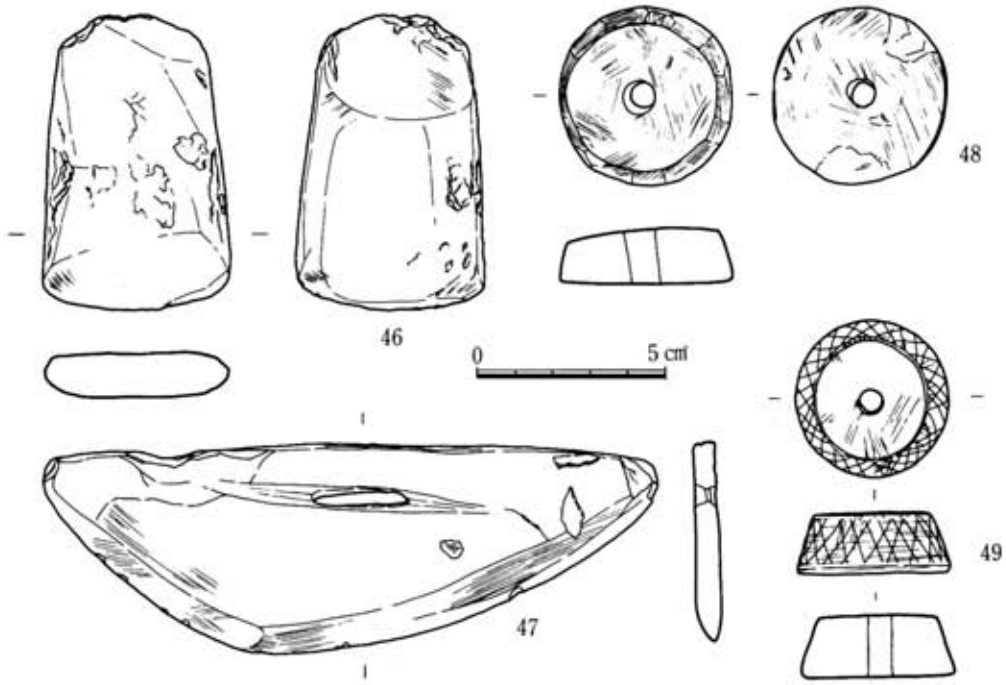


Fig. 50　磨製石器、紡錘車実測図

(3) 弥 生 時 代

土器ははっきり弥生時代といえるものは出土せず，石器で石庖丁1点だけがある（Fig. 50, PL. 25）。

47は凝灰岩製の石庖丁で，背面及び刃部左右に成形のための剝離が残っている。ほぼ中央には両面から擦り切って孔をあけており，刃部は片刃にちかい特異な形態をもつ。擦り切り孔の石庖丁は県下ではほかに唐津市菜畑遺跡で出土している。

(4) 古 墳 時 代

須恵器，土師器，鉄器および耳環・玉類等の装身具が出土した。土器類のうち9割方は須恵器で，主に古墳出土である。土師器は古墳出土品も少量あるが，大部分は住居跡出土である。鉄器及び装身具類はすべて古墳出土で，数は少ない。

遺構の遺存状況があまり良くなかったため，個々の遺構の本来の遺物組成を把えるのはなかなか困難である。遺構数のわりには，ＳＴ012・ＳＴ014古墳の須恵器，ＳＢ026およびＳＢ027住居跡の土師器が量的にまとまっている程度である。

以下，古墳，石棺墓，住居跡，壺棺墓の順で遺構ごとに出土遺物の概要を述べるが，そのうち主体を占める古墳出土の須恵器，特に普遍的な蓋・杯についてあらかじめ分類し，その概要を示しておく。他の須恵器の器種については必要に応じて分類し，蓋・杯との関係で時期を述べるにとどめる。なお，土師器については点数が全体に少ないうえ，時期的な遍在があるので，特に統一的な分類は行わない。

〔須恵器蓋・杯の分類〕(Fig. 51)

蓋

体部が長く天井部と明瞭に区別されるものＡ，体部と天井部との区別が不明瞭で一体化したものＢ，端部内面にかえりが付くものＣ，まず以上３類に大別する。さらに各類は法量の違いによりＩ・II…に分け，また細かな形態上の特徴によってａ，ｂ，ｃ…に細分する。

Ａａ類　やや丸味をおびた天井部と長く垂直気味にのびた口縁部をもつ。口唇部はナデて内側に段がつく。天井部はていねいなヘラケズリで，全体にシャープである。径13cm前後である。

Ａｂ類　Ａａに類するが，天井部と口縁部の区別がほぼ沈線にちかく，全体にややシャープさを失っている。

Ａｃ類　Ａｂに比べると口縁部がやや短くなり，また稜はかすかに残る程度で，口唇部等にシャープさを失う。

ＢＩａ類　天井部がやや丸味をおびて口縁部につづき，その区別を沈線で処理するが，口縁部はやや外方に直線的にのびる。口唇部は内側に段をもっている。天井部ヘラケズリはまだ比較的ていねいである。径14cm前後で大型である。

ＢＩｂ類　天井部から口縁部にかけてほぼ一体化し，かつての稜はナデてかすかにその痕跡をとどめる程度となる。口唇部は内側に段がある。天井部ヘラケズリはやや雑になる。ただし器高はまだ高い。径14cm前後で大型である。

ＢＩｃ類　天井部と口縁部との間の沈線が消え，特に区別はなくなるが，平坦な天井部からゆるやかな丸味をもって口縁部がやや外方に直線的にのび，口唇部は内側に段をもつ。天井部の平坦ちかくはヘラケズリである。径は14cm前後で大型品が多い。

ＢＩｄ類　ＢＩｃに類するが，口縁端部は短く垂直気味にのびる。口唇部内側に段をもたないものがみられる。径は13cm前後である。

ＢＩＩａ類　天井部が平坦面を失いかけ，ゆるやかに下って短く折れた口縁端部につづく。口唇部内側には段をもたない。頂部付近のみヘラケズリである。径は12cm前後が多く小型化する。

ＢＩＩｂ類　ＢＩＩａに類するが，ヘラケズリおよびナデが粗雑なものが多く，全体にていねいさを失う。径は10cm前後で小型化する。

ＣＩａ類　宝珠形つまみで，短いかえりをもつ。径15cm前後である。

ＣＩｂ類　宝珠形つまみは低くつぶれ，端部のかえりはほとんど消えかけて，痕跡程度残る。径15cm前後である。

ＣＩＩａ類　天井部につまみをもたず，短いかえりをもつ。径は10cm前後である。

ＣＩＩｂ類　宝珠形つまみをもち，短いかえりをもつ。径は10cm前後である。

ＣＩＩｃ類　宝珠形つまみをもち，長いかえりをもつ。径は10cm前後である。

杯

底部がわりと平坦で，立ち上がりがやや内傾しつつ長くのびるものＡ，底部が丸底気味となり，内傾がつよく短い立ち上がりをもつものＢ，立ち上がりを失い，底に高台がつくものＣ，以上３類に大別する。さらに法量によってＩ・ＩＩ…，また細かな形態の特徴によってａ，ｂ，ｃ…に細分する。

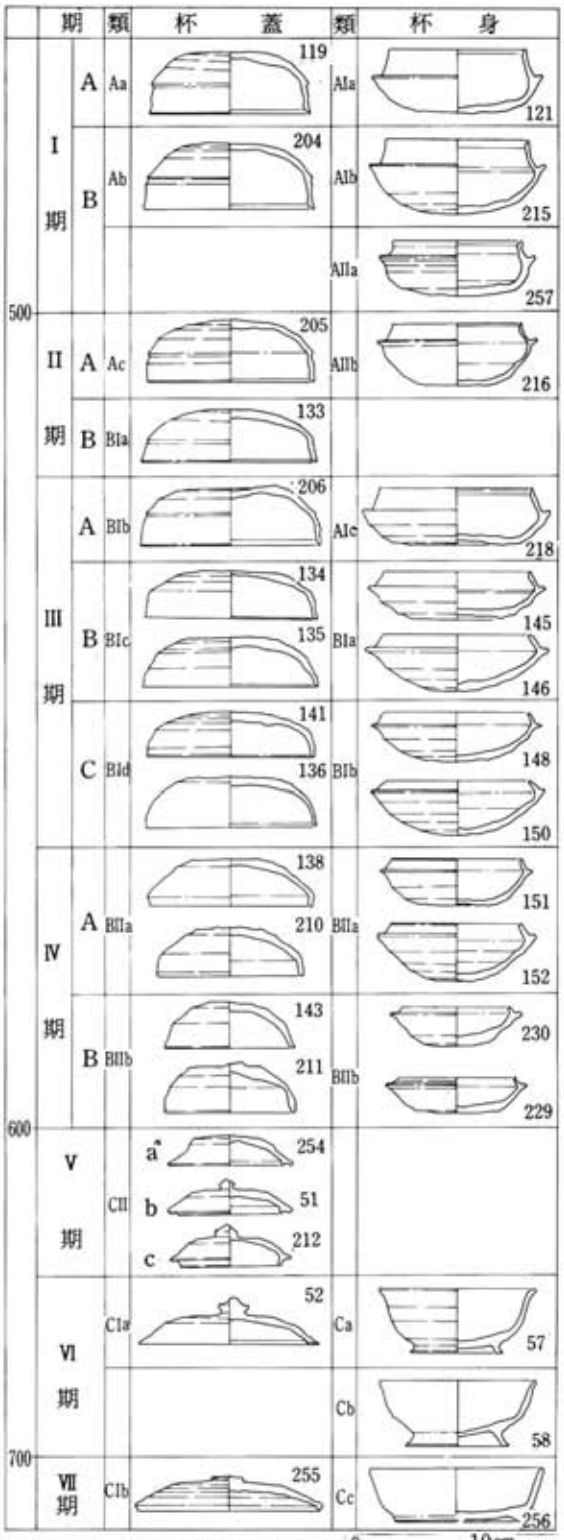


Fig. 51　須恵器蓋・杯分類表

ＡＩａ類　底部が平坦で，体部は内傾しながら直線的に長くのびる。受部は横につまみ出し，口唇部はナデて仕上げ鋭い稜をもつ。また，内面でみると体部と立ち上がりとの接合は粘土を足して段を消している。底部はヘラケズリ，体部から上をナデて仕上げる。口径11cm前後で，全体にふっくらしている。

ＡＩｂ類　底部から体部にかけてやや丸味をもち，立ち上がりが外反気味に長い。口唇部はナデて内側に段をもつ。受部はいくぶん斜め上方につまみ出される。体部と立ち上がりとの接合部は内面で段をのこす。底部から体部下半までヘラケズリが及ぶ。口径11cm前後で，全体にふっくらしている。

ＡＩｃ類　平坦な底部とやや内傾して直線的にのびる立ち上がりをもつ。口唇部内側に段を有し，受部は体部からつづいて斜め上方に短くのびる。底部のみヘラケズリで内面に体部と立ち上がりの接合段を残す。口径12cm前後で大型，Ａ類の中にあっては体部が浅い。

ＡⅡａ類　平坦な底部と外反気味の立ち上がりをもつ。受部はやや斜め上方にはね，口唇部は丸くナデられたものもみられる。底部のみヘラケズリである。口径10cm前後と小型である。

ＡⅡｂ類　平坦な底部とやや外反気味の長い立ち上がりをもつ。受部は横につまみ出され，口唇部はナデて鋭い稜をつくる。内面には体部と立ち上がりの接合段を残す。ヘラケズリが体部下半まで及ぶ。口径10cm前後と小型である。

ＢＩａ類　底部は丸味をおび，内傾した短い立ち上がりをもつ。受部は短くやや斜め上方にはね，口唇部は丸く仕上げられたものが多い。ヘラケズリは体部下半まで及ぶ。口径12cm前後と大型である。

ＢＩｂ類　ＢＩａに比べると立ち上がりがさらに短く，かつ内傾がつよくなる。また、受部の端部と口唇部のナデが省略され尖ったものが多い。ヘラケズリは体部下半まで。口径12cm前後と大型である。

ＢⅡａ類　ＢＩｂに類するが口径が小さくなり，その分やや体部が深い感じを与える。ヘラケズリは体部下半まで。口径10.5cm前後である。

ＢⅡｂ類　立ち上がりが極端に短くなり，受部ののびとあまりかわらなくなる。ヘラケズリは底部付近にとどまるものが多く，やや粗雑なつくりとなる。口径9.5cm前後である。このうちには蓋として使用されたものも含まれようが，ここに一括する。

Ｃａ類　体部が長くのび，その端部をやや外反させる。高台は短いが，外に張っている。口径12.5cm前後，器高５cm前後である。

Ｃｂ類　体部が長く直線的にのび，比較的長く外に張った高台をもつ。法量はＣａとほぼ同じである。

Ｃｃ類　体部が直線的にのびるが，Ｃａ，Ｃｂに比べて体部が浅くなり，高台がつぶれたものとなる。口径12cm前後，器高4.3cm前後。

各形式の変遷と時期は，小田編年及び大門西遺跡出土須恵器の編年を参考にしてFig. 51のように位置づける。

小田富士雄『八女古窯跡群調査報告』Ⅰ～Ⅳ1969～1972，『天観寺山窯跡群』1977ほか。

佐賀県教育委員会『大門西遺跡』1980

ＳＴ001古墳（Fig. 52・72，PL. 27・43・44）

須恵器が少量，土師器が多い。ほかに刀子３点，銅釧１点が出土した。

須恵器（Fig. 52，PL. 27）

蓋がＣⅡｂ類（51），ＣⅡｃ類（50）およびＣⅠａ類（52～54）の３類，杯はＢⅠｄ類（55），Ｃｂ類（56・57），Ｃｃ類（58）の３種である。ほかにⅢＣ期相当の瑳がみられる。

土師器（Fig. 52，PL. 27）

殆ど甕の破片である。深鉢59は，内面口縁部付近にハケメ，外底部付近にヘラケズリを残し他はナデ仕上げ。60は外底部にヘラケズリのあとハケメ調整，他はナデである。61と62はミニチュア風の器台と杯で，前者は比較的丁寧にナデているが，後者は指押え痕を明瞭に残す。

装身具（Fig. 72—281）

青銅を丸く曲げた釧。断面は四角で，鍛造と思われる。途中で折れ曲がり，また曲率からみて一部欠損しており，推定すれば，径6.6cmとなる。外面は腐触して暗緑化しているが，芯は赤銅色を残している。

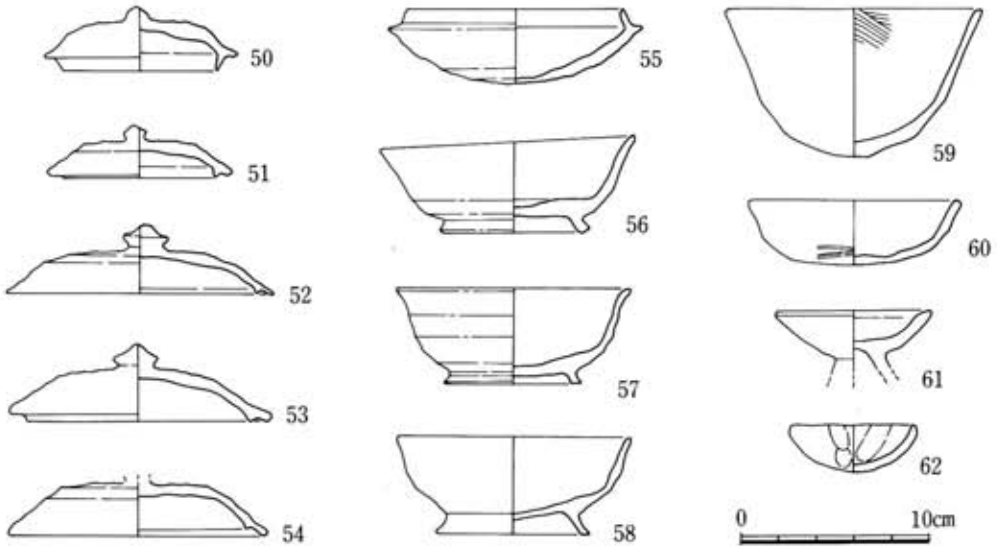


Fig. 52　ＳＴ001古墳出土須恵器、土師器実測図

ＳＴ002古墳（Fig. 53, PL. 27）

須恵器が少量，土師器は破片が多量に出土した。

須恵器（Fig. 52. PL. 27）

63は古式の甕。口縁部はやや内湾気味で下端に稜をもち，頸部に波状文，胴部は最大径が口縁をしのぎ，その中位やや上に沈線に挟まれた櫛描列点文を配す。胴部下半はヘラケズリのあとナデ。Ｉ期に考えられる。**64**は小型の坩で，胴部肩が張り，直立する短い口縁部をもつ。底部付近はヘラケズリのまま，胴部はヘラケズリのあとナデている。**65**は小型甕。胴部最大径は中位よりやや上にある。口縁部は直線的に開き，端部はナデて内側に段，外側に稜をもつ。胴部は外面をタタキのあと底部以外にハケを施し，内面は同心円文をていねいにナデ消している。**66**の甕も胴部最大径は中位よりやや上にあると思われる。口縁部は外反し，端部を丸くつくる。胴部内面は同心円文をのこし，外面はタタキのあとハケを施す。須恵器はほかにⅢｃ期の甕がみられる。

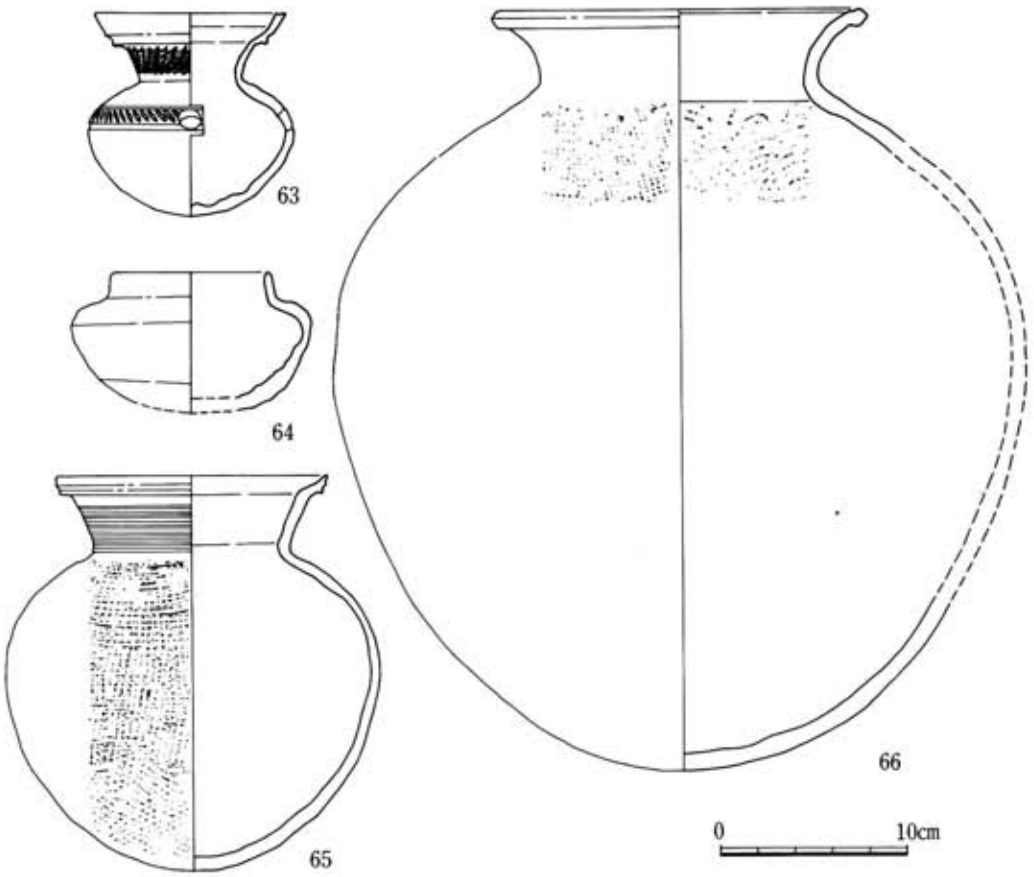


Fig. 53　ＳＴ002古墳出土須恵器実測図

土師器

甕，高杯を主として出土した。ほとんどが細片である。高杯には6世紀代の特徴をもつものがみられる。

ＳＴ003古墳（Fig. 71・73，PL. 43・44）

須恵器は少量で，土師器が多量に出土した。ただし，いずれも破片である。しかし，刀子1点，鉄鏃3点以上，管玉1点，土玉4点，人骨片がある。

須恵器

須恵器のうち器形の知られる杯はＢＩａ類，甕はⅢｃ期に推定される。

土師器

甕を主とし，他に高杯がみられる。殆ど細片であるが，甕は口縁がく字に折れて外反するもの，高杯には杯部口縁が折れて外にのびる，やや大形で古式土師器の特徴を残すものがみられる。

鉄器（Fig. 71，PL. 43）

鉄鏃は平根式270，271と尖根式275とがある。いずれも茎を欠失するが，271には木質が一部残存する。刀子279は関部で背から一段下がる変形を示す。鋒と茎端を欠失する。

装身具（Fig. 73，PL. 44）

管玉1点，土玉4点がある。管玉315は白緑色の碧玉製で，丸玉にちかいもの。孔は両方から穿っている。334～337土玉は黒色で，孔は一方から穿っている。

ＳＴ004古墳（Fig. 54，PL. 28）

須恵器と，土師器がやや多く出土した。

須恵器（Fig. 54，PL. 28）

蓋はＢＩｄ類（67～69），ＢⅡａ類（70），ＢⅡｂ類（71），ＣⅡｂ類（72）の4類がある。78は有蓋高杯の蓋でⅢｃ期に相当しよう。杯はＢＩｂ類（73～77）である。

高杯は有蓋と無蓋の2種があり，79，80はⅢｃ期にあたる。

81はつぶれた感じの小型坩。口縁部は内傾しつつ直線的にのびる。底部はヘラケズリのままである。

平瓶はやや肩の張る胴部で平底，口縁が直線的に開く83，84と，やや外反気味で端部がナデて稜をもつ82とがある。胴部は底部をヘラケズリのあとナデ，側面および上面にカキメを施している。

甕は破片が多いが器形の知られるものは少ない。85は口縁が外反し，端部を外側にむけてナデ，稜をつくる。

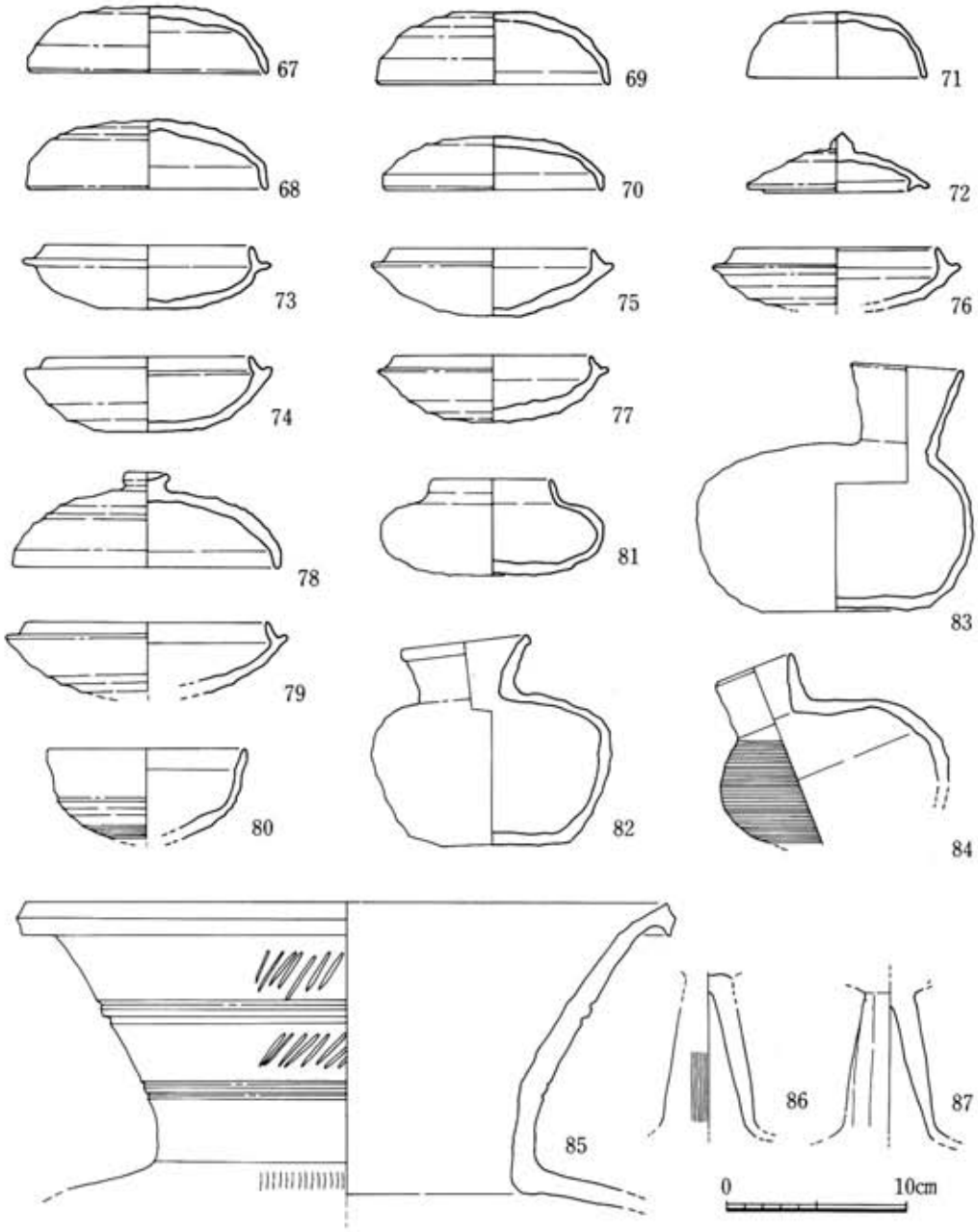


Fig. 54　ＳＴ004古墳出土須恵器、土師器実測図

土師器（Fig. 54）

器種は甕と高杯がある。ただし，ほとんど破片で器形の知られるものは少ない。86は高杯脚部で裾が急に大きく開く。筒部外面にハケメ，内面にシボリ痕を残す。87は同じく高杯脚部であるが，筒部内面はヨコヘラケズリ，外面はタテにヘラナデしている。

ＳＴ005古墳

土師器の甕片のみ若干出土した。周溝からの出土でありこれに伴うかどうか問題はあるが，甕は口縁部がやや内湾気味に開き口唇部を平坦につくり布留式の特徴をよく示している。

ＳＴ006古墳（Fig. 55・71～73，PL. 29・43・44）

須恵器が少量，土師器は多量に出土した。ほかに土製管玉，土玉，耳環，鉄鏃が出土している。

須恵器（Fig. 55，PL. 29）

蓋はＢⅡａ類(88)，ＣⅡａ類(89)，ＣⅠａ類（90）の３類，杯はＢⅡｂ類（91，92）である。

高杯93は無蓋で，杯部は端部を薄くしてやや外反気味とし，中位に沈線を加える。下半はヘラケズリで，底部周辺はさらにカキメを施す。脚部はあまり開かず，中位に沈線がある。上半にカキメを施す。Ⅳ期に相当しようか。

平瓶は２種ある。94は胴部が丸底で低く，内湾気味の口縁部をもつ。底部付近のみヘラケズリを残し，他はナデて仕上げている。96は胴部が平底でカキメ調整を施し，上面に一対の小円板を貼付する。

甕は95が口縁部のみ知られる。外反気味に開き，端部を外にむけてナデられ稜をもつ。カキメ調整がみられる。

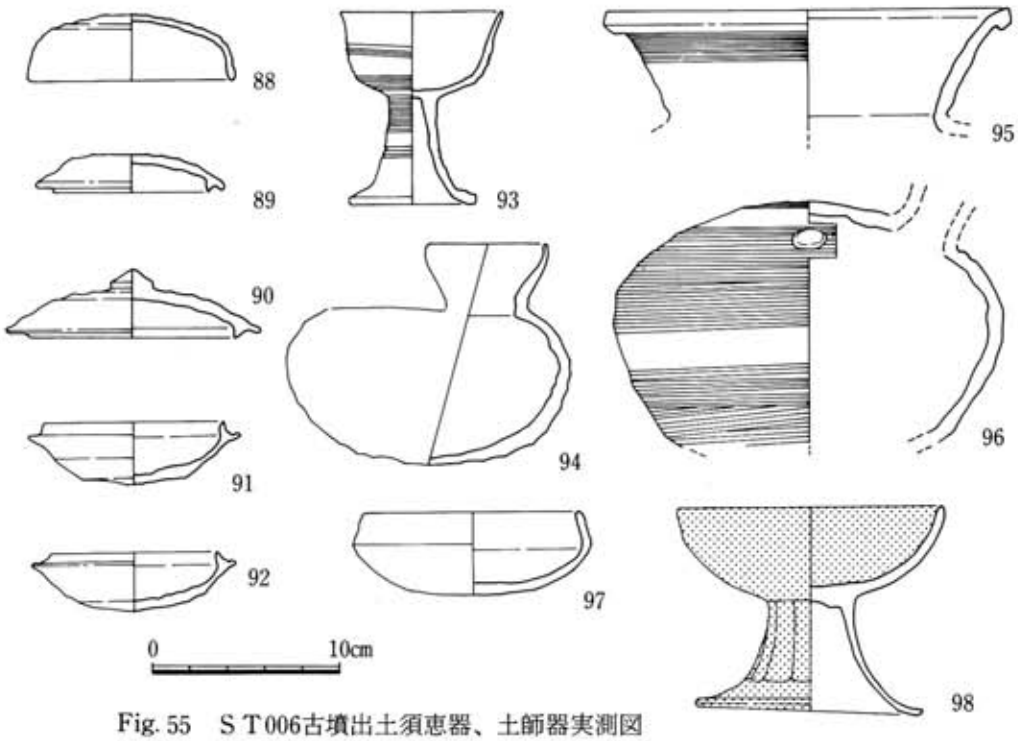


Fig. 55　ＳＴ006古墳出土須恵器、土師器実測図

土師器（Fig. 55, PL. 29）

甕，杯，高杯など破片が多量である。杯97は口縁部が須恵器の立ち上がりに似た折れ方をし，内傾して直線的にのびる。内外面ともヘラミガキされ，黄褐色の精良なつくりである。高杯98はゆるやかに内湾する杯部と裾のゆるやかに開いた脚部とをもつ。杯部は内外面ともヘラミガキ，脚は筒部外面をタテに裾部をヨコにヘラミガキし，内面をナデている。杯部と脚部外面に丹を塗っている。

鉄器（Fig. 71, PL. 43）

鉄鏃が3点出土した。いずれものみ形の尖根式であるが，2種みられる。272と276は身がわりと短く鋒が広い平根式。274は全体に細く，身の部分が長い尖根式である。

装身具（Fig. 72・73, PL. 44）

玉類はすべて土製品である。土製管玉319は灰黒色で，孔は両方から穿っている。土玉338～345は黒色，孔は一方から穿つ。耳環はやや大型の290, 291と中型の296, 297とがあり，それぞれ組み合うものと考えられる。いずれも金銅製であるが，表面が荒れている。

ＳＴ007古墳（Fig. 56・57・72・73, PL. 30・44）

須恵器および土師器が出土した。須恵器は比較的時期がまとまっていて，甕と壺の類が多い。土師器は細片が殆どである。ほかにガラス玉，管玉，切子玉といった玉類がある。

須恵器（Fig. 56・57, PL. 30）

蓋，杯，壺，甕，平瓶，横瓶，提瓶と器種に富む。

蓋99～101はＢⅡａ類，杯は103がＢＩａ類である以外，103～108はすべてＢＩｂ類である。

壺109は胴部が重心の低い平底気味の小型品で，口縁がやや外に開いてのびる。底部とその周辺をヘラケズリ，ほかをナデて仕上げている。

甕は大型品と小型品とがある。大型甕110は倒卵形胴部に，外反しつつ長くのびて開く口縁部がつく。口縁部は端部がナデられて段をもち，2段の沈線とその間の櫛描波状文で飾っている。胴部内面は同心円文を残し，外面はタタキのあとハケメ。111～113の小型甕はいずれも胴部と明確な段をもたず外反する口縁部がつく。口唇部はナデられ平坦なものが多い。

平瓶115は底部が平坦で，側面から上面にかけてふくらみ，口縁部は中心寄りにあって直線的にのびて開く。胴部は下半をヘラケズリして全面にカキメ調整，底部はナデて仕上げている。

提瓶は大小2種ある。116はやや扁平な胴部に端部が内湾気味におわる口縁部をもつ。つり手はつけない。胴部外面にはヘラ記号がみられる。117は大型で胴部全体にふくらみがあり，口縁部は外反しつつ開き，端部はナデられて段がつく。つり手は欠損するが，カギ形のものであろう。胴部，口縁部ともナデ仕上げである。

横瓶118は胴部がさほど長くなく，短くのびて開く口縁部をもつ。胴部外面はタタキのあとか

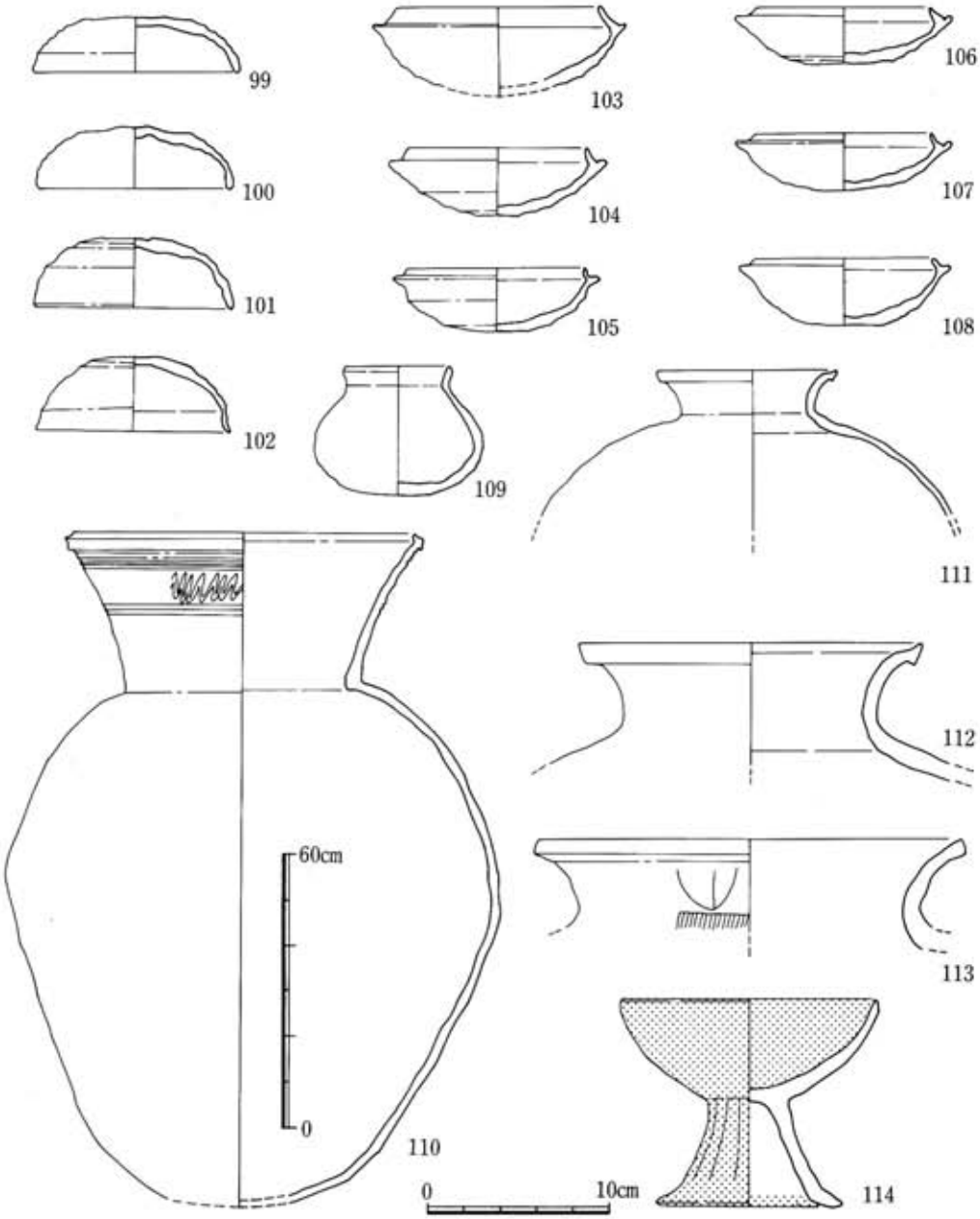


Fig. 56　ＳＴ007古墳出土須恵器、土師器実測図

るくハケメ調整を行い，内面は同心円文をそのまま残す。

土師器（Fig. 56）

高杯と杯のみ器形が知られる。高杯114は杯部が内湾，脚部は裾を一段開いている。杯部及び脚外面から裾内面にかけて丹塗りで，杯部はヨコヘラミガキ，脚外面はタテにヘラでナデたあと裾をヨコナデ。杯は須恵器を意識した受部と立ち上がりをもつ黒色土器で，Ⅳ期にあたろう。

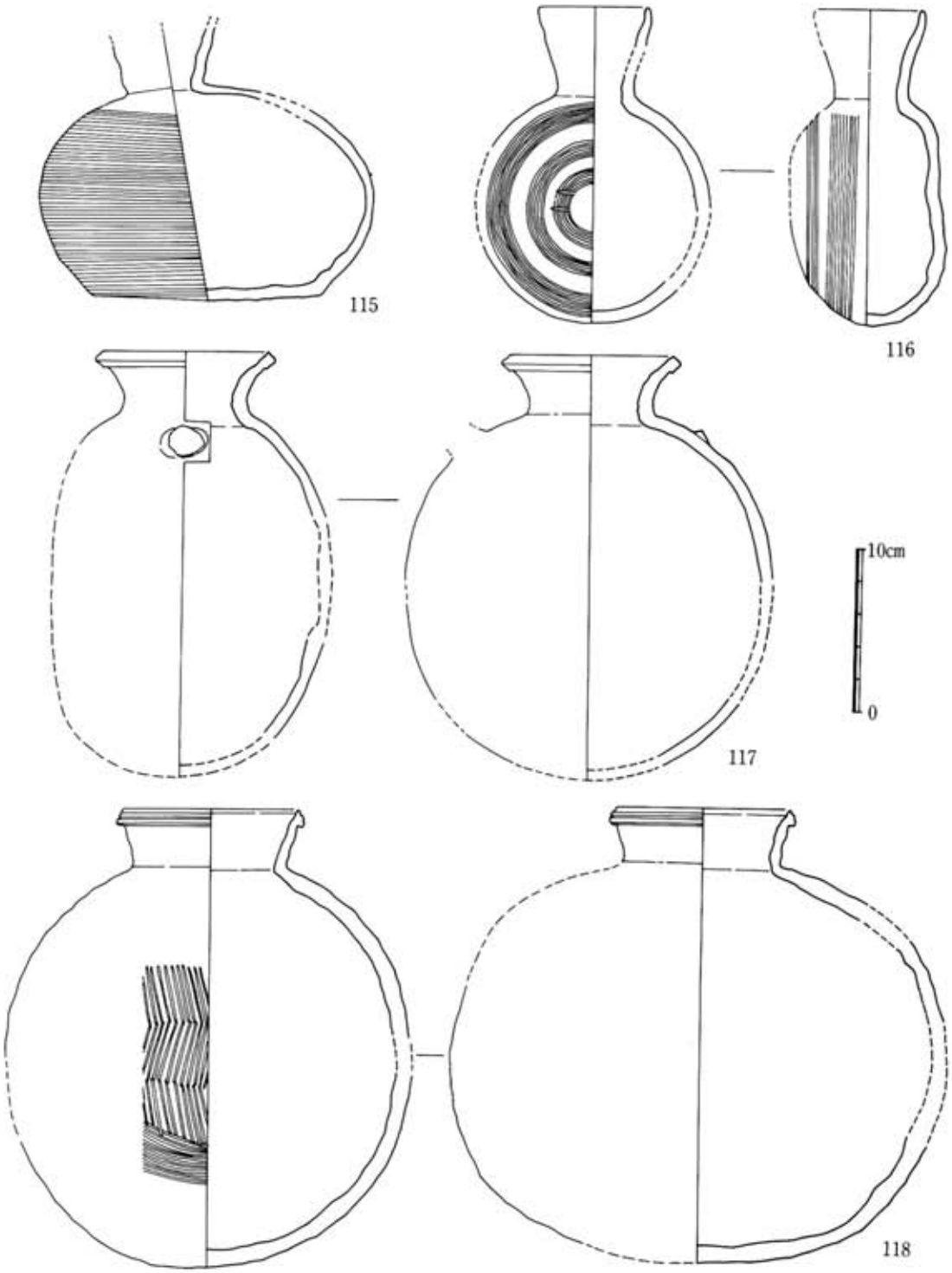


Fig. 57　ＳＴ007古墳出土須恵器実測図

装身具（Fig. 72・73, PL. 44）

ガラス玉８，管玉１，切子玉３が出土した。ガラス玉320～327は青色で，径１cm前後のものと，５mm以下の２種にわけられる。管玉316，317は緑色ないしは緑白色の碧玉製である。孔は316が一方から，317は両方から穿っている。切子玉312～314は水晶製。312が２段各６面のカット面をもつのに対し，他は周囲を丸く磨いている。

ＳＴ008古墳

周溝一部のみ調査。周溝内より土師器の甕，杯，高杯などの破片が若干出土している。高杯脚は小型で筒部にふくらみをもち，６世紀頃のものとみられる。

ＳＴ009古墳（Fig. 58, PL. 29）

須恵器と土師器が少量出土した。石室からの出土品はないが，周溝内出土の杯類がこれに伴うものと考える。いずれも，本遺跡出土品の中では最古式の須恵器である。

須恵器（Fig. 58, PL. 29）

蓋119，120は共にＡａ類，口縁が垂直に長くのび，口唇部はナデられて段をもつ。天井部はゆるやかで頂部付近をやや平坦にし，鋭い稜をつける。ヘラケズリは天井部ほぼ全体に施されている。

杯121，122はＡＩａ類。内傾し長くのびた立ち上がりと深い体部をもち受部が横にはねる。底部を平坦にし，ヘラケズリしている。

蓋，杯とも成形，調整が丁寧で，焼成も良好である。

なお123の高杯は遺構検出中にＳＴ009古墳付近から出土したもので，本墳に伴う可能性が強い。杯部は立ち上がりが体部との境に稜をなして外反し，体部に波状文を入れる。脚部は三方透しで，裾を内側に折り曲げている。時期は上記の杯類に伴うものであろう。

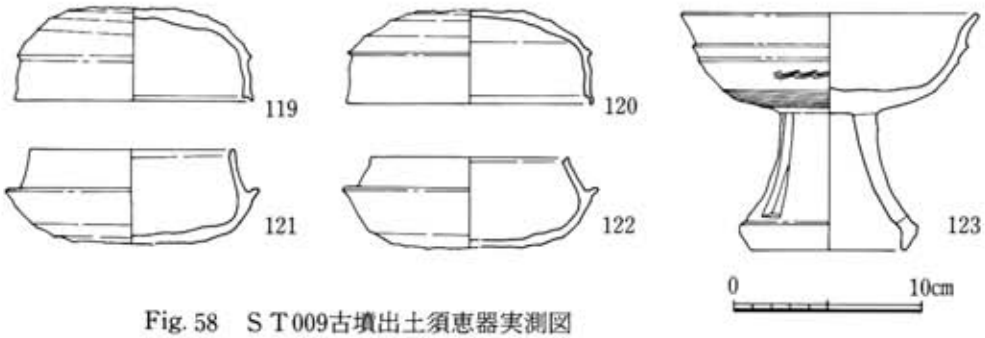


Fig. 58　ＳＴ009古墳出土須恵器実測図

土師器

壺および甕の破片がみられる。甕は口縁部がやや内湾気味に開き，口唇部を平坦にナデている。布留式でもやや新しい時期のものと考える。

ＳＴ010古墳

須恵器および土師器の破片が若干出土したにすぎない。須恵器は甕のほか，坩の蓋，平瓶，Ⅲ期に相当するとみられる高杯がある。土師器は器形の知られるものはない。

ＳＴ011古墳（Fig. 59）

須恵器と土師器とがある。共に出土量は少ない。

須恵器（Fig. 59）

蓋は124～125がＢⅡａ類。126は小型坩の蓋の可能性が考えられる。天井部はわりと平坦でヘラケズリ，口縁部は垂直に下がって口唇部をナデて丸い。

杯はＢⅠｂ類（127，128）とＢⅡａ類（129），ＢⅡｂ類（130）とがある。

瓶131はⅢ期でも新しい時期と思われる。胴部と頸部との境があまり明確でなく，頸部および胴部それぞれの中位に沈線を廻らす。

土師器（Fig. 59）

殆どが細片で器形の知られるのは椀のみである。椀132はやや尖底気味の粗製のもので，体部下半をヘラケズリ，上半から口縁部をナデ，内面はナデツケている。全体に厚い。

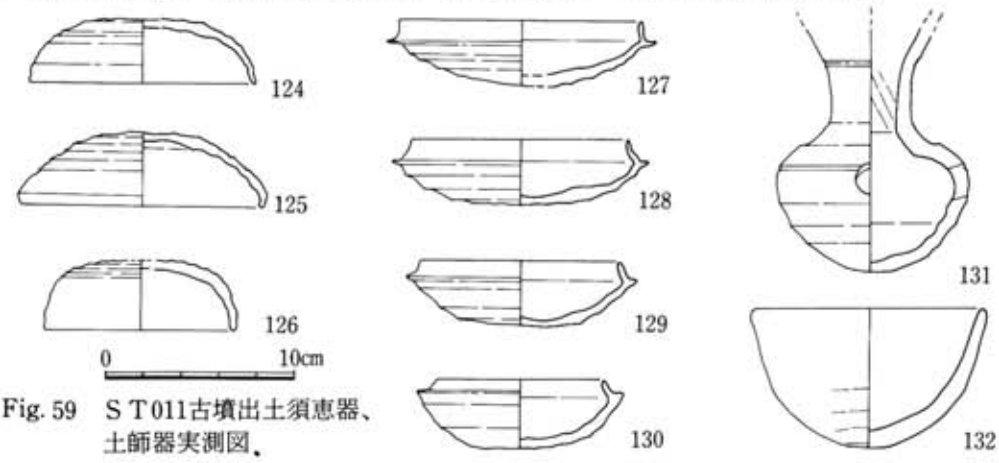


Fig. 59　ＳＴ011古墳出土須恵器、土師器実測図。

ＳＴ012古墳（Fig. 60～66・71～73，PL. 31～35・43・44）

今回の調査で最も豊富な遺物を出土した。とりわけ須恵器が多く，その他土師器，刀子，土玉，銅釧，耳環などがある。

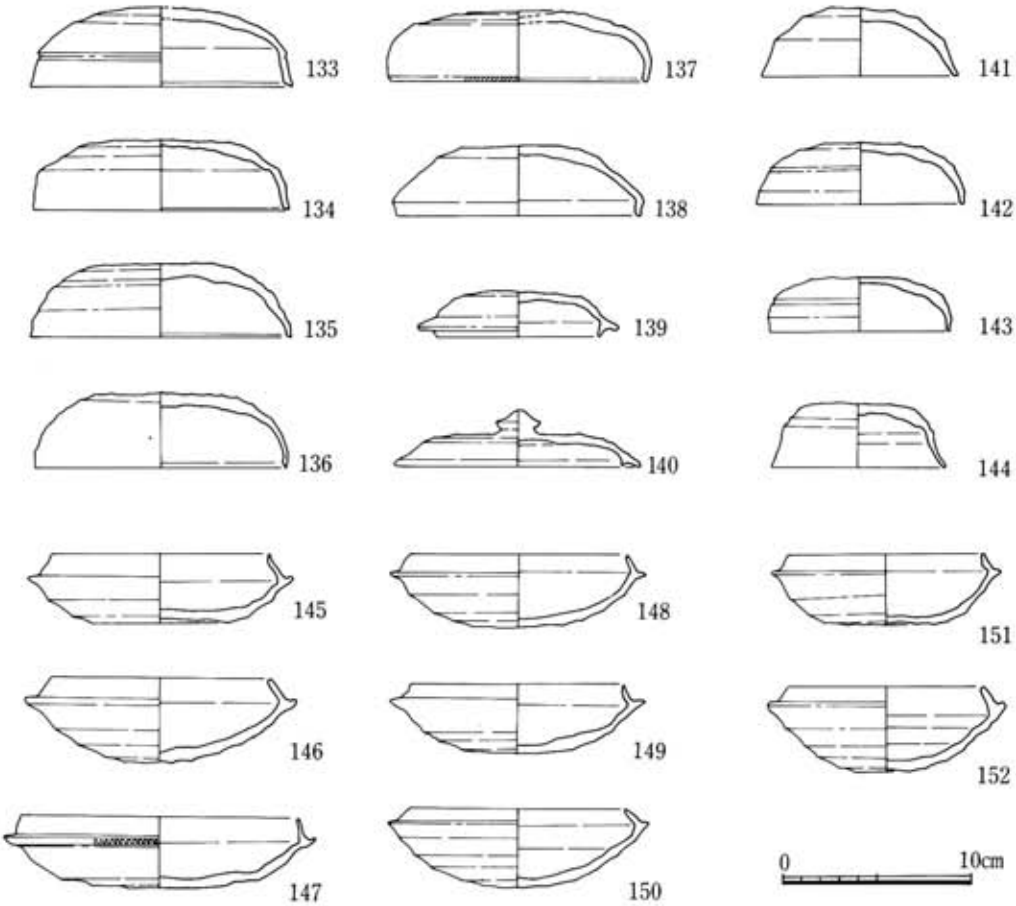


Fig. 60　ＳＴ012古墳出土須恵器実測図(1)

須恵器（Fig. 60～65, PL. 31～34）

蓋，杯，高杯，瓶，坩，平瓶，壺，台付壺，甕など器種に富む。中でも甕が多い。

蓋はＢＩａ類（133），ＢＩｃ類（134，135），ＢＩｄ類（136，137），ＢIIａ類（138），ＣIIａ類（140），ＣＩａ類（139）と各時期にわたってみられる。137は口唇部外側に刻み目を入れて装飾している。141～144はIIIＣ期に相当する坩の蓋であろう。天井部と口縁との境に沈線を入れるか段をつけている。また，有蓋高杯の蓋もIIIａ期（153）からIIIｂ期，IIIｃ期（154）のものがある。

杯はＢＩａ類（145，146）とＢＩｂ類（148～150），ＢIIａ類（151，152）がある。147は口径14.8cmと異常に大きく，受部下面に刻み目を入れるなど特殊であるが，一応ＢＩａ類に考えておく。

高杯は有蓋の155～158と無蓋の159～166とがある。それぞれの中でまた法量の大小，脚透しの有無など違いがある。有蓋高杯では，155は脚部に透しをもたず，脚部から杯部にかけてカキ

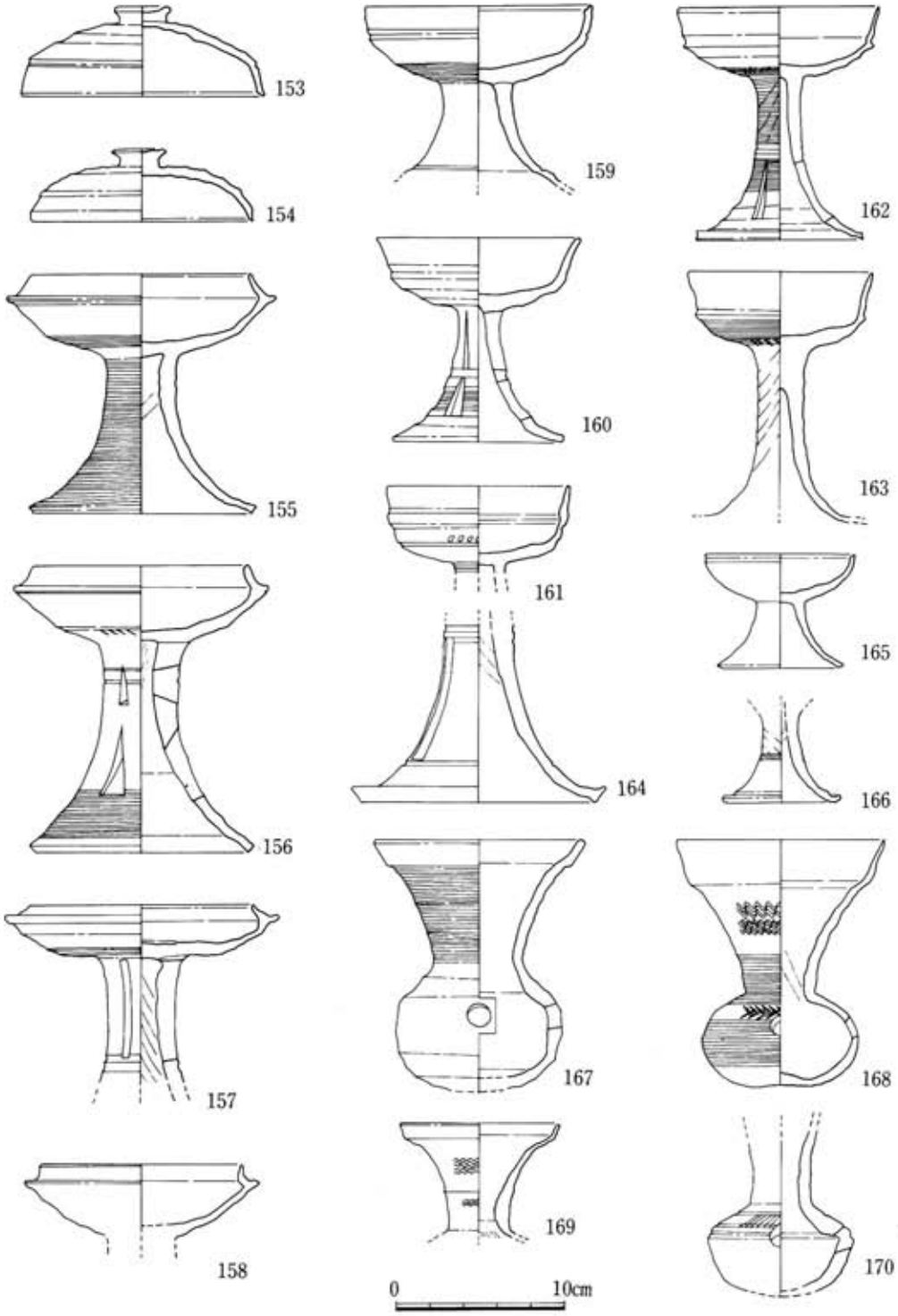


Fig. 61　ＳＴ012古墳出土須恵器実測図(2)

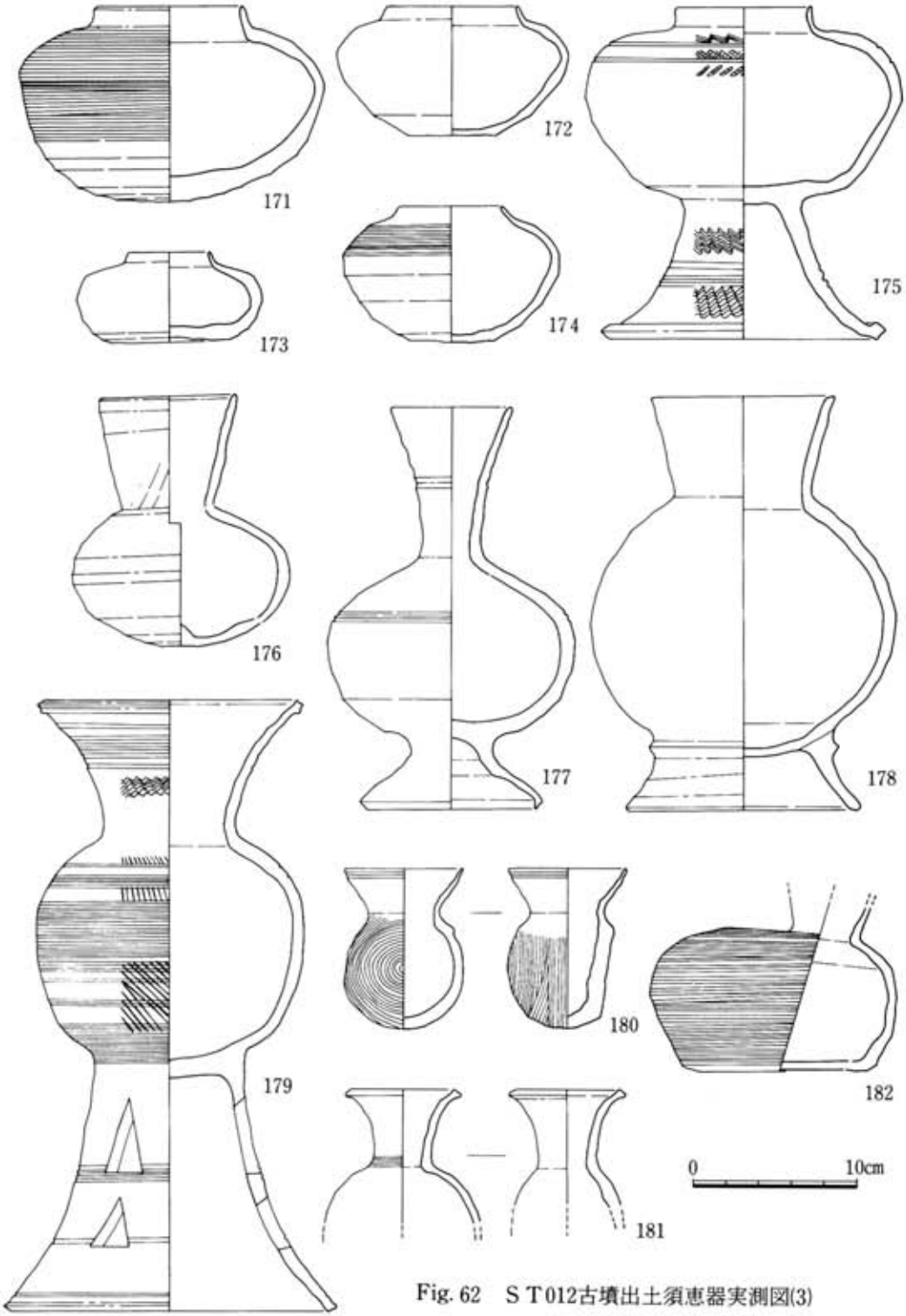


Fig. 62　ＳＴ012古墳出土須恵器実測図(3)

メ調整を施す。156は脚部が三方2段透しで，2条の沈線が中位になく上にあがっており，裾をカキメ調整する。杯部底には列点文が配されている。157は口径のわりには浅い杯部と，沈線に分けられた三方2段透しを切った細長い脚部をもつ。杯部底から脚部にかけてはカキメ調整。158は杯部のみ残存立ち上がりが上にはね上がった特徴をもつ。また無蓋高杯では，159は杯部が立ち上がりを沈線で分け，口唇部をナデて内側に稜をもつ。脚部は透しをもたず，裾は沈線で仕切られ段をもって開く。杯部底をカキメ，ほかをナデて仕上げている。162は杯部の立ち上がりが直線的に開いてのび，体部との間に蓋受け状の稜をもち，底に列点文を配す。脚部は三方2段透しで，中位に2条沈線を廻らす。筒部はカキメ，裾をナデて仕上げている。160と163は杯部の立ち上がりがかすかに稜をなして外反気味に開くが，脚部の形態，透しの有無等に違いがある。また前者は脚部下段透し付近にカキメを施し，ほかはナデ仕上げ，後者は杯部の底体部にカキメのあと底に列点文を配し，ほかをナデて仕上げる際，筒部外面にしぼり痕を明瞭に残す。161は杯部のみ。体部に列点文を配し，不明瞭な段をもって立ち上がりがのびる。165と166は小型高杯，後者は脚部中位に2条沈線を廻らし，裾端をナデてはね上げる。いずれもナデ仕上げである。

以上の高杯は有蓋155，156と無蓋159～162がIII b期，有蓋157，158と無蓋

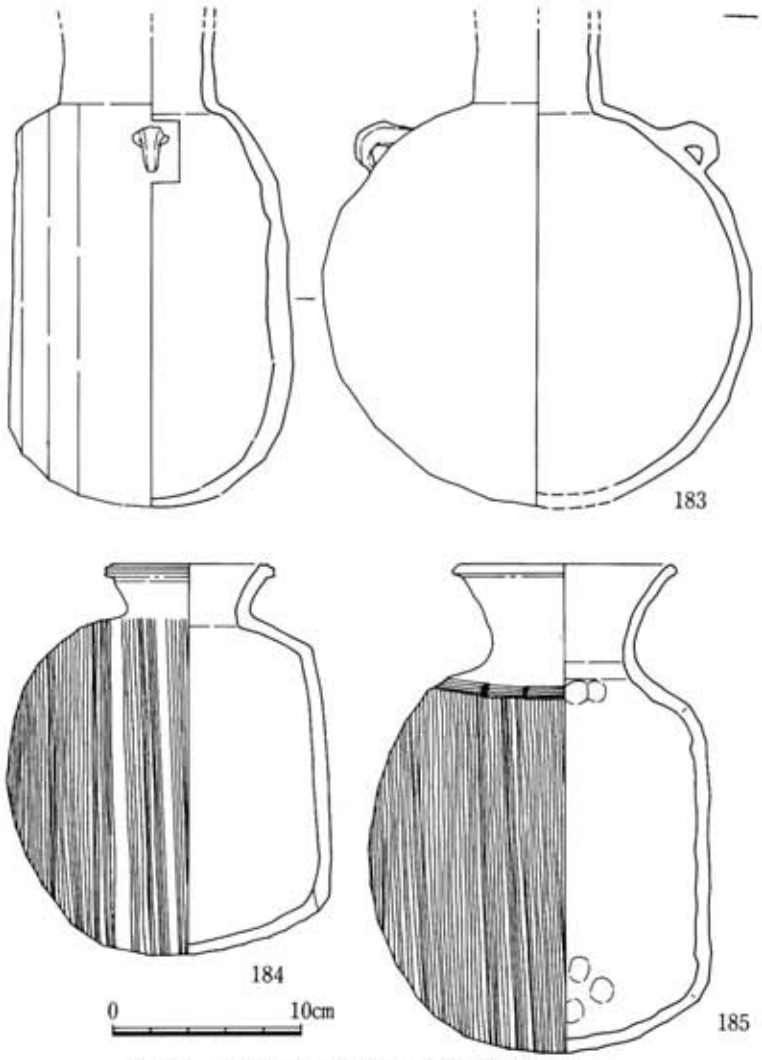


Fig. 63　ＳＴ012古墳出土須恵器実測図(4)

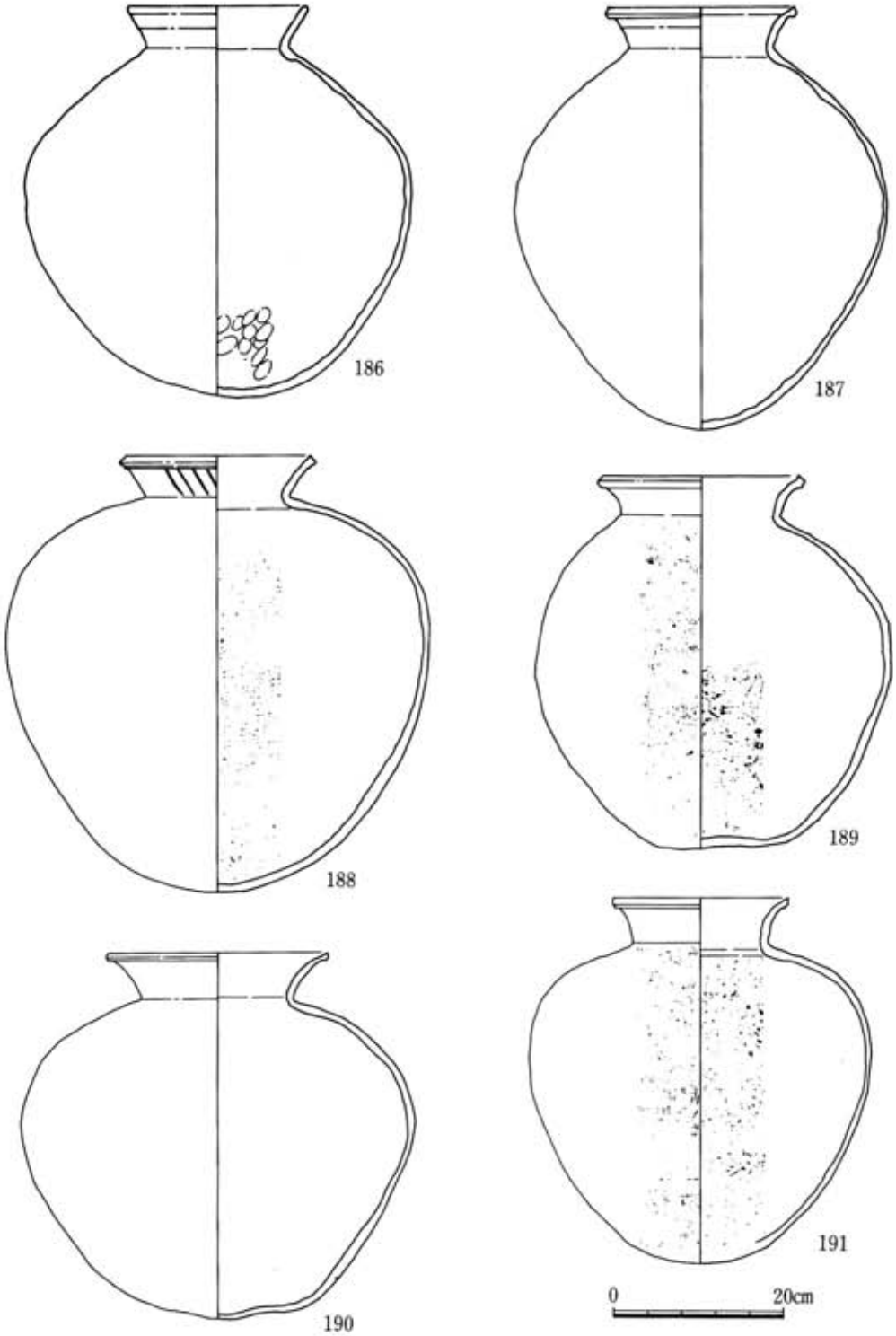


Fig. 64　ＳＴ012古墳出土須恵器実測図(5)

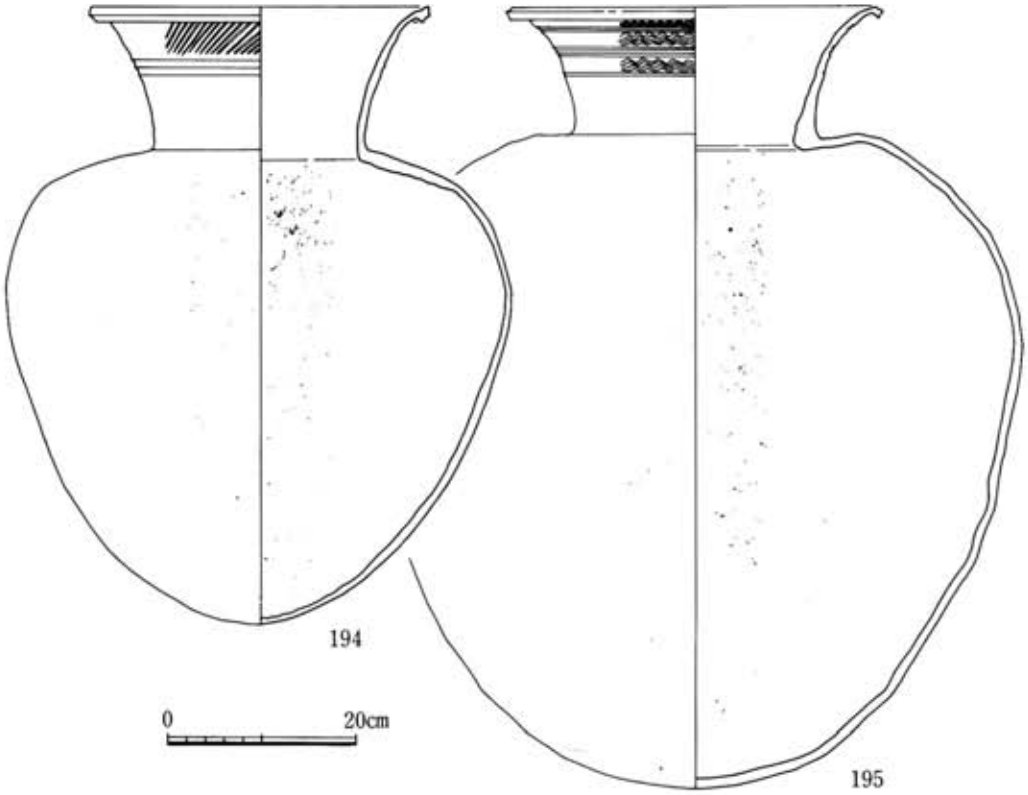


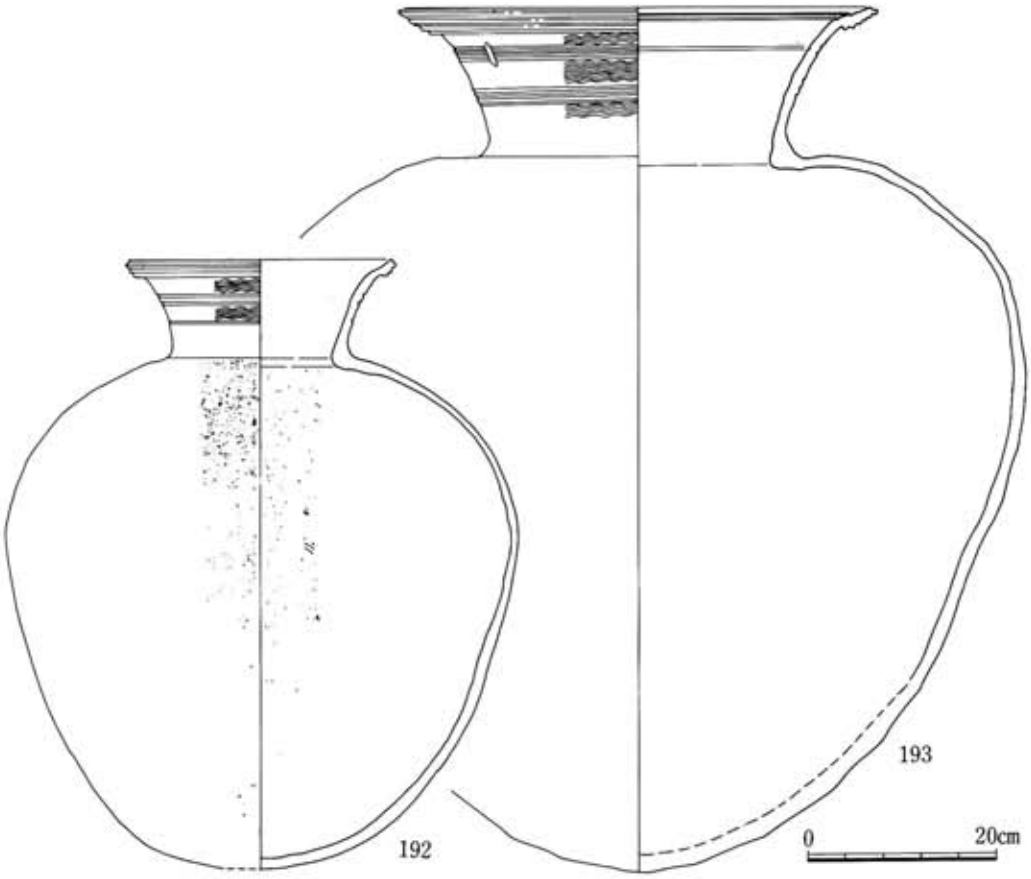
Fig. 65　ＳＴ012古墳出土須恵器実測図(6)

161，163がIII d 期に相当する。

瓶は167の場合，頸基部がさほど極端にはすぼまらず，胴部とやや不明瞭に分かれる。胴底部はヘラケズリ。頸部にカキメ，ほかをナデて仕上げる。168は頸部に波状文，胴部上位に羽状列点文を配す。底部はヘラケズリ，胴部から頸部中位にかけてハケメ調整を施す。169もこれに類するが，口縁部の開きが顕著で小型化している。170は胴部の肩が張り，沈線に挟まれて櫛描列点文を配す。

以上の瓶は167，168がIII b 期，169，170がIII c 期に相当する。

坩は形態および法量等に違いがある。171は胴部で肩が張り，やや内傾してのびる短い口縁をもつ。口縁部はナデ，胴部は底から約⅓をヘラケズリし，中位から上をカキメ調整する。172は171を小型化した感があるが，平底で，底と胴下端をヘラケズリ，ほかをナデて仕上げている。173は最も小型で，胴下半から底部をヘラケズリ，上半から口縁部をナデている。174は肩の張りがやや小さく，口縁部の内傾が著しい。胴中位から底部にかけてヘラケズリ，肩位にカキメ，口縁部をナデて仕上げる。175の台付坩は胴部の肩が張って直立する短い口縁部をもち，これに中位の３条沈線を挟んで波状文を配した台が付く。胴部は肩位に２条沈線と波状文，櫛描列点



文をおく。調整は胴部下半をヘラケズリのまま，ほかはナデ仕上げである。口縁部の特徴から，171，172，175はIII b 期，173，174はIII c 期と考えられる。

壺176は長頸が口縁まで直線的にのびる。胴部は中位に最大径をおき，下半から底にかけてヘラケズリ，上半から口頸部をナデている。頸基部付近にはシボリ痕を残す。177～179は台付壺，177は安定観のある台に長頸壺をのせる。壺は胴肩があまり張らず，やや外反してのびる細身の長頸で，胴肩位と頸中位に2条ずつ沈線を廻らす。胴底部付近をヘラケズリ，胴中位以上から口頸部，台部をナデて仕上げる。178は全体にずんぐりした台付壺。壺は口頸部が外に開いてのび，胴部は球状にちかい。胴部外面はタタキのあとナデ，内面は上半を指押え，下半に同心円文を残す。台は突帯をもってやや低く開く。口頸部から胴上半部にかけて自然釉がかかっている。179は口の大きく開いた壺に高い台が付く。壺は口唇部がナデられて段がつき，頸部に波状文を配す。波状文は口縁下にもかすかに認められるが，はっきりしない。胴部はやや肩が張り，肩位に2条の沈線を挟んで櫛描列点文を施す。胴部はタタキのあとカキメ調整，内面の同心円文はほぼ完全にナデ消されている。頸部は上半をカキメ調整，下半をナデ仕上げ。台は2段の沈線をおいて三方に2段三角透しである。その他180，181の小型壺がある。胴部が扁平で提瓶に

ちかい特徴をもつ。

平瓶182は平底の胴部で，胴部は底以外全面にカキメ調整を施す。

提瓶は183の場合，頸部が直立し，耳は環をなす。胴部は裏面をヘラケズリ，側面と表面とをナデて仕上げている。184は厚味のある胴部に外反する短い口頸部をもつ。カキメは胴部全面に施されている。185もこれに類するが一回り大きい。共に耳はとれている。

甕は最も出土数が多く，かつ形態の変化も様々である。法量からおおまかに特大(193，195)大（192，194）中（186～191）の3種にわけられる。その中では中型甕が多い。

中型甕は口径20～26cm，胴最大径40～50cm，高さ42～50cm。口頸部の特徴で分けた場合，中型甕は口頸部が外反しつつ伸び，口唇部にナデによる稜または段をもつもの(187～191)，口頸部が直線的に開いて口唇部を丸くナデるもの（186）の2種がある。188のみ頸部にヘラで連続斜行文が飾られている。成形および調整は口縁部がナデ，胴部は外面がタタキのあとかるくナデ消しているものが多いが，186と187はそれがほとんど完全にちかいくらいに消され，さらに底部付近が指で押えられている。このうち注意されるのは189で，その胴部肩位に一周して同時に焼かれた杯等が付着していた痕跡がみられる。これは焼成の際，上にのせられた杯等が，接着してしまい，窯出し後にそれらを欠き除いたことを示す。

大型甕(192，194)は口径28～35cm，胴最大径53cm前後，高さ65cm前後。胴部はやや肩が張る。口縁部は外反して開き，口唇部は一段厚く稜をもつ。また口縁下は沈線，波状文，ヘラ描連続斜行文などで飾られる。胴部外面はタタキのあとハケメ調整，内面は同心円文をそのまま残す。

特大型（193，195）は口径40～50cm，胴最大径70～80cm，高さ100～110cm。胴部は肩が張

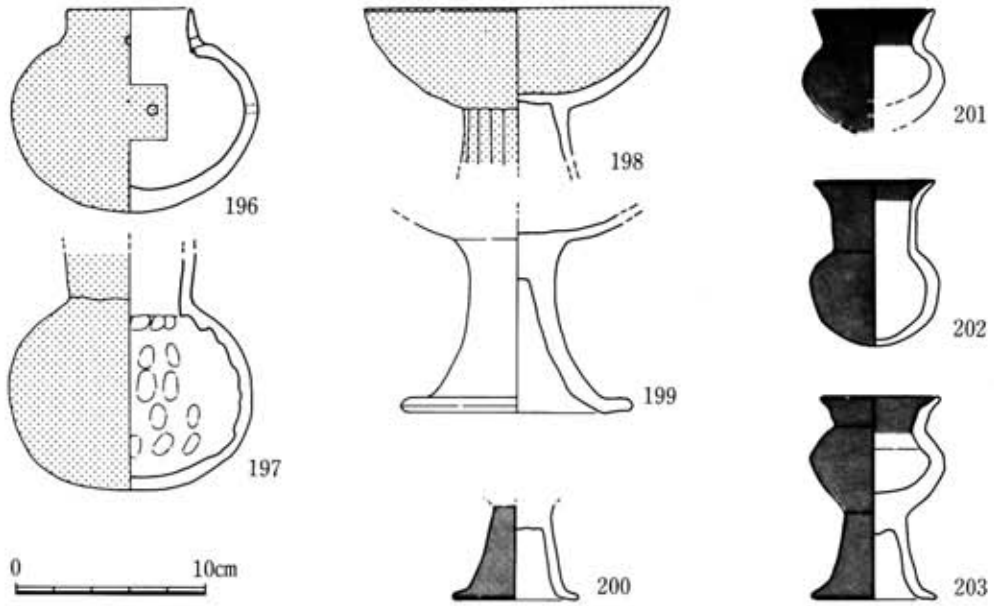


Fig. 66　ＳＴ012古墳出土土師器実測図

り，大きく外反した口頸部をもつ。口縁部はかるくナデてめくれさせ稜をもつもの（195）と一段厚くして沈線を配するもの（193）の2種がある。共に口縁下には沈線，波状文，貼付文など装飾が多い。胴部は外面がタタキのあとかるくハケを当て，内面は同心円文を残す。

土師器（Fig. 66，PL. 35）

壺，高杯等があり，比較的多量である。

壺は丸底で，196は口縁が短く直立し，頸部と胴部に焼成後の穿孔がある。197は頸がやや外開きに長くのびる。いずれも外面丹塗りでヘラミガキしているが，内面は前者がナデ，後者は胴部に明瞭な指圧痕を残す。

高杯198，199はゆるやかに内湾する杯部に，裾の平坦に開く脚部が付く。198は丹塗りで，杯部をヨコヘラミガキ，脚部をタテにヘラでナデていねいな作りである。199は杯部ナデ，脚部は縦にヘラでナデる。

そのほか200～203は雛形の壺および台付壺。200と201は同一個体か。いずれも黒色物質（漆か）を塗布しており，光沢をもつ。壺はヨコ，脚はタテにヘラミガキしている。

鉄器

刀子と不明鉄器各1点がある。刀子は関部で背から一段下がって茎につづくもので鋒を欠く。

装身具（Fig. 72・73，PL. 44）

銅釧1点，耳環3点がある。銅釧282は281と同工の青銅製で，断面は四角，鍛造であろう。復元径6.7cm。耳環は大形の284と中形の304，305とがある。すべて金銅製である。

ほかに，流れ込みと思われるが，紡錘車49が周溝から出土している（Fig. 50）。暗灰色の滑石製で，周囲に格子目状線刻を配す。径4.1cm，厚1.6cm，孔径0.6cm。

ＳＴ013古墳

須恵器および土師器の細片が数点出土したが，器種，器形のわかるものはない。

ＳＴ014古墳（Fig. 67～69・71～73，PL. 36・37・43・44）

ＳＴ012古墳に次いで多量の須恵器が出土した。土師器も比較的多い。ほかに鉄鏃，耳環，土玉がある。

須恵器（Fig. 67・68，PL. 36・37）

蓋，杯が主で，ほかに高杯，鼎，壺，台付壺，甕がみられる。

蓋は杯蓋にＡｂ類（204，205），Ａｃ類（206），ＢＩｄ類（207，208），ＢIIａ類（209，210），ＢIIｂ類（211），ＣIIｃ類（212）の6類があって器形に富む。213と214は坩の蓋でIIIｂ期に相当しよう。天井部がヘラケズリで，きつく折れてのびる口縁部をナデて仕上げている。207，208

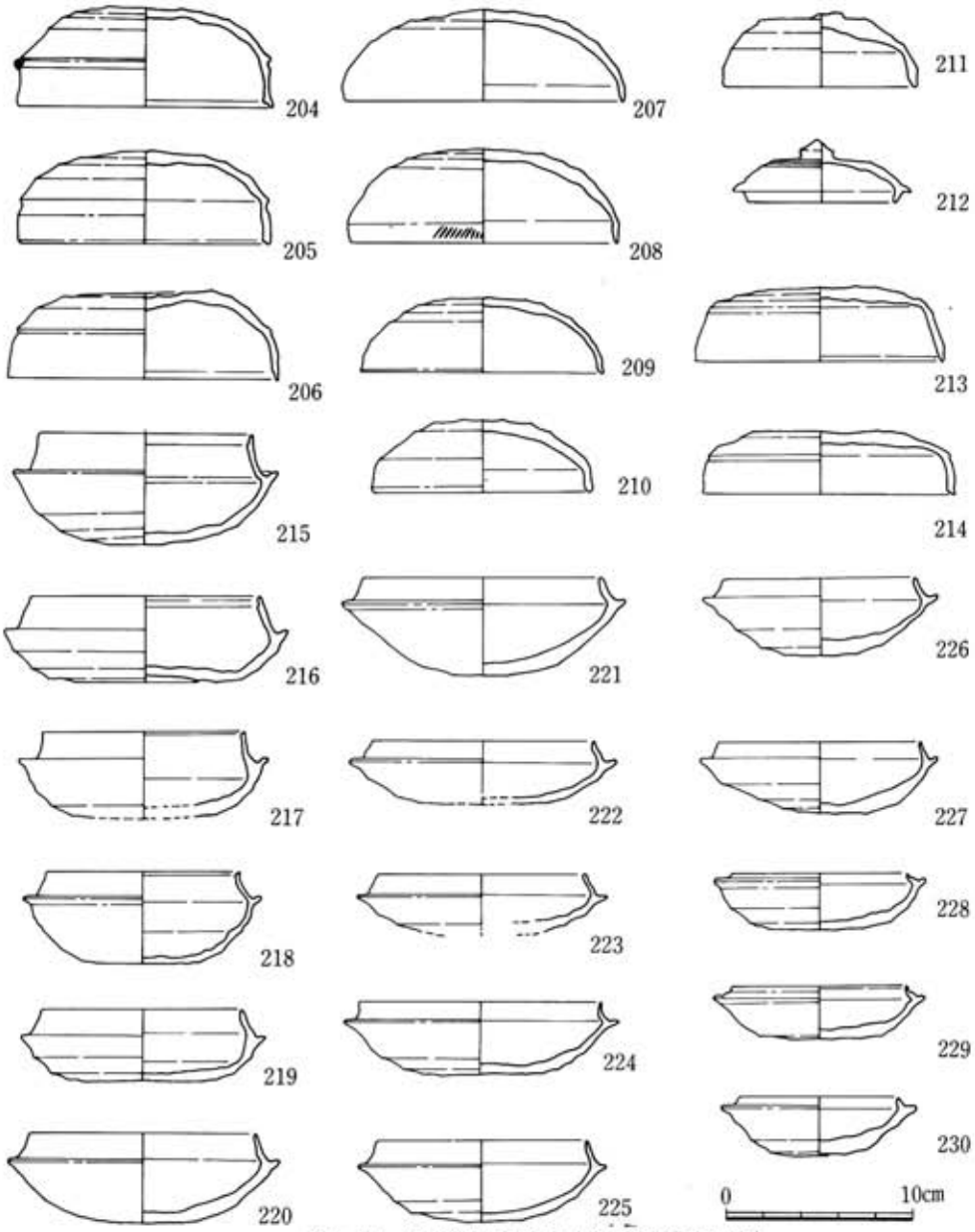


Fig. 67　ＳＴ014古墳出土須恵器実測図(1)

など赤く焼けたものが多い。

杯も器形が豊富で，ＡＩｂ類（215），ＡＩｃ類（216），ＡIIａ類（217），ＡIIｂ類（218），ＢＩａ類（219～222），ＢＩｂ類（223・224），ＢIIａ類（225～227），ＢIIｂ類(228～230)の８類にわたる。したがって杯類をみると，古式から新しい時期のものであって，本古墳群の中では異例に長期間の追葬のなされた古墳といえる。

高杯は蓋の２類がある。231は長方形透しを２段三方にあけた脚をもつ。杯は底部へラケズリ，

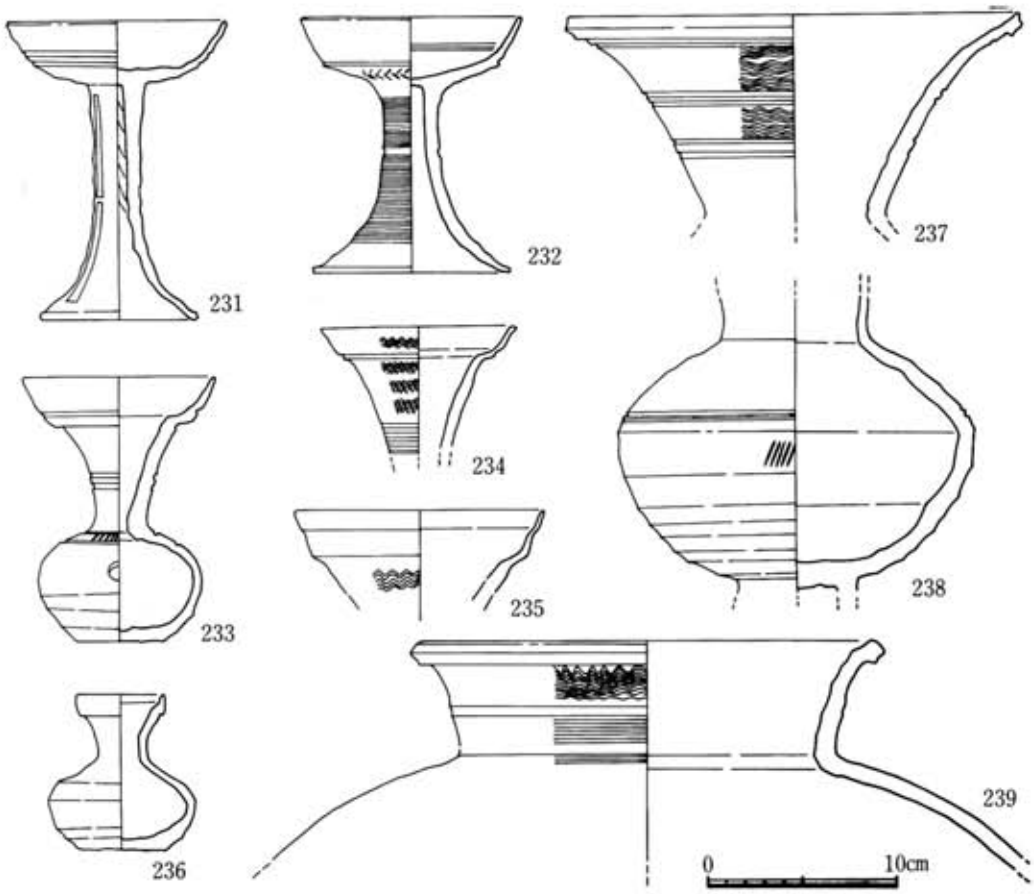


Fig. 68　ＳＴ014古墳出土須恵器実測図(2)

ほかをナデている。232は杯の立ち上がりが底部との間に稜をなして外に開き，内面に沈線，外面底部に櫛描文を飾る。脚は中位やや上に沈線をおいて筒部をカキメ，裾をナデて仕上げている。232はⅢｂ期，231はⅢｃ期に相当しよう。

甕については，233は平底で，肩に沈線に区切られた櫛描列点文，口頸部は大きく開いて，頸部と口縁部に沈線を廻らす。胴下半にヘラケズリを残す。234もこれに類するが，口頸部の波状文が顕著で，口唇部はナデて平坦にし，また頸部下半にカキメ調整を施す。235は口縁部下に波状文を描き，口径が大きい。いずれもⅢｃ期と考える。

壺237は広口のもので，口頸部が大きく外反し，頸部に３段の沈線をおいて波状文を配す。口唇部はナデて段をもつ。238は台付壺で，全体はわからないが壺胴部は中位やや上に最大径があって，２条の沈線とヘラ描きの連続斜行文で飾る。下半はヘラケズリ，上半はナデ仕上げの頸部は基部がしまって外反すると思われる。脚は三方に長方形透しをもつ。236は雛形風の小型壺。胴部は底が平坦でややつぶれ，口頸部はゆるやかに外反して口唇部を上につまみあげてつくる。底部と胴下方段⅓をヘラケズリ，ほかをナデて仕上げる。

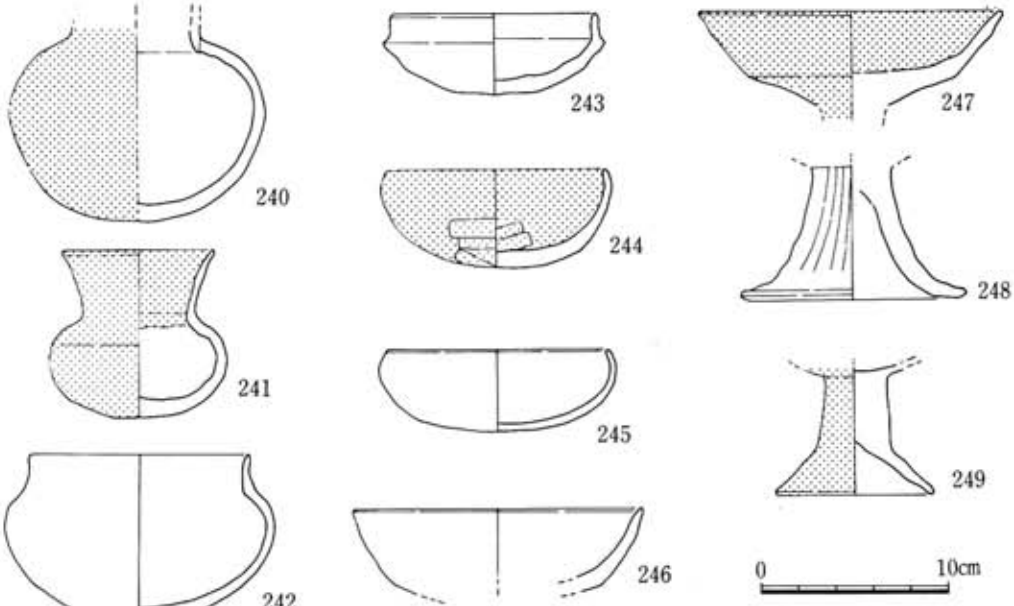


Fig. 69　ＳＴ014古墳出土土師器実測図

甕239は口頸部があまり開かず，カキメ調整のあと沈線と波状文を施す。口唇部はナデられて段をもつ。胴部はあまり肩が張らず，最大径約50cmと推定される。

土師器（Fig. 69，PL. 37）

壺，杯，椀，高杯がみられる。

壺は240が直立口縁とみられる丸底壺。胴部は最大径が中位やや上にあってつぶれた感がある。外面丹塗りである。杯245，246と共に盛土下から出土した。241は小型丸底壺で，口縁部が外反気味に大きく開き，胴部はやや扁平である。口縁部と胴部外面はヘラミガキで丹を施す。242は広口壺で，口縁部は短く直立し，胴部は扁平な丸底となる。外面全体ヘラミガキしている。

杯243は須恵器を意識したもので，受部と直立した立ち上がりをもつ。全体ナデ仕上げである。須恵器杯との並行関係は不明であるが，立ち上がり，法量などからⅣ期に推定したい。

椀は小型244，245と大型246との２種がある。前者は口縁部が内湾して内側に傾き，口径12cm前後。244は全面丹塗りで口縁部ナデ，底部から体部にかけては内外面ともヘラケズリである。245は口体部ヨコヘラミガキ，底部付近を不定方向ヘラミガキしている。後者246は高杯かもしれない。内湾気味に開き，内外面ともヨコヘラミガキである。

高杯は大型247，248と小型249の２種がある。247は丹塗りの痕跡をのこす。杯部は口縁部が段をなして折れて外にのびる。内外面とも調整はナデ。248脚はタテにヘラナデし，さらに裾をヨコナデしている。249は脚部のみ残存する。丹塗りで，脚筒部はタテナデ，裾をヨコナデしている。

鉄器（Fig. 71，PL. 43）

鉄鏃が２点ある。277は平根式ののみ形で，鋒は凹形の刃部をもつ。273は刀子形の尖根式，

茎の端を一部欠くものの，ほぼ完存する。

装身具（Fig. 72・73, PL. 44）

耳環6，土玉6が出土した。耳環には金銅製と金製の2種がある。金銅製のものは大型の285と中型の292, 302とがある。いずれも遺存状態が悪く，特に292と302は表面が腐触して細くなっている。金製の307と308は，断面円形の細い金線を曲げたものでほぼ同じつくりを示し，それぞれ玄室床面の東西に離れていたが，単なる耳環というより，本来一対の垂飾のつなぎ部分残欠であったと考えられる。土玉328～333は大型の玉で黒色を呈す。

ＳＴ015古墳（Fig. 70～72, PL. 38・43・44）

須恵器と土師器が若干，ほかに鉄鏃，耳環が出土した。

須恵器（Fig. 70）

提瓶のみ器形が知られる。提瓶263の胴部は厚味があり，耳は鉤形になると思われる。横面には三重の同心円波状文を配し，カキメ調整している。

土師器（Fig. 70, PL. 38）

須恵器を意識したとみられる2種の杯がある。264は稜ははっきりしないが，立ち上がりが内傾してのびる。内外面とも細かくヘラミガキし，外面に黒色物質を塗布する。265は口径が大きく，立ち上がりがほぼ直立する。口縁部と内面はナデ，底体部内面はヘラケズリのあとナデと思われる。黒色物質が塗布された痕跡を残し，264の蓋の可能性もある。

鉄器（Fig. 71, PL. 43）

鉄鏃が1点出土した。272は平根式で，腸抉が深く，鋭い逆刺をもつ。鋒はわりと鈍く，全体に厚味がある。

装身具（Fig. 72, PL. 44）

耳環はすべて金銅製で大型の286～289と中型の293, 298, 299とがある。表面はやや荒れているものが多いが，全体に遺存は良好である。

ＳＴ016古墳（Fig. 70・73, PL. 38・44）

須恵器と土師器が若干出土した。ほかに管玉，土玉がある。

須恵器（Fig. 70, PL. 38）

蓋，杯および甕がある。

蓋253は坩の蓋とみられる。口縁部は沈線をおいてやや外反気味に長い。天井部はヘラケズリしている。250～252はＢⅡａ類の杯蓋。

杯は258, 259, 260がＢⅡａ類，261がＢⅡｂ類である。

甕262はやや肩の張った胴部に短く外反した頸部に平坦にナデた口縁部がつく。胴部は外面タタキのあとかるくハケを当て，内面は同心円文をそのまま残す。

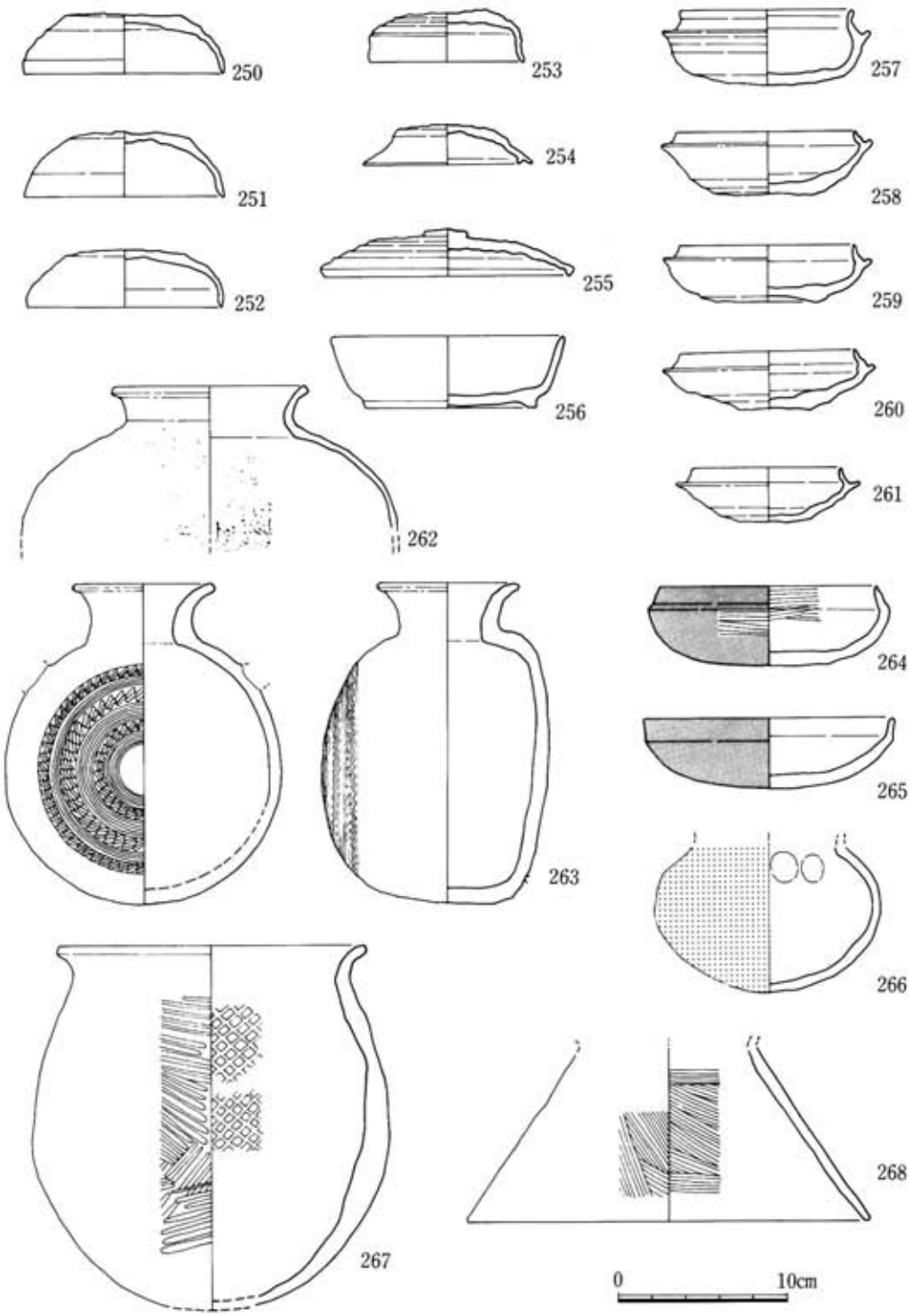


Fig. 70　ＳＴ015～ＳＴ018・ＳＴ020古墳出土須恵器、土師器実測図

土師器（Fig. 70, PL. 38）

丸底壺と脚がある。

丸底壺266はやや底が尖り気味で，中位から下半をヘラケズリのあとナデ，肩位をナデて仕上げ，内面の口縁部との接合部を指で押える。器面は荒れているが，丹塗りと思われる。

脚268は上に盤がのるかもしれない。大型品である。内外面ともハケメ調整し，さらに裾部をナデて仕上げている。

装身具（Fig. 73, PL. 44）

管玉1，土玉7がある。管玉318は緑色の碧玉製で太身のもの。一方から孔を穿っている。また土玉346～354は黒色で，一方から孔をあけている。

ＳＴ017古墳（Fig. 70～73, PL. 38・43・44）

須恵器，土師器（Fig. 70, PL. 38）

ほとんどが細片で少量，ほかに刀子1，勾玉1，耳環2が出土した。そのうち器形のわかる土師器甕267は丸底で，胴部最大径が中位やや下方にあり，口縁部は胴部からつづけてゆるやかに外反し，口唇部をナデてまるめる。胴部外面はタタキ，内面に当板の格子目文を明瞭に残す。砂粒を含み，黄土色を呈す。

鉄器（Fig. 71, PL. 43）

278は茎を欠く刀子身部の残欠で鋒が鋭くなって反りかえる特徴がある。

装身具（Fig. 72・73, PL. 44）

勾玉310は水晶製で，研磨による稜をわりと残す。下端の反りは比較的少ない。また耳環294, 295は中型の金銅製品である。表面が荒れている。

ＳＴ018古墳（Fig. 50・70, PL. 25・38）

須恵器および土師器が少量，それと紡錘車1点が出土した。そのうち器形のわかる杯257（Fig. 70, PL. 38）はＡⅡａ類で，体部から口縁部の立ち上がりにかけて古式の特徴を示す。

紡錘車48は暗緑色の滑石製で，全体に研磨整形がやや雑である（Fig. 50, PL. 25）。径4.7cm，厚1.5cm，孔径0.9cm。

ＳＴ019古墳（Fig. 72, PL. 44）

須恵器および土師器は器形不明な細片が若干，耳環1点が出土したにすぎない。

耳環306は小形の金銅製で遺存は良好である。

ＳＴ020古墳（Fig. 70・73, PL. 38・44）

須恵器および土師器が少量出土した。ほかに，勾玉1，切子玉1がある。

須恵器（Fig. 70, PL. 38）

器形のわかる蓋255はＣＩｂ類，杯256はＣｃ類である。

装身具（Fig. 73, PL. 44）

勾玉309は淡褐色の瑪瑙製で研磨による稜を残し，孔は一方から穿っている。切子玉311は水晶製で２段各６面に研磨を加えたやや大型のもの。孔は一方からあけている。

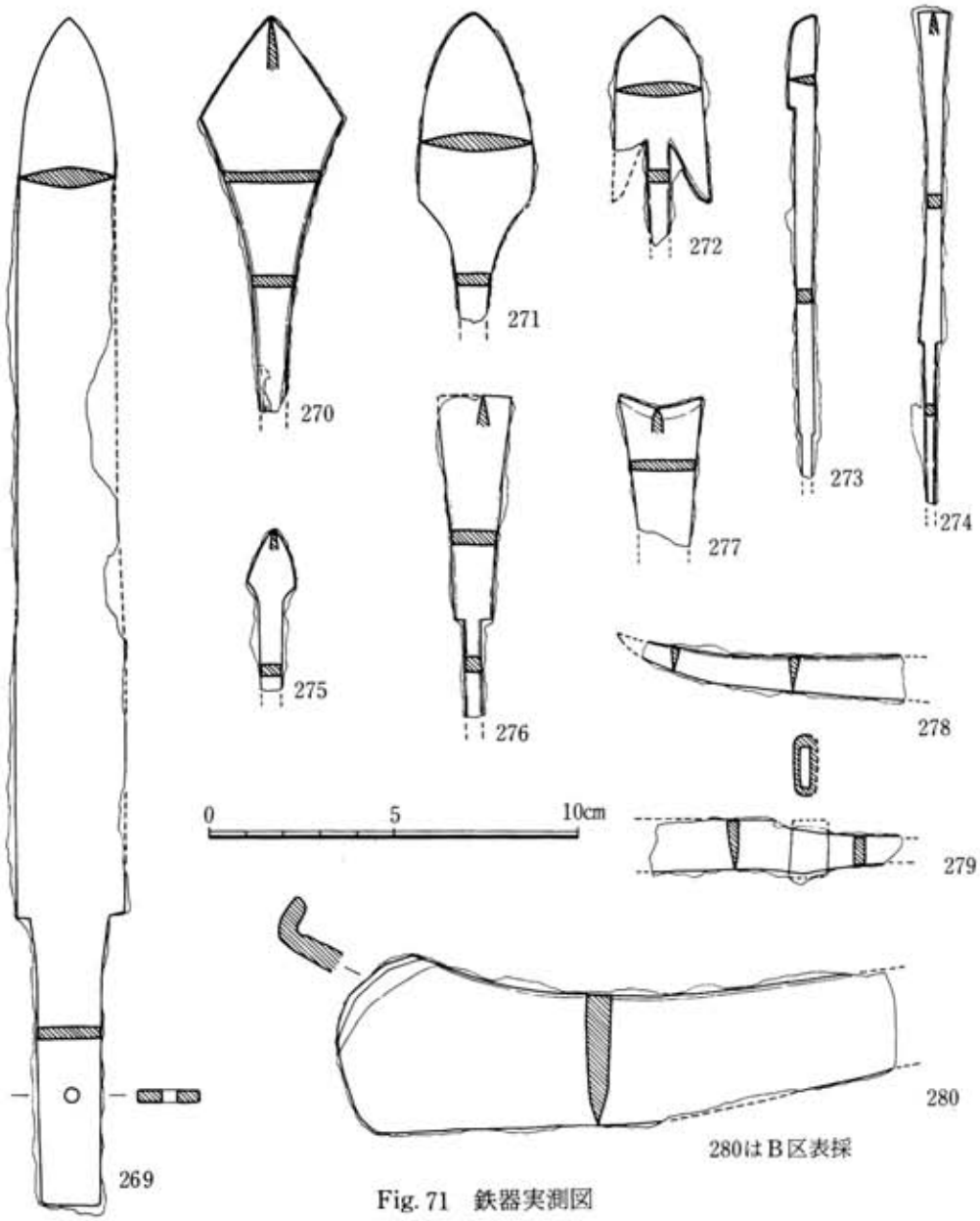


Fig. 71　鉄器実測図

ＳＴ021古墳

須恵器および土師器の細片が数点出土したが，器種，器形の知られるものはない。

ＳＣ023石棺墓（Fig. 71，PL. 43）

鉄剣１，刀子１が出土したが，うち刀子は調査中に盗難にあって不明である。

鉄剣269は全長32.2cm，身は長さ24.4cm，幅2.9cm，厚さは鎬の部分で0.4cmである。身部には鎬をもつが，鋒以外は不明瞭である。関は両方からやや斜めに切れて，茎に目釘孔をもつ。刃部一部を欠くが，遺存は比較的良好である。

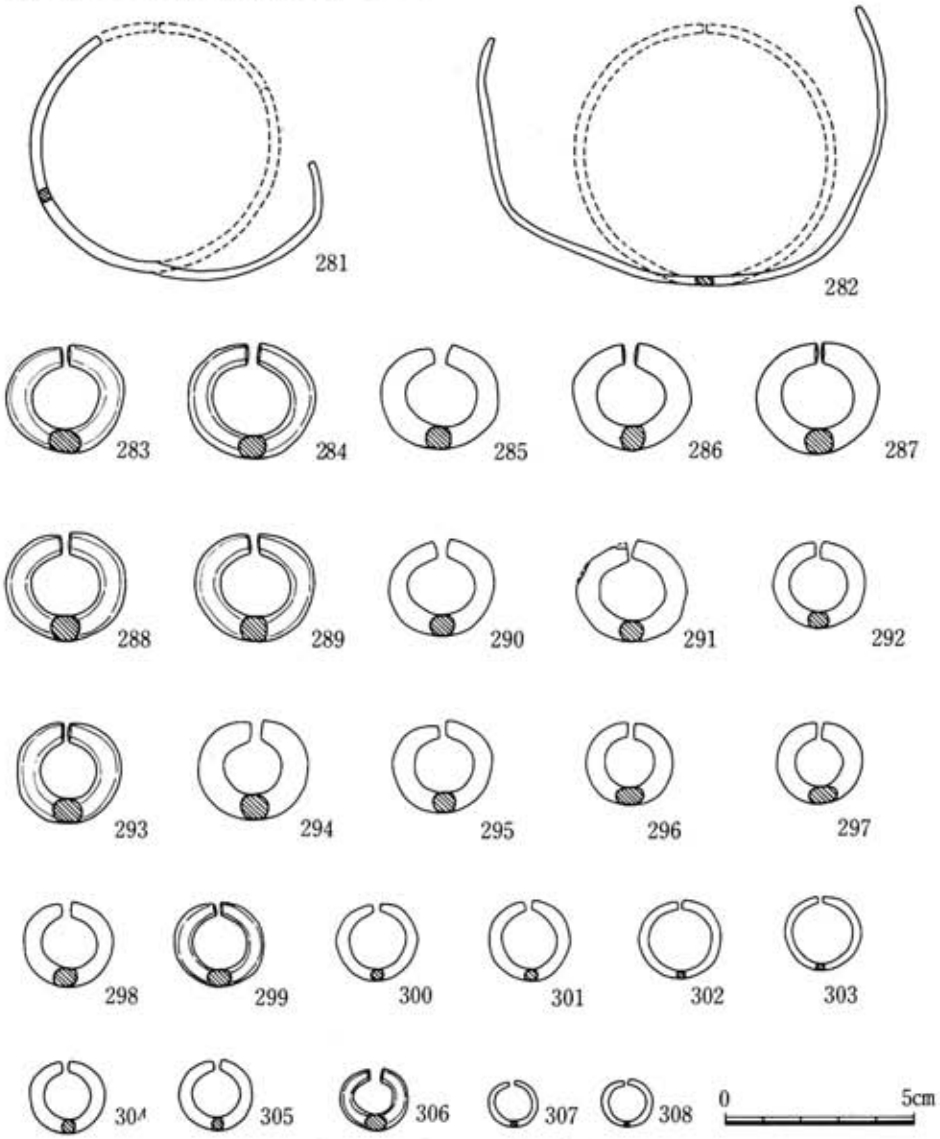


Fig. 72　銅釧・耳環実測図

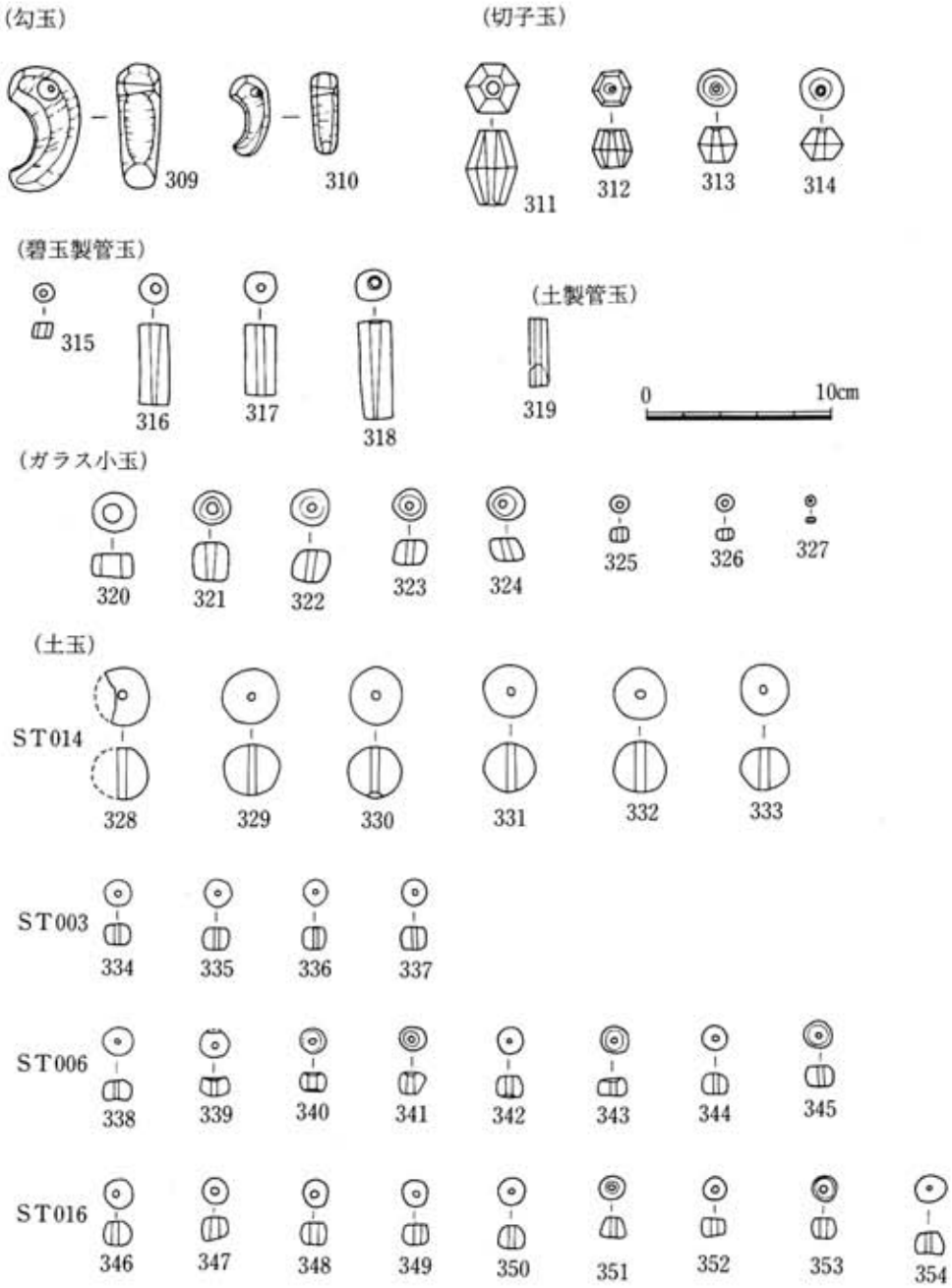


Fig. 73　玉類実測図

ＳＢ025住居跡

埋土中より若干の土師器片が出土したが，器形の知られるものはなく，時期は不明である。

ＳＢ026住居跡（Fig. 74，PL. 39）

すべて土師器で，甕，小形丸底壺，椀の３種がある。

遺　　物

甕355は球状胴部で，口縁部は内湾気味に開いて口唇部をナデにより平坦にする。胴部内面へラケズリ，外面はハケメ調整，口縁部はナデて仕上げる。器壁はかなり薄い。甕356はこれより一回り小型でやや粗製のもの。胴部は内面がへラケズリのあと下半をナデ，外面はハケメ調整のあと下半をナデ，口縁部はナデ仕上げであるが，内面一部にハケメを残す。

小型丸底壺358は口縁部が胴部径よりやや大きく開いて直線的にのびる。内外両面で部分的にハケメを残すが，ナデ仕上げである。

椀は基本的に丸底であるが，形態，調整等は様々である。法量は363が体部立ち上がりがわりと垂直でやや大ぶり，365は浅い。調整は内外両面ともハケメ調整のあとナデるのが普通であるが，特にナデの部分，程度は様々である。360は底部外面をへラケズリ，361は口唇部を除いて両面ともハケメのまま，また365は底部外面のみ一部ハケメがみられる。359は粗製手捏のもの。外面は指で押え，内面は簡単にへラケズリしている。

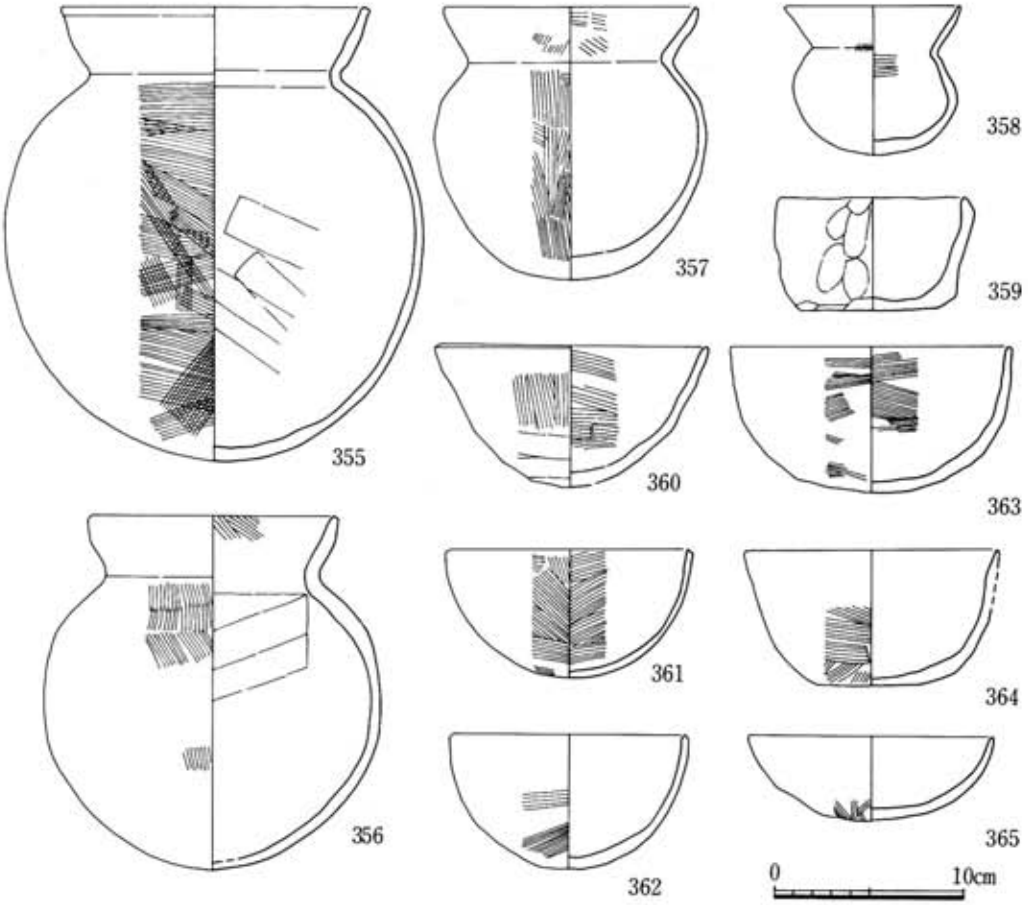


Fig. 74　ＳＢ026住居跡ＳＫ030竪穴出土土師器実測図

ＳＢ027住居跡（Fig. 75・76, PL. 40・41）

土師器のみ，器種が多種にわたり，壺，甕，小型丸底壺，高杯，椀などが出土した。

壺366は口頸部に二重口縁の名残りをとどめるものの退化が著しく，稜がはっきりしない。胴部は最大径が中位やや上にあって底がややすぼまる。胴部外面ハケメ，内面ヘラケズリ，口頸部をナデている。甕367～370は丸底胴部で，口縁部はほぼ直にのびる357，358，口唇部がやや内湾する371，外反する369，370の３種がある。ただし口唇部はほとんどがナデられて丸味をもつ。調整は胴部外面ハケメ，内面ヘラケズリ，口縁部ナデが普通であるが，ハケメを口縁部内面につける368，胴部内面につける370もある。372～378は小型丸底壺。器形および法量に変化が大きい。口縁部の特徴からおおまかに分類すれば，口径が胴最大径より小さい372，373，ほぼ同じ374～376，口径が胴最大径より大きく口縁部が長くのびて開く377，378の３種がある。ただし口縁部の細かな特徴はそれぞれ個体差がある。調整は甕に似ている。379も小型丸底壺であるが，これには脚が付く。

高杯380～385は杯部立ち上がりが明瞭な段をもって外反し，脚は裾が折れて開く。杯部および脚部外面はほとんどがハケメ調整のあと全体をていねいにナデて仕上げられている。杯部内面はナデであるが382のみハケメ調整痕を残す。

椀は386の場合，口唇部がナデられて丸味をもつ。内面および外面底部をヘラケズリ，外面一部ハケのあとナデ仕上げ。387はやや深目で，口唇部が薄く外反気味につまみあげられ，内外面ともナデて仕上げている。388～393は手捏品である。

以上は同時期の一括資料であるが，甕をみるかぎり布留式系統でも新しい様相を示すものと考える。また生活用土器を混えて，二重口縁壺や小型丸底壺，高杯，手捏土器といった祭祀的性格のつよい土器群が主体となっている点が大きな特徴である。

ＳＢ028・ＳＢ029住居跡

埋土中より若干の土師器が出土したが，器形の知られるものはなく，時期は不明である。

ＳＫ030竪穴（Fig. 74, PL. 39）

甕と椀がある。甕357は小型のもので，胴部は最大径が中位やや上にあり，口縁部はほぼ直線的に開いてその端部をわずかに内湾気味とする。胴部内面はヘラケズリ，ただし底部は厚い。胴部外面から口縁部にかけてはハケメのあとナデ仕上げである。

椀は丸底の362と平底にちかい364とがある。共に外面がハケメ調整のあと上半をナデ，内面はナデ仕上げであるが，362は部分的にヘラでナデたあとを残す。

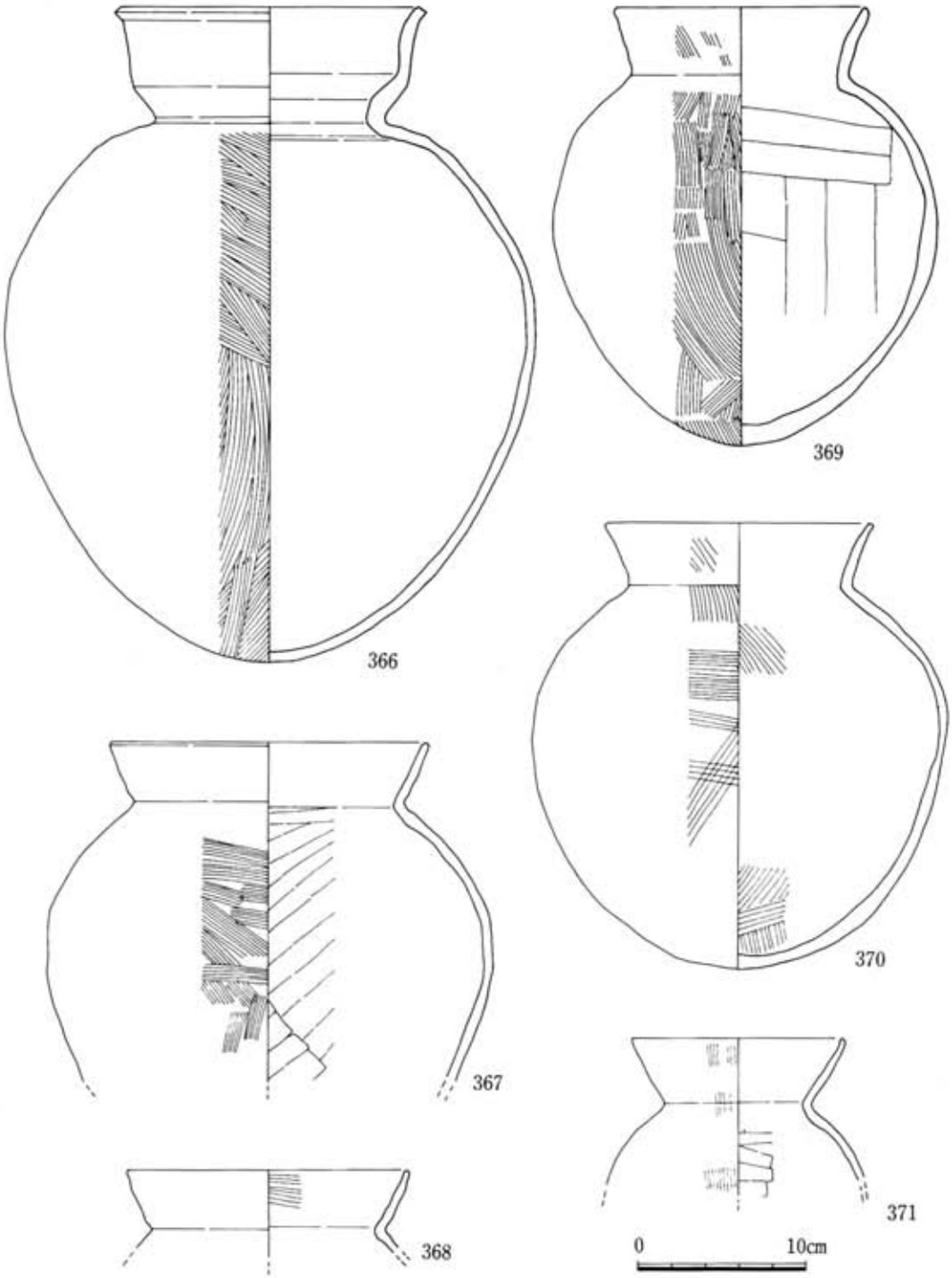


Fig. 75　S B027住居跡出土土師器実測図(1)

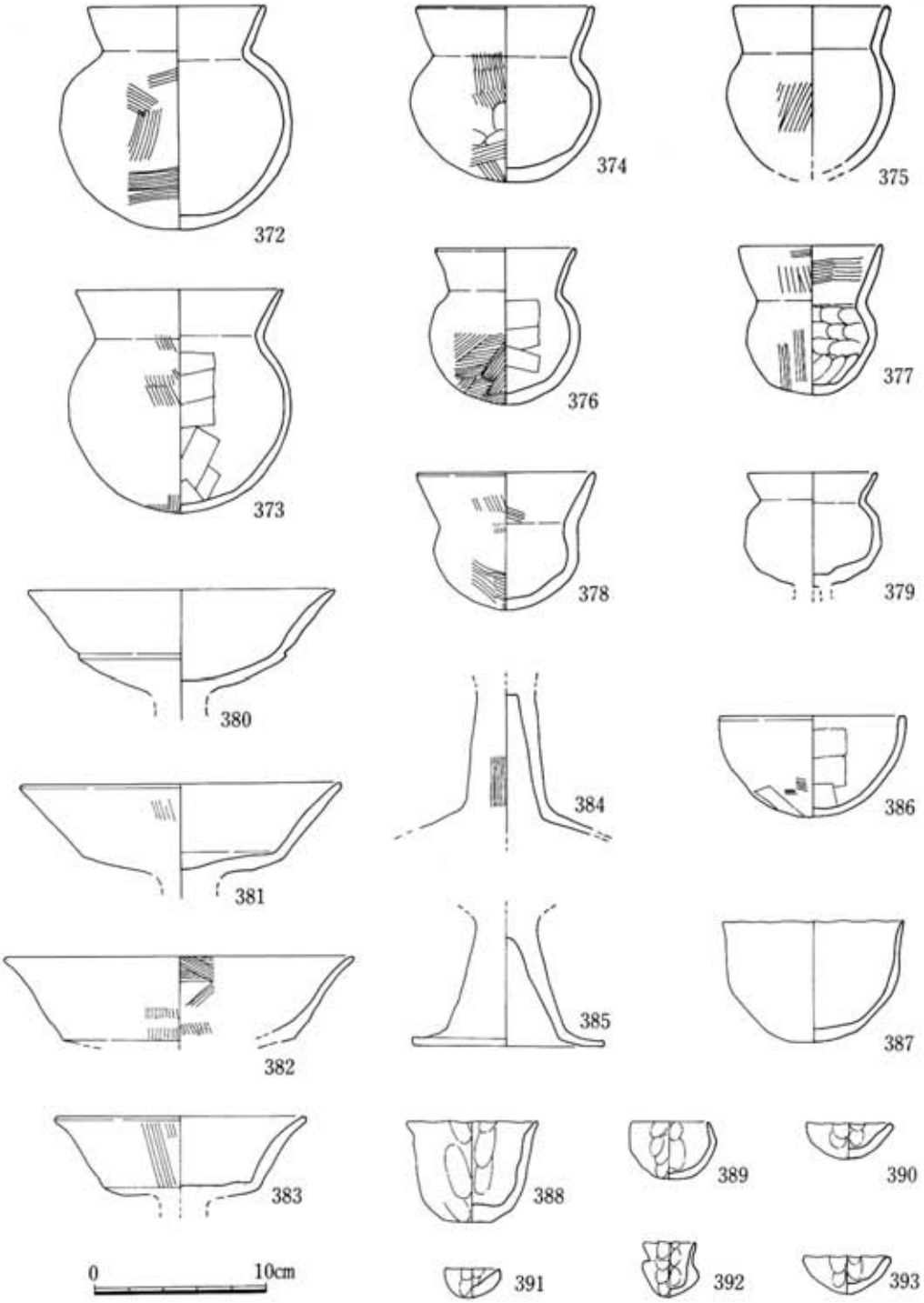


Fig. 76　S B027住居跡出土土師器実測図(2)

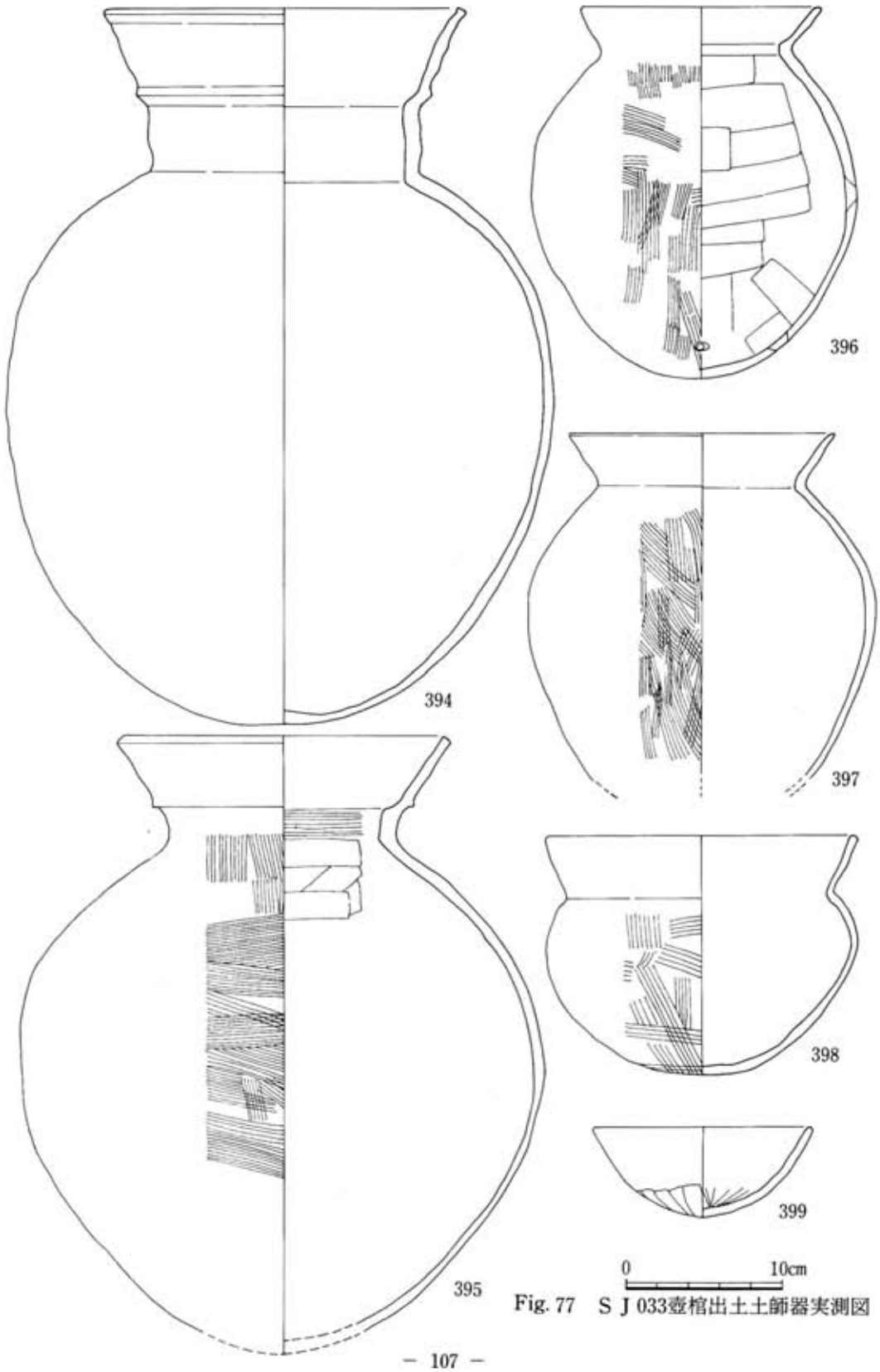


Fig. 77　ＳＪ033壺棺出土土師器実測図

ＳＪ033壺棺墓（Fig. 77, PL. 42）

壺が本体で，他に甕および広口坩，椀が伴出している。すべて土師器である。

394は二重口縁の系統の丸底壺。胴部は最大径がほぼ中位にあり，底部に向かっていくぶんすぼまる。頸部は直立し，わずかな段をもって口縁部がやや外反気味に開く。調整は胴部外面ハケ，内面ヘラケズリ，胴部底付近と口頸部をナデて仕上げる。**395**は頸部内面および口縁部外面で頸部の直立した二重口縁の名残りをとどめるが，口頸部が一体化してゆく方向を窺わせる。胴部はやや尖り気味の丸底と思われ，最大径はほぼ中位にある。調整は頸部内面と胴部外面がハケ，胴部外面はヘラケズリし，口縁部をナデている。

副葬品のうち，**396**と**397**はほぼ同大の甕であるが，口縁部は前者がやや内湾気味に開くのに対し，後者は直線的に開く。また，前者は胴部底ちかくに焼成後の穿孔がみられる。共に口唇部は丸くナデられ，調整は胴部外面がハケ，内面ヘラケズリ，口縁部をナデている。**398**広口坩は口径が胴部最大径にほぼ等しい。胴部は外面に粗いハケ，内面をヘラケズリし，口縁部はやや内湾気味にのびてナデ仕上げ。**399**椀は体部下半を内面ヘラケズリ，外面をヘラでタテナデ，上半をヨコにナデている。

以上は同時期の一括資料であるが，甕からみるかぎりでは布留式系統でも新しい様相を示す。

(5) 歴 史 時 代

中世以降とみられる陶磁器，土師器は少量出土しているが，遺構に伴うのはＳＪ034中世墓の一群の土師器のみである。

ＳＪ034中世墓（Fig. 78, PL. 26）

鉢**407**は埋葬施設本体に用いられたもので，体部が底部からつづいてほぼ直に開く。内外両面ともヨコハケのあと丁寧にナデ，外面中位を指で押えている。赤褐色で砂粒を含む。口径31.9cm，器高15.5cm。

この鉢に伴って杯および皿が10点出土した。杯は３類ある。Ａ類**400**，**401**は底部からはっきり稜をもって体部が外反気味に開く。口径約11cm，高さ約3.6cm。Ｂ類**402**，**403**は立ち上がりが底部と明瞭な稜をなさず，ほぼ直に開く。口径約11cm，高さ約３cm。Ｃ類**404**，**405**はＡに似るが小型である。口径約7.5cm，高さ約2.3cm。Ａ類４点，Ｂ類３点，Ｃ類２点ある。

皿は１点のみで，**406**は立ち上がりが短く開く。口径8.5cm，高さ1.4cm。

杯，皿はいずれも底部は糸切り，体部はロクロ回転ナデである。

類例は佐賀市藤附Ａ遺跡，六本黒木遺跡，小城町北浦遺跡などからも出土している。容積からみて，小児用かあるいは成人用とすれば再葬に用いられたものと考えられる。時期ははっきりしないが，共伴する杯，皿からみて中世のうちに納まるものと考える。

遺　　物

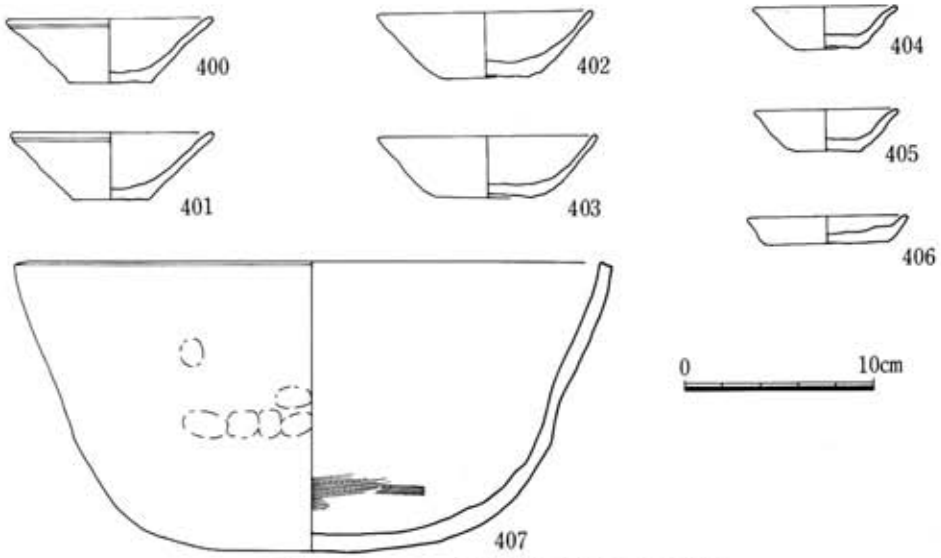


Fig. 78　ＳＪ034中世墓出土土師器実測図

4．小　　結

はじめに述べたとおり，今回の調査では旧石器時代から中世に至るまでの遺構，遺物が検出され，そのうち大部分が古墳時代に属するものであった。以下において若干，本遺跡の形成過程と，あわせて遺構，遺物のうち問題となる二，三について検討を行い，まとめにかえる。

まず各時期の遺構について，旧石器時代から弥生時代では今回検出された遺構は甕棺墓ＳＪ031とＳＪ032の２基にすぎない。２基の甕は共に縄文晩期前半に属すと考える。これに続く後半の壺棺は近辺では最近，丸山遺跡や礫石遺跡[註1]で多くみられるが，晩期前半の埋葬例は少なく，佐賀市大門西遺跡[註2]で知られるくらいである。大門西遺跡ＳＪ001甕棺墓の場合，やはり単棺とみられるが，甕の形態は口縁部の折れ方が少なく，ゆるやかに外反する。しかし，本遺跡の縄文時代の様相は夜臼期まで含めて晩期の土器は知られるものの，いずれにせよ遺構は甕棺２基だけで，生活跡との関係は不明である。またこの時期の他の特殊な遺物では擦切り穿孔の石庖丁が注意される。唐津市菜畑遺跡[註3]でも出土しているが，朝鮮半島と九州でこれまで６例しかなく[註4]，縄文晩期ないしは弥生初頭にかかり，かつ朝鮮半島の石庖丁との関係がたどれるところから，初期農耕文化の系統を論じるうえで，興味ある資料といえる。

本遺跡を特徴づけるのは古墳時代である。時期は前期から終末まで長期間にわたるが，前期にはＢ区で居住区が形成される一方，やや離れてまばらではあるが，埋葬も行われている。埋葬遺構ではＳＪ033壺棺墓と，おそらく古墳前期であろうＳＣ032ほかの石棺が古く，つづいて

竪穴式石室のＳＴ005古墳が今回調査された限りでは最も早い時期の古墳として出現する。年代は住居跡および竪穴の場合，土器からみてＳＢ026，ＳＢ027，ＳＫ030が５世紀前半，ＳＢ025およびＳＢ028も，ＳＴ005古墳周溝に切られていることからみて，ほぼ同時期と推定され，したがってこれら住居跡等の一群は，方位，配置および出土遺物から，ほぼ同時期に存在した可能性がつよい。ＳＪ033壺棺墓もこの時期と考える。類例は佐賀市藤附Ｅ遺跡ＳＴ001古墳，東脊振村西一本杉遺跡などから出土している。また，ＳＴ005古墳は竪穴式石室では末期のものとして，５世紀中頃に置いて考えたい。

なお，ＳＢ027住居跡から出土した土師器および土玉を祭祀的性格のつよいものとみれば，住居内における何らかの祭祀を意味するものか，あるいはさらに集落内における特殊な性格の竪穴といえるか，今後の類例増加をまって検討する必要があろう。

古墳時代後期になると，調査区内では住居跡は全くみられなくなり，横穴式石室の古墳だけが造営される。本遺跡全体としては調査区外まで古墳の分布が拡がるので，全体の群形成過程を問題にするのは無理であるが，調査された古墳については，主に出土した須恵器の型式，および横穴式石室の特徴から Tab. 2 のように築造・追葬年代を考えている。

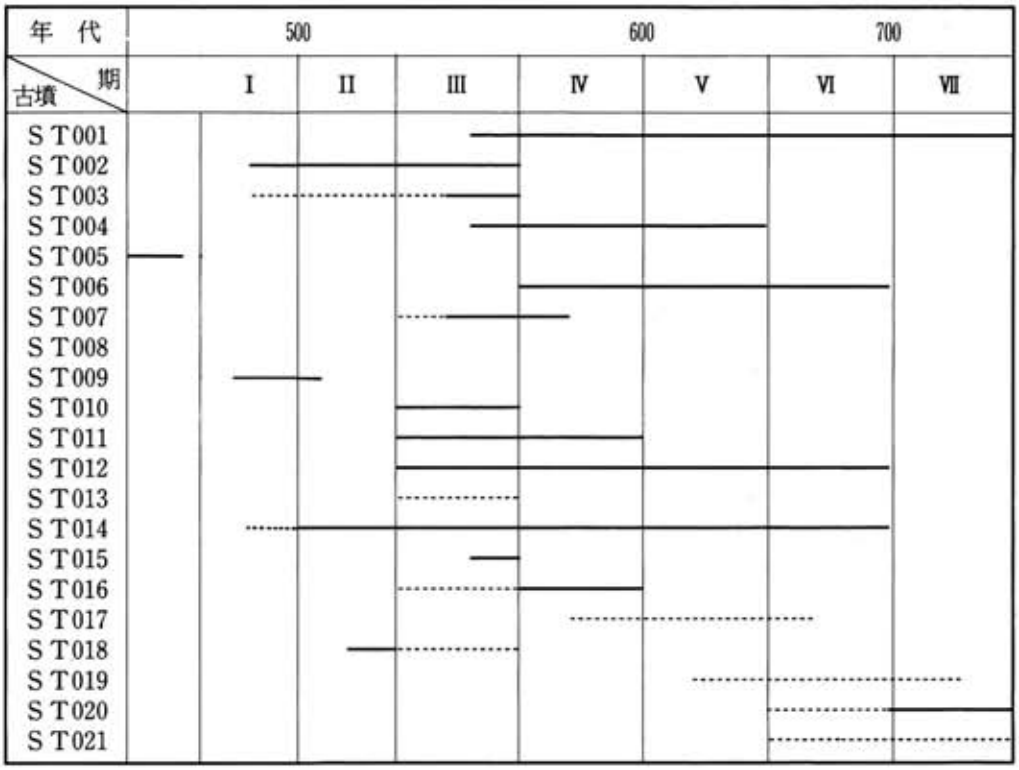
須恵器編年の時期に従っていうと，第Ｉ期のおわり頃にＳＴ009古墳やＳＴ002古墳が，やゝ遅れてＳＴ014古墳が出現，ＳＴ003古墳も石室の形態からこの時期に置かれよう。第II期にＳＴ018古墳が加わる。Ｄ区でも，Ｂ区にあまり遅れず古墳の築造が開始されるわけであるが，この頃までは概して数は少ない。

最も盛行するのは第III・第IV期である。この時期には，やはり両地区で新たな築造が行われるが，傾向としては，それまでどちらかというとやや優勢であったＢ区から，Ｄ区に築造の主体が移ってゆく。それがはっきりするのは第Ｖ期以降で，以後，新たな古墳築造はＤ区に限られるようである。

この間，いずれの古墳においても追葬が盛んであり，中でもＳＴ014古墳の場合は第Ｉ期の終わり頃から第VI期まで異常に長く続いているが，大体は３世代程度であったと思われる。VII期になっては，ＳＴ020古墳にしてもおそらく追葬のみで，築造は第VI期に遡ると考えたい。

横穴式石室の形態の変化は，第Ｉ期から第II期にかけては初期両袖式の特徴が顕著[註5]で，玄室は幅に対して軸長がやや長めの長方形ないしは台形，これに簡単な短い羨道が付く。玄室幅指数($\frac{玄門幅}{玄室長}$)は奥壁幅との関係でみた場合ＳＴ002，ＳＴ003古墳が0.6前後，ＳＴ009，ＳＴ014古墳が0.8前後であるが，羨道側の幅でみた場合は0.6前後で，全体としては長めの印象をうける。玄門指数($\frac{玄門幅}{玄室幅}$)[註6]はＳＴ009古墳が0.2，他は0.3〜0.35で，全体に玄門の幅は狭い。中でも最古式とみられるＳＴ009古墳にそれがよくあらわれている。これらの石室は羨道が未発達で，ＳＴ002，ＳＴ009古墳は墓道からいきなり玄室に入る，といった形態にちかい。ただ第II期の後半には，ＳＴ018古墳のように，方形の玄室をもち，平面形のみでみればいわゆる肥後

Tab 2 西原遺跡古墳編年表



型の系統につながるような新たな石室も登場している。

第Ⅲ期以降になると石室の形態は多彩になる。先の初期両袖式はＳＴ007，ＳＴ010，ＳＴ011古墳などにひきつがれるが，全体のわかるＳＴ011古墳でみると，玄室が長さを減じ，玄門指数が0.4をこえると共に，羨道がやや発達して長くなっている。またこの時期，ＳＴ012，ＳＴ016古墳に見られるように，方形の玄室とこれに倍する長い羨道をもつ石室が出現する。両石室とも玄室は各壁緑泥片岩１枚であるなど，共通性の高い特徴をもつ。玄門がまだ狭い点からいえば，この種の形式では先駆的なものといえよう。第Ⅲ期末に位置するＳＴ001古墳も玄室が方形にちかく，長い羨道をもつが，石材は花崗岩で，玄門は広くなって羨道と一体化する傾向を示すなど，新しい要素がみえている。またＳＴ004古墳のように玄室各壁とも花崗岩１枚石で長い羨道をもつ，いわゆる巨石墳も，同じ第Ⅲ期末に出現する。

Ⅳ期では，ＳＴ017古墳はＳＴ018古墳に後出する方形玄室であるが，玄門部においては框石がなく，玄室と羨道を通して床石が敷きつめられるようにかわり，玄門指数も0.53と玄門が広くなる。ＳＴ006古墳は長方形の玄室にこれとほぼ等しい長さの羨道がつく。これもやはり玄門部に框石がなくなり，またその指数も0.6に達している。

Ⅴ期以降，石室は退化した形成にかわってゆく。全体のわかるＳＴ020古墳でみると，玄室は長方

形で玄門指数0.6，羨道は短くなる。また，なによりも壁の積み方がぞんざいになり，腰石にしても立てて使う傾向がみえる。古墳文化終末期の時代相を示すといえよう。

本遺跡における古墳造営全体の変遷を年代的にいえば，まず5世紀中頃に竪穴式石室が出現，5世紀末以降横穴式石室に変わり，6世紀に入って盛行したのち，7世紀には衰退，8世紀には一部で追葬が行われるばかりになっていた，と考えられる。

そのほか，葬制に関する特殊な遺構，遺物としてはＳＴ014古墳盛土下の須恵器，土師器及び土玉の一群とＳＴ012古墳の石室開口部西脇及び周溝内の大量の甕が挙げられる。前者は墳丘盛土前の行為で，直接的には石室構築と関わる何らかの儀礼と推定する。[註7] またＳＴ012古墳開口部西脇及び周溝内の大量の須恵器甕は一般にはみられないもので，埋葬儀に関わる特殊な祭祀を示すものであろうか。周溝西南端の石組遺構の存在があわせて気になるところである。

平安時代以降の様相は明らかでない。ＳＪ034中世墓の存在あるいは青磁椀等の出土することからみて，中世には埋葬などが一部で行われていることは知られるが，遺跡としてはほぼ終焉していたと考えられる。

註1　佐賀県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報5』1983
註2　佐賀県教育委員会『大門西遺跡』1980
註3　田島龍太「菜畑遺跡」(『末盧国』) 1982
註4　下条信行「東アジアにおける外湾刃石庖丁の展開」(『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』1980)
註5　柳沢一男「北部九州における初期横穴式石室の展開」(福岡考古学研究会『九州考古学の諸問題』) 1975
註6　羨道をもたない石室が多いので，ここでは羨道幅指数に準じて玄門幅を扱う。
註7　周辺の類例に礫石Ｂ遺跡ＳＴ004古墳，丸山遺跡ＳＴ004古墳などがある。

うら　　た

浦　田　遺　跡

遺跡名：浦　田（略号ＵＲＴ）
所在地：神埼郡東脊振村大字三津字上三津西

浦　田　遺　跡

1．遺跡の概要

浦田遺跡は，神埼郡東脊振村大字三津に所在する。

遺跡周辺には脊振山系南麓より佐賀平野に向かってなだらかに派生し南にのびる志波屋吉野ヶ里丘陵，二塚山丘陵等の多くの丘陵が存在する。この地域は県下でも特に遺跡の密な所である。

旧石器時代の遺跡は，三田川町二塚山遺跡[註1]，中原町姫方遺跡[註2]など数ヵ所に過ぎないが，縄文時代になると戦場ヶ谷縄文遺跡[註3]，その他屋形原[註4]，堤北方，切通し北方，井手口などの遺跡がある。

弥生時代になると鏡，鉄器，貝釧その他多量の副葬品を出土した二塚山遺跡[註1]をはじめとして三津永田[註5]，吉野ヶ里[註6]，横田，切通[註7]など数多くの埋葬遺跡が分布する。集落遺跡としても，西石動[註7]，下石動[註7]，西前田[註8]などの遺跡が存在する。また，銅戈鋳型（西石動[註3]），4本の銅矛（三田川町桜馬場）などを含め数多くの青銅器，鉄器，装飾品が発見されている。

古墳時代になると中原町姫方[註2]，姫方原遺跡[註9]，上峰村五本谷遺跡などで方形周溝墓が出現する。前期古墳としては本書収録の西一本杉遺跡で4世紀代の古墳が確認されている。中期になると姫方前方後円墳，目達原古墳群[註10]が形成される。後期には山麓部，丘陵上に群集墳が形成され，巨石墳の伊勢塚前方後円墳などが築造される。

歴史時代になると辛上廃寺[註11]，塔の塚廃寺[註12]，霊仙寺[註13]など古代から中世にかけての寺院跡がある。

浦田遺跡は，脊振山系から南にのびる権現山南斜面の舌状丘陵の標高39～42mに位置する。調査前は杉林で比較的遺跡の残りはよかった。調査は西よりA・B・C区に分けて行い，検出した遺構は，古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡35軒，掘立柱建物跡6棟，古墳2基溝1条である。

註1　七田忠昭　『二塚山遺跡』　佐賀県教育委員会　1979
註2　木下之治他　『姫方遺跡』　佐賀県教育委員会　1974
註3　松尾禎作　『佐賀県考古大観』　祐徳博物館　1957
註4　杠　一義　『屋形原遺跡』　上峰村教育委員会　1979
註5　七田忠志　「三津永田遺跡」　『教育佐賀』　1954
註6　金関丈夫他　『日本農耕文化の生成』　東京堂　1961
註7　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第4集』　佐賀県教育委員会　1981
註8　岩永政博　『西前田遺跡』　東脊振村教育委員会　1981
註9　木下之治他　『姫方原遺跡』　佐賀県教育委員会　1976
註10　松尾禎作　「目達原古墳群調査報告」　『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告第9輯』　佐賀県　1950
註11　松尾禎作　「東脊振村辛上廃寺址の調査」　『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告第5輯』　佐賀県　1936
註12　松尾禎作　「塔の塚廃寺址」　『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告第7輯』　佐賀県　1940
註13　田平徳栄　『霊仙寺跡』　東脊振村教育委員会　1980

Fig. 79　浦田遺跡周辺遺跡分布図

1　谷渡古墳群
2　堤土塁跡
3　二塚山遺跡群
4　上地遺跡
5　船石遺跡
6　切通遺跡
7　一本谷遺跡
8　下石動遺跡
9　西石動遺跡
10　西一本杉遺跡
11　山古賀遺跡
12　上三津栗原遺跡
13　夕ヶ里遺跡
14　戦場ヶ谷縄文遺跡
15　浦田遺跡
16　西前田遺跡
17　松原遺跡
18　横田遺跡
19　寺ヶ里遺跡
20　三津永田遺跡
21　下三津前方後円墳
22　伊勢塚
23　志波屋六本松乙遺跡
24　的遺跡
25　志波屋六本松遺跡
26　切畑遺跡
27　川寄遺跡群
28　利田柳遺跡
29　馬郡遺跡
30　吉野ヶ里遺跡群
31　田手一本黒木遺跡
32　目達原古墳群
33　下中杖遺跡

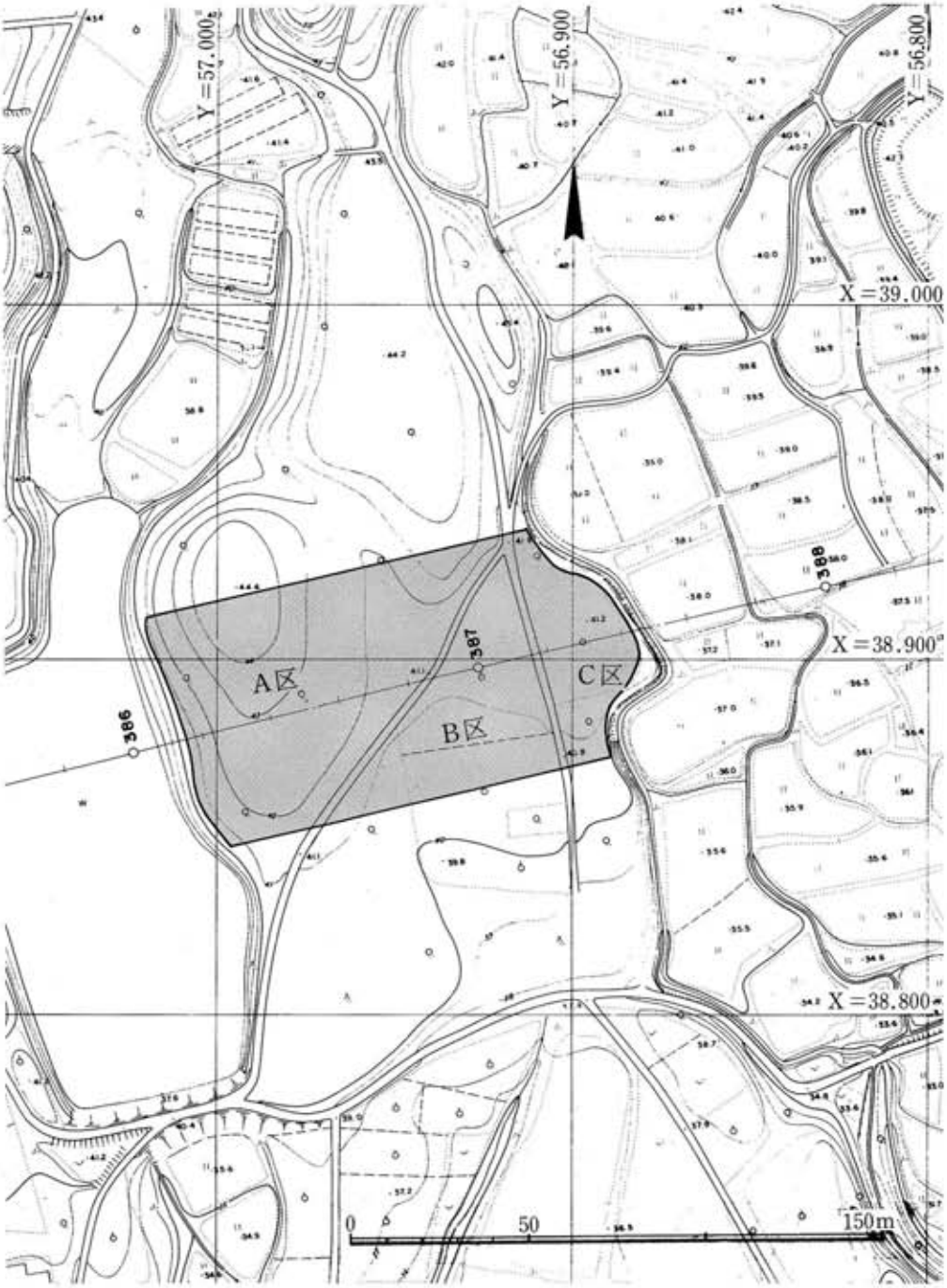
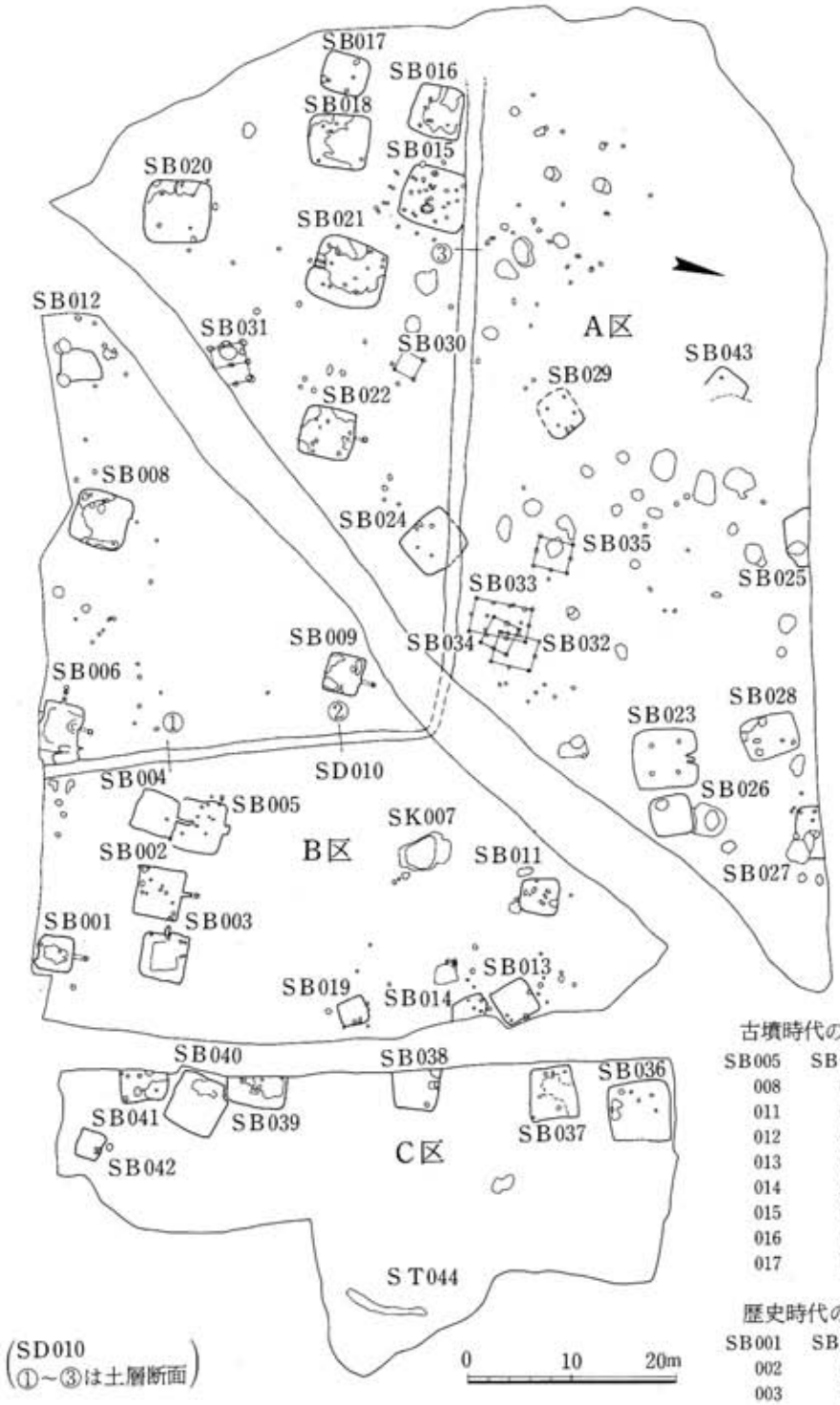


Fig. 80　遺跡周辺地形図



古墳時代の竪穴住居

SB005	SB018	SB029
008	019	036
011	020	037
012	021	038
013	023	039
014	024	040
015	025	041
016	027	042
017	028	043

歴史時代の竪穴住居

SB001	SB004	SB022
002	006	026
003	009	

Fig. 81　遺構配置図

2．遺　　構

遺構は竪穴住居跡35軒・掘立柱建物跡６棟・溝１条・土壙１基・古墳２基である。遺構の広がりは，調査の結果から南北に広がるものと考えられるが，これは地形からも首肯される。これらの遺構は近世のＳＫ007土壙を除くと，古墳時代後期と奈良時代末期～平安時代初期に大別され，その間は遺構が認められない。

古墳時代の遺構は竪穴住居跡27軒・掘立柱建物跡６棟と古墳２基である。竪穴住居跡は平面が方形と長方形があり，面積は大きいもので45㎡，小さいもので７㎡を測る。柱穴はほとんどが明確に確認できなかったが，４本主柱穴のもの３棟を確認した。ＳＢ015住居跡は竪穴の外側にも数個の小穴が規則的に回っており，特異な構造をなしていた。カマドをもつ住居跡は11軒存在する。カマドはほとんどが原形を留めていないが，石材や地山の黄褐色粘質土を用いて築造されている。また，その場所は東・南・西・北の壁面であり，規則性は認められない。掘立柱建物跡はすべてがＡ区で検出され，その規模は３間×２間が１棟，２間×２間が３棟，１間×１間が２棟存在し，比較的小規模な建物である。古墳は調査の関係で墳丘裾の一部の調査と，すでに墳丘や主体部が湮滅した古墳であるためその構造や規模については定かではない。

これらの遺構は，ＳＢ005・024・029住居跡を結ぶ線から北東地区にある遺構と，南西地区にある遺構に分けられ，そこには幅20～30mの空白地帯が存在する。南西地区の竪穴住居跡は北東地区の建物と比べると規模が割合大きく，また，内容的にも須恵器が多く出土している傾向がみられる。北東地区の竪穴住居跡は，その位置関係から，いくつかのグループに細分されると思われる。

この時期で特に注目されることは，竪穴住居跡にカマドが出現することである。カマドを持つ住居跡は全体の40％である。

歴史時代の遺構は竪穴住居跡８軒・溝１条がある。竪穴住居跡は，平面が方形と長方形が存在するが，そのうち６軒は方形である。その規模はＳＢ001・004・009住居跡の比較的小さな建物と，ＳＢ002・003・006・022の各住居跡の大きな建物に分類される。住居の構造は，ＳＢ026住居跡以外はカマドにたき出し口をもつ煙道が付き，その位置は北壁か西壁に構築している。溝は調査区中央をＬ字形に走り，西から南に水が流れていたものと考えられる。ＳＢ015・024住居跡を切っている。

これらの遺構はＳＤ010溝を境にして２つのグループに分類されるものと思われる。これは，ＳＢ006・009・022住居跡が溝に沿って等間隔に，意識的に配置されていると考えるからである。

この時期の特色は，掘立柱建物が存在しないことと，竪穴住居のほとんどに，たき出し口つきの煙道付きカマドが存在することをあげることができる。

(1) 古 墳 時 代

ＳＢ005住居跡（Fig. 82, PL. 50）

Ｂ区中央の南側に位置する。平面は長方形の竪穴住居跡である。長辺５ｍ，短辺4.4ｍ，深さ0.15ｍである。南壁がＳＢ004住居跡によって切られている。明確な柱穴は検出できなかった。北壁中央にはカマドが確認された。カマドは原形を留めないが，地山の黄褐色粘質土を用いて構築されている。遺物は床面の中央部から土師器の杯・甕などの破片が出土している。

ＳＢ008住居跡（Fig. 83, PL. 50）

Ｂ区南西に位置する。平面は１辺約5.6ｍの方形の竪穴住居跡である。壁は四壁とも残りが良好で深さ約0.3ｍである。四隅はいくぶん丸くなっている。柱穴は検出できなかった。北壁の西側には，１枚の花崗岩が立った状態で検出され，その付近に灰層と焼土が確認できた。これは，

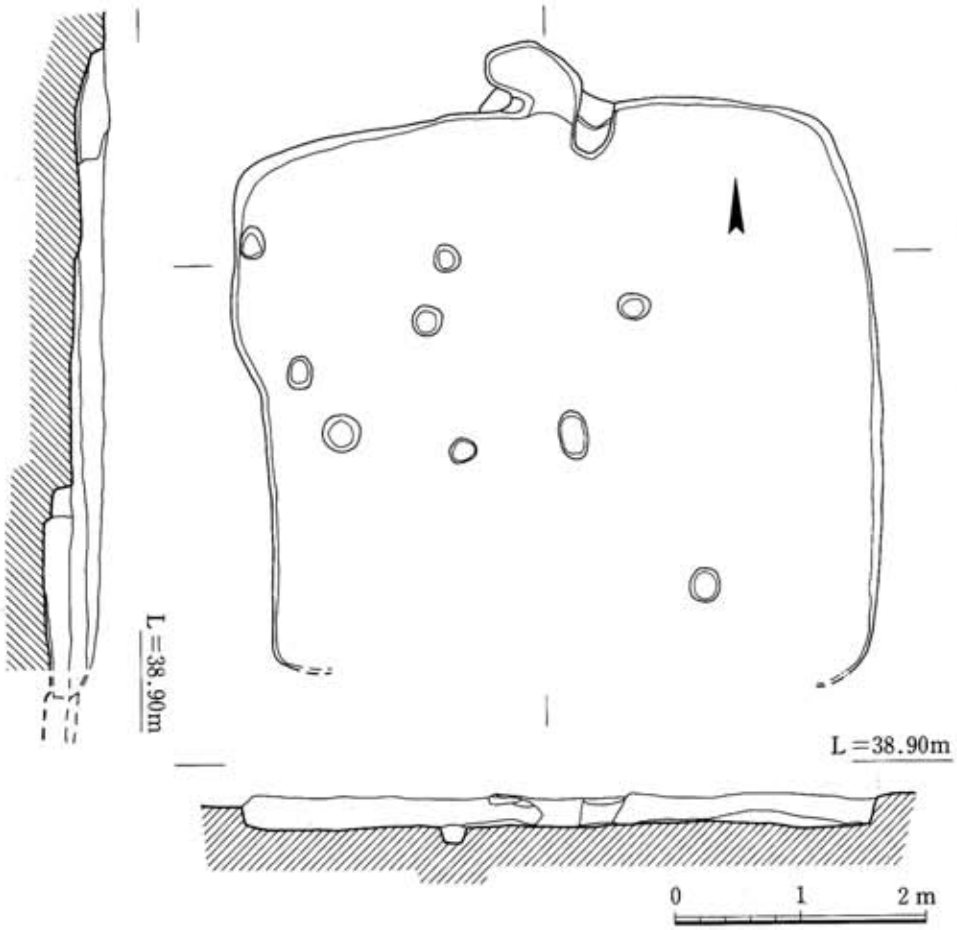


Fig. 82　ＳＢ005住居跡実測図

おそらくカマドが存在したものと思われる。なお，竪穴の西南部には大小５個の穴が確認されたが，その用途は不明である。

ＳＢ011住居跡（Fig. 85，PL. 51）

Ｂ区の北東部に位置する。平面が１辺約3.5mの方形の竪穴住居跡で，深さ0.25mである。柱穴は確認できなかった。北壁中央部には，長さ0.6m，幅0.8mのカマドが黄褐色粘質土を用いて構築されている。カマド周辺の床面から土師器の杯と甕などが出土した。

ＳＢ012住居跡（Fig. 84，PL. 51）

Ｂ区の南西端に位置する。平面は東壁の長い不整長方形の竪穴住居跡で，長辺3.6m，短辺3.0

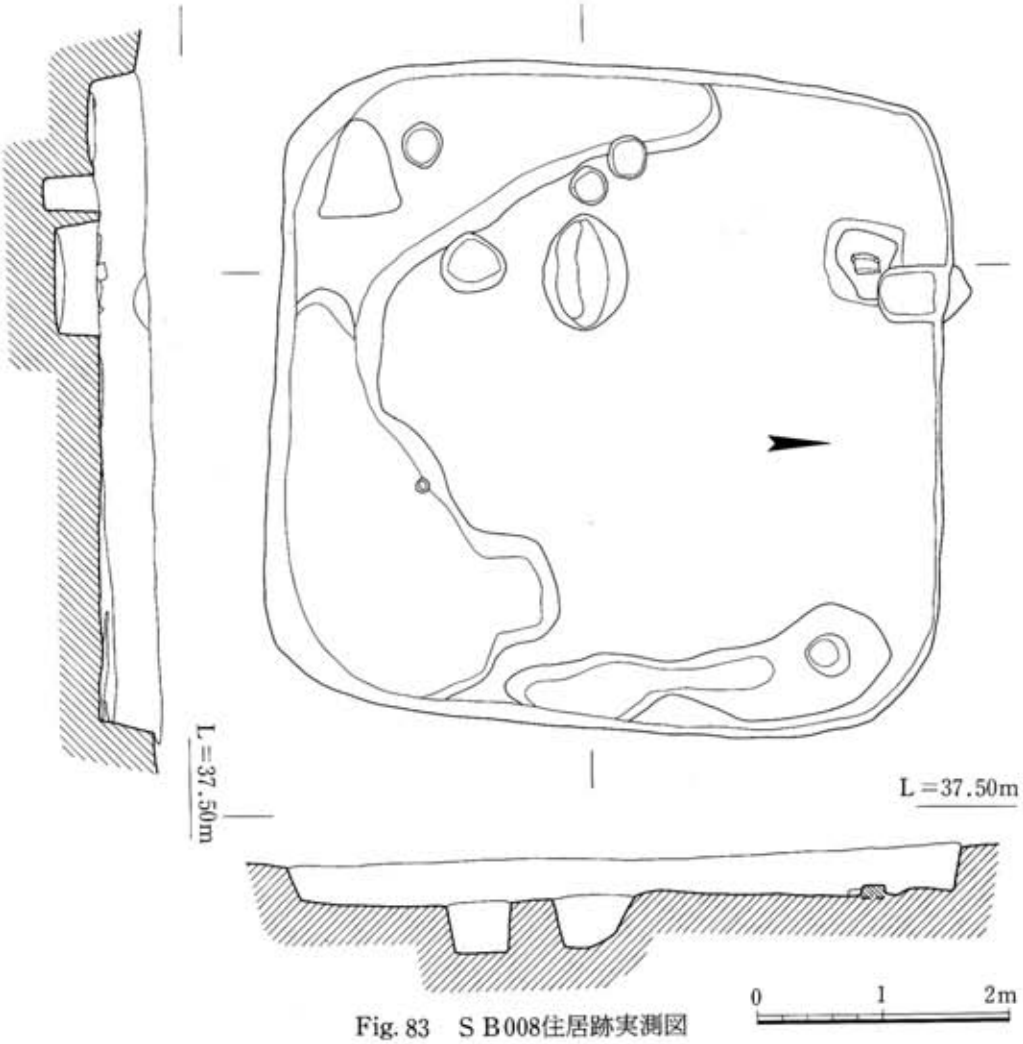


Fig. 83　ＳＢ008住居跡実測図

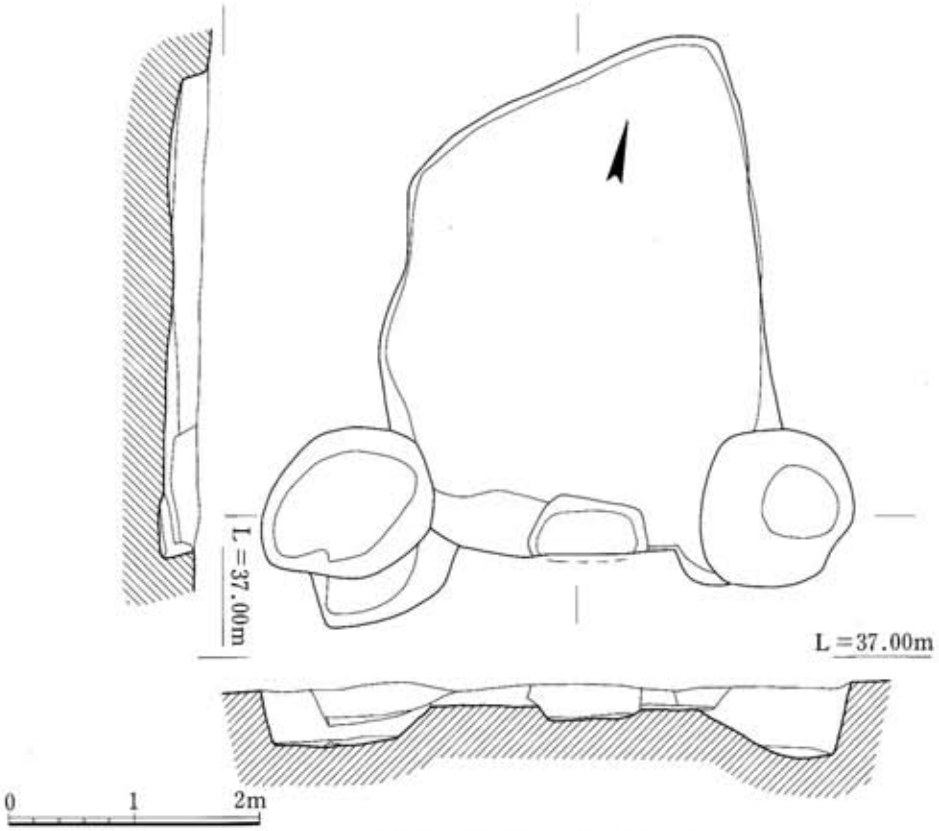


Fig. 84　ＳＢ012住居跡実測図

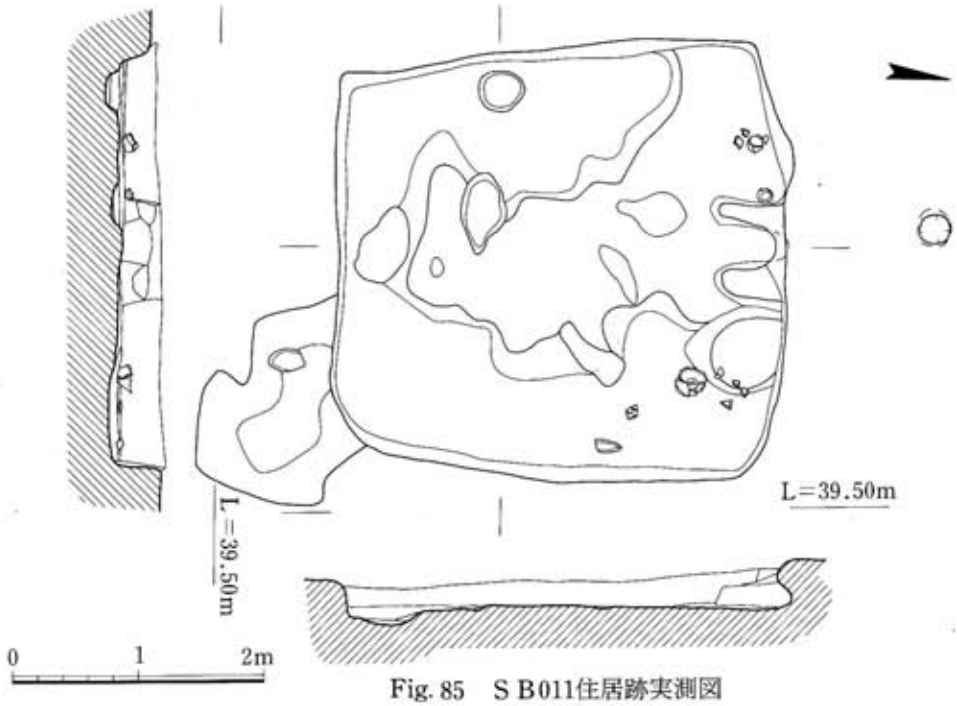


Fig. 85　ＳＢ011住居跡実測図

m，深さ0.3mである。南側の両隅は攪乱を受けている。柱穴は確認できなかった。出土遺物は土師器杯・皿，須恵器杯などである。

ＳＢ013住居跡

（Fig. 87，PL. 52）

Ｂ区の北東部に位置し，ＳＢ014住居跡に北接する。平面が一辺3.7mの方形の竪穴住居跡である。壁は良好に残存し，深さ0.2mである。柱穴は，竪穴内には明確に断定できるものはない。遺物は床面から土師器の皿・甕などが出土している。

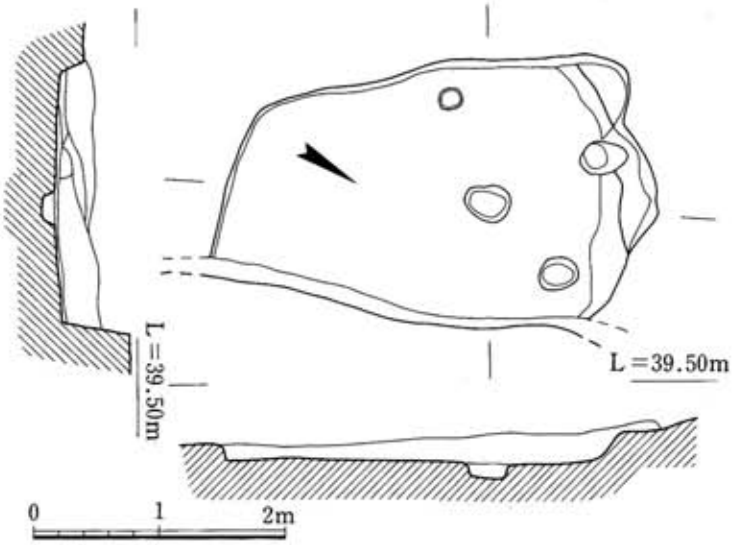


Fig. 86　ＳＢ014住居跡実測図

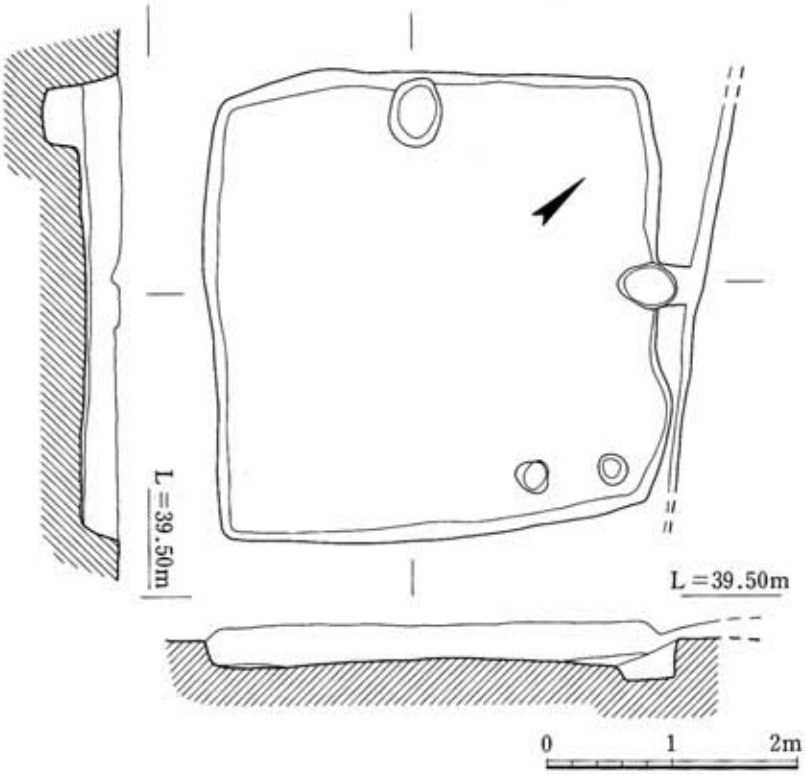


Fig. 87　ＳＢ013住居跡実測図

ＳＢ014住居跡（Fig. 86, PL. 52）

Ｂ区の北東部に位置する。調査区の関係で完掘できなかった。平面は方形と推測される。西壁の長さは3.3mで，深さは0.2mである。柱穴は確認できなかった。遺物は，土師器の杯・甕などが出土している。

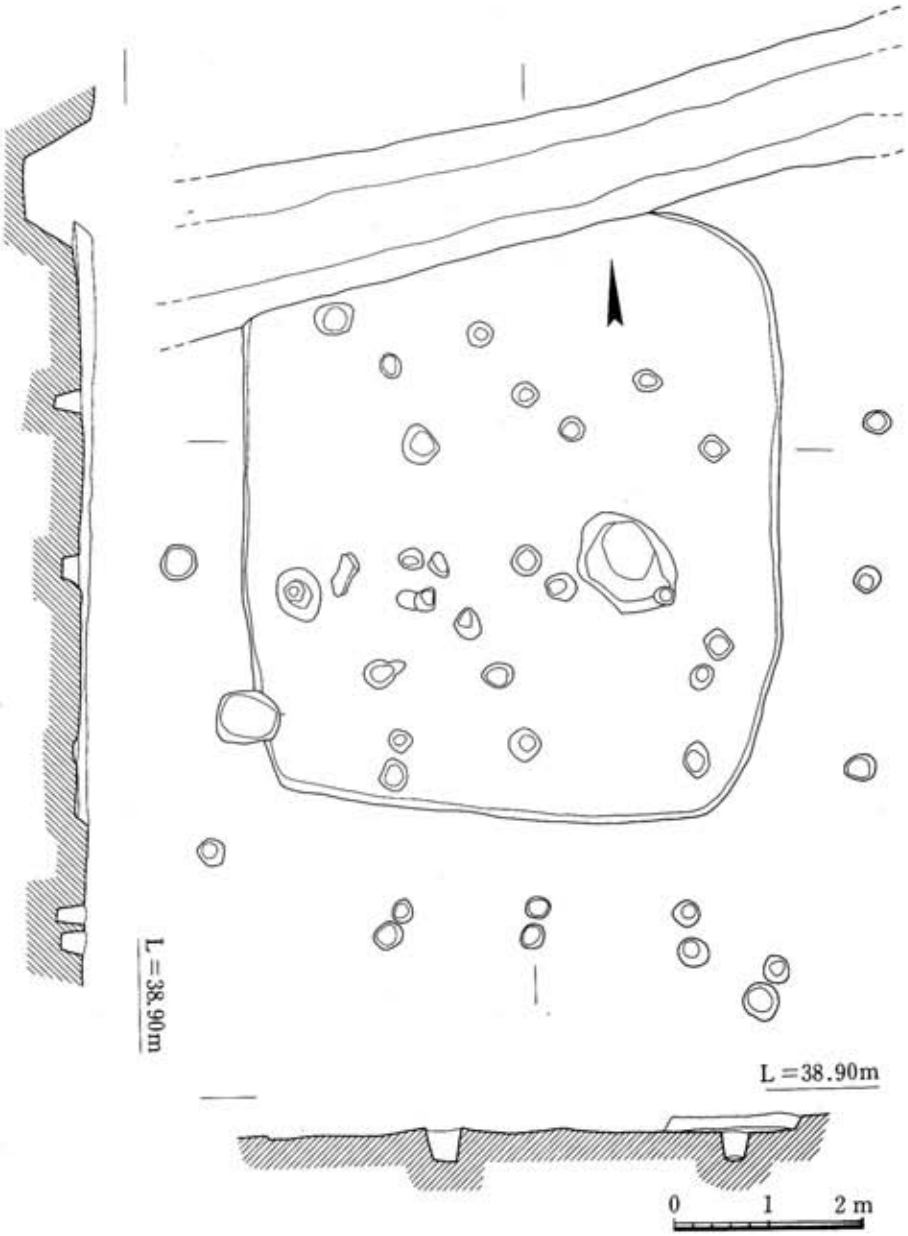


Fig. 88　ＳＢ015住居跡実測図

ＳＢ015住居跡（Fig. 88, PL. 53）

Ａ区の西側に位置する。平面は長方形の竪穴住居跡である。長辺6.6m，短辺5.7m，深さ0.15mである。北壁がＳＤ010溝によって切られているが，その他は残存良好である。竪穴内には多くの穴があるため，柱穴の断定は難しい。注目されるのは住居跡外の柱穴である。東西南壁の外には，それぞれの壁に沿い，径0.2～0.3m，深さ0.3mほどの穴が３個ずつ並ぶ。しかも，南壁のそれは重列になっている。おそらく，この住居跡に伴う柱穴であろう。遺物は，土師器，須恵器，黒色土器が出土した。

ＳＢ016住居跡（Fig. 89, PL. 52）

Ａ区の西側に位置し，ＳＢ015住居跡に西接，ＳＢ017･018住居跡に北接する。平面は１辺が５ｍの方形の竪穴住居跡で，深さ0.2mである。柱穴は北西部を残し，３ヵ所確認された。遺物は土師器，須恵器，黒色土器が出土した。

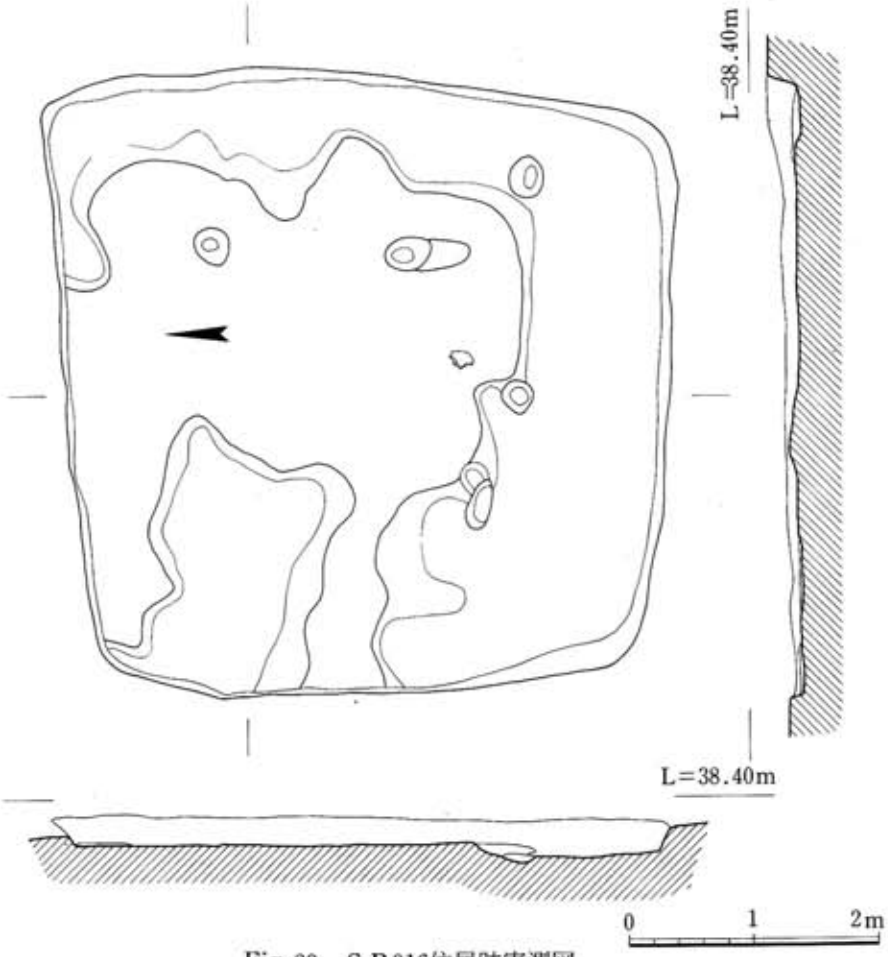


Fig. 89　ＳＢ016住居跡実測図

ＳＢ017住居跡（Fig. 91, PL. 53）

Ａ区の西端部に位置する。平面は長方形の竪穴住居跡で，長辺4.3m，短辺3.7m，深さ0.3mである。壁は良好に残存し，四隅がいくぶん丸みをなしている。柱穴は明確に断定できるものはない。遺物は，土師器杯・甑，須恵器杯・紡錘車などが出土した。

ＳＢ018住居跡（Fig. 92, PL. 54）

Ａ区の西端部にあるＳＢ017住居跡の東側に接している。平面は長方形の竪穴住居跡である。長辺5.9m，短辺5.3m，深さ0.3mである。壁は

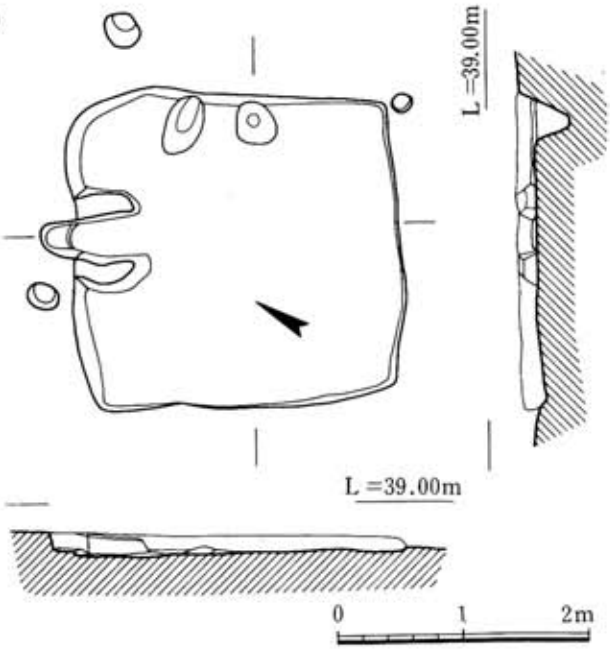


Fig. 90　ＳＢ019住居跡実測図

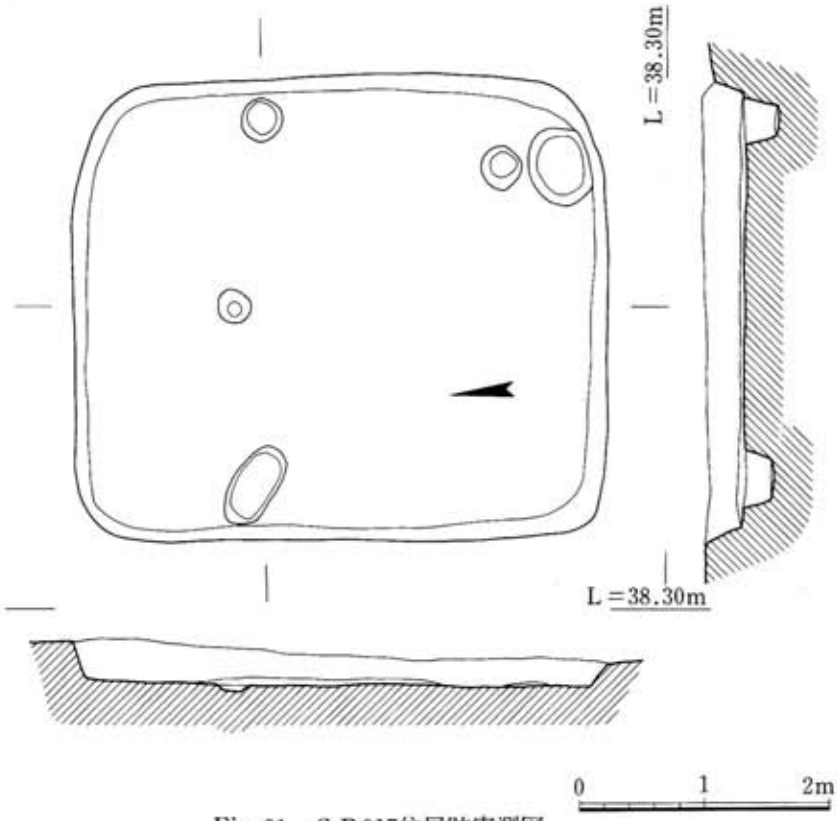


Fig. 91　ＳＢ017住居跡実測図

良好に残存している。柱穴は不明である。遺物は土師器の杯・甕，須恵器の杯が床面から出土した。

ＳＢ019住居跡（Fig. 90，PL. 54）

Ｂ区の東端中央に位置する。平面は１辺2.5mの方形の小型竪穴住居跡で，深さ0.1mである。北壁にカマドが構築されている。カマドは長さ0.8mで，煙出しが壁外にまでのびている特徴を有す。遺物は土師器，須恵器の杯が出土している。

ＳＢ020住居跡（Fig. 93，PL. 55）

Ａ区の西南隅に位置する。平面は長方形の竪穴住居跡である。長辺6.5m，短辺5.8m，深さ0.3

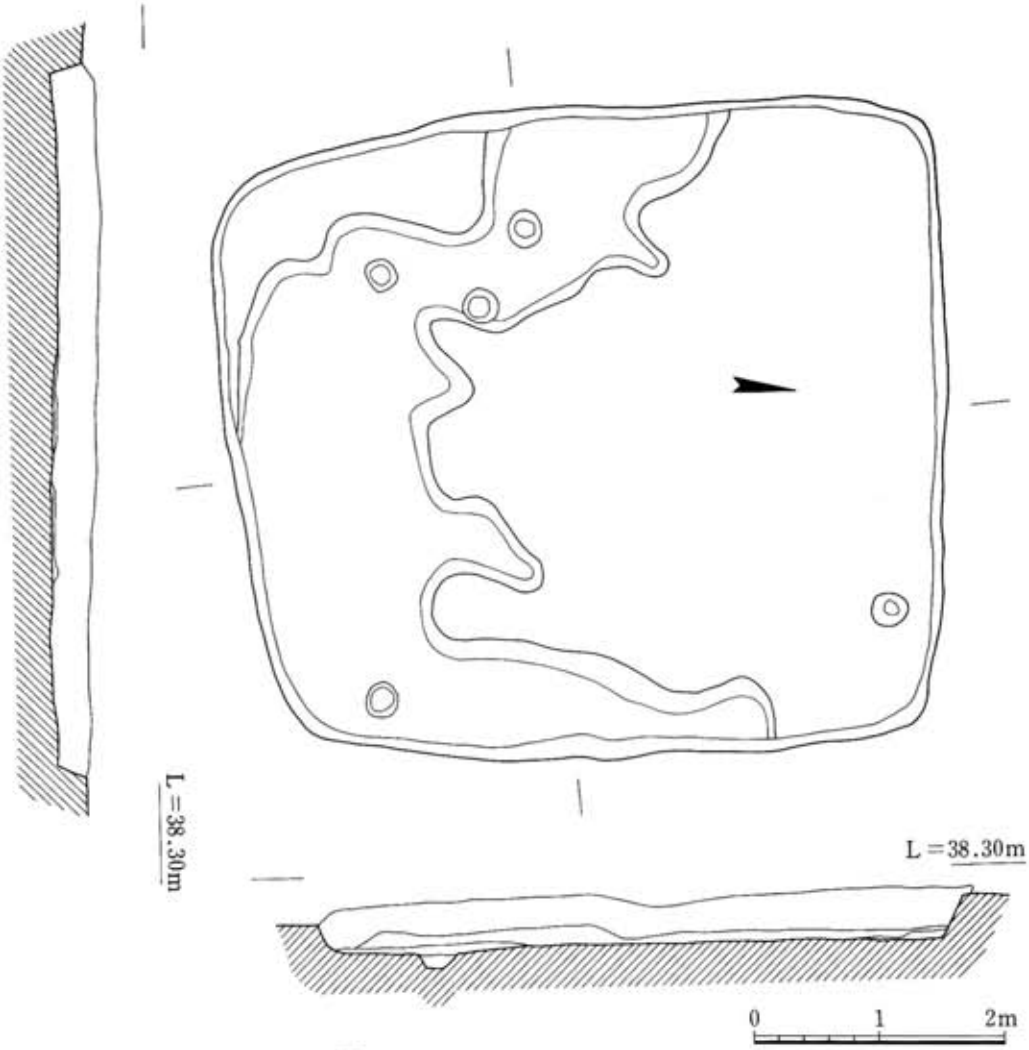


Fig. 92　ＳＢ018住居跡実測図

mである。壁はほぼ垂直に立ち，四隅はいくぶん丸みをなしている。柱穴は，径0.2mのものが4個中央部に確認された。床面は中央部分が周壁周辺部よりもいくぶん盛り上がり，堅く固められている。西壁中央には幅0.6m，長さ0.8mのカマドが黄褐色粘質土を使用して構築されている。

ＳＢ021住居跡（Fig. 94，PL. 56）

Ａ区の西南部に位置する。平面は一辺6.9mの方形の竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に立ち，深さ0.35mである。東壁は外側に張り出して丸味を有す。柱穴は，径0.3mのものが3個確認で

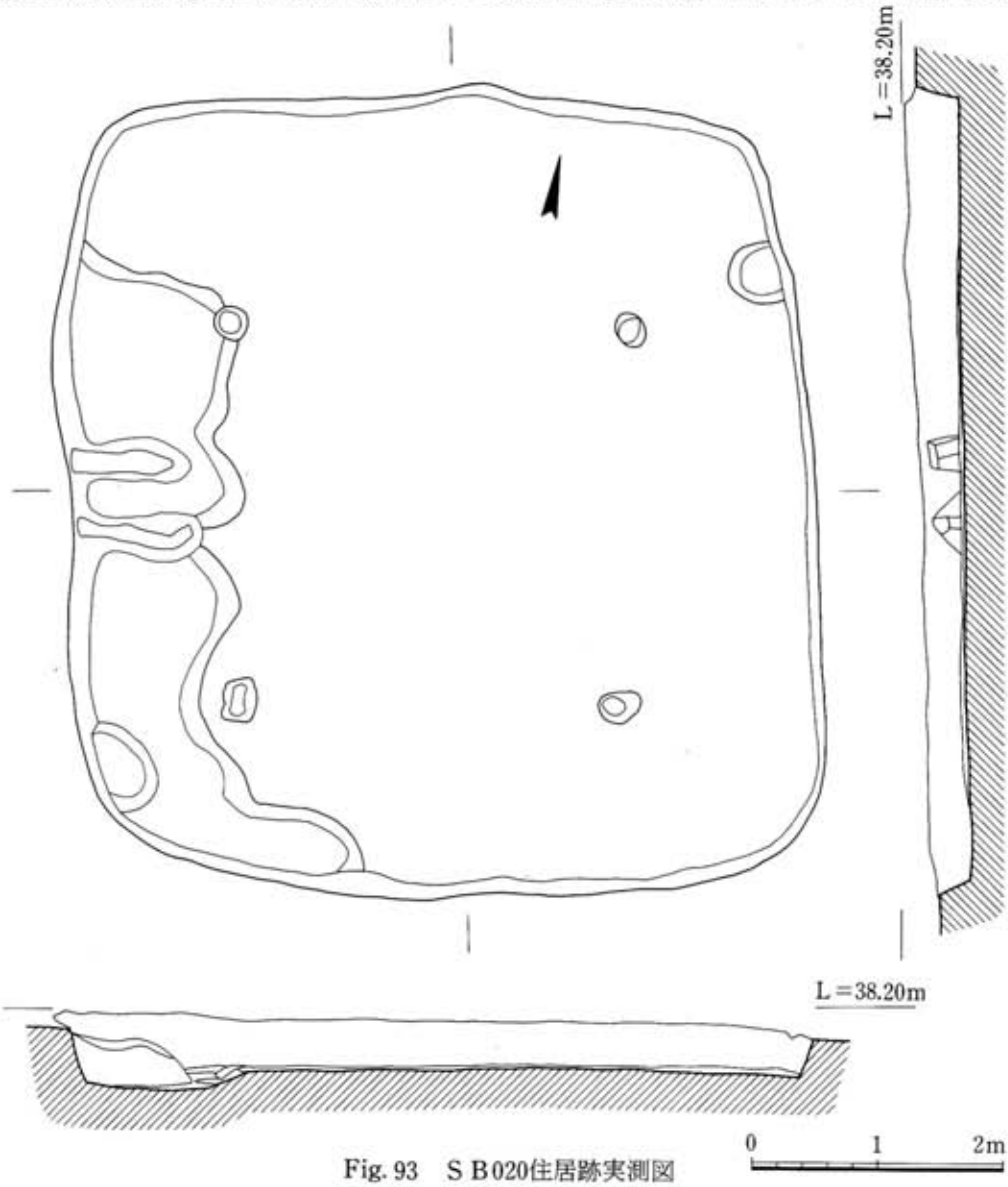


Fig. 93　ＳＢ020住居跡実測図

きた。床面は中央部が若干盛り上げられて，堅く固められている。南壁中央にはカマドが構築され，その東側で土師器杯，須恵器高杯などの多量の遺物が検出された。

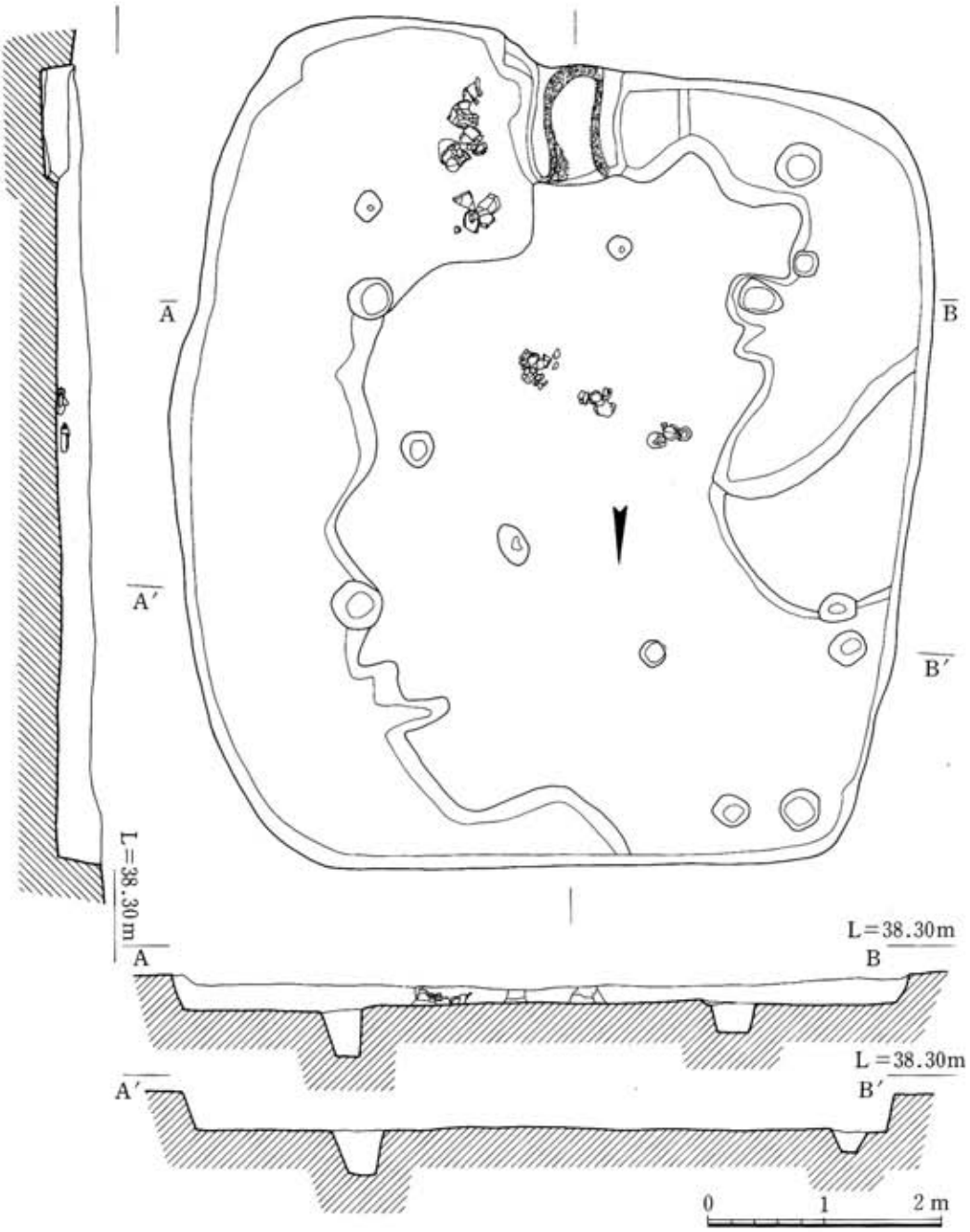


Fig. 94　S B021住居跡実測図

ＳＢ023住居跡（Fig. 95, PL. 57）

Ａ区の北東部に位置する。平面は長方形の竪穴住居跡で長辺6.2m，短辺5.8m，深さ0.23mである。柱穴は径約0.3m，深さ約0.4mで，４個が中央部に2.7m間隔で配置されている。北壁中央部には幅１m，長さ0.8mのカマドが構築されている。カマドの西側床面と，竪穴中央床面には土師器と須恵器の杯・甕などが一括して出土している。

ＳＢ024住居跡（Fig. 96, PL. 56）

Ａ区中央の東側に位置する。平面は長方形の竪穴住居跡で，長辺5.3m，短辺4.8m，深さ0.31

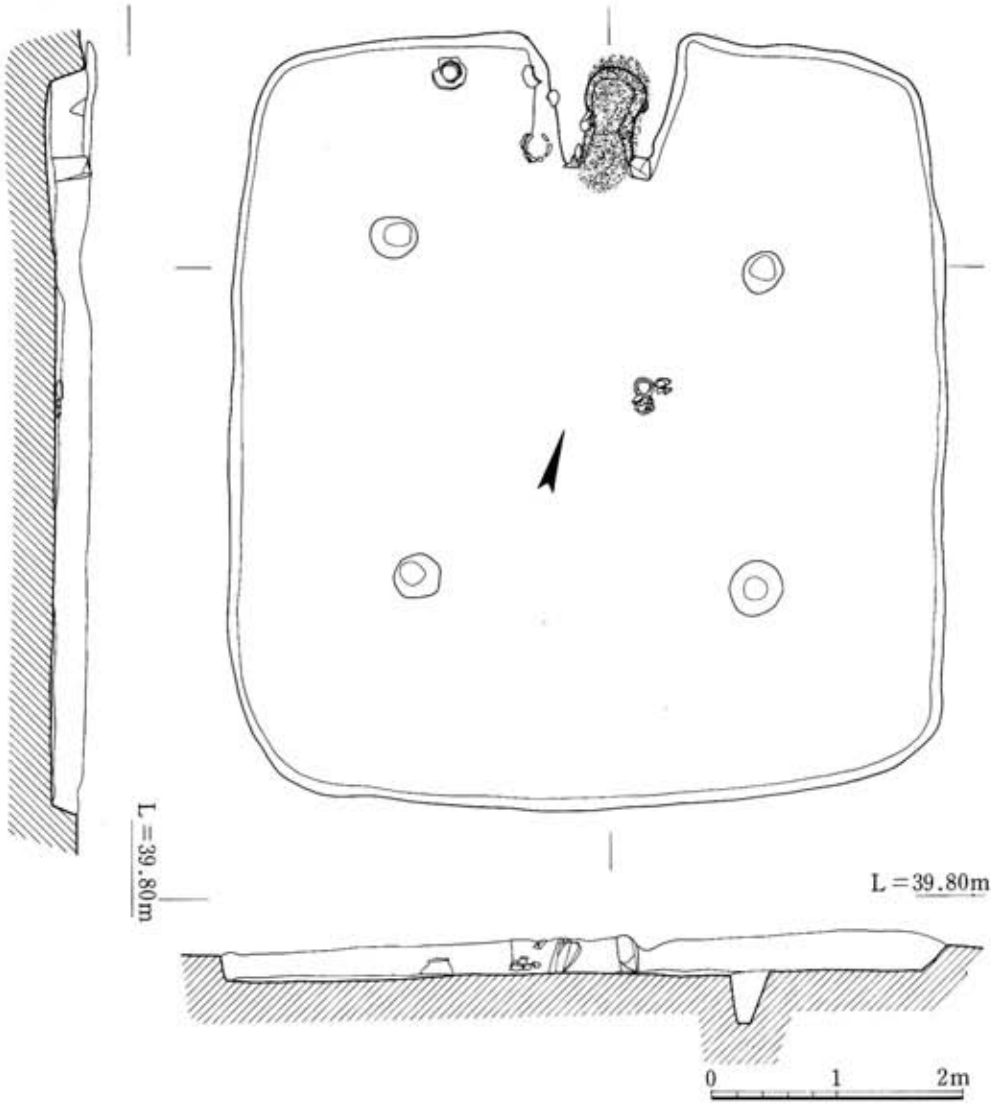


Fig. 95　ＳＢ023住居跡実測図

mである。北側をＳＤ010溝に切られている。壁は四壁ともほぼ垂直に立ち上り，残存も良好である。柱穴は３個確認されている。住居の南西壁中央には幅0.9m，長さ0.8mのカマドが，地山の粘土と花崗岩を用いて構築されている。遺物は少量の土師器の杯・甕などが埋土中から出土している。

ＳＢ025住居跡（Fig. 97，PL. 57）

Ａ区中央の北端に位置する。調査区の関係で住居跡の完掘はできなかったが，平面は方形と推測される。南壁は長さ5.2mである。壁はほぼ垂直に立ち，深さ0.21mである。南壁と床面の一部は攪乱を受けている。柱穴は不明である。遺物は土師器が少量出土した。

ＳＢ027住居跡（Fig. 98，PL. 59）

Ａ区の北東端部に位置する。調査区の関係で完掘できなかった。平面は方形と考えられる。

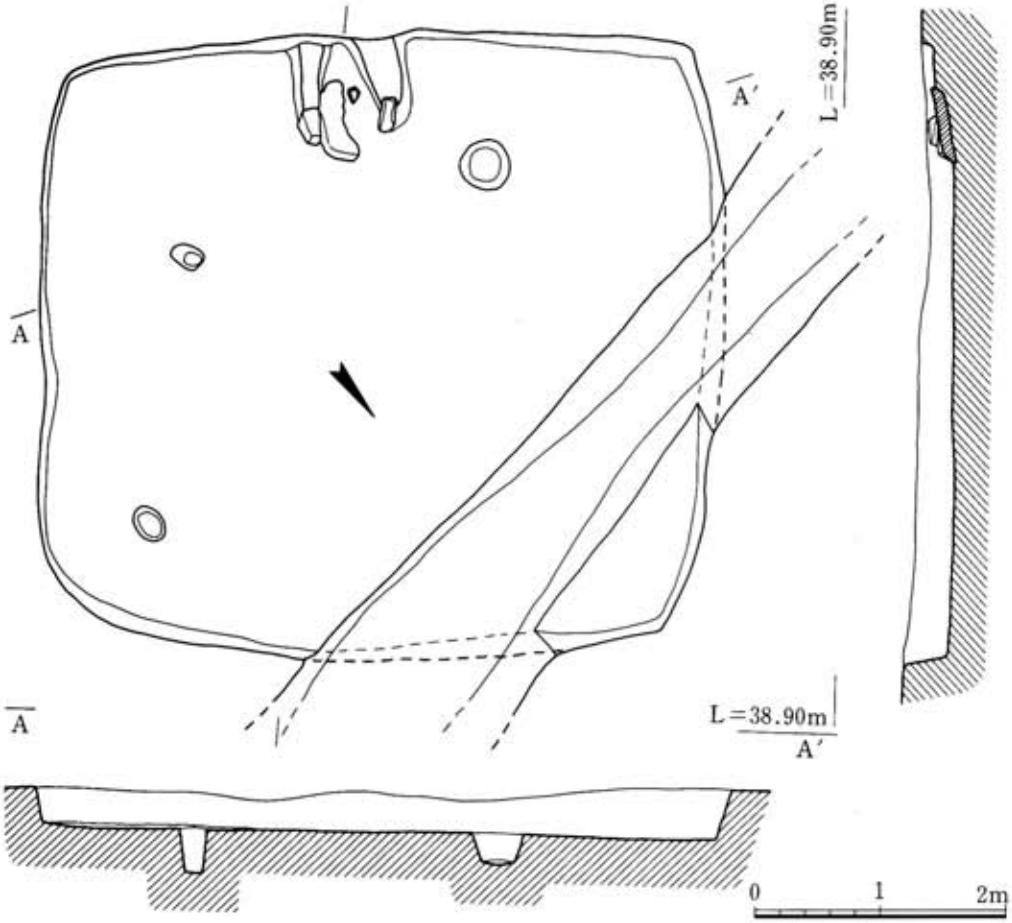


Fig. 96　ＳＢ024住居跡実測図

南壁の長さは5.1m，深さ0.2mである。住居跡の東南部は攪乱を受けている。床面は堅く固められ，柱穴は不明であるが西南部に3ヵ所の穴が存在する。遺物は東南の床面から土師器の杯・甕・甑が出土した。

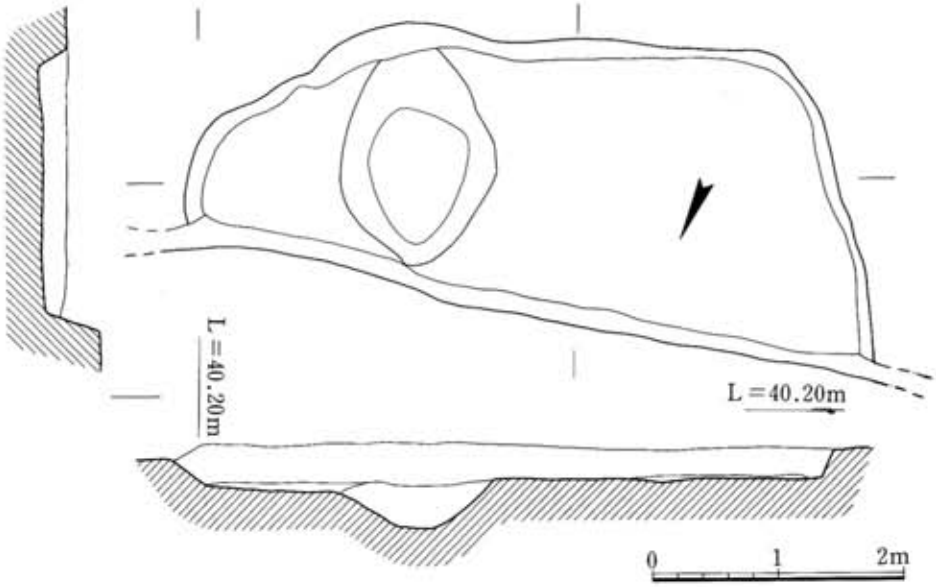


Fig. 97　S B025住居跡実測図

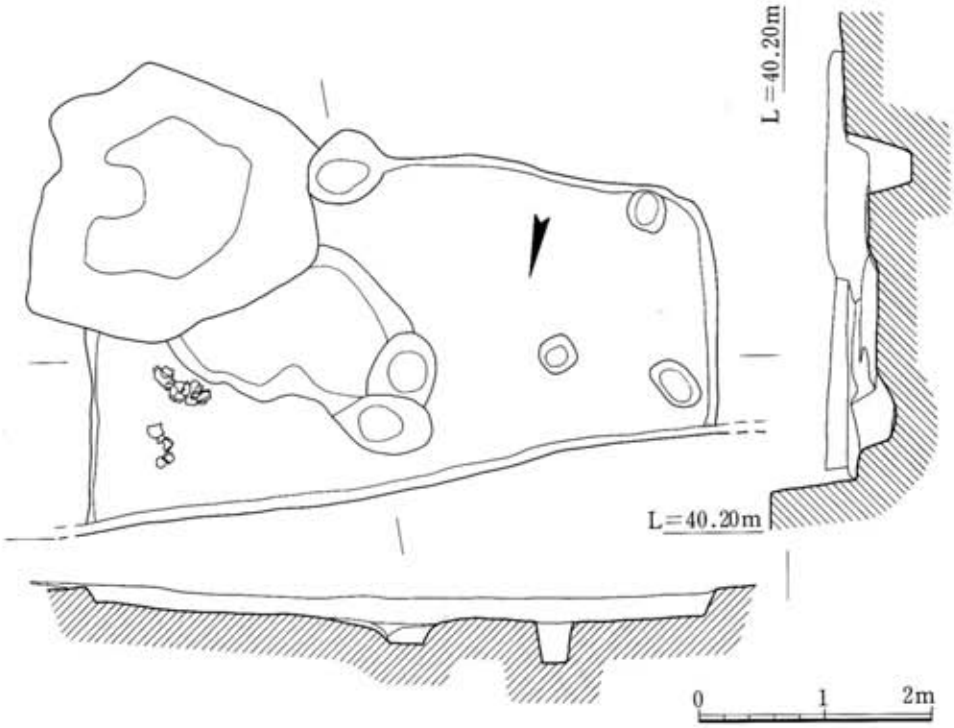


Fig. 98　S B027住居跡実測図

ＳＢ028住居跡

（Fig. 100, PL. 58）

Ａ区の北東部に位置する。平面は長方形の竪穴住居跡である。長辺5.5m，短辺4.2m，深さ0.18mである。柱穴は不明であるが，床面北側にある２ヵ所の穴は柱穴の可能性もある。西壁中央には幅0.8m，長さ１mのカマドが花崗岩を用いて構築されている。遺物は土師器の杯・甕・甑などが埋土中より出土している。

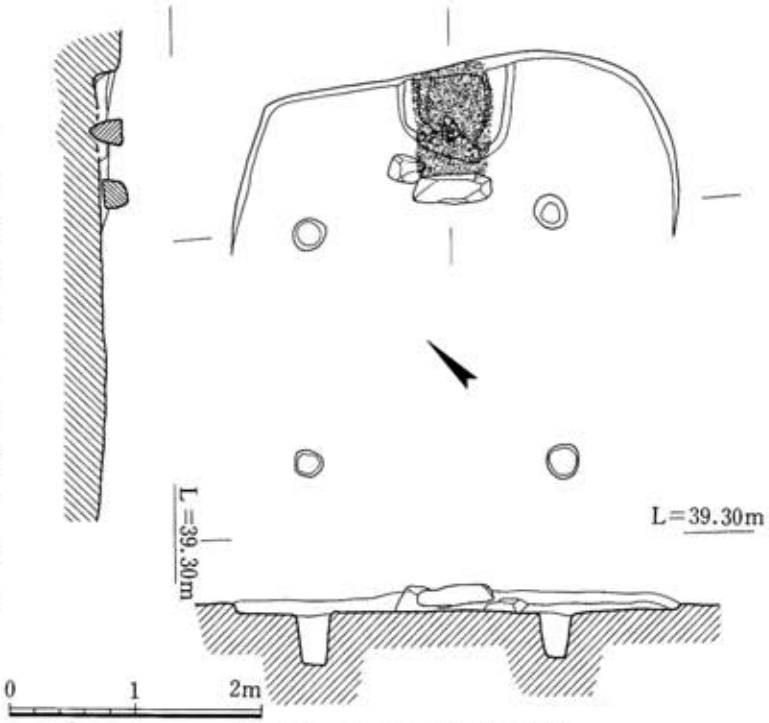


Fig. 99　ＳＢ029住居跡実測図

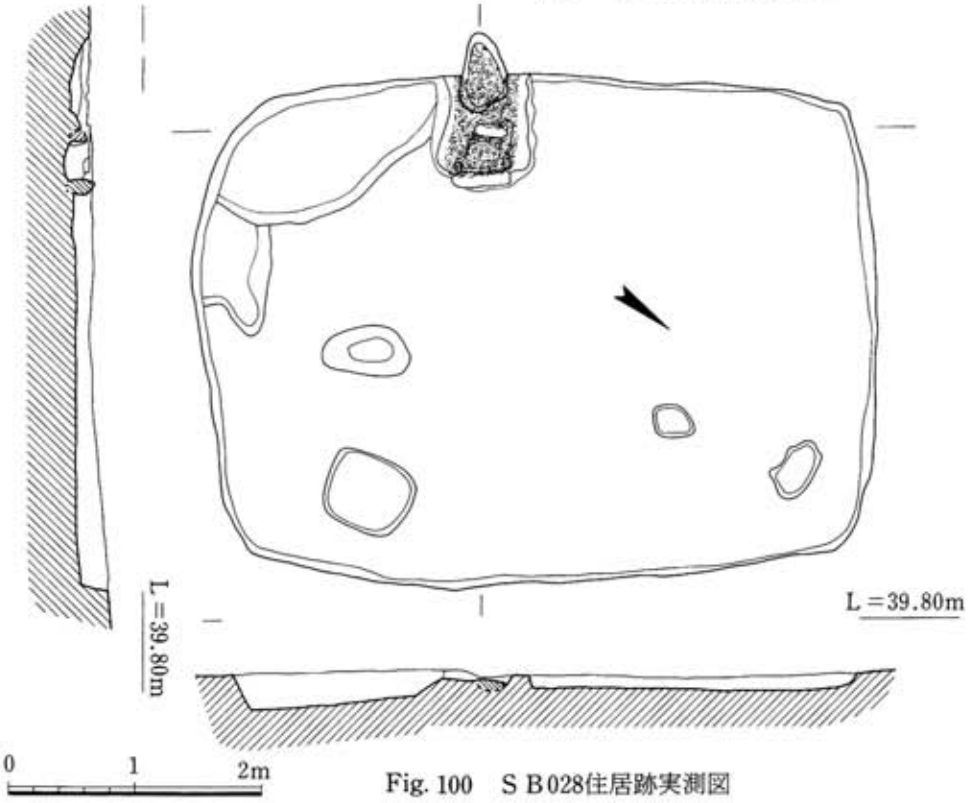


Fig. 100　ＳＢ028住居跡実測図

ＳＢ029住居跡（Fig. 99, PL. 59）

Ａ区の中央に位置する。東・西・南の壁が損壊を受けているが，床面と北壁から推定すると方形の竪穴住居跡と思われる。北壁の長さは3.55mである。柱穴は中央に４個あり，それぞれ１mの間隔で方形に配置されている。柱穴の規模は径0.25m，深さ0.45mである。北壁中央には幅0.9m，長さ0.8mのカマドが構築されている。カマド全面の２個の花崗岩は，火が当たった形跡がある。遺物は土師器の杯・鉢・甕などが埋土中から出土している。

ＳＢ036住居跡（Fig. 101, PL. 60）

Ｃ区の北端に位置する。平面は長辺5.83m，短辺5.56mの方形の竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に立ち上がり，深さ0.13mである。東壁の中央部の一部は削平されている。床面はほぼ水平に堅く固められている。柱穴は床面の中央から西側に４個だけを確認することができた。

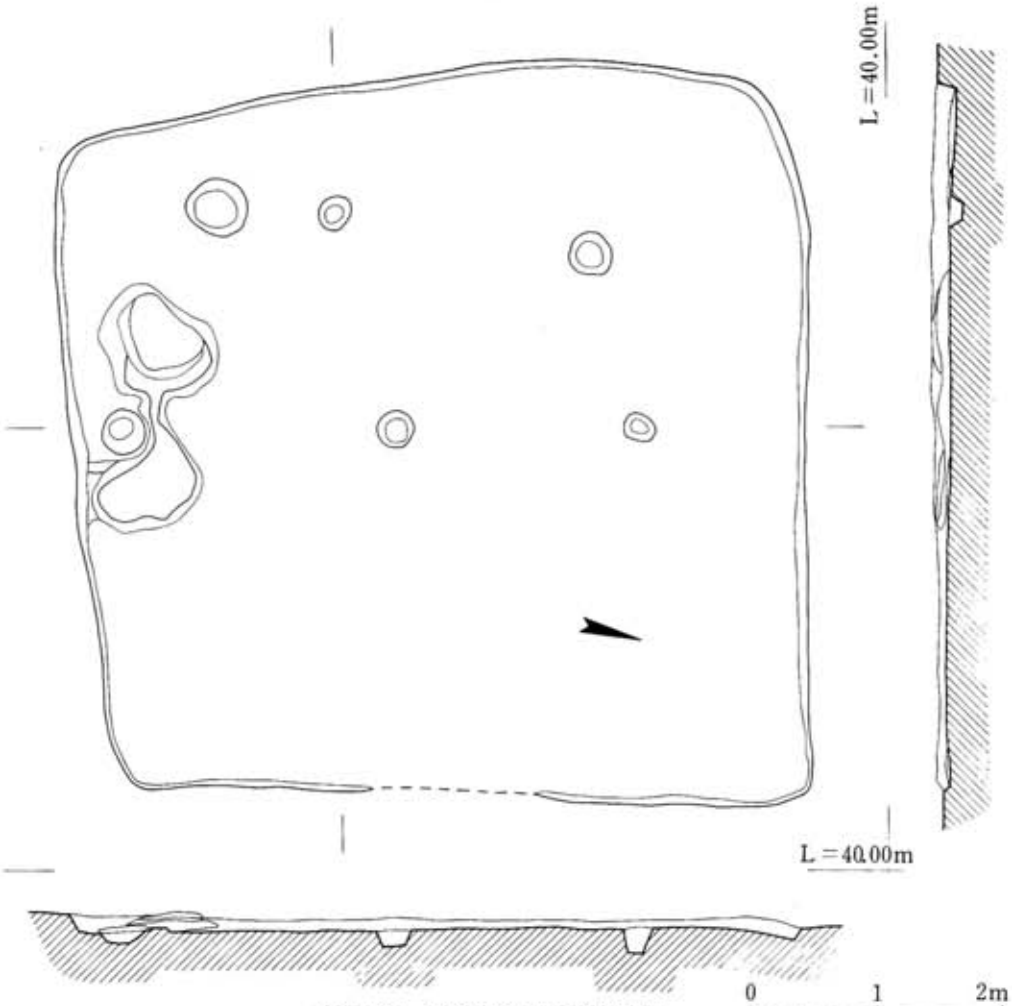


Fig. 101　ＳＢ036住居跡実測図

径0.3m，深さ0.3mである。南壁中央にはカマドが構築されている。遺物は土師器の甕が少量埋土中から出土した。

ＳＢ037住居跡（Fig. 102，PL. 60）

Ｃ区の北西部に位置する。平面は一辺4.4mの方形の竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に立ち上がり，深さ0.13mである。床面は，中央から北東の隅にかけて少し高められており，堅く固められている。柱穴は不明であるが，床面に径0.10～0.45m，深さ0.1～0.5mの穴が７個確認されている。遺物は土師器の杯などが埋土中から出土した。

ＳＢ038住居跡（Fig. 103，PL. 60）

Ｃ区の中央に位置する。平面は西壁部分が調査区の関係で完掘できなかったが，残存している壁から推測すると，長方形と考えられる。長辺で4.4m，深さ0.17mである。床面は堅く固められている。柱穴は不明であるが，北東隅に用途不明の穴が確認された。北壁中央には幅0.8m，

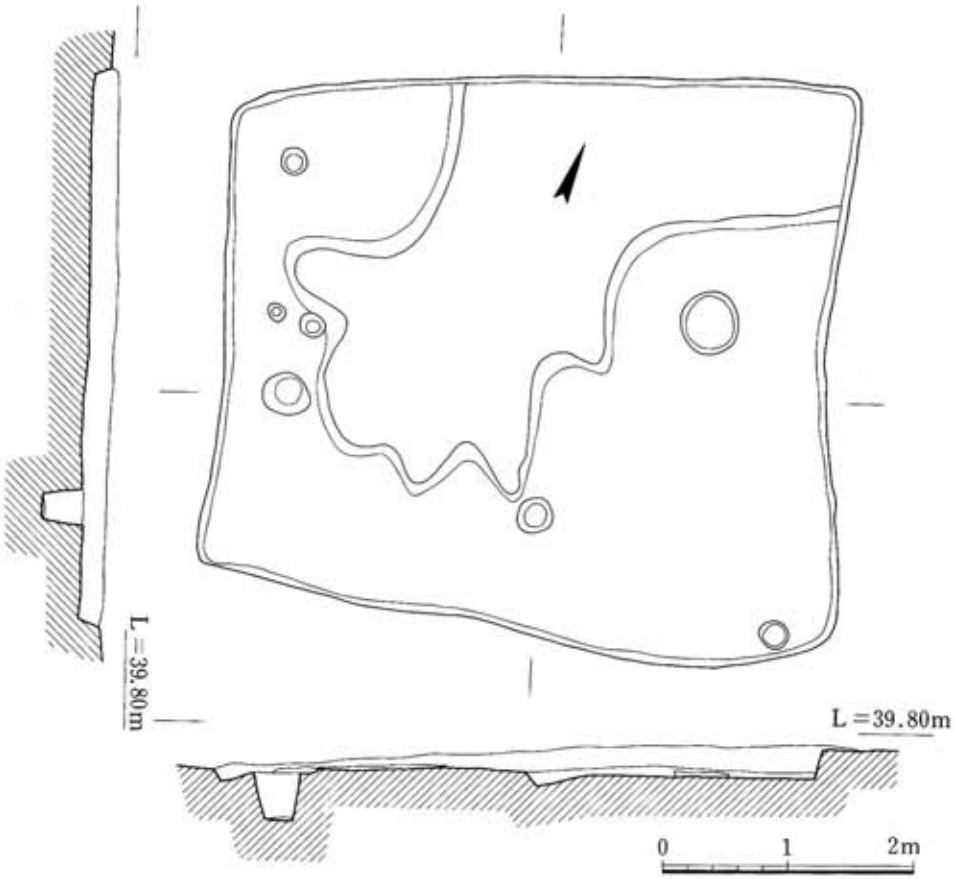


Fig. 102　ＳＢ037住居跡実測図

長さ１mのカマドが茶褐色粘質土で構築されている。

ＳＢ039住居跡（Fig. 105, PL. 61）

Ｃ区の南側に位置する。住居跡の東側半分しか発掘できなかった。残存状況から推測すると，平面が長方形の竪穴住居跡と考えられる。東壁の長さは5.7m，深さ0.2mである。床面の中央部分から北側にかけて高められ，堅く固められている。柱穴は不明であるが，中央部に径0.2～0.4m，深さ0.2～0.5mの穴が５個確認された。遺物は土師器の杯と甕が少量埋土中から出土した。なお，ＳＢ039住居跡の南にＳＢ040住居跡が存在するが，両者の関係は，ＳＢ039がＳＢ040の北西隅を切っていることが確認されている。

ＳＢ040住居跡（Fig. 106, PL. 61）

Ｃ区の南側に位置する。ＳＢ039とＳＢ041住居跡にはさまれるように存在し，北側にあるＳＢ039住居跡に北西コーナーを切られている。平面は一辺５～5.4mの方形の竪穴住居跡である。壁は南側が0.3m，その他の壁は0.14m程度である。床面は西壁近くが若干盛り上がっている。カマドは構築されていない。柱穴は検出できなかった。遺物は出土していない。本住居跡は遺物が出土していないために正確な時期は不明であるが，６世紀後半のＳＢ039住居跡によって切られていることから少なくともそれ以前である。

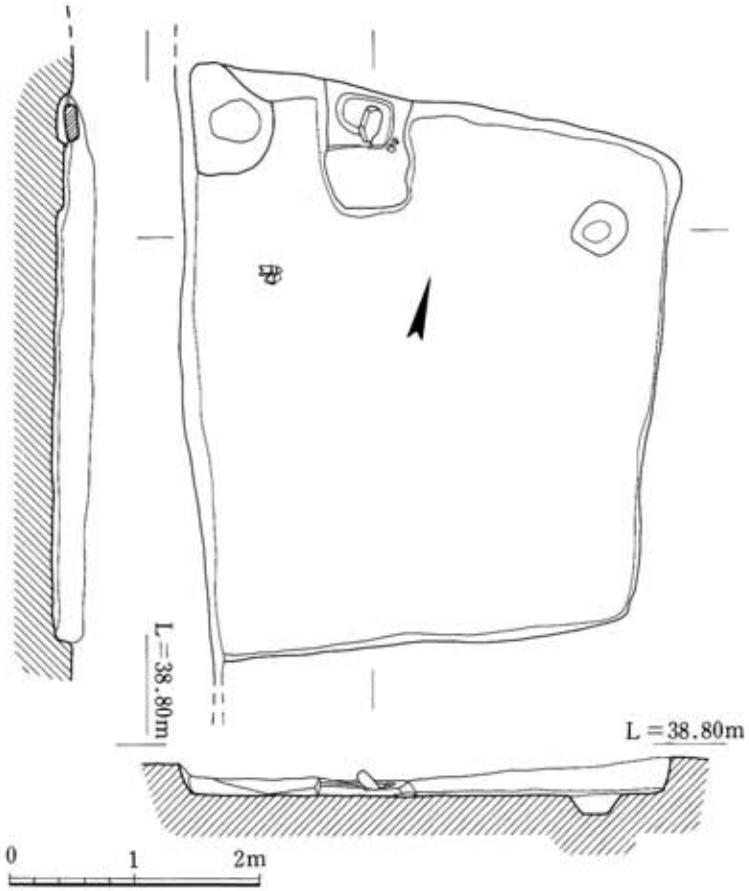


Fig. 103　ＳＢ038住居跡実測図

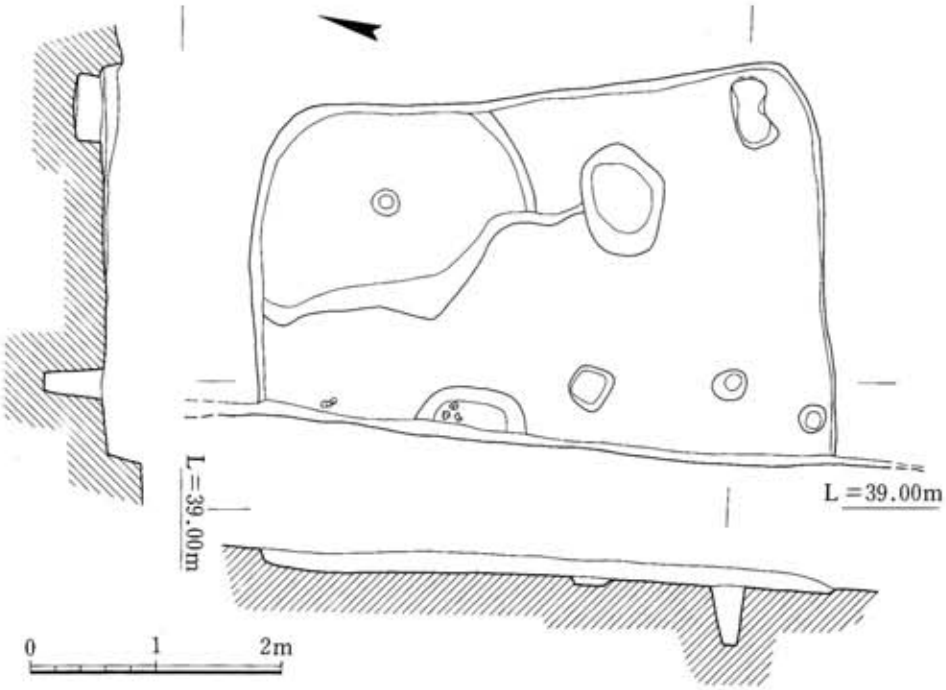


Fig. 104　S B041住居跡実測図

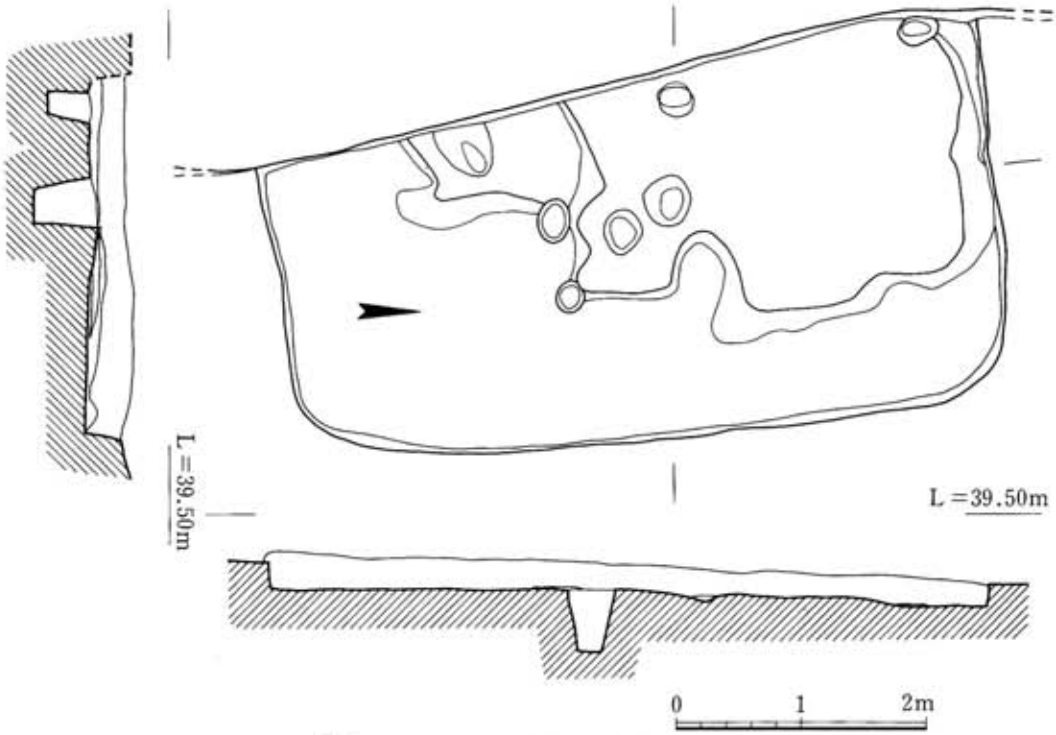


Fig. 105　S B039住居跡実測図

ＳＢ041住居跡（Fig. 104, PL. 61）

Ｃ区の南側に位置する。住居跡は東側部分しか発掘できなかったが，平面は長方形と推測される。南北方向の長さは4.6m，壁の深さは0.15mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり，北東隅は平面が若干丸くなる。床面はほとんど水平で，堅く固められているが，北東隅の部分はいくぶん低くなっている。柱穴は不明であるが床面の南西部に３個，北東部に１個穴が存在する。遺物は出土していない。

ＳＢ042住居跡（Fig. 107, PL. 62）

Ｃ区の南端に位置する。平面は一辺2.5mの方形の竪穴住居跡で，深さ0.4mである。柱穴は検出できなかった。北壁中央に幅0.7m，長さ0.6mのカマドが確認された。カマドは中心部を幅0.25m開けて，両側を幅0.2m，高さ0.2m，長さ0.6mほど白色粘質土で構築している。遺物は，埋土中から土師器の杯と皿，黒色土器が出土した。

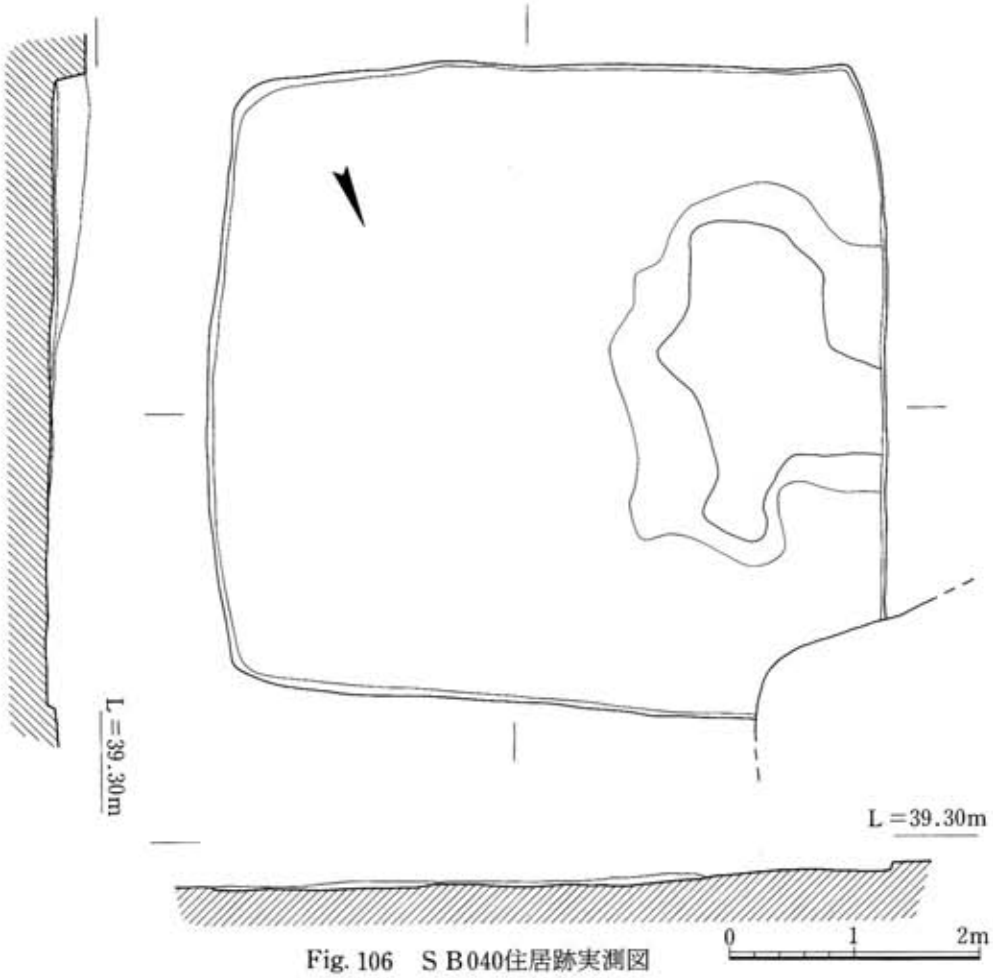


Fig. 106　ＳＢ040住居跡実測図

ＳＢ043住居跡（Fig. 108）

Ａ区北側中央に位置する。東側が半分ほど削平されているが，残存部分から推測すると，平面方形の竪穴住居跡である。残存している西壁の長さは3.7m，深さ0.2mである。柱穴は不明であるが，西南隅で径0.25m，深さ0.15mの円形の穴が確認された。

ＳＢ030掘立柱建物跡（Fig. 109）

Ａ区の中央に位置する。１間×１間の掘立柱建物跡である。桁行長2.15m，梁行長2.10mである。柱穴は径0.4m前後で，深さ0.4mである。東西両側にも２個の柱穴がある。両者を結ぶ線は梁行と同方向で，桁行の中間を通る。建物方位はN14°Ｅである。

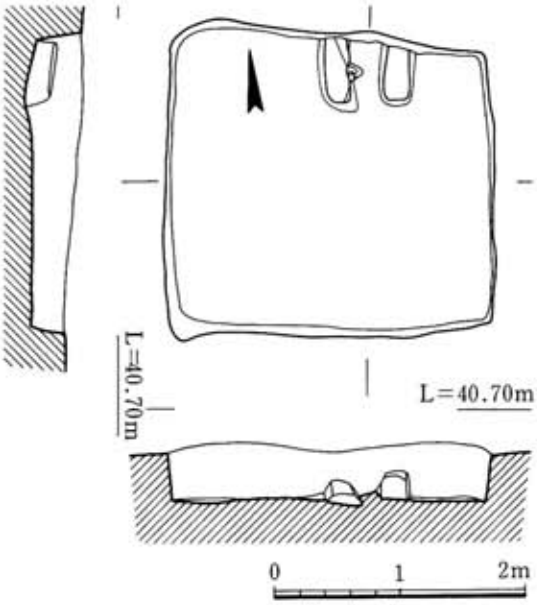


Fig. 107　ＳＢ042住居跡実測図

ＳＢ031掘立柱建物跡

（Fig. 110，PL. 62）

Ａ区の南に位置する。２間×２間の掘立柱建物跡である。桁行長3.6m，梁行長3.2mである。柱穴掘形は円形で，径0.3～0.6 m，深さ0.4～0.9 mである。総柱の建物と推測されるが，南東隅の２個の柱穴は調査区の関係で発掘できなかった。建物方位はN65°Ｅである。

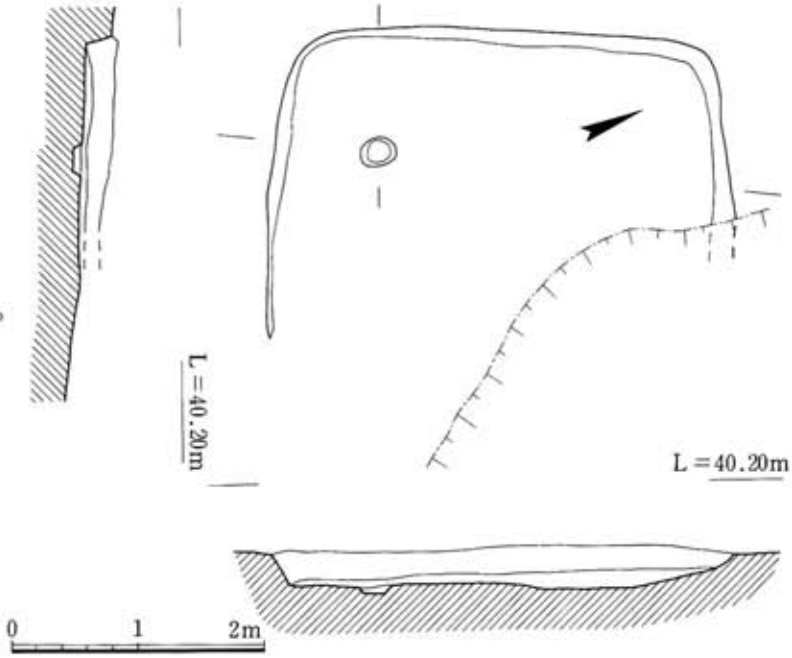


Fig. 108　ＳＢ043住居跡実測図

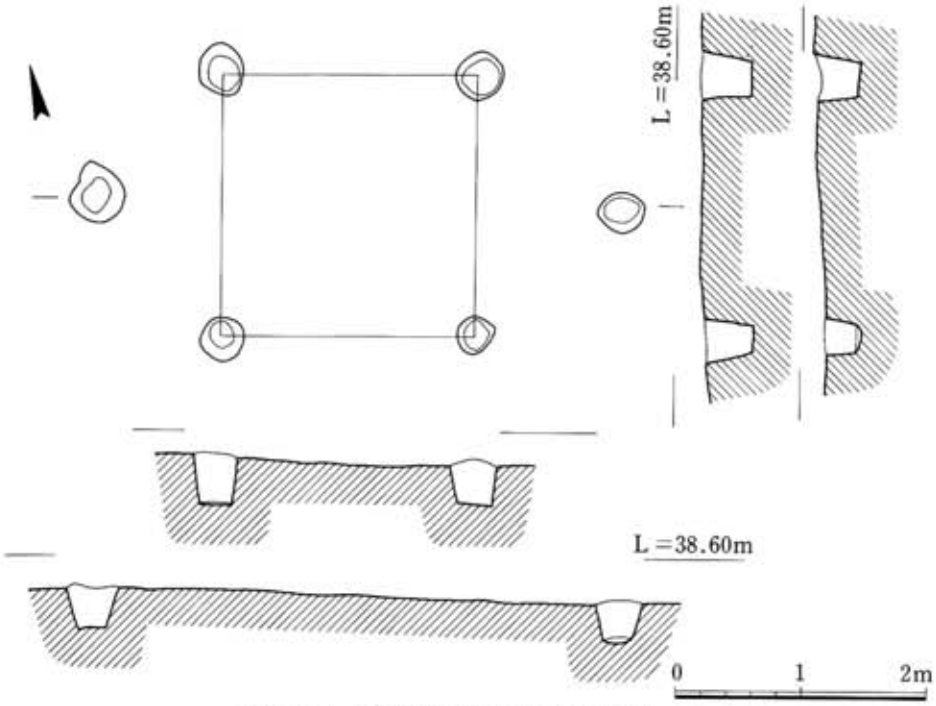


Fig. 109　ＳＢ030掘立柱建物跡実測図

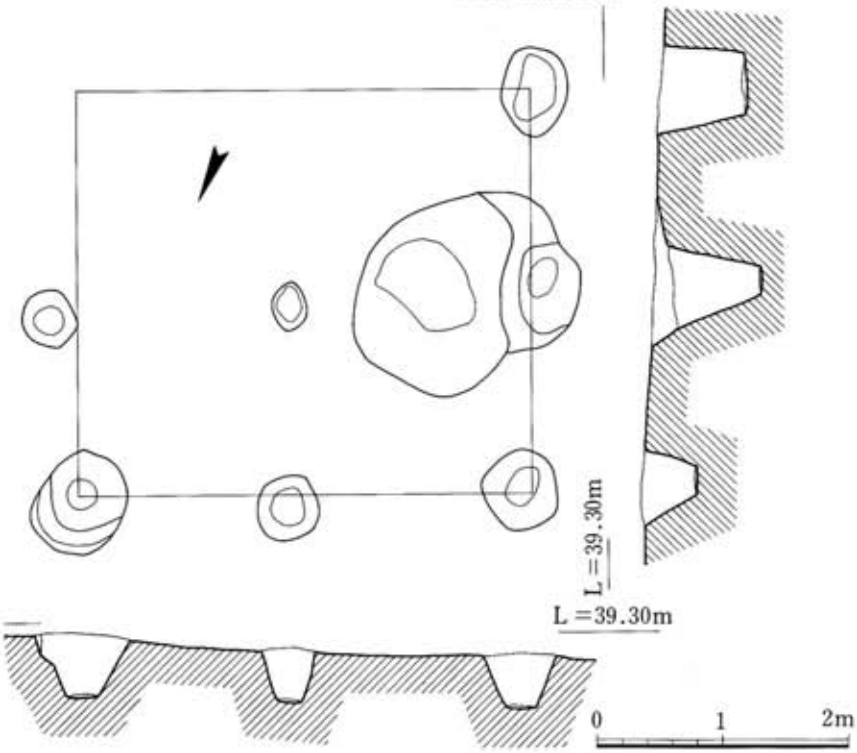


Fig. 110　ＳＢ031掘立柱建物跡実測図

ＳＢ032掘立柱建物跡

（Fig. 111，PL. 63）

Ａ区中央の東側に位置する。２間×２間の掘立柱建物跡で，桁行長3.8m，梁行長3.0mである。柱穴は径0.3～0.4m，深さ0.3～0.4mである。建物方位は真北である。

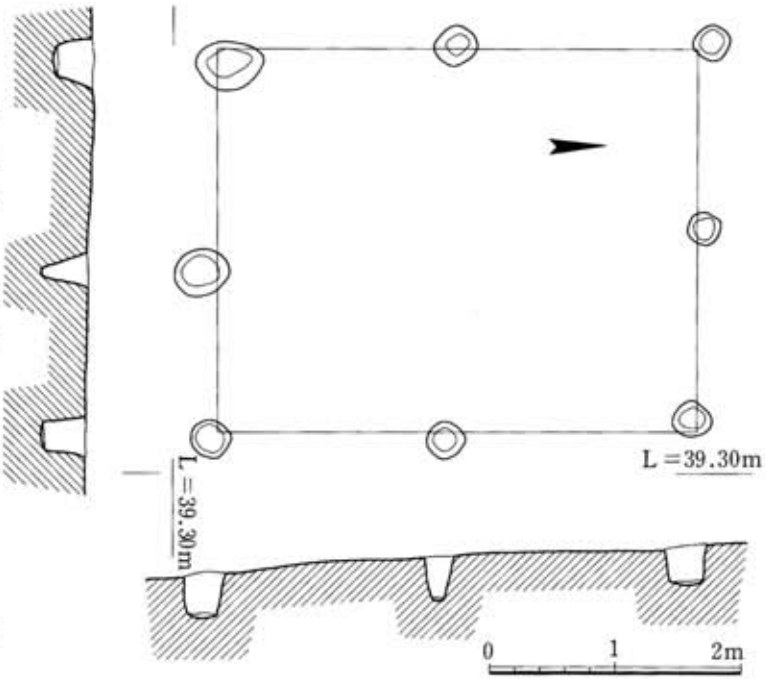


Fig. 111　ＳＢ032掘立柱建物跡実測図

ＳＢ033掘立柱建物跡

（Fig. 114，PL. 63）

Ａ区中央の東側に位置する。３間×２間の掘立柱建物跡で，桁行長5.15m，梁行長3.25mである。柱穴は径0.3～0.4m，深さ0.3～0.6mである。ＳＢ033掘立柱建物跡は6棟の建物の中で最も規模的に大きい。建物方位はＮ２°Ｗである。

ＳＢ034掘立柱建物跡

（Fig. 113，PL. 63）

Ａ区中央の東側に位置する。２間×１間の掘立柱建物跡で，桁行・梁行長ともに2.8mである。柱穴は径0.3～0.5m，深さ0.3～0.5mである。

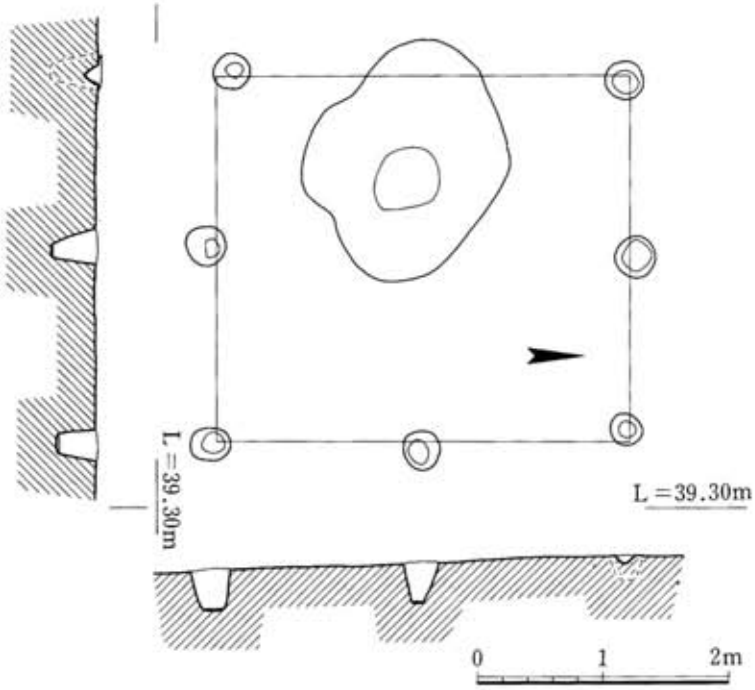


Fig. 112　ＳＢ035掘立柱建物跡実測図

建物方向はN13°Eである。

ＳＢ035掘立柱建物跡（Fig. 112）

Ａ区中央の東側に位置する。２間×２間の掘立柱建物跡で，桁行長3.3m，梁行長2.9mである。柱穴径0.2～0.3m，深さ0.2～0.4mである。建物方位はほぼ真北である。

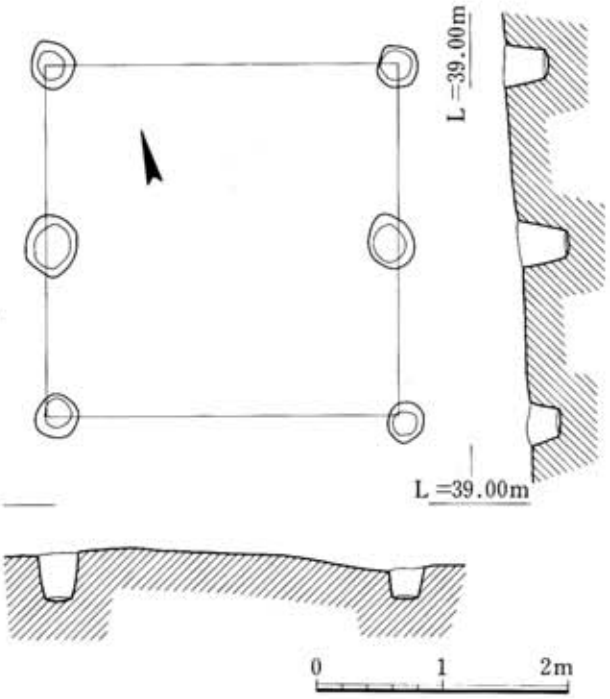


Fig. 113　ＳＢ034掘立柱建物跡実測図

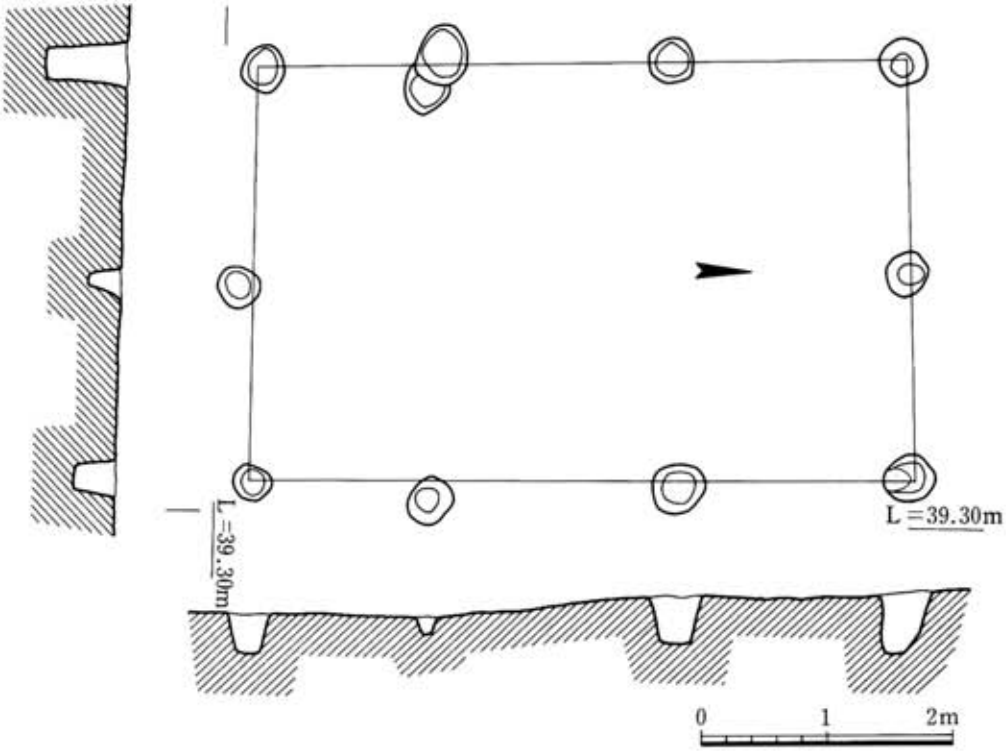


Fig. 114　ＳＢ033掘立柱建物跡実測図

(2) 歴 史 時 代

ＳＢ001住居跡（Fig. 115, PL. 64）

Ｂ区の東南端に位置する。平面は一辺3.4mの方形の竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に立ち上がり，深さ0.5mと非常に残りが良好である。柱穴はカマドの前面，中央部，南壁のそばに各１個検出した。穴は径0.2～0.3m，深さ0.1～0.2mである。北壁中央に煙道付のカマドが検出された。カマドは幅0.8m，長さ0.6mの規模で北壁面には径0.4mの煙道がある。煙道はカマドの奥の床面から北へ僅かに下がりながら1.2mのび，0.85mほど垂直に上がる。遺物は土師器の杯・甕が若干出土した。

ＳＢ002住居跡（Fig. 116, PL. 64・65）

Ｂ区中央の南側に位置する。平面は方形の竪穴住居跡である。長辺4.7m，短辺4.4m，深さ0.3mである。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は中央部分が少し高くなり，堅く固められている。柱穴は不明である。北壁中央に煙道付のカマドがある。カマドは幅0.9m，長さ0.6

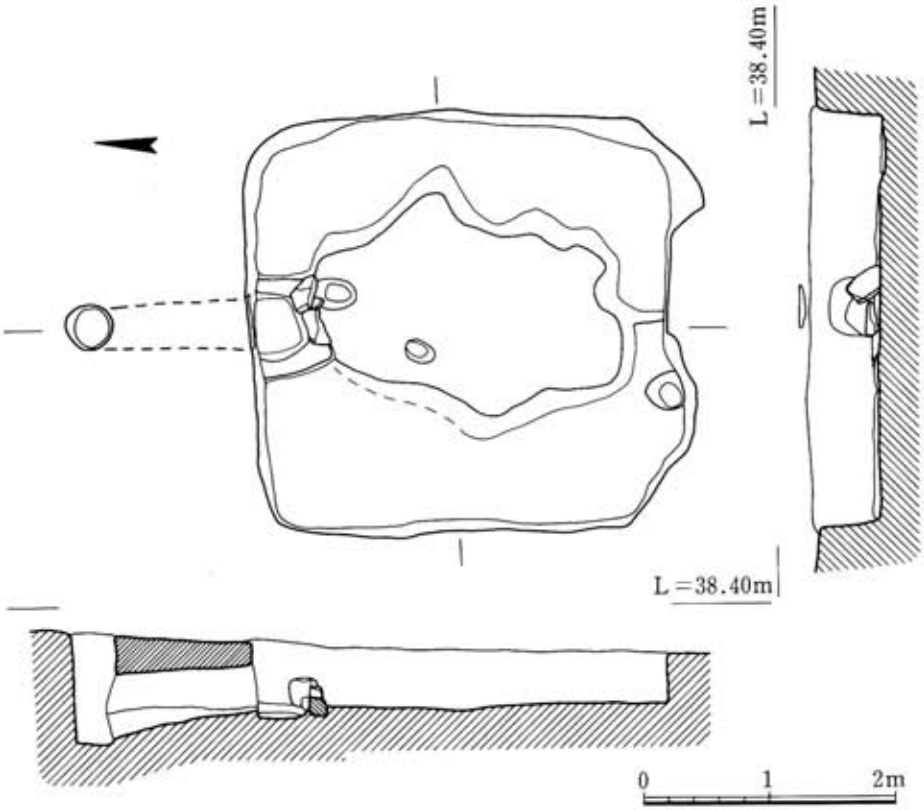


Fig. 115　ＳＢ001住居跡実測図

mの規模で，褐色粘質土を用いて構築されている。カマドの中心部は一辺0.4m，深さ0.2mの落ち込みがある。このカマドの奥壁に煙道が取り付くが，煙道の径は約0.2mである。煙道は壁面から僅かに下がりながら北へ1.4mのび，0.6mほど垂直に上がる。東側に近接するＳＢ003住居跡を切る。遺物は土師器の杯・皿・甕，須恵器の杯や黒色土器がカマドの近くの床面から出土した。

ＳＢ003住居跡（Fig. 117，PL. 65）

Ｂ区の南側に位置する。平面は方形の竪穴住居跡である。長辺4.5m，短辺4.4m，深さ0.23mである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は中央部が僅かに高められ，堅く固められている。

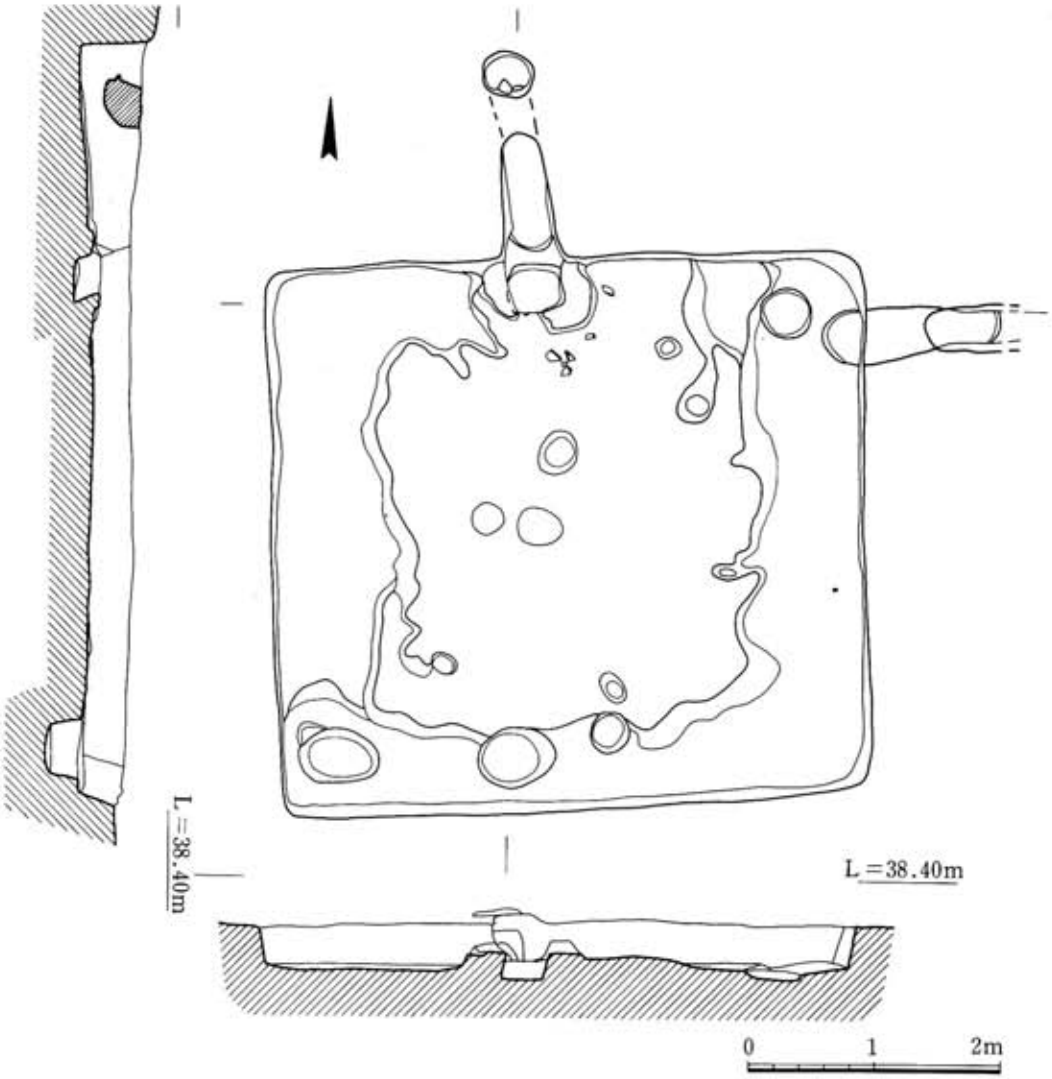


Fig. 116　ＳＢ002住居跡実測図

柱穴は不明であるが，床面の北西部にある4個の穴と南西隅の穴を検出した。西壁中央に煙道付のカマドがある。カマドは幅1m，長さ0.6mで褐色粘土を使用して造られ，石材等は検出されなかった。カマドの中央部落ち込みの床面と，住居内の床面との比差は，約0.1mカマド内の床面が低い。煙道の径は約0.3mである。煙道は西外側へ急な傾斜で約1.75m降り，0.6mほど垂直に上がる。本住居跡の煙道の傾斜が7軒の中では最もきつい。西側にＳＢ002住居跡があるが，前後関係はＳＢ003がＳＢ002に切られることを確認している。遺物は土師器杯・皿を検出した。

ＳＢ004住居跡（Fig. 118，PL. 66）

Ｂ区の南側に位置する。平面は方形の竪穴住居跡である。長辺4.1m，短辺3.8m，深さ0.15mである。壁は若干傾斜をなしている。床面は，中央から北東部にかけて少し高められ，堅く固められている。北東部は東壁に接続している関係から，入口の土間とも考えられる。柱穴は

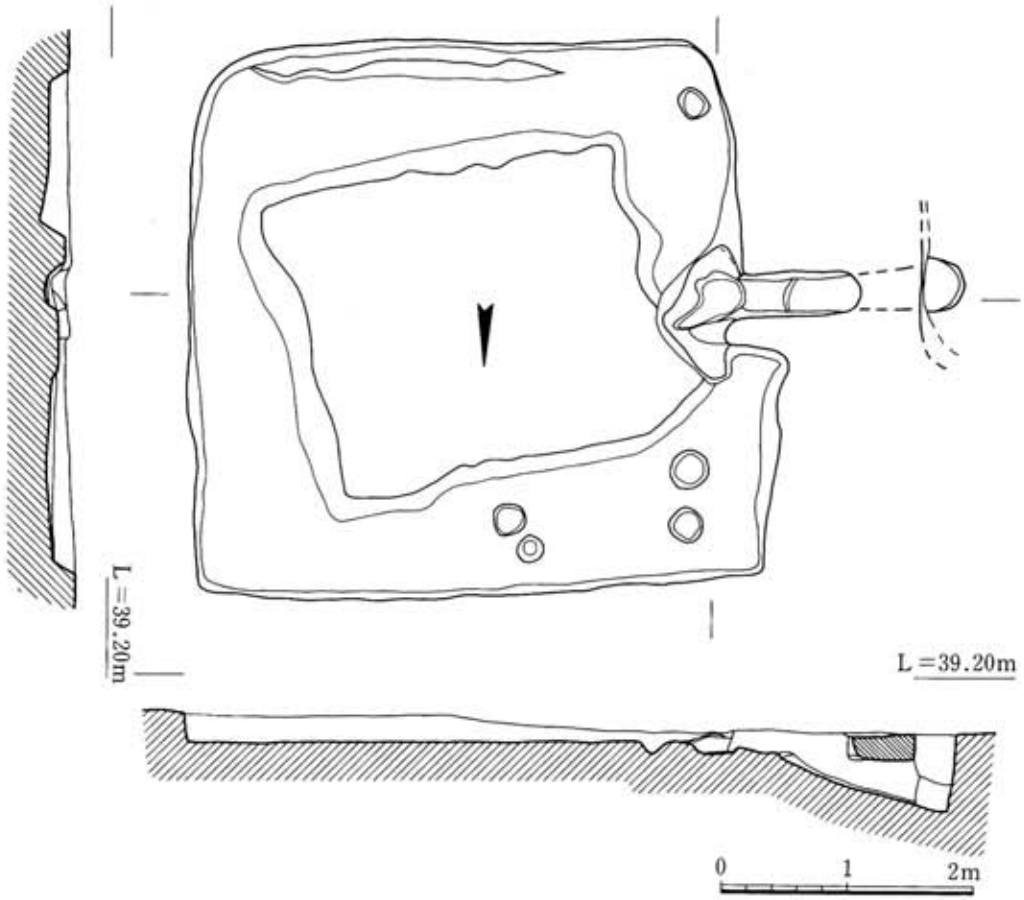


Fig. 117　ＳＢ003住居跡実測図

不明である。北壁中央に煙道付のカマドがある。カマドは幅0.8m，長さ0.4mで，中央落ち込みの床面は住居内の床面より0.15mほど低い。煙道は天井部がかなり削平されているが径0.35mである。カマドの奥壁から北外側へ少し下がりながら約1.35mのびる。垂直に立ち上がる部分は2段になっている特色を有す。遺物は土師器の杯・甕などが出土した。

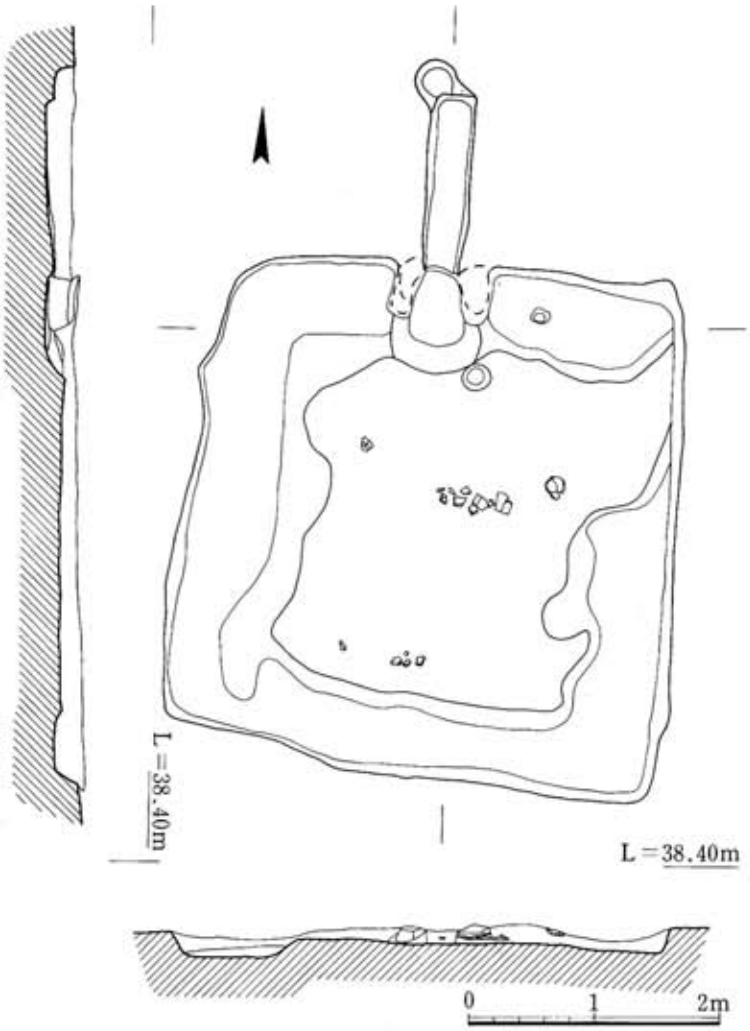


Fig. 118　ＳＢ004住居跡実測図

ＳＢ006住居跡

（Fig. 119, PL. 66・67）

Ｂ区中央の南端部に位置する。平面は長方形の竪穴住居跡である。長辺4.75m，短辺3.8m，深さ0.37mである。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は中央から北側が堅く固められ，西・南壁の近くの床面は少し低い。柱穴は不明である。西壁中央と北壁中央から西よりに煙道付のカマドが2ヵ所存在する。西壁のカマドは幅1m，長さ0.8mあり，北壁のカマドは幅1.2m，長さ1mである。両者とも床面よりカマド内の底面が低くなっている。煙道はカマドの奥壁から外方へ1.1mほどのびるが，北側の煙道が僅かに傾斜するのに比べて，西側煙道のそれはかなりきつい。煙道の径は両者とも0.25mほどである。立ち上がりは垂直でなく，西側のそれは傾きをもっている。また，西側煙道の煙出しの外側には径0.45mの性格不明の穴がみられる。遺物は土師器の杯・皿，砥石が出土している。

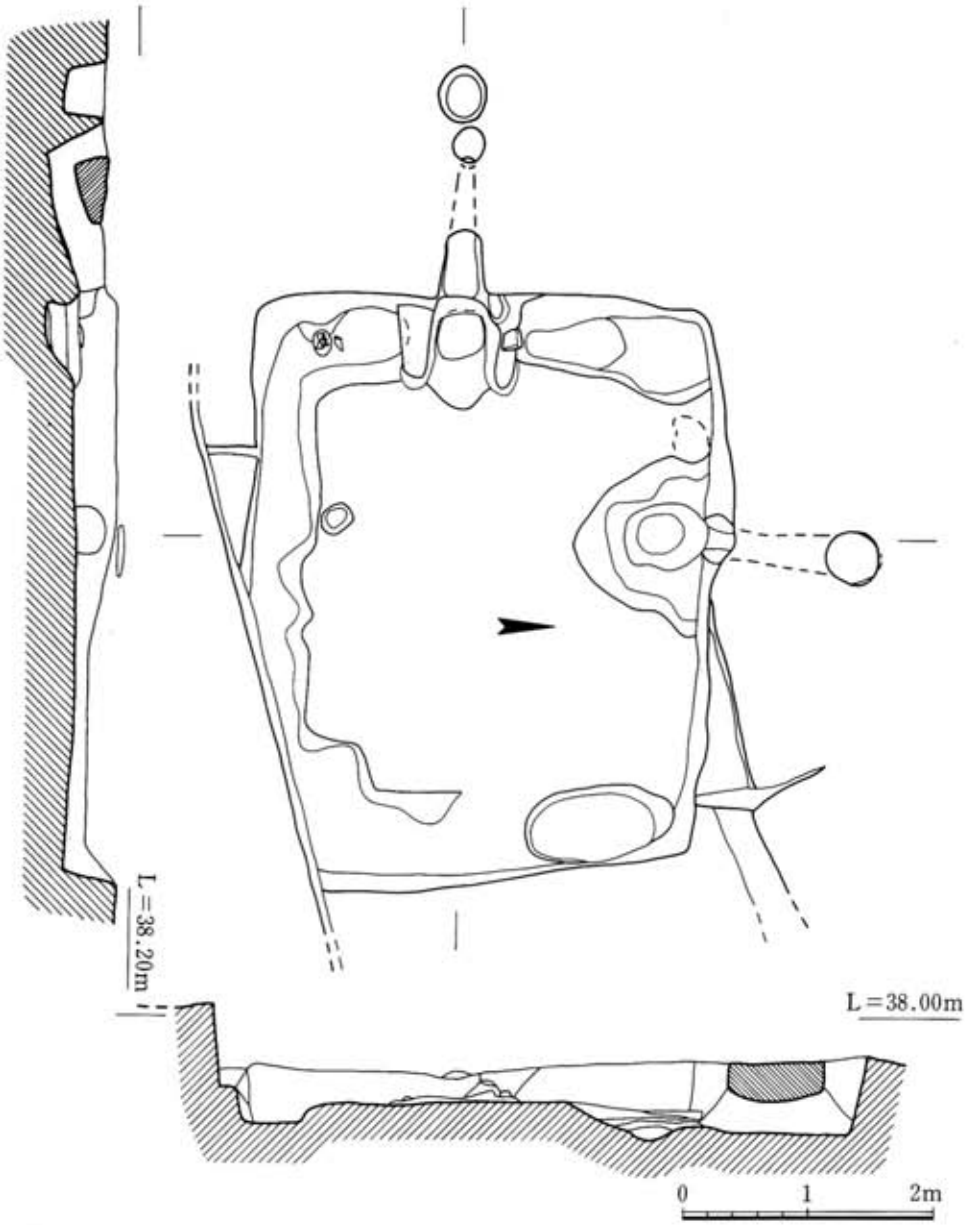


Fig. 119　ＳＢ006住居跡実測図

ＳＢ009住居跡（Fig. 120, PL. 67）

Ｂ区の中央に位置する。ＳＤ010溝が直角に方向を変換する地点にあたる。長辺3.6m，短辺3.5mの平面方形の竪穴住居跡である。壁の残存状況は良好で，深い部分で約0.55mである。壁は僅かに傾斜をなしている。床面は水平であるが，四隅は中央部分より低くなっている。柱穴は東壁と南壁の近くに，それらしきものを確認しただけである。北壁の中央に煙道付きのカマドを検出した。カマド内の底面には灰と焼土が少量残存していた。煙道は，北外側へ僅かに高

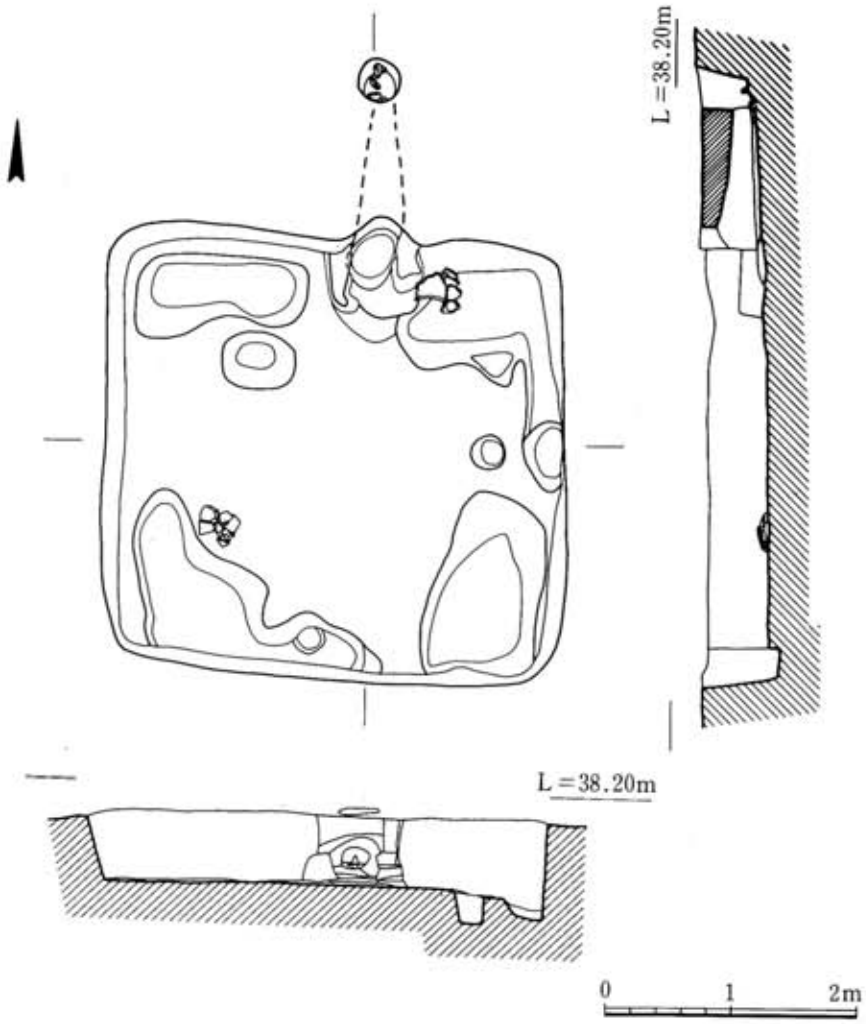


Fig. 120　ＳＢ009住居跡実測図

まりながら約1.2mのび，0.4mほど垂直に立ち上がり煙出しへと続く。煙道の径はカマドとの接続部分で径0.35m，立ち上がる部分で0.18mとせばめられている。遺物は土師器の杯・甕・甑などが出土した。

ＳＢ022住居跡（Fig. 121，PL. 68）

Ａ区中央の南に位置する。平面は方形の竪穴住居跡である。長辺5.2m，短辺4.8m，深さ0.55mである。壁はわずかに傾斜をなしている。床面の中央部は堅く固められ，四隅は中央部に比べわずかに低い。床面に大・小７個の穴を検出したが，柱穴としての配置関係は不明である。北壁中央には煙道付のカマドがある。カマドは僅かに両側壁に用いた黄褐色粘質土が残るだけである。煙道は北外側へ僅かに下がりながら約1.5mのび，0.65mほど垂直に立ち上がる。煙道

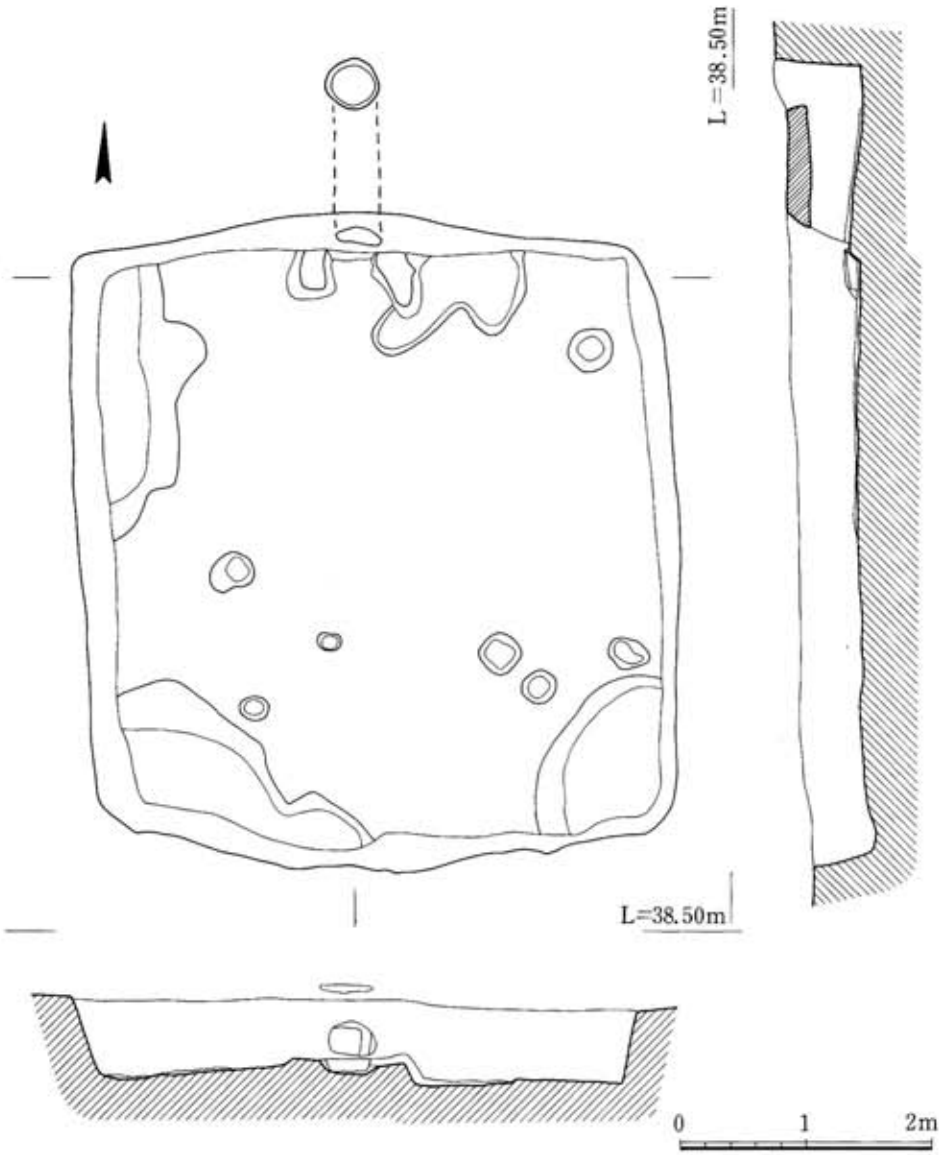


Fig. 121　ＳＢ022住居跡実測図

の径はカマドとの接合部分で約0.2m，立ち上がる部分で約0.45mと大きくなっている。遺物は土師器と須恵器の杯・甕や黒色土器が出土した。

ＳＢ026住居跡（Fig. 122）

Ａ区の北東に位置する。平面は方形の竪穴住居跡である。長辺4.5m，短辺3.9m，深さ0.41mである。壁は僅かに傾斜している。柱穴は不明。南西隅には長径1.3m，短径1.0m，深さ約0.[illegible]mの平面卵形の土壙がある。出土遺物から歴史時代の住居跡にしたが，他がいずれも煙道付[illegible]

のカマドを有するのに，本例だけが例外である。出土遺物は土師器杯・皿，黒色土器である。

SD010溝

（Fig. 123，PL. 68）

溝はA区を東西に走り，A区とB区の境で方向を直角に転じ，B区では南北に走る。調査区域内だけでも，総延長約100mを確認している。断面は場所によって異なり，逆台形，U字形などを呈す。断面逆台形の箇所で上端幅2.1m，下端幅1.1m，深さ1.25mである。最も深い部分では1.5mを越える。土層は基本的に三層に分かれる。I層は明褐色土で大粒の砂粒を多く含む。V層は明黒色土で細砂粒を含む。VII層は明褐色土で粘質が強く，小石や砂粒を含む。溝中からは土師器が大量に出土している。

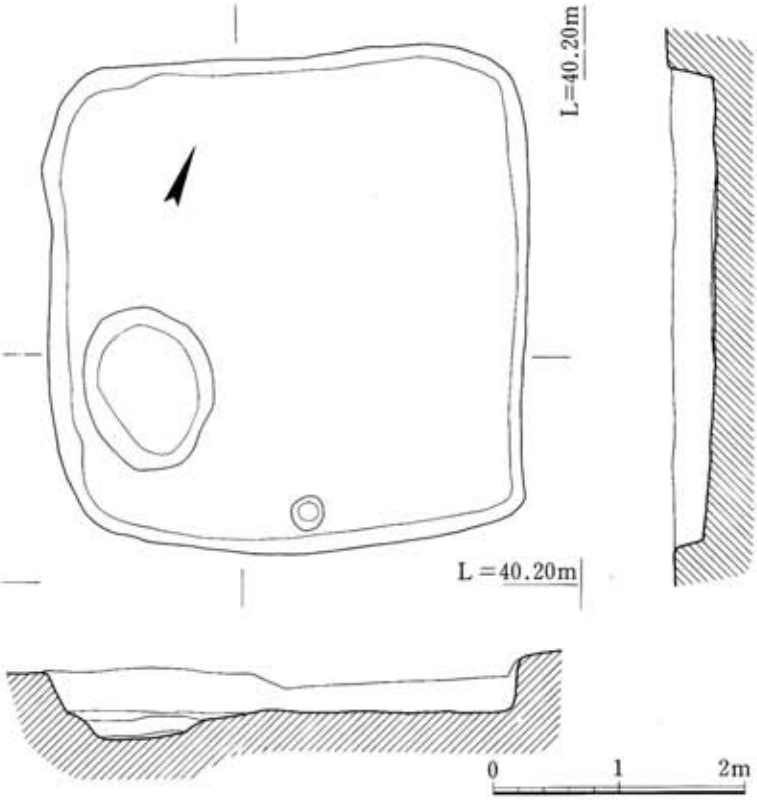


Fig. 122　SB026住居跡実測図

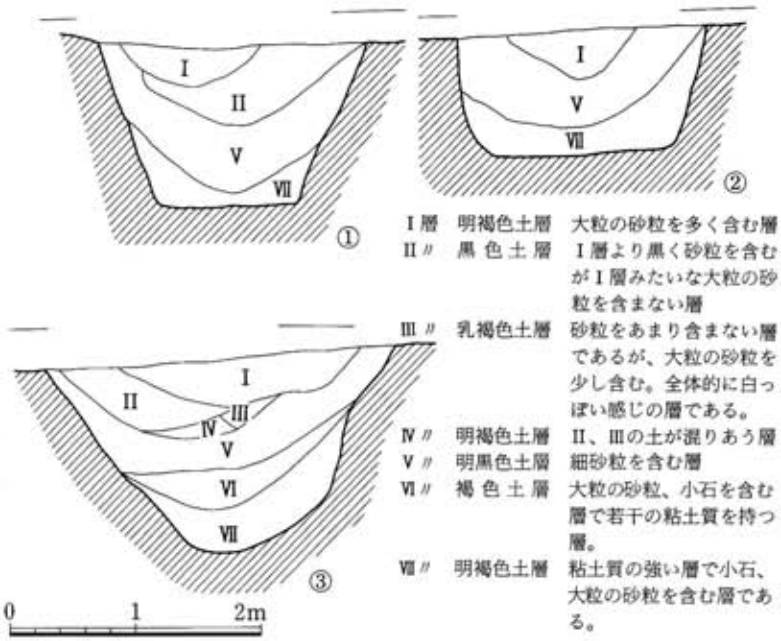


Fig. 123　SD010溝土層図

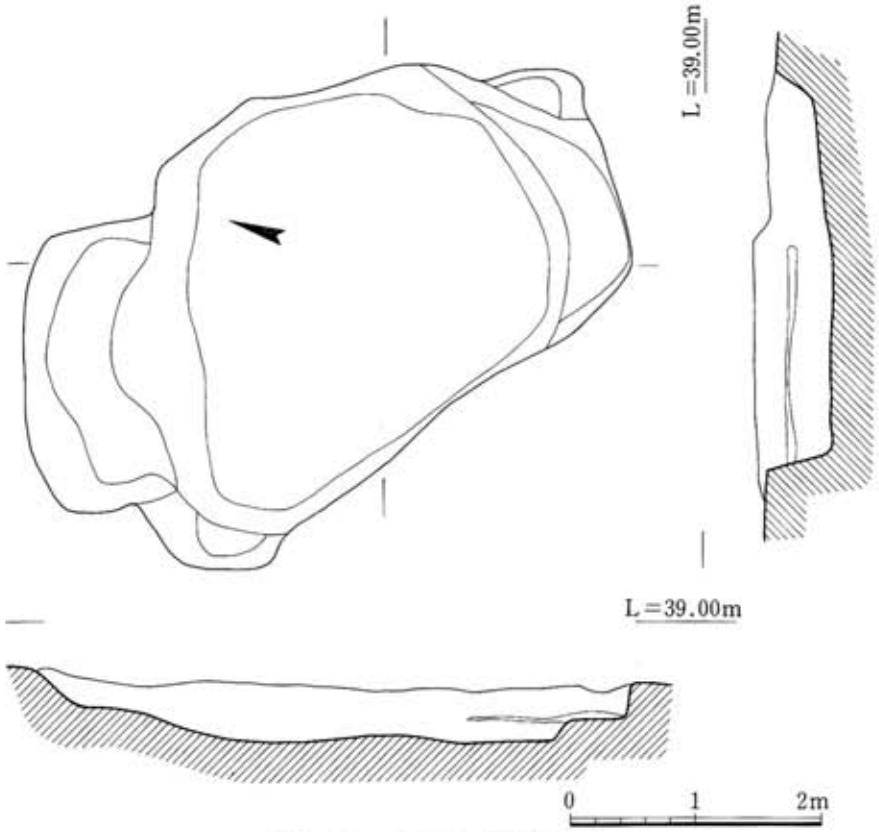


Fig. 124　ＳＫ007土壙実測図

ＳＫ007土壙（Fig. 124）

Ｂ区の北に位置する。平面は不整楕円形である。長径4.0m，短径2.9m，深さ0.4mである。遺物は近世陶磁器類が多量に出土した。浦田遺跡では近世の遺構は本例のみである。土壙の性格等については不明。

Tab. 3　浦田遺跡住居跡一覧表

遺構番号	地区	平面形	法量 長辺×短辺×深さ(m)	カマド 有無	カマド 位置	煙道	時期	遺物	備考
SB001	B	方形	3.4×3.4×0.5	有	北	有	8世紀後半	土師器杯・甕	
SB002	B	方形	4.7×4.4×0.3	有	北	有	9世紀前半	土師器杯・皿・甕，須恵器杯，黒色土器	SB003を切る
SB003	B	方形	4.5×4.4×0.23	有	西	有	8世紀末～9世紀前半	土師器杯・皿	SB002に切られる
SB004	B	方形	4.1×3.8×0.15	有	北	有	8世紀後半	土師器杯・甕	SB005を切る
SB005	B	長方形	5.0×4.4×0.15	有			6世紀	土師器杯・甕	SB004に切られる
SB006	B	長方形	4.75×3.8×0.37	有	二カ所 北・西	有	8世紀末～9世紀前半	土師器杯・皿・砥石	
SB008	B	方形	5.6×5.3×0.3	有	北		6世紀中～6世紀後半	土師器杯・壺・手捏土器，須恵器杯・甑	
SB009	B	方形	3.6×3.5×0.55	有	北	有	8世紀後～9世紀前半	土師器杯・甕・甑	
SB011	B	方形	3.5×3.4×0.25	有	北東		6世紀	土師器杯・椀・鉢・皿・甕	
SB012	B	不整長方形	3.6×3.0×0.3	無			6世紀	土師器杯・皿，須恵器杯	
SB013	B	方形	3.7×3.6×0.2	有	北東		6世紀	土師器皿・甕	
SB014	B	不明	3.3×　×0.2	有？			6世紀	土師器杯・甕	
SB015	A	長方形	6.6×5.7×0.15	無			6世紀後半	土師器杯・甕，須恵器杯，黒色土器	SD010に切られる
SB016	A	方形	5.0×4.7×0.21	無			6世紀前半～6世紀中頃	土師器杯・甕，須恵器杯高杯，黒色土器	
SB017	A	長方形	4.3×3.7×0.3	無			6世紀後半	土師器杯・甕・甑，須恵器杯，紡錘車	
SB018	A	長方形	5.9×5.3×0.3	無			6世紀中頃～6世紀後半	土師器杯・甕，須恵器杯	
SB019	B	方形	2.6×2.5×0.1	有	東		6世紀	土師器杯，須恵器杯	
SB020	A	長方形	6.5×5.8×0.3	有	西		6世紀中頃～6世紀後半	土師器杯・甕，須恵器杯	
SB021	A	方形	6.9×6.5×0.35	有	南		6世紀中頃	土師器杯・高杯・壺・甑，須恵器杯・高杯・甕，石斧	
SB022	A	方形	5.2×4.8×0.55	有	北	有	8世紀末～9世紀前半	土師器杯・鉢・甕，黒色土器	
SB023	A	長方形	6.2×5.8×0.23	有	北		6世紀後半	土師器杯・壺・甕・甑，須恵器杯	
SB024	A	長方形	5.35×4.85×0.31	有	南西		6世紀中頃～6世紀後半	土師器杯・甕，須恵器杯・甕	SD010に切られる
SB025	A	方形	5.2×　×0.21	無			6世紀		
SB026	A	方形	4.5×3.9×0.4	無			8世紀末	土師器杯・皿，黒色土器	
SB027	A	方形	5.1×　×0.2	無			6世紀	土師器杯・甕・甑，須恵器杯	
SB028	A	長方形	5.5×4.2×0.18	有	西		6世紀中頃～6世紀後半	土師器杯・皿・甕・甑	
SB029	A	方形	3.55×　×0.14	有	北東		6世紀後半	土師器杯・鉢・甕	
SB036	C	方形	5.83×5.56×0.13	有	北		6世紀	土師器甕	
SB037	C	方形	4.4×4.4×0.13	無			6世紀	土師器杯	
SB038	C	長方形	4.4×　×0.17	有	北		6世紀		
SB039	C	不明	5.7×　×0.2	無			6世紀後半	土師器杯・甕	SB040を切る
SB040	C	方形	5.4×5.0×0.14	無			6世紀		SB039に切られる
SB041	C	不明	4.6×　×0.15	無			6世紀		
SB042	C	方形	2.57×2.4×0.4	有	北		6世紀後半	土師器杯・皿，黒色土器	
SB043	A	方形	3.7×　×0.2	無			6世紀		

Tab. 4　浦田遺跡掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	地区	規模(間)	桁行	梁行	方位	時期	遺物
SB030	A	1×1	2.15(m)	2.10(m)	N14°E	6世紀	
SB031	A	2×2	3.60	3.20	N65°E	6世紀	
SB032	A	2×2	3.80	3.00	真北	6世紀	
SB033	A	3×2	5.15	3.25	N2°W	6世紀末	須恵器杯
SB034	A	2×1	2.80	2.80	N13°E	6世紀	
SB035	A	2×2	3.30	2.90	真北	6世紀	

3．遺　　物

(1) 縄 文 時 代

縄文時代の遺物は，土器23点，石器24点で表土層，表土層下層(黒色土層)，遺構検出面より出土した。当遺跡の北方250mに戦場ヶ谷縄文遺跡があり，この他周辺の遺跡より縄文土器が採集されており，この辺一帯には縄文時代の生活跡があったと考えられる。

土器（Fig. 125・126，PL. 70）

土器は縄文時代早期の押型文土器から晩期の黒色研磨土器までの各時期の土器が出土している。その中でも前期の曽畑式土器が大半を占める。

1～3は深鉢の胴部の外面に楕円押型文を施し，内面ナデ調整の押型文土器である。2・3の土器の施文は大粒の楕円を施し，器壁が厚い。色調は黒褐色～明褐色で胎土に多量の砂粒を含む。

4～15は曽畑式土器である。4～8，9～15には若干の時間差が認められ，これを大きく2つに大別し仮に曽畑Ⅰ・Ⅱと呼ぶ。曽畑Ⅰはもっとも基本的なタイプとしてとらえられているもので，整然とならぶ幾何学文様や細線で深く刻み込んだ羽状文・綾杉文がみられる。4～8はすべて深鉢形の口縁部付近や底部付近の胴部片である。すべて滑石を多量に含み色調褐色～暗褐色を呈す。曽畑Ⅱは本来の曽畑式土器のすがたをもっているが，文様構成にみだれが生じ，数条の平行横線の沈線に交わる縦線の沈線文や，短沈線，幾何学文様の沈線文が組み合わされる。曽畑Ⅰに比べ滑石の混入も少なくなる。色調明褐色～黒褐色を呈す。

16・17は中期の阿高式土器で凹線文を主体とする深鉢の胴部である。文様はいわゆる「太形凹文」とよばれるもので渦線文・曲線文を描くが，細片のためその文様構成ははっきりしない。胎土には滑石を多量に含んでおり色調は16が赤褐色，17は黒褐色を呈す。18は後期の鐘ヶ崎式系の口縁部である。口縁部はくの字状の断面をなし波状になり，この外面にヘラ描沈線文と磨消縄文を施す。色調明褐色で内外面ともに研磨がされている。

19～22は晩期の浅鉢・深鉢の研磨土器である。19は口縁部外面に2条，内面に1条の沈線を持ち，屈曲する肩の部分にも1条の沈線を持つ。色調は外面黒色，内面褐色を呈す。20は口縁部外面に2条の沈線を持ち，大きく屈曲する肩の部分にも1条の沈線を持つ。色調内外面ともに赤褐色を呈し，かなり入念な研磨が行われている。21は磨耗のためはっきりしないが，ゆるやかな波状口縁部に1条の沈線を持つ。色調は乳褐色を呈し，部分的に研磨の跡がみられる。22は口縁部上面に1条の沈線を持つ。色調は明褐色を呈す。

23は晩期の甕の底部で大きめで若干の上げ底になる。調整はナデにより，色調は明褐色で胎土に細砂粒を含む。底部外面には木の葉の葉脈の跡が残る。

Fig. 125　縄文土器実測図(1)

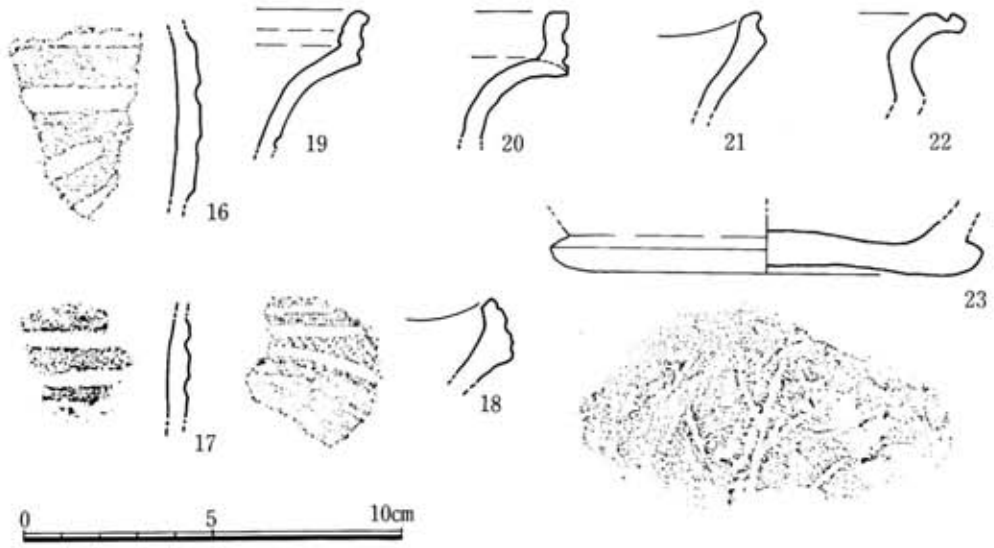


Fig. 126　縄文土器実測図(2)

石器（Fig. 127～129, PL. 85）

浦田遺跡より出土した石器は47点で，そのうち35点を図示した。時期については，遺構に伴うものがなく時期決定に欠けるが，ここでは，石槍・石鏃・石匙・スクレパー・剝片・石錐・石錘の各々遺物を，特徴・形態などにより縄文時代の遺物と考え説明を行っていきたい。またこの他にも縄文時代の石器と考えられるものがあるが，それらについては，195頁の石器の箇所で説明を行っている。

石槍（Fig. 127—24, PL. 85）

安山岩(サヌカイト)製の石槍である。パティナが新しく縄文時代の遺物と考える。表裏ともに一次調整の剝離を残し，周辺部に二次調整の粗雑な剝離を残す。また片面には，一次剝離面を大きく残している。ＳＢ018住居跡埋土中出土。

石鏃（Fig. 127—25～32, PL. 85）

25は平基の安山岩（サヌカイト）製で基部の抉りがなく五角形の大型のもので剝離が粗雑で厚味がある。長さ4.6cm，幅2.3cm。Ｂ区表採。26は安山岩（サヌカイト）製で，二等辺三角形になり側辺はやや弓なりになる。脚部の抉りはわずかに内湾する。Ｂ区ＳＢ009住居跡埋土中出土。27は乳白色の黒曜石製で二等辺三角形をなし，基部は大きく抉りが入り長脚で先端は尖る。ＳＢ020住居跡出土。28は安山岩(サヌカイト)製で正三角形をなし，基部の抉りが体長の⅓近く

まで入り脚部がはっきりする。また両側辺部には鋸歯状の抉りが入る。C区表採。29は黒曜石製で，基部の抉りが深く入り脚部ははっきりし，主要剝離面を多く残す。B区南側表土下層出土。30は黒曜石製で，正三角形で脚部は欠損するが，抉りの深いものであろう。また脚部の一部に主要剝離面を残す。B区南側表土下層出土。31は黒曜石製で三角形をし，基部の抉りは小さいが，脚部欠損のためはっきりしない。一部主要剝離面を残す。C区北側出土。32は黒曜石製で，体部から脚部へ移る所に段を持ち，全体として五角形である。基部の抉りは小さく，片脚を欠損する。C区表採。

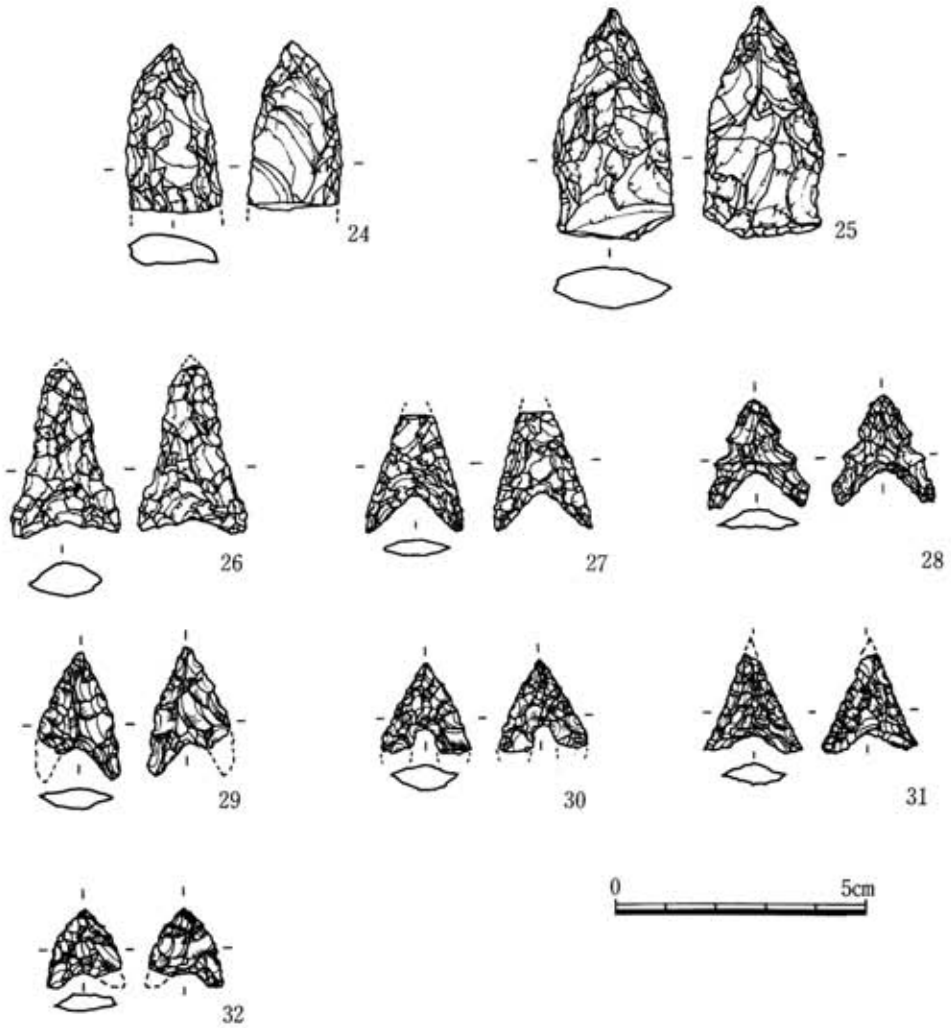


Fig. 127　石器実測図(1)

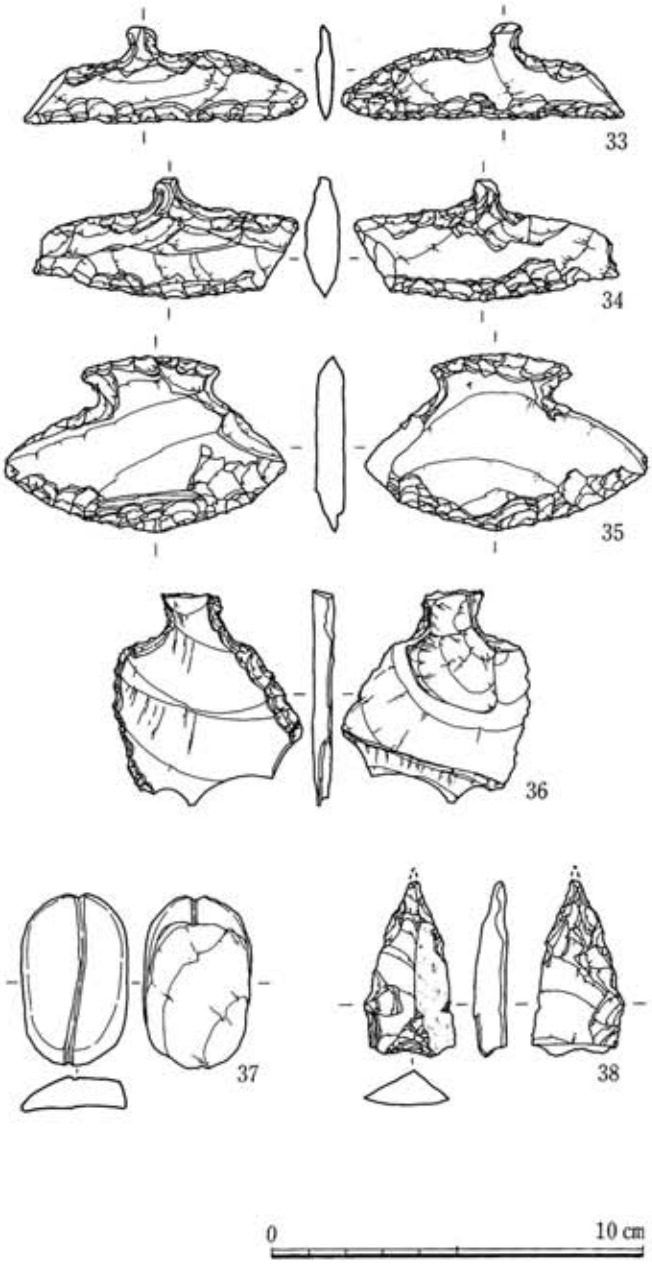


Fig. 128　石器実測図(2)

石匙

（Fig. 128—33～36, PL. 85）

33は安山岩（サヌカイト）の横長剝片を素材として，ほぼ全周に入念な剝離を行い背部と刃部を作っており，つまみを持つ。表裏ともに大きく主要剝離面を残す。**34**は安山岩（サヌカイト）の横長剝片を素材とする。ほぼ全周に剝離を行い背部・刃部を作り，特に刃部は，剝離が丁寧に行われている。つまみを持ち，表裏ともに主要剝離面を残している。A区表土採集。**35**は安山岩（サヌカイト）の横長剝片を素材とする。ほぼ全周に粗雑な剝離を行い背部と刃部を作っており，大きく主要剝離面を残す。**36**は安山岩（サヌカイト）の縦長剝片を素材とする。背部両側縁に凹状の加工を加えつまみを作り出しており，刃部は大剝離面の両側縁部に細かな二次加工が加えられている。また表裏とも素材となる剝片の形を多く残している。B区南側表土採集。

石錐（Fig. 128—38, PL. 85）

安山岩（サヌカイト）の横長剝片を素材としている。両面からの小さな剝離で先端部を作り出している。主要剝離面を一部残し，先端部は欠損している。A区北側出土。

石錘（Fig. 128—37）

自然の礫を利用して作ったもので，縦に一条の浅い沈線を残す。

スクレイパー

（Fig. 129—39～41, PL. 85）

39は良質の安山岩（サヌカイト）を素材としたもので，平坦な礫面を打点とした不定形の剝片を利用している。剝片の刃部は小さな剝離が施され全体に粗雑な作りである。A区北側表採。**40**は安山岩（サヌカイト）を素材としたもので，大型の石核から剝離された剝片の先端に小さな剝離を施して刃部を作りだしている。背面に自然面を残す。B区南側表土下層出土。**41**は安山岩（サヌカイト）の横剝ぎ剝片を素材としている。背面には自然面を残し，剝片の一辺に小さな剝離を施し刃部を作り出している。B区南西部表土下層出土。

剝片（Fig. 129—42, PL. 85）

鈴桶型石核から剝がされた黒曜石の縦長剝片である。上下からの剝離のあとが残り，刃部には歯こぼれがみられる。A区北側出土。

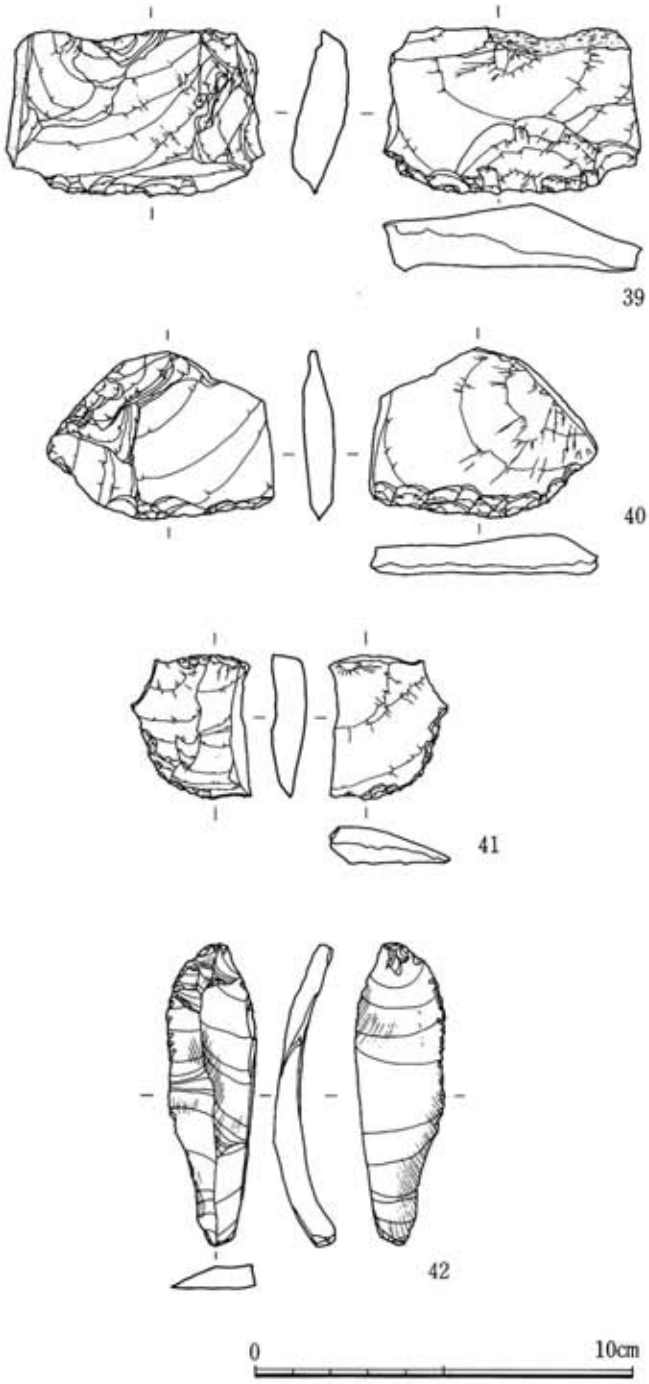


Fig. 129　石器実測図(3)

(2) 古 墳 時 代

古墳時代の遺構は，竪穴住居跡，掘立柱建物跡などを検出した。ここでは，本遺跡出土の古墳時代の遺物を一括して，須恵器，土師器に分け各々の遺物の特徴を述べていく。なお，土師器の甕形土器等については，歴史時代の遺物を含め一括して分類，記述を行っていきたい。

須恵器（Fig. 130～132 PL. 71・72）

須恵器はＳＢ016・018・021・027などの各住居跡，掘立柱建物跡などより出土し，出土量は少ない。器種としては蓋・杯・高杯・甕・瓶などがあり，特に蓋・杯が大半を占める。時期的には６世紀初頭から後半の遺物である。個々の土器出土地点については，Tab 5 浦田遺跡出土土器一覧表を参照されたい。ここでは各器種ごとに分類を行い，その特徴について述べる。

蓋（Fig. 130－43～57，PL. 71）

蓋は15個体以上出土しており，図示した15個体を形態により，Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄに大別する。

蓋Ａ（43～48）

器高が比較的高く，天井部は丸くなる。体部は長くハの字状に外に開くもので，口縁端部に段を有す。口縁端部の形状及び体部の開き方でａ，ｂに細分する。

蓋 Aa（43～45）　天井部が丸味を持ち，口径に対して器高がやや高い。口縁端部はシャープであり，明瞭な段を持つ。また天井部と体部の境にも段を有し，体部は直線的に外下方へ開く。天井部外面はヘラケズリ調整，他はナデ調整を行う。

蓋 Ab（46～48）　天井部が丸味を持ち口径に対して器高は低くなる。口縁端部にはにぶい段を持つ。天井部と体部の境に段を有し，体部は大きく外下方へ開く。体部に比べて天井部が低い。天井部外面はヘラケズリ調整，他はナデ調整を行う。

蓋Ｂ（49～55）

蓋Ａに比べ天井部は平坦になり，口径に対して器高は低い。口縁端部には明瞭な段がなくなり丸くなる。体部の長さ，体部と天井部の境に段を有するものと有さないものの違いにより，さらにａ，ｂに細分する。

蓋 Ba（49･50）　大きくハの字状に開く長い体部を持ち，体部に比べ天井部は低い。体部と天井部の境は段がなく，口縁端部は丸くなる。天井部外面はヘラケズリ調整，他はナデ調整を行う。

蓋 Bb（51～55）　ハの字状に開く短い体部を持ち，体部に比べ天井部は低い。体部と天井部の境には段を持ち，口縁端部に段を持つものと持たないものがあり丸くなる。天井部外面はヘラケズリ調整，他はナデ調整を行う。

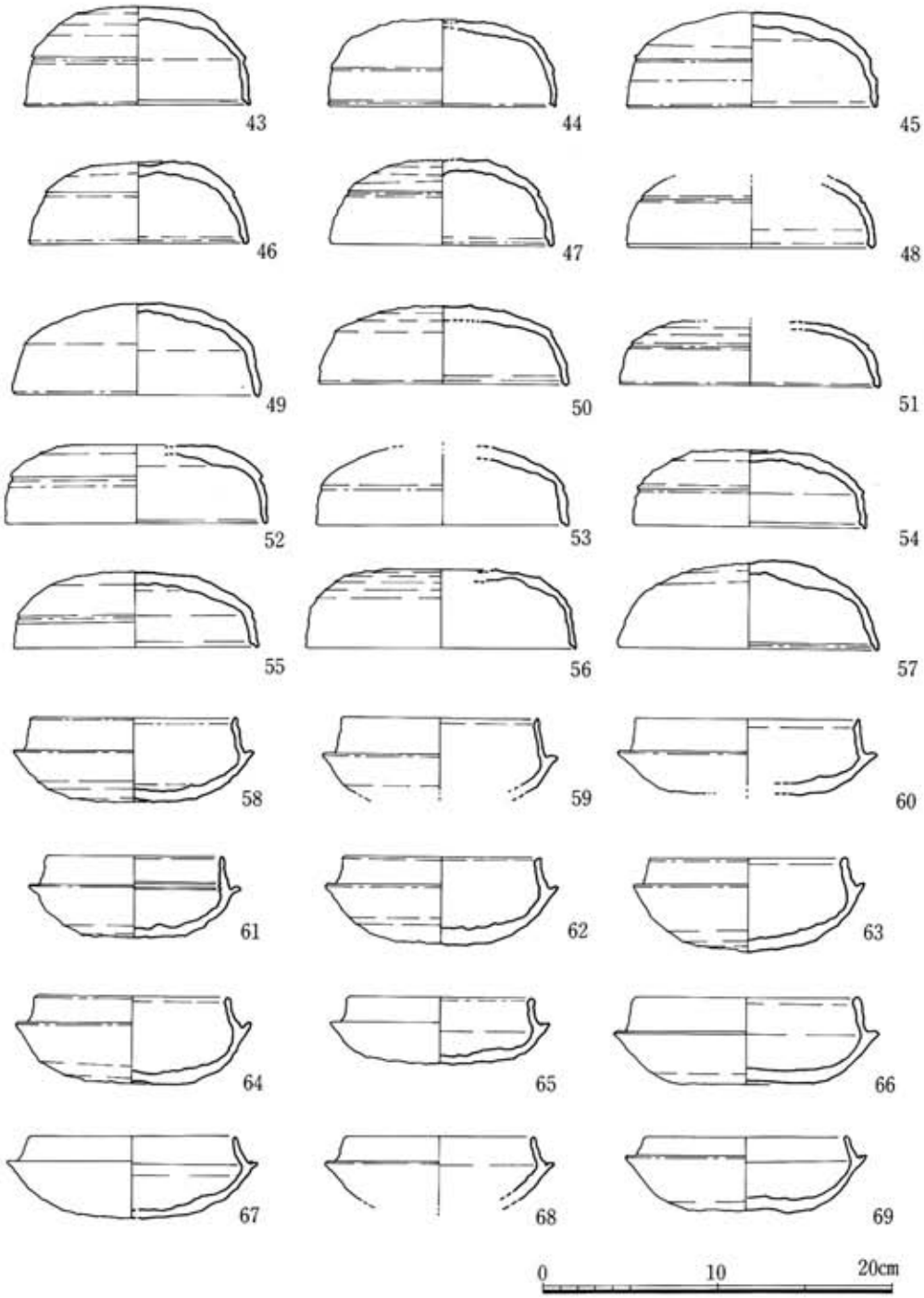


Fig. 130　須恵器実測図(1)

蓋C（56）

口径15.6cmと比較的大きく，体部と天井部の境がはっきりしない。口縁端部には明瞭な段を持ち尖る。器高に対し口径が大きい。天井部外面はヘラケズリ調整，他はナデ調整を行う。

蓋D（57）

口径15.0cmと比較的大きく，体部と天井部の境がはっきりせず丸くなる。口縁端部には，かすかに残る段を持ち丸くなる。天井部外面はヘラケズリ調整，他はナデ調整を行う。また天井部には4.5cmの直線のヘラ記号を持つ。

杯（Fig. 130—58～69，132—70～78，PL. 71・72）

21個体以上出土しているが，形態によりA・B・C・D・E・Fに大別できる。

杯A（58～60）

立ち上がりを持つもので法量により便宜上Ⅰ（口径12cm未満），Ⅱ（口径12cm以上）に分ける。

杯AⅠ（58・59）　立ち上がりが立ち気味に内向しており，杯が深いものである。立ち上がりが長く，シャープで口縁端部にわずかながら段を持つ。底部外面はヘラケズリ調整，他はナデ調整を行う。口径11.2～11.8cm，器高4.8cmを計る。

杯AⅡ（60）　AⅠと形態的特徴はほぼ同じで，口径12.8cm，器高約4.3cmを計る。

杯B（61～64）

立ち上がりを持つもので，立ち上がりの形態により，a，bに細分する。

杯Ba（61）　立ち上がりが立ち気味に内向しており，杯が深いものである。立ち上がりが杯Aに比べ短く，口縁端部はまるくシャープさを欠くもので，受部は水平に外方へのびる。底部外面はヘラケズリ調整，他はナデ調整を行う。口径10.2cm，器高4.6cmを計る。また立ち上がり内面に2条の沈線を持つ。

杯Bb（62～64）　立ち上がりが立ち気味に内向しており，杯が深いものである。立ち上がりが杯Baに比べ丸く厚手になる。受部は，わずかに上外方へのびる。底部外面はヘラケズリ調整，他はナデ調整を行う。口径10.8～11.4cm，器高5.0～5.6cmを計る。

杯C（65・66）

立ち上がりを持つもので口径の法量によりⅠ（12cm未満），Ⅱ（12cm以上）に分ける。

杯CⅠ（65）　立ち上がりが立ち気味に内向しており，杯が浅いものである。立ち上がりは杯B類とほぼ同じで短く，口縁端部が丸い。受部はわずかに上外方へのびる。底部外面はヘラケズリ調整，他はナデ調整を行う。口径10.8cm，器高3.6cmを計る。

杯CⅡ（66）　立ち上がりが立ち気味に内向しており，口縁端部はさらに内向するもので杯が浅いものである。立ち上がりは短く口縁部が丸い。受部は水平に外方へのびる。底部はやや上げ底となる。底部外面はヘラケズリ調整，他はナデ調整を行う。口径13.0cm，器高5.0cmを計る。

杯D（67～75）

立ち上がりを持ち，口径，器高の法量によりⅠ，Ⅱに分ける。

杯DⅠ（67～73）　立ち上がりの内傾度が著しく，くの字状に折れ，杯も浅いものである。立ち上がりは大きく内向し短く，口縁端部も丸い。受部は水平に外方へのびる。器形も全体的に小型になる。底部外面はヘラケズリ調整，他はナデ調整を行う。口径11.0～11.9cm，器高4.6cm～5.0cmを計る。

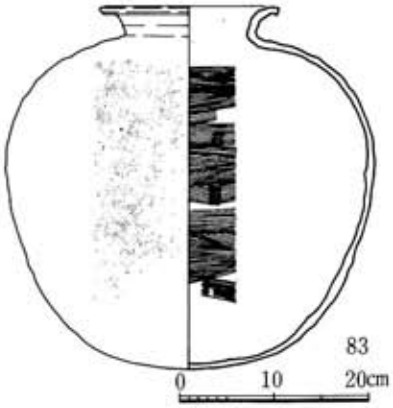


Fig. 131　須恵器実測図(2)

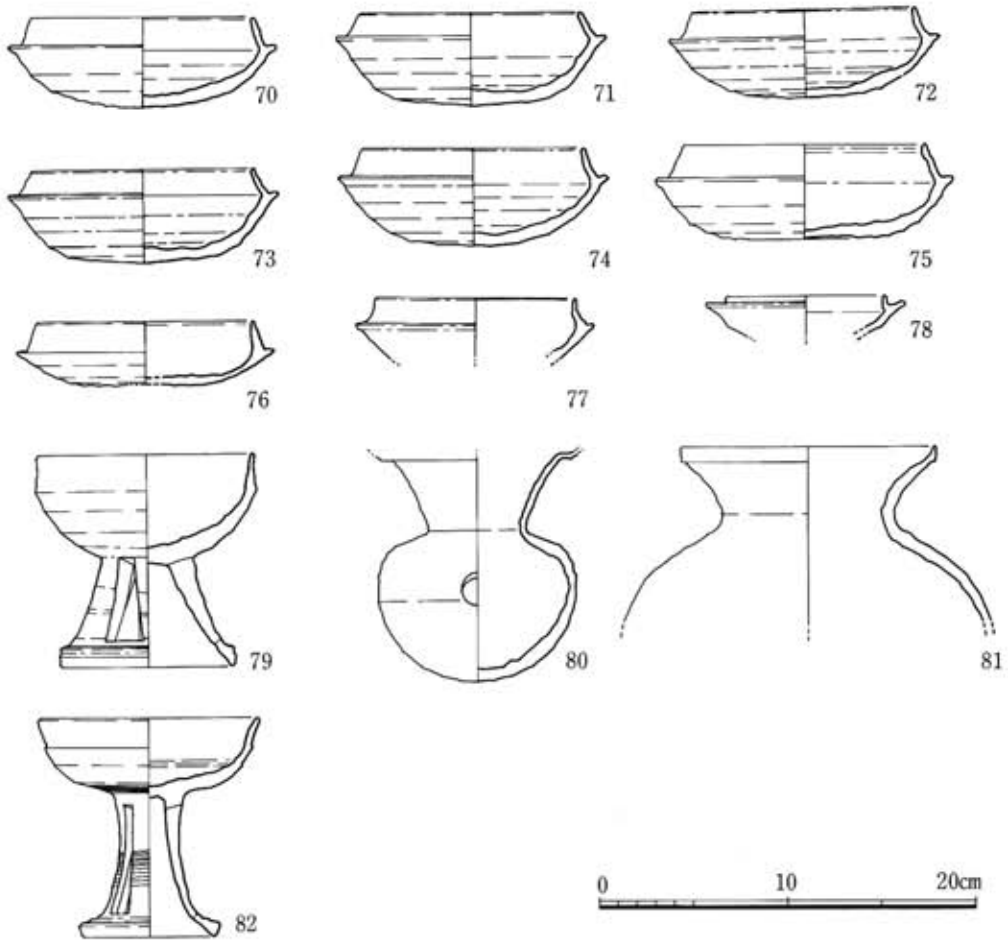


Fig. 132　須恵器実測図(3)

杯DII（75）　DI類と器形はほぼ同じであるが，立ち上がりは口縁部がさらに内向し口縁端部は段を有する。底部外面はヘラケズリ調整，その他はナデ調整を行う。口径12.8cm，器高4.8cmを計る。

杯E（76・77）

小型になる器形で立ち上がりの変化でa，bに細分する。

杯Ea（76）　立ち上がりが立ち気味に内向し，杯が浅いものである。底部外面はヘラケズリ調整，その他はナデ調整を行う。口径11.8cm，器高約3.2cmを計る。

杯Eb（77）　立ち上がりが途中より上方へ折れる。口径10.6cm。

杯F（78）

極めて小型の杯で，口径8.5cmである。

高杯（Fig. 132—79・82，PL. 72）

2個体出土した。図示した2個とも無蓋の高杯である。79は杯部が深く丸味を持ち脚部が短く大きく広がり，端部近くで屈曲して内傾し，先端が尖る。この脚部には1段透しが3方に入る。口径11.3cm，器高11.2cm，脚部径9.3cmを計る。82は杯部が浅く丸味を持ち体部に段を持つ。脚部は長く端部近くで屈曲する。この脚部には1段透しが3方に入る。口径11.6cm，器高11.6cm，脚部径7.9cmを計る。

聰（Fig. 132—80）

SB008住居跡より1個体出土しただけである。やや扁平で体部の肩が張り頸部が太いものである。口縁部は大きく開くものと考えられる。外面底部はヘラケズリ調整，その他はヨコナデ・ナデ調整を行う。胴部最大径10.4cmを計る。

甕（Fig. 131—83，132—81，PL. 73）

81は小型の甕で，外反する頸部は端部で肥厚し断面三角形を示す。内外面ともにタタキにより調整を行っている。口径13.4cmを計る。83は大型の短頸の甕で口縁部は大きく外方に開いており，胴部は扁平な球状である。口縁部はナデ調整，胴部外面はタタキ，内面はタタキのあとハケメにより再調整を行う。口径18.8cm，器高38.2cmを計る。

土師器（Fig. 133～146，PL. 73～83）

蓋・杯はすべて須恵器を模倣したもので，81個体を図示した。出土個体は100個体以上であり，この種の土器は県内では下中杖遺跡，西前田遺跡などから出土しているが，これだけまとまっ

て出土した例はきわめて稀である。

蓋（Fig. 133・134—113～126, PL. 73・74）

43個体出土している。形態によりA・B・C・D・Eに大別する。

蓋A（84～86）

口縁部の形状によりa・bに細分する。

蓋Aa（84・85）　天井部と体部が大きく屈曲して下方へさがり、稜を持つ。天井部は平坦に近く箱形になり，口縁部は丸い。84は口径13.4cm，器高4.0cm。調整は摩耗のため不明。色調は褐色。85は口径11.4cm，器高4.1cm。調整は摩耗のため不明。色調黄褐色である。

蓋Ab（86）　天井部と体部が大きく屈曲して下外方へさがり，稜を持つ。天井部は平坦に近く箱形になり，口縁部は下外方へ更に開く。口径16.0cm，器高3.3cm。調整は不明であるが部分的に黒塗りの跡を残す。色調暗褐色である。

蓋B（87～90）

球状の天井部に内湾する口縁部がつく。器高の法量によりⅠ・Ⅱに分け，体部の形状により更にa・bに細分する。

蓋BⅠa（87・88）　球状の天井部に内湾する体部がつき，口径に対して器高が高く椀形をなす。口縁部は丸味を持つ。87は口径13.0cm，器高4.7cm。調整は全体ヨコ方向のヘラミガキ調整。また全体に黒塗りを施す。88は口径13.8cm，器高5.4cm。調整はナデ調整である。色調赤褐色で黒斑がみられる。

蓋BⅠb（89）　球状の天井部に内湾しやや直立する体部がつき，口径に対して器高が低く，扁平な椀形をなす。体部はふくらみ，口縁部は丸味を持つ。口径13.4cm，器高4.5cm。調整は内外面ともにヘラミガキ調整。色調外面赤褐色，内面黒色で格子文様のヘラ記号を残す。

蓋BⅡb（90）　器形の特徴はBⅠb類と同じである。口径14.8cm，器高4.5cm。調整は天井部外面はヘラケズリ調整，他はヘラミガキ調整。色調黒褐色である。

蓋C（91～106）

天井部が丸く天井部と体部の境に明瞭な段がつくものである。口径，器高の法量の違いによりⅠ・Ⅱに分け，体部の形状の違いにより更にa・bに細分する。

蓋CⅠa（91～100）　天井部が丸く天井部と体部の境に明瞭な段がつくもので，体部が直立ぎみに立ち長いものである。口径11.4～13.2cm，器高4.4～4.9cmを計り，調整はヘラミガキを行う。色調は明褐色～黒褐色で，95・98の土器には内外ともに黒塗りが施してある。

蓋CⅠb（101～104）　天井部が丸く，天井部と体部の境に明瞭な段がつくもので，体部が直立ぎみに立ち短いものである。口径13.5～13.8cm，器高4.5～4.9cmを計り，調整は黒色～黒褐色で，全ての土器に内外面とも黒塗りが施してある。

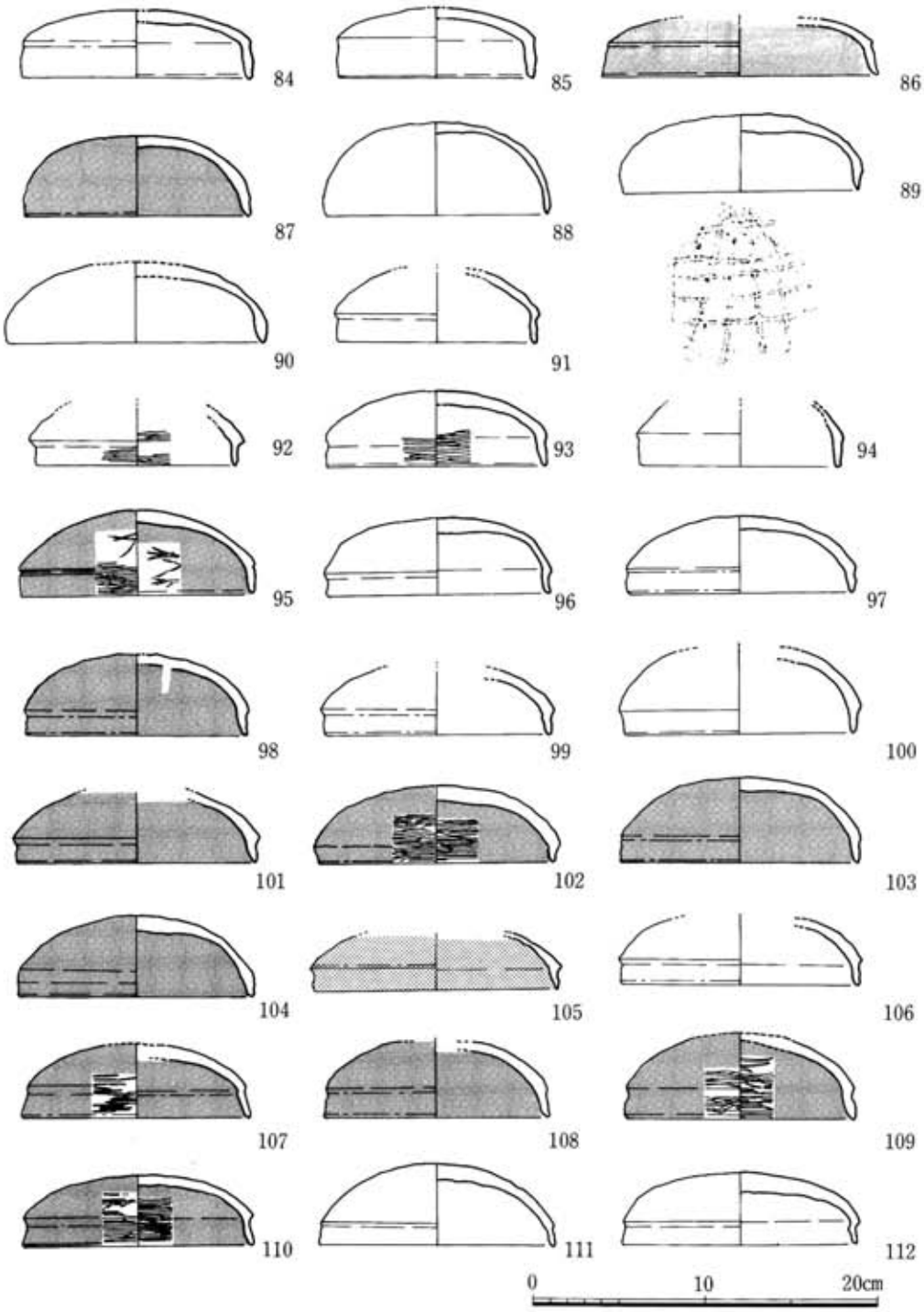


Fig. 133　土師器実測図(1)

蓋ＣII（105・106）　天井部が丸く天井部と体部の境に明瞭な段がつくもので，体部が直立ぎみに立ち長いものである。口径に対して器高が低く扁平な形である。口径14.0～14.2cm，残存器高3.3～3.8cmを計り，調整は，105はヘラミガキ調整のあと内外面ともに丹塗りを施し，106はヘラミガキ調整を行う。色調は黄褐色～黒褐色である。

蓋Ｄ（107～125）

天井部が丸く，天井部と体部の境に明瞭な段がつくものである。体部は外反する。口径，器高の法量の違いによりＩ・IIに分け，体部の形状の違いにより更にａ・ｂに細分する。

蓋ＤＩａ（107～118）　天井部が丸く，天井部と体部の境に明瞭な段がつくもので，体部が直立ぎみに外反し，長いものである。口径13.0～14.8cm，器高4.15～4.8cmを計り，調整はていねいなヘラミガキ調整がほとんどであるが，108・109は内面ヘラケズリのあとナデ調整である。107～110・113・116は内外面ともに黒塗りが施され，117は内面丹塗り，外面褐色。118は内面褐色，外面丹塗りが施されている。色調は淡赤褐色である。

蓋ＤＩｂ（119～122）　天井部が丸く，天井部と体部の境に明瞭な段がつくもので，体部が直立ぎみに外反し短いものである。口径12.4～13.4cm，器高3.1～4.0cmを計る。調整はヘラミガキを行う。色調は，119・120は内外面ともに淡褐色，121は赤褐色で部分的に黒斑を残す。122は褐色で部分的に煤状のものが付着する。

蓋ＤII（123～125）　天井部が丸く，天井部と体部の境に明瞭な段がつくもので，体部が大きく外反し長いものである。123はやや扁平で，口径に対して器高が低くなるものである。口径14～16.3cm，残存器高2.8～3.5cmを計り，調整は全てヘラミガキを行う。123・124は内外面ともに黒塗りが施され，125の色調は黄褐色である。

蓋Ｅ（126）

天井部が丸く，天井部と体部の境に明瞭な段がつくもので，体部は屈曲しさらに大きく外反し，口径に対して器高の低いものである。口径15.3cm，残存器高4.5cmを計り，内外面ともにヘラミガキ調整を行っており，色調は淡褐色である。

杯（Fig. 134－127～138，135，136－166～170，PL. 74～76）

38個体以上出土している。形態によりＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆに大別する。

杯Ａ（127・128）

立ち上がりが長く，直立気味にやや内向する。立ち上がりと体部の境に127は明瞭な段を持ち，128は不明瞭である。127は口径11.6cm，器高4.8cmを計り，色調は赤褐色で内外面ともにヘラケズリ調整を行う。128は口径13cmを計り，色調は褐色，内外面ともにヘラミガキ調整を行う。

杯Ｂ（129～135）

立ち上がりが直立するもので，立ち上がりと体部の境には明瞭な段を有するものである。口

縁部の形状によりａ・ｂに細分する。

杯Ba（129～132・134・136） 立ち上がりが直立するもので，立ち上がりと体部の境に明瞭な段を有する。立ち上がりはまっすぐ上にのび，口縁部は丸くなる。口径11.6～13.9cm，残存器高3.9～4.5cmを計る。129は色調は外面赤褐色，内面褐色で調整は不明。130は色調が内外面とも褐色で調整不明。131・132・136は黒塗りのあとヘラミガキを行う。

杯Bb（133・135） 立ち上がりが直立するもので，立ち上がりと体部の境には明瞭な段を有する。立ち上がりは，まっすぐのび，口縁部で外反する。133は口径13.6cm，残存器高4.0cmを計る。内外面ともに摩耗しているが，黒塗りのあとが残る。135は口径13.6cm，器高5.2cmを計る。立ち上がりはナデ調整，外面は黒塗りのあとヘラミガキを行う。

杯C（137～161）

立ち上がりが内傾するもので，立ち上がりの形状の違いによりａ・ｂに細分する。

杯Ca（137・138・140～161）

立ち上がりが内傾するもので，立ち上がりと体部の境に明瞭な段を有するものである。立ち上がりは内湾しながら内向するものと，外湾ぎみに内向するものがある。口径10.8～13.6cm，器高4.8～5.3cmを計る。ここでは黒塗りの土器（138・141・143～146・148～152・154・156～158・161）が多く，調整は底部外面はヘラケズリ調整，他は全て丁寧なヘラミガキ調整を行う。130は色調は内外面とも褐色で調整不明。137は色調は内外面ともに褐色，調整は外面は不明だが内面はヘラミガキ調整を行う。140は色調は内面褐色，外面黒褐色，ヘラミガキ調整を行う。147は色調は淡褐色で調整不明。153は色調は淡黄色で調整は内面ヘラミガキ，外面は不明である。155は色調は明褐色で内外面ともヘラミガキ調整，159は色調は褐色で調整は底部外面がヘラケズリ，他はヘラミガキ調整を行う。160は色調が淡褐色で黒斑があり，全面ナデ調整を行っている。

杯Cb（139・142） 立ち上がりが内傾ぎみに直立するもので，立ち上がりと体部の境に明瞭な段を有するものである。Ca類に比べ立ち上がりは明瞭に上方へ向く。139は口径11.0cmを計る。色調黒褐色で，内外面ともにヘラミガキ調整。142は口径11.3cmを計る。色調赤褐色で，調整は摩耗のため不明である。

杯D（162～164）

器高の法量の違いによりⅠ・Ⅱに分ける。

杯DⅠ（162） 立ち上がりが鋭角に内傾し，外反しながら上方へ向く。立ち上がりと体部の境には明瞭な段がつき，底部は扁平な球状の丸味を持つ。口径に対し器高が低い。口径10.8cm，残存器高4.5cmを計る。全面黒塗りの後ヘラミガキ調整を行う。

杯DⅡ（163・164） ＤⅠ類に比べ立ち上がりが上方に向き端部はわずかに外反する。立ち上がりと体部の境には明瞭な段がつき底部は球状の丸味をもつ。163は164に比べ，器壁も薄く，

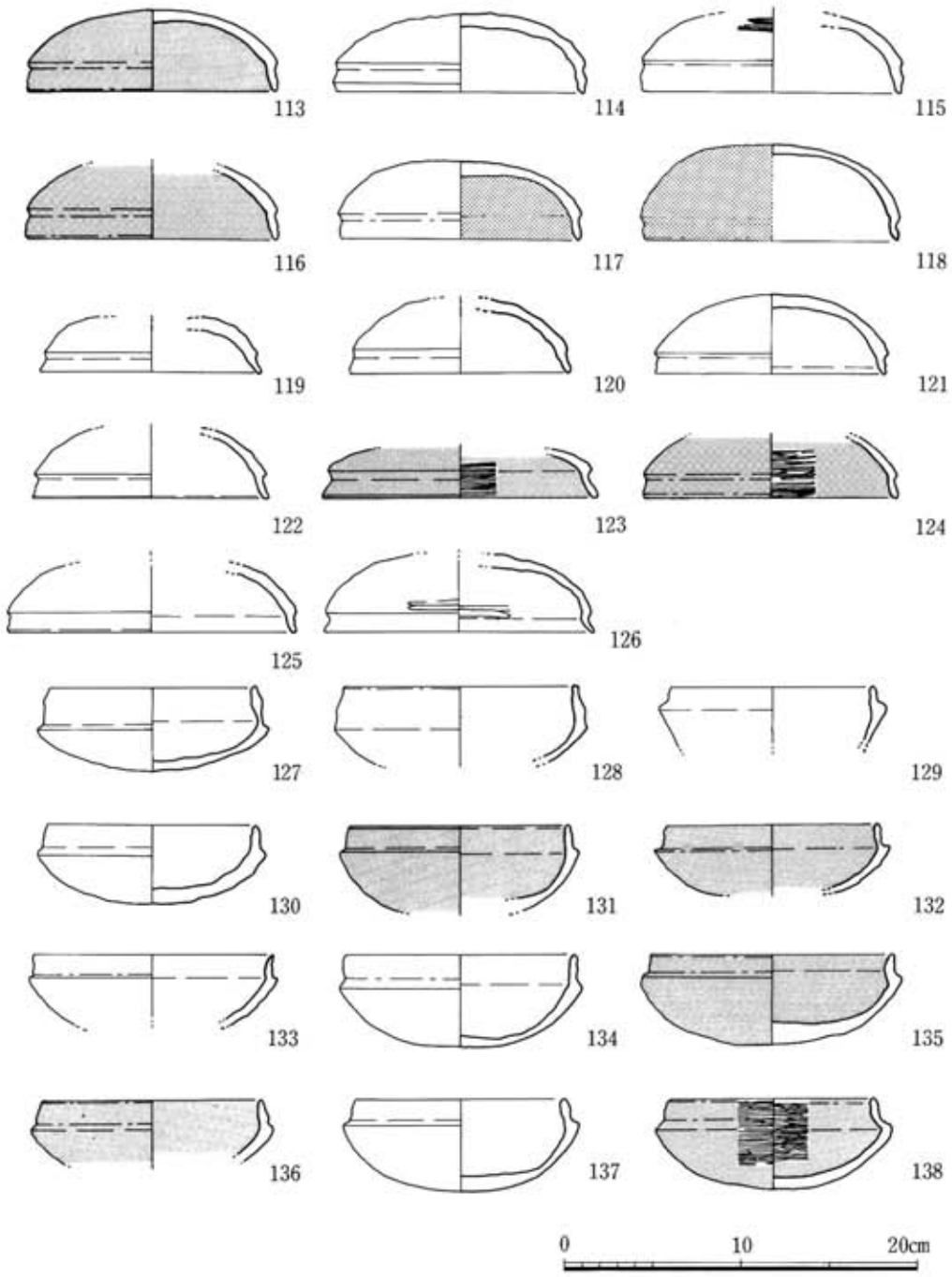


Fig. 134　土師器実測図(2)

口縁端部は尖り気味になる。163は口径10.4cm，器高6.1cmを計り，調整は黒塗りで，底部外面はヘラケズリ，他はヘラミガキ調整を行う。164は口径10.35cm，器高6.1cmを計り，調整は摩耗のため不明瞭であるが，ヘラケズリの後ヘラミガキ調整を行っているようである。色調は内面褐色，外面は黒褐色である。

杯E（165）

やや上外方にのびる短い立ち上がりに丸味のある底部がつく。立ち上がりと体部の境には明瞭な段がつく。器壁は薄手で口縁端部は尖り気味になる。口径16.7cm，残存器高4.85cmを計る。調整は黒塗りのあとヨコ方向のヘラミガキを行う。

杯F（166～170）

口径，器高の法量の違いによりⅠ・Ⅱに分け，細部の変化でa・bに細分する。

杯FⅠa（166・167） 丸底に内湾気味に大きく外に開く体部を持つもので，器壁は薄く，口縁端部は丸い。166は口径15cm，残存器高4.3cmを計る。調整は摩耗のため不明である。色調は褐色である。167は口径14.35cm，残存器高4.1cmを計り，調整はヨコナデ，色調は橙色である。

杯FⅠb（169） 丸底に内湾気味に大きく外に開く体部を持つもので，器壁が厚く，口縁端部は上方を向き丸味をもつ。口径15.4cm，残存器高3.4cmを計る。口縁部は指おさえの後ナデ，他はヨコナデ調整，色調は褐色である。

杯FⅡa（168） 丸底に内湾気味に大きく外に開く体部を持つもので，器壁が薄く，口縁部はさらに大きく外方へ開き，口縁端部は尖り気味になる。口径17.8cm，残存器高4.3cmを計る。調整は内外面ともヘラミガキの後内面丹塗りと思われる。色調は外面は褐色である。

杯FⅡb（170） 丸底に内湾気味に外に開く体部を持つもので，器壁が厚く，口縁端部は丸味を持つ。口径に対し器高も深い。口径17.1cm，残存器高6.8cmを計る。内外面ともにヘラ調整，色調は褐色で一部外面に黒斑が残る。

高杯（Fig. 136—171，PL. 76）

高杯の杯の部分である。立ち上がりが内傾しながらやや外反するもので，立ち上がりと体部の境には段を有する。口径11.9cm，杯部器高6.0cmを計る。内外面ともにヘラミガキ調整で，色調は明褐色である。

椀（Fig. 136—172，PL. 76）

丸底に内湾する口縁部がつくもので，口縁部はさらに内向し，端部は丸い。口径11.9cm，器高5.0cmを計る。全面ヘラミガキ調整で，色調は黒褐色である。

鉢（Fig. 136—173～175，PL. 76）

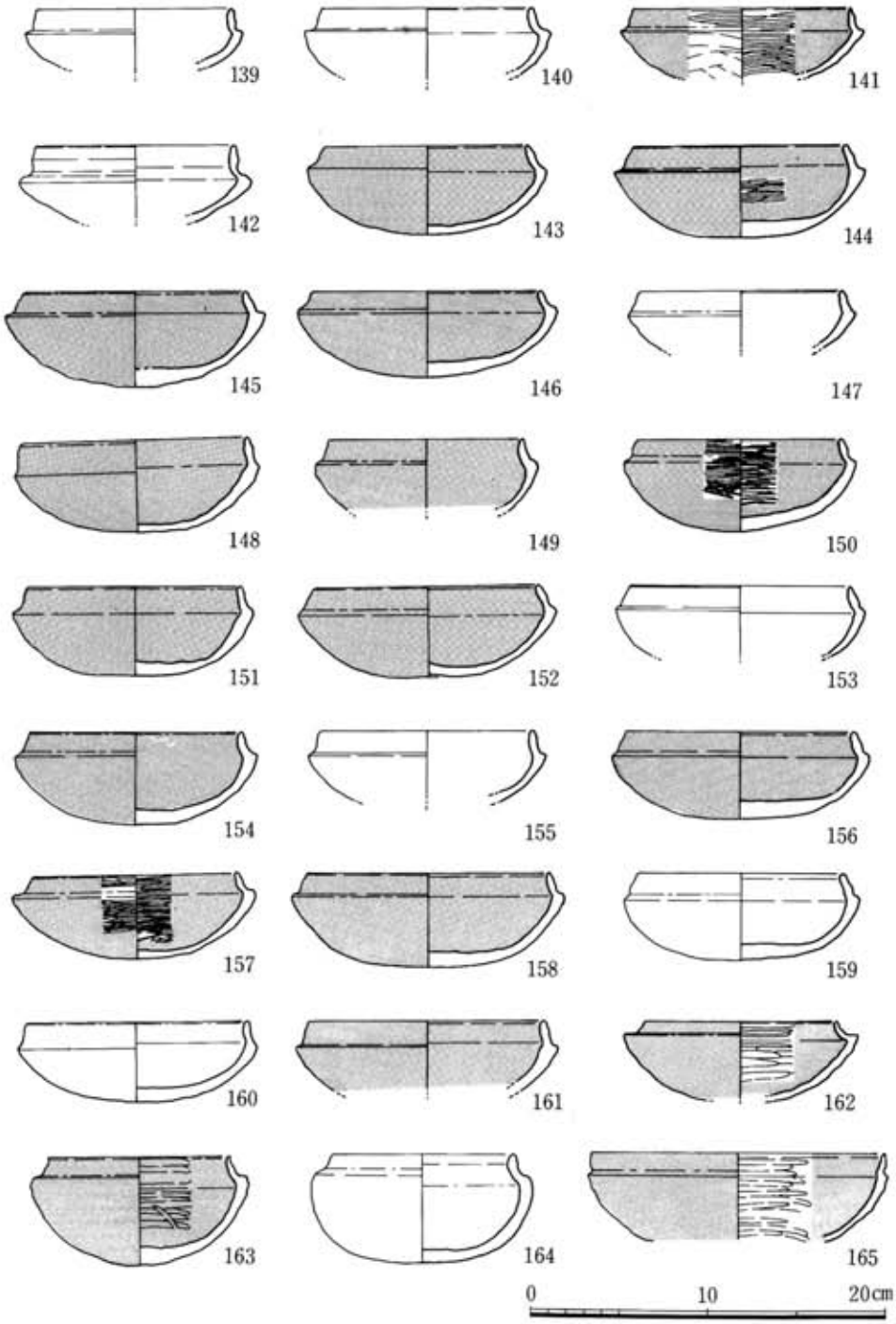


Fig. 135　土師器実測図(3)

形態の違いによりA・B・Cに分類する。

鉢A（173）

丸味を持つ平底に内湾気味に外反する体部を持ち，口縁部はさらに外反する。口径11.8cm，残存器高5.7cmを計り，調整は口縁部ナデ，他はヘラミガキ調整を行う。色調は明褐色である。

鉢B（174）

平底に内湾気味に直立する器壁の厚い体部を持つものである。口径10.5cm，器高5.0cmを計る。調整は底部内面ナデ，外面はヘラケズリ調整，体部は内外面ともにナデ調整で，外面には丹塗りのあとが残る。

鉢C（175）

平底に内湾気味に直立する器壁の薄い長い体部を持つものである。口径14.4cm，器高6.7cmを計り，調整は内外面ともに粗いハケメのあとヨコナデ調整を行い，色調は淡褐色で，煤が内外面に付着する。

手捏土器（Fig. 136—176）

鉢形のもので平底である。口径5.7cm，器高4.25cmを計り，調整は指おさえの後ナデを施し，色調は褐色である。

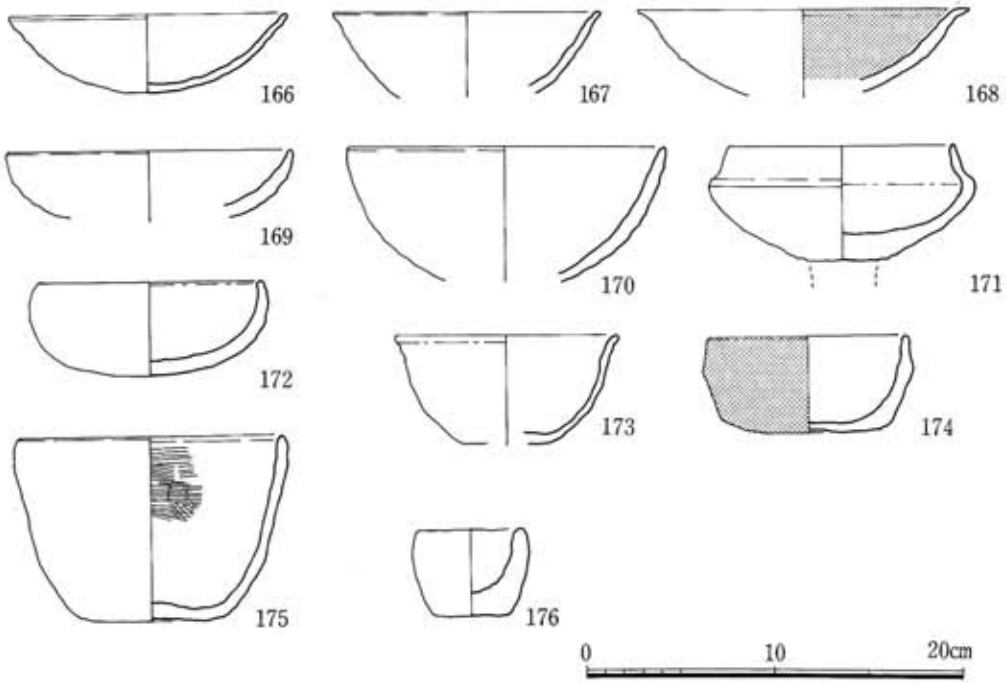


Fig. 136　土師器実測図(4)

Tab. 5　浦田遺跡遺物出土地点表(1)

遺物番号	土器分類	挿図番号	出土地点	遺物番号	土器分類	挿図番号	出土地点
43	蓋Aa	Fig.130	SB021床面	110	蓋DIa	Fig.133	SB015床面
44	〃Aa	〃	SB018埋土中	111	〃DIa	〃	SB028埋土中
45	〃Aa	〃	SB023埋土中	112	〃DIa	〃	SB028遺構検出面
46	〃Ab	〃	SB021床面	113	〃DIa	Fig.134	SB012埋土中
47	〃Ab	〃	SB021床面	114	〃DIa	〃	SB028埋土中
48	〃Ab	〃	SB024埋土中	115	〃DIa	〃	SB017埋土中
49	〃Ba	〃	SB021カマド東埋土中	116	〃DIa	〃	SB021埋土中
50	〃Ba	〃	A地区遺構検出面	117	〃DIa	〃	SB021埋土中
51	〃Bb	〃	SB021埋土中	118	〃DIa	〃	SB006遺構検出面
52	〃Bb	〃	SB008埋土中	119	〃DIb	〃	SB024埋土中
53	〃Bb	〃	SB015埋土中	120	〃DIb	〃	SB024埋土中
54	〃Bb	〃	SB017埋土中	121	〃DIb	〃	SB009
55	〃Bb	〃	SB018床面	122	〃DIb	〃	SB016埋土中
56	〃C	〃	SB035埋土中	123	〃DII	〃	SB015埋土中
57	〃D	〃	SB002埋土中	124	〃DII	〃	SB001
58	杯AI	〃	表面採集	125	〃DII	〃	SB005床面
59	〃AI	〃	SB016床面	126	〃E	〃	SB042
60	〃AII	〃	SB016床面	127	杯A	〃	SB028埋土中
61	〃Ba	〃	C地区中央部	128	〃A	〃	SB029カマド内
62	〃Bb	〃	SB021床面	129	〃Ba	〃	SB008床面
63	〃Bb	〃	SB021床面	130	〃Ba	〃	SB024
64	〃Bb	〃	SB021床面	131	〃Ba	〃	SB024埋土中
65	〃CI	〃	SB021埋土中	132	〃Ba	〃	SB042埋土中
66	〃CII	〃	SB021床面直上	133	〃Bb	〃	SB039埋土中
67	〃DI	〃	SB020埋土中	134	〃Ba	〃	SB021床面
68	〃DI	〃	SB015床面	135	〃Bb	〃	SB023埋土中
69	〃DI	〃	SB023床面	136	〃Ba	〃	SB021埋土中
70	〃DI	Fig.132	SB018床面	137	〃Ca	〃	SB012埋土中
71	〃DI	〃	SB027埋土中	138	〃Ca	〃	SB021床面
72	〃DI	〃	SB020埋土中	139	〃Cb	Fig.135	SB024埋土中
73	〃DI	〃	SB027埋土中	140	〃Ca	〃	SB035埋土中
74	〃DII	〃	SB018床面	141	〃Ca	〃	SB005埋土中
75	〃DII	〃	SB012埋土中	142	〃Cb	〃	SB016埋土中
76	〃Ea	〃	SB033ピット内	143	〃Ca	〃	SB023埋土中
77	〃Eb	〃	SB008カマド周辺	144	〃Ca	〃	SB021床面
78	〃F	〃	SB019カマド内	145	〃Ca	〃	SB027埋土中
79	高杯	〃	SB016埋土中	146	〃Ca	〃	SB023埋土中
80	壺	〃	SB021床面	147	〃Ca	〃	SB012埋土中
81	甕	〃	SB008	148	〃Ca	〃	SB023床面
82	高杯	〃	SB024埋土中	149	〃Ca	〃	SB012
83	甕	Fig.131	SB021	150	〃Ca	〃	SB028埋土中
84	蓋Aa	Fig.133	SB018床面	151	〃Ca	〃	SB023床面
85	〃Aa	〃	SB016埋土中	152	〃Ca	〃	SB021床面
86	〃Ab	〃	SB015埋土中	153	〃Ca	〃	SB005床面
87	〃BIa	〃	SB021床面	154	〃Ca	〃	SB023埋土中
88	〃BIa	〃	SB028埋土中	155	〃Ca	〃	SB008床面
89	〃BIb	〃	SB028遺構検出面	156	〃Ca	〃	SB015床面
90	〃BII	〃	SB012埋土中	157	〃Ca	〃	SB003
91	〃CIa	〃	SB024埋土中	158	〃Ca	〃	SB005
92	〃CIa	〃	SB024埋土中	159	〃Ca	〃	SB021床面
93	〃CIa	〃	SB018床面	160	〃Ca	〃	SB021床面
94	〃CIa	〃	SB008床面	161	〃Ca	〃	SB009埋土中
95	〃CIa'	〃	SB015床面	162	〃DI	〃	SB005埋土中
96	〃CIa	〃	SB021床面	163	〃DII	〃	SB037遺構検出面
97	〃CIa	〃	SB011床面	164	〃DII	〃	SB028埋土中
98	〃CIa	〃	SB021埋土中	165	〃E	〃	SB039埋土中
99	〃CIa	〃	SB011床面	166	〃FIa	Fig.136	SB003床面
100	〃CIa	〃	SB017埋土中	167	〃FIa	〃	SB005床面
101	〃CIb	〃	SB021床面	168	〃FIIa	〃	SB039埋土中
102	〃CIb	〃	SB028埋土中	169	〃FIb	〃	SB003床面
103	〃CIb	〃	SB012埋土中	170	〃FIIb	〃	SB003床面
104	〃CIb	〃	SB023床面	171	高杯	〃	SB021埋土中
105	〃CII	〃	SB042埋土中	172	椀	〃	SB011床面
106	〃CII	〃	SB028カマド内	173	鉢A	〃	SB022床面
107	〃DIa	〃	SB017埋土中	174	〃B	〃	SB005
108	〃DIa	〃	SB021埋土中	175	〃C	〃	SB022埋土中
109	〃DIa	〃	SB006	176	手捏土器	〃	SB008埋土中

壺（Fig. 137, PL. 77）

住居跡内より出土した。形態によりA・B・C・D・Eに大別する。

壺A（177）

球状の胴部に直立する口縁部を持つもので，ＳＢ021住居跡床面より出土した。口径10.3cm，器高16.1cmを計る。調整は内面ヘラケズリ，外面胴部〜底部にかけてヘラケズリのあとナデ調整，他はヨコナデ調整を行う。色調褐色。

壺B（178・179）

球状の胴部に大きくくびれる頸部とハの字状に開く口縁部を持つものである。178は内湾ぎみに外反する口縁部に，やや肩が張り尖がる感じの胴部を持つもので，調整は内外面ともにヘラケズリ調整，外面胴部から底部にかけてヘラケズリのあとナデ調整を行う。全面黒塗りの土器である。口径8.4cm，器高12.3cmを計る。ＳＢ021住居跡床面より出土。179は内湾ぎみに外反する口縁部を持ち，頸部に明瞭な段を有するもので球状の胴部を持つ。口径11.5cmを計り，調整は内面胴部は不定方向のヘラケズリ，他はナデ調整を行う。色調黄褐色で部分的に赤味を残す。Ｃ区ＳＴ044古墳周溝より出土。

壺C（180）

短く外反する口縁部に球状の胴部を持つものである。調整は胴部内面ヘラケズリ，外面はハケのあとナデ調整，口縁部はヨコナデによる調整を行う。口径10.8cmを計る。色調褐色。ＳＢ029住居跡カマド内出土。

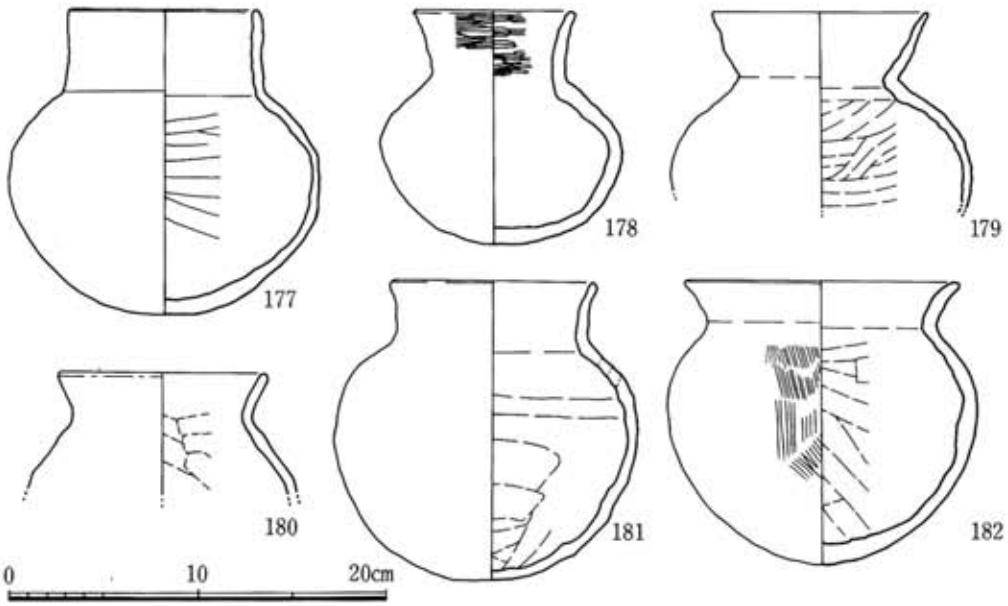


Fig. 137　土師器実測図(5)

壺D（181）

短く，直立ぎみに外反し端部はさらに外反する口縁部に，球状の胴部を持つものである。口径10.6cm，器高15.7cmを計る。調整は内面底部は不定方向のヘラケズリ，胴部はヘラケズリのあとナデ，口縁部はナデ，外面は摩耗のため不明瞭であるが，黒塗りの跡が残る。ＳＢ023住居跡出土。

壺E（182）

短く肉厚な外湾ぎみに開く口縁部に，底部がやや尖り気味な球状の胴部を持つものである。口径14.8cm，器高14.9cmを計る。調整は内面ヘラケズリ，外面ハケ調整を行う。色調は灰褐色で，外面に一部煤が残る。ＳＢ021住居跡出土。

甕（Fig. 138～144，PL. 77～79）

浦田遺跡より出土した土師器甕の量は多く全体の約60％に当たる。器種もいろいろ変化に富み，好資料といえる。

形態によりＡ・Ｂ・Ｃに大別する。

甕Ａ（183～226）

口縁部径が胴部最大径よりも小さいもので，丸味のある胴部を持ち口縁部がくの字状に外反する一群である。また器高，口径の大小によりＩ・IIに分け，口縁部の特徴及び細部の違いによりＩをａ～ｉに，IIをａ～ｄに細分する。

甕ＡＩａ（183～191）　短く外湾しながら外に開く口縁部に丸味のある胴部を持つもので，口縁部と胴部に明瞭な段を有さないものである。口径10.5～15.2cm，器高12.2～18.5cmを計る。調整は内面ヘラケズリのあとナデ調整，外面ハケ調整，口縁部はナデ調整を行う。

甕ＡＩｂ（192･193）　短く外反する口縁部にややタテ長の丸味のある胴部を持つもので，口縁部と胴部に明瞭な段を有さないものである。192は口径12.1cm，器高15.5cmを計る。調整は内面ヘラケズリ，ヘラミガキ，外面ヘラケズリを行い，口縁部はヨコナデ調整を行う。193は口径14.9cm，器高15.0cmを計る。調整は内外面ともにヘラケズリとナデ調整を行う。

甕ＡＩｃ（206～217）　丸味を持ち短く外湾気味に外反する口縁部に丸味のある端部がつき，大きく広がる胴部を持つ。口縁部と胴部の境内面にヘラケズリ調整の時の明瞭な段を持つもので，胴部は大きく開き，球状になる。口径14.2～18.6cmを計り，調整は全体的に内面ヘラケズリ調整，外面ハケ調整，口縁部内面に一部ハケ調整を行っている。他はヨコナデによる調整を行う。

甕ＡＩｄ（199）　直立ぎみに外反し，端部が丸い口縁部にやや肩が張る球状の胴部を持つもので底部に行くにしたがって器壁は厚くなる。口径13.4cm，器高17.5cmを計る。調整は内面ヘラケズリのあとナデ，外面はハケ調整，口縁部はナデ調整を行う。

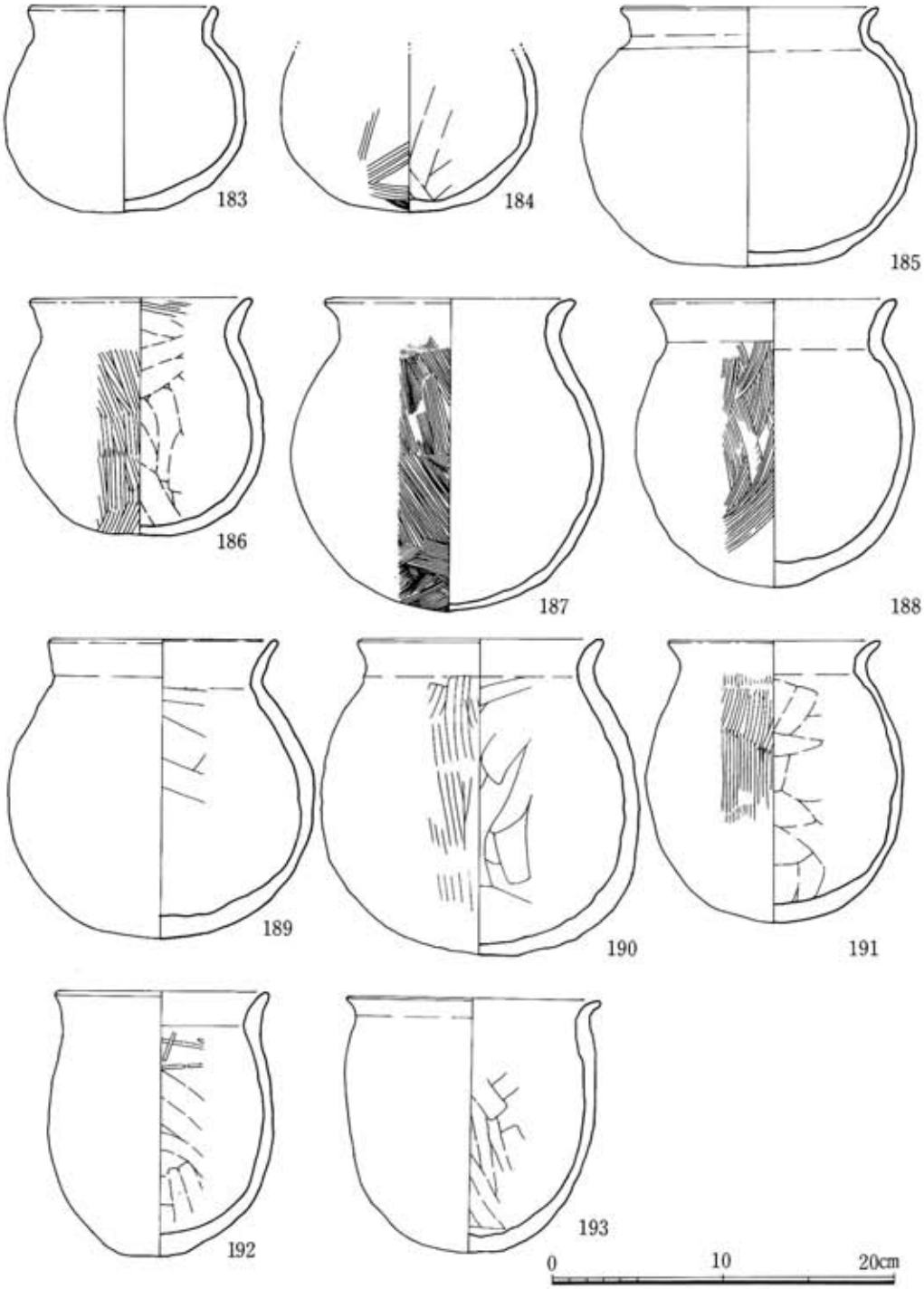


Fig. 138　土師器実測図(6)

甕ＡＩe(205)　小型の甕で，くの字状に外反する口縁部に丸味のある胴部を持つ。口径11.0cmを計る。調整は内面ヘラケズリ，外面ハケ調整を行っているが，摩耗のため不明瞭である。口縁部内面にはヘラ状の工具痕が残る。

甕ＡＩf(201～203)　丸味を持ち短く外湾気味に外反する肉厚の口縁部に大きく広がる胴部を持つものである。口縁端部は丸味を持つ。口径12.8～16.4cmを計り，調整は，内面ヘラケズリ調整，外面はハケ調整，口縁部はナデ調整を行う。

甕ＡＩg(218～220)　外上方へ外反しながらのびる口縁部に丸味を持つ端部がつき，丸味のある胴部を持つもので，口径17.2～22.0cmを計る。内面ヘラケズリ調整，外面ハケ調整、ナデ調調整等を行う。

甕ＡＩh(221～225)　外湾ぎみに外反し，直線的に上外方へのびる口縁部に丸味のある球状の胴部を持つものである。器壁は比較的厚い。口縁部と胴部は比較的くびれがなく直線的である。口径14.0～24.6cmを計る。調整は，ヘラケズリ，ナデ調整，外面はハケ調整，口縁部は221・222は内面にハケ調整を残すが，他はナデ調整を行う。

甕ＡＩi(226)　口縁部が非常に短く大きくくの字に外方へ開き，口縁部に丸味を持つ端部がつきやや長めで球状の胴部を持つもので，器壁は比較的厚い。口径16.0cmを計る。調整は内外面ともにハケ調整を行う。

甕ＡＩＩa(194～197)　短く外湾しながら外反する口縁部に縦長の丸味のある胴部を持つもので，大型の甕形土器である。194は口径19.8cm，器高32.4cmを計る。調整は内面ヘラケズリ，外面ハケ調整，口縁部はヨコナデ調整を行う。195は口径18.6cm，器高32.0cmを計る。調整は内面ヘラケズリ，外面ハケ調整，口縁部はハケのあとナデ調整を行う。196は口径20.8cmを計る。調整は内面指おさえのあとナデ調整にて仕上げており，外面はハケ調整，口縁部はナデ調整を行う。197は口径16.0cm，器高29.2cmを計る。調整内面ヘラケズリ，外面ハケ調整，口縁部はナデ調整を行い，外面に一部ナデ調整のあとが残る。

甕ＡＩＩb(198)　鉢に近い形の短く外反する口縁部に浅い球状の胴部を持つものである。口径23.0cm，器高22.6cmを計る。調整は内面不定方向のヘラケズリ，外面ハケ調整，口縁部はナデ調整を行う。

甕ＡＩＩc(200)　直立ぎみにやや外反し，端部が丸い口縁部にやや肩が張り球状で凹凸のある胴部を持つもので，平底気味になる。ＡＩd類に比べ大型となる。口径17.7cm，器高25.1cmを計る。調整は内面ヘラケズリのあとヘラミガキ調整を行っているが，摩耗のため不明瞭である。

甕ＡＩＩd(204)　丸味を持ち短く外湾気味に外反する口縁部に大きく広がる胴部を持つもので，器壁は薄い。口径19.2cmを計る。調整は内面ヘラケズリ，外面ハケ調整，口縁部ナデ調整を行う。ＡＩf類に比べ大型となる。

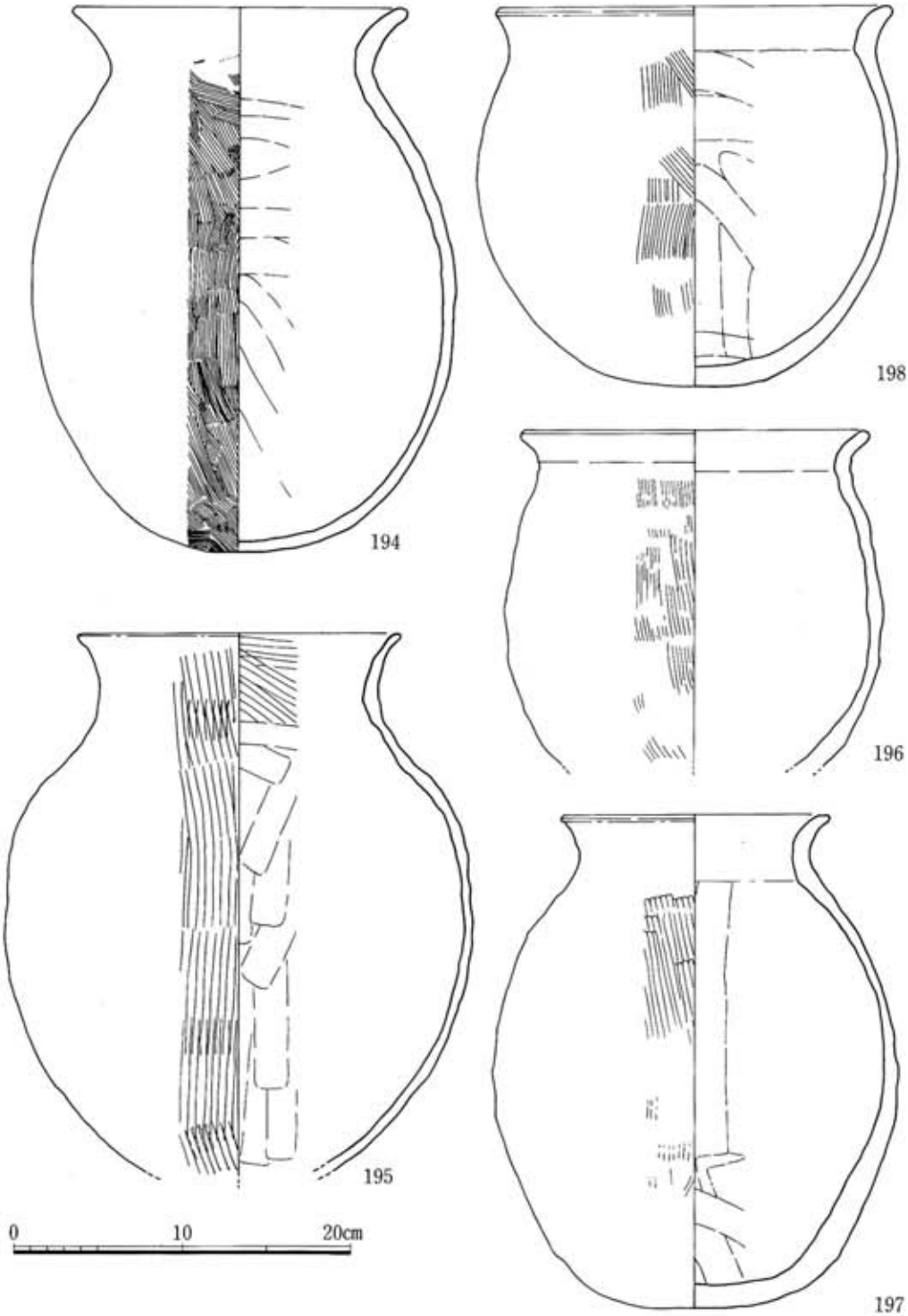


Fig. 139　土師器実測図(7)

甕B（227）

内湾ぎみに僅かに外反するが，口縁部がほとんど開かずに直線的に胴部へつながる。口縁端部は丸味を持ち，さらに外反する。口径21.4cmを計る。調整は内面ヘラケズリ，口縁部はヨコナデ調整を行う。

甕C（228～241）

口縁部より胴部最大径が小さく，また胴部は胴長であまり張りのない球状になる一群である。口縁部の特徴によりさらにa・bに細分する。

甕Ca（228・230～232）　直線的に大きく折れまがり外方へのびるもので口縁部に丸味を持つ端部がつき，直線的に下方へのび，ややふくらみがある胴部を持つものである。口径22.6～24.4cmを計る。調整は内面ヘラケズリ，232はヘラケズリの後ナデ調整，外面はハケ調整を行う。口縁部は228・231は内面にハケ調整を行っているが，他はヨコナデ調整を行う。

甕Cb（229・233～241）　短く軽く外反する口縁部に丸味を持つ端部がつくもので，胴部は器高の中位に最大径をもつが大きく張らないものである。口径17.4～30.2cmを計る。調整は233・236・238～240はヘラケズリ，他はナデ調，外面はハケ調整を行う。口縁部は229・233～235・238～240は内面にハケ調整を行うが，他はヨコナデによる調整を行っている。

甕D（242～249）

くの字状に外反し，ややそり気味に上外方へ開く。口径より胴部径が小さく，丸味を持つ口縁部に楕円形の胴部を持つもので，底部は平底，あるいは平底に近いものである。口径（Ⅰは20cm未満，Ⅱは20cm以上）によりⅠ・Ⅱに分け，Ⅱを細部の変化によりさらにa・bに細分する。

甕DⅠ（242～244）　くの字状に小さく外反し，ややそり気味に上外方へ開く。口縁部より直線的に下方にのび，あまり胴の張らない楕円形の胴部に平底に近い底部がつくものと考えられる。口径13.0～14.9cmを計る。調整は内外面ともにハケ調整で，口縁部はナデ調整を行う。

甕DⅡa（245～248）　器形の特徴はDⅠ類に同じもので，器形が大型になるものである。口径20.4～28.4cmを計る。調整は内面ヨコ方向のハケ調整で，245はその後ナデにより調整を行う。外面はハケ調整である。248はやや上げ底ぎみの平底がつく。

甕DⅡb（249）　長く外湾ぎみに外方に開く口縁部に，下位の方に最大径を持つ胴部がつくもので，やや上げ底ぎみの平底がつく。口径21.9cm，器高21.4cmを計る。調整は内面不定方向のハケ，底部付近はハケのあとナデ調整，外面はハケ調整，口縁部は内面ハケのあとヨコナデ，外面ナデ調整を行う。

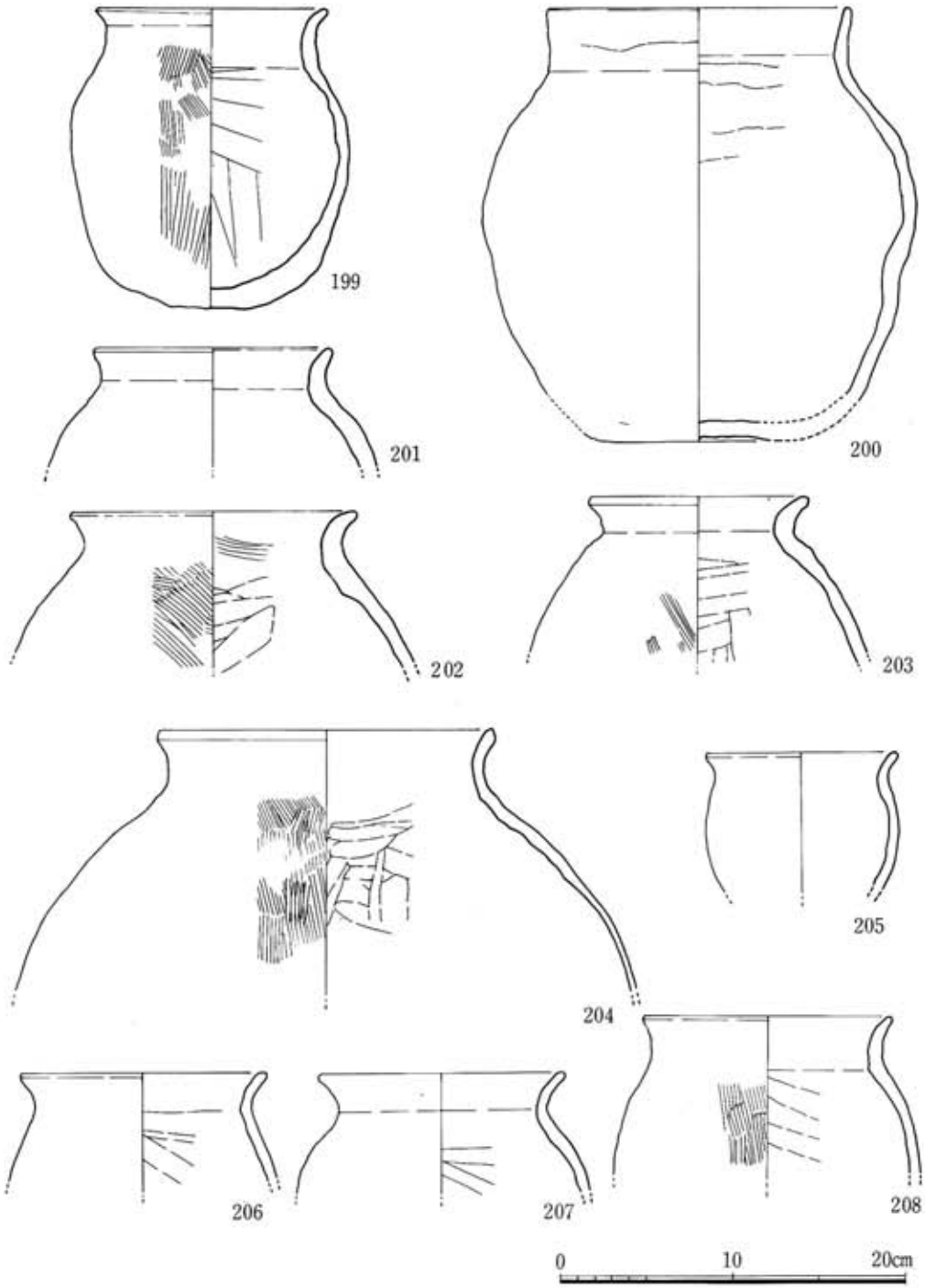


Fig. 140　土師器実測図(8)

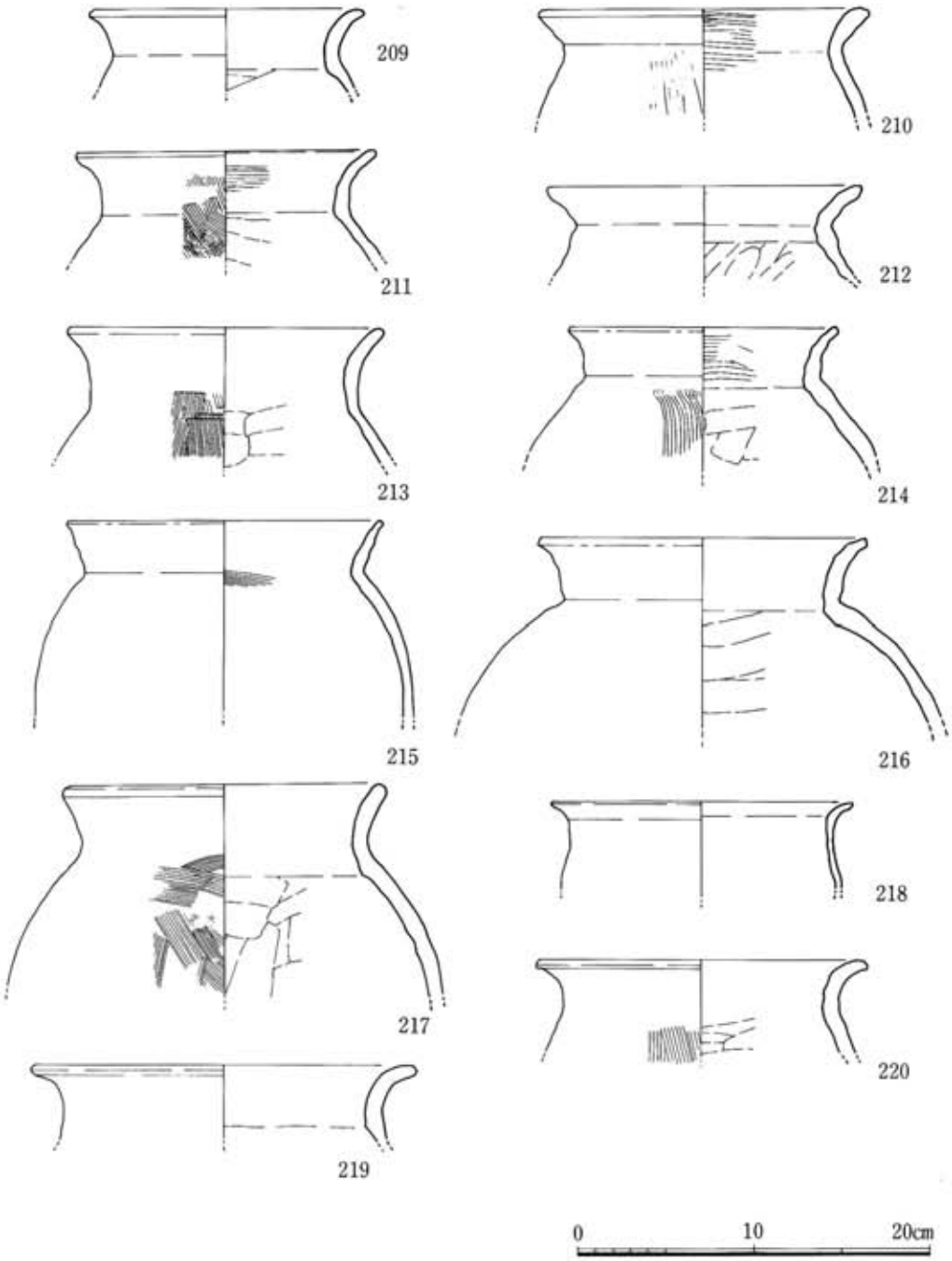


Fig. 141　土師器実測図(9)

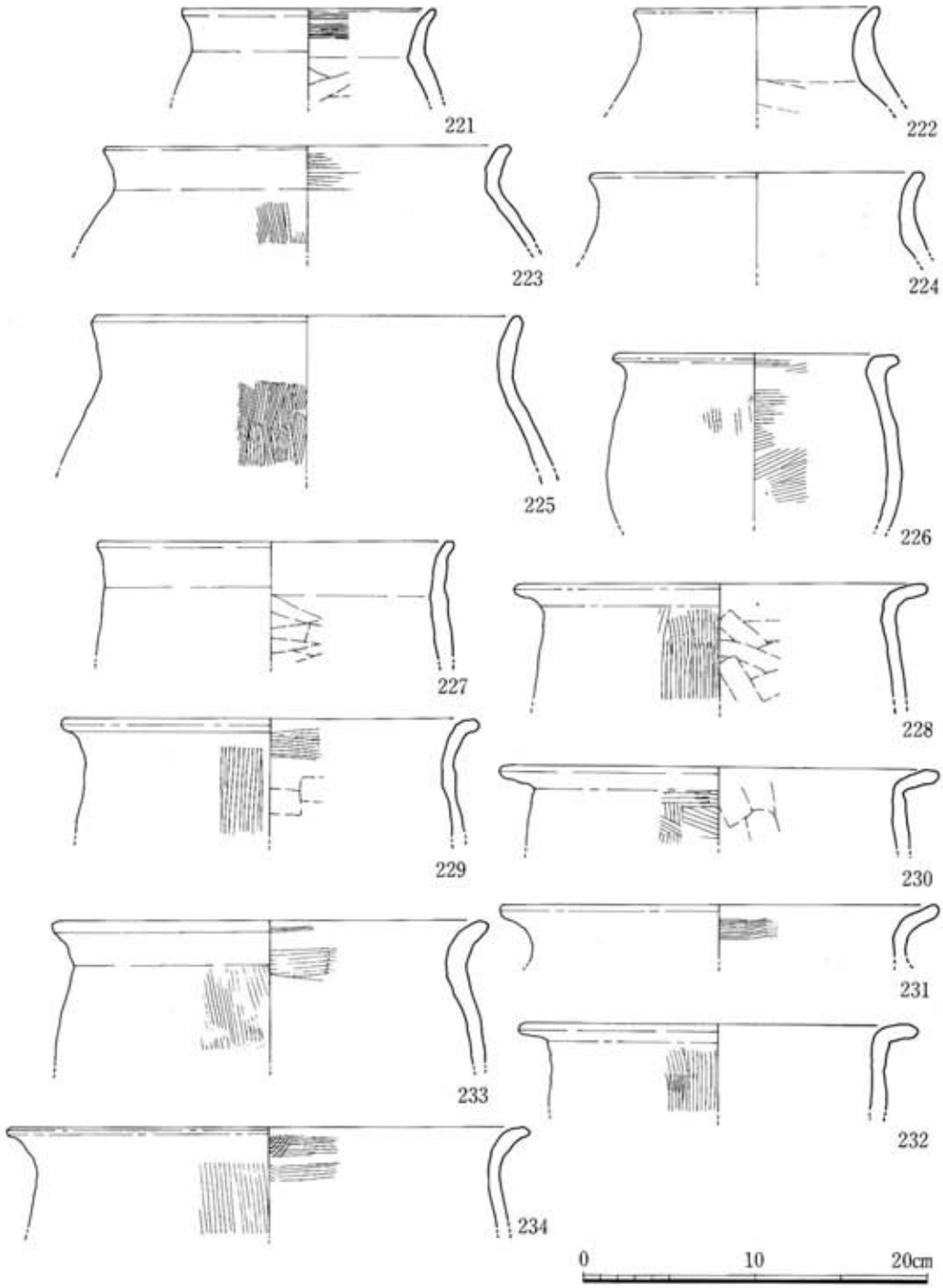


Fig. 142　土師器実測図(10)

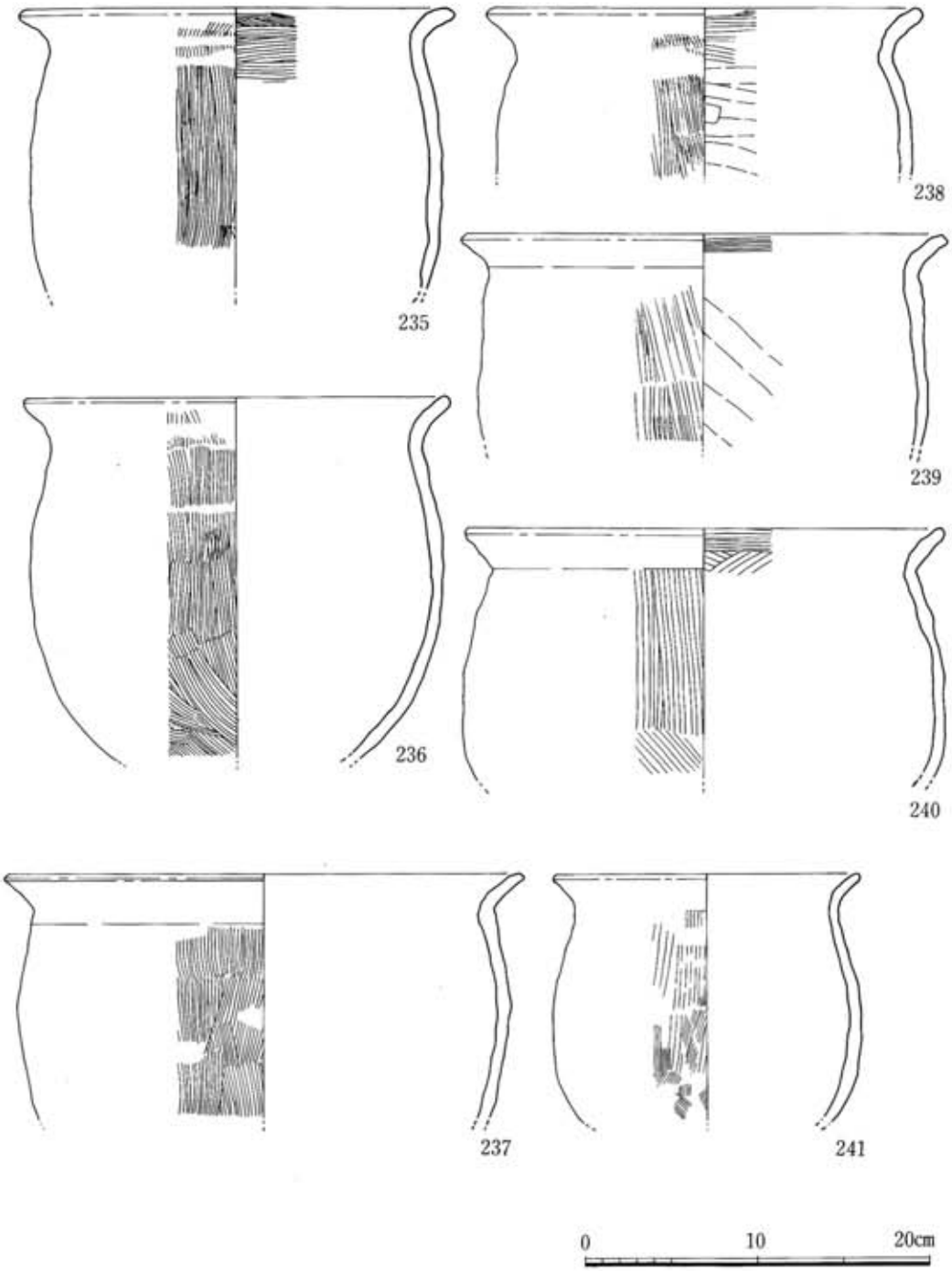


Fig. 143　土師器実測図(1)

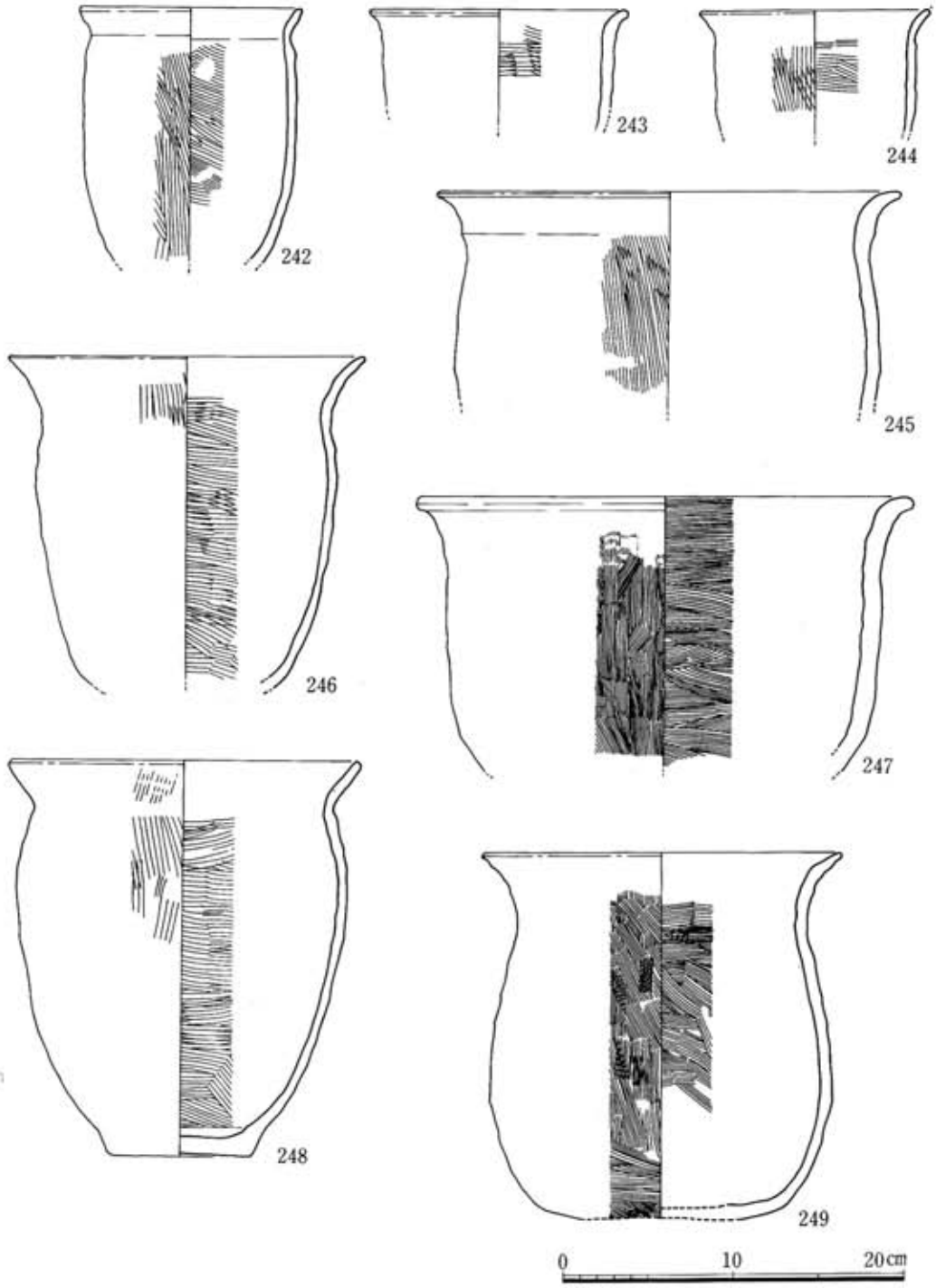


Fig. 144　土師器実測図(12)

鉢（Fig. 145—250～253, PL. 80）

4個体を形態によりA・Bに大別，さらに細部の変化によりa・bに細分する。鉢A（把手のつくもの），B（把手のつかないもの）に大別する。

鉢Aa（250）　大きく上外方へそり気味に開く口縁部に，ややふくらむ胴部と平底気味の底部がつく。胴部中位に1対の把手を持つものである。口径10.8cm，器高10.6cmを計り，調整は，内面ヨコナデ調整，外面は摩耗のため不明瞭である。底部はヘラケズリ，他はヨコナデ調整を行い，把手は指おさえにて貼付け，指頭調整を行う。また底部には煤が付着する。

鉢Ab（251）　短く丸味を持ち外反する口縁部に半円状の丸味のある胴部を持つ。口縁部のすぐ下には1対の把手の跡を残す。口径14.0cm，器高9.0cm，調整は内面ナデ調整，外面は不明である。

鉢B（252・253）

短く丸味を持ち外反する口縁部に半円状の丸味のある胴部を持つもので，器壁は比較的厚手のものである。252は口径19.4cm，内面ヘラミガキ，外面，口縁部ともにヨコナデ調整を行う。253は，口径21.4cm，内面ヘラミガキ，口縁部ヨコナデ，他は調整不明である。SB029住居跡カマド内より出土。

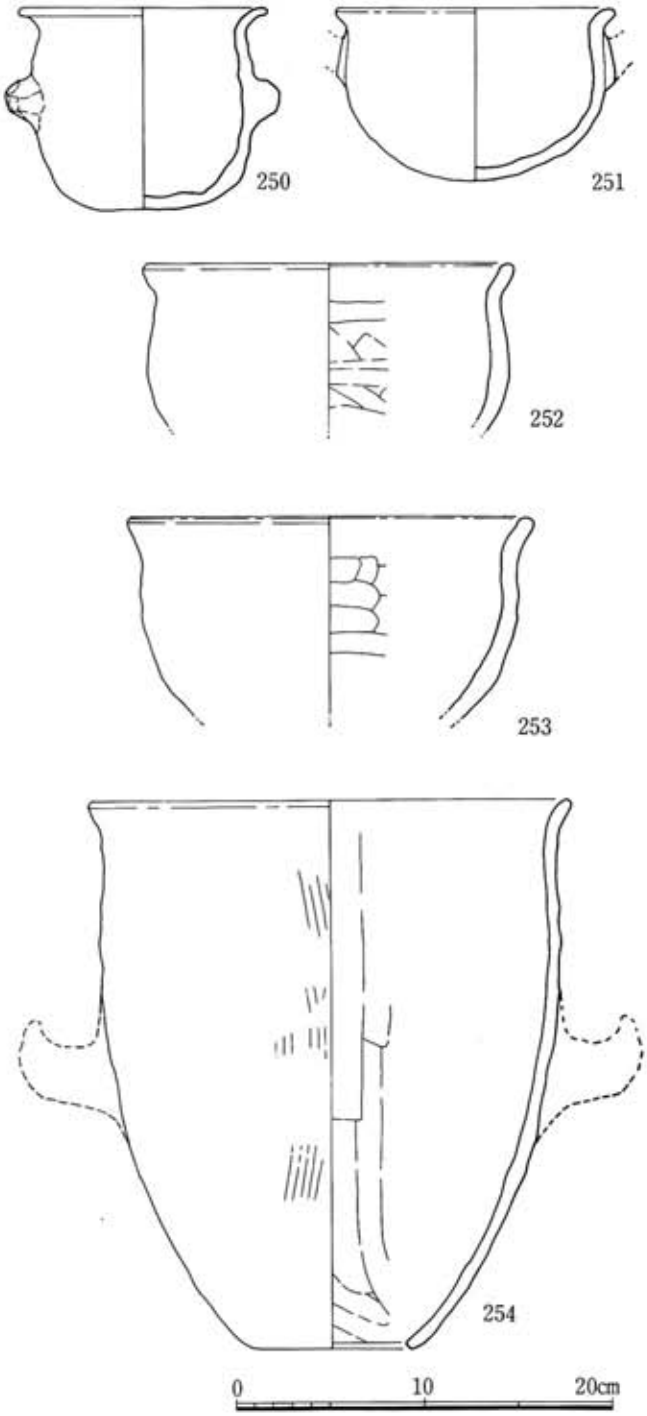


Fig. 145　土師器実測図(13)

甑（Fig. 145—254, 146, PL. 80）

甑は6個体出土している。形態によりA・B・Cに大別する。

甑A（255・256）

砲弾形の器体に把手のつかない小型の甑である。255は口径14.4cm，器高13.5cm，調整は胴部外面不定方向のハケメ，内面不定方向のヘラケズリ，口縁部ナデ，口縁部内面にハケメ調整を行う。ＳＢ028住居跡床面出土。256は口径18.8cm，器高15.7cm，調整は胴部外面タテ方向のヘラケズリの後ナデ，内面ヘラケズリ，口縁部ナデ調整を行う。ＳＢ027住居跡埋土中出土。

甑B（257）

砲弾形の器体の片方に把手がつく小型の甑である。口径16.5cm，器高16.3cm，調整は，胴部外面ハケのあとナデ，内面ヘラケズリ，口縁部ヨコナデ調整を行い，把手は指頭調整を行う。ＳＢ021住居跡床面出土。

甑C（254・258・259）

砲弾形の器体に1対の把手がつく大型の甑である。258は口径24.8cm，器高29.4cm，調整は，胴部外面不定方向のハケ，内面ヘラケズリ，口縁部ヨコナデ調整を行い，把手は指頭調整を行う。ＳＢ017住居跡出土。259は口径23.6cm，器高27.6cm，調整は胴部外面ハケメのあとナデ，内面ヘラケズリ，口縁部ヨコナデ調整を行い，把手は指頭調整を行う。ＳＢ023住居跡出土。254は口径25.0cm，器高29.2cm，調整は胴部外面ハケメ，内面ヘラケズリのあとナデ，口縁部ヨコナデ調整を行う。把手は欠損している。Ａ区表土下層出土。

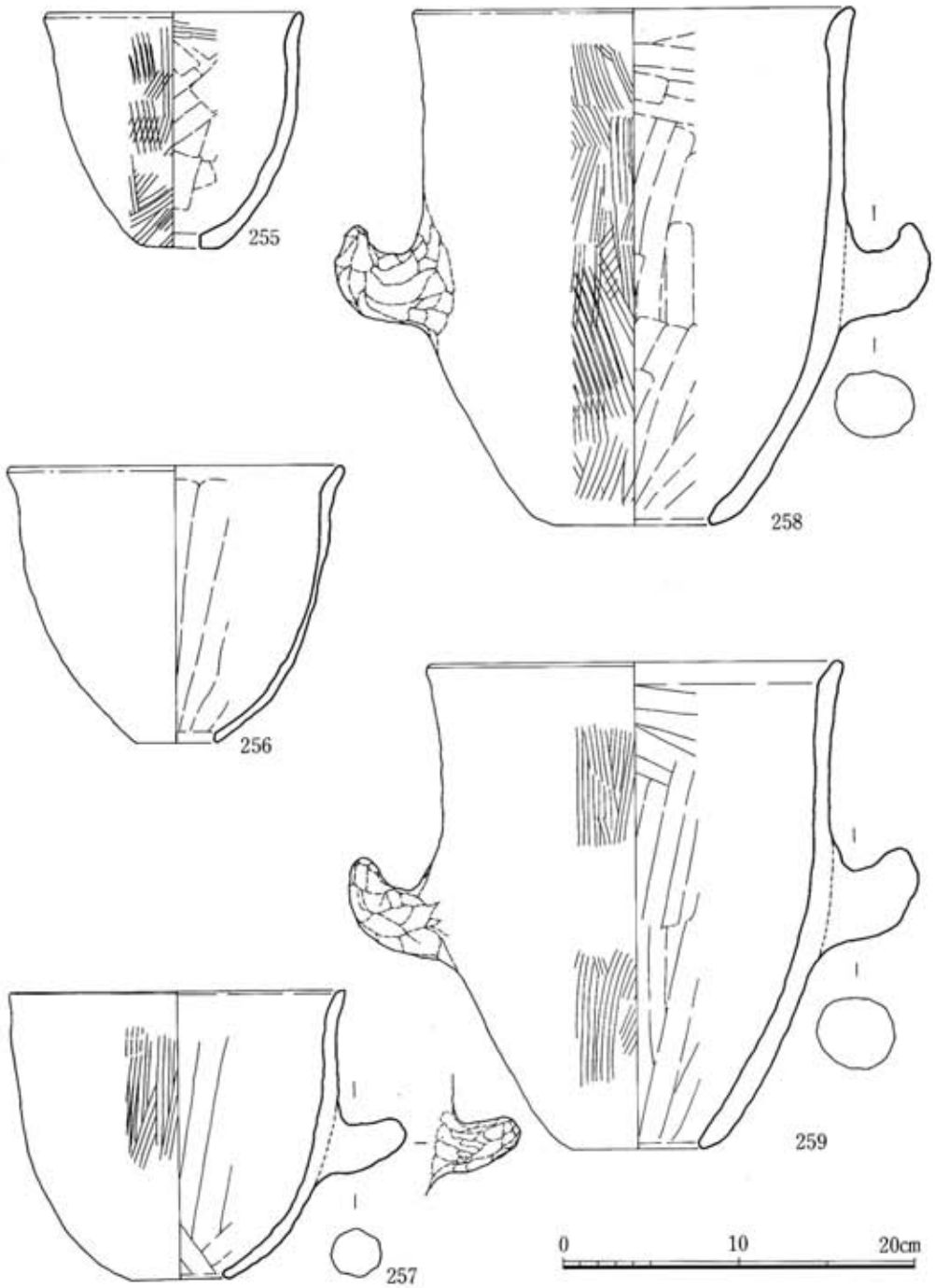


Fig. 146　土師器実測図(14)

Tab. 6　浦田遺跡遺物出土地点表(2)

遺物番号	土器分類	挿図番号	出 土 地 点	遺物番号	土器分類	挿図番号	出 土 地 点
177	壺A	Fig. 137	S B021床面	219	甕A I g	Fig. 141	S B005埋土中
178	〃B I	〃	S B021床面	220	〃A I g	〃	S B018埋土中
179	〃B II	〃	C区周溝内	221	〃A I h	Fig. 142	S B020埋土中
180	〃C	〃	S B029カマド内	222	〃A I h	〃	S B005埋土中
181	〃D	〃	S B023	223	〃A I h	〃	S B006埋土中
182	〃E	〃	S B021床面	224	〃A I h	〃	S B036埋土中
183	甕A I a	Fig. 138	S B027埋土中	225	〃A I h	〃	S B015床面
184	〃A I a	〃	S B029床面	226	〃A I i	〃	S B004床面
185	〃A I a	〃	S B009床面	227	〃B	〃	S B024埋土中
186	〃A I a	〃	S B011床面	228	〃C a	〃	S B014床面
187	〃A I a	〃	S B021床面	229	〃C b	〃	S B022床面
188	〃A I a	〃	表　採	230	〃C a	〃	S B014床面
189	〃A I a	〃	S B021床面	231	〃C a	〃	S B011床面
190	〃A I a	〃	B区遺構検出面	232	〃C a	〃	S B014床面
191	〃A I a	〃	S B021床面	233	〃C b	〃	S B028埋土中
192	〃A I b	〃	S B011床面	234	〃C b	〃	P-27埋土中
193	〃A I b	〃	S B023床面	235	〃C b	Fig. 143	S B002埋土中
194	〃A II a	Fig. 139	表　採	236	〃C b	〃	S B011床面
195	〃A II a	〃	S B004埋土中	237	〃C b	〃	S B009
196	〃A II a	〃	表　採	238	〃C b	〃	S B018埋土中
197	〃A II a	〃	表　採	239	〃C b	〃	S B022カマド内
198	〃A II b	〃	S B021床面	240	〃C b	〃	S B022カマド内
199	〃A I d	Fig. 140	S B008	241	〃C b	〃	S B011床面
200	〃A II c	〃	S B013埋土中	242	〃D I	Fig. 144	S B022埋土中
201	〃A I f	〃	S B020埋土中	243	〃D I	〃	S B004埋土中
202	〃A I f	〃	S B021カマド付近床面	244	〃D I	〃	S B021カマド付近床面
203	〃A I f	〃	S B024埋土中	245	〃D II a	〃	S B013埋土中
204	〃A II d	〃	S B016床面	246	〃D II a	〃	S B001
205	〃A I e	〃	S B016床面	247	〃D II a	〃	S B004床面
206	〃A I c	〃	S B015床面	248	〃D II a	〃	S B027埋土中
207	〃A I c	〃	S B029カマド内	249	〃D II b	〃	S B022埋土中
208	〃A I c	〃	S B015埋土中	250	鉢A a	Fig. 145	S B011床面
209	〃A I c	Fig. 141	S B020埋土中	251	〃A b	〃	S B004床面
210	〃A I c	〃	S B013埋土中	252	〃B	〃	S B029カマド内
211	〃A I c	〃	S B020埋土中	253	〃B	〃	S B029カマド内
212	〃A I c	〃	S B039埋土中	254	甑C	〃	P-49北側
213	〃A I c	〃	S B017埋土中	255	〃A	Fig. 146	S B028床面
214	〃A I c	〃	S B023埋土中	256	〃A	〃	S B027埋土中
215	〃A I c	〃	S B004埋土中	257	〃B	〃	S B021床面
216	〃A I c	〃	S B023埋土中	258	〃C	〃	S B017埋土中
217	〃A I c	〃	S B023カマド左床面	259	〃C	〃	S B023
218	〃A I g	〃	S B004床面				

(3) 歴 史 時 代

土師器（Fig. 147～149, PL. 81～84）

土師器は古墳時代，歴史時代を問わず多くの住居跡より出土している。歴史時代の住居跡はＳＢ001・002・003・006・022住居跡など８軒にのぼる。出土遺物の量はぼう大であり器種としては，土師器の壺・甕・蓋・杯・皿，黒色土器などである。なお甕については，前章の古墳時代土師器の項で一括して説明しており前項を参照されたい。この章では特に奈良，平安時代の土師器の蓋・杯・皿，黒色土器について説明する。

蓋（Fig. 147—260～266, PL. 81）

土師器の蓋で，つまみの有無により，Ａ・Ｂに大別する。

蓋Ａ（260～264）

つまみのつかないもので，口縁端部の形態の違いによりａ・ｂに細分する。

蓋Ａａ（260・261・264）　天井部は浅く広い平坦面を有するもので，つまみを持たない。大きく開く体部は口縁部付近でさらに外に開く。口縁端部は丸くやや直立ぎみになる。外面はヘラケズリ，ナデ調整を，内面はナデ調整を行う。口径16.2～17.4cm，器高2.2～2.7cmを計る。

蓋Ａｂ（262・263）　天井部は浅く広い平坦面を有するもので，つまみを持たない。大きく開く体部は口縁部付近でさらに外に開き下方へのびる。口縁端部は丸味を持つがやや尖った様相を示す。外面はヘラケズリ，ナデ調整を，内面はナデ調整を行う。口径15.0～16.2cm，器高2.3～2.7cmを計る。

蓋Ｂ（265・266）

宝珠様つまみが付く。天井部は浅く広い平坦面を有し，大きく開く体部は口縁部へとゆるやかにのび，口縁端部は丸くなる。内外面ともナデ調整を行う。口径15.2～15.4cm，器高3.4～3.5～3.5cmを計る。

皿（Fig. 147—267～283, PL. 81）

皿は17個体以上出土しており，17個体を図示した。形態によりＡ・Ｂに大別し，口径の法量によりＩ（15.0cm未満），II（15.0cm以上）に分ける。

皿Ａ（267～276）

平底，あるいはやや丸味を持つ平底，上げ底に短い口縁部がつくもので，底部の形状の違いによりさらにａ・ｂ・ｃに細分する。

皿ＡＩａ（267～269・275）　平底あるいはやや上げ底気味の底部に短い口縁部がつくもので，口縁端部は丸い。口径13.6～14.2cm，器高1.8～2.0cmを計る。調整は，底部はヘラ切り離

しで板目が残るものがあり，他はナデ調整を行う。

皿ＡＩｂ（270・276） やや丸味を持つ平底に短い口縁部がつくもので，口縁端部は丸い。口径は270が14.2cm，276は14.1cm，器高はともに2.0cmを計る。270はヘラ切り離しで他はナデ調整，276はナデ調整を行う。

皿ＡＩＩａ（271・272・274） やや丸味をもつ平底に短い口縁部を持つもので，口縁端部は丸い。口径15.3～16.6cm，器高1.8～2.2cmを計る。底部はヘラ切り離しの後ナデ調整，他はナデ調整を行う。

皿ＡＩＩｂ（273） 底部中央が盛りあがる上げ底に短い口縁部を持つもので，口縁端部は丸い。口径16.2cm，器高1.7cmを計る。調整は底部はヘラ切り離しの後ナデ調整を，他はナデ調整を行う。

皿Ｂ（277～283）

口径に対して器高が低くなるもので，平底の底部に短い口縁部がつく。口径はすべて15cm以上で，口縁端部の形状の違いによりａ・ｂ・ｃ・ｄ・ｅに細分する。

皿ＢＩＩａ（277） 平底あるいはやや上げ底気味の底部に短く外反した口縁部がつくもので，口縁端部は丸い。口径17.5cmを計る。調整は摩耗のため不明である。

皿ＢＩＩｂ（278・279・281） 平底あるいはやや上げ底気味の底部に短く外反した口縁部を持つ。口縁端部はやや外にはり出し丸くなる。278は口径16.1cm，器高1.6cmを計る。調整は摩耗のため不明である。279は口径17.2cm，器高1.8cmを計り，ナデ調整を行う。

皿ＢＩＩｃ（280） 口径に対し器高が低くなるもので，平底に短く外反した口縁部を持つ。口縁端部はややそりぎみに外反し丸くなる。口径15.0cm，器高1.0cmを計る。調整は底部はヘラ切り離しを，他はナデを行う。

皿ＢＩＩｄ（282） 口径に対し器高が低くなるもので，部分的に上げ底になる底部に短く外反した口縁部を持つ。口縁端部はさらに外反し丸くなる。口径20.2cm，器高1.15cmを計る。調整は底部はヘラケズリ，他はナデを行う。

皿ＢＩＩｅ(283) 口径に対し器高が低くなり，やや凹凸気味の底部に短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は薄くなりさらに外反し，やや尖り気味に丸くなる。口径16.3cm，器高0.95cmを計る。調整は全体的にナデを行う。

杯（Fig. 147—284～295，148，PL. 82・83）

土師器の杯は43個体以上出土した。形態により高台を持つ杯をＡ・Ｂに，持たないものをＣ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈに大別する。

杯Ａ（285・286）

底部と体部の屈曲部に高台を貼り付けたものである。高台はほぼ直線的に開き，小さく弱い感じを受ける。底部はヘラケズリの後ナデ調整，他はヨコナデ調整を行う。

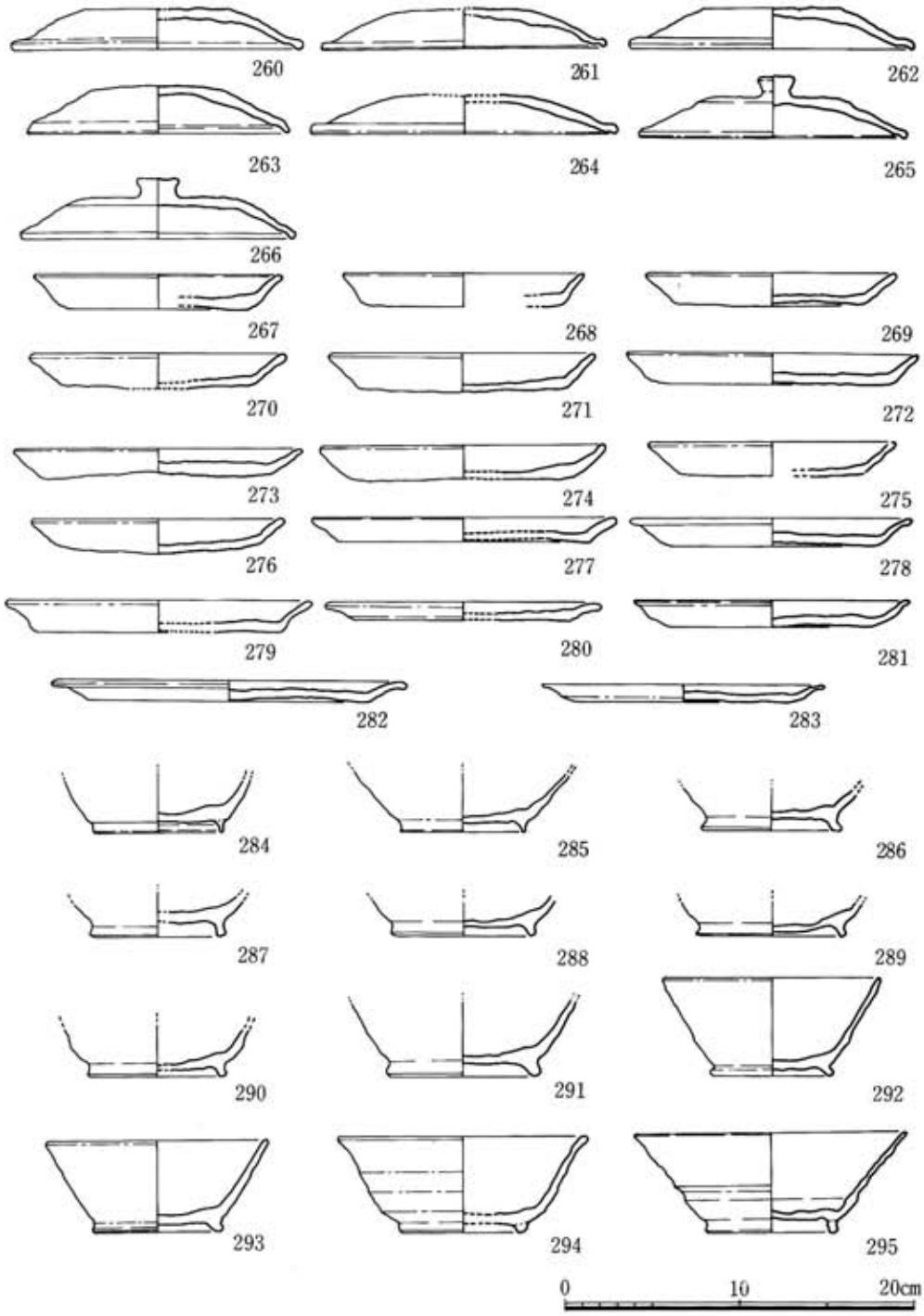


Fig. 147　土師器実測図(15)

杯B（287～295）

直線的に長く上方へ開く体部を持ち,底部と体部の屈曲部に高台を貼り付けたものである。高台はわずかに外側へ開き，太く短いしっかりしたものが付く。口径12.2～15.5cm，器高5.3～5.7cm，高台径6.6～8.6cmを計る。調整は底部はヘラ切り離しの後ヘラケズリやナデ調整を，他はヘラケズリの後ナデ調整を行う。

杯C（296～301）

平底に直線的に開く体部を持つもので，法量によりさらにⅠ・Ⅱに分ける。

杯CⅠ（296） やや上げ底気味の平底に直線的に大きく外に開く体部を持ち，底部と体部の境は明瞭である。口径10.0cm，器高2.7cm，底部に糸切り離しの後板目が残る。他はヨコナデ調整。小型の杯である。

杯CⅡ（297～301） やや上げ底気味の平底に直線的に大きく外に開く体部を持ち，底部と体部の境は明瞭である。口径11.9～13.2cm，器高2.6～3.4cm，底部はヘラ切り離しの後ナデ調整，他はナデ調整を行う。

杯D（302～319）

平底に直線的に開く体部を持つ一群である。器高の違いによりⅠ（3.5cm未満），Ⅱ（3.5cm以上）に分け口縁端部の形状によりさらにa・bに細分する。

杯DⅠa（302～311） 平底あるいは凹凸の多い平底にわずかに内湾しながら大きく外へ開く体部がつくもので，底部と体部との境には明瞭な段を有さないものである。口縁端部は体部に続き直線的に終わり，丸味を持つ。口径11.6～12.45cm，器高3.05～3.6cm，調整は，底部外面ヘラ切り離し，ヘラケズリの後ナデ調整，他はナデ調整を行う。

杯DⅠb（312～314） 凹凸の多い平底にわずかに内湾しながら大きく外へ開く体部がつくもので，底部と体部との境には明瞭な段を有さないものである。口縁部は体部に続き直線的であるが，口縁端部はやや外側に開き丸味をもつ。口径12.4～12.8cm，器高3.2～3.4cm，調整は，底部外面ヘラ切り離し，ヘラケズリの後ナデ調整，他はナデ調整を行う。

杯DⅡa（315～317） 凹凸のある平底の底部に内湾しながら大きく外に開く体部がつくもので，底部と体部との境には明瞭な段を有さないものである。DⅠ類に比べ器高が高くなり，深味を持つ杯である。口径12.1～13.4cm，器高3.7～4.0cm，調整は，底部外面ヘラ切り離し，ヘラケズリの後ナデ調整，他はナデ調整を行う。

杯DⅡb（318） やや凹凸のある平底の底部に内湾しながら大きく外に開く体部がつくもので，口縁端部は僅かに外側へ開く。底部と体部との境には，明瞭な段を有さないものである。DⅠ類に比べ深味を持つ杯である。口径13.2cm，器高3.6cm，調整は，底部外面ヘラケズリ，他はヨコナデ調整を行う。

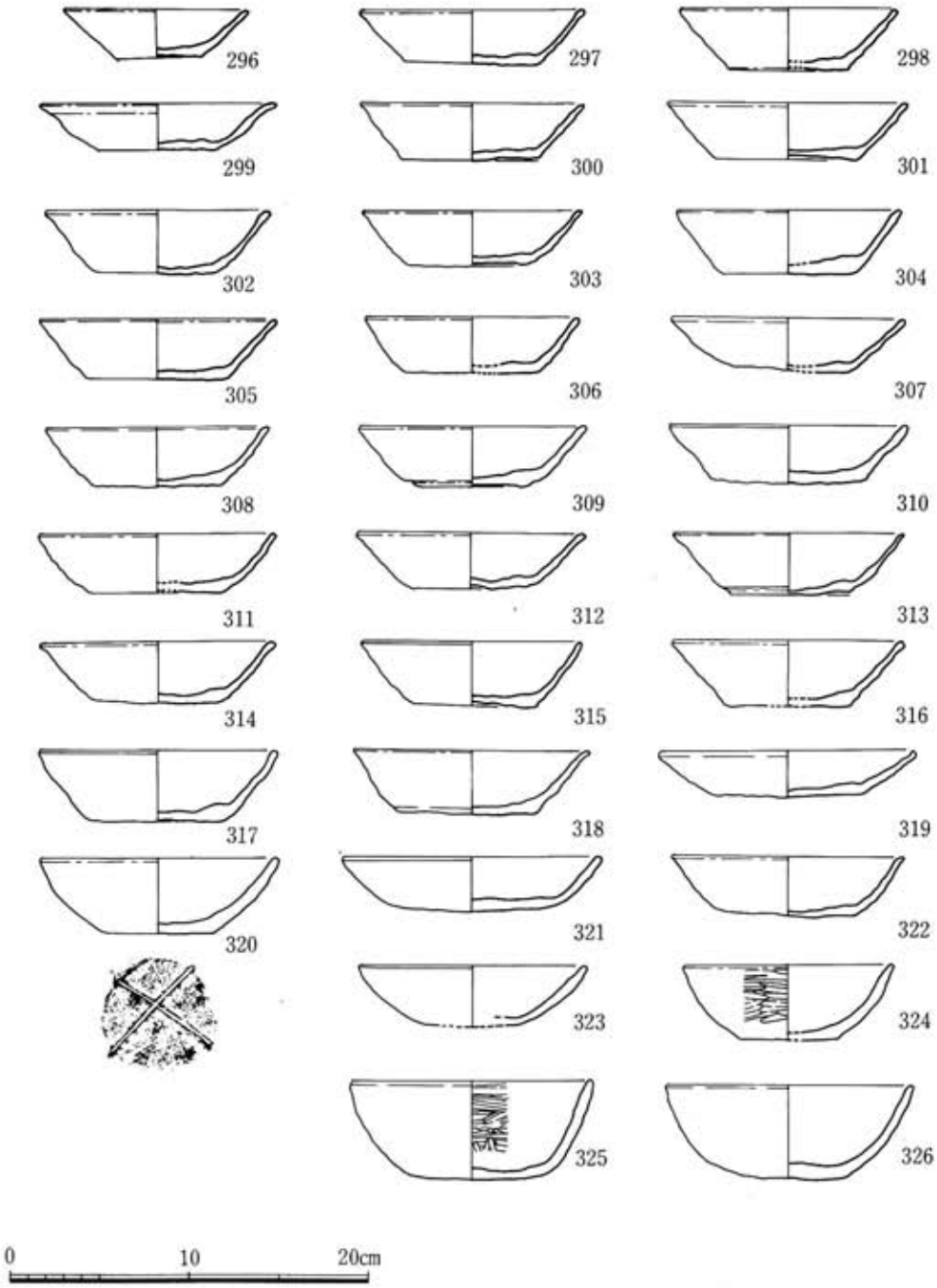


Fig. 148　土師器実測図(16)

杯E（319）

凹凸のある底部に体部がさらに外へ開く形態で，器高が低くなり皿状となる。口縁端部はやや内側へ向く。口径14.0cm，器高2.6cm。底部に板目が残る。

杯F（321・322）

口縁端部の形状の違いによりa・bに細分する。

杯Fa（321） 平底と直線的に大きく外に開く体部との境が丸味を持つもので，口縁部は丸く，わずかに肥厚する。口径14.5cm，器高3.1cm，調整は摩耗のため不明であるが，ナデ調整のあとが残る。

杯Fb（322） 平底と直線的に大きく外に開く体部との境が丸味を持つもので，口縁端部が僅かに外反する。口径12.8cm，器高3.4cm，調整は，底部外面ヘラ切り離しの後板目が，他はナデ調整を行う。

杯G（320・323・324）

底部の形状，器高の違いによりa・bに細分する。

杯Ga（323） 丸味を持つ底部に内湾ぎみに大きく上外方に開く体部を持ち，口縁部は肥厚する。口径12.8cm，器高3.35cm，調整は，底部外面ヘラケズリ，他はヘラミガキ調整を行う。

杯Gb（320・324） 平底の底部に大きく丸味を持ちながら上外方に開く体部を持ち，体部は肥厚する。324は口径11.4cm，器高4.2cm，口縁部ナデ調整，他はヘラミガキ調整を行う。体部外面は黒塗りのあとが残る。320は口径13.2cm，器高4.2cm，口縁部ナデ調整，他はヘラミガキ調整を行う。体部外面には丹塗りのあとが残る。また底部外面には×印のヘラ記号が残る。

杯H（325・326）

やや丸味を持つ底部に内湾ぎみに上外方へ開く体部を持ち，口縁端部は丸味を持つ。口径13.2～13.6cm，器高5.3～5.5cm，調整は，ヘラミガキを行う。

黒色土器（Fig. 149，PL. 84）

黒色土器はすべて内黒の土器で9個体出土した。形態によりA・B・C・Dに大別する。

黒色土器A（327）

平底の底部に直線的に開く体部で口縁端部はさらに外反する。色調は外面は淡黄褐色，内面黒色で，調整は口縁部ヨコナデ，他はヘラミガキ調整を行う。口径12.5cm，器高4.5cmを計る。底部外面には×印の浅い沈線のヘラ記号を残す。

黒色土器B（328～333）

平底の底部に内湾しつつ口縁部へ続く体部を持ち，底部と体部の境がはっきりしない。法量によりⅠ・Ⅱに分け細部の変化でさらにa・bに細分する。

黒色土器ＢⅠ（328～331）　平底の底部に内湾しつつ口縁部へ続く体部を持ち，底部と体部の境がはっきりせず口縁端部は丸味を持つ。328は口径14.0cm，器高4.6cmを計り，色調は外面褐色で口縁部に黒斑があり，内面は黒色である。調整は口縁端部はナデ他はヘラミガキを行う。329は口径13.5cm，器高3.9cmを計り，色調は外面褐色で部分的に黒色，内面黒色である。調整は外面ヘラケズリの後ナデ調整，内面ヘラミガキ調整を行う。330は口径13.2cm，器高6.2cmを計り，色調は外面明褐色，内面黒色である。調整は外面ヘラケズリの後ナデ調整，内面ヘラミガキの後ナデ調整を行う。331は口径12.4cm，器高3.6cmを計り，色調は外面赤褐色，内面黒色である。調整は外面ヘラケズリの後ナデ調整，内面ヘラミガキの後ナデ調整を行う。

黒色土器ＢⅡa（332）　やや上げ底の底部に内湾しつつ口縁部へ続く体部を持ち，底部と体部の境がはっきりせず，口縁端部は丸味を持つ。器高に対して口径が大きいものである。口径15.2cm，器高4.1cmを計り，色調は外面明褐色で部分的に黒斑が残り，内面は黒色である。調整は内外面ともにヘラミガキ調整を行う。底部外面には×印の浅い沈線のヘラ記号を残す。

黒色土器ＢⅡb（333）　やや上げ底の底部に内湾しつつ口縁部へ続く体部を持ち，底部と体部の境がはっきりせず，球状になる。口縁端部は丸味を持つ。器高に対して口径が小さく深い。口径12.8cm，器高5.1cmを計り，色調は外面明褐色～赤褐色，内面黒色である。調整は外面ヘラミガキの後ナデ調整，内面ヘラミガキ調整を行う。

黒色土器Ｃ（334）

底部が欠損しており器形は不明である。平底の底部に内湾しながら口縁部へ続く体部を持つ

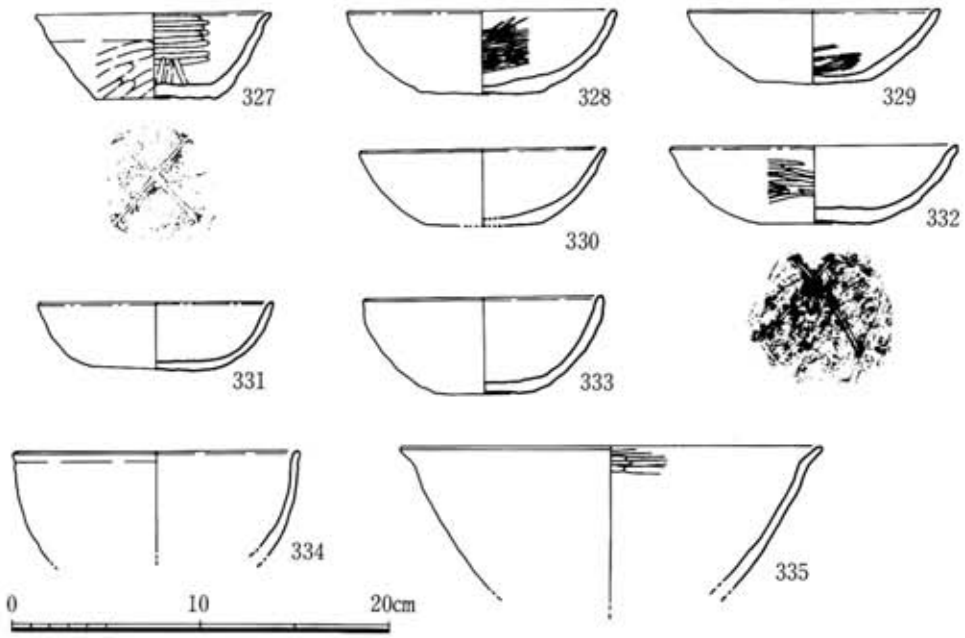


Fig. 149　土師器（黒色土器）実測図(17)

ものと思われる。口縁端部はやや外方へ開き丸味を持つ。口径は15.3cmを計り，色調は外面褐色，内面黒色である。調整は外面はヘラミガキの後ナデ調整，内面はヘラミガキ調整を行う。

黒色土器D（335）

底部が欠損しており器形は不明である。内湾しながら外方へ開く体部で，口縁部はさらにくの字状に外反する。口縁端部は丸味を持つ。口径22.4cmを計り，色調は外面明褐色～黒色，内面黒色である。調整は内外面ともにヘラミガキ調整を行う。

Tab. 7　浦田遺跡遺物出土地点表(3)

遺物番号	土器分類	挿図番号	出土地点	遺物番号	土器分類	挿図番号	出土地点
260	蓋Aa	Fig. 147	SB011床面	298	杯CII	Fig. 148	SB002埋土中
261	〃Aa	〃	SB002床面	299	〃CII	〃	SB001埋土中
262	〃Ab	〃	SB011埋土中	300	〃CII	〃	SB002
263	〃Ab	〃	SB009埋土中	301	〃CII	〃	SB027埋土中
264	〃Aa	〃	SB011床面	302	〃DIa	〃	SB011床面
265	〃B	〃	SB001床面	303	〃DIa	〃	SB002埋土中
266	〃B	〃	SB026埋土中	304	〃DIa	〃	SB026埋土中
267	皿AIa	〃	SB013埋土中	305	〃DIa	〃	SB020埋土中
268	〃AIa	〃	SB006埋土中	306	〃DIa	〃	SB014床面
269	〃AIa	〃	SB006埋土中	307	〃DIa	〃	SB022埋土中
270	〃AIb	〃	SB006埋土中	308	〃DIa	〃	SB008埋土中
271	〃AIIa	〃	SB013	309	〃DIa	〃	SB001
272	〃AIIa	〃	SB003埋土中	310	〃DIa	〃	SD010
273	〃AIIb	〃	SB011カマド	311	〃DIa	〃	SB002
274	〃AIIa	〃	SB003埋土中	312	〃DIb	〃	SB003埋土中
275	〃AIa	〃	SB006埋土中	313	〃DIb	〃	SB003埋土中
276	〃AIb	〃	SB028埋土中	314	〃DIb	〃	SB002埋土中
277	〃Ba	〃	SB002床面	315	〃DIIa	〃	SB011床面
278	〃Bb	〃	SB026埋土中	316	〃DIIa	〃	SB022カマド付近
279	〃Bb	〃	SB001埋土中	317	〃DIIa	〃	SB009埋土中
280	〃Bc	〃	SB001埋土中	318	〃DIIb	〃	SB001床面
281	〃Bb	〃	SB001埋土中	319	〃E	〃	SB004埋土中
282	〃Bd	〃	SB026埋土中	320	〃Gb	〃	SB027埋土中
283	〃Be	〃	SB042埋土中	321	〃Fa	〃	SB022
284	杯A	〃	SB019カマド内	322	〃Fb	〃	SB011
285	〃A	〃	SB004床面	323	〃Ga	〃	SB022埋土中
286	〃B	〃	SB002床面	324	〃Gb	〃	SB027埋土中
287	〃B	〃	SB006埋土中	325	〃H	〃	SB003埋土中
288	〃B	〃	SB002床面	326	〃H	〃	SB011床面
289	〃B	〃	SB002床面	327	黒色土器A	Fig. 149	SB042埋土中
290	〃B	〃	SB006埋土中	328	〃 BI	〃	SB001床面
291	〃B	〃	SB001埋土中	329	〃 BI	〃	SB022
292	〃B	〃	SB009床面	330	〃 BI	〃	SB026埋土中
293	〃B	〃	SB012埋土中	331	〃 BI	〃	SB002埋土中
294	〃B	〃	SB003カマド煙道内	332	〃 BIIa	〃	SB001埋土中
295	〃B	〃	B区遺構検出面	333	〃 BIIb	〃	SB015
296	〃CI	Fig. 148	SD010埋土中	334	〃C	〃	SB016埋土中
297	〃CII	〃	SB002埋土中	335	〃D	〃	SB026埋土中

石器（Fig. 150・151, PL. 85）

先に154～157頁（Fig. 127～129）で縄文時代の石器を説明した。ここでは，主に弥生時代の石器を説明するが，先述した資料の他に，後日の整理で新たな縄文時代の石器が出てきたため，紙数の関係上，それらを一括して説明していきたい。

石斧（Fig. 150, PL. 85）

石斧は7点出土している。大別してA（打製石斧），B（磨製石斧）に分類する。

石斧A（336・337）

336は扁平打製石斧である。石材は流紋岩で，板状の素材の周辺部を粗雑に加工し形を整え，刃部を作っており，刃部には擦痕が残る。長さ13.9cm，幅6.0cm，A区表土下層出土。**337**は安山岩（サヌカイト）製である。交互剥離により形を整えているが，一部礫面を残しており，全体粗雑な作りである。長さ17.2cm，幅5.5cm，SD010溝埋土中出土。

石斧B（338～342）

342の石材は蛇紋岩で薄く短冊形に仕上げており，一部擦痕を残す。長さ8.35cm，幅5.1cm，B区表土層下層出土。**338**は太形蛤刃の磨製石斧である。石材は玄武岩で，基部・刃部に使用時の欠損の剥離がみられ，また全体的に製作時の打痕が観察される。長さ13.2cm，幅7.9cm，SB012住居跡床面出土。**340**は大型の磨製石斧である。石材は頁岩で敲打により形を整え，部分的に磨きを行い整形を行っている。A区小穴内より出土。**341**は磨製の抉入石斧である。石材は角閃石で丁寧に敲打により形を整え，さらに丁寧に刃部を磨き刃を作りだしている。長さ10.9cm，厚さ3.1cmで縦に½を欠損する。表土層出土。**339**は棒状の磨製石斧である。石材は粘板岩で，敲打によりあら作りを行い，その後磨いて形を整えている。長さ13.0cm，幅5.7cm，刃部を欠損する。SB021住居跡出土。

石核（Fig. 151—343, PL.85）

小城郡三日月町岡本産の安山岩（サヌカイト）製の石核である。角礫から大型の剥片を剥離した後作られた小型の横長剥片を剥離するための石核で，剥片の両側縁を打面としている。打面調整のための小さな剥離が施されている。A区表土下層出土。

磨石（Fig. 151—344・345, PL.85）

344は花崗岩製で，表裏ともに磨いた痕が残る。長さ11.6cm，幅9.5cm，厚さ5.5cm，B区表採。**345**は安山岩製で，片面を丁寧に使用している。長さ9.9cm，幅8.3cm，厚さ4.9cm，C区表採。

砥石（Fig. 151—346～350, PL.85）

石材はすべて砂岩である。**346**は，両端を欠損しており，4面を使用する。幅3.9cm，厚さ3.4cm，B区SB006住居跡埋土中出土。**347**は，一方を欠損しており，3面を使用する。幅4.4cm，

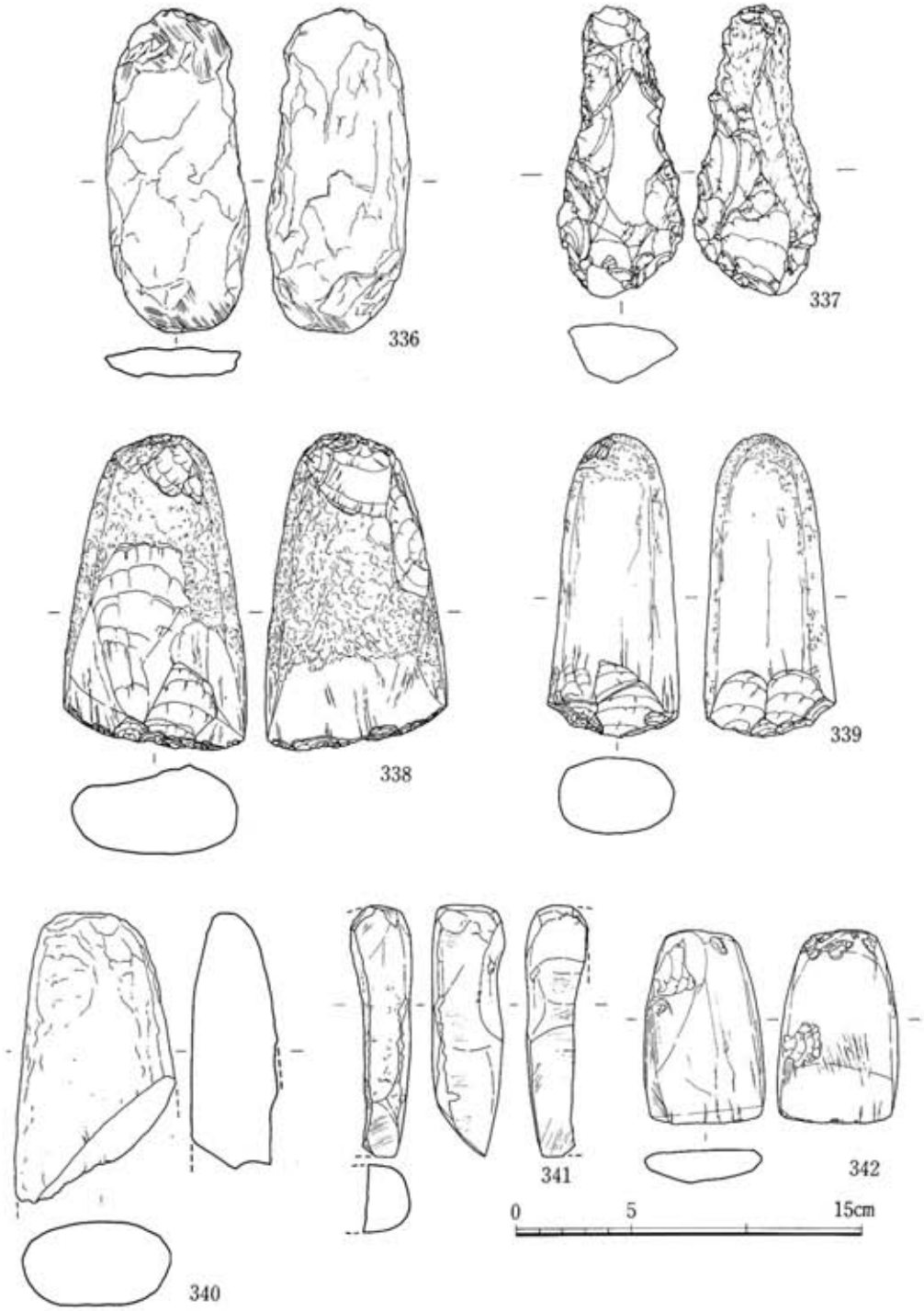


Fig. 150　石器実測図(4)

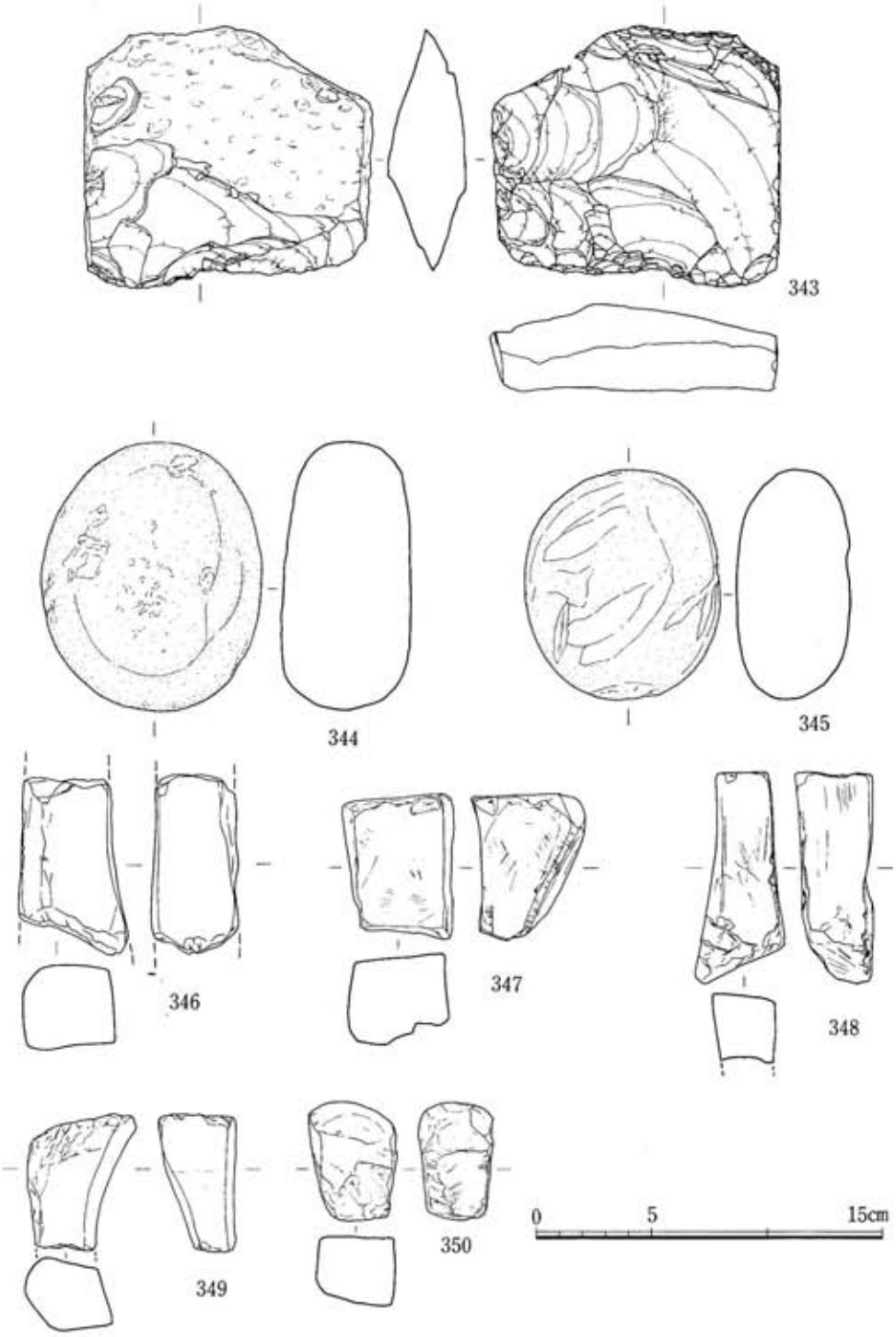


Fig. 151　石器実測図(5)

長さ3.6cm，B区表採。**348**の石材は目の細かい良質のもので，一方を欠損する。4面使用。幅2.2cm，厚さ3.3cm，SB006住居跡埋土中出土。**349**は351と同様，目の細かい上質の石材を利用し，4面をかなり使用している。幅3.7cm，厚さ3.0cm，B区表採。**350**は小型のもので3面を使用。長さ5.1cm，幅3.4cm，厚さ2.9cm，B区表採。

その他の遺物（Fig. 152）

紡錘車（351～353）

351は滑石製の紡錘車である。断面台形状をしており，全面を丁寧に磨いている。直径4.7cm，厚さ1.4cmで直径0.8cmの穴を穿っている。SB038住居跡出土。**352**は土製の紡錘車である。断面長方形をしており，手捏状に指おさえで整えている。直径3.6cm，厚さ1.2cmで直径0.3cmの穴を穿っている。SB018住居跡出土。**353**は須恵質の紡錘車である。断面六角形状をしており，ナデ調整により形を整えている。直径4.8cm，厚さ2.0cmで直径0.75cmの穴を穿っている。SB017住居跡出土。

勾玉（354）

白色と灰白色の縞文様の石灰岩製の勾玉である。全体的に丸味をおび丁寧に磨かれており，穴は一方から穿っている。SB004住居跡出土。

不明石器（355）

滑石の石鍋の破片を二次利用しているもので，実測図矢印部分に穿孔のような加工をしているものである。B区遺構検出面出土。

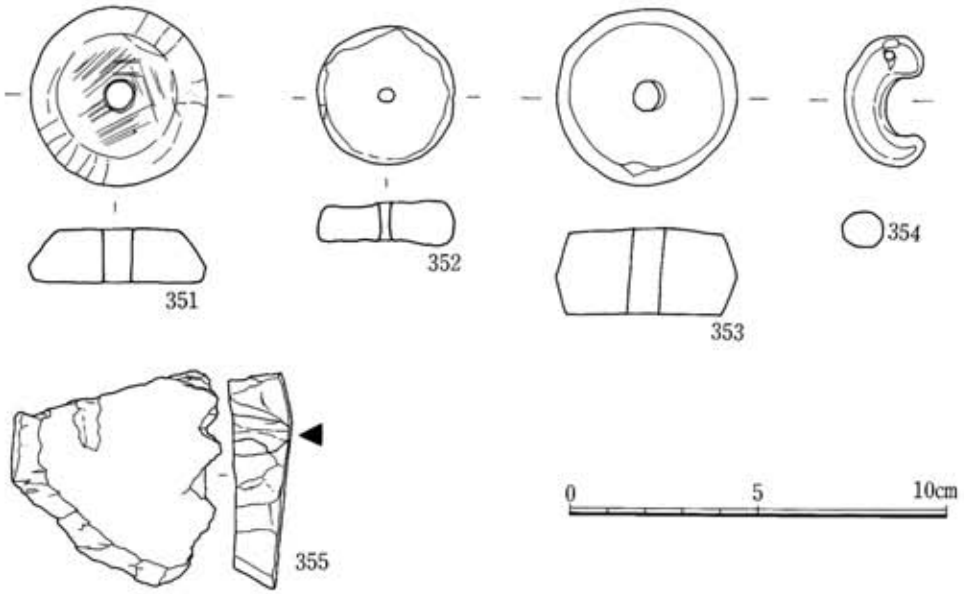


Fig. 152　紡錘車・玉類実測図

Tab. 8　浦田遺跡住居跡出土遺物番号表

遺構番号	出土遺物番号
S B001	124, 246, 263, 273, 282, 296, 310, 311, 312, 328, 332
S B002	57, 235, 261, 262, 264, 267, 275, 278, 292, 308, 317, 319, 320, 331
S B003	157, 166, 169, 170, 276, 277, 289, 303, 305, 325
S B004	195, 215, 218, 226, 243, 247, 251, 283, 316
S B005	125, 141, 153, 158, 162, 167, 174, 219, 222
S B006	109, 118, 223, 299, 300, 301, 306, 318, 321
S K007	近世陶磁器出土
S B008	52, 77, 81, 94, 129, 155, 176, 199, 272
S B009	121, 161, 185, 237, 281, 294, 323
S D010	260, 274
S B011	97, 99, 172, 186, 192, 231, 236, 241, 250, 266, 279, 286, 290, 291, 293, 295, 304, 322
S B012	75, 90, 103, 113, 137, 147, 149, 324
S B013	200, 210, 245, 298, 302
S B014	228, 230, 232, 270
S B015	53, 68, 86, 95, 110, 123, 156, 206, 208, 225, 333
S B016	59, 60, 79, 85, 122, 142, 204, 205, 334
S B017	54, 100, 107, 115, 213, 258
S B018	44, 55, 70, 74, 84, 93, 220, 238
S B019	78, 315
S B020	67, 72, 201, 209, 211, 221, 269
S B021	43, 46, 47, 49, 51, 62, 63, 64, 65, 66, 80, 83, 87, 96, 98, 101, 108, 116, 117, 134, 136, 138
	144, 152, 159, 160, 171, 177, 178, 182, 187, 189, 191, 198, 202, 244, 257
S B022	173, 175, 229, 239, 240, 242, 249, 271, 280, 285, 287, 329
S B023	45, 69, 104, 135, 143, 146, 148, 151, 154, 181, 193, 214, 216, 217, 259
S B024	48, 82, 91, 92, 119, 120, 130, 131, 139, 203, 227
S B025	土師器片出土
S B026	268, 297, 309, 313, 330, 335
S B027	71, 73, 145, 183, 248, 256, 265, 284, 288
S B028	88, 89, 102, 106, 111, 112, 114, 127, 150, 164, 233, 255, 307
S B029	128, 180, 184, 207, 252, 253
S B030	出土遺物なし
S B031	〃
S B032	〃
S B033	76
S B034	出土遺物なし
S B035	56, 140
S B036	224
S B037	163
S B038	土師器片出土
S B039	133, 165, 168, 212
S B040	土師器片出土
S B041	〃
S B042	105, 126, 132, 314, 327

4．小　　結

今回調査を行った浦田遺跡では，以上の報告のように古墳時代の竪穴住居跡27軒，掘立柱建物跡6棟，古墳2基，歴史時代の竪穴住居跡8軒，溝2条，近世土壙の各遺構を検出した。時期は，古墳時代の遺構が6世紀代，歴史時代の遺構は奈良時代後半～平安時代前半（8世紀末～9世紀初頭）の大きく2つの時期に分けられる。古墳は，1基は墳丘，主体部が調査区外にあり，墳丘裾の一部の調査ともう一基は、周溝の一部を検出したにすぎない。またＳＫ007土壙からは，近世陶磁器が多量に出土した。ここで中心となるのは住居跡で，基本的に方形の平面形態をなし，4本柱の住居跡で，特に各住居跡より検出されたカマドが注目される。遺物は，縄文土器・須恵器・土師器・黒色土器などの土器類をはじめ，石鏃・石槍・石匙・スクレイパー・石斧・砥石などの石器類の他，勾玉などの装飾品と多種多様の遺物が出土している。

以上浦田遺跡について概略したが，今回の調査でいくつかの成果を得た。以下それらについて若干の考察を行いまとめにしたい。

〈カマドを持つ住居跡について〉

浦田遺跡より検出されたカマドを持つ住居跡は，43軒のうち21軒である。時期的には，6世紀の造りつけのカマドを持つ住居跡と，平安時代の煙道付きのたき出し口を持つ住居跡である。

現在九州で確認され最も古いカマドを持つ住居跡は，福岡県浮羽郡吉井町塚堂遺跡で発掘された5世紀代のものである。その他西日本では，兵庫県揖保郡太子町川島遺跡[註1]（5世紀中頃），和歌山県吉田遺跡[註2]（5世紀末）のカマドを持つ住居跡が報告されており，西日本でも竪穴住居に造りつけのカマドが盛用されたのは5世紀であることは疑いのないことである。県内で古墳時代のカマドを持つ住居跡が発掘された遺跡として，東脊振村西前田[註3]，夕ヶ里遺跡[註4]，神埼町切畑遺跡[註5]，小城町天神軒遺跡[註6]などいくつかの例が報告されており，報告によると，これらのカマドを持つ住居跡は6世紀後半に比定されている。浦田遺跡のカマドを持つ住居跡で最も古いものは，ＳＢ021住居跡で，出土遺物により6世紀中頃に比定され，また夕ヶ里遺跡では，6世紀中頃でも古い段階の時期のカマドを持つ住居跡が検出されており，これらのことより現在のところ，県内で最も古いカマドを持つ住居跡は6世紀中頃であるといえる。

煙道付きのたき出し口を持つカマドを有する住居跡は，最近の報告で，福岡県筑紫郡那珂川町今光遺跡[註7]が報告されている。県内でも，佐賀市大門西遺跡[註8]，小城町天神軒遺跡より2軒の報告がされており，これらはいずれも8世紀末～9世紀初頭の所産と報告されている。浦田遺跡では，ＳＢ001・002・003・004・009・022の7軒の住居跡より検出された。時期はいずれも8世紀末～9世紀初頭に比定でき，佐賀県内での煙道付のたき出し口を持つカマドの起源は8世紀後半，あるいは8世紀末頃と想定される。

小　　結

次にカマドの形態についてみると，カマドの方向は一様ではないが，一般的傾向として北向きが多い。カマド体は，壁内側の床面上に地山整形を行い粘土を用いて造ったものや，石囲い，あるいは石と粘土を使ったものなどいろいろな構造があげられる。さらにカマド中央部をレンズ状に掘り下げたり，あるいはピット状に掘り下げたりしている。これは福岡県裏ノ田遺跡[註9]のカマドと共通点が多く，カマド構築技術の一般化がみられる。

古墳時代のカマドは11軒あり，そのうち，カマド体焚口裏側にあけられた煙出しを持つものにＳＢ008・019・028・042住居跡などがあげられ，住居壁手前に煙が出るようになっている。その中でもＳＢ019住居跡のように，住居壁手前0.21mまで煙出しを作っている例もある。支脚の例は少ないが，ＳＢ028・029・038住居跡などにみられ，全て自然石を利用している。またその他の例として，ＳＢ013・014住居跡より検出された壁の一部を半円状に掘り込む例がある。これらは，造り出しの袖を持たないもので，それらの部分にはおびただしい焼土が残っており，造り出しの袖はないものの，カマドとして取り扱ったが，今後の検討が必要であろう。

歴史時代の煙道付きのたき出し口を持つカマドは，カマド中央部の床面からおよそ0.1mの壁面に0.3m程にトンネル状の煙道が1.0～1.5m掘りぬかれ，斜めあるいは垂直に上方へ煙突状にのびる。これらの構造を持つなかで，煙道は３つのタイプに分けられる。第１に，カマド体上方の掘りぬき部分から下方へ急傾斜で煙道がのびるもの（ＳＢ003・006住居跡），第２に，同じく下方へ緩傾斜で煙道がのびるもの（ＳＢ002・006・022住居跡），第３に，同じく上方へ向かって煙道がのびるもの（ＳＢ009住居跡）の３つのタイプがある。これらのうち，第２・第３の場合，単に煙を外へ出すだけの機能を持つための煙道構造と考えた場合，水平，あるいは上方へ向く煙道であれば，煙が流れ出て行くためには自然的な形であろう。それに対して，第１の場合，煙道が下方へ向かってのびているのは，煙の流れに対して煙道は逆作用を起こすものと考えられる。この場合，下方へ向かって造られている煙道について２つのことを想定してみた。第１は，煙突部分に何らかの形で傘状の施設を施していればよいが，それらの施設を施してない場合，雨などの自然現象により水が流れ込んでカマド自体が湿めるために，カマド部分に水の進入を防ぐために造られたもの。第２に，カマドで火を使った場合，火のいきおいを加減するために空気の流れを調節するために造られたものの２つの場合を想定したが，このことについては，今後，実験により確めてみたい。

次にカマド体およびカマド付近についていくつかの特徴を述べてみたい。ＳＢ023住居跡などにみられるように，カマド体の両袖，あるいは片袖に，土器の混入がみられる。これは，カマド体の粘土等の補強のために，故意に混入させたものと思われる。また，カマドを中心に，両袖，片袖の外側に不定形の一段下がった掘り込みの部分（ＳＢ001・002・003他）があるが，これは何のためになされたものであろうか。弥生時代・古墳時代にみられる排水のための周溝があるが，これらと同じような性格を持つもので，カマド部分の湿気をとるための効果を目的

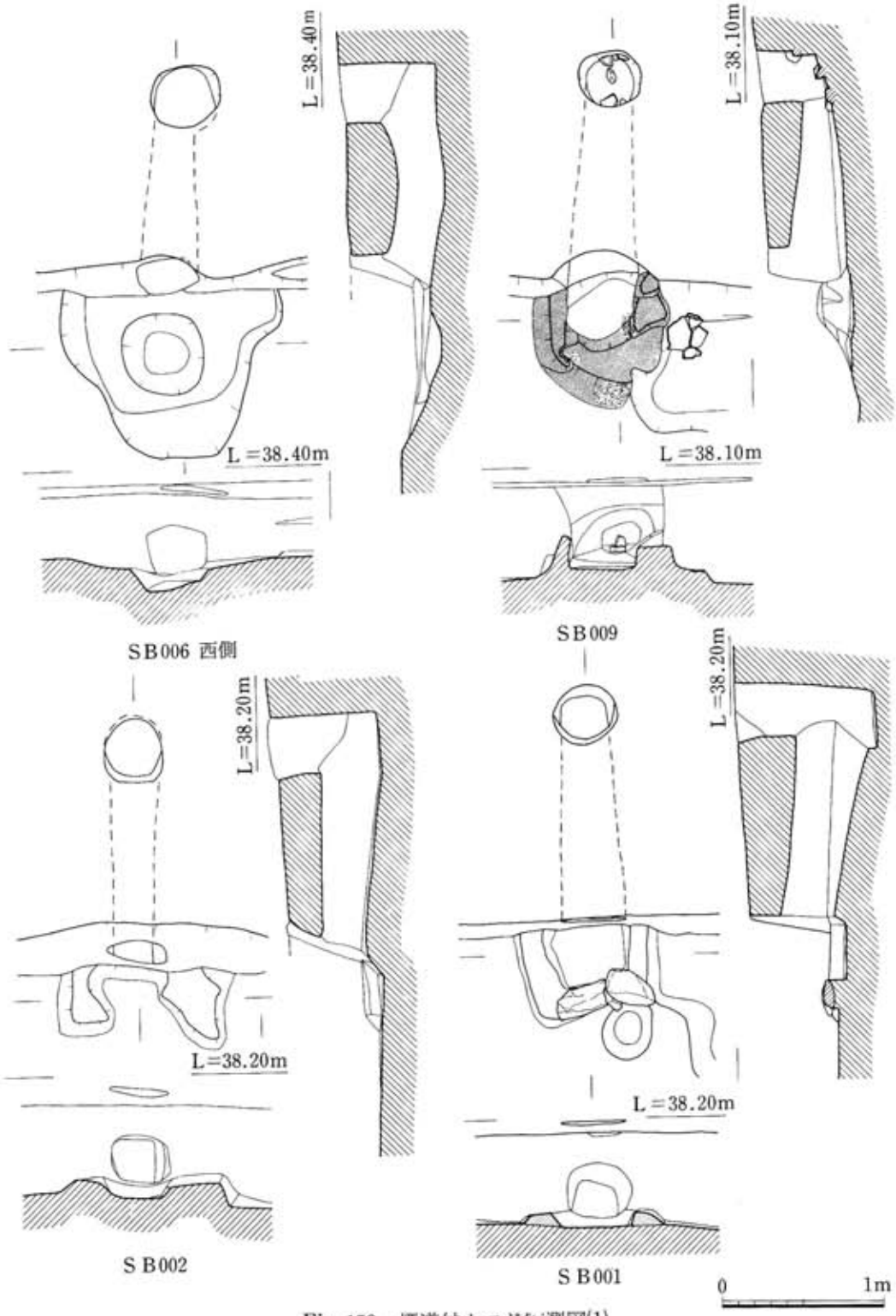


Fig. 153 煙道付カマド実測図(1)

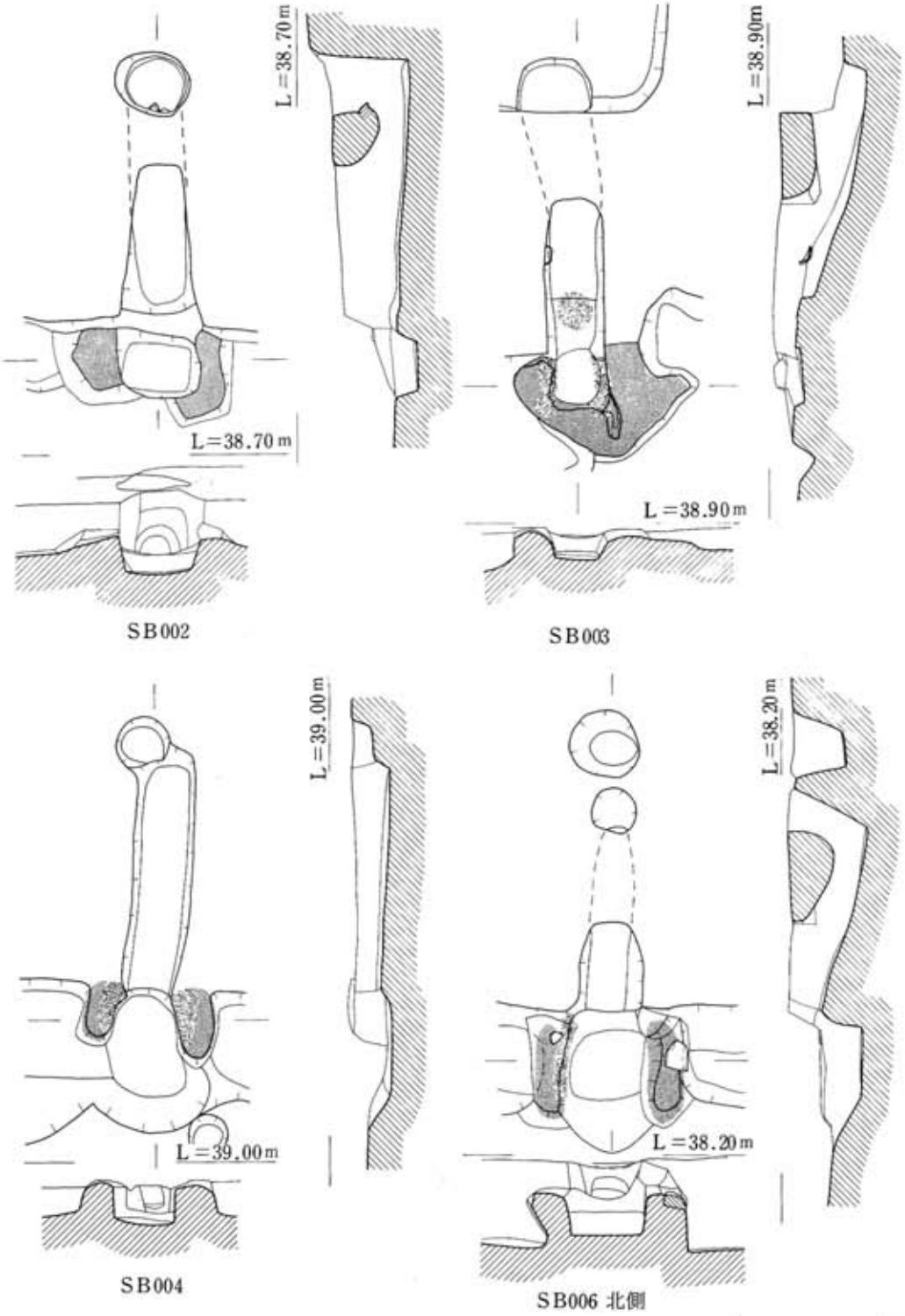


Fig. 154　煙道付カマド実測図(2)

としたものであると考えられる。

〈須恵器模倣の土師器，黒色土器について〉

浦田遺跡より出土した須恵器を模倣した土師器杯は100個体以上出土した。最近この種の土器は，福岡県野黒坂遺跡[註10]，裏ノ田遺跡などより報告されており，県内でも下中杖[註11]・西前田・切畑・天神軒等の各遺跡より出土している。報告によれば6世紀後半に編年されているのが大半である。浦田遺跡では6世紀前半の須恵器と共伴しているものもあるが，他の一括遺物（土師器）より6世紀前半に位置づけするのは難しい。本遺跡の須恵器模倣の土師器の位置づけは今後の課題として残しておきたいが，現在調査中の切畑遺跡より同じような状況で須恵器模倣の土師器が須恵器をともなって出土しており，今後これらの遺跡と照らしあわせて考えてみる必要がある。一応6世紀中頃から編年できることは可能であろう。また，これらの土器群から黒塗りのものが多く出土している。黒塗りについては当初漆ではないかと考えていたが、分析[註12]の結果炭化物であろうとのことである。

黒色土器は9点出土しており，Fig.149に載せている。県内でも，尾崎利田[註13]，下中杖など多くの遺跡から出土しており，そのほとんどが10世紀以降の遺物である。本遺跡出土の黒色土器はすべて内黒の土器で住居跡内より出土している。器形は，A・B・C・D類の4つに大別でき，器形の違いがある。ここで問題となるのが時期についてであり，黒色土器Aは，SB042住居跡より出土しており，6世紀代の住居跡埋土上層より出土している。黒色土器Bは，SB001・015・022・026住居跡より出土している。SB015住居跡を除けば8世紀末～9世紀前半の住居跡である。黒色土器Cは，SB016住居跡埋土中より出土しており，6世紀の住居跡である。黒色土器Dは，SB026住居跡より出土しており，8世紀末の住居跡である。以上のように，数点が古墳時代の遺構に混入しているが，各遺構の年代と，大宰府・平城京などより出土している土師器・須恵器などと対比して考えてみるならば，328～335の黒色土器については，9世紀前半に編年できよう。また327の黒色土器については，他の例がなく不明であるが，一応前述の時期に考えられる。ただ器形が深いことや，底部と体部の特徴などより他の土器に比べ古くなりそうな要素を持っており，今後の資料の増加を待って結論を出したい。いずれにせよ，浦田遺跡で出土している黒色土器は，九州ではその例が少なく詳細については不明な点が多く，今後資料の増加により考えてみる必要はあるが，黒色土器の中でも古い段階に存在することはまちがいないことである。

小　　結

〈集落としての浦田〉

今回の調査で43軒の住居跡を検出したが，遺跡の広がりはまだ南北に続いており，100軒を越える一大集落と考えられる。前述したように，住居跡は6世紀と奈良末～平安時代の2つの時期に分けられる。6世紀の浦田の住居群は，A・B・C区に広がっており，中でもSB016住居跡が古く，そのまわりのSB015･017･018住居跡は浦田遺跡の中でも古い時期の住居跡であり，次第に東方に円を描くように広がっている。一方，平安時代の住居群はB区に集中しており，A区にやや離れて一軒あるだけである。これらのことより，これ以上北に広がる可能性は少なく，奈良・平安の生活の場はSB001～004住居跡より南へ広がっていくようである。

以上簡単にまとめを行ったが，県内でもこれだけまとまって6世紀以降の集落が調査された例はなく非常に興味深い。しかしながら，遺構，遺物について不明な点が少なくなく，今後の資料の増加，研究の成果を待ちたい。

註1　「川島，立岡遺跡」　兵庫県太子町教育委員会　1971
註2　「吉田遺跡第二次調査概報」　和歌山県教育委員会　1971
註3　岩永政博編　「西前田遺跡」　東脊振村教育委員会　1981
註4　1981～1982年　佐賀県教委・東脊振村教委発掘調査
註5　1982年　佐賀県教委発掘調査
註6　中牟田賢治編　「天神軒遺跡」　小城町教育委員会　1982
註7　佐々木隆彦編　「今光・地余遺跡」　東急不動産株式会社　1980
註8　高瀬哲郎他　「大門西遺跡」　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告(1)　佐賀県教育委員会　1980
註9　酒井仁夫編　「裏ノ田遺跡」　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XVII　福岡県教育委員会　1977
註10　松岡　史他　「野黒坂遺跡」　福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第1集　福岡県教育委員会　1970
註11　七田忠昭編　「下中杖遺跡」　佐賀県教育委員会　1980
註12　東京文化財研究所にて分析をお願いした。
註13　天本洋一，多々良友博編　「尾崎利田遺跡」　佐賀県教育委員会　1980

にし　いっ　ぽん　すぎ

西一本杉　遺　跡

遺跡名：西一本杉遺跡（略号ＮＩＳ）
所在地：神埼郡東脊振村大字石動（いしなり）字西一本杉

西 一 本 杉 遺 跡

1. 遺 跡 の 概 要

遺跡は神埼郡東脊振村大字石動字西一本杉に所在する。

佐賀県の背骨である脊振山地から南へ延びる丘陵には旧石器時代から古墳時代にかけての遺跡が多く立地している。西一本杉遺跡も脊振山地から派生する山塊の１つ，標高448mの権現山から延びる丘陵の末端に位置する。東は脊振山地に源を発し，有明海に注ぐ田手川の扇状地が

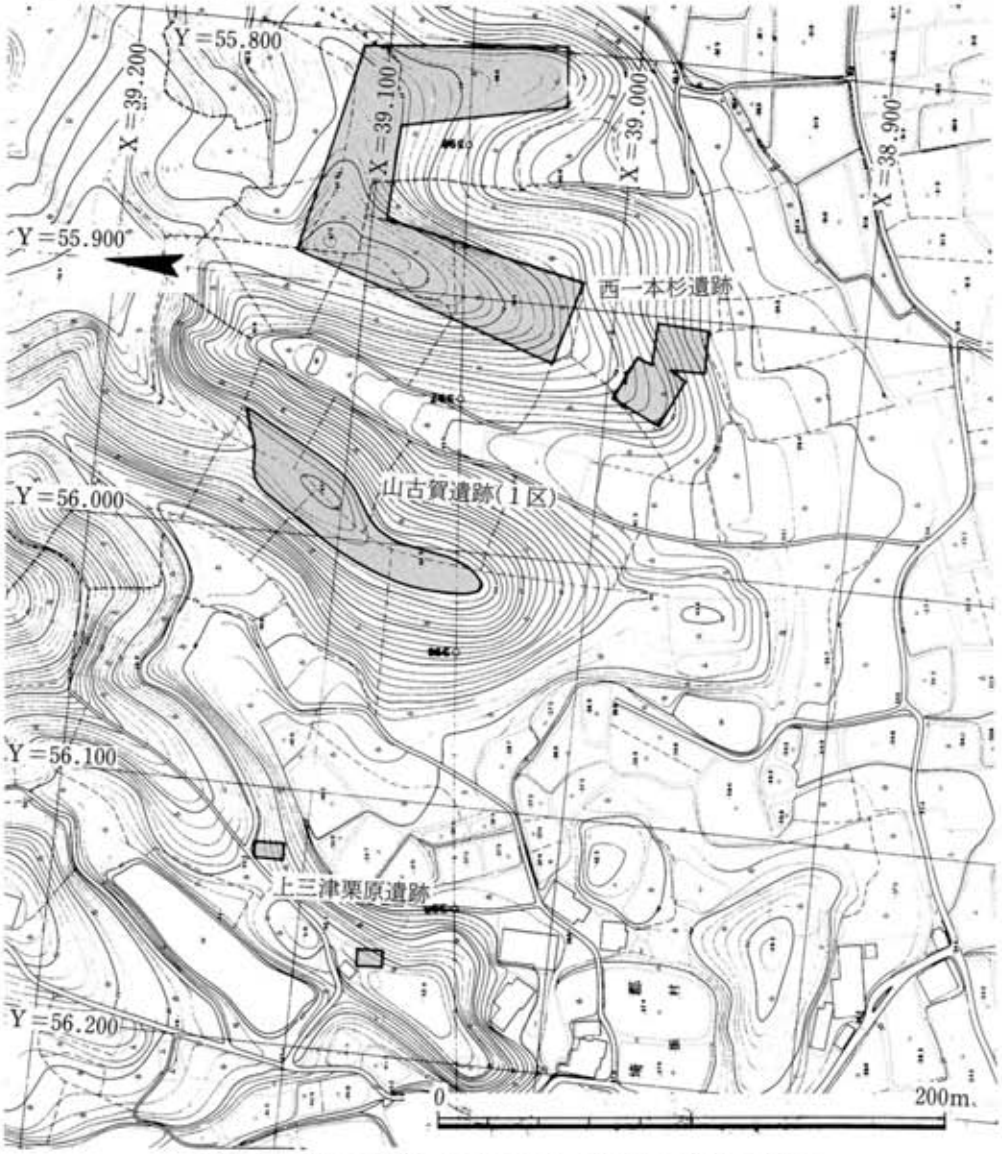


Fig. 155　西一本杉・上三津栗原・山古賀遺跡周辺地形図

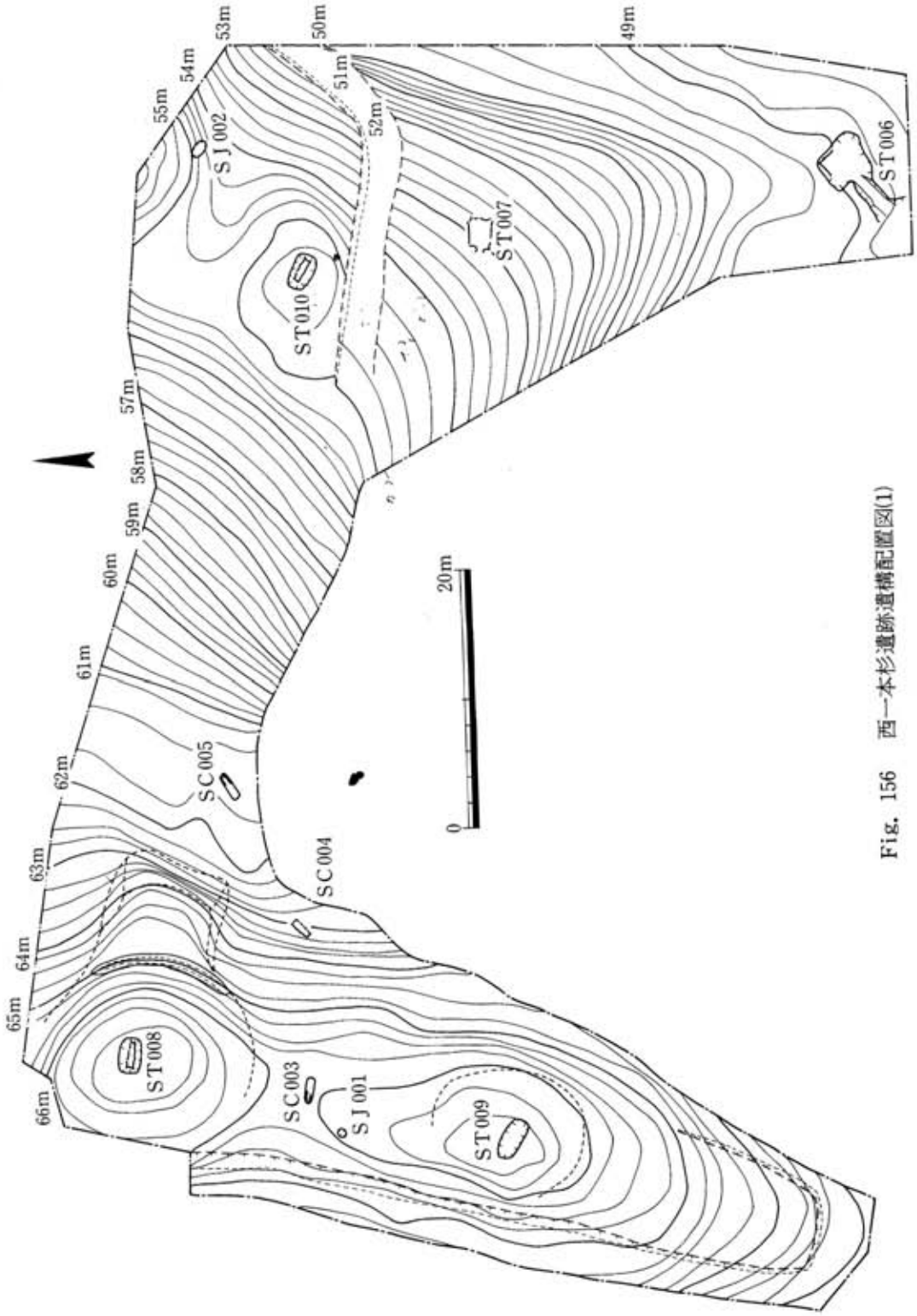


Fig. 156　西一本杉遺跡遺構配置図(1)

開け，南は佐賀平野が一望できる。西は昭和56年に発掘調査され，縄文時代・弥生時代・古墳時代の大集落が発見された夕ヶ里の低丘陵が南へ延びている。

遺構は東丘陵の頂部，標高56mにＳＴ011古墳，約10m下った所にＳＴ010古墳，さらに約15m下った所にＳＴ007古墳，さらに約30m下った所にＳＴ006古墳が，ＳＴ011古墳の南側裾部にＳＪ002壺棺墓が分布する。西丘陵の頂部，標高67mにＳＴ008古墳が，ＳＴ008古墳の南から東にかけての周辺にＳＣ003・004・005石棺墓・ＳＪ001壺棺墓が分布する。ＳＴ008古墳から約30m下った所にＳＴ009古墳が，さらに南へ下った所にＳＴ012・013古墳が分布する。ＳＴ012古墳からさらに南へ下った所から，近年再埋置されたと推定される二重口縁壺の十数個体分が一括で出土した。

遺物はＳＴ008古墳・ＳＣ004石棺墓から鏃が，ＳＴ010古墳から刀子が出土している。ＳＴ009古墳には鉄器・玉類が一括で副葬されていた。ＳＴ008古墳の溝からは二重口縁壺が１点出土している。ＳＴ006・007古墳は破壊が著しく，少量の須恵器と耳環が出土しただけである。ＳＴ012・013古墳からは多量の土師器・須恵器が出土した。

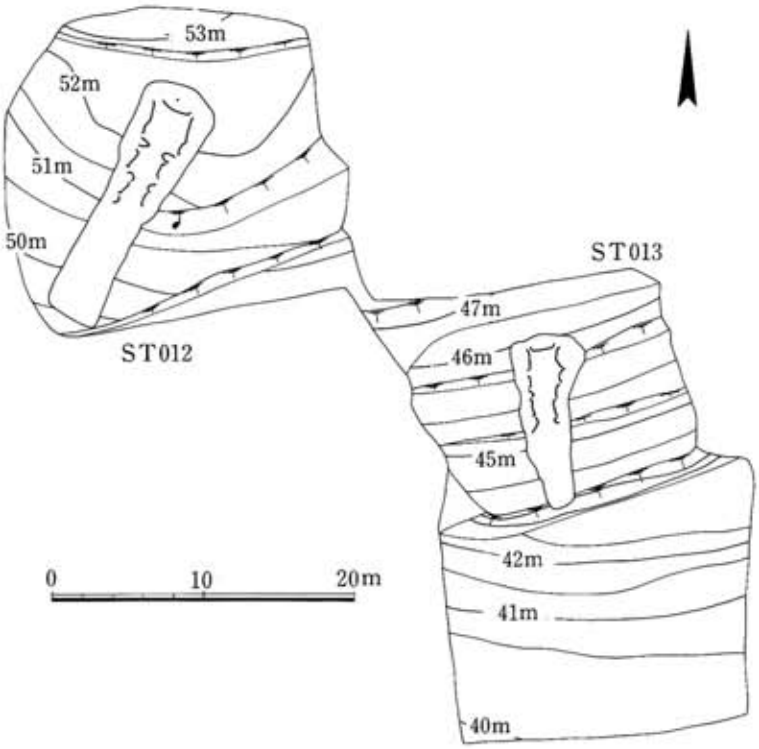


Fig. 157　西一本杉遺跡遺構配置図(2)

2．遺　　構

遺構はすべて墳墓で，4世紀前半から後半にかけての古墳3基・石棺墓3基・壺棺墓2基，6世紀中頃から7世紀後半にかけての古墳4基が検出された。

4世紀の古墳3基は，2基が内部主体に箱式石棺をもつもので，東西両丘陵の頂部に位置する。他の1基は墳丘を削平されているが，内部主体に木棺をもつもので，西丘陵の中位に位置する。

石棺墓3基はＳＴ008古墳の裾部の東から南にかけてほぼ等間隔で位置している。

壺棺墓2基はＳＴ008古墳の南側とＳＴ010古墳の北側に位置している。

6世紀から7世紀にかけての古墳4基のうち2基は東丘陵に，他の2基は西丘陵に位置する。

ＳＴ006古墳（Fig. 158，PL. 87）

東丘陵尾根の先端近く，標高49mの所に位置する。削平が著しく調査前は腰石の一部が露出しているだけであった。

墳丘　北側は腰石の上面まで，南側は石室床面まで削平されており，墳丘，周溝ともに残っておらず，古墳の規模は不明である。

内部主体　単室の横穴式石室で，主軸をＳ47°Ｗにとり西に開口している。玄室は腰石の一部が奥壁と，左側壁に残っているだけであるが，奥行約2.63m，横幅約2.70mとほぼ正方形に近いものと推定される。

玄門から羨道部にかけては石材が残ってないが，短い羨道があったと推定される。羨道部からは幅約1.4m，深さ約0.45mの墓道が西斜面へ下っている。

遺物は墓道の床面から須恵器の杯，甕の小片が若干出土した。

ＳＴ007古墳（Fig. 159，PL. 88）

ＳＴ006古墳の北方約30m，東丘陵尾根の頂部からやや下った標高53mの所に位置する。削平が著しく，調査前は左側壁の一部が露出しているだけであった。

墳丘　墳丘は削平され，古墳の規模は不明である。周溝は北側でも検出されず，元来なかったものと推定される。

内部主体　単室の横穴式石室で，主軸をN88°Wにとり，西に開口している。玄室は左側壁，奥壁の腰石の一部しか残っていない。左側壁の腰石は花崗岩の一枚石が使用され，奥壁の腰石は花崗岩2個が残っているが，もう1個あったものと推定される。側壁と奥壁の間は小石で目貼りされている。玄室の規模は奥行約2.0m，幅約2.0mのほぼ正方形に近いものと推定される。床面は敷石があったらしく，石室の南側に小礫が散乱していた。玄門は閉塞石は残っていないが

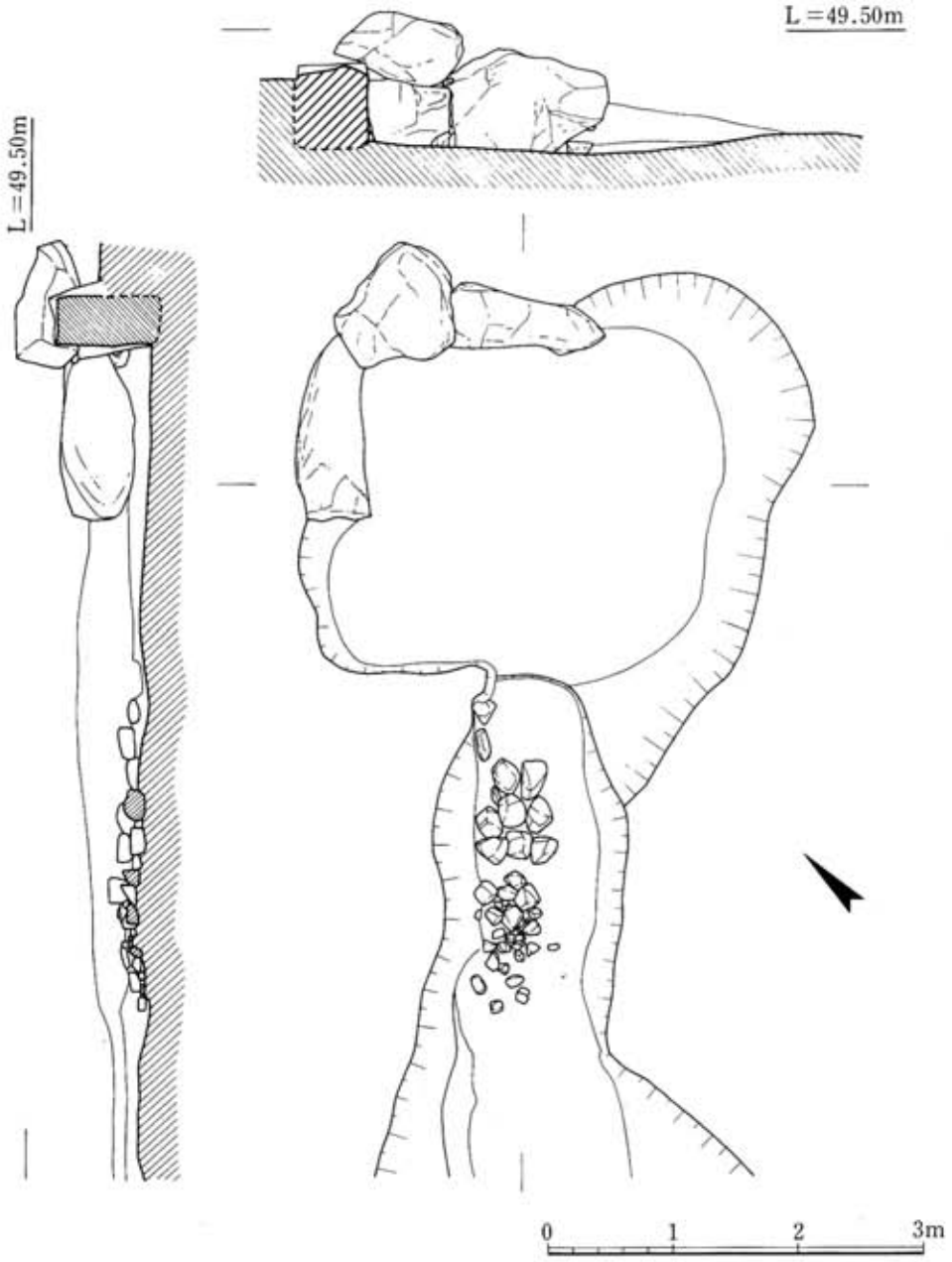


Fig. 158　ＳＴ006古墳石室実測図

裏込め石が多数散乱している。羨道は短いものがあったと推定され，大小の石が散乱している。

遺物は玄室の隅から鉄鏃と耳環が，石室の東側表土から須恵器が少量出土した。

ＳＴ008古墳（Fig. 160～162，PL. 89～92）

西丘陵尾根の頂部，標高67mの所に位置する。丘陵頂部の高まりを利用した古墳で，東側に張り出し部をもつ。

墳丘　径約15mの不整円形の円墳部と底辺幅10m，奥行９mの張り出し部からなる。円墳部は基本的に自然地形を利用していると考えられるが，地山を整える為の若干の整形はしているようである。地山整形をした後に，厚さ0.35mの盛り土をし，その上から墓壙を掘り込み，埋

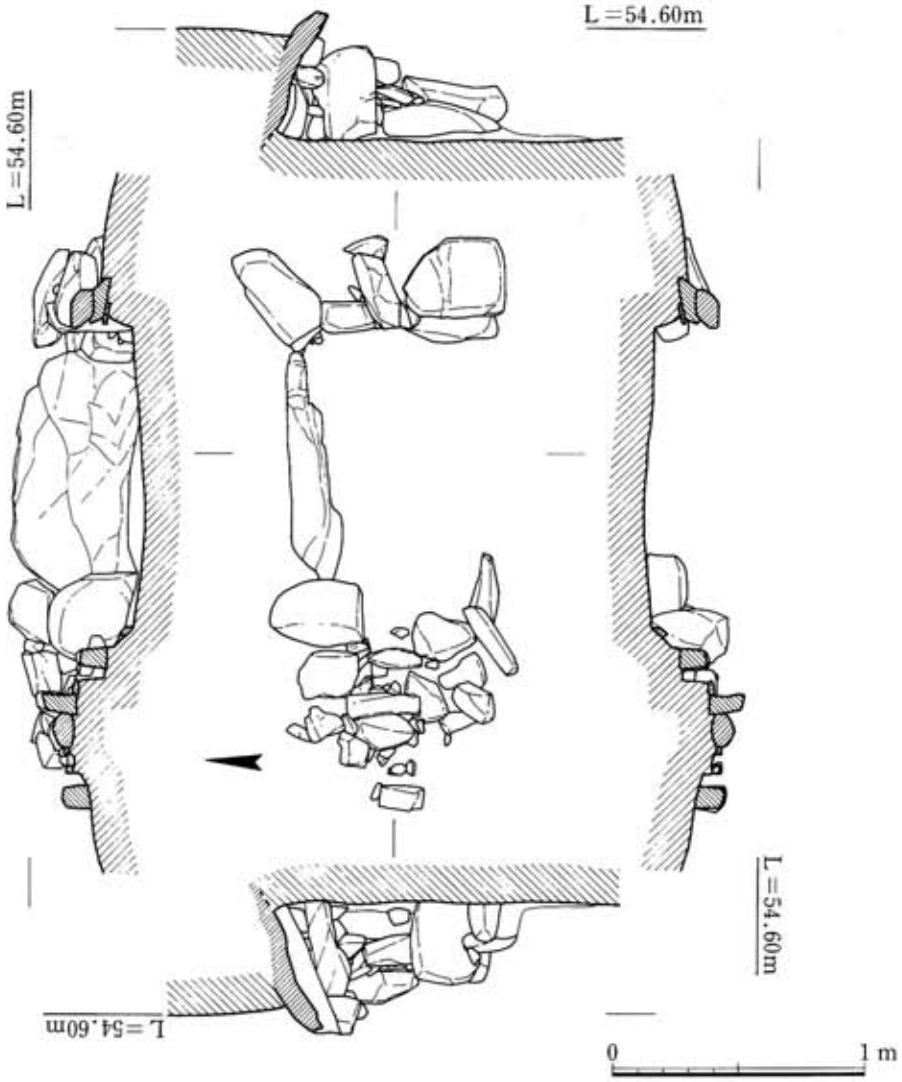


Fig. 159　ＳＴ007古墳石室実測図

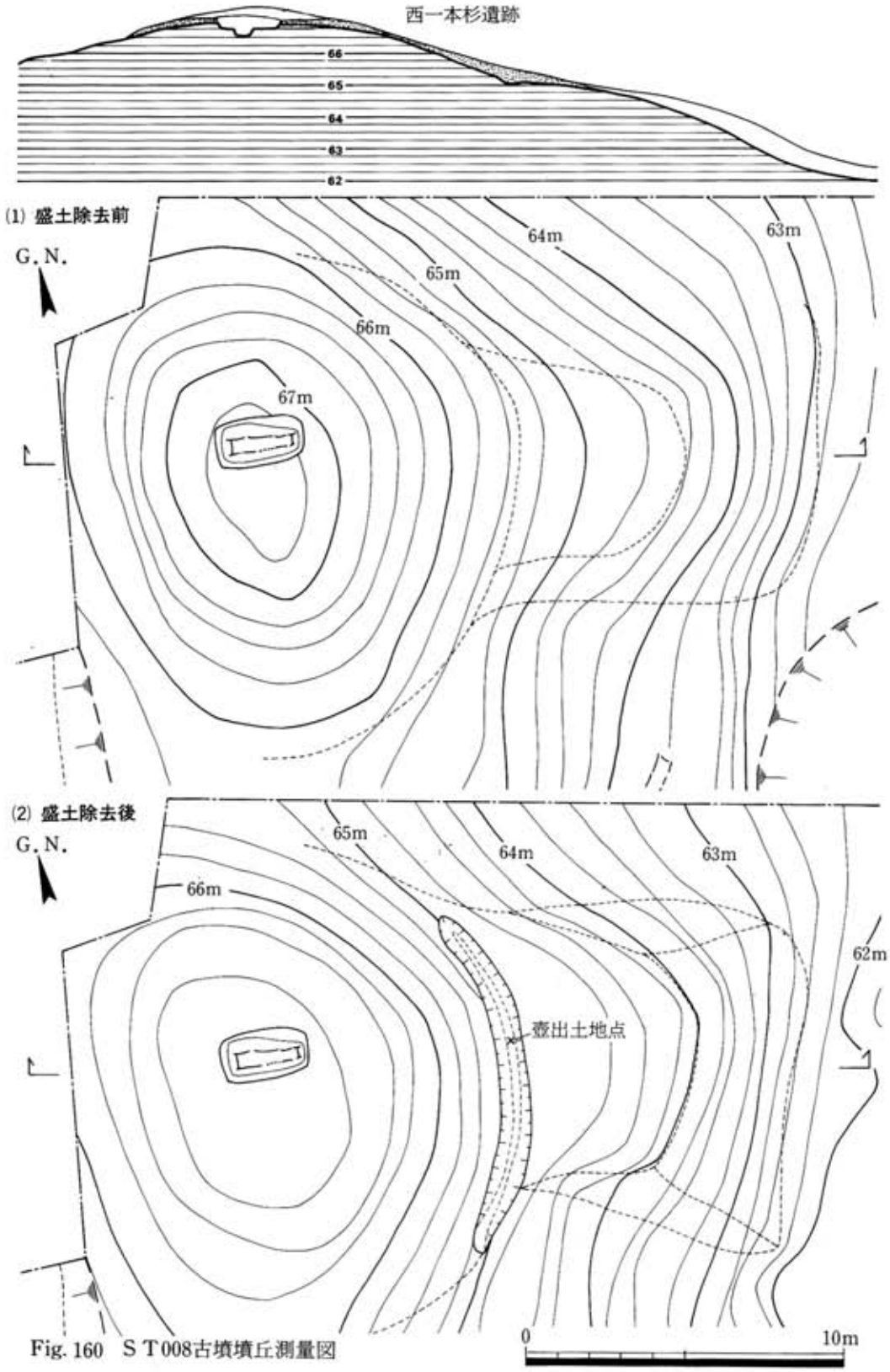


Fig. 160　ＳＴ008古墳墳丘測量図

葬をして，さらに厚さ0.5mの盛り土を施して墳丘を整えている。

張り出し部は西丘陵から下りつつ東へ延びる丘陵鞍部の自然地形を利用して作られている。地山整形は上面と東側斜面が著しく，特に東側斜面は急傾斜に整形されている。円墳部との境のくびれは明瞭でなく，ゆるやかな曲線でくびれがわかる程度である。円墳部と平坦面の境は幅0.9m，深さ0.4m，長さ10.8mの溝が弧状に回り，溝底から二重口縁の壺形土器がほぼ完形で出土した。

内部主体　主体は箱式石棺で墓壙のやや南に寄って造られている。蓋石は片麻岩の板石が6枚用いられ，蓋石と蓋石の間は小形の板石で補強され，さらに白色粘土で目貼りがしてある。棺は東西小口各々一枚，南北側石各々4枚の片麻岩の板石が用いられている。東小口幅0.3m，

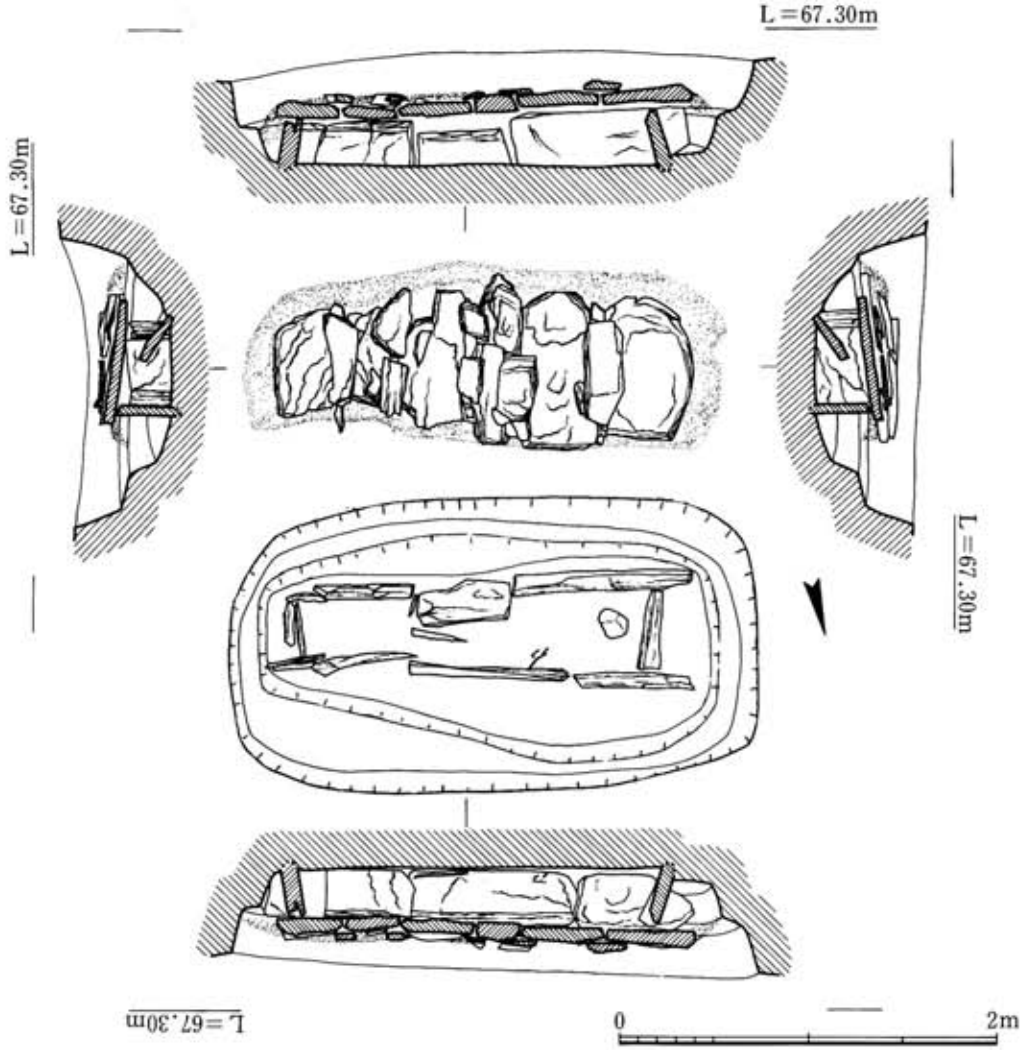


Fig. 161　ＳＴ008古墳石棺実測図

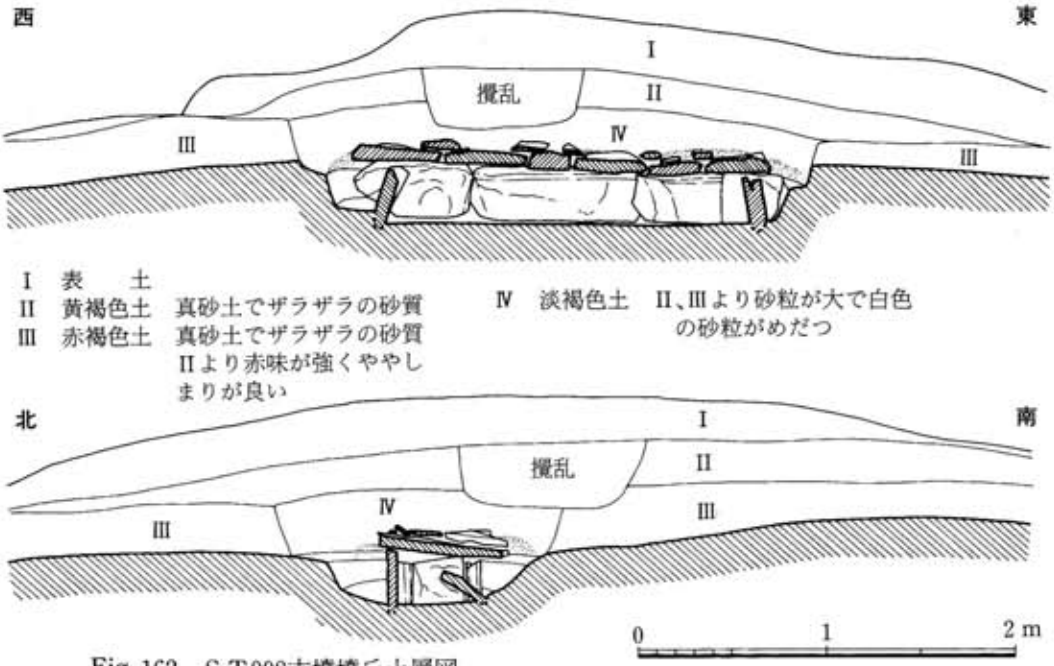


Fig. 162 ＳＴ008古墳墳丘土層図

西小口幅0.44m，長さ1.8m。西小口部に頭蓋骨が，中央よりやや東側小口部に近い西側に大腿骨が残っている。

遺物は棺底から鉈が１点出土した。

ＳＴ009古墳（Fig. 163，PL. 93・94）

西丘陵尾根のＳＴ008古墳から南へ約30mの所に位置する。

墳丘 地山まで削平されており，墳丘は全く残っていない。このＳＴ009古墳は，地山が花崗岩の白色バイラン土壌のために，尾根の表土を剝いで遺構の検出をした際に，表面からの掘形を確認することができなかった。地山面からの遺構検出が困難なために，試掘棒によって遺構の有無を確認することにした。その結果，地山のやわらかい部分に幅30cmの試掘溝を掘ってみたところ確認されたものである。この試掘溝を掘る際に玉類と鉄鏃を掘り上げてしまい，原位置を確認できなかった。試掘溝の断面を見るとU字形の赤色顔料の帯が入っており，これは土壙墓，あるいは木棺墓だと判断した。表面に水をまき再度掘形を確認しようと精査したが，ついに確認することができなかった。そこで，遺構の中心と推定されるところから周囲に向けて約20cm程掘り下げてみると，花崗岩の半分風化しかけた岩盤にぶつかり掘形を確認することが出来た。

内部主体 墓壙は方位をＳ65°Ｅにとる隅丸長方形で足部がやや狭くなる。墓壙上面で，

頭位幅1.55m，足位幅1.43m，長さ3.36mで断面U字形である。墓壙が掘られた後に割竹形の木棺が埋置されたようである。それは棺内に撒布された赤色顔料が棺底や墓壙壁から浮いた状態であることと，出土した鉄器類が棺底や墓壙壁から浮き，赤色顔料の厚さの中や土面で検出されたことから推定された。木棺内に撒布された赤色顔料は棺底で約0.07cm，棺の上部へいくにつれて薄くなる。赤色顔料の残存状況から木棺の形状を推定すると，高さは不明であるが，頭位幅0.85m，足位幅0.55m，長さ2.65mで，頭部と足部が上がり気味になっている。

遺物は試掘溝を掘る際に鉄鏃数点，勾玉1点，管玉14点，ガラス小玉40点，棺内左側の肩部から鉄剣2点，鉄斧2点，鍬先1点，鏡片1点，腰部から鉄鏃33点が出土した。

ＳＴ010古墳（Fig. 164，PL. 95）

墳丘　東丘陵尾根の頂部からやや下った，ＳＴ007古墳の上位15mの所。標高55mに位置する。尾根のやや盛り上がった部分に構築されているが，盛り土は削平されているのか検出されなかった。周溝も検出されなかった。

内部主体　主体部は箱式石棺で主軸をＳ60°Ｅにとる。墓壙は隅丸長方形で二段掘りとなっている。上面で東辺幅1.53m，深さ0.44m，西辺幅1.32m，深さ0.58m，長さ2.98m，二段目で東辺幅0.81m，深さ0.22m，西辺幅0.80m，深さ0.25m，長さ2.35mである。石棺の蓋石は花崗岩の扁平な石を5個使い，蓋石と蓋石の間は小石で目貼りをして補強している。棺は小口

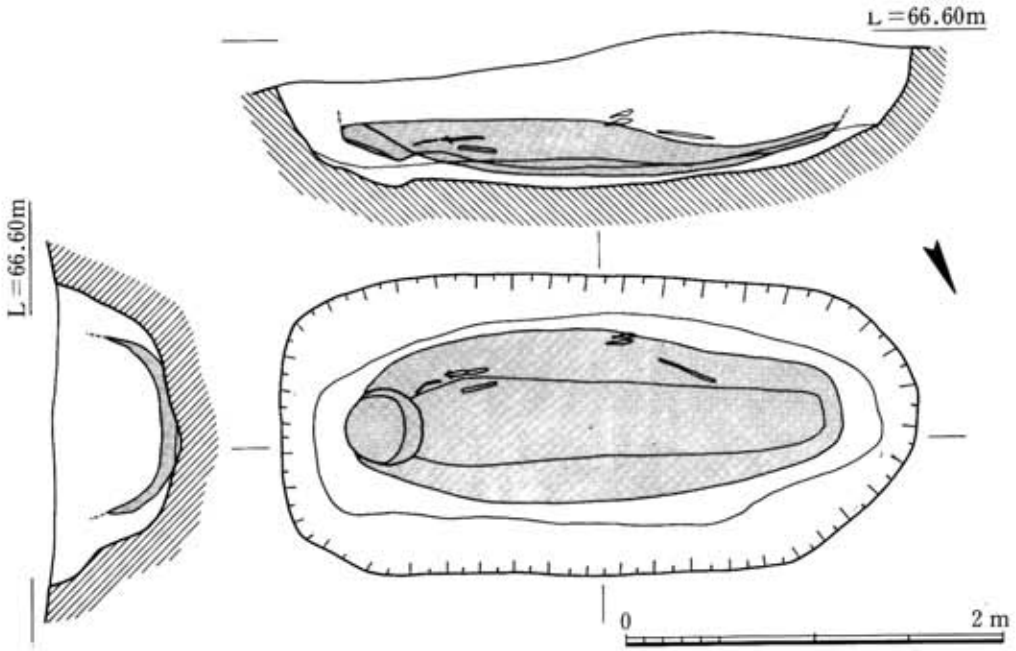


Fig. 163　ＳＴ009古墳内部主体実測図

を1枚の板石を，左右両側壁を3枚の板石を用いて作られている。棺の規模は内法で，東小口幅0.44m，西小口幅0.38m，深さ0.50m，長さ1.78mである。棺の外部は墓壙底部から蓋石上面にかけて白色粘土でしっかり包んである。棺底もまた厚さ0.15mの白色粘土で充塡してある。棺の内底面は赤色顔料が撒布されている。

遺物は棺底から刀子が1点出土している。

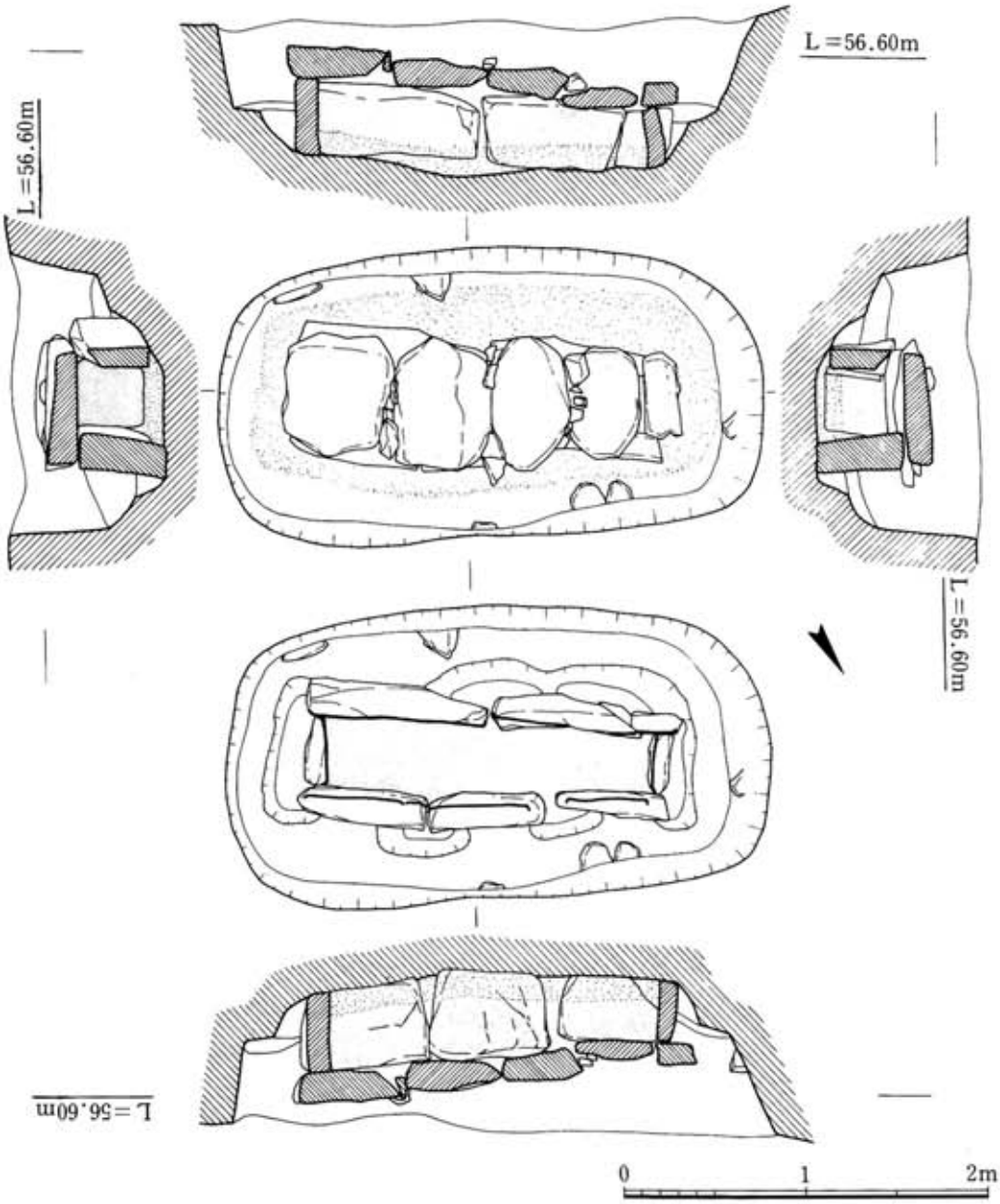


Fig. 164　ＳＴ010古墳石棺実測図

ＳＴ012古墳（Fig. 165・166・168, PL. 96・97）

西丘陵尾根を南に下った緩斜面の標高52mの所に位置する。横穴式石室を内部主体とする円墳で，閉塞石は取り去られ盗掘を受けているが，墳丘の残りは良好である。

墳丘　高さ約1.5m，墳丘径約13mだが裾部が若干削平されているようである。周溝は確認されなかった。盛り土は旧表土から開始され，黄褐色土が厚さ0.2～0.3mの単位で整然と積み上げられている。

内部主体　複室の横穴式石室で主軸をＳ26°Ｗにとり南に開口している。石室の掘形は幅2.4m，奥行4.8m，深さ1.1mで長方形である。玄室は奥壁で幅1.4m，奥行1.4m，高さ1.4mで平面形はほぼ方形である。奥壁と左側壁には各々１個，右側壁には２個の腰石が配置され，腰石から上は頭大の塊石を持ち送り式に７～８段積み上げて天井に至る。羨室は幅0.9m，奥行1.1mでほぼ方形である。両側壁の腰石は各々１個で，腰石から上は頭大の塊石を持ち送り式に積み上げている。掘形と石室の間は大小の石で裏込めがなされている。玄門部は左右から0.37m程袖石が張り出し，袖石の間は幅0.56mの仕切り石がある。玄室は敷石が存在していたが，盗掘の為に隅々にわずかに残っているだけであった。閉塞部は仕切り石と閉塞石の裏込め石が一部残ってるだけであった。羨道は幅約0.8m，高さ約0.6m，長さ0.9mが残っており，左右２個の腰石が用いられたと推定されるが，右の１個が抜かれている。羨道から幅約3.0mの墓道が南へ約８m延びる。

遺物は墓道の黒色土から多量の土師器，須恵器が出土している。

ＳＴ013古墳（Fig. 167・168, PL. 98・99）

ＳＴ012古墳から南東へ約30m離れた緩斜面の標高46mの所に位置する。横穴式石室を内部主体とする円墳であるが，腰石から上の大部分が削平されている。墳丘は残存しない。

内部主体　複室の横穴式石室で主軸をＳ５°Ｅにとり南に開口している。石室の掘形は最大幅2.5m，奥行3.5m，深さ0.8mで，前部がやや狭くなった羽子板状になる。玄室は幅0.95m，奥行1.4mで長方形である。奥壁に１個，両側壁に２個ずつの方形の大型石を腰石として配置している。両側壁はやや内傾し，小型の塊石を持ち送り式に積み上げている。玄室と羨室の境は明確でなく，やや内側に張り出した袖石的な石はあるが仕切り石はない。羨室は幅0.66m，奥行0.9mのほぼ方形で，両側壁は各々２個の腰石が残っているだけである。羨道部は破壊されており，羨道が存在したかどうかは不明である。羨道部あるいは前庭部には小礫が散乱しており，石室内には敷石が存在していたと考えられる。羨道部からは幅1.4m，深さ0.3m，長さ４mの墓道が南へ延びている。

遺物は前庭部の黒色土から多量の土師器，須恵器が出土した。

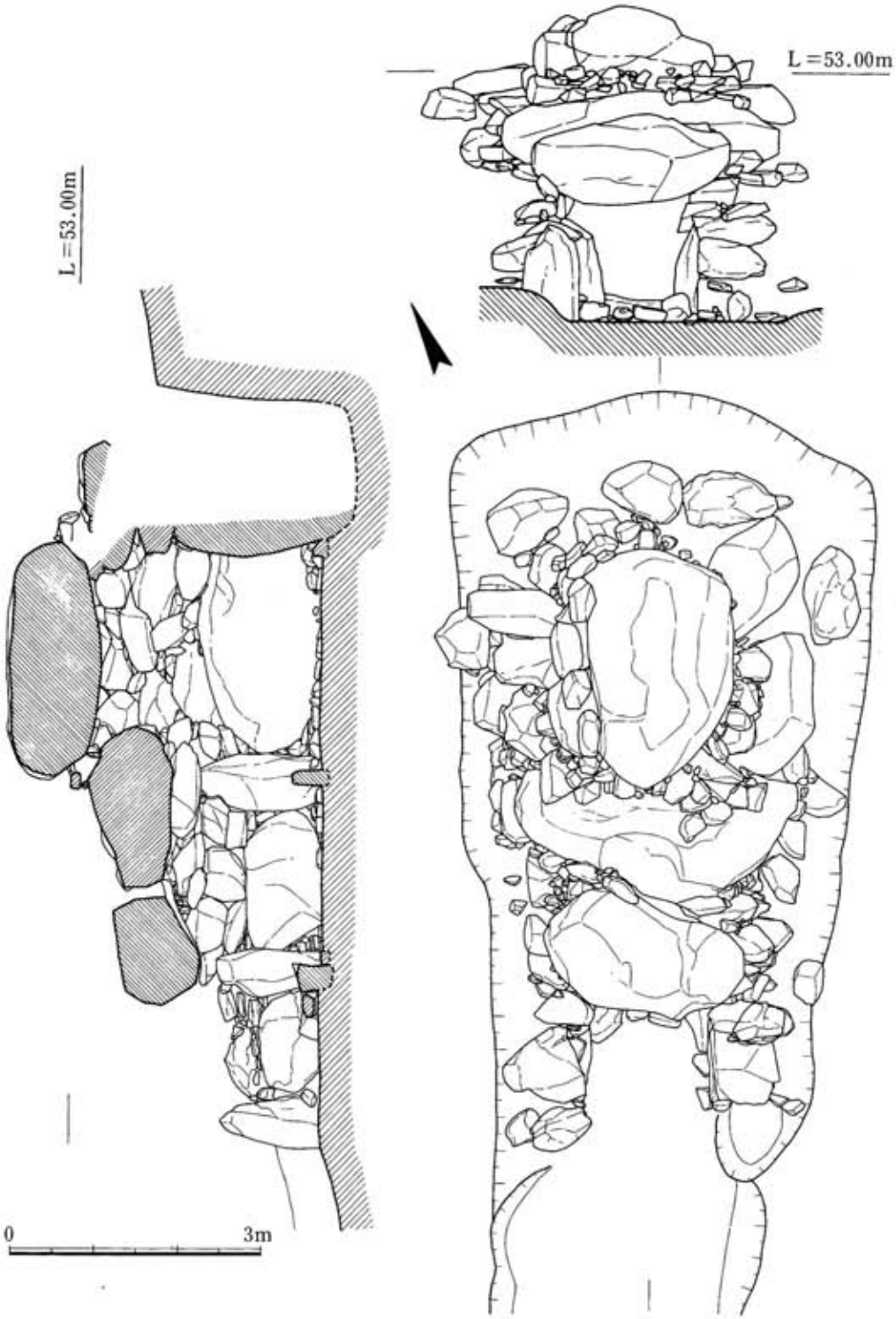


Fig. 165　ＳＴ012古墳石室実測図(1)

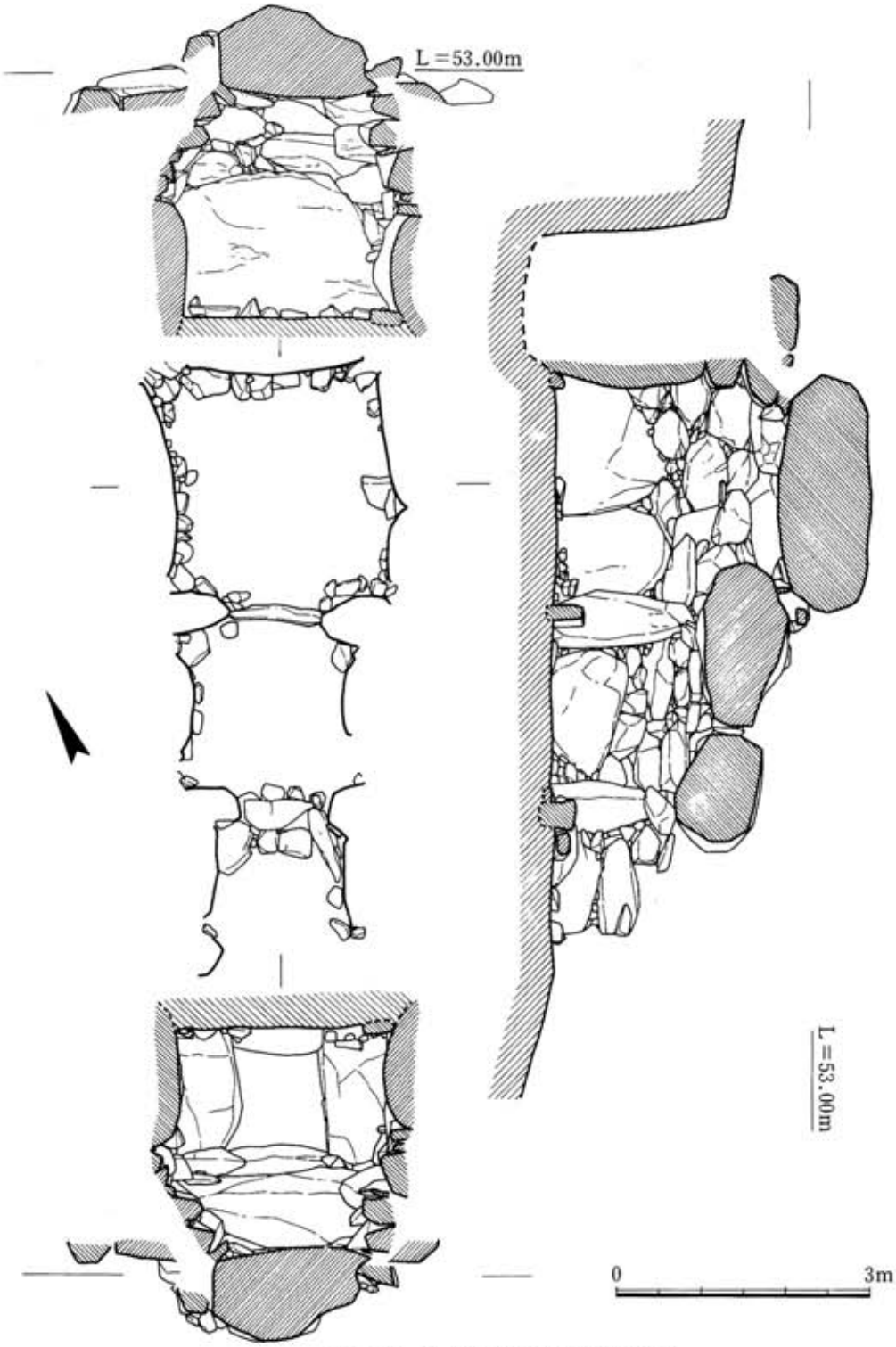


Fig. 166　ＳＴ012古墳石室実測図(2)

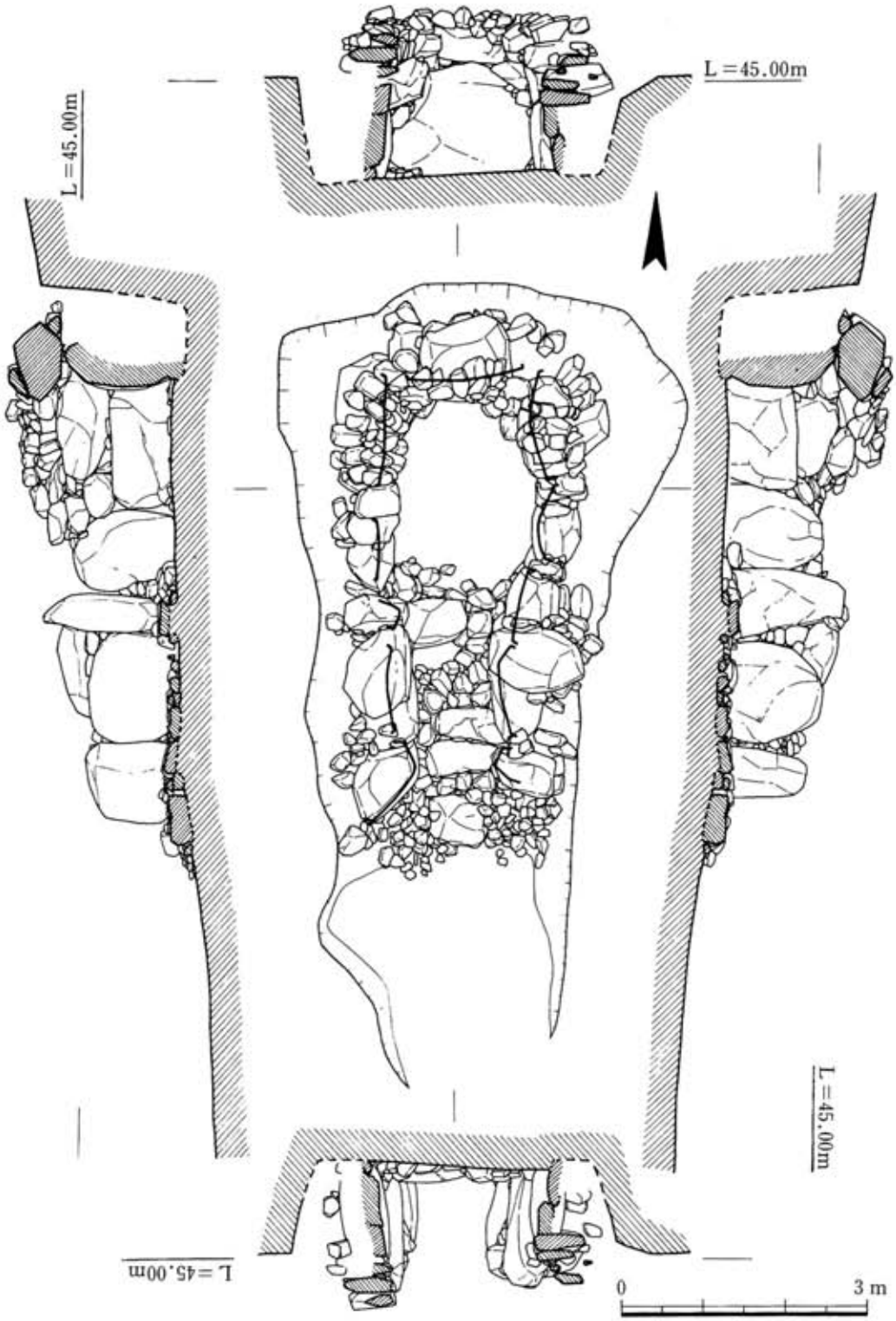
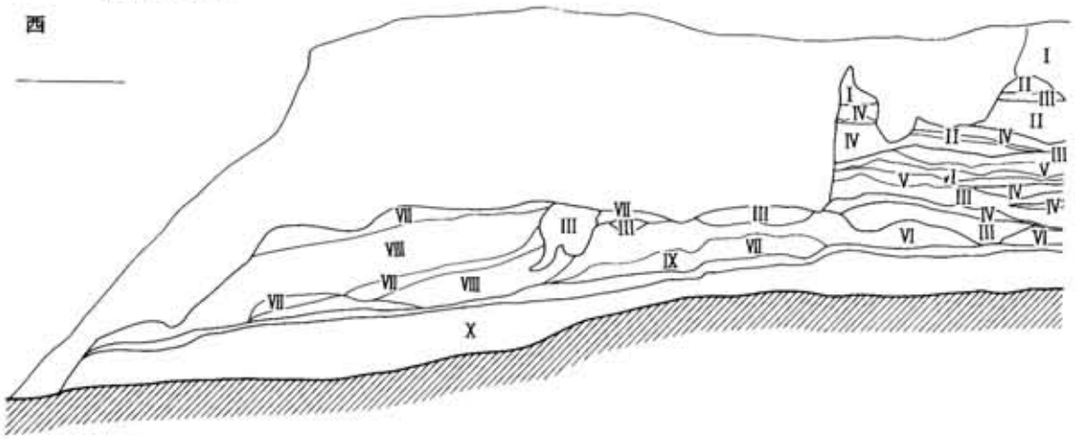
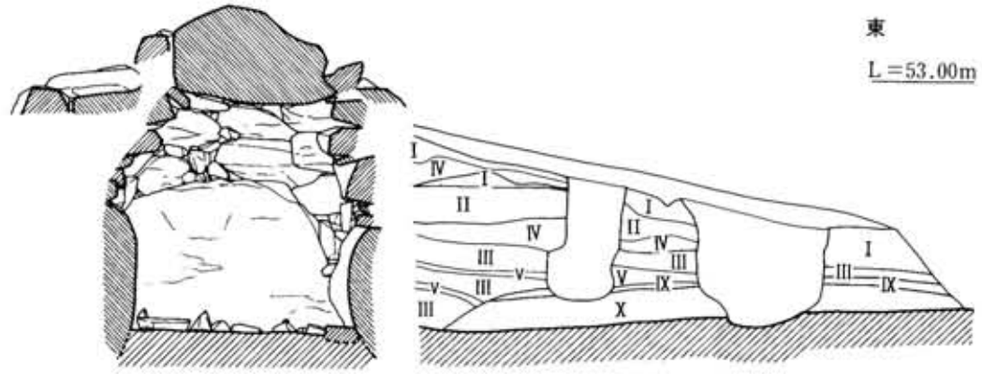


Fig. 167　ＳＴ013古墳石室実測図(3)

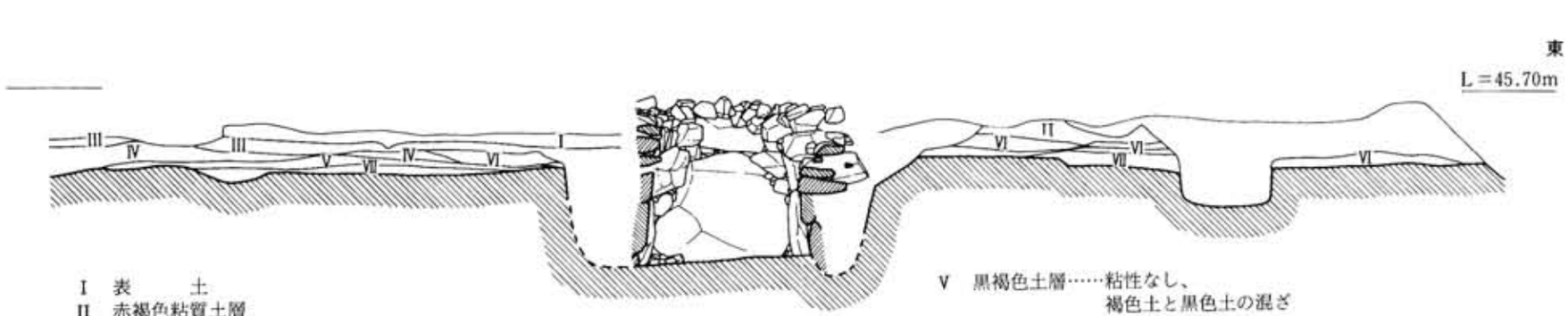
〔ＳＴ012古墳〕





Ⅰ　暗褐色土層……暗褐色土を主体に黒色土(腐植土)
　　黄褐色土等が混じる
Ⅱ　褐色土層……粘性あり
Ⅲ　黄白色土層……砂層、褐色粘土を若干含むが、サラサラしている
Ⅳ　褐色土層……粘土を主体に砂が均一に少量入る。粘性あり
Ⅴ　黄白色土層……砂層が主体であるが、Ⅳより褐色粘土が多い
Ⅵ　明褐色土層……砂を含んだ褐色粘土層
Ⅶ　暗褐色土層……粘性がない
Ⅷ　褐色土層……砂を多く含む褐色土層
　　粘性はあまりない
Ⅸ　黒褐色土層……旧地表面、砂層上面は
　　黒色土が点々と見られる
Ⅹ　褐色土層……砂層を主体に粘土をわずかに含む層

〔ＳＴ013古墳〕



Ⅰ　表　　土
Ⅱ　赤褐色粘質土層
Ⅲ　褐色土層
Ⅳ　淡褐色土層……やや粘性があるが
　　部分的にしまりがない
Ⅴ　黒褐色土層……粘性なし、
　　褐色土と黒色土の混ざった土
Ⅵ　灰褐色土層……硬くしまった層
　　白色鉱物の粒子を多く含む
Ⅶ　褐色土層……しまりがなく軟らかい

0　　4m

Fig. 168　ＳＴ012・ＳＴ013古墳墳丘土層図

ＳＣ003石棺墓（Fig. 169, PL. 100）

ＳＴ008古墳の南15mに位置する。墓壙はＳ78°Ｅで，東小口幅0.53m，西小口幅0.38m，長さ2.06m，深さ0.25m，東小口幅がやや広い長方形である。頭位はやや小口幅の広い東向きであろう。蓋石は基本的に花崗岩の板石が５枚で，蓋石と蓋石の間と蓋石の上はやや小ぶりの花崗岩と片麻岩で補強してある。粘土による目貼りはなかった。棺は小口には板石がなく，側壁も足部に二枚ずつの花崗岩の板石があるだけで，石蓋土壙墓と箱式石棺の折衷である。棺内から遺物の出土はなかった。

ＳＣ004石棺墓（Fig. 170, PL. 101）

ＳＴ008古墳の南東17mの西丘陵尾根からやや東斜面に下った所に位置する。墓壙は棺一杯に掘ってある。棺内法は北小口幅0.3m，南小口幅0.23m，長さ1.67m，深さ0.28m，北小口がやや広い長方形である。長軸はＮ54°Ｅで頭位は小口幅の広い北向きであろう。蓋石は花崗岩の板石が５枚で，蓋石と蓋石の間は小型の礫で補強してある。粘土による目貼りはみられなかった。棺は南北小口に各々１枚東西側壁に各々４枚の板石を用いてある。板石はいずれも棺底に小溝を掘って埋め込んである。頭位置と考えられる北小口部には棺底から厚さ８cm程度の白色粘土が盛り上げられている。

遺物は白色粘土の上面から鉇が１点出土した。

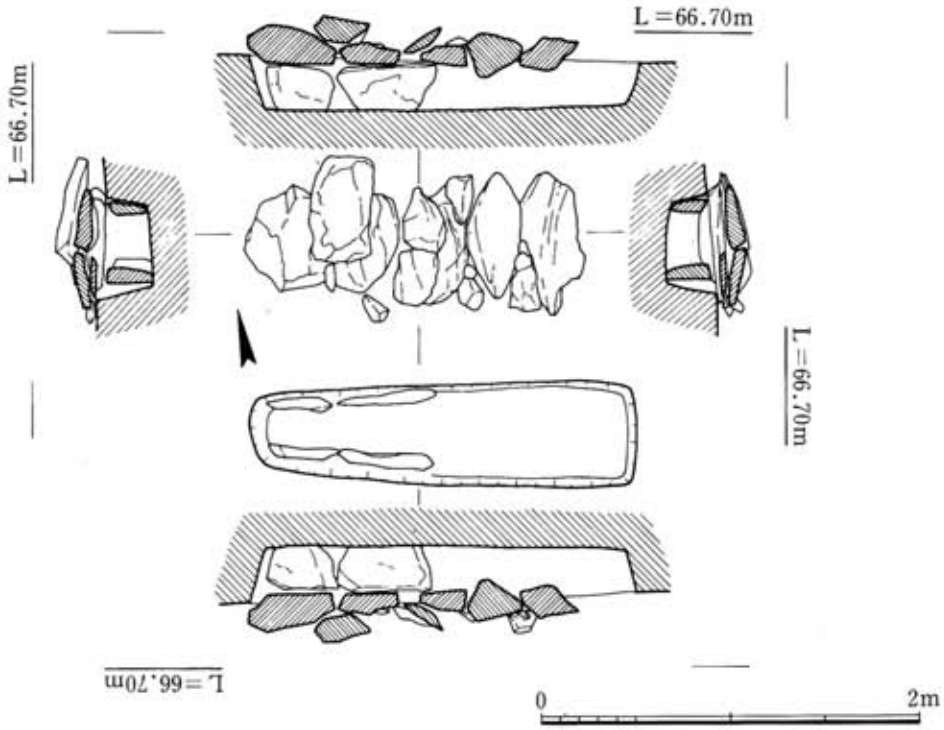


Fig. 169　ＳＣ003石棺墓実測図

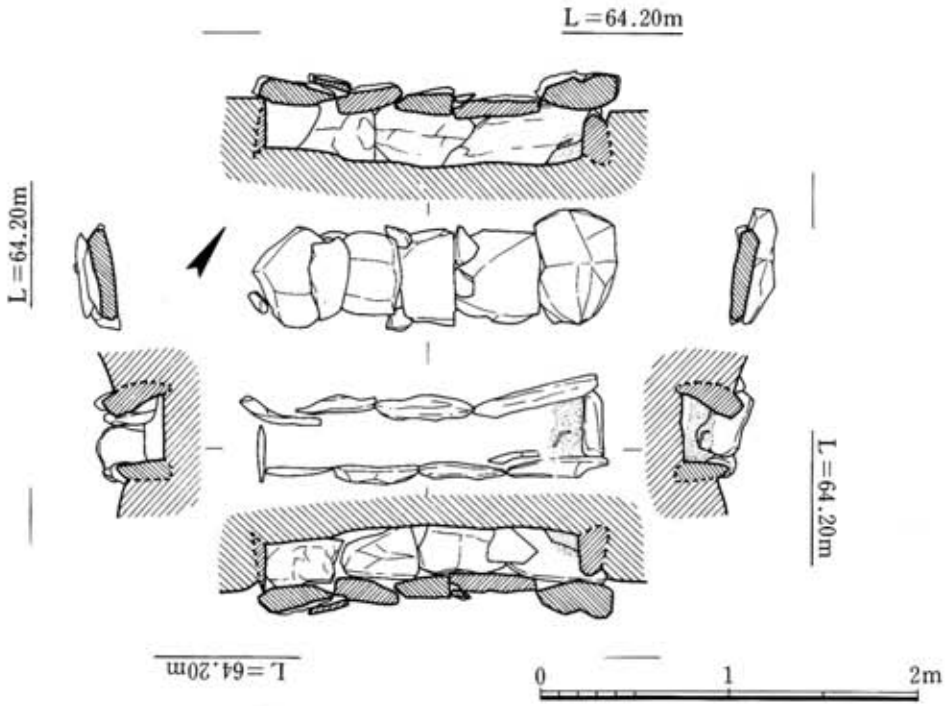


Fig. 170　ＳＣ004石棺墓実測図

ＳＣ005石棺墓（Fig. 171, PL. 102）

ＳＴ008古墳の東側張り出し部の東７ｍ，西丘陵尾根の東側に下った所に位置する。墓壙は東小口幅0.57m，西小口幅0.5m，長さ2.13m，深さ0.38m，西小口幅が広い長方形である。長軸はＮ54°Ｅで，頭位はやや小口幅が狭いものの，側壁に板石を部分的に使用していることから西向きであろう。蓋石は不整形の花崗岩の板石が５～６枚用いられ，蓋石と蓋石の間は小型の板石で補強してある。さらに，蓋石は白色粘土で目貼りをしてある。棺は西側小口に１枚，側壁に各々２枚の板石が用いられているだけで，石蓋土壙と箱式石棺の折衷である。

遺物の出土はなかった。

ＳＪ001壺棺墓（Fig. 172, PL. 103）

ＳＴ008古墳の南17m，西丘陵尾根上にある。墓壙は掘り込まれた地山が花崗岩の風化土壌のためにはっきりしないが，平面円形と推定される。棺は壺形土器の胴部上半を打欠き，底部を上にした状態で埋置している。

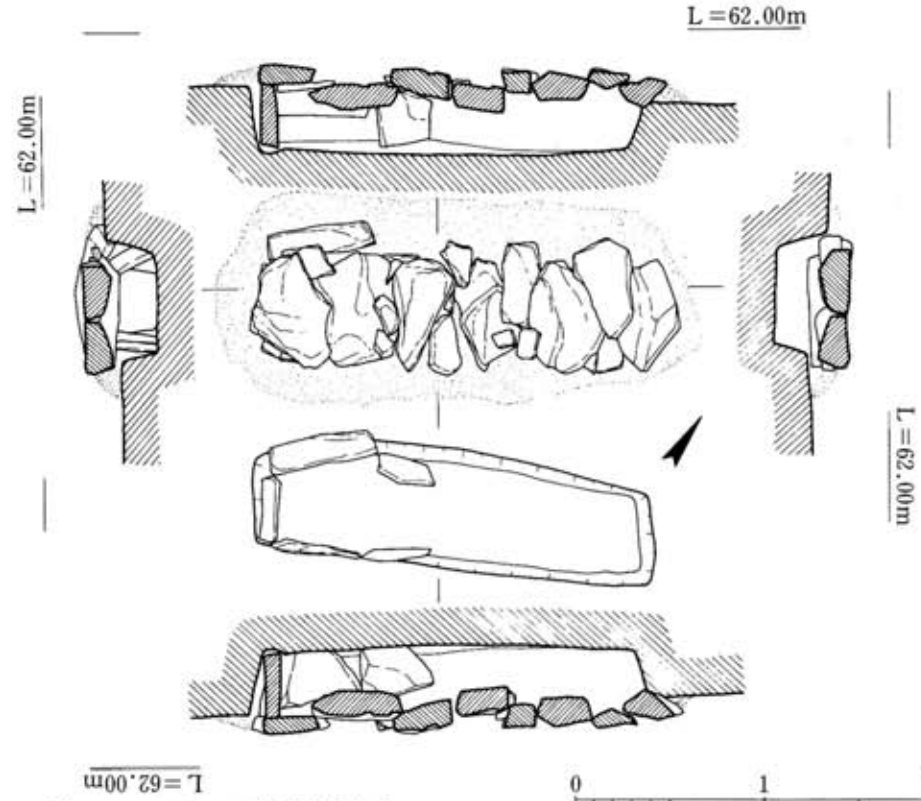


Fig. 171　ＳＣ005石棺墓実測図

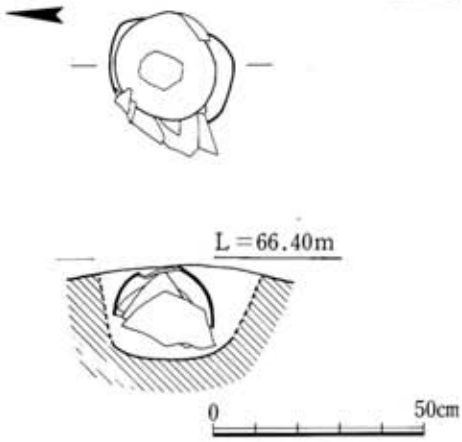


Fig. 172　ＳＪ001壺棺墓実測図

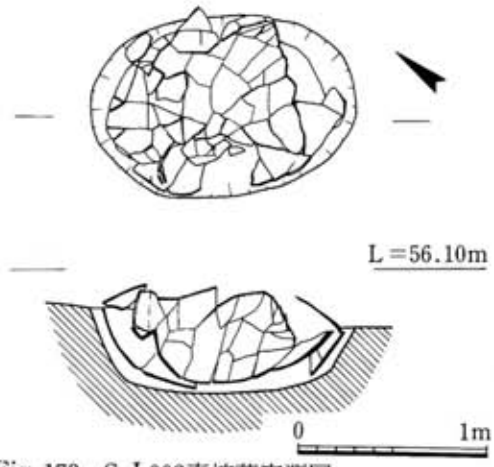


Fig. 173　ＳＪ002壺棺墓実測図

ＳＪ002壺棺墓（Fig. 173, PL. 103）

ＳＴ010古墳の北東13m，東丘陵尾根上にある。墓壙は1.4m×0.96mの平面楕円形で、深さ0.4mである。棺は二重口縁の壺をほぼ水平に埋置し，胴部上半を打欠いた壺を蓋としている。主軸方位N55°Wである。

3．遺　　物

土器

4世紀の土師器がＳＴ008古墳溝から1点と，西丘陵尾根の表土層からかなり多量に出土した。6～7世紀の須恵器，土師器がＳＴ012古墳，ＳＴ013古墳から多量に出土した。他にＳＴ006古墳，ＳＴ007古墳からも若干の須恵器が出土した。

ＳＴ006古墳出土土器（Fig. 174）

須恵器

杯（1）　短く内傾する立ち上がりをもつ。口径10.2cm，器高3.8cm，底部はヘラケズリ，他はヨコナデ，ナデ。

ＳＴ007古墳出土土器（Fig. 174，PL. 105）

須恵器

蓋（2，3）　天井部が扁平な同タイプのものであるが，口縁端部が2は丸く，3は内側に段がつく。体部外面に細い沈線がめぐる。口径14.5cm，器高4.0～4.2cm。天井部はヘラケズリ，他はヨコナデ，ナデ。

甕（4）　卵形の体部に長いくの字に外反する口縁がつく。口縁端部は上方に鋭くつまみ上げられ，下方に細く鋭い凸帯がめぐる。口縁部は2条の櫛描波状文がめぐる。波状文は2条ともかなり粗雑である。口径30.6cm，器高59.2cm，最大径48.4cm。体部外面は平行のタタキが，内面は同心円状のタタキが施される。

ＳＴ012古墳出土土器（Fig. 175～178，PL. 106・107・110）

須恵器

蓋（Fig. 175－5～18，PL. 106）

形態的にほとんど差がないが法量でⅠ・Ⅱ，口縁部の形態でａ・ｂに分類した。

蓋Ⅰａ（12，17）　口径12cm以上のもので丸味をもった天井からゆるやかに内湾して口縁部へと連続するもの。内外面ヨコナデ，天井部ヘラケズリ。

蓋Ⅰｂ（5～8）　口径12cm以上のもので，体部から口縁へ移る所でほぼ垂直に屈曲するもの。内外面ヨコナデ，天井部はヘラケズリをそのまま残すもの5～8と，後でナデ調整を施すものがある。

蓋Ⅱａ（13～16，18）　口径10～11cm内外のもの。丸味をもった天井からゆるやかに内湾して口縁部へ連続するもの。内外面ヨコナデ，天井部はヘラケズリをそのまま残すもの13・18

遺　　物

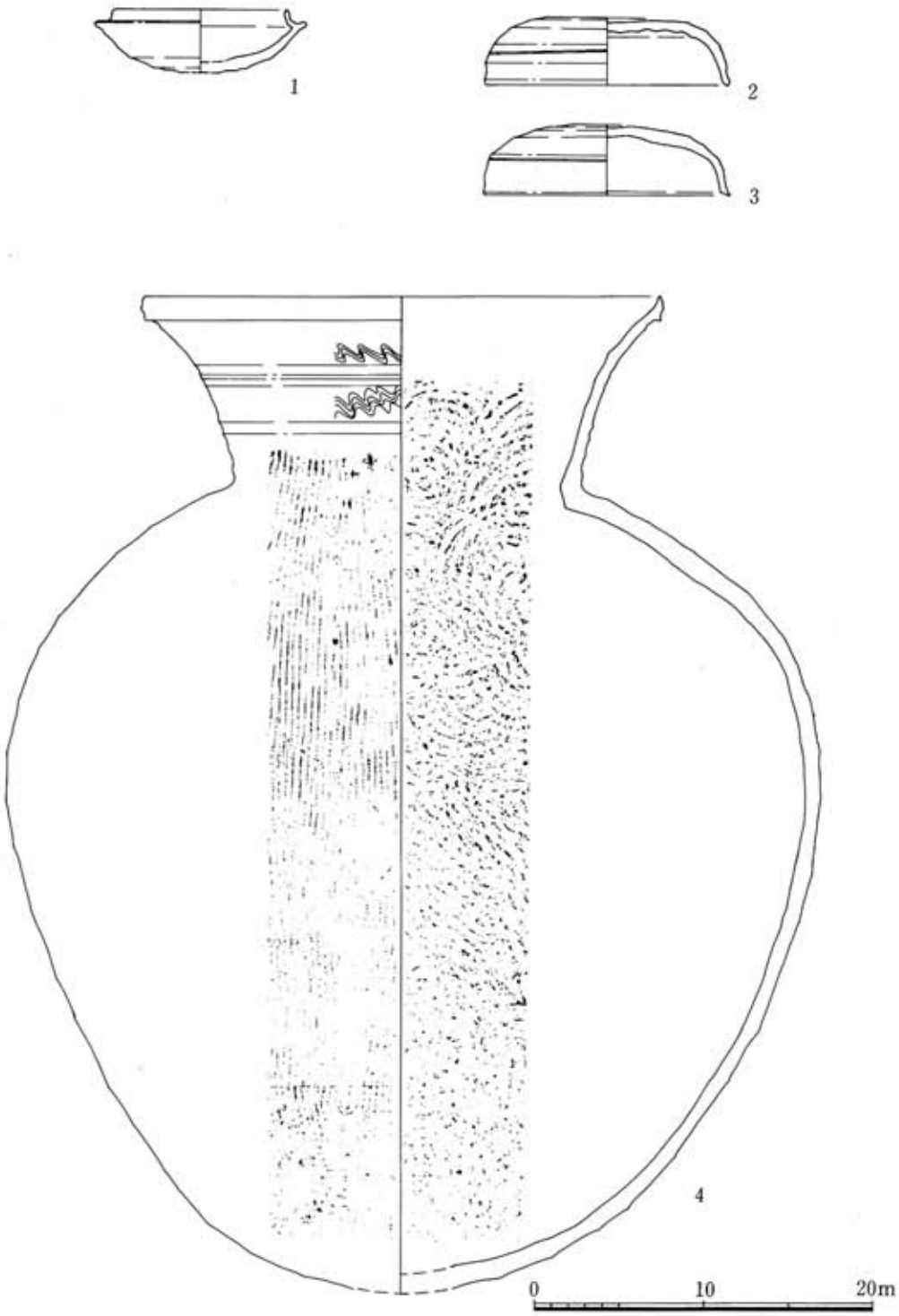


Fig. 174　ＳＴ006・007古墳出土須恵器実測図

と，後でナデ調整を施すもの14～16がある。

蓋Ⅱb（9～11）　口径10～11cm内外のもの。体部から口縁へ移る所でほぼ垂直に屈曲するもの。内外面ヨコナデ，天井部はヘラケズリをそのまま残すもの9・10，後にナデ調整を施すもの11がある。

杯（Fig. 175—19～38，PL. 106）

形態的にA・Bに大別し，Bは底部の調整によってa・bに細分した。

杯A（19）　口径12.2cm，器高3.8cm。器高に対して口径が大きく平べったい形をしている。立ち上がりが高い。内外面ともにヨコナデ，ナデ，底部はヘラケズリ。

杯Ba（20，21，23，24，26，29～31，33，37）　口径は10cm内外であるが10cm未満のものが多い。立ち上がりは低く，底部はヘラ切り離しのまま。内外面ともにヨコナデ，ナデ。

杯Bb（22，25，27，28，32，34～36，38）　形態はBaと同じであるが，底部はヘラ切り離しの後にヘラケズリを施している。

壺（Fig. 176—40・42，PL. 107）

形態的にA・Bに大別される。

壺A（40）　口径9.0cm。体部は胴が張り，頸部は内湾気味に立ち上がり口縁部でやや外反する。体部と頸部の境に1条の沈線がめぐる。内外面ともにヨコナデ，ナデ。

壺B（42）　長頸壺で体部を欠く。口径10.3cm。頸部から口縁部にかけてやや外湾気味に立ち上がる。内外面ともにヨコナデ。

甕（Fig. 176—39）

体部を欠く。口径8.4cm。口縁はくの字に外反し，端部が突帯状に肥厚する。提瓶の可能性がある。

甑（Fig. 176—41・43・44，PL. 107）

41は体部上半を欠く。体部最大径20cmで大型の部類に入る。体部中位よりやや上に2条の沈線が入る。体部内外面ともにヨコナデ，底部はヘラケズリ。44は口縁端部を欠く。楕円形の体部から長い頸部が外反し，口縁部が内傾気味に外反する。体部中位よりやや上，頸部の中位，頸部と口縁部の境に沈線がめぐる。内外面ヨコナデ，ナデ。体部外面下半はヘラケズリ。頸部内面にシボリ痕が残る。43は頸部から上を欠く。体部最大径8.1cm。体部よりやや上に沈線がめぐり，その上に櫛状工具による刻文が入る。内外面はヨコナデ，ナデ。体部外面下半はヘラケズリ。

高杯（Fig. 176—45～48，PL. 107）

形態からA・Bに分類される。

高杯A（45・46）　やや深い杯部にハの字に広がる短い脚がつく。45は口径9.2cm，裾部径7.8cm，

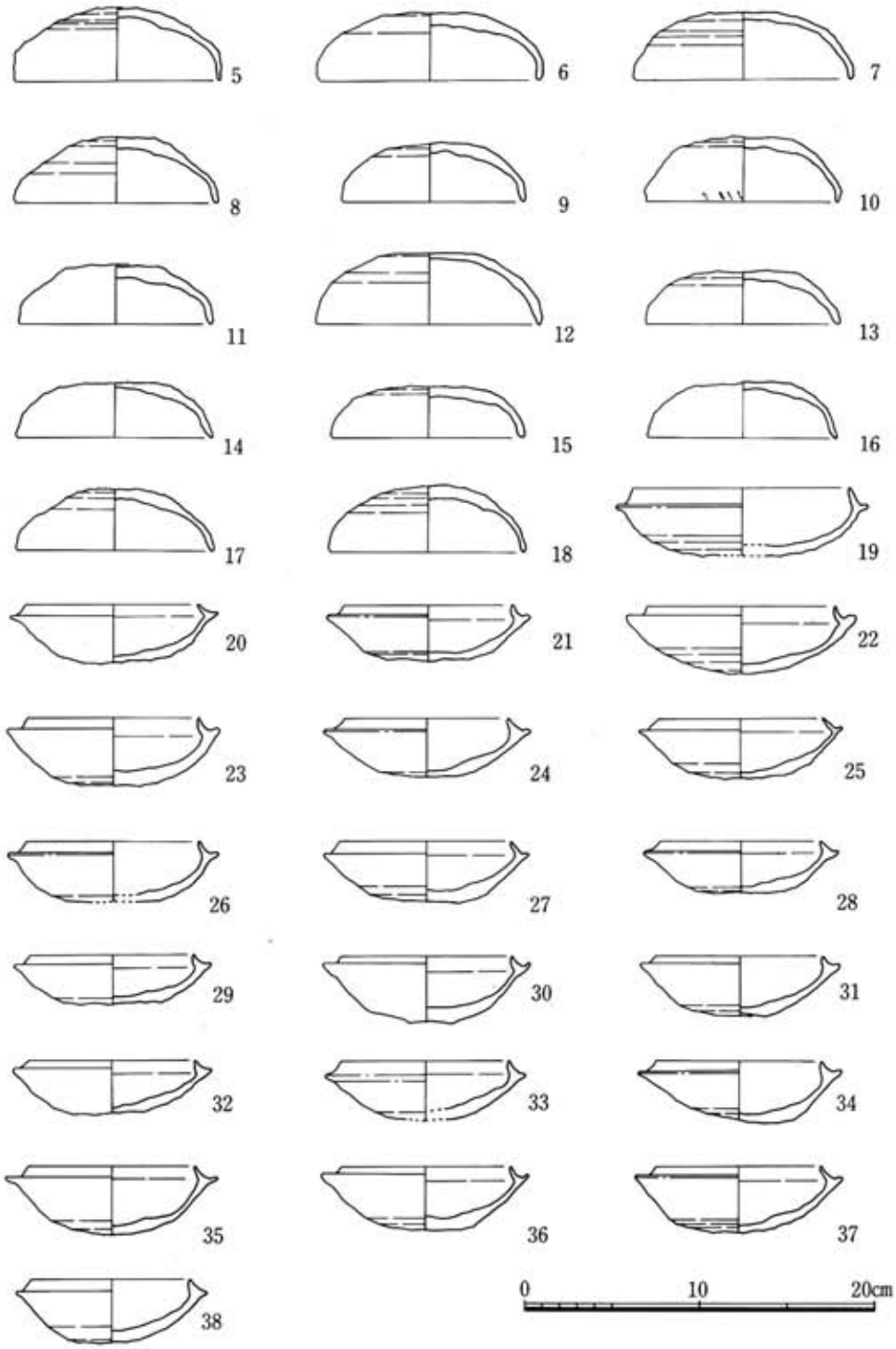


Fig. 175　ＳＴ012古墳出土須恵器実測図(1)

器高9.0cm，杯部の底部外面はヘラケズリ，他はヨコナデ，ナデ。46は推定口径10cm，裾部径8.4cm，推定器高10.6cm。杯の底部外面はカキメ調整，他はヨコナデ，ナデ調整。脚部内面にしぼり痕を残す。

高杯B（47・48）　長脚の高杯である。47・48ともに小破片で全体は不明である。48は脚部に2条の沈線とカキメ調整が入る。

提瓶（Fig. 176—49，PL. 107）

把手が退化し，瘤状の突起を残すのみになっている。口径5.4cm，器高15cm。体部にヘラ記号がある。

土師器

蓋（Fig. 177—50・51，PL. 110）

51は天井部のつまみが剝脱している。口径12.9cm，内外面ともにヘラミガキ。50は丸い天井

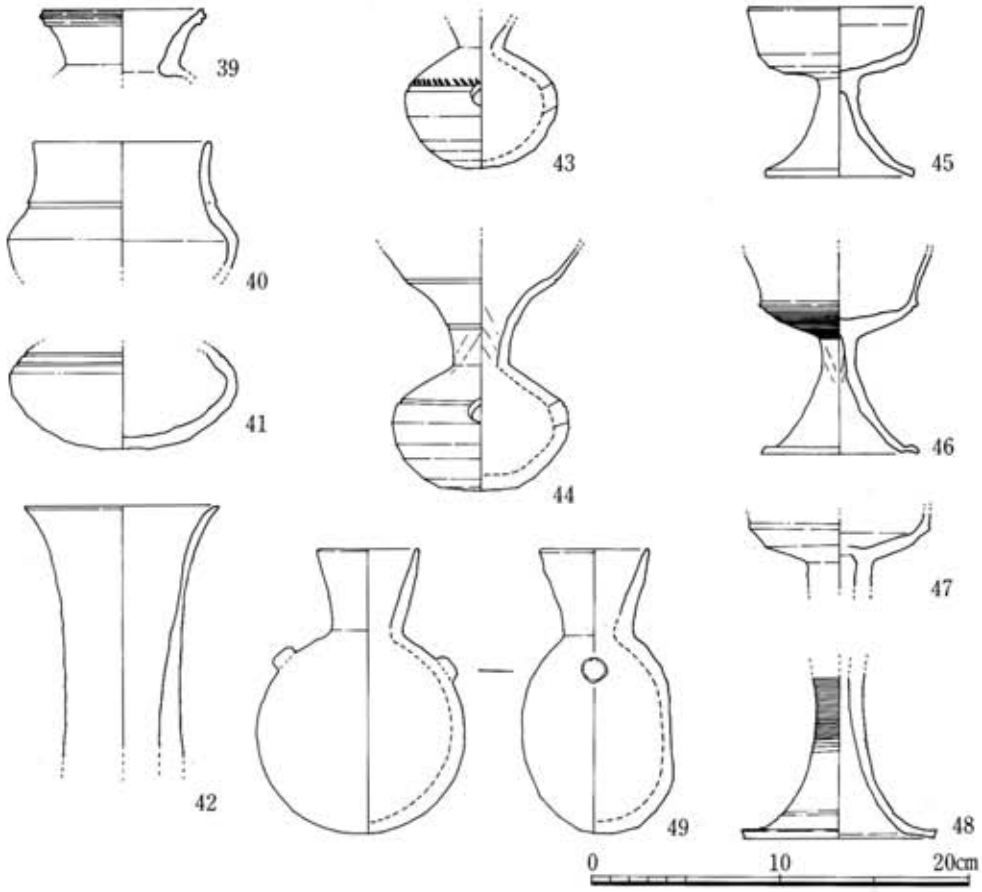


Fig. 176　ST012古墳出土須恵器実測図(2)

部をもつ。口径13.0cm，器高3.5cm。内外面ともにヘラミガキ。

杯（Fig. 177－52～56，PL. 110）

口縁の立ち上がりの有無によってA・Bに大別する。

杯A（52・53）　丸底の底部にやや内傾する立ち上がりをもつ。**52**は口径11.5cm，**53**は10.7cm。体部内外面はヘラミガキ，立ち上がりはヨコナデ。

杯B（54～56）　丸味をもった体部から口縁が直立気味に立ち上がるもの**54・55**，体部からゆる

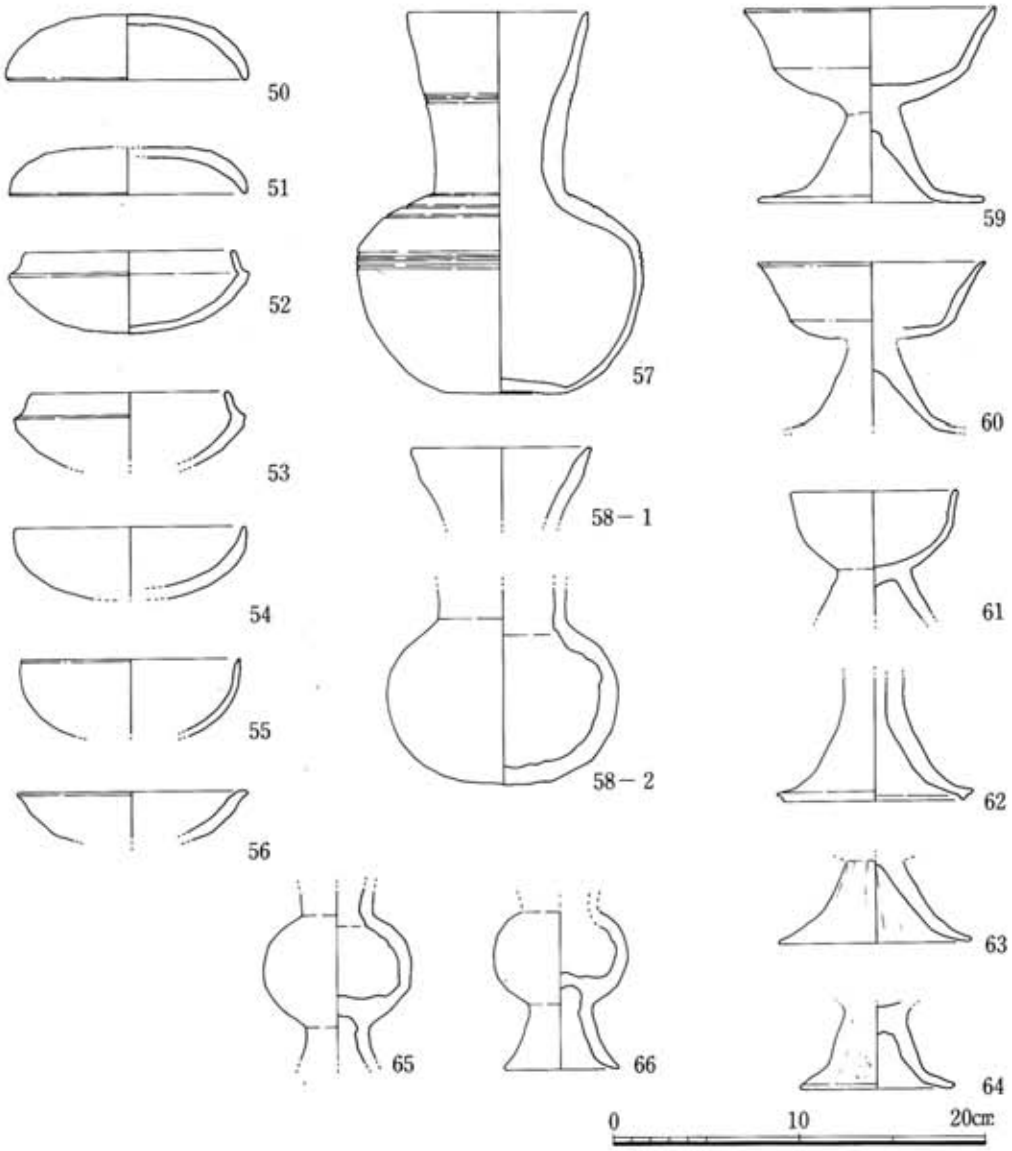


Fig. 177　ＳＴ012古墳出土土師器実測図

やかに外反し端部が外側につまみ出されるもの56がある。54・55は内外面ともにヘラミガキで一部ナデが入る。54は黒褐色の顔料を内外面ともに塗ってある。

壺（Fig. 177—57・58, PL. 110）

形態からA・Bに分類される。

壺A（57）　やや上げ底気味の底部と，肩の張った体部をもち，口縁はやや外反しつつ直線的に立ち上がる。頸部と口縁部との境，肩部，体部中位に沈線がめぐる。口径9.8cm，器高20.2cm，体部下半はヘラケズリ，他はヨコナデ，ナデ。

壺B（58）　丹塗り磨研の壺。円形の体部に外反する口縁をもつ。58－1と58－2は同一個体であろう。外面は丹塗り磨研，内面はヨコナデ，ナデで丹塗りはない。

小型台付壺（Fig. 177-65・66, PL. 110）

円形の体部にハの字に広がった脚部とくの字に外反する口縁がつく。全体に指による調整が

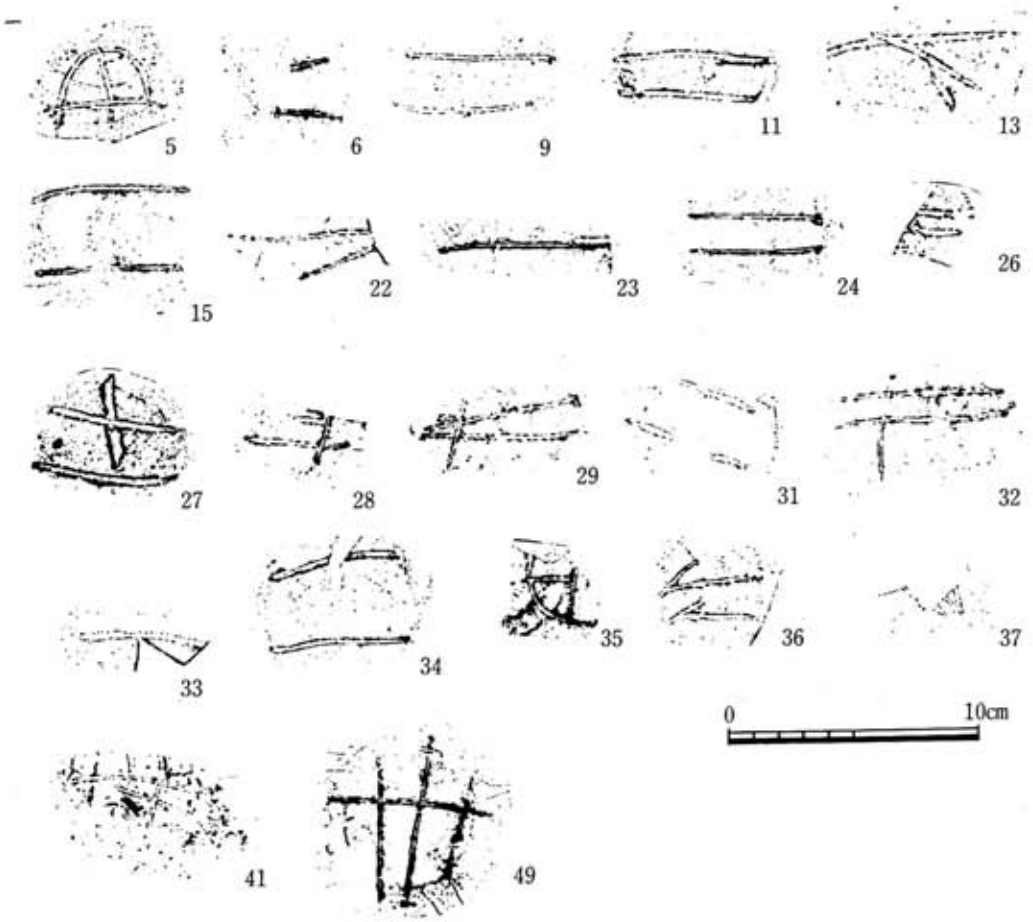


Fig. 178　ST012古墳出土須恵器ヘラ記号拓影

著しく，指押さえ痕が残る。脚部内面はタテ方向のヘラケズリ。

高杯（Fig. 177-59～64，PL. 110）

杯部の形態でA・Bに分類される。

高杯A（61）　杯の体部と底部の境に稜をもたないもの。体部内外面ともにヨコナデ，ナデ。脚部内外面ともにタテ方向のヘラケズリ。

高杯B（59・60）　杯の体部と底部の境に稜をもち，脚部は短くハの字に開く。脚の裾はさらに開き59のようにほぼ水平になるものもある。杯部内外面はヨコナデ，ナデ。底部はヘラケズリ。脚部内外面はタテ方向のヘラケズリ，裾部はヨコナデ。

その他，62～64は脚のみである。62は比較的長い脚をもつ。63・64は短脚でハの字形に開く。内外面ともにタテ方向のヘラケズリ。

ＳＴ013古墳出土土器（Fig. 179～182，PL. 108～110）

羨室と墓道から須恵器，土師器が多量に出土している。

須恵器

蓋（Fig. 179—67～82，PL. 108）

かえりの有無，つまみの有無によってA・B・C・Dに大別し，かえりの形状によってBをBa・Bbに、CをCa・Cbに細分した。

蓋A（67・68）　かえりをもたないものである。口径12cm，器高3.0cmを越えるものが多い。天井部はヘラケズリ，後で一部ナデ。他はヨコナデ，ナデ。

蓋Ba（69～72）　かえりがあり，つまみをもたないもので，かえりが受部より高くなるもの。最大径10～11cmのものが多い。天井部はヘラ切り離しのまま。他はヨコナデ，ナデ。

蓋Bb（73～78）　かえりがあり，つまみをもたないもので，かえりが受部より低くなるもの。最大径10～11cm。天井部はヘラ切り離し。他はヨコナデ，ナデ。

蓋Ca（79・80）　かえりがあり，つまみをもつもので，かえりはBbより低くなるもの。口径13～15cm。天井部はヘラケズリ，他はヨコナデ，ナデ。

蓋Cb（81）　かえりがあり，つまみをもつもので，かえりの痕跡を残すだけのもの。口径13～15cm。天井部はヘラケズリ，他はヨコナデ，ナデ。

蓋D（82）　かえりが消失し，口縁が嗽状になったもの。口径16cmを越える。天井部はヘラケズリ，他はヨコナデ，ナデ。

杯（Fig. 179—83～97，PL. 108）

立ち上がりをもつもの，もたないもの，高台が付くもの付かないものでA・B・C・Dに大別し，B・Cを法量でⅠ・Ⅱに細別した。

杯A（83）　低く短い立ち上がりをもつもの。口径11cm。底部はヘラケズリの後にナデ，他

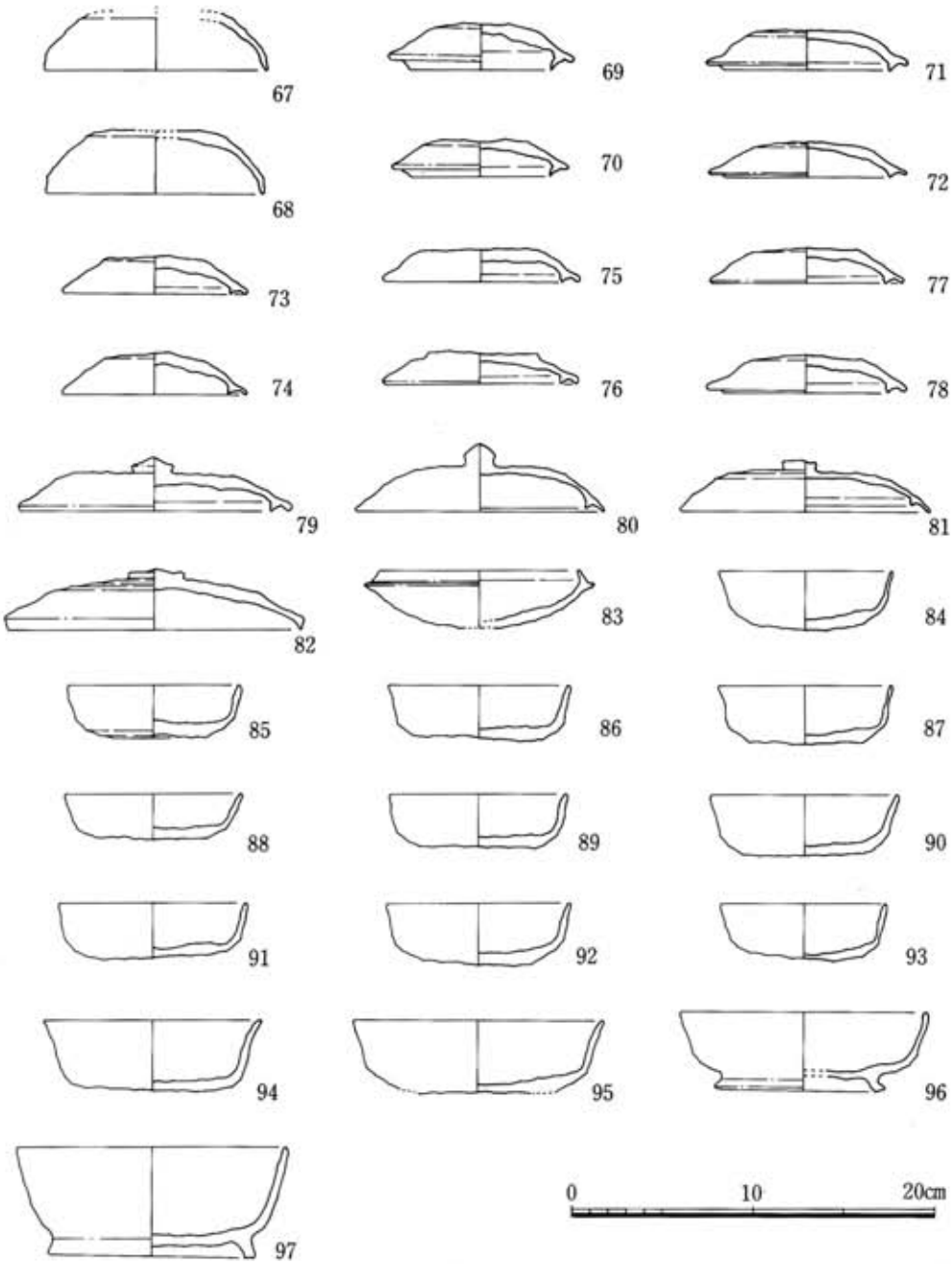


Fig. 179　ＳＴ013古墳出土須恵器実測図(1)

はヨコナデ，ナデ。

杯B I (94)　立ち上がりと高台がないもので口径12cm前後のもの，器高も4cm前後と深い。底部はヘラ切り離しの後にナデ，他はヨコナデ，ナデ。

杯B II (84～93)　立ち上がりと高台をもたないもので，口径10cm前後，器高3.0cm前後のも

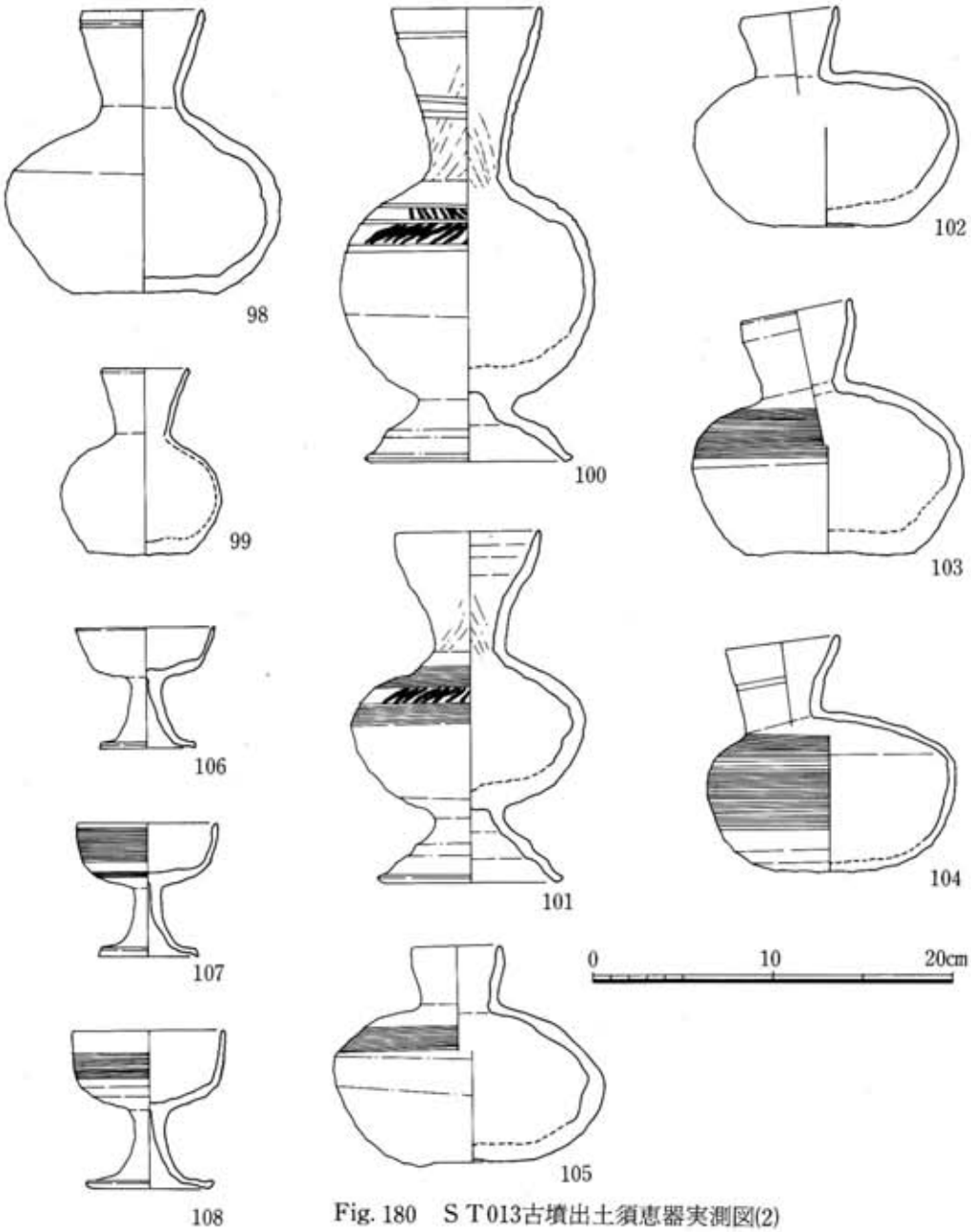


Fig. 180　ST013古墳出土須恵器実測図(2)

の。底部はヘラ切り離しをそのまま残すもの，後にヘラケズリをするもの，最後にナデを施すものがある。

杯CⅠ（97）　高台が付くもので，口径15cm前後，器高6cm前後のもの。高台は高く，体部から口縁へは直線的に立ち上がる。

杯CⅡ（95・96）　高台が付くもので，口径14.0～15.0cmのもの。高台はCⅠに比べて低く外へ開く。

壺（Fig. 180—98～101，PL. 109）

脚部の有無によってA・Bに分類し，法量によってAをAⅠ・AⅡに細分した。

壺AⅠ（98）　底部は平底で，口縁部は胴張りの体部から直線的に外反する。口径6.7cm，器高15.7cm。体部下半はヘラケズリ，他はヨコナデ，ナデ。

壺AⅡ（99）　AⅠと同タイプであるが，口径4.7cm，器高10.4cmと小型のものである。

壺B（100・101）　台付壺である。ハの字に開いた脚部に円形の体部がつく。頸部は直線的に広がり，口縁部でやや内傾する。100は口径8.5cm，器高25.2cm，101は口径8.2cm，器高19.4cm。100は肩部に櫛描列点文と沈線，口縁部に沈線が，101は櫛描列点文とカキメが施される。体部外面下半はヘラケズリ，他はヨコナデ，ナデ。頸部内面にしぼり痕を残す。

高杯（Fig. 180—106～108，PL. 109）

ハの字に開く短い脚部に無段の杯部がつく小型の高杯である。口径7.8～8.6cm，器高6.7～8.8cm。杯部外面下半はヘラケズリかカキメ調整。107は体部外面全体にカキメ，他はヨコナデ，ナデ。脚部内面はしぼり痕を残す。

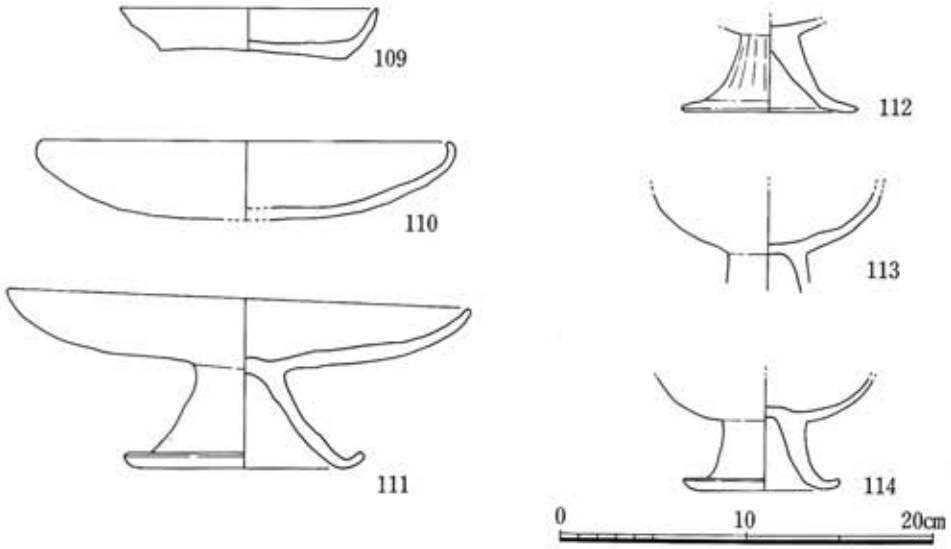


Fig. 181　ST013古墳出土土師器実測図

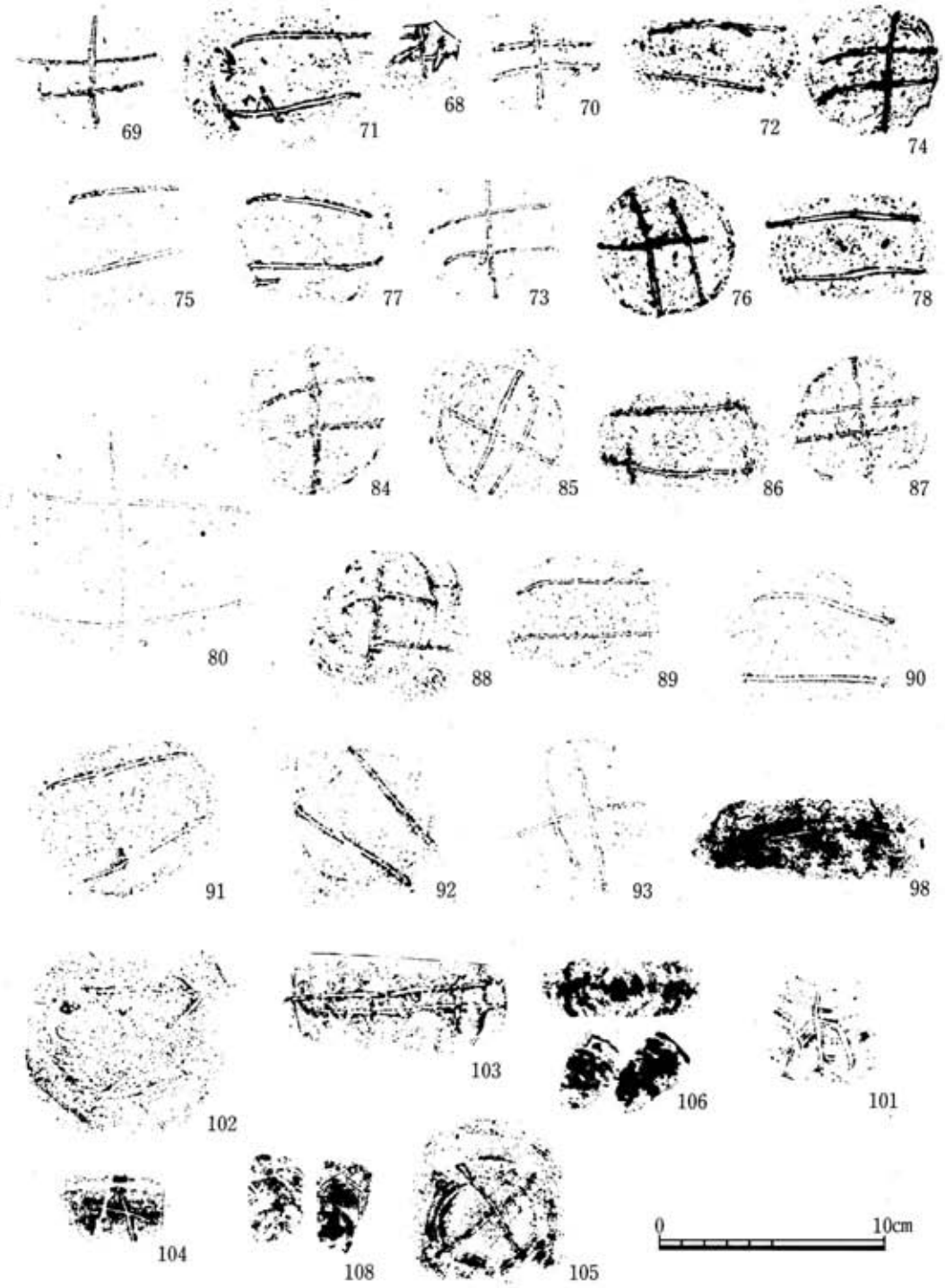


Fig. 182　ＳＴ013古墳出土須恵器ヘラ記号拓影

平瓶（Fig. 180—102～105, PL. 109）

肩の張った体部から口縁部にかけてやや内湾気味に開く。底部はやや上底気味の平底である。体部外面下半はヘラケズリ，他はヨコナデ，ナデ，103・104・105は肩部にカキメ調整。

土師器（Fig. 181, PL. 110）

杯（109）　口径13.8cm。底部はヘラケズリ。他はヨコナデ，ナデ。

皿（110）　口径21.9cm，器高4.2cm。底部から体部にかけてゆるやかに内湾し，口縁部は短く直立する。内外面ともヘラミガキ。

高杯（111～114）

杯部の形態からA・Bに分類される。

高杯A（111）　杯部は皿状で口縁部がゆるやかに内傾する。脚部は直線的に広がり，裾部が上方にはね上がる。口径24.8cm。内外面ともにヨコナデ，ナデ。

高杯B（112～114）　短い脚部と椀形の杯部をもつもの。

ＳＪ001壺棺（Fig. 183—116, PL. 111）

口縁部を欠くが，くの字口縁の壺であろう。円形の体部に小さい底部がつく。底径4.2cm，体部最大径25.8cm，残存器高22.7cm。体部外面はハケメ，内面はナデ。

ＳＪ002壺棺（Fig. 183—115, PL. 111）

底部を欠く。球形の体部で，最大径は体部中位にある。頸部は短く，くの字に外反し，口縁部は直立する。頸部と口縁部の境はわずかに張り出す。口縁端部は凹状になる。口径25.2cm，残存器高46.4cm，胴部最大径43cm。体部内外面はタテ方向のハケメ，体部と頸部の境の内面はヨコ方向のハケメ，口縁部はヨコナデ。

ＳＴ008古墳溝出土壺（Fig. 185—123, PL. 111）

口径20.2cm，体部最大径31.0cm，器高32.2cm。体部はややつぶれた球形で最大径は中位にある。底部は丸底に粘土を貼りつけることによって小さい平底となっている。頸部は体部からやや内湾気味に直立し，さらに，ほぼ90°外折して外反気味に立ちあがる口縁へ続く。装飾としてヘラ状工具による刻目が入った三角凸帯が肩部に，４個一対の円形浮文が頸部と口縁の境についている。口縁内外面には櫛状工具による波状文が施文される。体部内外面はヘラミガキ，内面はヨコ方向のハケメ調整。頸部から口縁にかけては内外面ともにヨコナデ調整。

西丘陵南斜面一括出土土器（Fig. 183—117～120, 184—121・122, PL. 111）

西丘陵調査区の南側斜面の表土剝ぎ作業中に土師器の大型壺形土器の破片が多量に出土した。遺物は表土層の黒褐色土層中にばらばらの状態で入っており，ミカン園造成中に出土した土器を集めて一括で棄てた状態であった。

口縁部を中心とした形態からA・B・C・Dに分類した。

壺A（118・121）　口径40cm前後の大型二重口縁壺である。肩部が張り，最大径は体部上半にある。頸部は短く，口縁はほぼ直立する。頸部と口縁の境は外に張り出し，特に118は断面台形の突帯状にめぐる。121は体部内外面ともにタテ方向のハケメ調整であるが，肩部は1条の横方向のハケメが入る。口縁部はヨコナデ，118は肩部に数条の沈線が入り，沈線間は綾杉文で充填されている。口縁部外面には円形刺突文が入る。

壺B（122）　Aに比べてやや小型の二重口縁壺である。Aほど肩が張らず，最大径が体部中位にある卵形の体部をもつ。頸部は短く，口縁は直立する。頸部と口縁の境は外へつまみ出され，突帯状になる。底部は平底気味の丸底である。口径26.7cm，器高61.4cm，最大径47cm。体部外面はハケメ，内面はヘラケズリ，口縁内外面はヨコナデ。

壺C（119）　最大径45cmに対して口径20cmと口径が小さい。口縁は他に比して高く，頸部と口縁部の境に張り出しがない。体部外面ハケメ，内面ヘラケズリ，口縁部，頸部内外面はヨコナデ。

壺D（117）　口縁部を欠くが小型の壺である。小さい平底で，内外面ハケメ。

西丘陵表土層出土土器（Fig. 185—124～138, PL. 111）

壺（Fig. 185—124～130, PL. 111）

いずれもＳＴ008古墳溝から出土した壺と同形態の土器である。ややつぶれた球形の体部に直立した頸部と外反する口縁がつく土器である。124～126は口縁部である。124は頸部と口縁部の境の角度がゆるやかで櫛描波状をもたない点など新しい要素をもつ。125・126は口縁外面のみに櫛描波状文をもつ。127・128・129は体部上半から頸部にかけてのものである。ＳＴ008古墳の壺と異なって肩部に櫛描沈線，波状文をもつ。

甕（Fig. 185—131～133）

131・132はくの字に外反する口縁をもつ。口縁外面と体部内外面はハケメ調整。133は小さな平底をもつものである。体部外面下半はタタキを後にナデで消している。体部内面はナデ調整。

鉄器

ＳＴ007古墳出土鉄鏃（Fig. 186—139・140, PL. 112）

2点出土した。140は鋒部を欠くが139と同様に尖根式の両丸造柳葉式に属するものであろう。

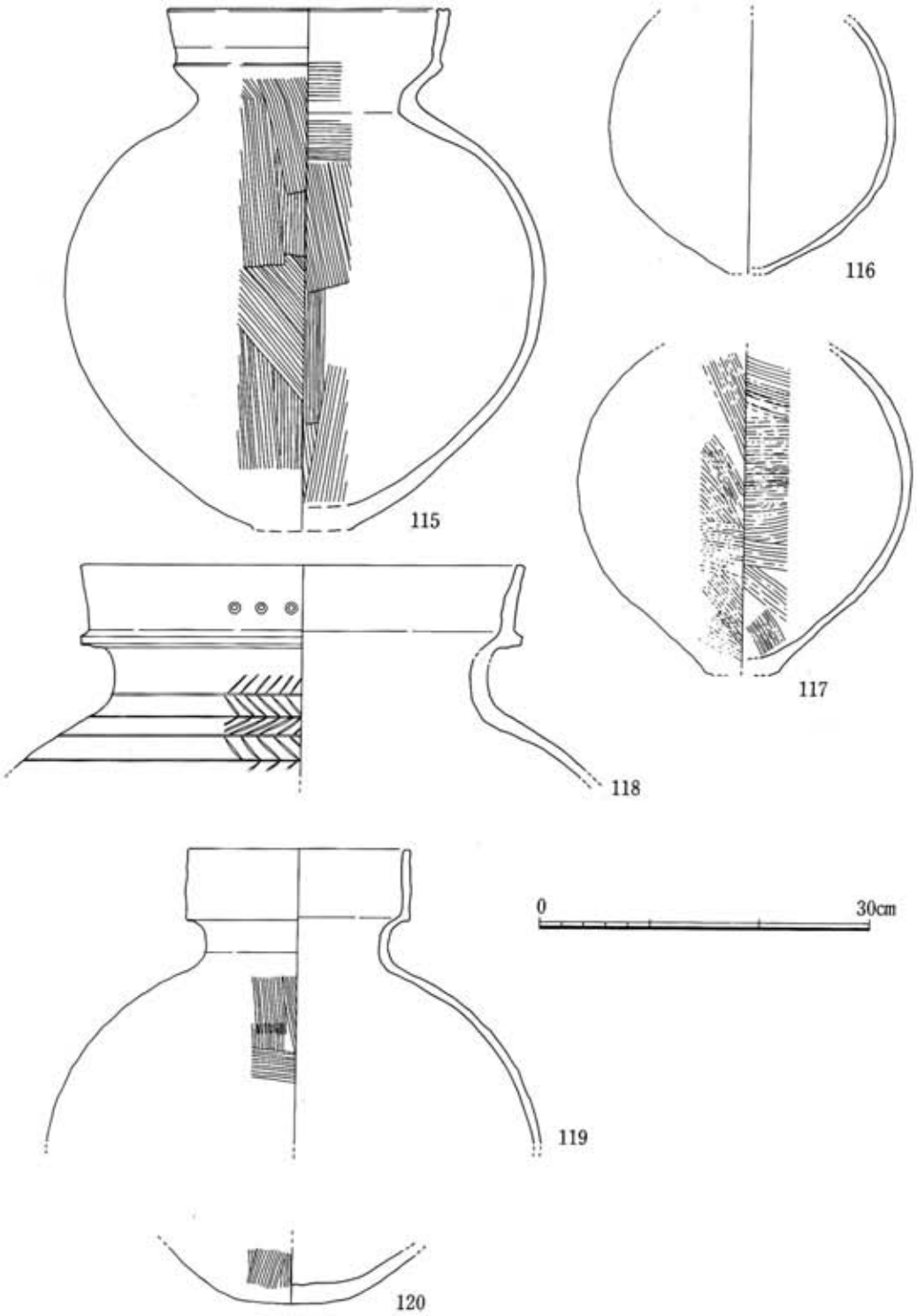


Fig. 183　西丘陵南斜面出土一括土師器(1)・ＳＴ001・002壺棺実測図

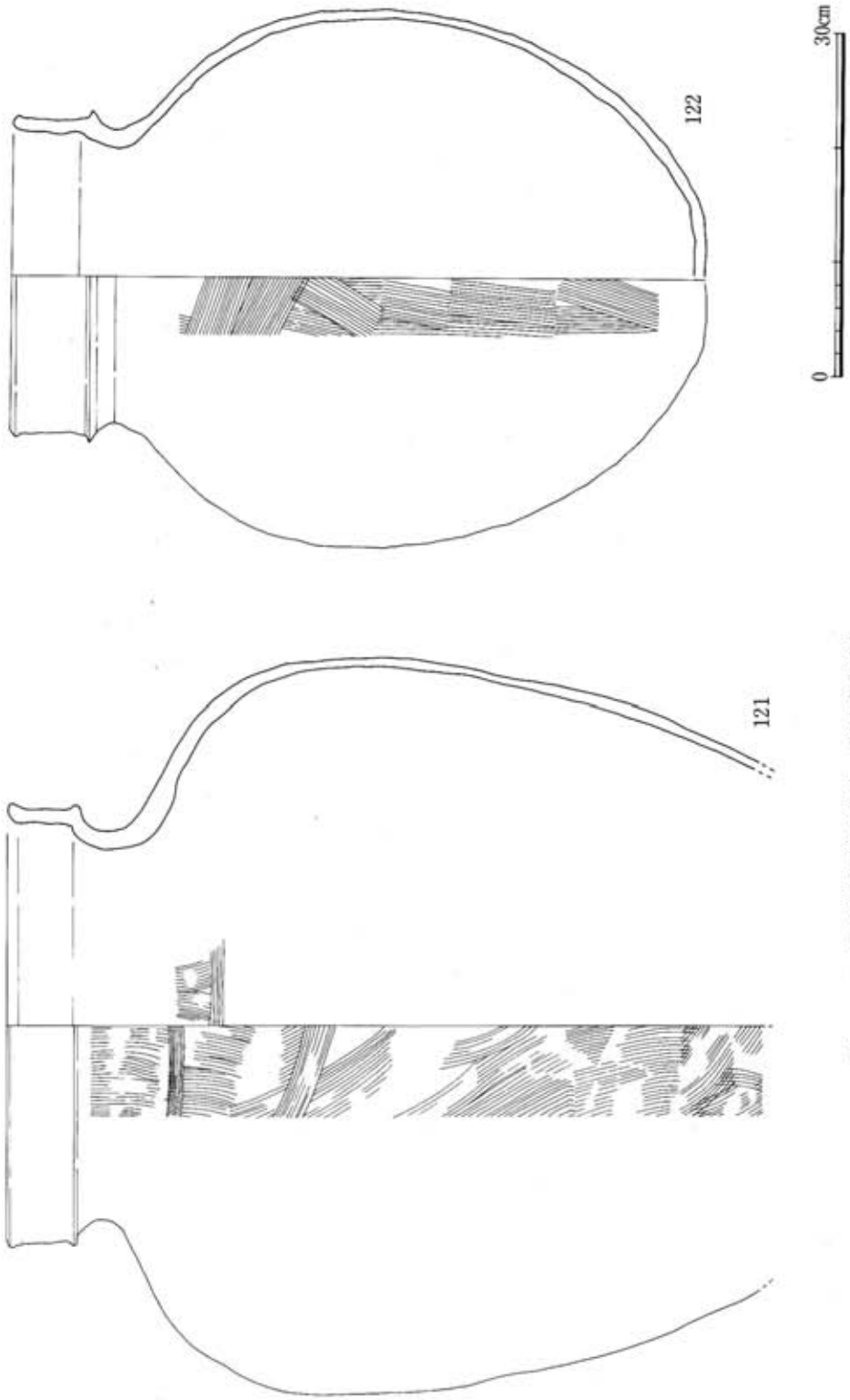


Fig. 184 西丘陵南斜面出土一括土師器(2)

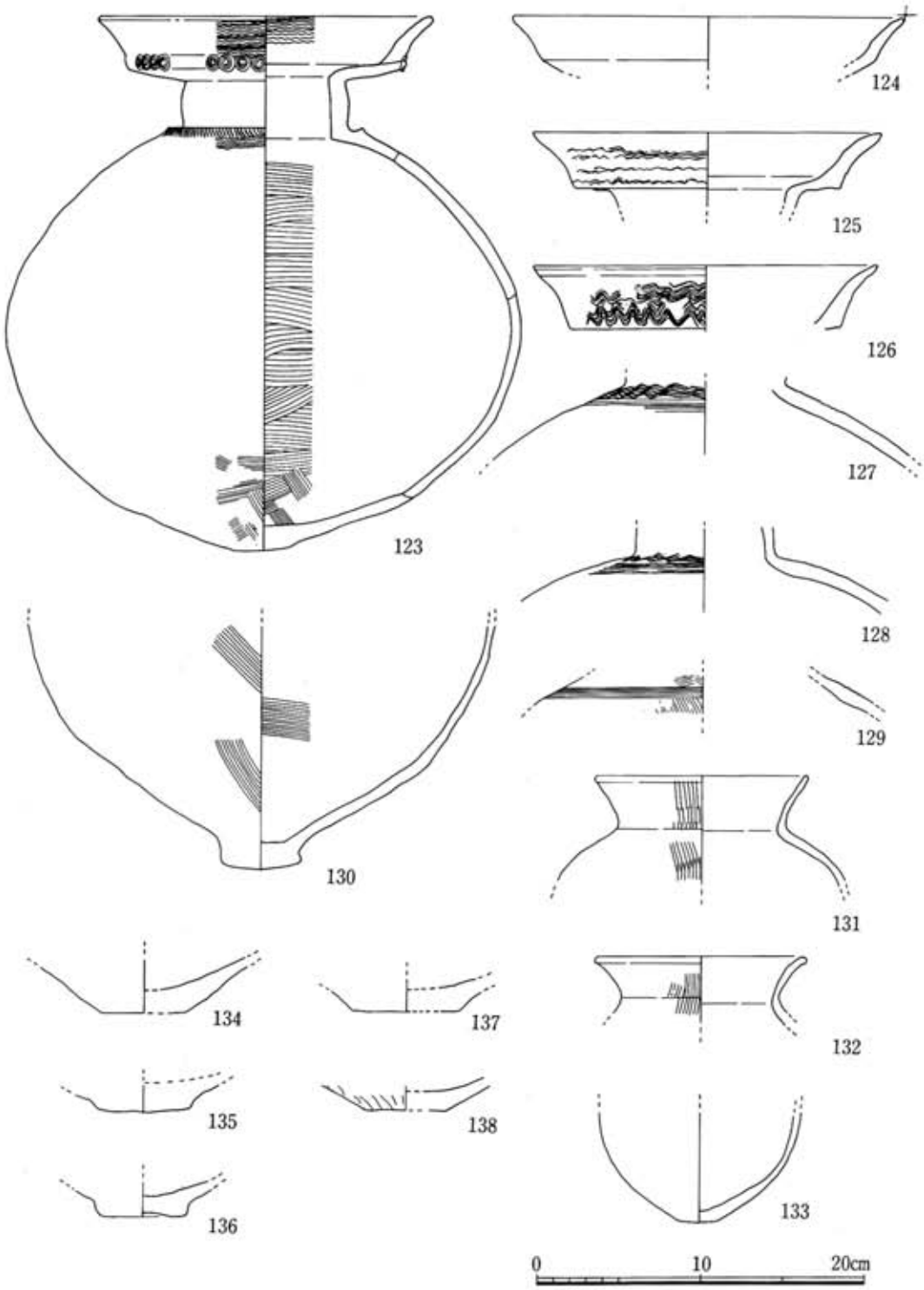


Fig. 185　ＳＴ008古墳溝・西丘陵表土層出土土師器実測図

ＳＴ007古墳出土耳環（Fig. 186—143・144, PL. 112）

２点出土した。**143**は金箔が剝離しているが**144**は残りが良好である。**143**は環部径1.7cm×1.6cm, 断面径0.3cm。**144**は環部径1.4cm, 断面径0.2cm。

ＳＴ008古墳出土鉈（Fig. 186—148, PL. 112）

中程からＵ字形に折れ曲がっている。先端刃部は凹状に形成され, 身部よりやや幅が広くなっている。全長27.6cm, 身幅0.5～0.9cm, 断面は矩形である。

ＳＴ009古墳出土鉄器（Fig. 187—149～153・188—155～187, PL. 112・113）

鉄剣（**152・153**）棺の左側に鋒先を頭位方向に向けて２点出土した。**152**は全長30.1cm, 身長23.3cm, 茎長6.8cm, 身幅2.5～3.0cmでやや先細りとなる。身部の断面はレンズ状で厚さ0.5cmである。茎部の断面は矩形で厚さ0.3cm, 目釘穴が１個ある。**153**は鋒部先端と茎基部を欠

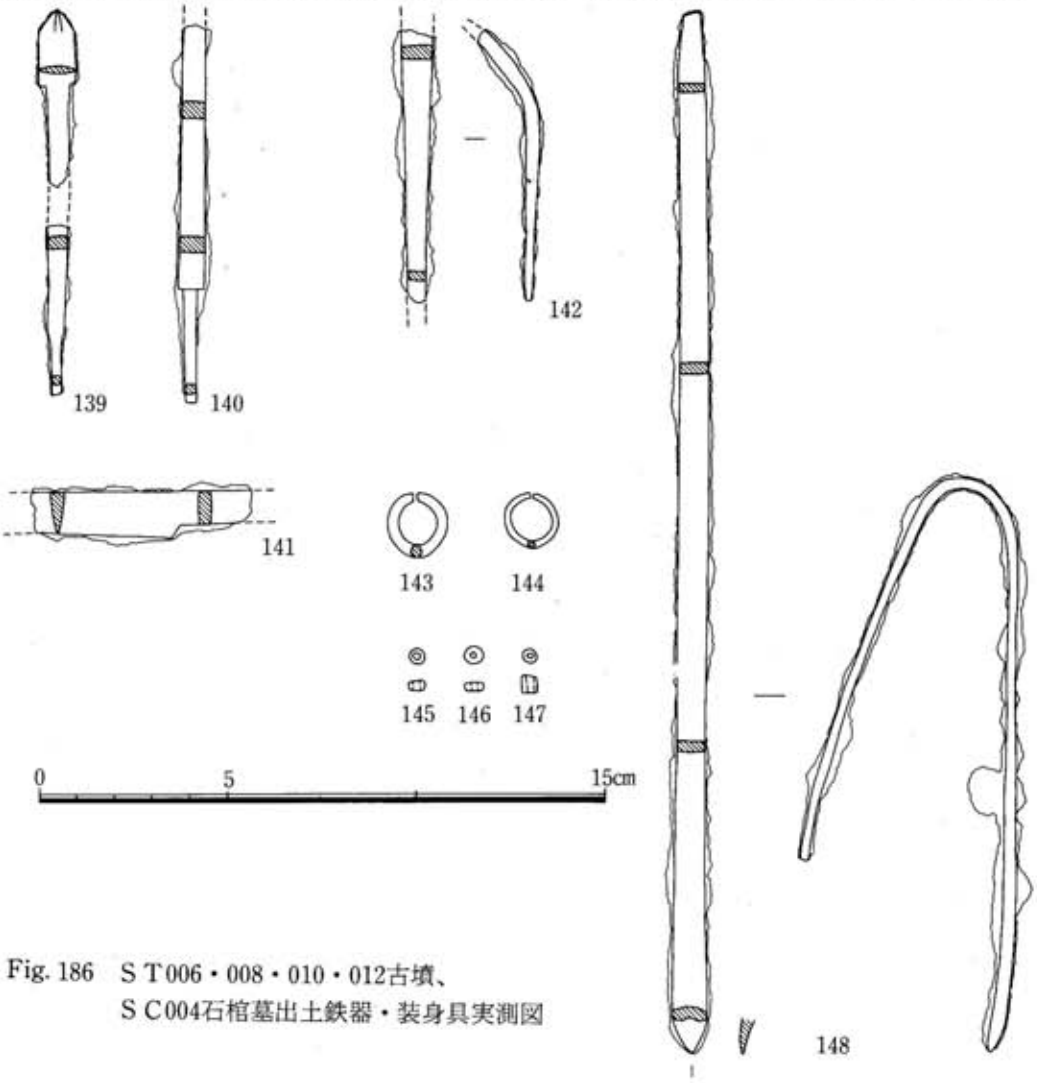


Fig. 186　ＳＴ006・008・010・012古墳、
ＳＣ004石棺墓出土鉄器・装身具実測図

いている。残存全長33.2cm，最大身幅3.6cm，身部の断面はレンズ状で厚さ0.6cmである。茎部の断面は矩形で厚さ0.3cm，布片が一部付着している。

鉄斧（149・150） 150は両側を折り曲げてつくった着装部をもつ袋状鉄斧である。全長10.6cm，最大幅4.75cmである。149は両刃の板状鉄斧で基部を若干欠いている。残存長20.4cm，最大幅5.0cm，最大厚さ0.9cmである。

鍬先（151） 長方形の鉄板の左右を折り曲げて着装部をつくったものである。全長5.2cm，最大幅9.2cm，厚さ0.3cmである。

鉄鏃（155～187）

形態からA・B・C・Dに分類される。

A（155・156） 茎を欠くが透し入りの広葉形大型鏃である。鋒部先端から基部，茎部にかけてゆるやかな曲線で連続している。身長は11～13cm程度，身幅は4.1cmと4.55cm，断面はレンズ状になる。窓孔は舟形で4.05cm×1.55cm，3.25cm×1.15cmである。

B（160～168） 柳葉式に属するもので9点出土している。鋒部先端は山形で基部は直線かやや凹状になる。身長は3.1～3.7cm，最大幅1.3～1.6cm，厚さ0.35～0.4cm。鋒部断面はレンズ状になる。茎部は木質と樹皮が付着している。

C（157～159） ノミ先式に属するもので3点出土している。鋒部先端は水平で身部両側縁は直線となる。身長は3.2～3.7cm，最大幅1.1～1.2cm。茎部に木質と樹皮が付着している。

D（169～187） 定角式に属するもので19点出土している。鋒部先端は断面菱形で山形に尖がり，基部は断面円形で筒状になる。身長2.2～2.95cm，最大幅0.75～0.9cm。基部は木質と樹皮が付着している。

鏡

ＳＴ009古墳出土鏡（Fig. 187—154，PL. 112）

鏡片の一端に穿孔されているもので，約3分の1程度が残っている。破砕面は研磨の痕跡が認められない。復元径10.9cm，外縁の厚さ0.34cm，内区の厚さ0.15cm。外縁は平縁で，外区の外側は櫛歯文帯，内側は珠文を配してある。内区はわずかしか残っておらず，鋳崩れが著しく明瞭でない。鏡式は不明であるが舶載鏡であろう。

装身具

ＳＴ009古墳出土勾玉（Fig. 188—188，PL. 113）

緑白色のヒスイ製。長さ1.5cm，厚さ0.7cm。

ＳＴ009古墳出土管玉（Fig. 188—189～202，PL. 113）

淡緑灰白色の碧玉製。1点は大型で長さ2.78cm，径0.75cm，孔径0.45cmで，13点は長さ0.7

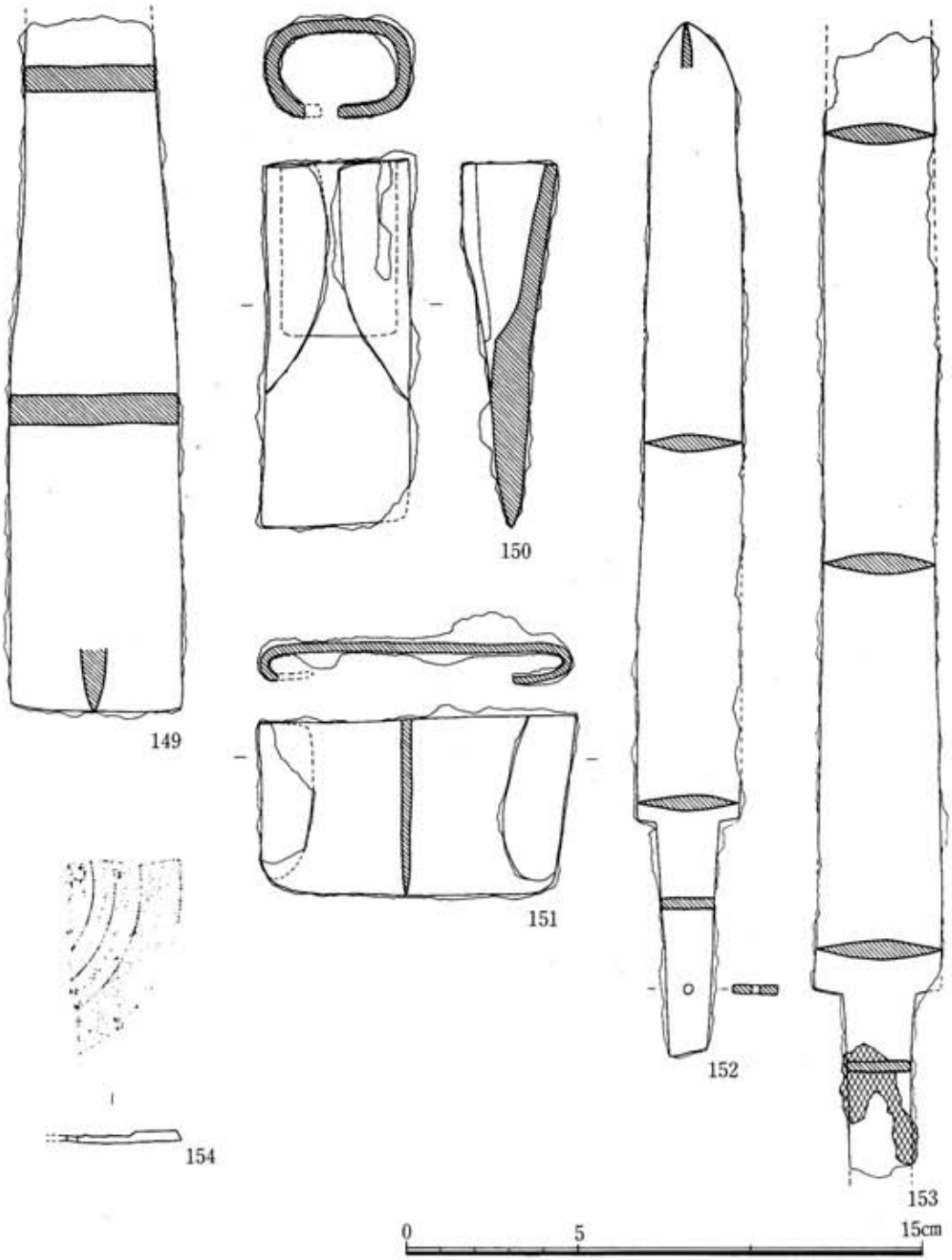


Fig. 187　ＳＴ009古墳出土鉄器、鏡実測図

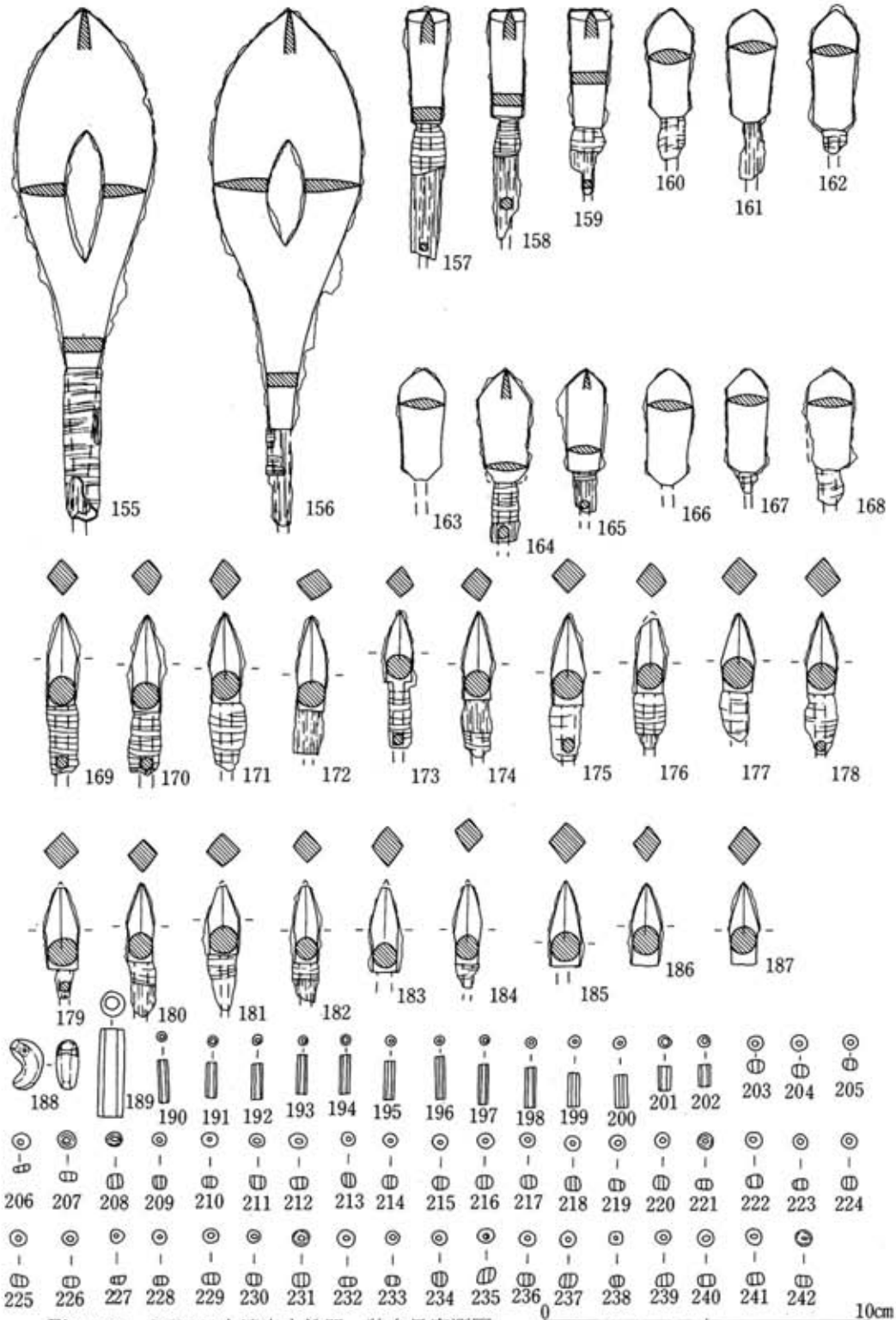


Fig. 188　ＳＴ009古墳出土鉄器、装身具実測図

Tab. 9　西一本杉遺跡ＳＴ009古墳出土玉類計測表

No.	種類	径 (cm)	高さ (cm)	孔径 (cm)	色調	備考	No.	種類	径 (cm)	高さ (cm)	孔径 (cm)	色調	備考
188	勾玉	0.3～0.7	1.5	0.3	緑白		216	小玉	0.5	0.4	0.19	青白	
189	管玉	0.75	2.78	0.45	淡灰緑		217	〃	0.49	0.4	0.2	〃	
190	〃	0.3	1.35	0.11	〃		218	〃	0.45	0.45	0.19	〃	
191	〃	0.3	1.1	0.15	〃		219	〃	0.49	0.3～0.39	0.2	〃	
192	〃	0.35	1.1	0.13	淡緑		220	〃	0.45	0.4	0.15	〃	
193	〃	0.3	1.2	0.13	緑		221	〃	0.5	0.3	0.18	〃	
194	〃	0.3	1.2	0.15	淡灰緑		222	〃	0.5	0.35～0.41	0.2	〃	
195	〃	0.3	1.2	0.12	淡緑		223	〃	0.4	0.32	0.2	〃	
196	〃	0.25	1.3	0.1	〃		224	〃	0.45	0.4	0.19	〃	
197	〃	0.29	1.2	0.15	〃		225	〃	0.5	0.25～0.4	0.19	〃	
198	〃	0.3	1.2	0.15	緑		226	〃	0.5	0.3	0.2	〃	
199	〃	0.35	1.0	0.1	淡緑		227	〃	0.45	0.2～0.25	0.12	〃	
200	〃	0.38	1.0	0.1	〃		228	〃	0.4	0.3	0.12	〃	
201	〃	0.35～0.4	0.8	0.15～0.19	〃		229	〃	0.5	0.35	0.19	〃	
202	〃	0.35	0.7	0.15	淡灰緑		230	〃	0.41	0.38	0.19	〃	
203	小玉	0.5	0.4	0.16	青白		231	〃	0.5	0.4	0.19	〃	
204	〃	0.49	0.4	0.15	青緑		232	〃	0.5	0.22～0.28	0.2	〃	
205	〃	0.46	0.31	0.15	青白		233	〃	0.4	0.3	0.2	〃	
206	〃	0.5	0.15～0.25	0.2	淡青白		234	〃	0.45	0.4	0.15	〃	
207	〃	0.5	0.25～0.3	0.2	青白		235	〃	0.5	0.45	0.19	〃	
208	〃	0.45	0.4	0.2	〃		236	〃	0.5	0.4	0.19	〃	
209	〃	0.4	0.4	0.19	〃		237	〃	0.5	0.4	0.15	〃	
210	〃	0.42	0.32	0.12	〃		238	〃	0.4	0.35	0.11	〃	
211	〃	0.45	0.39～0.41	0.2	〃		239	〃	0.51	0.39	0.19	〃	
212	〃	0.55	0.4	0.2	〃		240	〃	0.5	0.39	0.21	〃	
213	〃	0.4	0.44	0.15	〃		241	〃	0.51	0.35	0.2	〃	
214	〃	0.45	0.4	0.1	〃		242	〃	0.49	0.31～0.35	0.18	〃	
215	〃	0.45	0.4	0.1	〃								

～1.3cm，径0.3～0.35cmである。

ＳＴ009古墳出土ガラス小玉（Fig. 188－203～242，PL. 113）

青白色や青緑色のもので，径0.5cm前後のものである。40点出土している。

4．小　　結

西一本杉遺跡は大きく4世紀の墳墓群と6世紀から7世紀の墳墓群の2つに分けて考えられる。ここでは4世紀の墳墓群について1…立地，2…遺構，3…遺物，4…年代についてまとめてみたい。

1…立地　遺跡は脊振山地から南へ派生する山塊の最先端の2つの小丘陵から成り立っている。この小丘陵は東側の田手川が形成する谷，西側の山古賀の丘陵に挟まれ，南に佐賀平野を一望することができる。佐賀平野を一望すると，近年の調査によって明らかにされた4世紀

の集落遺跡である夕ヶ里遺跡，馬郡遺跡，松の森遺跡が手に取るように近くに見ることが出来る。特に，夕ヶ里遺跡までは直線で150m程で，西一本杉遺跡の墳墓群と夕ヶ里遺跡は密接な関係があったと考えられる。

2…遺構　遺構は時代，立地，形態等から大きく2群に分類される。一群は丘陵先端から丘陵頂部に立地し，若干の盛り土を持つものである。内部主体はＳＴ008古墳，ＳＴ010古墳と最も西側の丘陵頂部の1基は石棺で，ＳＴ009古墳は木棺となっている。ＳＴ008古墳は両側面と前面を地山整形することによって張り出し部を造り出していることで注目される。張り出し部の盛り土は明瞭でなかったが，本来は若干の盛り土が存在したと考えられる。ＳＴ008古墳の南側から東側には3基の石棺墓と1基の壺棺墓が存在する。このような，古墳時代前期における小墳丘の古墳と石棺墓の組み合わせは，福岡県福岡市宮の前遺跡，那珂川町炭焼遺跡などにみられる。他の一群は真中の丘陵の先端に位置する大型二重口縁の壺棺群である。これはミカン園造成のため破壊されて，その際に出土した物を一括で埋めてあったが，本来は20基前後の壺棺墓群であったと推定される。

3…遺物　土器はＳＴ008古墳の溝から出土した二重口縁壺とＳＴ008，ＳＴ009古墳の周囲の表土層から出土した土器がある。これらはくの字口縁の壺と甕の数点の他はいずれも外来系（庄内式類似）の要素の強い土器でＳＴ008古墳に関係の強いものであると考えられる。宮の前遺跡や炭焼遺跡においては弥生土器の伝統を強く残した在地の土器のみが出土しているのに対して，西一本杉遺跡においては外来系（庄内式類似）の要素が強い土器が多く出土している。大型二重口縁の壺棺群の土器は形態，土器文様から山陰地方の要素が強いものである。ＳＴ009古墳から鉄器，鏡片，玉類が一括で出土している。これらの遺物から年代を決めることは困難であるが，窓孔のある大型鉄鏃やＢタイプの鉄鏃は類例をほとんど見ないものとして注目される。

4…年代　最も古く位置づけられるＳＴ008古墳は出土土器から4世紀前半に位置づけられよう。ＳＴ010古墳とＳＣ003～ＳＣ005石棺墓はＳＴ008古墳よりやや新しく，4世紀前半～中頃に位置づけられようか。ＳＴ009古墳は遺物から時期の判断が困難であるが，ＳＴ008古墳より新しくなると考えられる。壺棺墓群は4世紀後半頃か。

かみ　み　つ　くり　はら

上三津栗原遺跡

遺跡名：上三津栗原（略号ＫＭＫ）
所在地：神埼郡東脊振村大字三津字栗原

上三津栗原遺跡

1．遺跡の概要

上三津栗原遺跡は，神埼郡東脊振村大字三津字栗原に所在する（Fig. 79)。

遺跡は，権現山（標高448m）南麓斜面から南西に向かって突出した舌状丘陵上（標高約46m～53m）に位置し，丘陵先端部（ＳＴ001古墳）と中腹部の東側斜面（ＳＴ002古墳）に，横穴式石室を内部主体とする古墳２基を確認する事ができた。

この山麓一帯には，西石動古墳群をはじめ，西一本杉遺跡・山古賀遺跡・石動二本松遺跡などの古墳群が多数見られる(Fig. 155, PL. 124)。しかし，本遺跡のある丘陵は蜜柑園造成により大きく削平され，古墳２基の他に遺構を確認する事はできなかった。

2．遺　　構

発掘調査は，丘陵先端部に位置するＳＴ001古墳周辺と，中腹部に位置するＳＴ002古墳周辺の２ヵ所にわけて実施した。

ＳＴ001古墳は，標高約50～53mの位置にある横穴式石室を内部主体とした古墳で，南々西に開口している。墳丘や天井石などが削平された状況で露出していた。羨道部や墓道は，比較的残りが良く，多数の遺物を検出する事ができた。

ＳＴ002古墳は，標高47～52mの位置にあり，南に向かって開口した横穴式石室を内部主体とする。墳丘は削平されていたが，石室は一部天井石まで残存しており，全体としての残りは良好であった。ただ，羨道の一部から墓道にかけては，以前に破壊をうけているようである。遺物は，石室内や墓道より出土したが，極めて少ない。

両古墳周辺についてもトレンチでの調査を実施したが，周溝を含めて，その他の遺構は検出されなかった。

ＳＴ001古墳（Fig. 190, PL. 114）

丘陵先端部東側斜面（標高約50～53m)に位置するＳＴ001古墳は，横穴式石室を内部主体とする古墳で南々西に開口している。天井石はすべて破壊され，石室もかなり攪乱を受け，一部敷石が残るだけである。羨室から墓道にかけての残存状況は比較的良好である。

墳丘　墳丘は，全体的に大きく削平され，周溝も確認できなかった。古墳の形態や構造・規模などは不明であるが，石室の形態から円墳と推定される。

内部主体　複室の横穴式石室で，主軸をＳ30°Ｗの方向にとる。長さ8.90m，中央幅3.72m，

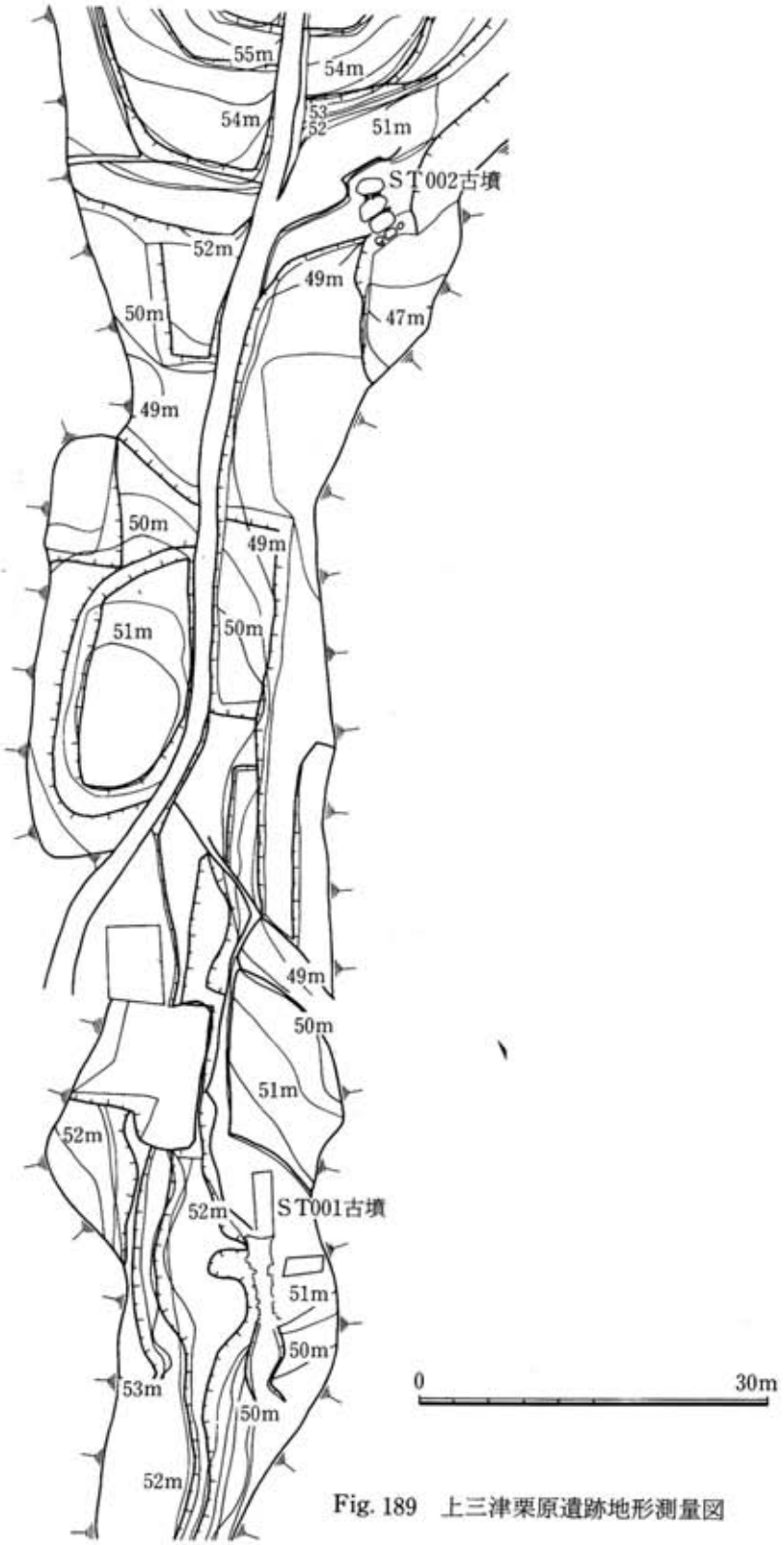


Fig. 189　上三津栗原遺跡地形測量図

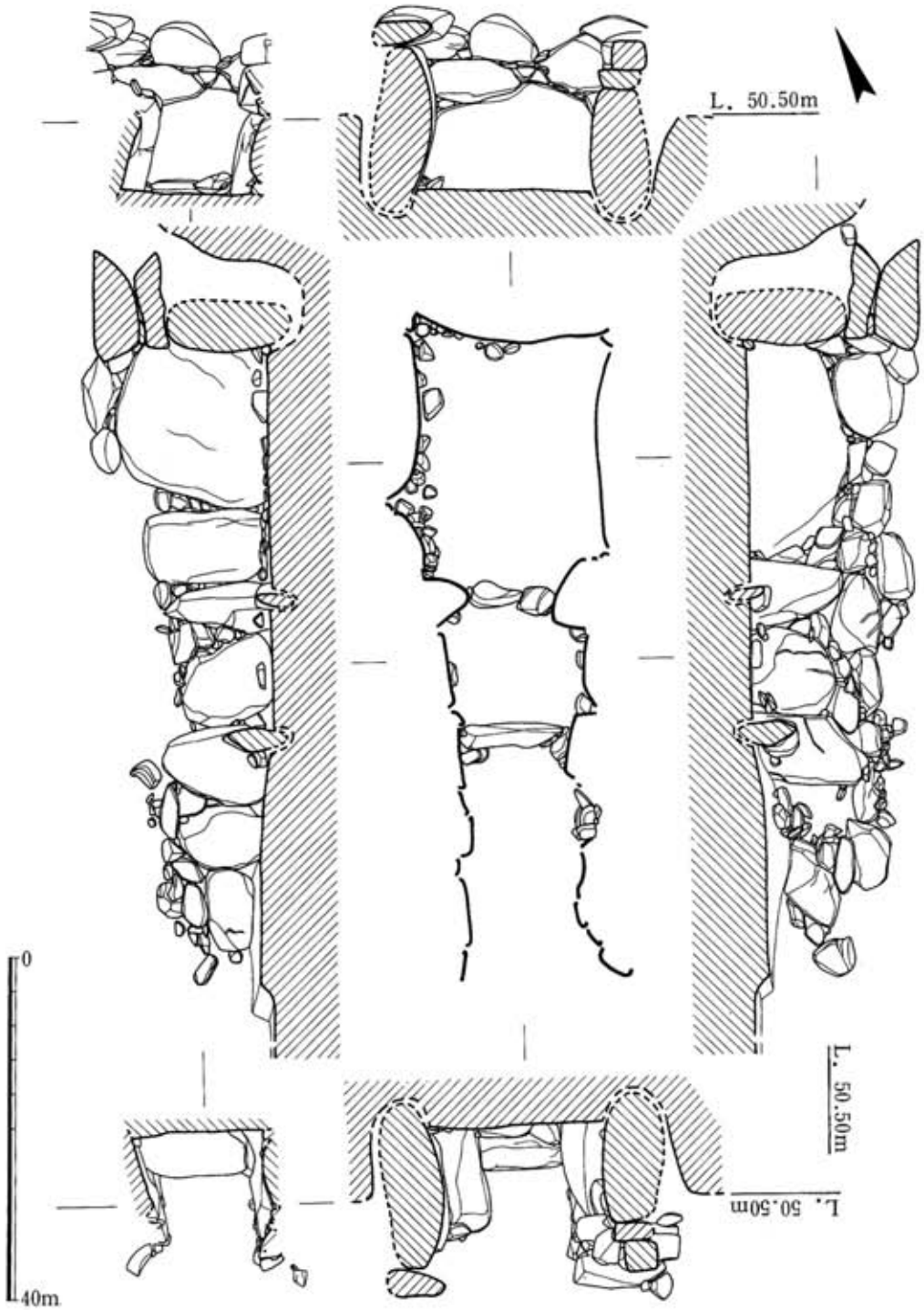


Fig. 190　ＳＴ001古墳石室実測図

深さ2.10mのやや南に狭まる隅丸長方形の掘形に，左側壁長3.06m，右側壁長2.66m，中央幅2.10m，残存高2.08mの平面長方形の玄室を造る。各壁はほとんど腰石しか残っていないが，奥壁は長さ約2.30m，高さ1.40mの花崗岩の１枚石を腰石とし，壁石は大型（１m×0.50m）の扁平な石を使用し，順次持送りによって形成している。側壁の腰石には，右側壁１個，左側壁２個の花崗岩を用いている。腰石間の隙間には，人頭大の石をつめている。敷石は，玄室左側に一部みられるだけで，旧状をとどめていない。

羨室部は，袖石と敷居石により玄室と仕切られ，中央長1.42m，幅1.60m，残存高1.50mの平面略方形をしている。羨室には通有のような羨門を意識した袖石は見られないが，羨道部との境に仕切石を置き，羨室の幅が1.60mと羨道部より僅かに広いことから区別できる。両側壁は１m×１mの一枚石を腰石とし扁平な石を順次持送って造っている。両側に一部敷石がみられるが，攪乱がはげしいため不明瞭である。

羨道は，幅約1.40mで羨室より2.80mまで残存し，両側壁とも３枚の花崗岩を腰石としている。閉塞石は，石室末端部が大きく破壊されているため確認することができなかった。

墓道は，長さ約6.8mを確認している。羨道末端部で0.1m程段落ちするが,それからは緩やかに下り，両側に大きくふくらみ，再び収縮する。墓道末端部と玄室床面との比高は末端部が５cm程低い。羨道末端部から約4.0mの部分で最大幅を有し，約3.6mを測る（Fig. 189)。

遺物は羨室右側壁周辺部から剣・刀子・三累環式柄頭などが出土した。羨道部からは鉄鏃・耳環・馬具・玉類が出土した。また，墓道の黒色土中からは，須恵器の蓋・杯・高杯・甕・壺と，土師器の高杯・杯・壺など，多数の遺物が出土した。

ＳＴ002古墳（Fig. 191・192, PL. 115・116)

丘陵中腹部東側斜面(標高約50m)に位置するＳＴ002古墳は，横穴式石室を内部主体とする。墳丘は，後世大きく削平されているため旧状を留めていない。石室は天井石を一部残して良好に残存しているが，羨道から墓道にかけては不明な部分が多い。

墳丘　墳丘は全体をほとんど削平されているため，墳形や規模・盛土の状況など不明である。石室の形態から円墳の可能性が強い。周溝も確認されていない。

内部主体　内部主体は複室の横穴式石室で，主軸をＳ21°Ｗ方向にとる。玄室および袖石に２枚の天井石が残存する。掘形は平面が長さ8.0m，幅4.5mの不整楕円形をなす。奥壁から羨門までの全長は5.5mである。玄室は長さが左側壁沿いで1.6m，右側壁沿いで1.8m，幅が約1.9mと，平面不整長方形をなす。いずれの腰石も１枚石の花崗岩を使用している。奥壁で１段，左右両側壁で２段の壁石を腰石の上に積み上げて天井石を支えている。天井石は奥壁側のもので長さ2.3m，幅1.8m，厚さ0.8mの花崗岩を使用している。２枚の天井石と壁石の相互の間隙は，拳大から人頭大の石で被覆し，さらに粘土で固めている。玄室の床面には敷石はみられな

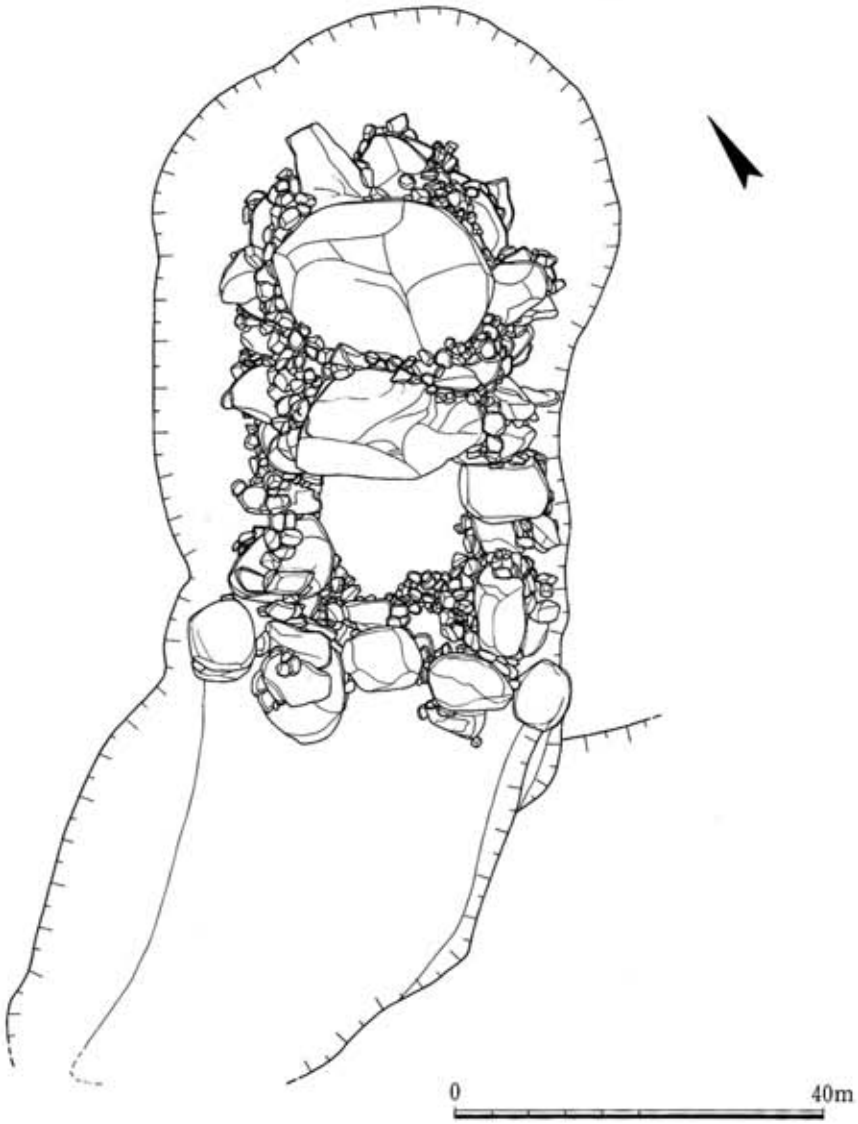


Fig. 191　ＳＴ002古墳石室実測図(1)

かった。玄室の中央部分で高さ1.9mである。

玄門は幅1.0～1.2m，高さ1.6mの大石を袖石として用いている。幅1.6mを測る。敷居石はみられなかった。

羨室は，左側壁で長さ2.1m，右側壁で2.3m，幅1.9mと，平面長方形をなす。ＳＴ001古墳と異なり，羨門として意識した両袖式の袖石を有す。羨門には仕切石が置かれ，それから内側にかけては部分的に敷石が残存する。両側壁の腰石には，それぞれ２個の花崗岩が使用される。羨室には，玄門に近い部分を除いて天井石は残存していなかった。

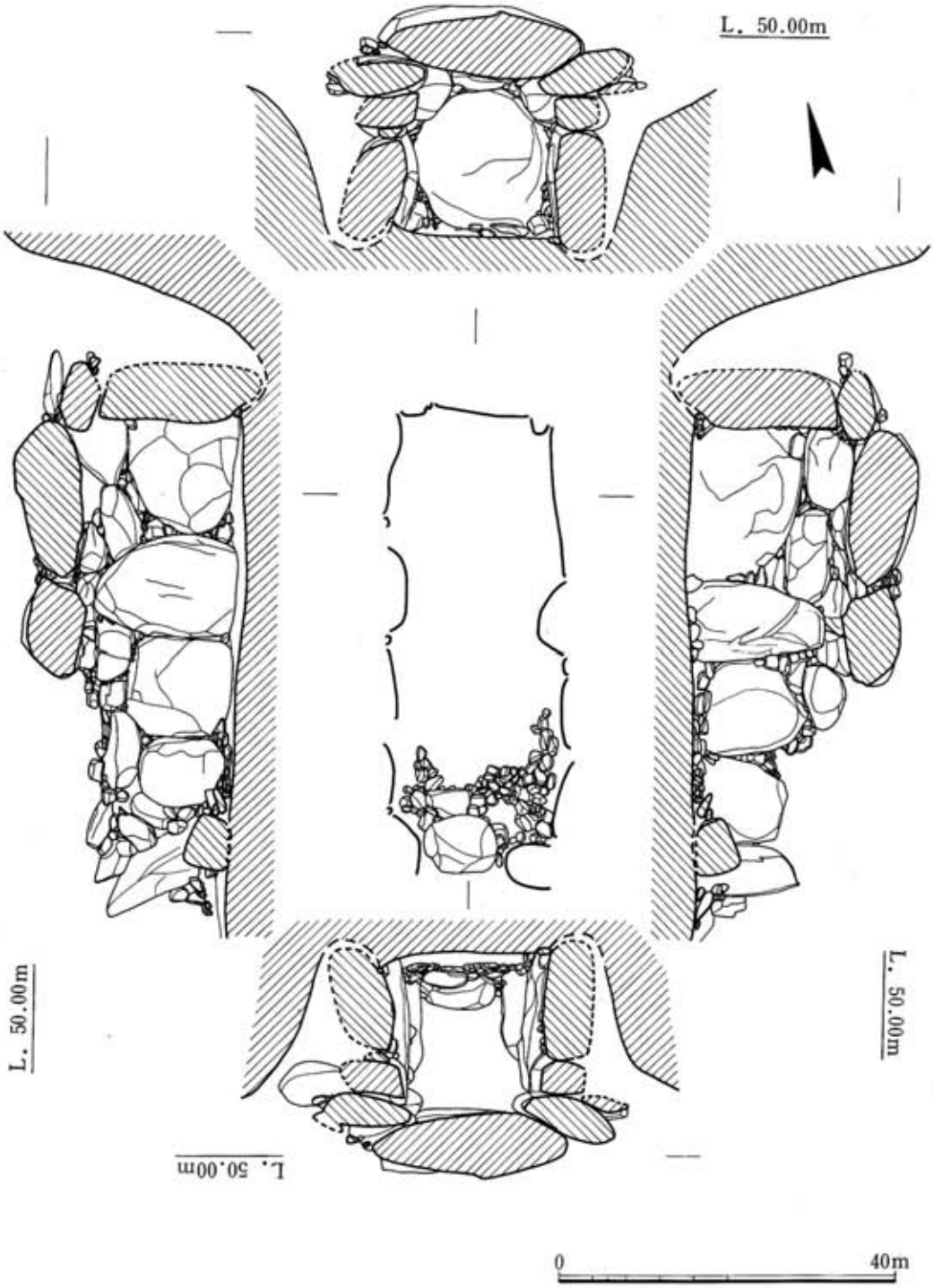


Fig. 192　ＳＴ002古墳石室実測図(2)

羨道から墓道にかけては，後世の破壊が大きく不明な部分が多いが，羨道部分は佐賀市大門西遺跡や金立開拓遺跡の古墳でみられるように，築造当初から造られなかった可能性もある。墓道は次第に西へ緩くカーブするが，羨門から約５ｍの付近で不明になる。

遺物は，石室内や墓道から，須恵器の蓋・杯・土師器の高杯・台付杯などが出土している。ＳＴ001古墳に比べると量的には少ない。

３．遺　　物

上三津栗原遺跡は，遺構の削平がひどく大きな破壊を受けていたにもかかわらず多数の遺物が出土した。遺物は全て古墳時代のものである。

ＳＴ001古墳（Fig. 193～197，PL. 117～122）

玄室内では，遺物は見られなかったが羨室右側壁周辺部から鉄剣・刀子・三累環式柄頭・須恵器杯などが出土した。その他，羨室全体に散らばる様に，馬具・刀子・耳環などが出土した。また，羨道部や墓道埋土中から須恵器の蓋・杯・高杯・平瓶・提瓶・壺・甕，土師器の高杯・壺などが出土した。

須恵器（Fig. 193～195，PL. 117～121）

蓋（Fig. 193－１～21，PL. 117・118）

21＋α個体出土した。形態によりＡ・Ｂ・Ｃに大別し，法量によりＩ・IIに区分し，さらに口縁部の形態によりａ・ｂ・ｃに細分する。

蓋Ａ（１～５）

口縁部内面にかえりがなく，天井部につまみがないものである。蓋Ａは，さらに法量によりＩ・IIに細分する。

蓋ＡＩ（１・２）　天井部が平坦で，口縁部がやや開くもの。口径12.1～12.3cm，器高4.1cm。天井部と体部の境は不明瞭だが僅かに認められる。天井部はヘラケズリ，他は内外ともヨコナデ・ナデ。１・２とも天井部外面にヘラ記号が見られる。

蓋ＡII（３～５）　天井部がＡＩよりやや丸く，口縁部がさらに少し開くもので，口径12.9～13.8cm，器高3.5～4.0cmと法量がＡＩより大きい。口縁部は，やや丸くなる。天井部と体部の境は，不明瞭だが認められる。天井部はヘラケズリだが，一部ヘラケズリの後ナデたものもある。他は内外面ともナデ・ヨコナデ。３・４は天井部外面にヘラ記号が見られる。

蓋Ｂ（６～11）

口縁部内面にかえりがあり，つまみの無いタイプである。法量によりＩ・IIに細分する。

蓋ＢＩ（６～８）　かえりは口縁端部より下方に大きく出ており，しかも内傾する。口径7.6

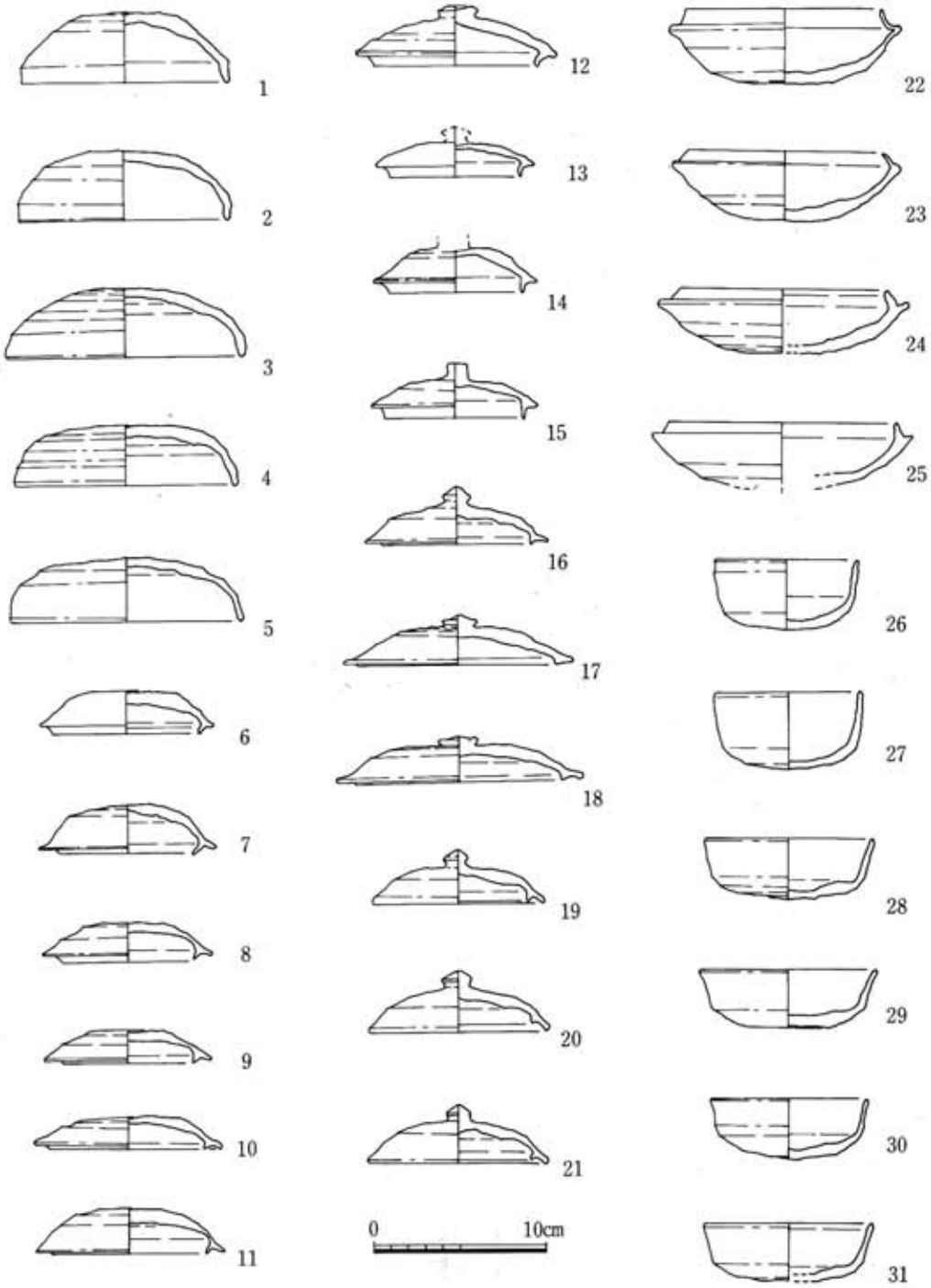


Fig. 193　ＳＴ001古墳出土須恵器実測図(1)

～8.5cm，器高2.2～2.6cm。天井部と体部の境は不明瞭だが僅かに認められ，稜を持つ。天井部はヘラケズリだが，6・7はヘラ切り離し痕を残す。他は，内外面ともナデ・ヨコナデ。7は，天井部外面にヘラ記号を持つ。

蓋BII（9～11）　かえりが口縁端部とほぼ同じもの。口径9cm，器高1.9～3cmと法量はBIより大きい。かえりは短く，断面三角形に突出し，端部は尖る。天井部はヘラ切り離し痕を残す。他は内外面ともナデ・ヨコナデ。9・11の天井部外面にヘラ記号が見られる。11のそれは，竹管状のヘラ記号である。

蓋C（12～21）

かえり，つまみともに有するタイプで，法量によりI・II，細部の違いでa・bに細分する。

蓋CIa（12～15）　かえりが口縁部より下方に出るもので，やや内傾しながら垂直にのびる。口径7.5～9.5cm，器高2.5～3.5cm。天井部と体部の境は不明瞭だが，明らかな稜を持つもの（14）もある。12は扁平で中央が凹状になったつまみを持ち，15は円筒形のつまみを持つ。

蓋CIb（16・19～21）　かえりが口縁端部より上方にあるもので，口径8.5cm，器高3.3cm。天井部から体部にかけて丸味を持つ。天井部に宝珠様つまみを持つ。天井部はヘラケズリ，他は，内外面ともヨコナデ，ナデである。

蓋CII（17・18）　口径11.5～12cm，器高2.8cmで，扁平な宝珠様つまみを持つ。CIに比較して，口径が大きく，かつ器高が低いタイプである。天井部はヘラケズリ，他の部分は内外ともヨコナデである。

杯（Fig. 193—22～31，PL. 118）

立ち上がりの有無によりA・Bに大別，法量によりI・IIに区分した。

杯A（22～25）

立ち上がりをもつものである。法量によりI・IIに区分する。

杯AI（22・23）　口径11.0cm，器高4.0～4.3cmである。内面は不定方向のナデ，外面は底部周辺ヘラケズリ，他はヨコナデである。23は「×」のヘラ記号をもつ。

杯AII（24・25）　口径12.0～13.0cm，器高3.6～3.7cmで，調整技法はAIと同様である。

杯B（26～31）

立ち上がりが無いものである。法量により，I・IIに区分する。

杯BI（26・27）　口径8.5cm，器高4.0～4.5cmで，口径に比し器高が高い。底部は丸味をおびて，体部との境が不明確である。体部から口縁部にかけて直線的に上方へのびる。内面ナデ・ヨコナデ，体部外面ヨコナデ，底部ヘラケズリ，一部ヘラ切り離し痕を残す。

杯BII（28～31）　口径9.0～10.2cm，器高3.3～3.5cmである。底部は平坦で，口径に比

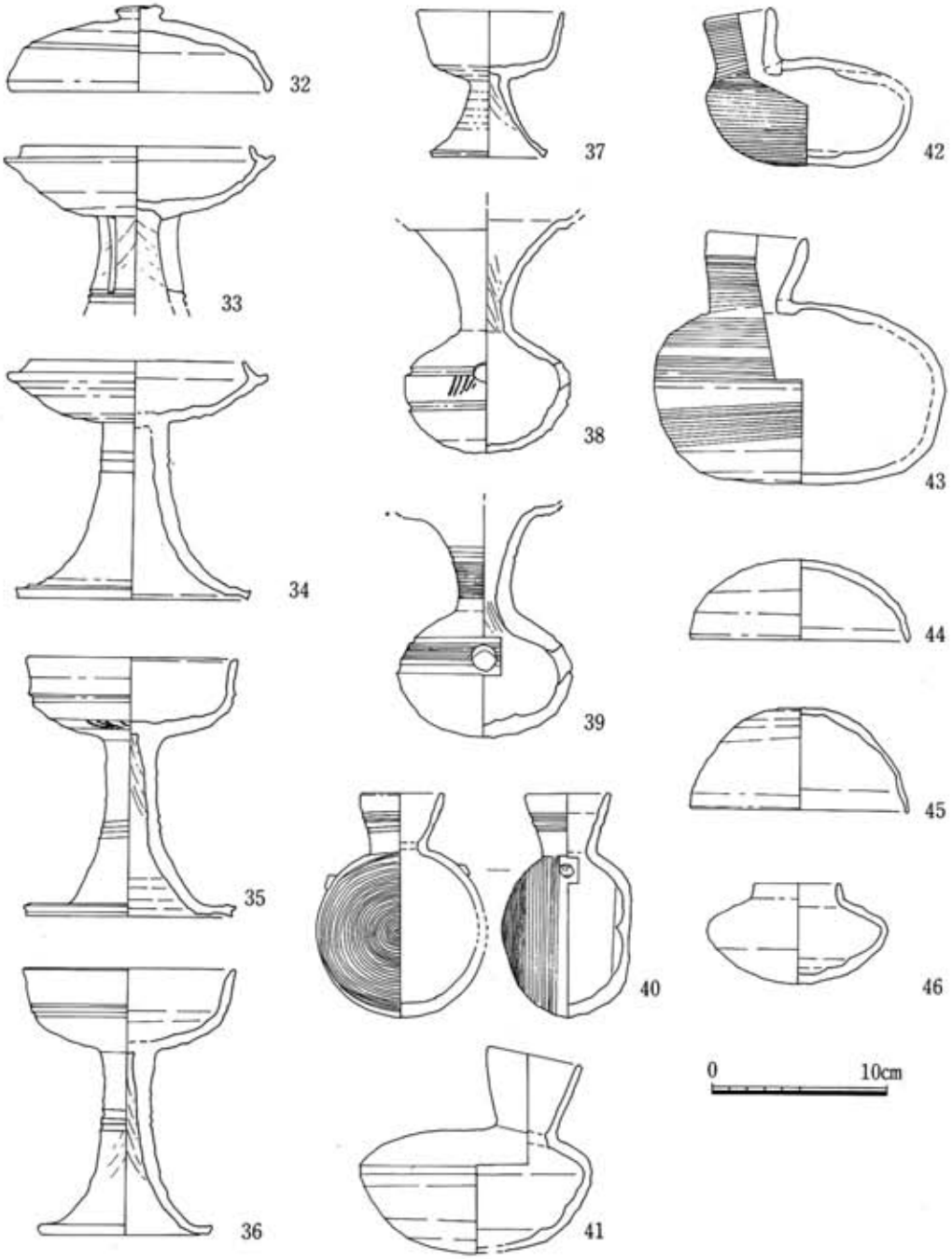


Fig. 194　ＳＴ001古墳出土須恵器実測図(2)

し器高が低い。体部から口縁部にかけて，やや外湾しながら上方にのびる。内面はナデ・ヨコナデ，体部はヨコナデ，底部にヘラ切り離し痕を残す。

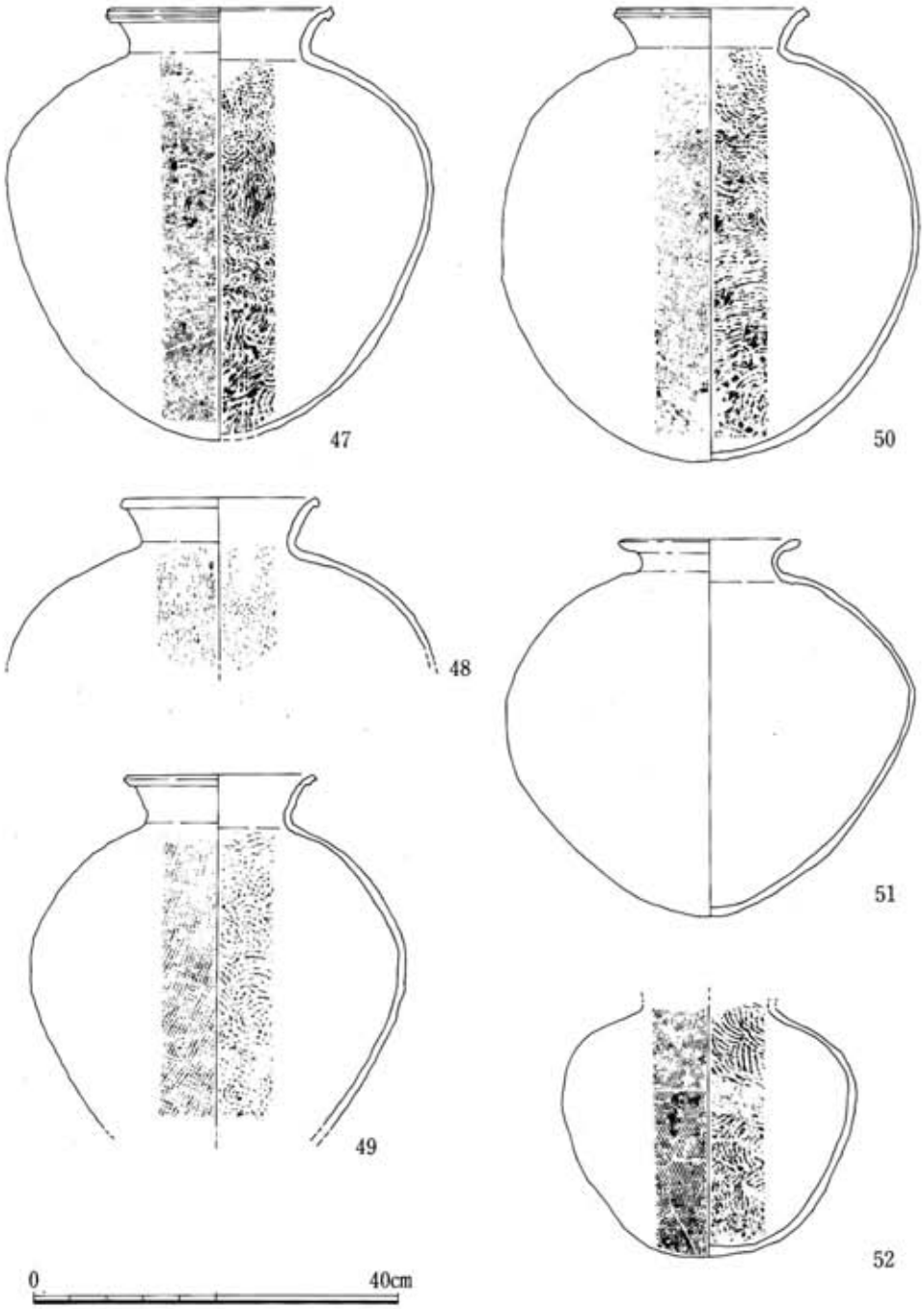


Fig. 195　ＳＴ001古墳出土須恵器実測図(3)

高杯蓋（Fig. 194—32, PL. 119）

口径15.1cm，器高4.9cmと大型で，上部に扁平な宝珠様つまみが付く。外面に1条の沈線がめぐる。外面ヨコナデ，天井部へラケズリ，内面不定方向ナデ。

有蓋高杯（Fig. 194—33・34）

33は三方2段長方形透しを有す。脚部中央部に2条の沈線がめぐる。脚部基部内面にしぼり痕をのこす。杯部内面不定方向のナデ・ヨコナデ，杯底部へラケズリの後ナデ。脚部ヨコナデ。口径13.2cmである。34は透しを持たない。脚部に2条の沈線がめぐる。口径14.9cm，器高13.5cmである。

無蓋高杯（Fig. 194—35～37, PL. 119）

3個体あるがいずれも透しを持たない。形態によりA・Bに分類する。

無蓋高杯A（35・36）　脚部基部が細く，中央に沈線が2条めぐる。脚部内面にしぼり痕をのこす。35は杯底部に櫛描列点文を付す。35で1条，36で2条の沈線が杯部にめぐる。36で口径12.2cm，器高14.9cmである。

無蓋高杯B（37）　口径8.4cm，器高8.4cmと小型である。杯部内面ナデ・ヨコナデ。杯底部はへラケズリの後ナデ。脚部ヨコナデ，内面にしぼり痕を残す。

聽（Fig. 194—38・39, PL. 119）

2個体出土したが，口縁部がいずれも欠損している。38は球状の体部に2条の沈線がめぐり，沈線間には櫛描列点文を施す。39は頸部・体部に数条の沈線がある。38・39ともに底部外面へラケズリ，他はヨコナデ。

提瓶（Fig. 194—40）

器高12.6cm，口径4.8cm，体部最大径9.7cmと小型である。口縁部は直線的に外反し，端部は丸くおさめられる。両肩部に退化したつまみが付く。丸い膨らみをもつ背面はカキメによる調整。

平瓶（Fig. 194—41～43, PL. 119）

3＋α個体出土した。口頸部形態によりA・Bに大別する。

平瓶A（41・42）　小型である。口頸部はやや内湾気味にのびる。体部は比較的扁平である。42は口縁部が自然釉となっている。41は，底部にかけてへラケズリ，その他はナデ調整。42は体部全面カキメ。41で器高11.8cmである。

平瓶B（43）　Aよりやや大型で，口頸部が短い。体部は，全体に丸みをもつ。口頸部から

体部にかけてはカキメ調整である。「///」のヘラ記号を有する。

蓋（Fig. 194—44・45, PL. 121）

口径12.4～12.5cm，器高4.6～5.8cmと口径に比べて器高が高く，天井部が丸くなっている。口縁部は，やや開き気味に下方に伸び，端部は丸い。**44**は内面ナデ・ヨコナデ，外面ヨコナデ調整である。**45**は，天井部にヘラ切り離し痕を残す。壺，坩等の蓋と考えられる。

短頸壺（Fig. 194—46, PL. 121）

口径5.0cm,器高5.7cmと小型である。胴部は扁平で，最大径を胴部上位に持つ。口頸部ヨコナデ，胴部ヨコナデ，底部周辺は不定方向のヘラケズリ調整である。

甕（Fig. 195, PL. 120）

6＋α個体出土した。口径21～25cm，器高47～50cmの大型の甕（**47～51**）と，それより小型のもの（**52**）とがある。大型の甕の口縁部はいずれも緩く外反するが，端部のおさまりはバラエティーに富む。**50**は体部が全体的に丸味をおびるが，他は肩部が張る特徴を有す。調整は口縁部内外面ヨコナデ，体部外面平行叩き，内面には同心円文がみられる。

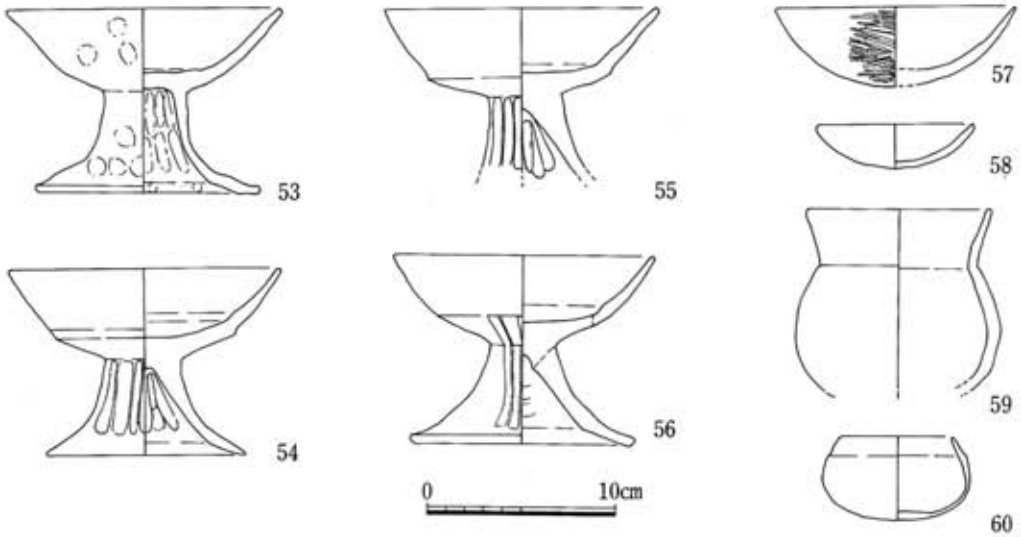


Fig. 196　ＳＴ001古墳出土土師器実測図

遺　　物

土師器（Fig. 196, PL. 121・122）

土師器は表土中から出土しただけで石室内，墓道などからは出土しなかった。

高杯（Fig. 196—53～56, PL. 121）

6＋α個体出土した。口径14～14.8cm，器高9.7～10cmである。**54・55**は杯底部と体部との境に稜をもつが，**53・56**は内湾気味に口縁部へ続く。いずれも脚部と脚裾部の境は明瞭でない。杯部内外面ナデ，**54～56**は底部へラケズリ，脚部へラミガキ調整である。

杯（Fig. 196—57・58, PL. 122）

底部は丸く，口縁部へ内湾しながら続く。**57**で口径12.8cm，器高4.0cmである。内外面とも丹塗り研磨を施す。

壺（Fig. 196—59・60, PL. 122）

59は口頸部が直立気味に外反する。体部は球形である。口径10.0cmを測る。**60**は椀の一種に入れるべきかもしれないが，無頸で口径6.0cm，器高4.4cmの小型のもので，器壁も全体にうすい。口縁部下に稜を持つ。**59・60**とも調整不明。

鉄器・青銅製品（Fig. 197—61～67, PL. 122）

ＳＴ001古墳から出土した鉄器は，鉄剣・刀子・馬具（鋲留金具）などである。また，青銅製品として柄頭や鞘口金具なども出土している。

鉄剣（Fig. 197—61）

先端や柄部などを大きく欠損している。両面全体に綾杉状の凹凸が見られる。

柄頭（Fig. 197—63, PL. 122）

三累環式柄頭と呼ばれる柄頭で，環身の断面が，厚肉造りで隅丸三角形状を呈す。「Ｃ」字状環の形状は扁円で，繋り方は正三角形状である。柄尻被せ金具とともに鋳造し，茎をもたない。柄尻にかぶせる方式のもので，柄縁金具とともに使用する。青銅製で，全長6.2cm，「Ｃ」字状環長3.3cm，柄尻被せ金具幅2.25cm。

柄縁金具・鞘口金具（Fig. 197—64, PL. 122）

青銅製で，鞘口金具が一部欠損している。柄縁金具は，柄縁に付き〝はばき〟の役をするものと考える。全長3.6cm，最大幅2.5cm。鞘口金具は，鞘口の外面に付き鞘を接合するためのもので，凸部は，慶州金鈴塚の例から刀子などをはさむ用途と考える。

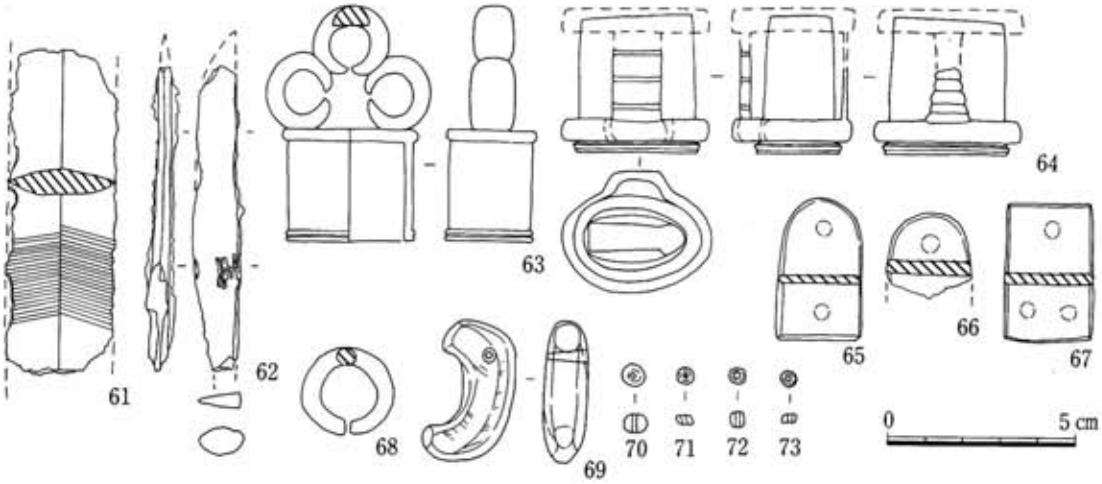


Fig. 197　ＳＴ001古墳出土鉄器、青銅製品、装身具類実測図

刀子（Fig. 197—62）

先端と茎部を欠損している。現存長8.0cmで，刀部中央幅1.1cmである。

鋲留金具（Fig. 197—65～67，PL. 122）

鉄地金銅張りの鋲留金具である。**67**は長方形で，長さ3.6cm，幅2.4cm，厚さ0.25cmを測り，鋲穴を３個持つ。**65**・**66**は一端が丸味を有し，**65**で長さ3.7cm，幅2.3cm，厚さ0.2cmである。**65**・**66**は２個の鋲穴を持つ。

装身具（Fig. 197—68～73，PL. 122）

ＳＴ001古墳からは，耳環・勾玉・小玉などが出土した。

耳環（Fig. 197—68，PL. 122）

環部径2.25cm×2.4cm，断面径0.4cm×0.5cm，金箔はわずかに残存する。

勾玉（Fig. 197—69，PL. 122）

長さ3.7cm，最大幅1.2cmで瑪瑙製である。孔は一方から穿っている。

小玉（Fig. 197—70～73，PL. 122）

４個出土した。径0.4～0.6cm，厚さ0.3～0.5cm，孔径0.15～0.18cmである。**70**は土製である。その他はガラス製。

ＳＴ002古墳（Fig. 198，PL. 123）

石室内や墓道から須恵器の蓋・杯と，土師器の蓋・杯・高杯などが出土しているが，ＳＴ001古墳に比べると数量的には少ない。なお，分類はＳＴ001古墳に準じる。

須恵器（Fig. 198—74～83, PL. 123）

蓋（Fig. 198—74～79, PL. 123）

74～77は，口縁部内面にかえりを有し，つまみが無いもので，**74～76**まで蓋ＢＩに分類され，**77**は蓋ＢIIである。**78**はかえりがあり，天井部に扁平な宝珠様つまみを有するもので，蓋ＣII に分類される。**79**はＣＩａに分類される。**74～76・79**は天井部にヘラ記号を有す。

杯（Fig. 198—80～83, PL. 123）

80・81は杯ＢIIに分類される。**82**は口径15.4cm，器高7.2cmと大型で身の深いタイプである。

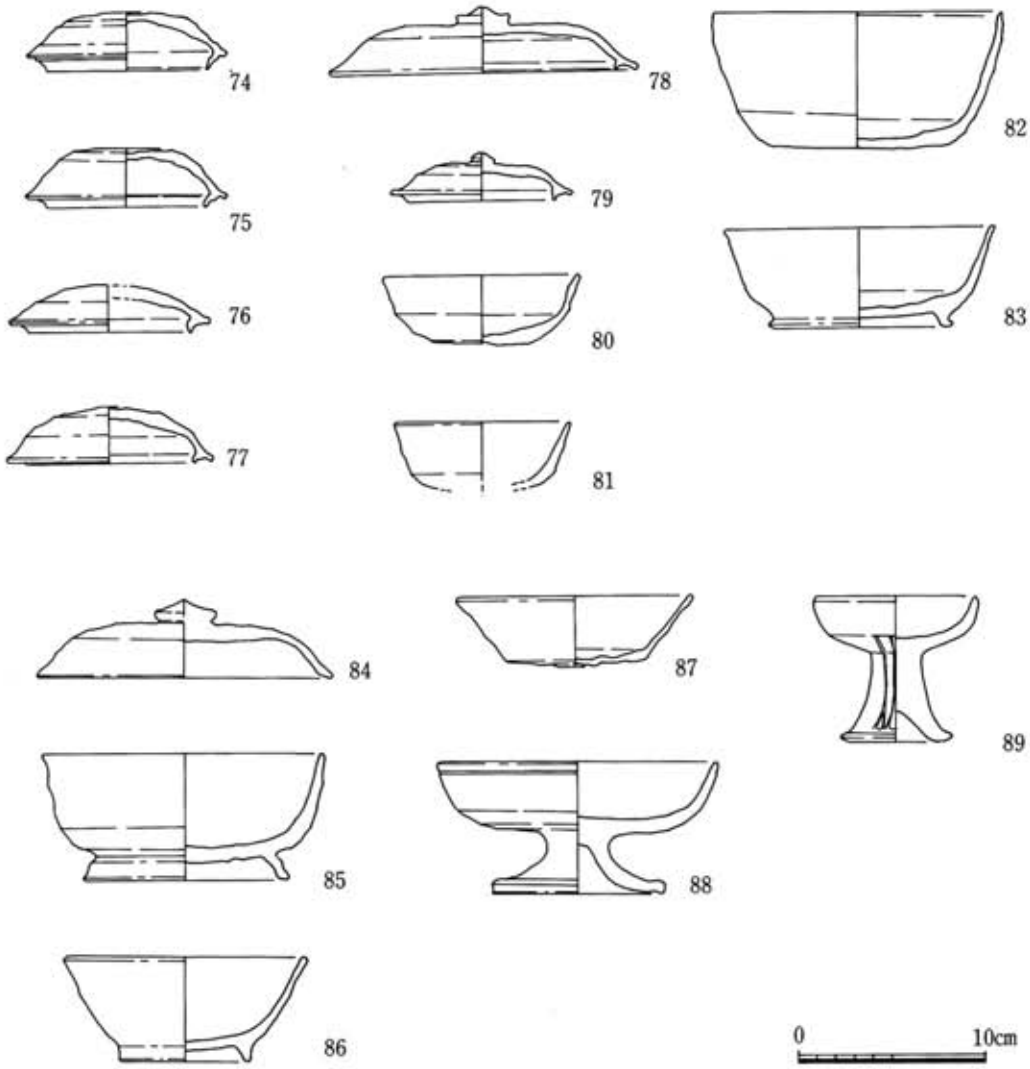


Fig. 198　ＳＴ002古墳出土須恵器、土師器実測図

底部は平底にちかい。内面不定方向のナデとヨコナデ，外面は底部周辺へラケズリ，口縁部にかけてはヨコナデ調整である。83は，底部に高台をもつ。口径約14.4cm，器高5.4cmである。内外面ともヨコナデ調整である。

土師器（Fig. 198－84～89，PL. 123）

蓋（Fig. 198－84，PL. 123）

口径16.0cm，器高4.1cmで，天井部中央に扁平な宝珠様つまみを有する。口縁部にはかえりがない。外面ヨコナデ調整である。赤焼の須恵器の可能性もある。

杯（Fig. 198－85～87，PL. 123）

85・86は高台をもつ。85の高台は外方への踏み出しが強く高い。86の高台は底部と体部の境に付き短い。85で口径15.2cm，器高6.6cm，高台径11.1cmである。87は高台の無いタイプで底部は平底である。体部は直線的に外反し口縁部へ続く。口径12.6cmである。底部には板目痕が残る。全体的に器壁が薄い。

高杯（Fig. 198－88・89，PL. 123）

88は口径15.1cm，器高7.0cmと杯部が大きく，器高が低い。脚部は短く，裾部は外方へ大きく広がり，端部を丸くおさめる。杯部口縁下に1条の沈線がめぐる。内面ナデ，その他ヨコナデで，一部へラケズリが見られる。89は，口径8.8cm，器高7.7cmと小型である。脚部は比較的長いが，裾部の広がりは小さい。杯部内面へラケズリの後ナデ，外面ヨコナデ，脚部外面タテ方向のへラミガキ調整である。

4．小　　結

上三津栗原遺跡のＳＴ001古墳は，石室の形状及び出土遺物により６世紀後半に築造され，その後７世紀前半に追葬され，７世紀後半に最終埋葬されたと考える。[註1]

このＳＴ001古墳の特色として，羨室より出土した三累環式柄頭をあげる事ができる。三累環式柄頭は，これまで県内では唐津市鏡区の半田・宮の上古墳[註2]や，東松浦郡浜玉町の玉島古墳[註3]・佐賀市久保泉町川久保の小清兵衛山古墳[註4]など３例発見されている。全国では，10数例発見されているが，他の環頭柄頭に比べ出土例は少ない。

県内資料をみると，玉島古墳の三累環は，環身が厚肉造りで柄尻被せ金具と接合しており，本遺跡出土の三累環と同形式と考えられる。半田・宮の上古墳や小清兵衛山古墳の三累環は，環身が厚肉造りであるが，柄尻被せ金具と三累環が別々に造られており，本遺跡出土の三累環と異なる。[註5]

三累環式柄頭は，南鮮の慶州の金冠塚・金鈴塚・飾履塚・梁山の夫婦塚[註6]など，古新羅時代の墳墓に見られる。特に，金冠塚の三累環は半田・宮の上古墳や小清兵衛山古墳のものと類似し，また，玉島古墳や本遺跡出土の三累環は，梁山の夫婦塚のものと類似している。

この事は，すでに小田富士雄氏により，古新羅時代に発達したものが，５～６世紀以後わが国に伝わったものと指摘されている。[註7] したがって，ＳＴ001古墳出土の三累環式柄頭も朝鮮半島からの将来品と考えたい。また，本遺跡出土の三累環式柄頭の時期については，ＳＴ001古墳が大きく破壊されているため，出土時期が不明瞭であるが，出土状態や他の出土遺物からみて，６世紀後半～７世紀前半の時期に副葬されたものと考えられる。

ＳＴ002古墳の築造時期については，出土した須恵器から考えると７世紀前半という時期があたえられる。このタイプの石室は佐賀市大門西遺跡[註8]・金立開拓遺跡[註9]などでみられ，築造当初から羨道部を構築しなかった可能性をもつものである。

註１　各古墳の時期決定にあたっては，須恵器杯蓋，杯身を中心に北部九州の編年や陶邑の編年を参考に行った。

註２　吉村茂三郎「名勝鏡山とその付近の古墳に就て」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第５輯　1936

註３　「古代九州の遺宝鏡・玉・剣」佐賀県立博物館　1979

註４　「帯隈山神龍石とその周辺」『佐賀県文化財調査報告書』第16集　佐賀県教育委員会　1967

註５　新谷武夫「環状柄頭研究序説」『考古学論集―松崎寿和先生退官記念』1977
新谷氏の分類では半田・宮の上タイプを，三累環式①形式とし朝鮮からの将来品としている。本遺跡のタイプは三累環式②形式とし日本化したつくりのものとしている。

註６　「朝鮮考古資料集成，古蹟調査特別報告」第３冊、第５冊朝鮮総督府1924，1927

註７　小田富士雄「九州発見の三累環頭柄頭」『九州考古学29・30』　1971

註８　「大門西遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1), 佐賀県文化財調査報告書第51集　佐賀県教育委員会　1980

註９　「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報」第３集　佐賀県教育委員会　1981

山古賀遺跡（やまこが）

遺跡名：山古賀（略号ＹＫＧ）
所在地：神埼郡東脊振村大字石動（いしなり）字西一本杉

山 古 賀 遺 跡
（1区）

1．遺 跡 の 概 要

山古賀遺跡は，神埼郡東脊振村大字石動字西一本杉に所在している（Fig.79）。

佐賀平野北部には東西に脊振山地が走り，この山地から南側に派生している丘陵が数多くみられる。当遺跡は，これらの丘陵の１つである権現山（標高448m）から南へ派出した舌状丘陵上に位置する。

当遺跡の周辺には三津丸山遺跡，西石動遺跡等，数多くの縄文時代から歴史時代の遺跡が存在する。詳細は西一本杉遺跡の概要に稿を譲るが，西一本杉遺跡が当遺跡の東側，上三津栗原遺跡が当遺跡の西側にあるという位置関係である（Fig. 155，PL. 124）。

遺構が確認されたのは丘陵の中央部付近で，標高約65m上にあり，ＳＪ001・002壺棺墓，ＳＣ003石棺墓，ＳＴ004古墳を検出した。その他，遺構に伴うものではないが，縄文土器（早期，中期末，晩期），弥生土器（中期前～中葉），須恵器（６世紀～７世紀），土師器，白磁等が出土した。２区については別途報告予定である。

2．遺　　構

遺構としては，弥生時代の壺棺墓２基，時期不明の石棺墓１基と古墳１基が検出された。

ＳＪ001壺棺墓（Fig. 201，PL. 125）

この壺棺はＳＣ003石棺墓の西側にあり，標高65.7m上に位置する。

墓壙は長軸0.42m，短軸0.38mで深さ0.18mである。壺棺の主軸はＮ60°Ｅで，東側に蓋としての鉢，西側に壺を配置しており，鉢の口縁部が壺の肩部を覆っていた。壺，鉢の接合部に粘土貼り等はなく，棺内からの出土遺物もなかった。傾斜角は不明である。

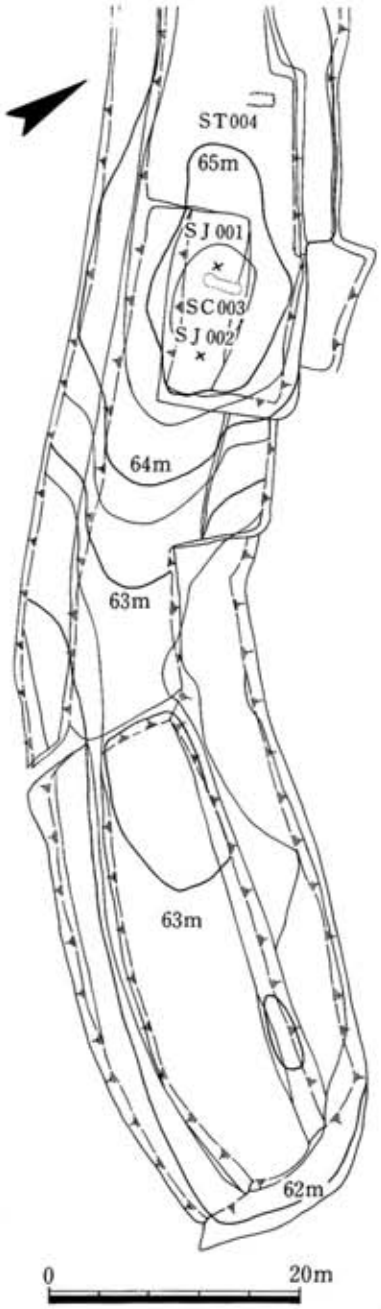


Fig. 199　山古賀遺跡地形測量図

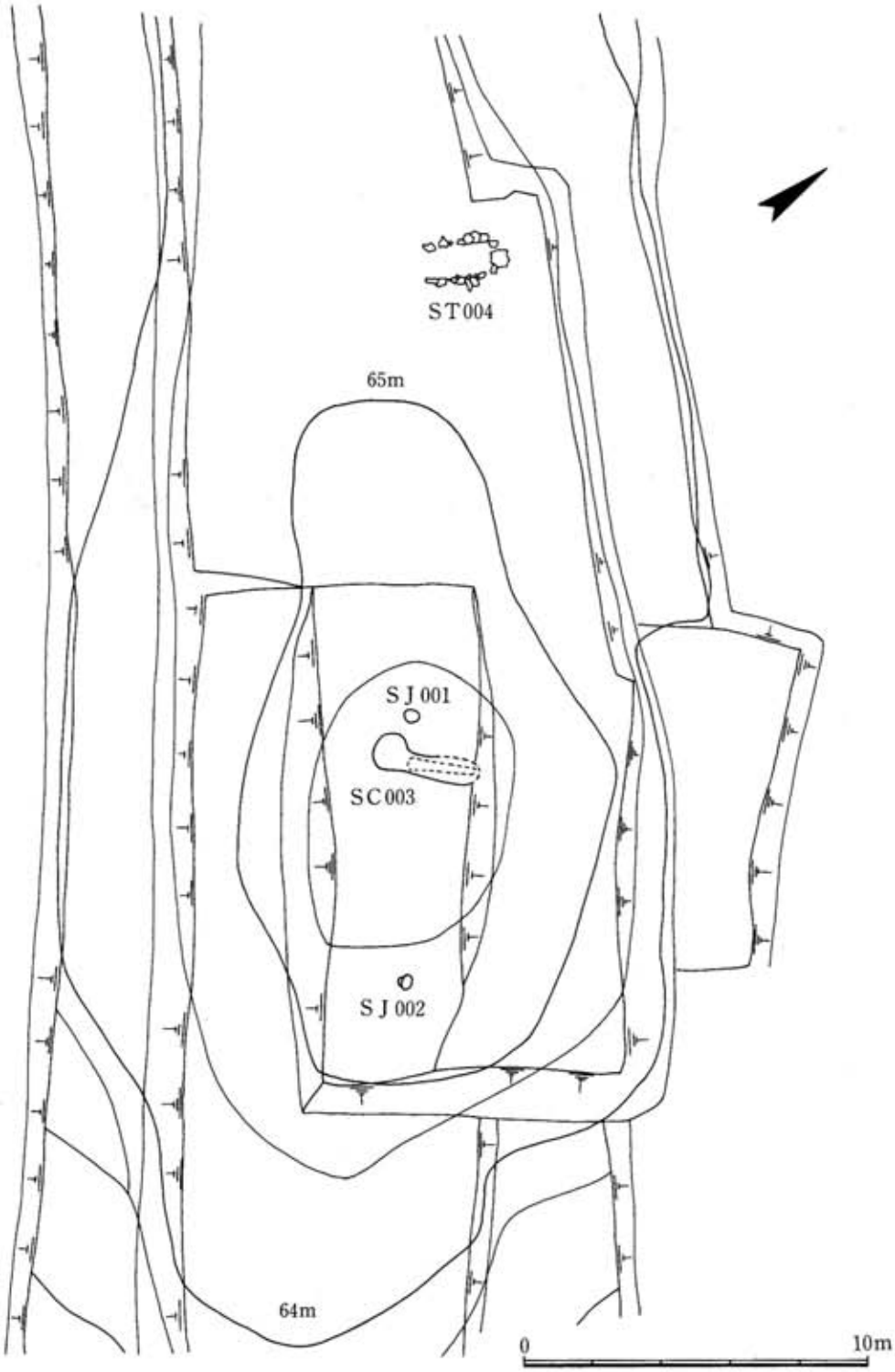


Fig. 200　遺構配置図

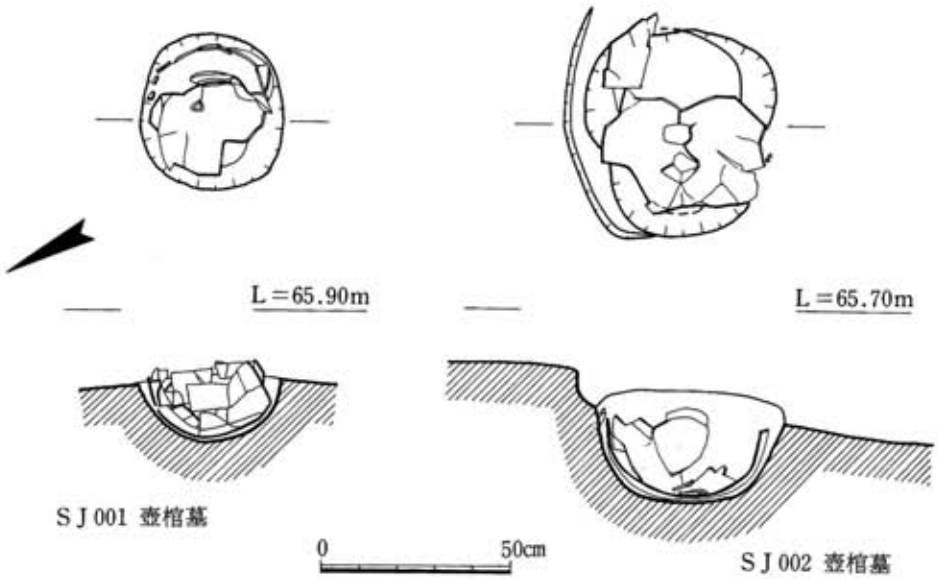


Fig. 201　SJ001・002壺棺墓実測図

地山は淡黄褐色土で，墓壙埋土は暗黄褐色土である。

ＳＪ002壺棺墓（Fig. 201）

この壺棺墓はＳＣ003石棺墓の東側にあり，標高65.5m上に位置する。

壺棺の上部はかなり削平されており，主軸及び埋葬傾斜角は不明である。残存する墓壙は東西が約0.5m，南北が約0.55mで，深さ0.25mである。蓋と考えられるものは削平のためか出土していない。地山は淡黄褐色土で，墓壙埋土は暗黄褐色土である。

ＳＪ001・002壺棺墓ともに，その法量等から小児用棺と考えられる。

ＳＣ003石棺墓（Fig. 202）

ＳＣ003石棺墓は調査区の西側で地形がやや高まった，標高約65.5m上に位置する。主軸はN 41.5°Eである。

墓壙は石棺の中央部及び西側を攪乱されていたため不明瞭であるが，長さ約2.3m，幅0.7m，深さ0.25mの隅丸長方形である。石棺は蓋石，南北の側壁の一部および西側小口の石材が既に抜き取られており，内法は長さ約1.8m，幅は東小口で0.25m，西小口が約0.4m，頭位は西側だと推定される。石材はすべて安山岩の板石が利用されており，東西の小口に各々一枚，南北の側壁に各々５枚が用いられていたと推定される。

石材の継目および墓壙と側壁の間は、淡褐色の粘土で充塡されていて板石が倒れないよう配

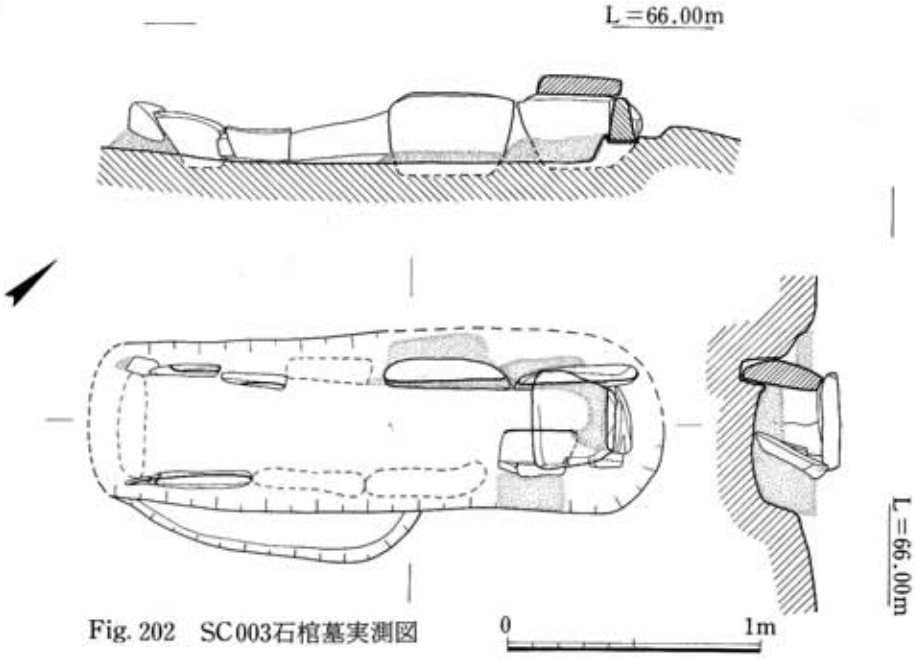


Fig. 202　SC003石棺墓実測図

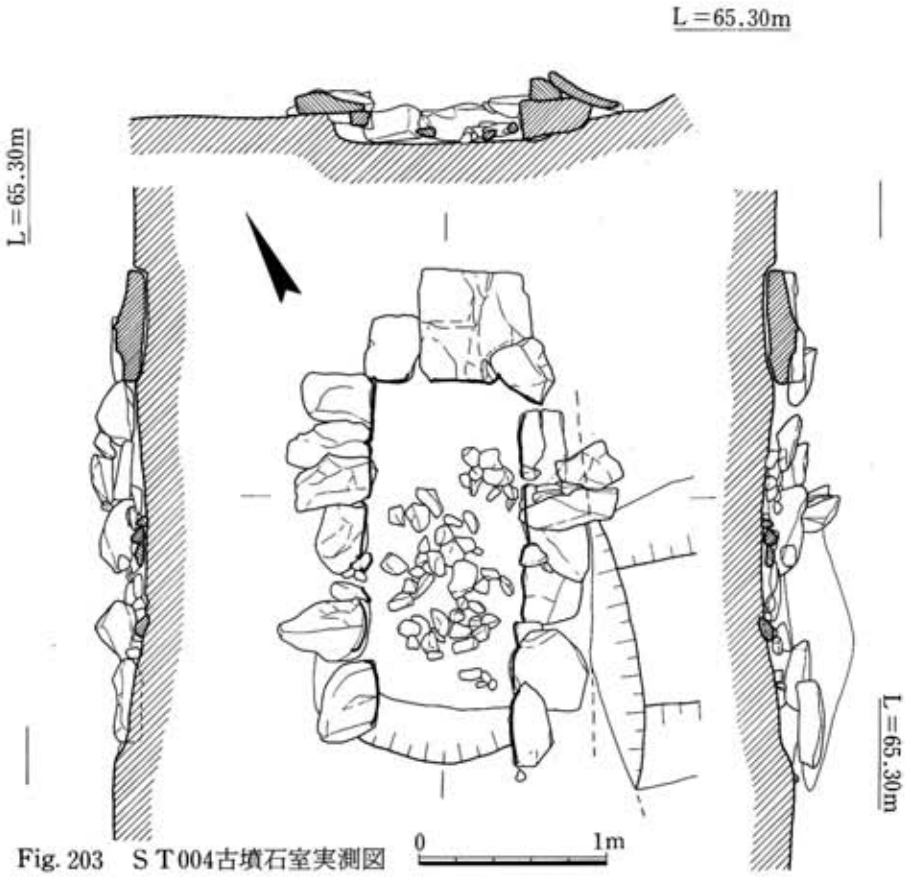


Fig. 203　ＳＴ004古墳石室実測図

慮されている。床面はほぼ平坦にされていた。棺内外からの出土遺物はなかった。

ＳＴ004古墳（Fig. 203，PL. 125）

ＳＴ004古墳は調査区の最も西側に位置し，標高64.5m上にある。古墳の上部はかなり削平されており，墳形および周溝の有無は不明である。

内部主体は横穴式石室で，主軸をＮ28°Ｅにとり南向きに開口している。掘形は不明瞭で，玄室は現存長2.0m，幅0.8mの長方形プランである。奥壁は腰石のみが２個残存し，東西の側壁は各々５個の腰石が残り，数ヵ所腰石上に一段石が積まれている。玄室内はかなり敷石が動いており，中央部に10～20cm大の石が残っていた。

羨道部の構造は不明であり，袖石や閉塞石もみられなかった。

なお，当古墳は黄褐色土上に造営されており，使用されている石材はすべて花崗岩である。また，古墳内外からの出土遺物はなかった。

３．遺　　物

ＳＪ001・002壺棺墓の壺・鉢のほか縄文時代から中世に至る各時代の土器が若干出土した。

縄文土器（Fig. 204，PL. 126）

１は早期の口縁部で，内面，外面にヨコ方向の平行沈線が走り，内面口唇部からタテ方向に沈線が入る。淡黄褐色を呈し，１～３㎜の砂粒を含む。

２は中期末の胴部で，凹線が縦，横に入る。外面は赤褐色，内部は褐色を呈し，多量の滑石を含む。

３は晩期の口縁部で，三角形に近い凸帯の上に長方形の刺突が施されている。淡褐色を呈し，１～３㎜の砂粒を多く含む。４は晩期末の口縁部で，わずかに外反した口縁端下に凸帯があ

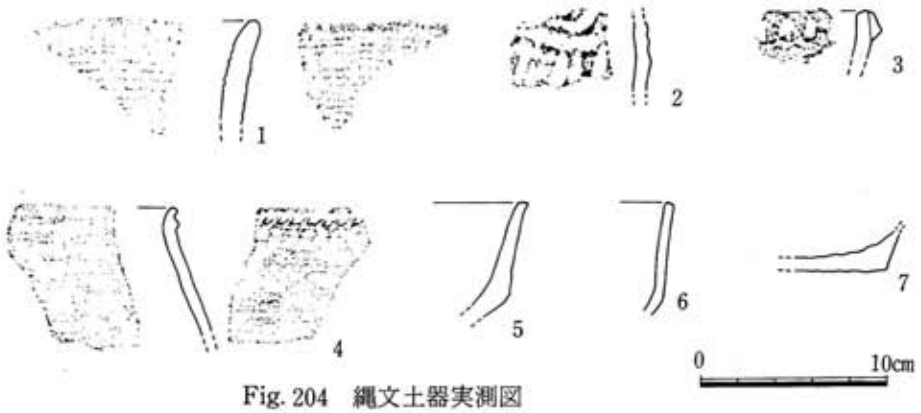


Fig. 204　縄文土器実測図

り，シャープな刻目が斜めに入る。内面，外面にヨコ方向の条痕が走る。褐色を呈し微砂粒を含む。**5・6**は晩期の口縁部で，内面，外面ともに条痕の上をヨコ方向にヘラミガキしている。**5・6**ともに内面黒色，外面褐色で，1～4㎜の砂粒を含む。**6**は外面に煤が付着している。**7**は底部で，内外面ともに風化がはげしく調整は不明。褐色を呈し1～3㎜の砂粒を含む。

弥生土器（Fig. 205・206，PL. 126・127）

壺棺墓　**8・9**はＳＪ001壺棺墓の鉢および壺である。**8**は蓋として用いられた鉢で口縁下に凸帯をもつ。凸帯は細長い粘土紐を貼りつけた後,上下をつよくナデつけている。器面はハケメ調整の後，ヨコ方向のヘラミガキを施している。淡褐色を呈し，1～2㎜程度の砂粒を多く含む。また白，金雲母を含んでいる。器高12.7cm，復元口径33.6cmである。**9**は壺で口縁部は打ち欠かれたものと考えられる。肩部には4本の浅い沈線がめぐる。胴部は球形に近く，底部はわずかに上げ底となっている。内外面ともに器壁の剝落がはげしく調整は不明。胴部には直径10～15cm程度の黒斑が2ヵ所に残っている。淡褐色を呈し，1～3㎜の砂粒を多く含んでいる。残存する器高は33.5cmである。**10**はＳＪ002壺棺墓の壺で，破片から全体を復元した図である。残存する口縁端部には粗い研磨痕がみられ，**9**と同様に口縁部が打ち欠かれていたと考えられる。頸部には2～3本の浅い沈線がめぐり，頸部から胴部にかけてヨコ方向のヘラミガキが施されている。底部は円板状のもので，これに胴部が接合している。淡褐色を呈し，1～3㎜の砂粒を多く含んでいる。復元器高は43.3cmである。

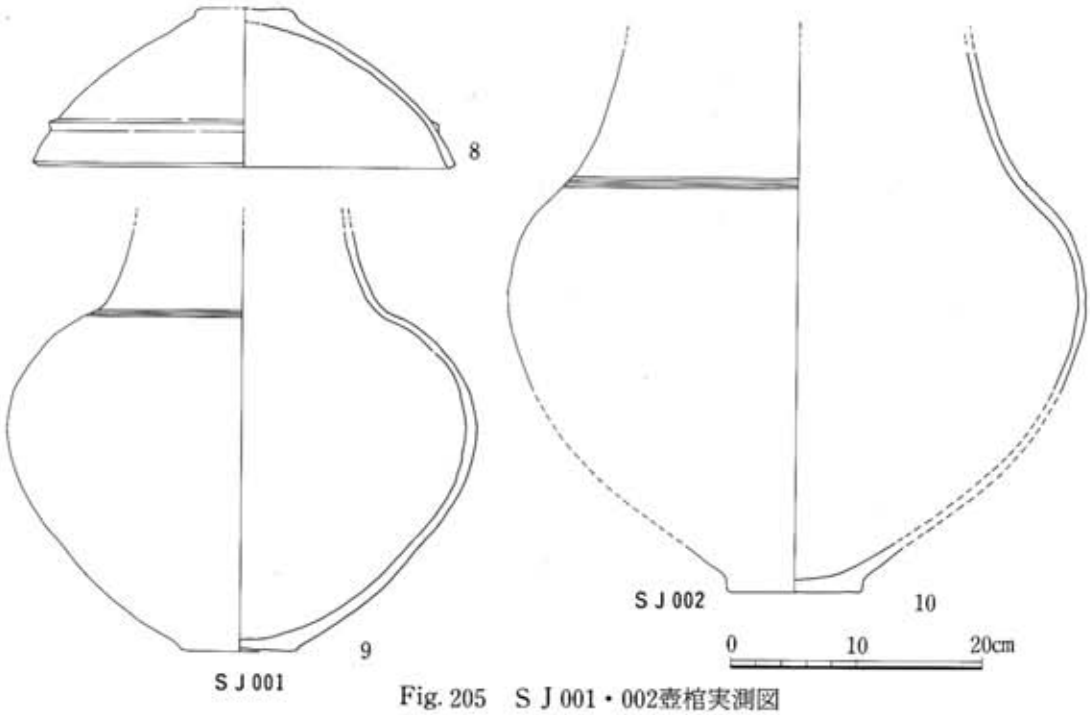


Fig. 205　ＳＪ001・002壺棺実測図

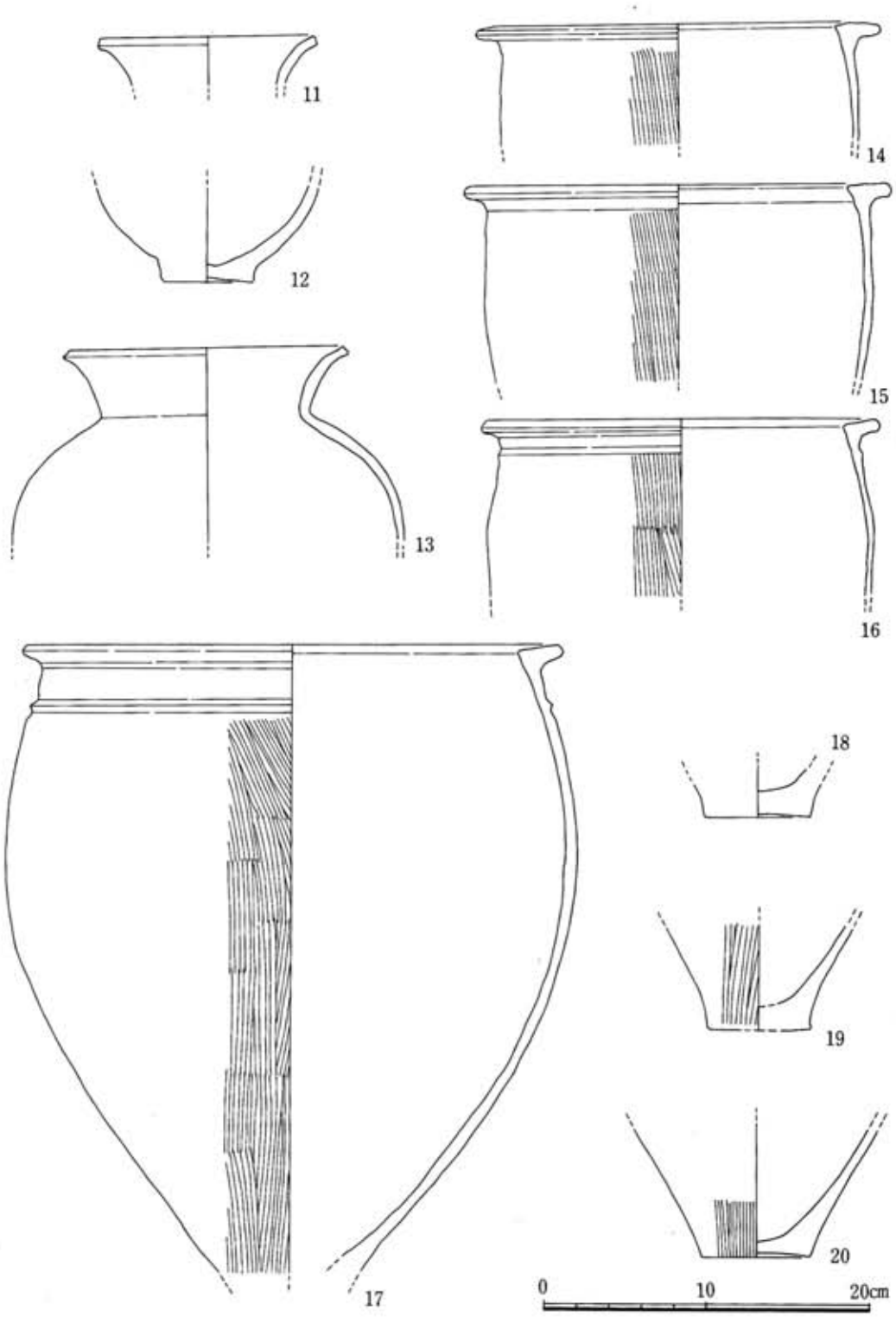


Fig. 206　弥生土器実測図

その他

壺　11は壺の口縁部破片で，内外面ともにヨコナデされている。褐色を呈し，1～2㎜の砂粒を含む。12は壺の底部で，球形の胴部に上げ底気味の底部がついている。内面はハケメ調整の後，ナデを施し，外面はナデ調整の後，タテ方向にヘラミガキされている。褐色を呈し，1～2㎜の砂粒を含み，金雲母が散見される。13は胴部に短く外反した口縁部がつく壺である。口縁部は外面がヨコナデ，内面はヨコナデの後，ヨコ方向のヘラミガキが施されている。胴部は内面がナデ，外面はヨコ方向のヘラミガキが施されている。赤褐色を呈し，1～3㎜の砂粒を多く含む。11～13ともに焼成が良く堅緻である。

甕　14～16は甕の口縁部から胴上部で，いずれも逆L字形の口縁がつく。胴部外面はタテ方向のハケメ調整，口縁部はヨコ方向のナデ，内面はナデ調整および指頭おさえである。胎土には1～3㎜の砂粒を多く含み，赤褐色を呈している。復元口径は24.9，26.2，24.5cmである。17は口縁部から胴下部で，外面は凸帯より下側が概ねタテ方向のハケメ調整，凸帯は断面三角形を呈し，上下をつよくナデつけている。口縁部はヨコ方向のナデ，内面は指頭おさえおよび一部ナデ調整がみられる。赤褐色を呈し，胴上部から下部にかけて煤が付着している。胎土には1～3㎜の砂粒を多く含む。18～20は甕の底部で，いずれも外面はハケメ調整で，内面は黒変しており調整は不明瞭である。18は淡褐色，19は褐色，20は赤褐色を呈し，1～4㎜の砂粒を多く含む。

須恵器（Fig. 207—21～25）

杯身　21は立ち上がりが内傾するもので，残存する部分はヨコナデ，22・23は底部外面の⅔程度がヘラケズリ，他の部分はヨコナデである。回転台の方向は22が右回り，23は左回りである。いずれも1㎜前後の砂粒を含み青灰色を呈す。焼成は良く堅緻である。

杯蓋　24は扁平な擬宝珠形のつまみをもつ。1㎜前後の砂粒を含み器表は青灰色を呈す。断面は褐色を呈し，縞状になっている。

瓶　25は肩部に列点文がめぐり，その下に丸味をもった稜線が2条走る。外面は肩部がナデ，胴部はヘラケズリの後，ヨコナデを施している。内面はヨコナデである。外面は黒色の釉状のものが付着している。灰色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。焼成は良く堅緻である。

土師器（Fig. 207—26・27，PL. 127）

26は盤で口縁部はゆるやかに内湾し端部は丸く仕上げられている。口縁部はヨコナデ，口縁端から4cmの所に約2cm幅でヘラケズリした跡がみられる。その他の部分は風化がはげしく調整は不明瞭である。赤褐色を呈し1～3㎜の砂粒を含む。器高3.6cm，復元口径24.8cmである。27は杯で口縁が直立気味に開く。内面および体部外面はヨコ方向のナデ調整，底部はヘラ切り

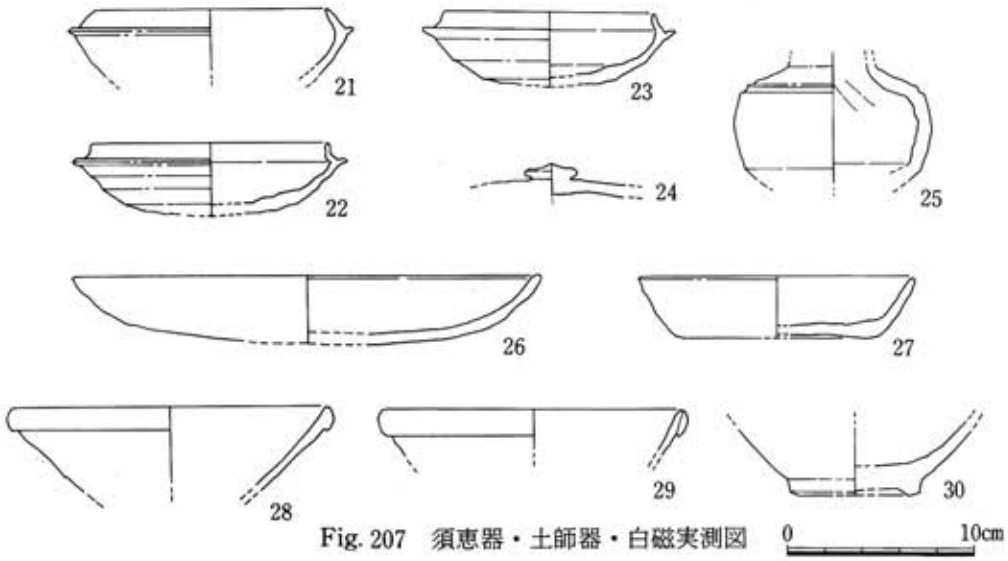


Fig. 207　須恵器・土師器・白磁実測図

でハケメの跡を残している。淡褐色を呈し，きめ細かい胎土である。器高3.2cm，復元口径14.8cmである。

白磁（Fig. 207—28～30，PL. 127）

28は玉縁口縁をもち，灰色の胎土に白濁した釉を施している。外面は体部上半に釉が施されている。29はやや大きい玉縁口縁で，褐色の胎土に白濁した釉が施されている。30は台形状の高台をもち，褐色の胎土に白濁した釉が内面は見込全体に，外面は高台近くまで施されている。

4．小　　結

山古賀遺跡は前述したように小規模な遺跡ではあるが，かなりの資料を提供してくれた。

第1に遺構から言えることは，この丘陵が一定期間（弥生時代，古墳時代）墓地として利用されていたことであり，しかも同じ丘陵上でも，先端部ではなく中央のやや高まった場所と，そこに近い丘陵の基部に造営されていることである。また遺物から推測すると，縄文時代早期以来，途中断絶はあるものの，中世に至るまで利用されており，今回は検出できなかったものの，近くに居住地の存在が考えられよう。

第2に壺棺の存在があげられる。壺に蓋として鉢あるいは甕をもつ埋葬形態が，近年佐賀平野北部でも散見し始めている。従来から先学諸氏による甕棺編年がほぼ弥生時代を覆い尽くす段階にきているが，佐賀平野において弥生前期段階の編年は未だしといった感がある。山古賀遺跡出土の壺棺がどの時期に属するのかというのはやや早計であるが，前期の後葉を前後する時期ではないかと考えている。

図　版

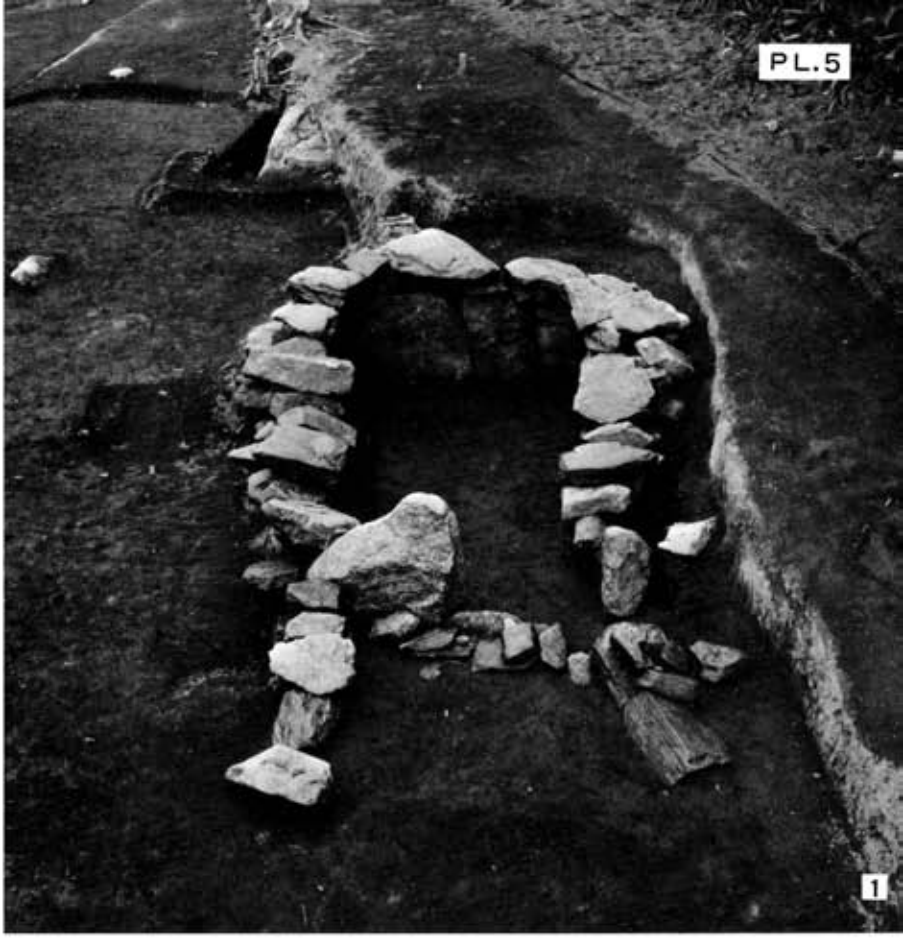
西　原　遺　跡

西原遺跡（航空写真）〈上方は東〉

1　西原B区全景〈南から〉
2　同 D区全景〈南から〉

1　西原D区東部〈北から〉
2　　同　西部〈南から〉

1　西原ＳＴ001古墳石室〈南から〉
2　同　ＳＴ002古墳石室〈西から〉



1　西原ＳＴ003古墳石室
〈東から〉
2　同　ＳＴ004古墳石室
〈西南から〉

1　西原ＳＴ005古墳全景〈南から〉　　2　同　〈北から〉

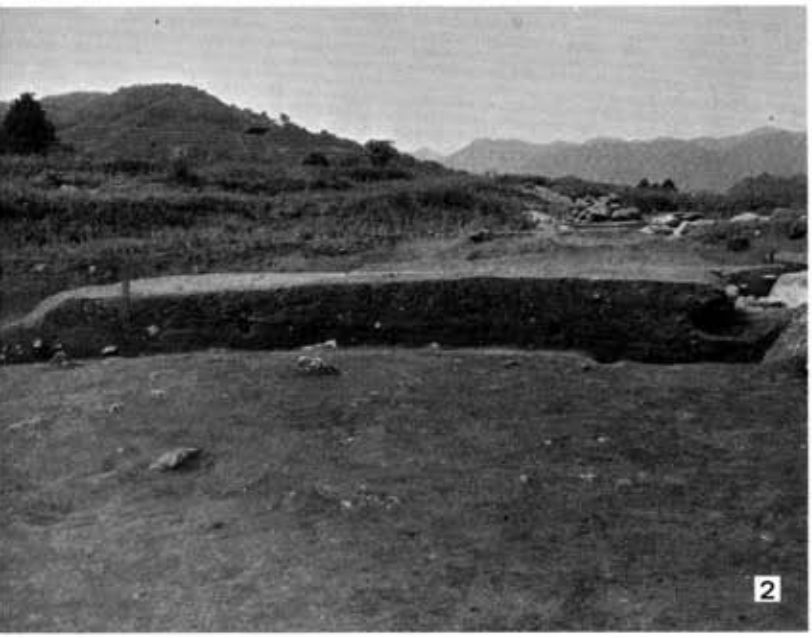
1　西原ＳＴ006古墳全景〈南から〉　　2　同　ＳＴ007古墳全景〈南から〉

1　西原ＳＴ009古墳石室〈南から〉
2　同　ＳＴ011古墳石室〈西から〉
3　同　ＳＴ010古墳石室〈南から〉

1　西原ＳＴ012古墳全景〈南から〉
2　　同　　石室〈南から〉

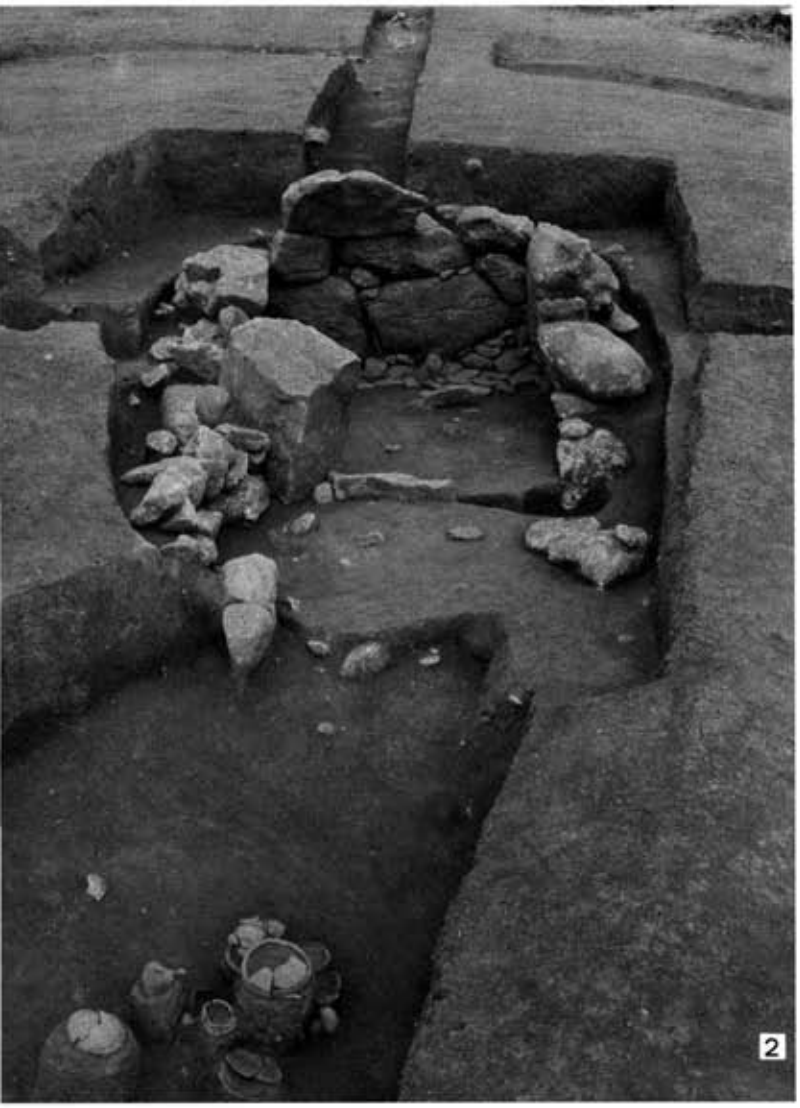
1　西原ＳＴ009古墳石室〈南から〉
2　同　ＳＴ011古墳石室〈西から〉
3　同　ＳＴ010古墳石室〈南から〉

1　西原ＳＴ012古墳全景〈南から〉
2　　同　　石室〈南から〉



1　西原ＳＴ012古墳石室〈南から〉
2　　同　　墳丘西側〈南から〉
3　　同　　墳丘東側〈南から〉

1　西原ＳＴ013古墳全景〈南から〉
2　　同　　石室〈南から〉



1　西原ＳＴ014古墳全景〈南から〉
2　　同　　石室〈南から〉

1　西原ＳＴ014古墳盛土下遺物出土状況　　2　同　遺物出土状況

1　西原ＳＴ016古墳石室〈南から〉
2　同　ＳＴ017古墳石室〈南から〉

1　西原ＳＴ018古墳石室〈南から〉
2　同　ＳＴ019古墳石室〈南から〉

1　西原ＳＴ020古墳石室〈南から〉
2　同　ＳＴ021古墳石室〈南から〉

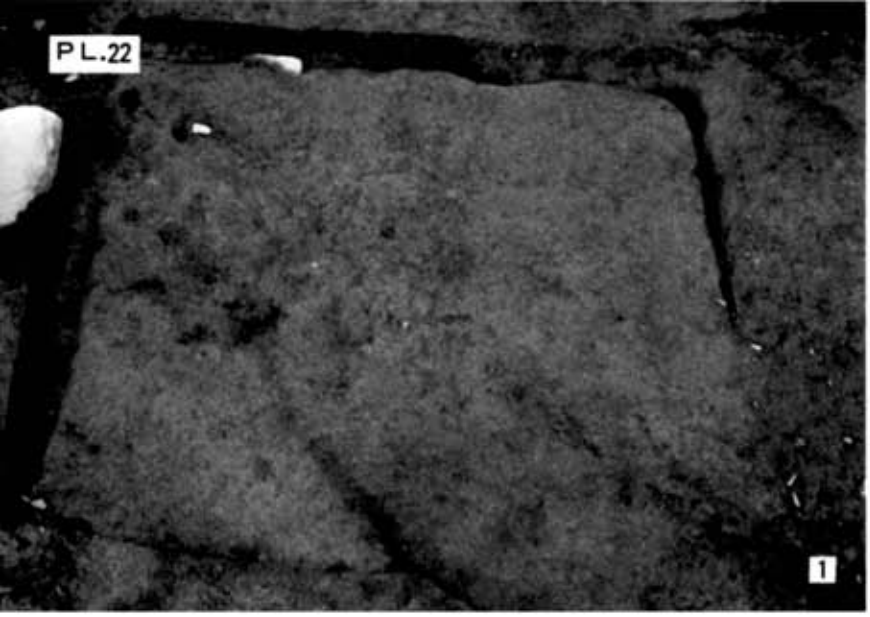
1　西原ＳＣ022石棺〈西から〉
2　　同　　〈南から〉

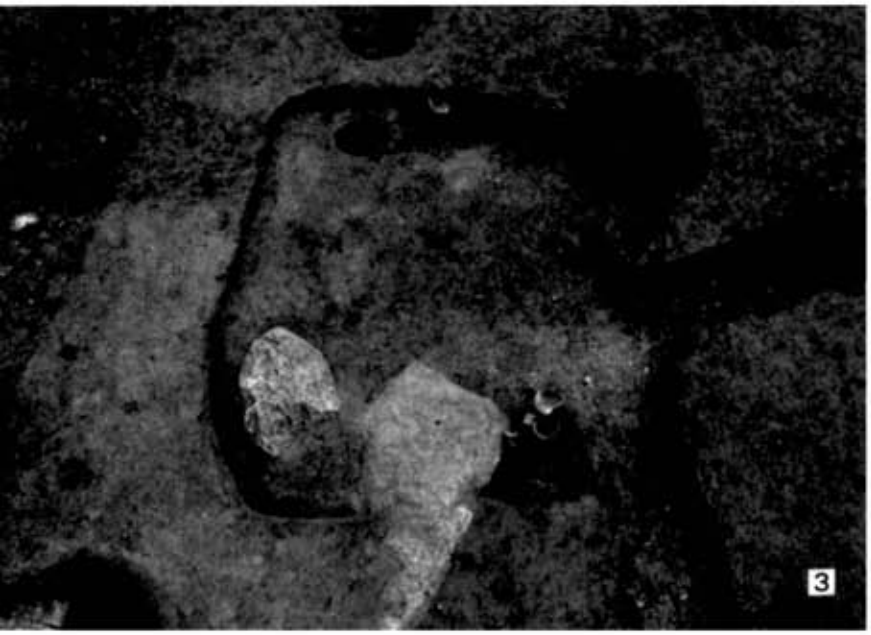
1　西原ＳＣ023・024石棺墓〈蓋石除去前〉　　2　同　〈蓋石除去後〉

1　西原ＳＣ023石棺墓鉄剣副葬状況〈東から〉
2　同　ＳＣ024石棺墓身部〈南から〉
3　同　人骨検出状況〈西から〉

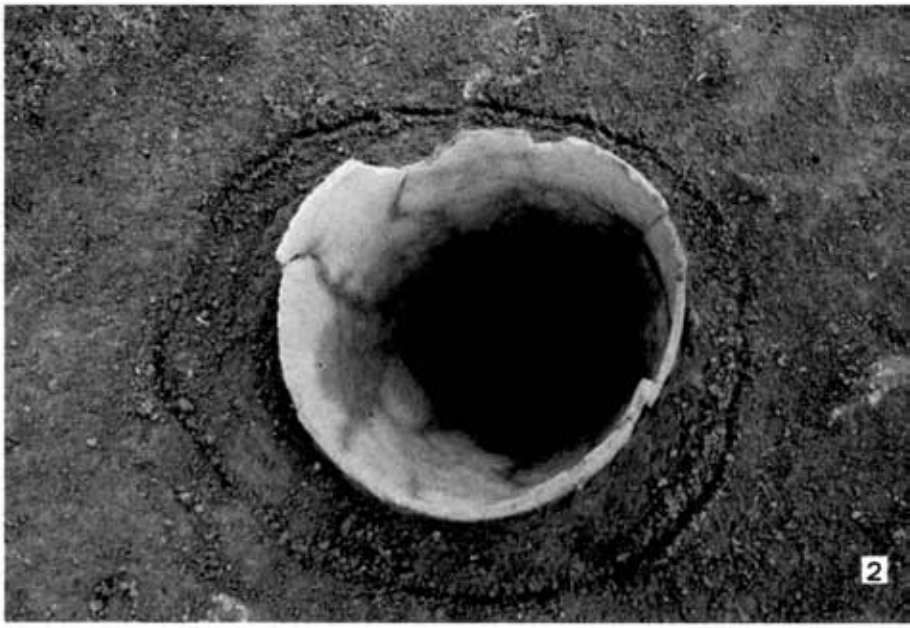
1　西原ＳＢ025住居跡〈西から〉
2　　同　ＳＢ026住居跡〈南から〉

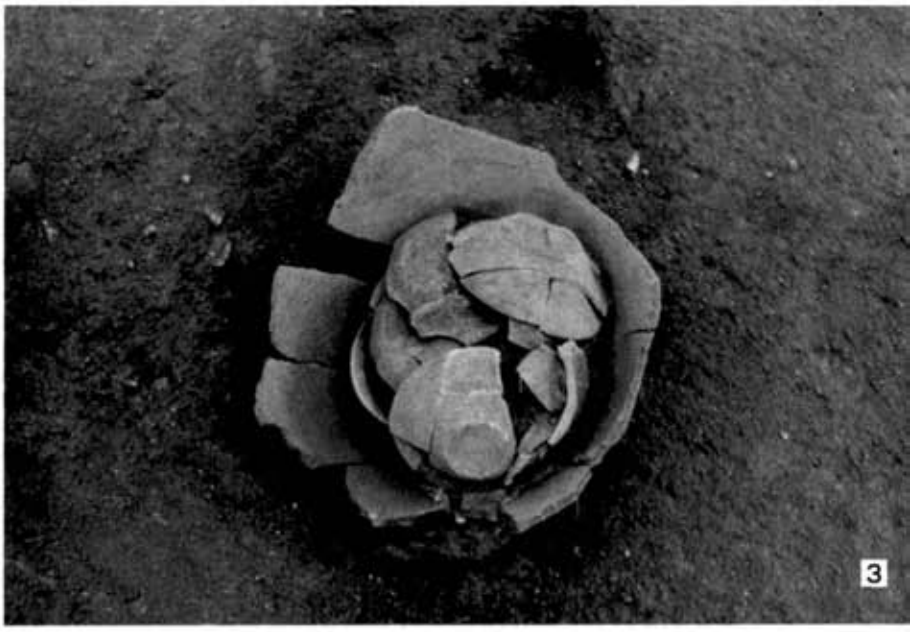
1　西原ＳＢ027住居跡〈南から〉
2　　同 北側張り出し部遺物出土状況〈北から〉
3　　同 西側張り出し部遺物出土状況〈西から〉



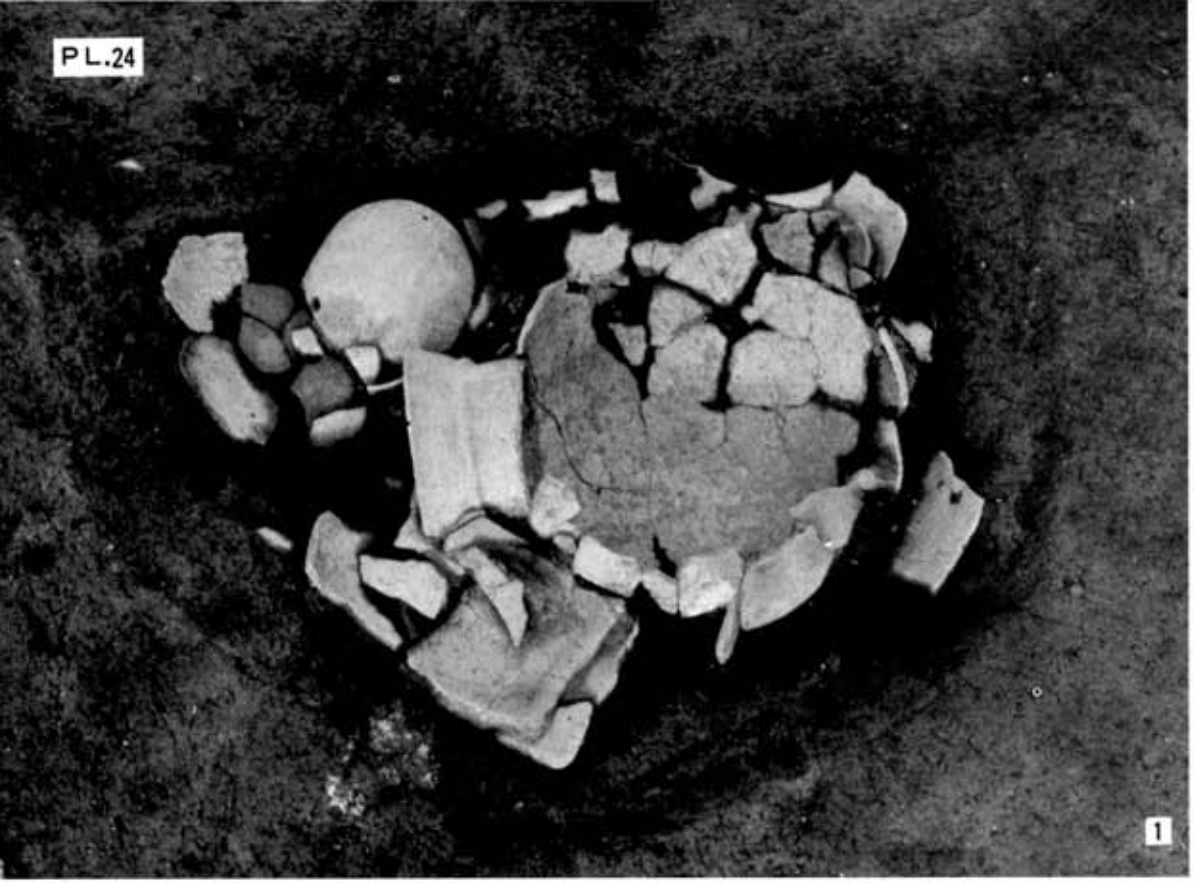


1　西原ＳＢ028住居跡〈南から〉
2　同　ＳＢ029住居跡〈南から〉
3　同　ＳＢ030竪穴〈北から〉

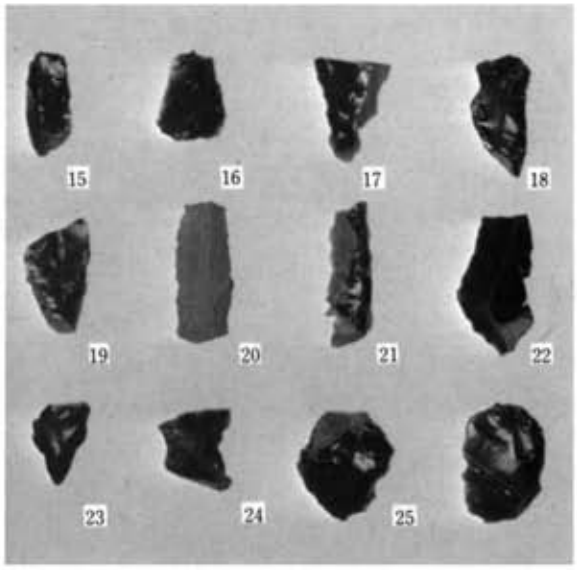


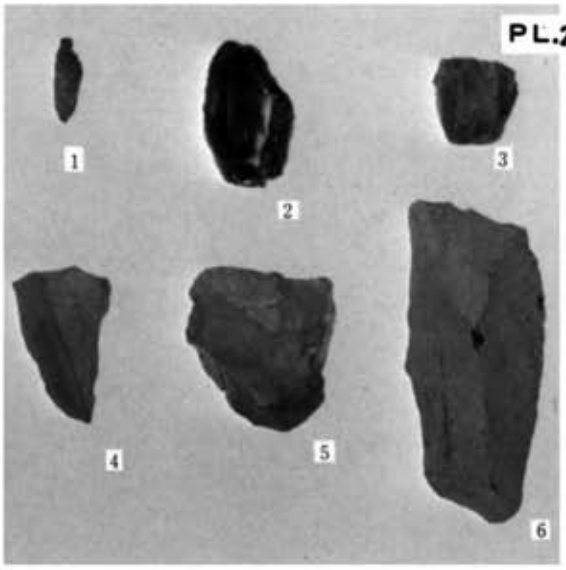


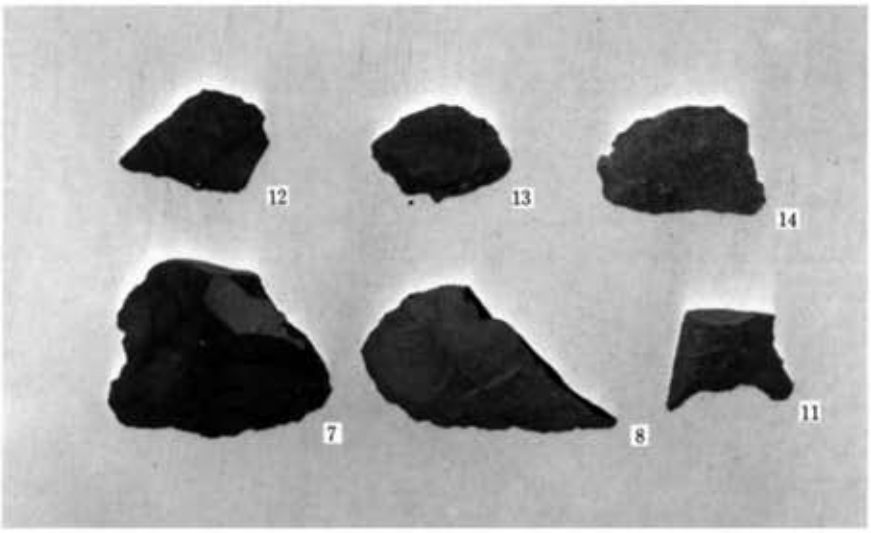
1　西原ＳＪ031甕棺墓
2　同　ＳＪ032甕棺墓
3　同　ＳＪ034中世墓

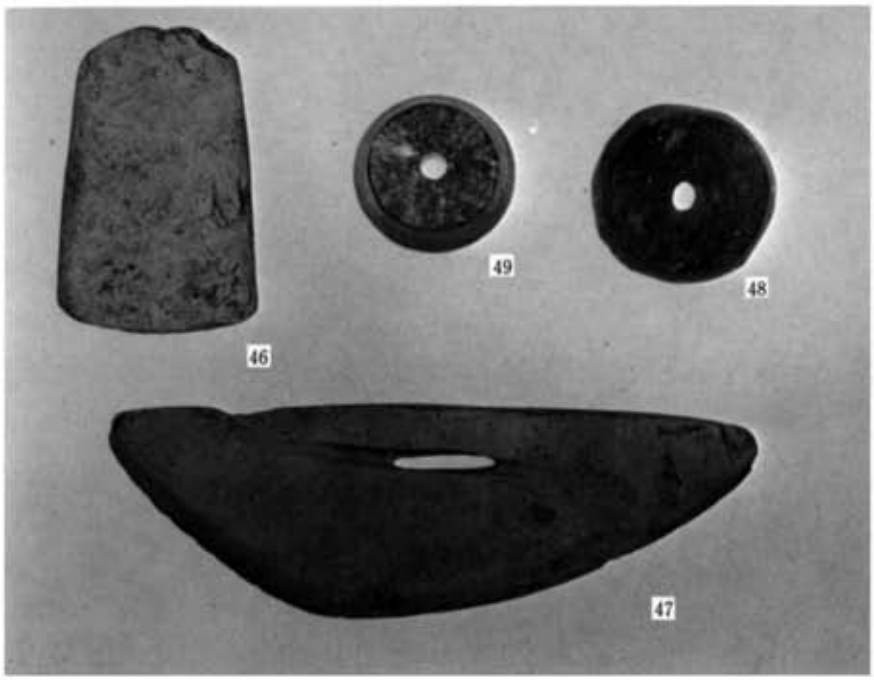


1　西原ＳＪ033壺棺墓　　2　同　壺棺下土器検出状況







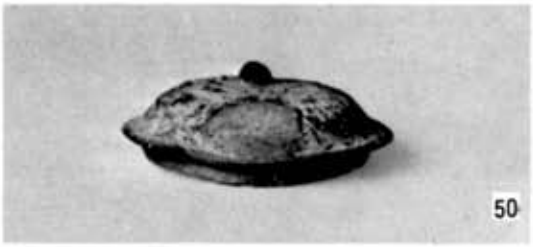


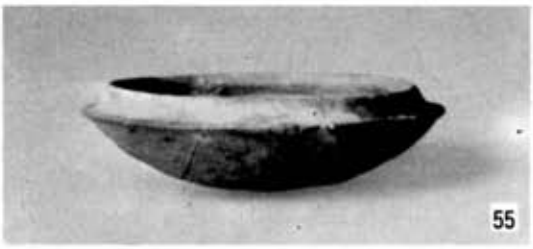
西原出土石器

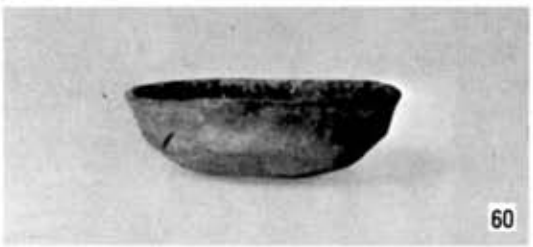
1～6	旧石器
7～8,11～25	縄文時代刃器
46～49	磨製石器・紡錘車

SJ032甕棺墓

9　西原SJ031甕棺
10　同 B区出土甕棺
400・406・407
同 SJ034中世墓出土土師器

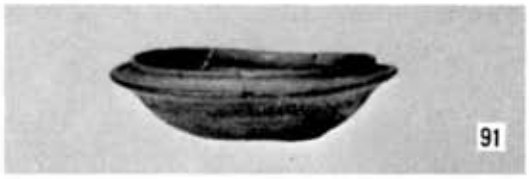


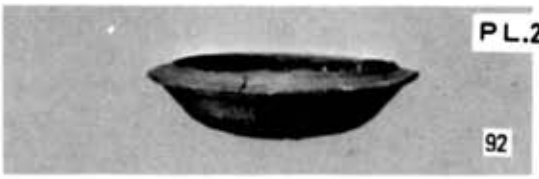


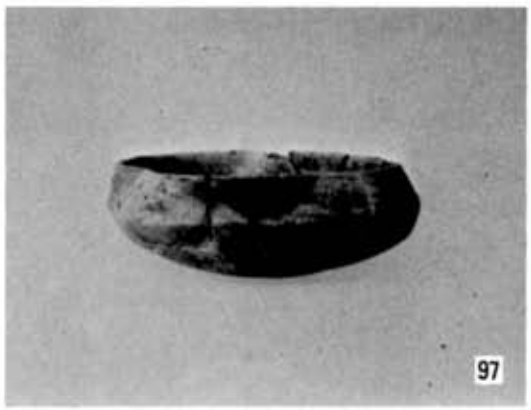


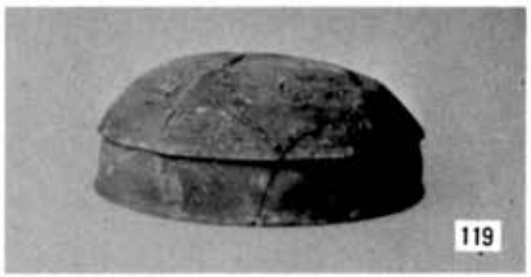
50・52・55・56・57　西原ＳＴ001古墳出土須恵器
59・60・61　同　土師器
64・65　同　ＳＴ002古墳出土須恵器

西原ＳＴ004古墳出土須恵器

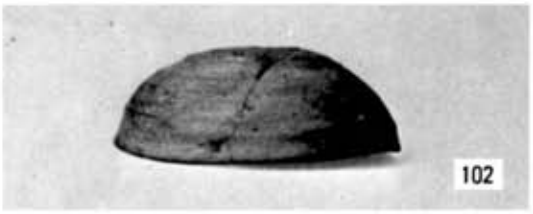


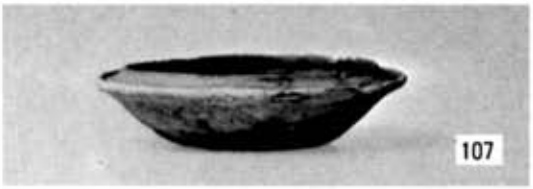


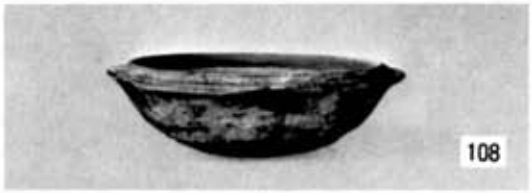




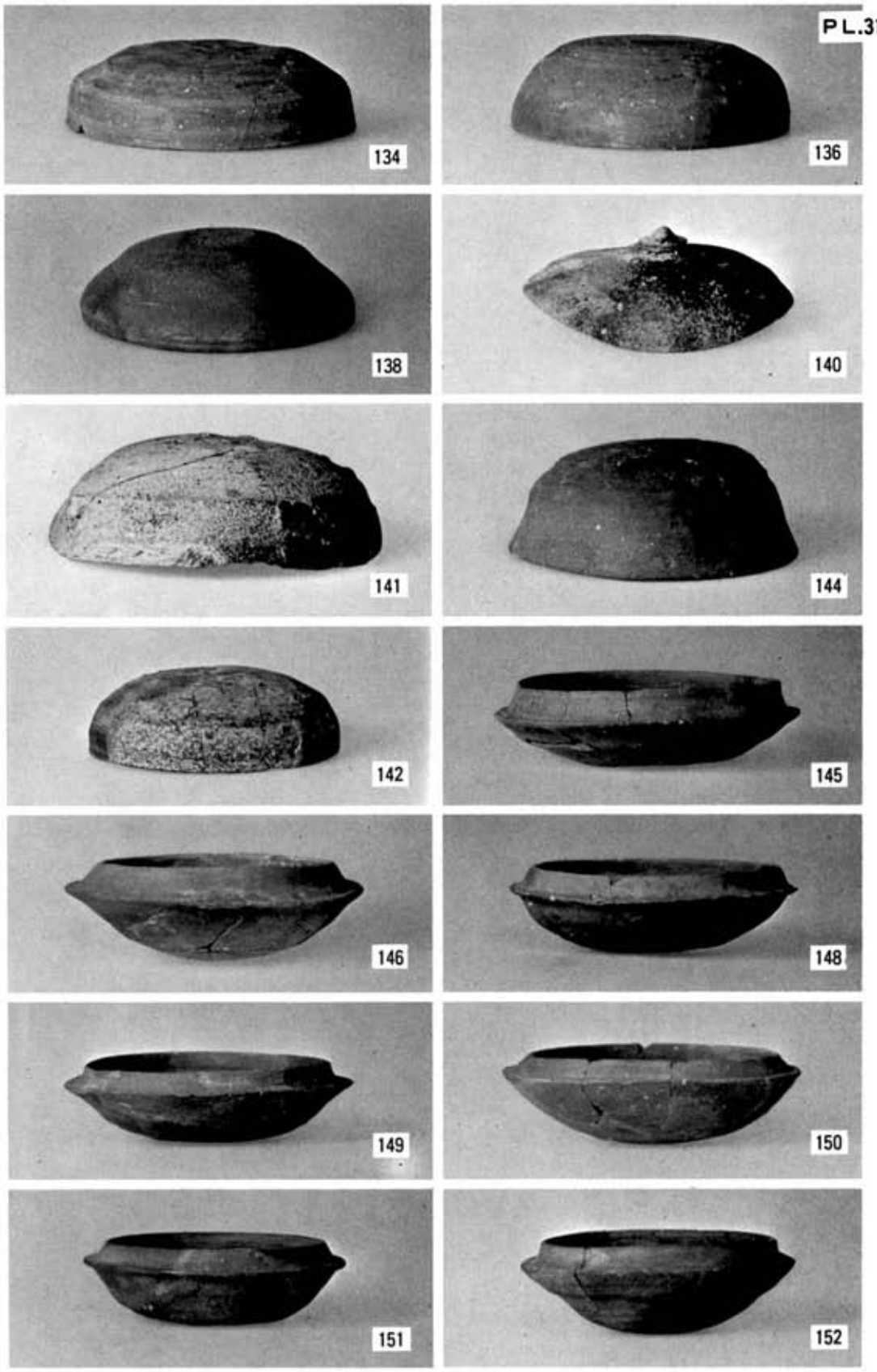
91～94　西原ＳＴ006古墳出土須恵器
97・98　　同　　出土土師器
119～123　同ＳＴ009古墳出土須恵器







西原ＳＴ007古墳出土須恵器



西原ＳＴ012古墳出土須恵器（蓋・杯）

153

154

155

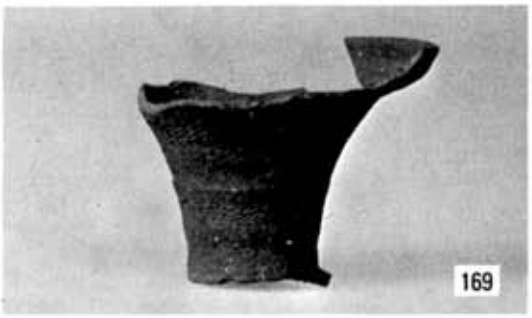
160

162

166

167

168

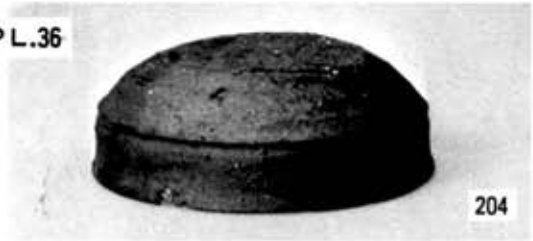

169

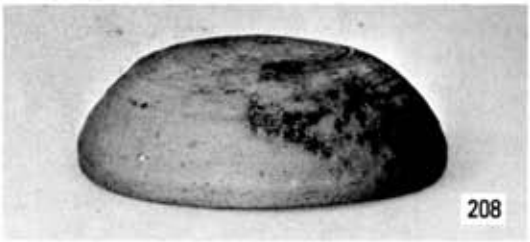
西原ＳＴ012古墳出土須恵器（高杯・瓶）

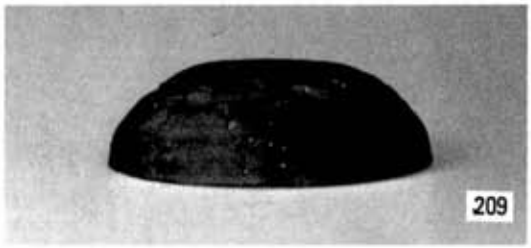
西原ＳＴ012古墳出土須恵器（壺・坩・提瓶）

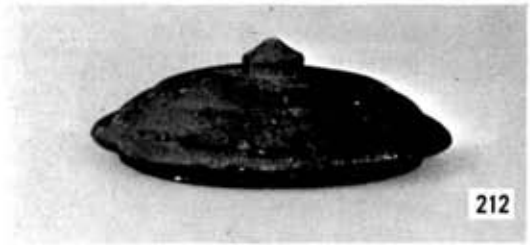
西原ＳＴ012古墳出土須恵器（甕）

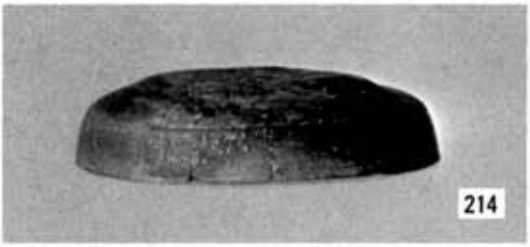
190・191　　西原ＳＴ012古墳出土須恵器（甕）
196～198・201～203　　同　　土師器

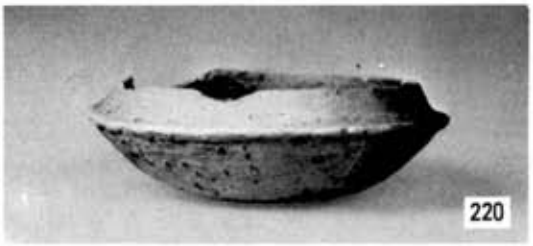


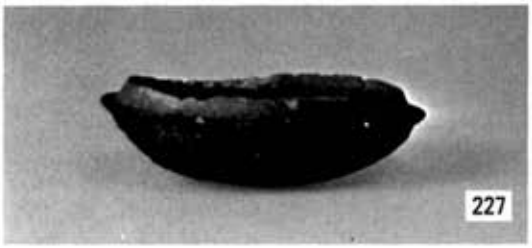






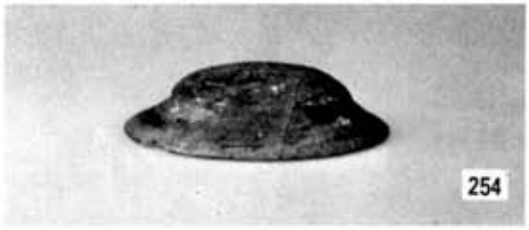


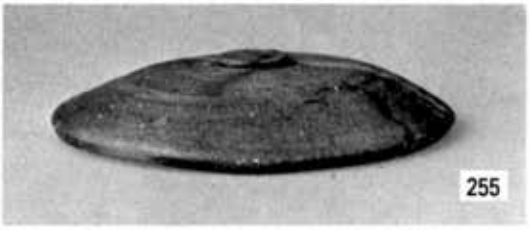


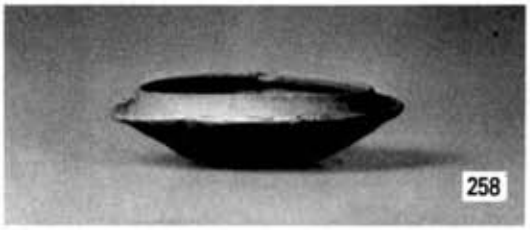


西原ＳＴ014古墳出土須恵器（蓋・杯）

223・231・236・238　西原ＳＴ014古墳出土須恵器（高杯・鼎・壺）
240～243・245・247　　同　　土師器





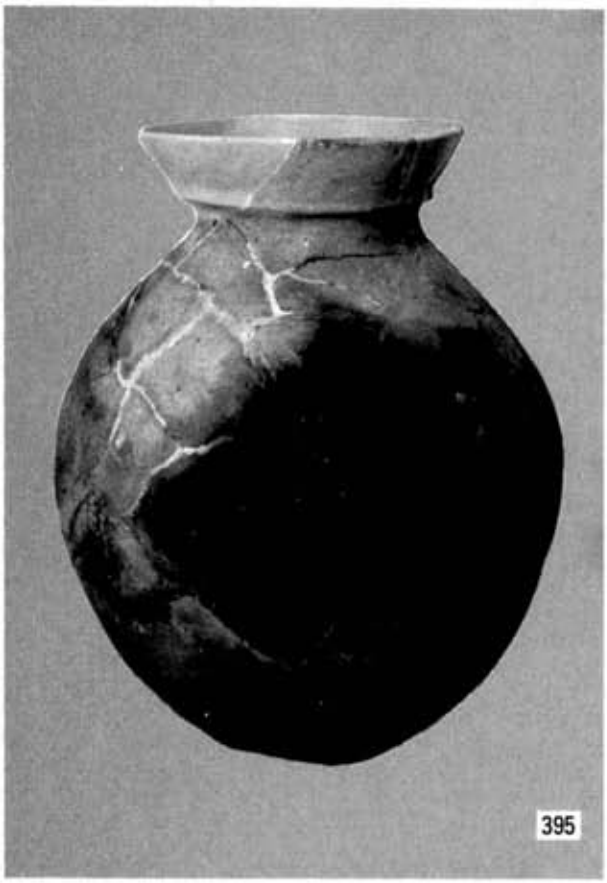


250・253～259　西原ＳＴ016・018・020古墳出土須恵器
264～268　　同　ＳＴ015・016・017古墳出土土師器

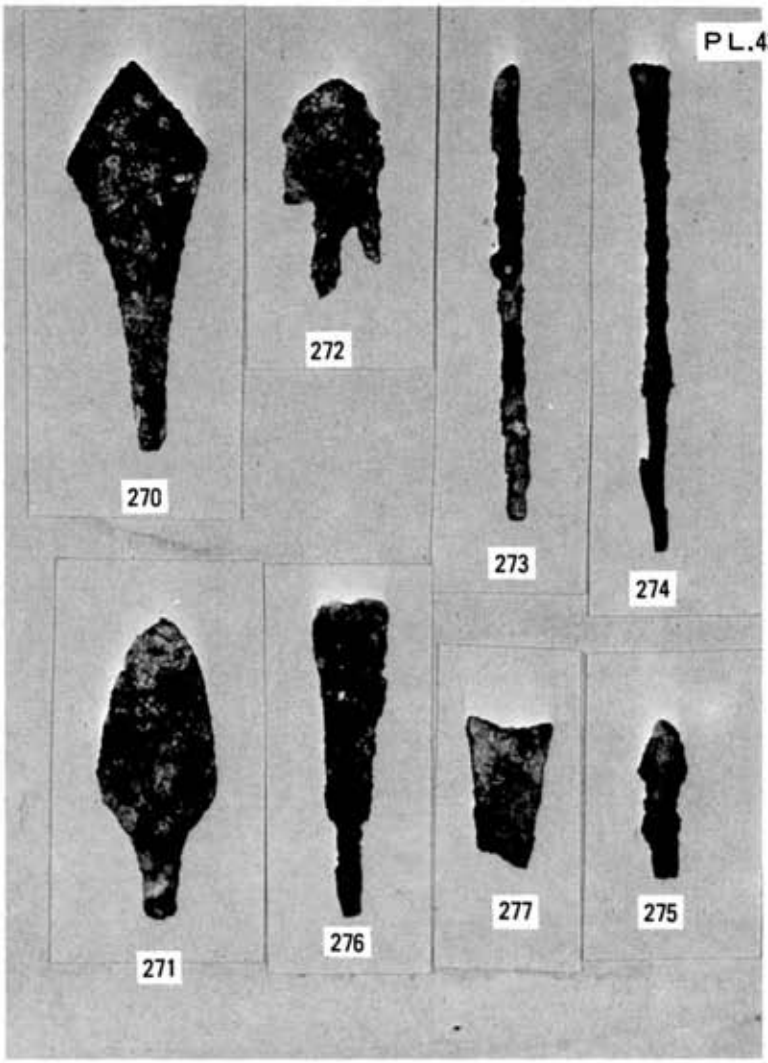
355・358・359・360・361・363・365　西原ＳＢ026住居跡出土土師器
357・362・364　同ＳＫ030竪穴出土土師器

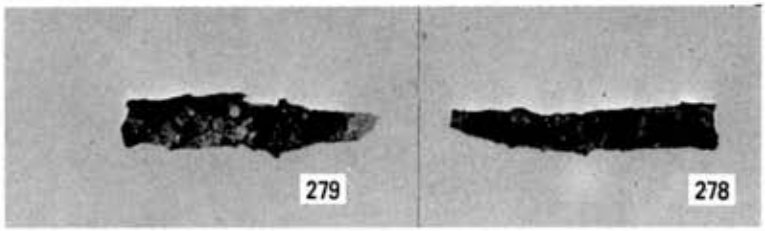
西原ＳＢ027住居跡出土土師器（甕・坩）

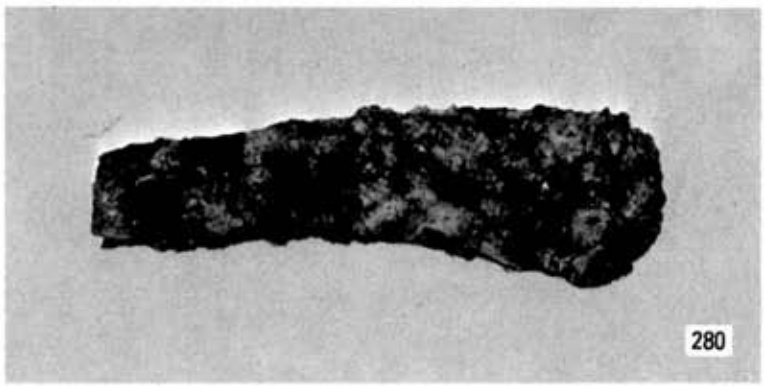
西原ＳＢ027住居跡出土土師器（坩・高杯・椀）



西原ＳＪ033壺棺墓出土土師器

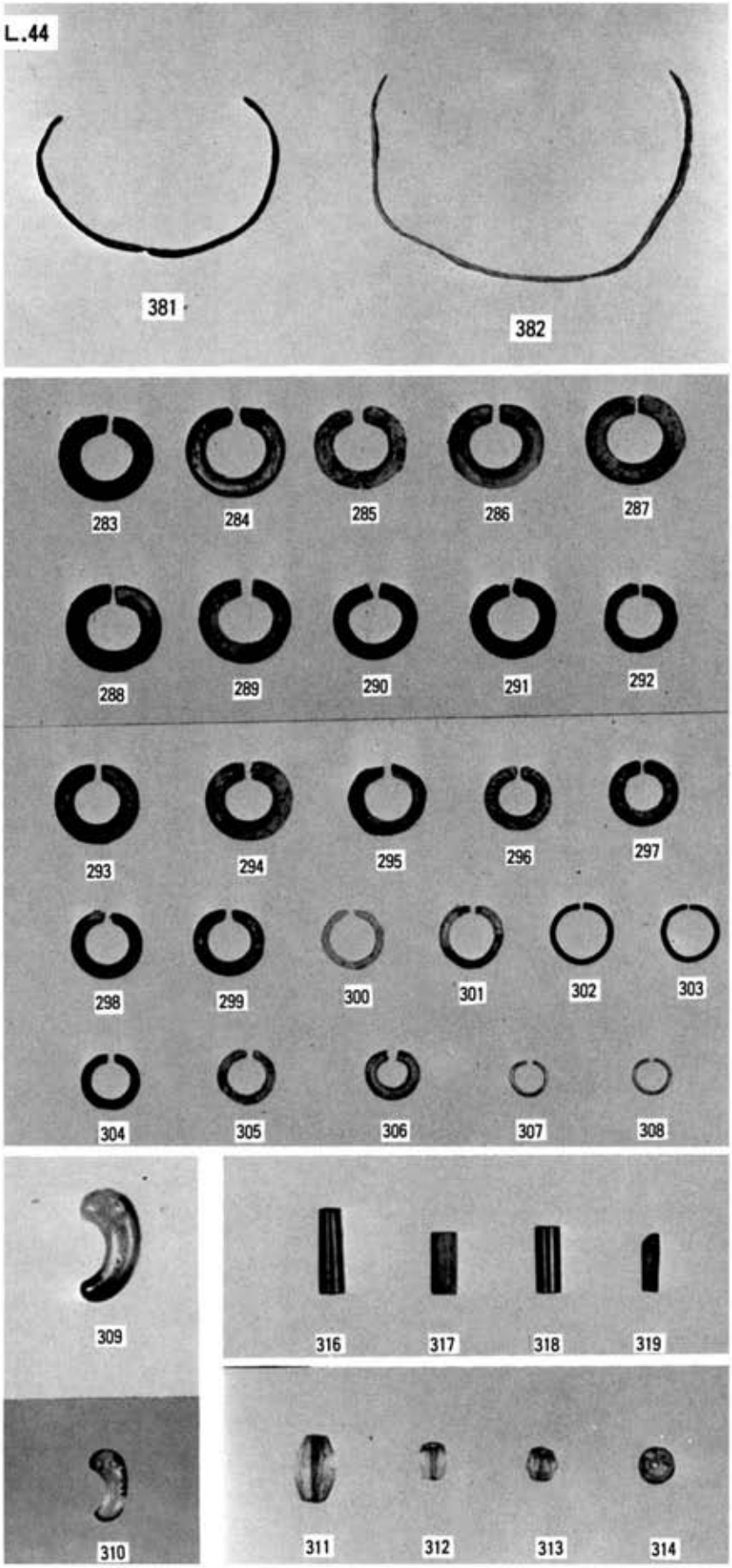






西原出土鉄器

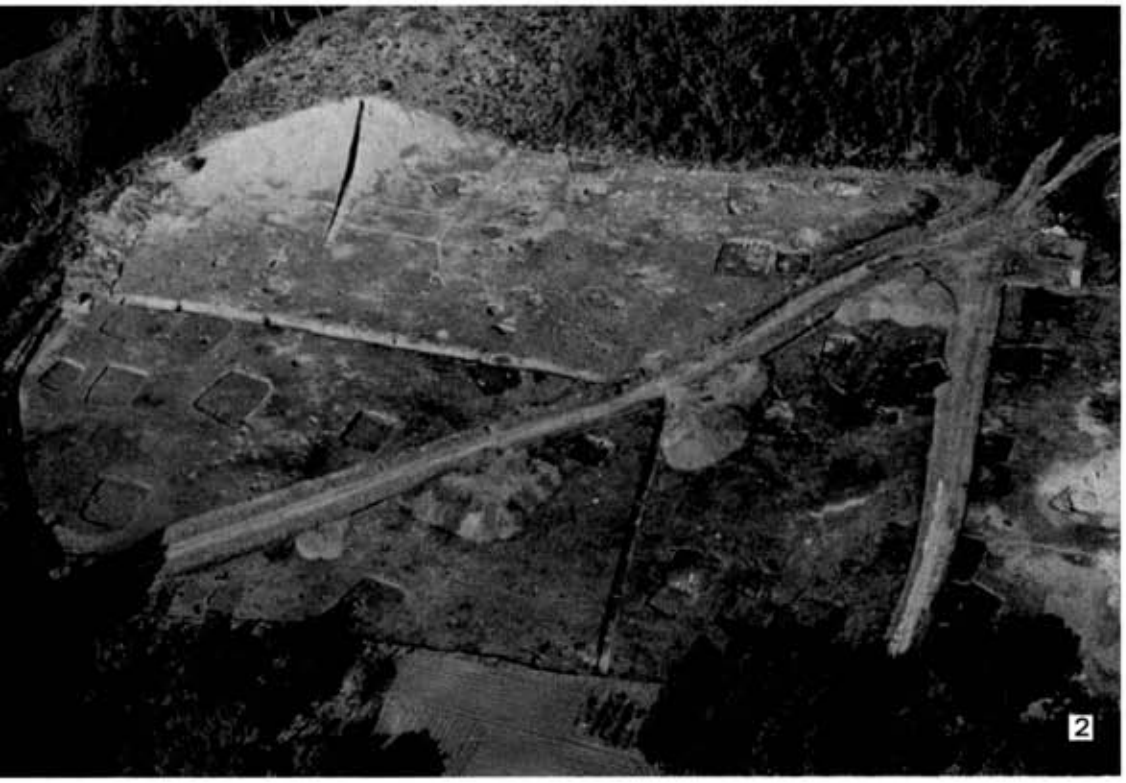
269	鉄剣
270～277	鉄鏃
278・279	刀子
280	鎌



西原出土装身具類
281・282　銅釧
283～308　耳環
309・310　勾玉
316～319　管玉
311～314　切子玉
遺物配列は
（Fig. 72・73に一致）

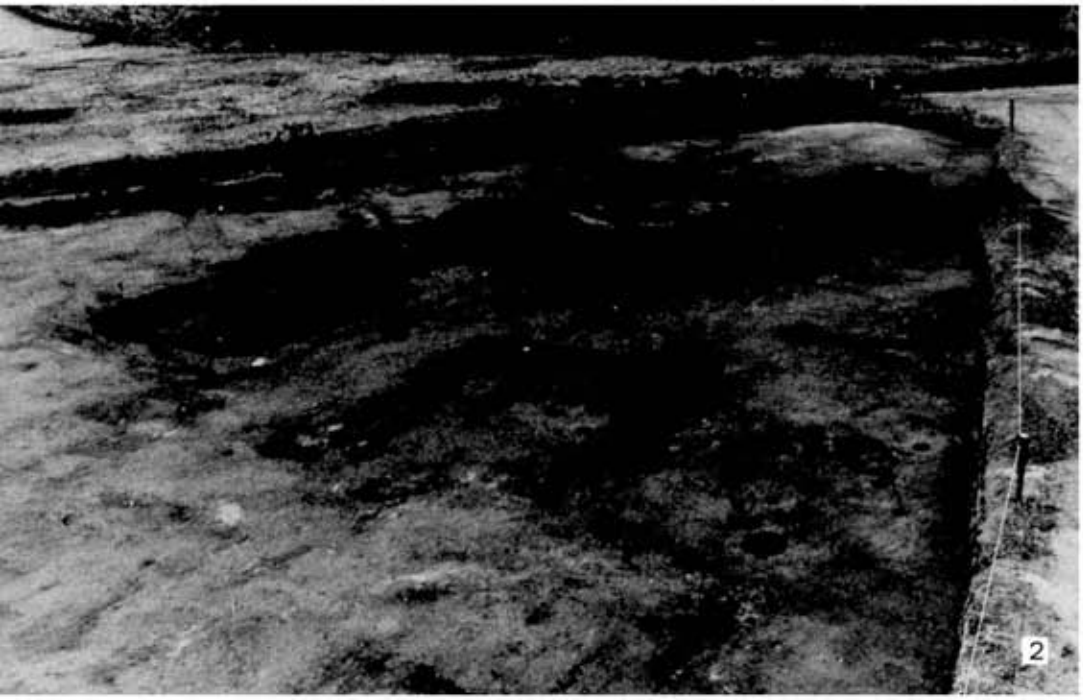
浦　田　遺　跡

浦田遺跡〈航空写真〉



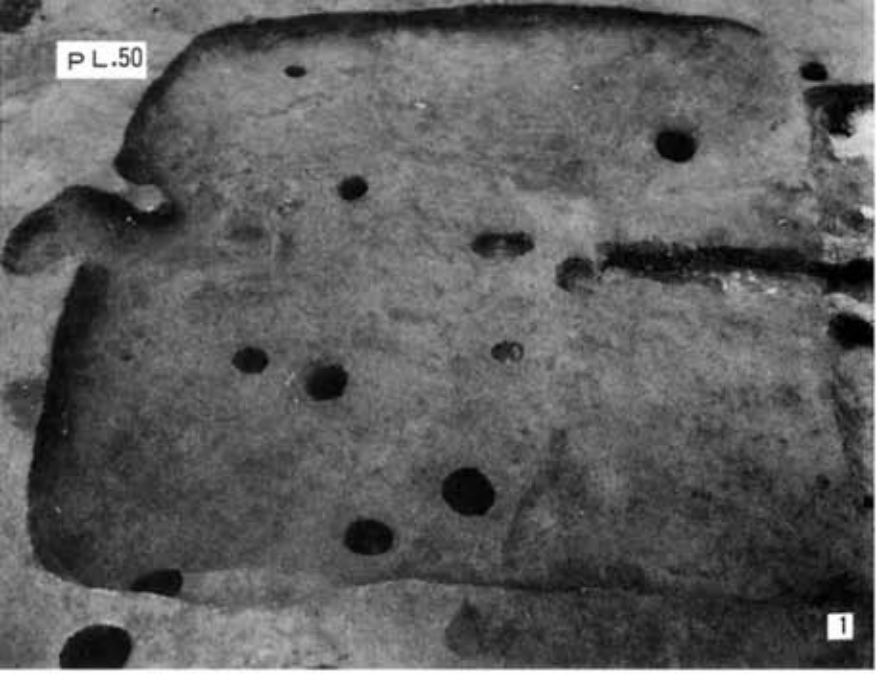
1　浦田遺跡全景〈真上から〉　　2　同　〈南から〉

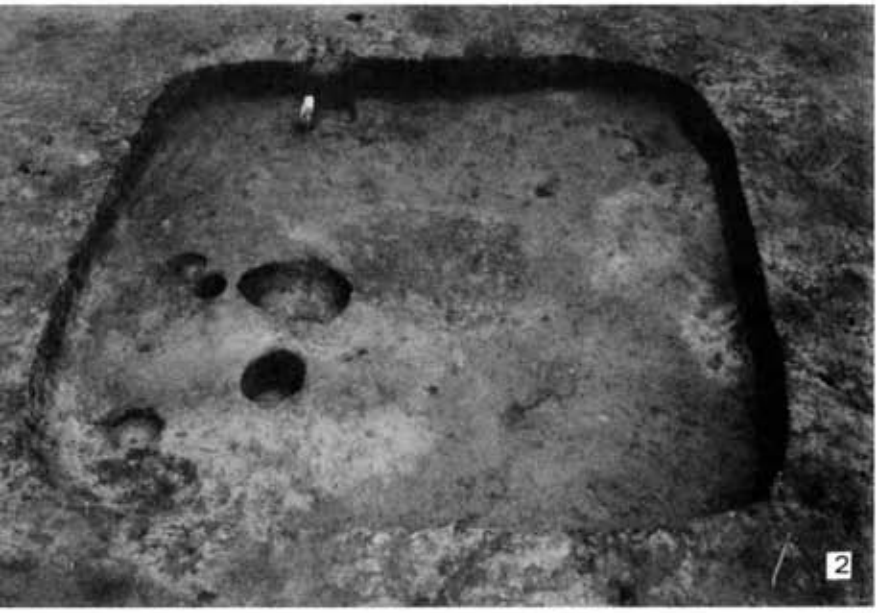
1　浦田A区近景〈北から〉　　2　同　〈北東から〉



1　浦田B区〈東から〉　　2　同　〈東南から〉

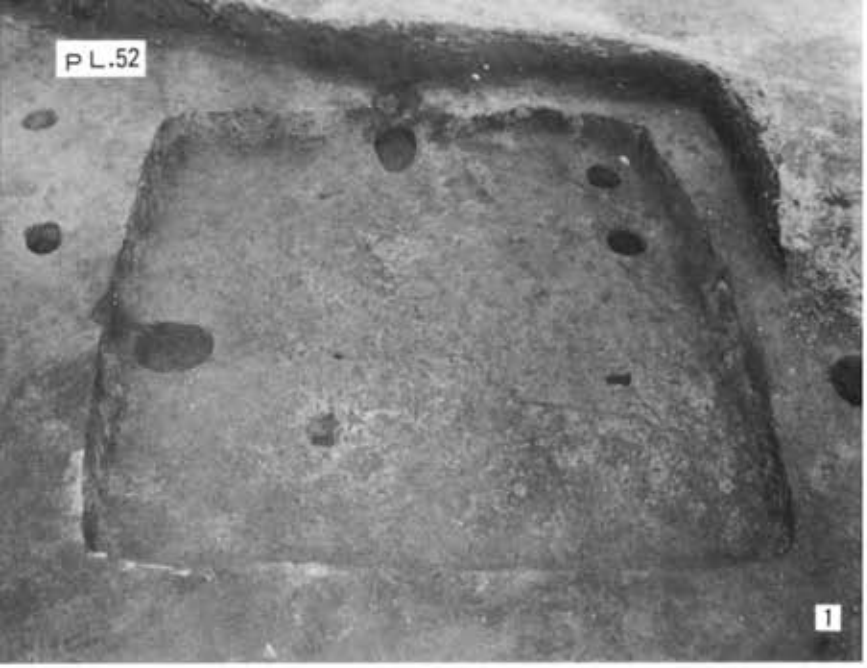
1　浦田C区〈北から〉
2　　同　〈南から〉



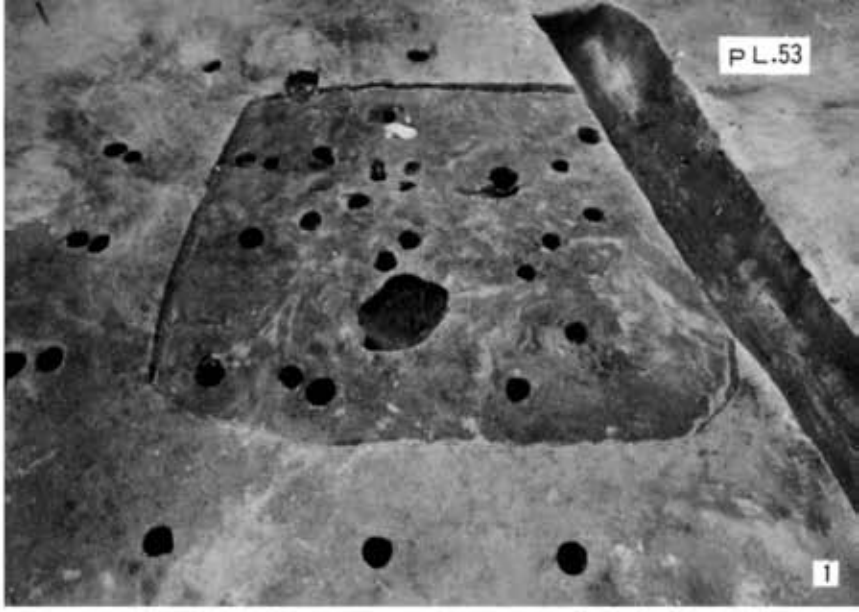


1　浦田ＳＢ005住居跡
2　同　ＳＢ008住居跡
3　同　　カマド部分

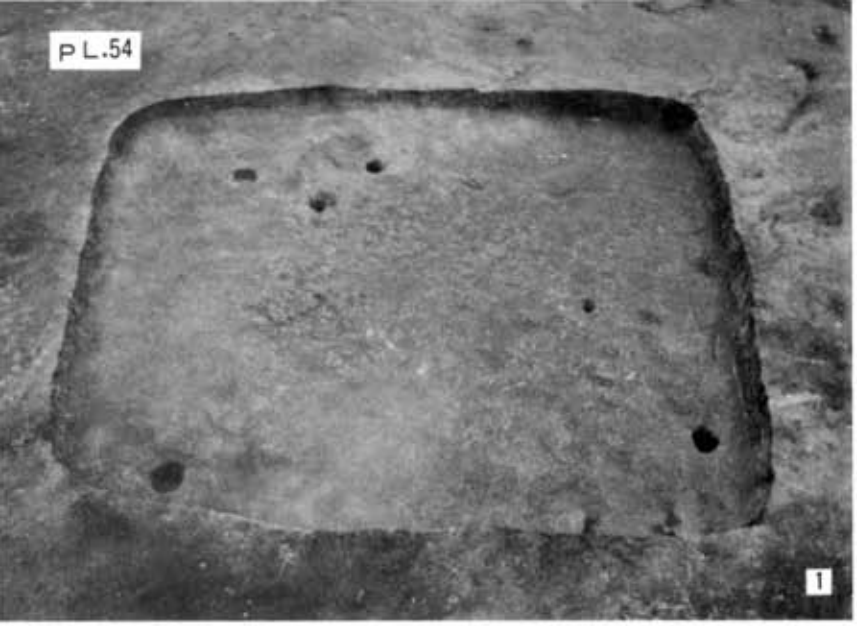
1　浦田S B011住居跡
2　同　　カマド部分
3　同　S B012住居跡

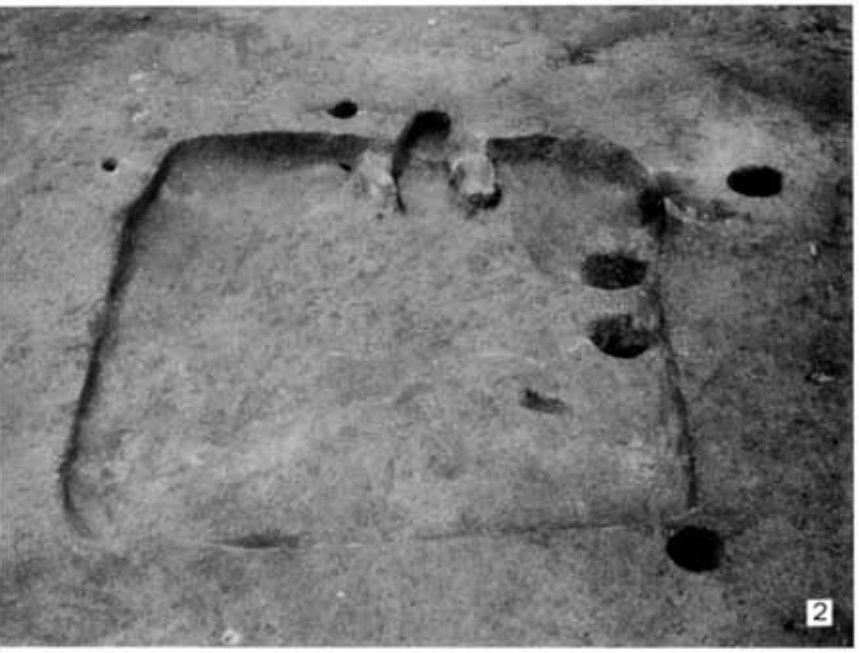


1　浦田SB013住居跡
2　同　SB014住居跡
3　同　SB016住居跡



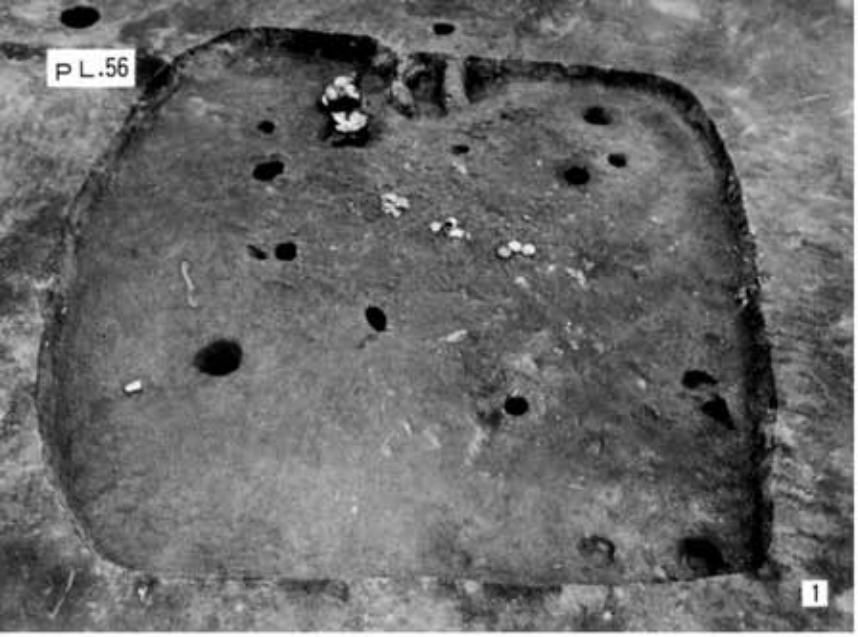
1　浦田ＳＢ015住居跡〈東から〉
2　　同　　〈北から〉
3　同　ＳＢ017住居跡〈北から〉





1　浦田SB018住居跡〈東から〉
2　同 SB019住居跡〈西から〉
3　同　カマド部分

1　浦田ＳＢ020住居跡〈東から〉
2　　同　　〈北から〉
3　同　　カマド部分

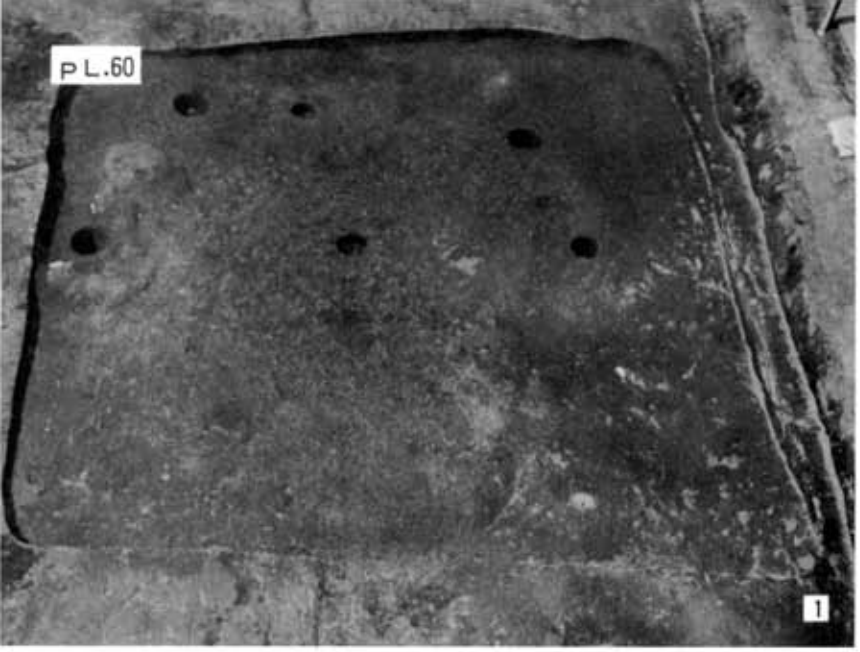


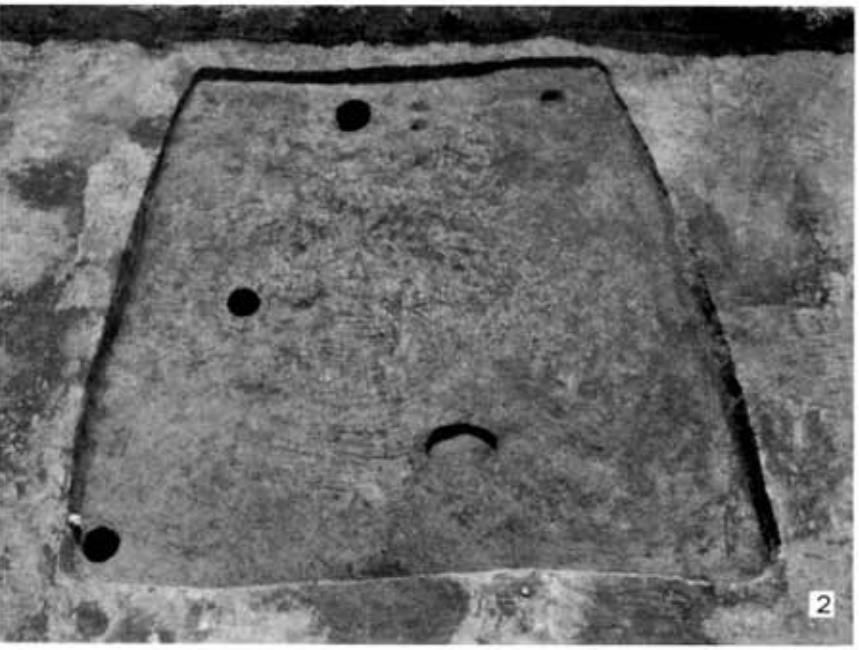
1　浦田SB021住居跡〈北から〉
2　　同　　カマド部分
3　同 SB024住居跡〈東から〉

1　浦田ＳＢ023住居跡〈南から〉
2　　同　　カマド部分
3　同 ＳＢ025住居跡〈南から〉

1　浦田SB028住居跡〈東から〉
2　　同　　カマド部分
3　同 SB026住居跡〈西から〉

1　浦田ＳＢ029住居跡〈西から〉
2　　同　　カマド部分
3　同 ＳＢ027住居跡〈南から〉





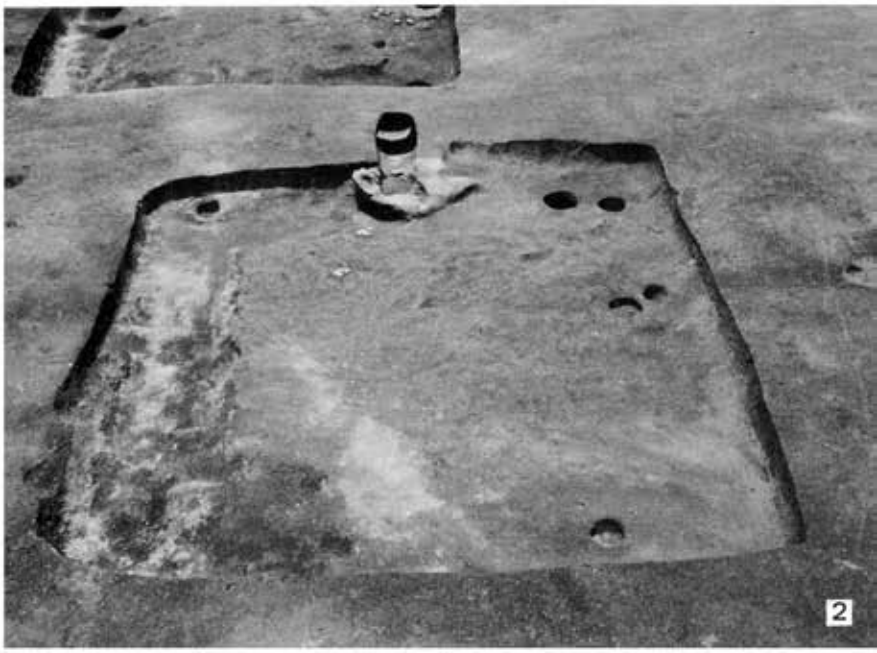
1　浦田SB036住居跡〈東から〉
2　同　SB037住居跡〈東から〉
3　同　SB038住居跡〈東から〉

1　浦田SB039住居跡〈東から〉
2　同 SB040住居跡〈北から〉
3　同 SB041住居跡〈東から〉

1　浦田ＳＢ042住居跡〈南から〉
2　　同　　カマド部分
3　同 ＳＢ031掘立柱建物跡〈西から〉

1　浦田S B032～034掘立柱建物跡
2　　同 近景〈西から〉
3　　同 近景〈東から〉

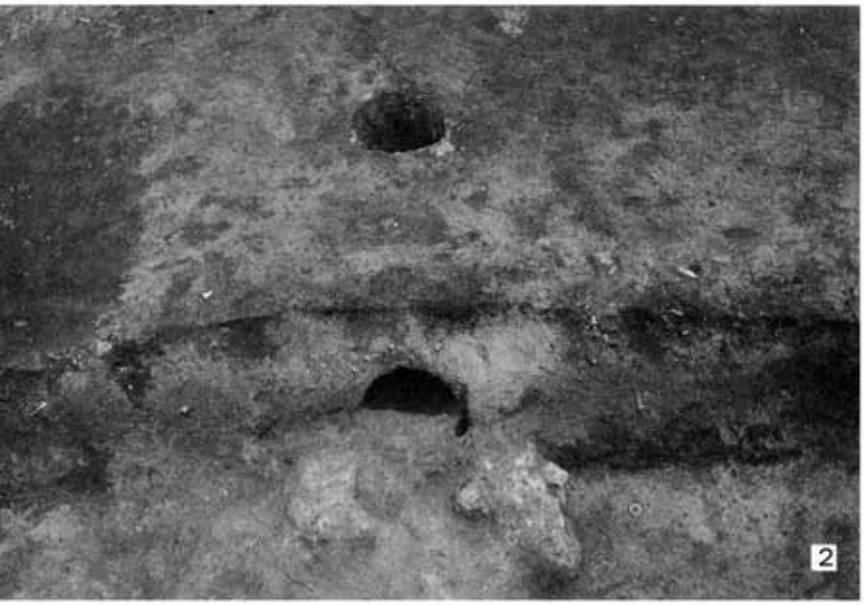
1　浦田SB001住居跡〈南から〉
2　同　　カマド部分
3　同 SB002住居跡〈南から〉



1　浦田ＳＢ002住居跡カマド部分
2　　同　ＳＢ003住居跡〈東から〉
3　　　同　　カマド部分

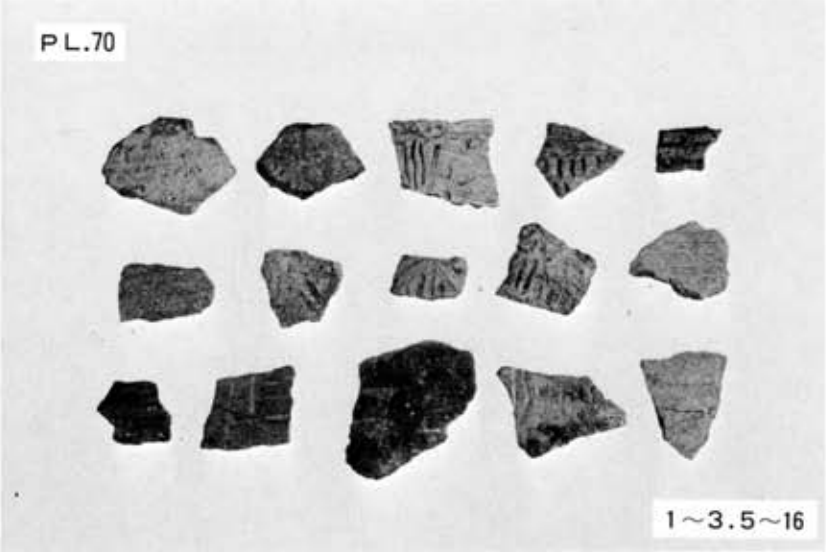
1　浦田SB004住居跡〈南から〉
2　同　　カマド部分
3　同　SB006住居跡〈東から〉

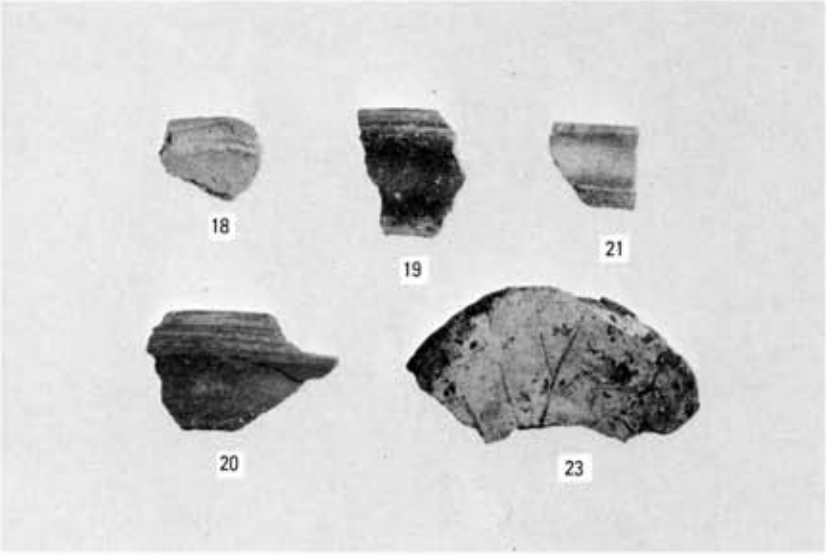
1　浦田ＳＢ006住居跡カマド部分
2　同　ＳＢ009住居跡〈南から〉
3　同　　カマド部分



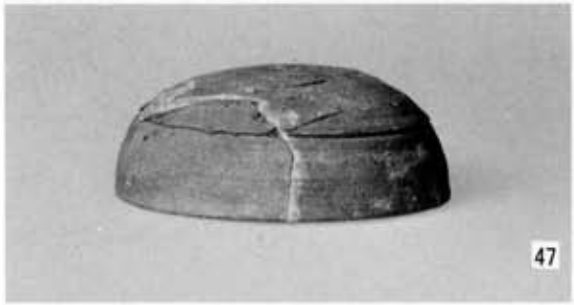
1　浦田ＳＢ022住居跡〈西から〉
2　　同　　カマド部分
3　　同　ＳＤ010溝〈南から〉

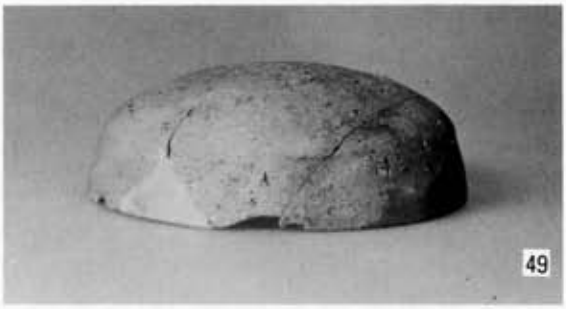
1　浦田ＳＴ045古墳遠景
2　　同　近景

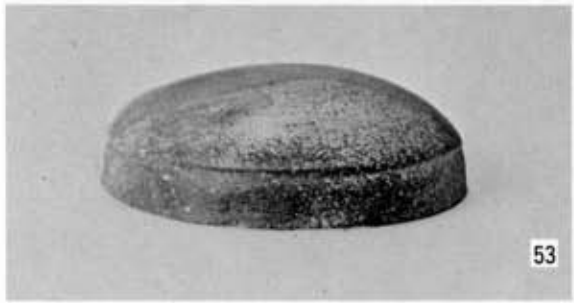


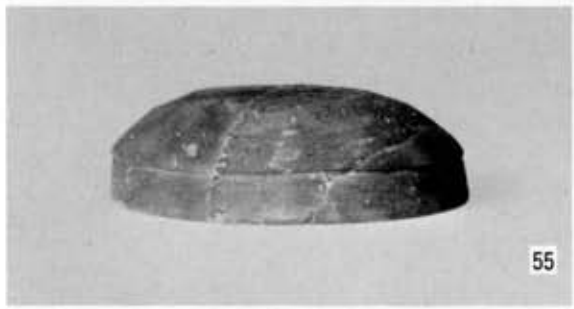


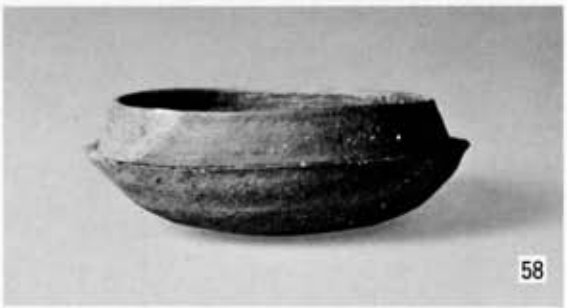
1～3　浦田出土縄文土器
5～16　　同
18～23　　同
4　　同　　〈曽畑式土器〉



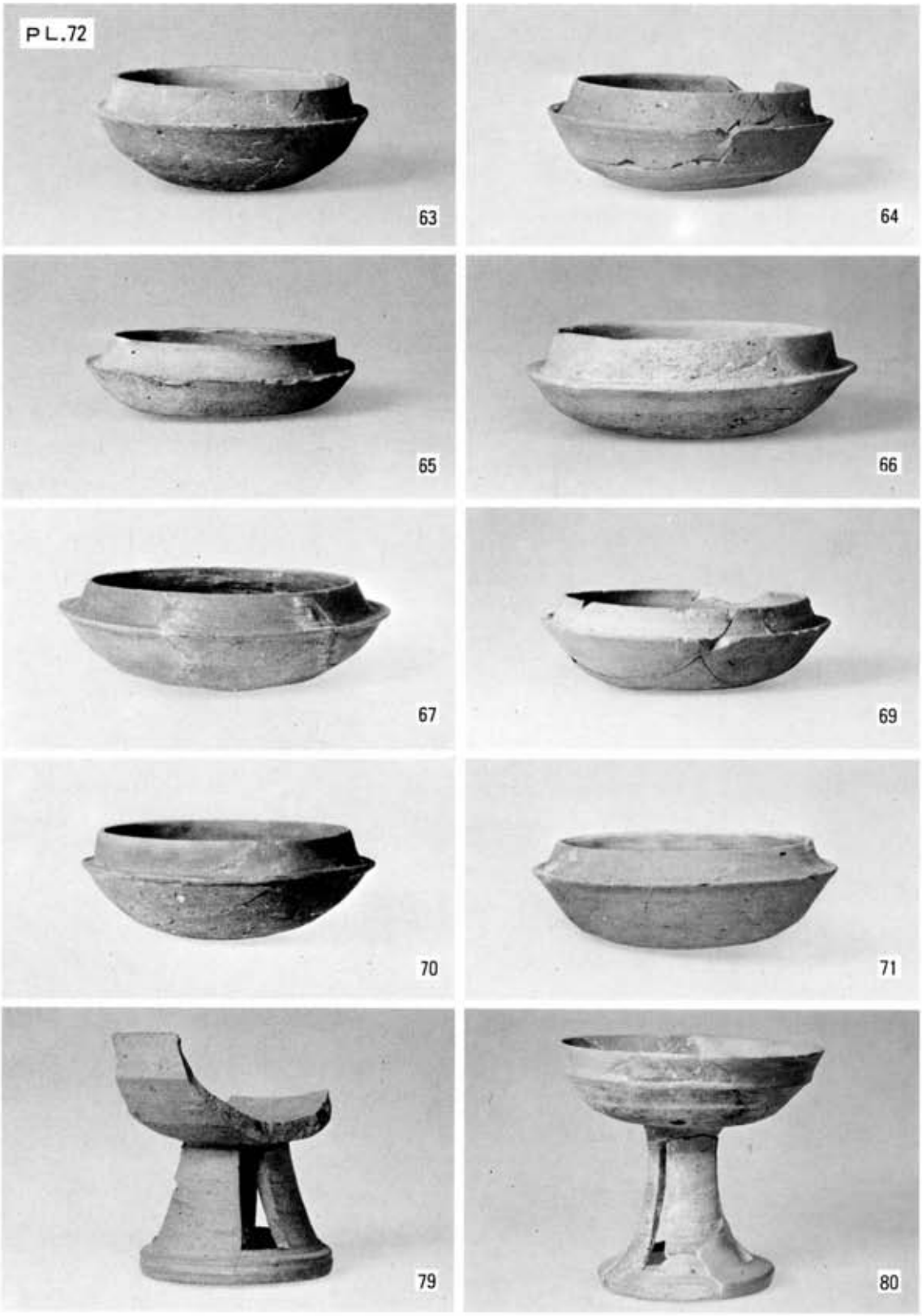




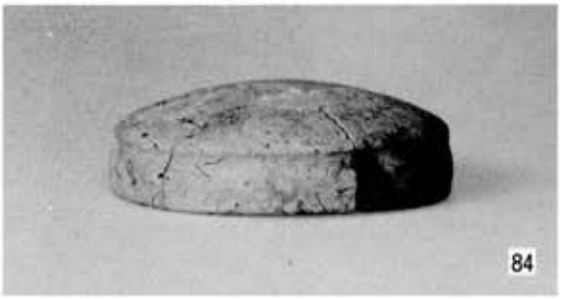


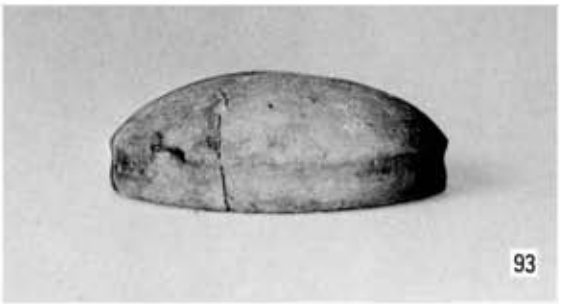


43・46・47・49・62　浦田ＳＢ021住居跡出土須恵器
53　同　ＳＢ015住居跡出土須恵器
54　同　ＳＢ017住居跡出土須恵器
55　同　ＳＢ018住居跡出土須恵器
58　同　表面採集須恵器
61　同　Ｃ区出土須恵器

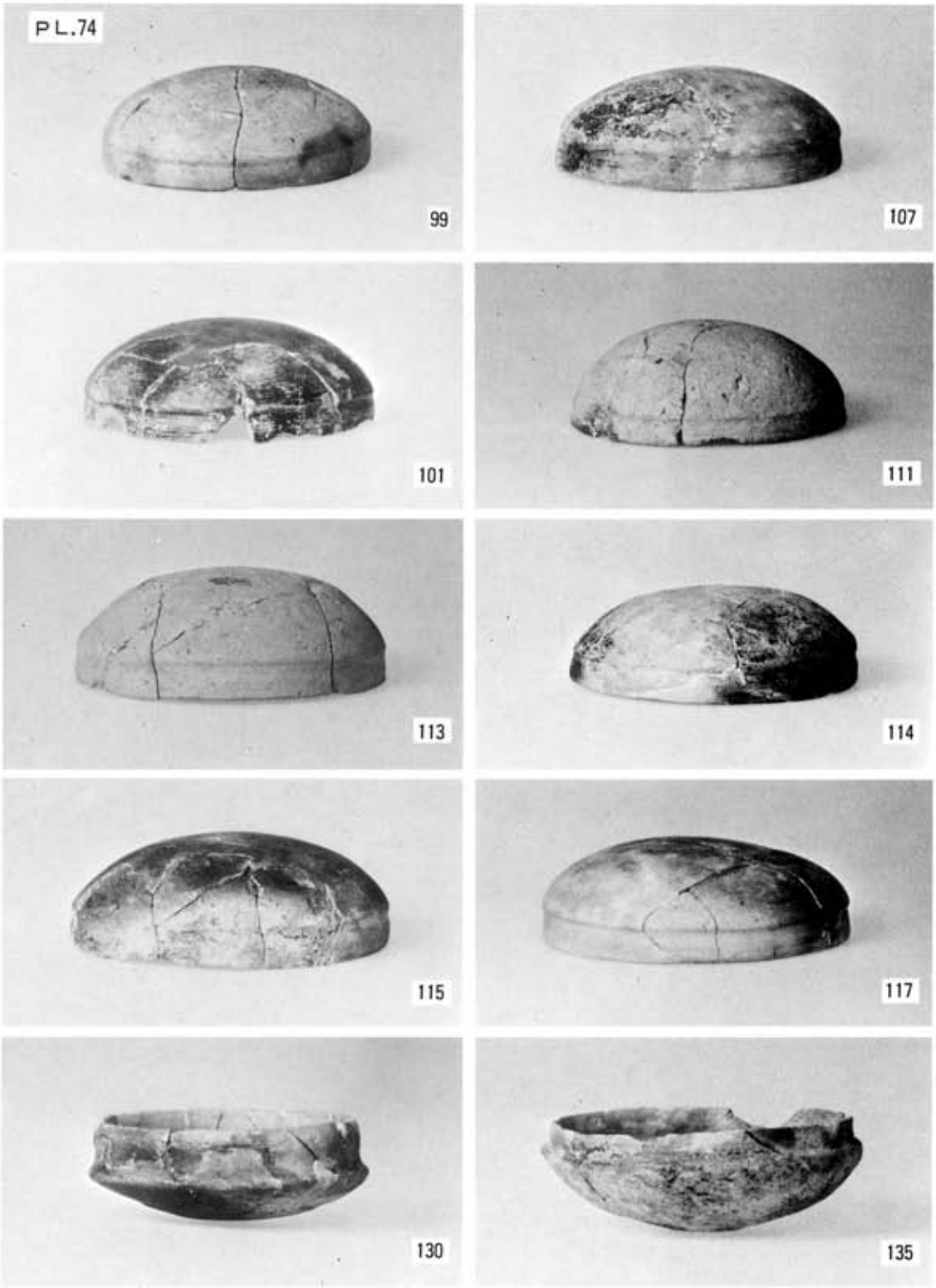


63～66・80　浦田ＳＢ021住居跡出土須恵器
67　同　ＳＢ020住居跡出土須恵器
69　同　ＳＢ023住居跡出土須恵器
71　同　ＳＢ027住居跡出土須恵器
70　浦田ＳＢ018住居跡出土須恵器
79　同　ＳＢ016住居跡出土須恵器



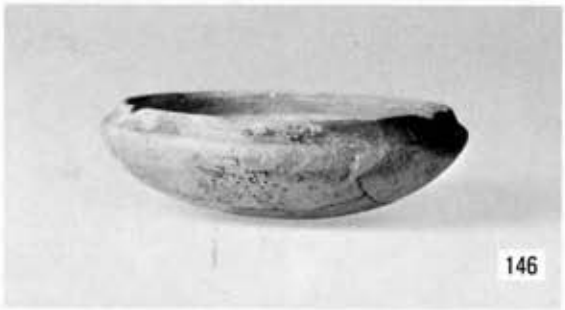


83・87・96　浦田ＳＢ021住居跡出土須恵器
87・96　　同　　土師器
84・93　　同　ＳＢ018住居跡出土土師器
89　　同　ＳＢ028住居跡出土土師器
90　　同　ＳＢ012住居跡出土土師器

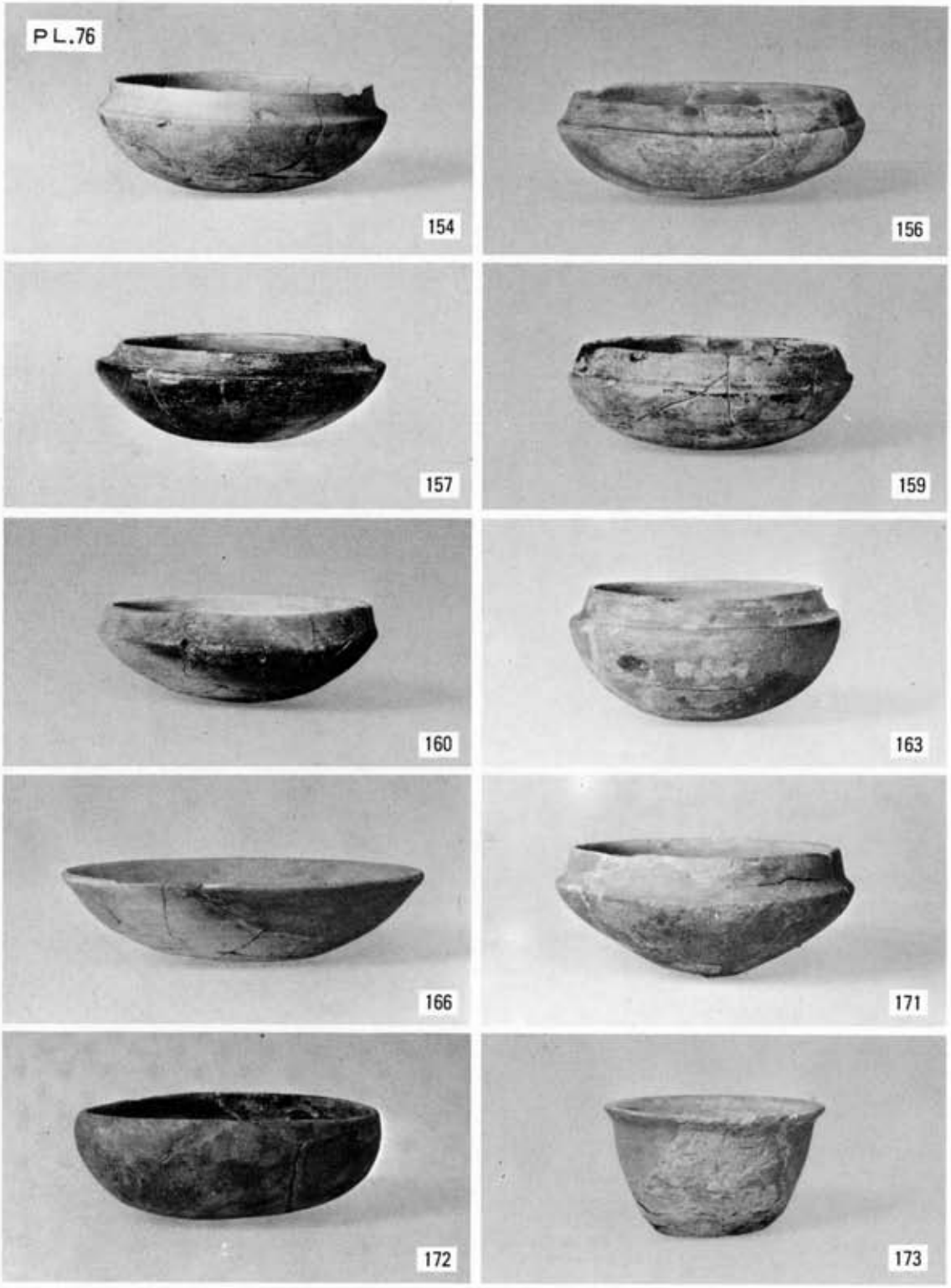


99　浦田ＳＢ011住居跡出土土師器
101・117　同　ＳＢ021住居跡出土土師器
113　同　ＳＢ012住居跡出土土師器
130　同　ＳＢ024住居跡出土土師器

107・115　浦田ＳＢ017住居跡出土土師器
111・114　同　ＳＢ020住居跡出土土師器
135　同　ＳＢ023住居跡出土土師器

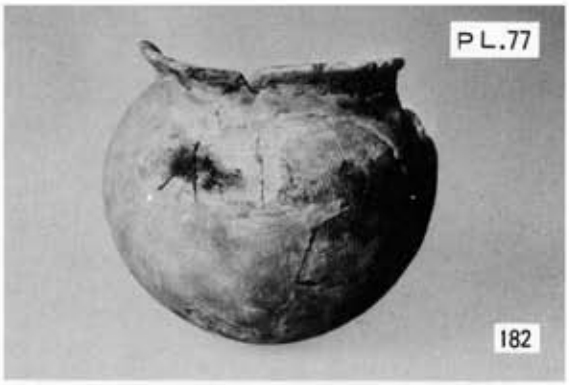


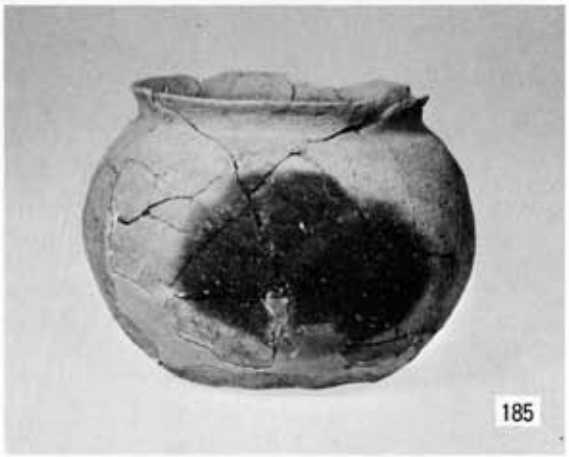
137・149	浦田ＳＢ012住居跡出土土師器
138・152	同 ＳＢ021住居跡出土土師器
143・146・148・151	同 ＳＢ023住居跡出土土師器
145	同 ＳＢ027住居跡出土土師器
150	同 ＳＢ028住居跡出土土師器



154　浦田ＳＢ023住居跡出土土師器
157・166　同　ＳＢ003住居跡出土土師器
163　同　ＳＢ037住居跡出土土師器
172　同　ＳＢ022住居跡出土土師器

156　浦田ＳＢ015住居跡出土土師器
159・160・171　同　ＳＢ021住居跡出土土師器
173　同　ＳＢ022住居跡出土土師器



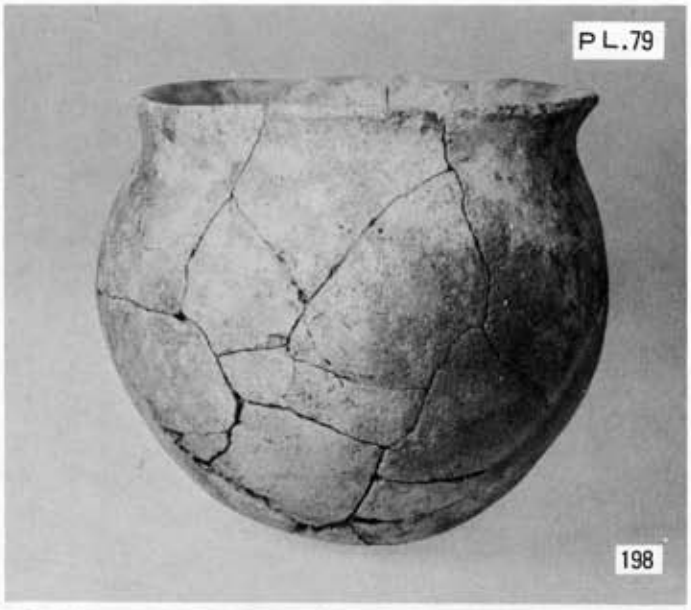


177・178・182　浦田ＳＢ021住居跡出土土師器
183　同　ＳＢ027住居跡出土土師器
185　同　ＳＢ009住居跡出土土師器
186　同　ＳＢ011住居跡出土土師器

179　浦田Ｃ区ＳＴ044古墳周溝内出土土師器
190　同　Ｂ区出土土師器

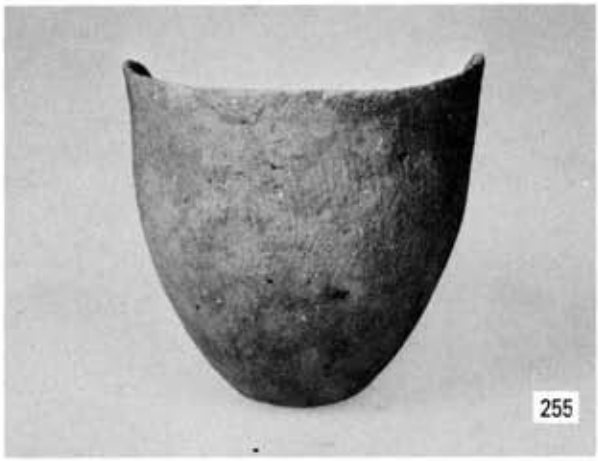
187・189・191　浦田ＳＢ021住居跡出土土師器
188・194　　同　出土土師器

192　浦田ＳＢ011住居跡出土土師器
193　　同　ＳＢ023住居跡出土土師器

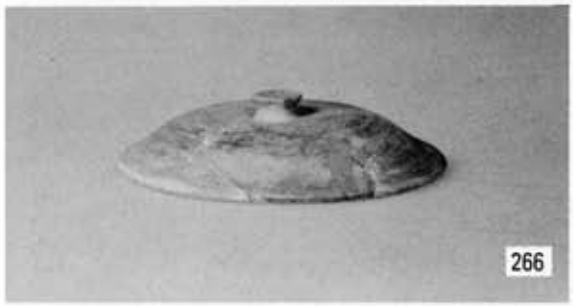


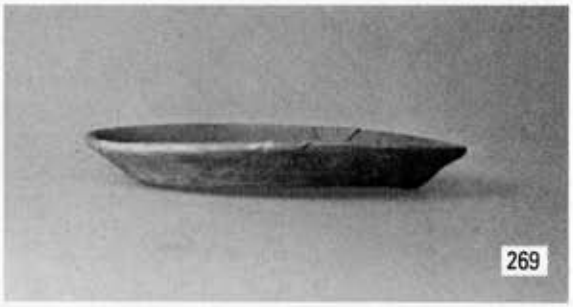
197　浦田出土土師器
199　　同　ＳＢ008住居跡出土土師器
248　　同　ＳＢ027住居出土土師器

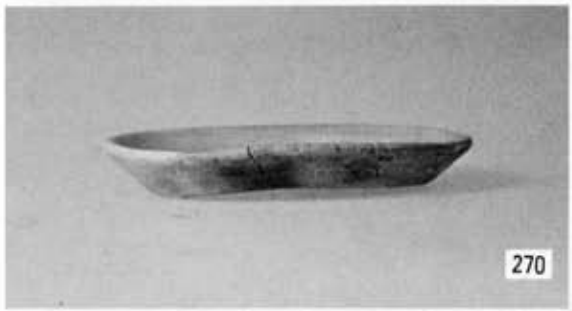
198　浦田ＳＢ021住居跡出土土師器
246　　同　ＳＢ001住居跡出土土師器
249　　同　ＳＢ022住居跡出土土師器

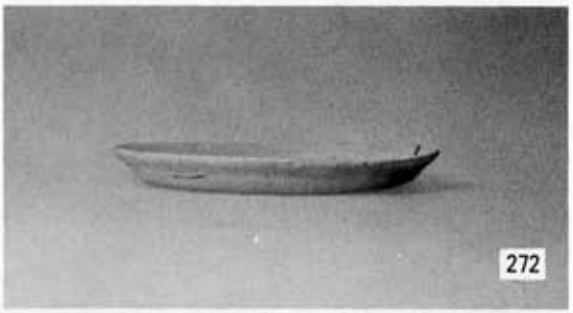


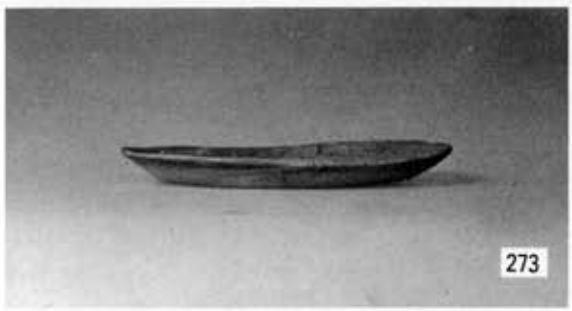
250　浦田ＳＢ011住居跡出土土師器
251　同　ＳＢ004住居跡出土土師器
255　同　ＳＢ028住居跡出土土師器
256　同　ＳＢ027住居跡出土土師器
257　同　ＳＢ021住居跡出土土師器
258　同　ＳＢ017住居跡出土土師器
259　同　ＳＢ023住居跡出土土師器

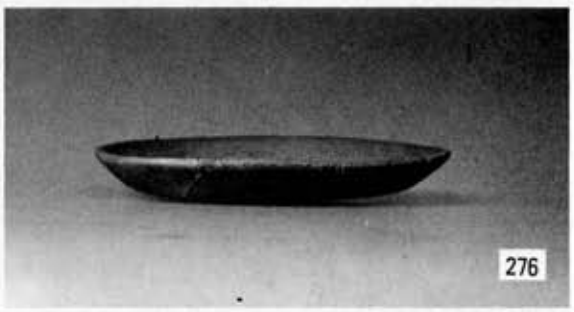


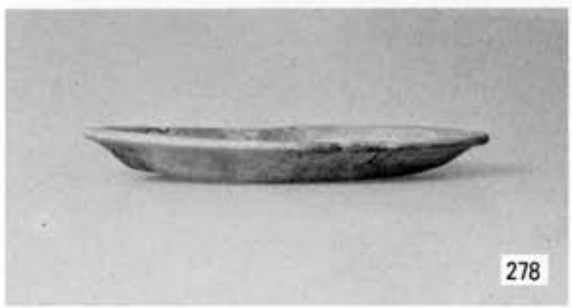


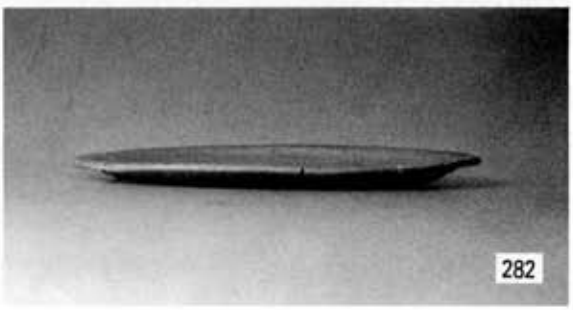




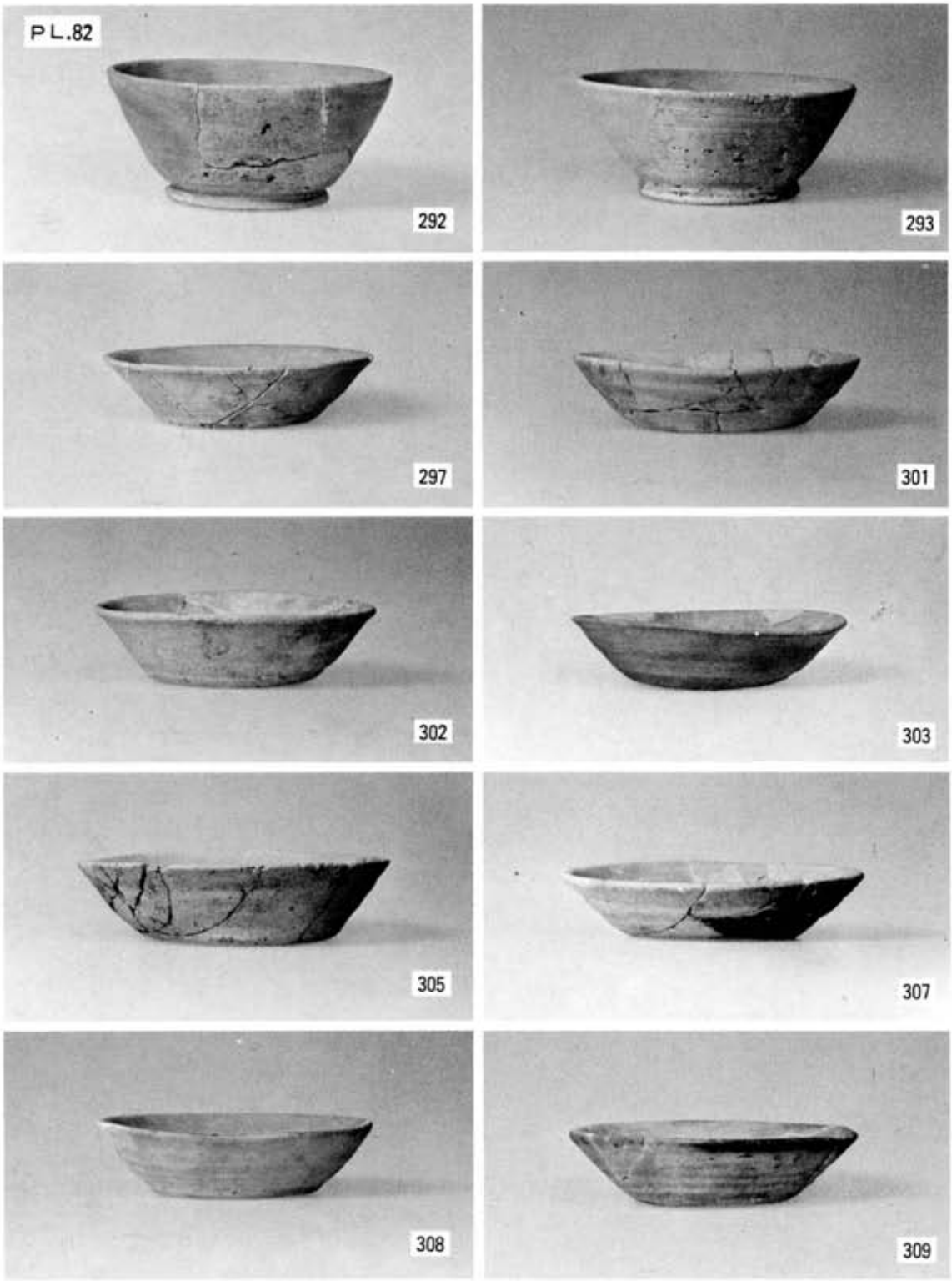






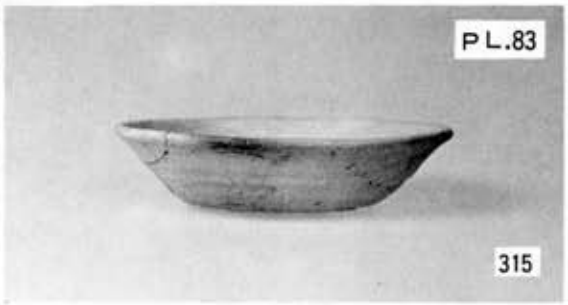


260・273　浦田ＳＢ011住居跡出土土師器
266・278・282　同　ＳＢ026住居跡出土土師器
272　同　ＳＢ003住居跡出土土師器
265　浦田ＳＢ001住居跡出土土師器
269・270　同　ＳＢ006住居跡出土土師器
276　同　ＳＢ028住居跡出土土師器



292　浦田ＳＢ009住居跡出土土師器
297　同　ＳＢ002住居跡出土土師器
302　同　ＳＢ011住居跡出土土師器
305　同　ＳＢ020住居跡出土土師器
308　同　ＳＢ008住居跡出土土師器

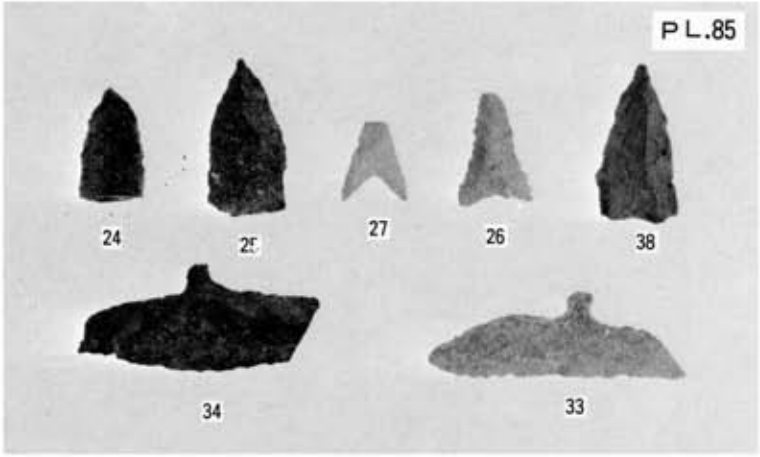
293　浦田ＳＢ012住居跡出土土師器
301　同　ＳＢ027住居跡出土土師器
303　同　ＳＢ002住居跡出土土師器
307　同　ＳＢ022住居跡出土土師器
309　同　ＳＢ001住居跡出土土師器

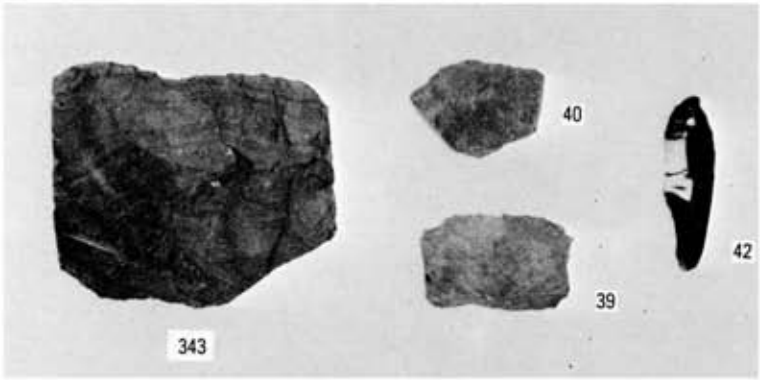


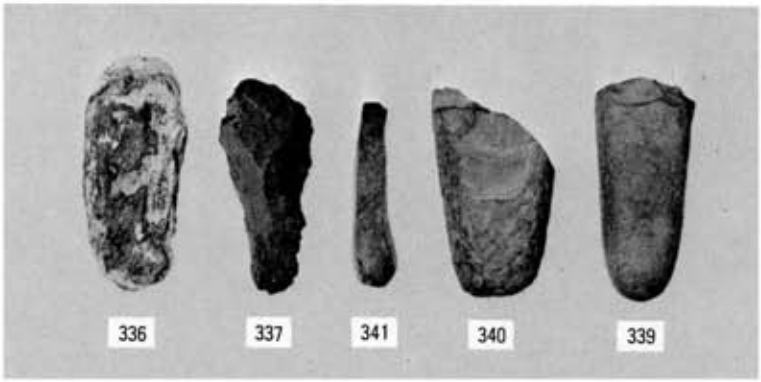
312・325　浦田ＳＢ003住居跡出土土師器
317　　同　ＳＢ009住居跡出土土師器
320・324　同　ＳＢ027住居跡出土土師器

315・322・326　浦田ＳＢ011住居跡出土土師器
318　　同　ＳＢ001住居跡出土土師器
323　　同　ＳＢ022住居跡出土土師器

327　浦田ＳＢ042住居跡出土黒色土器
328・332　同　ＳＢ001住居跡出土黒色土器
329　同　ＳＢ022住居跡出土黒色土器
330　同　ＳＢ026住居跡出土黒色土器
331　同　ＳＢ002住居跡出土黒色土器
333　同　ＳＢ015住居跡出土黒色土器







浦田出土石器

24	石槍	42	剝片
25～27	石鏃	336・337・339～341	石斧
33・34	石匙	343	石核
38	石錐	346～349	砥石
39・40	スクレイパー		

西 一 本 杉 遺 跡

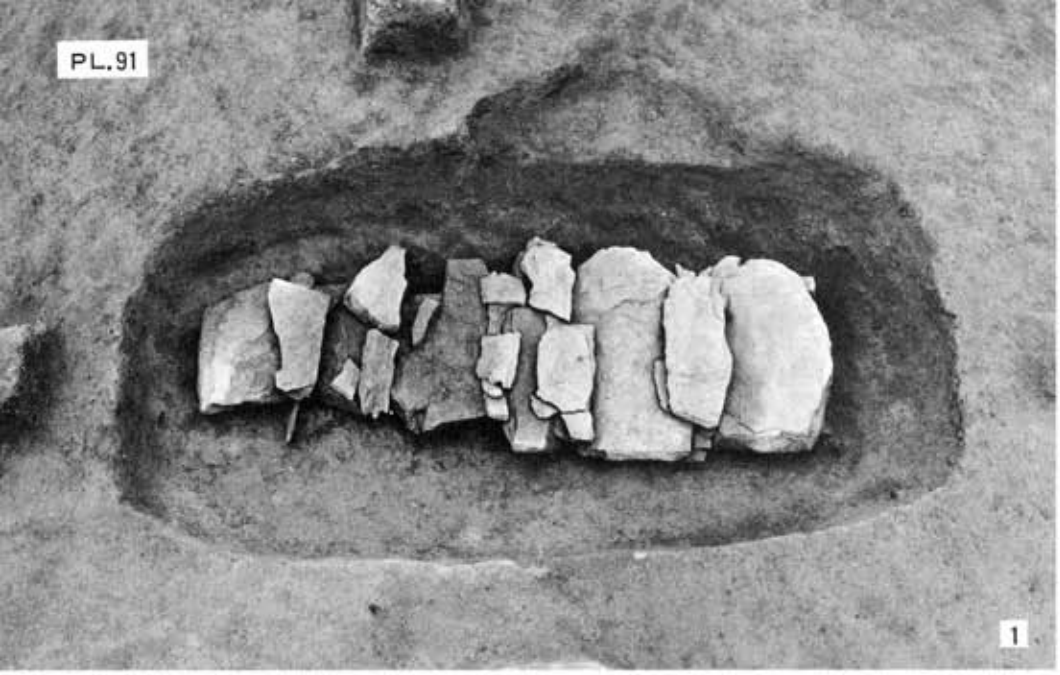
西一本杉遺跡全景航空写真

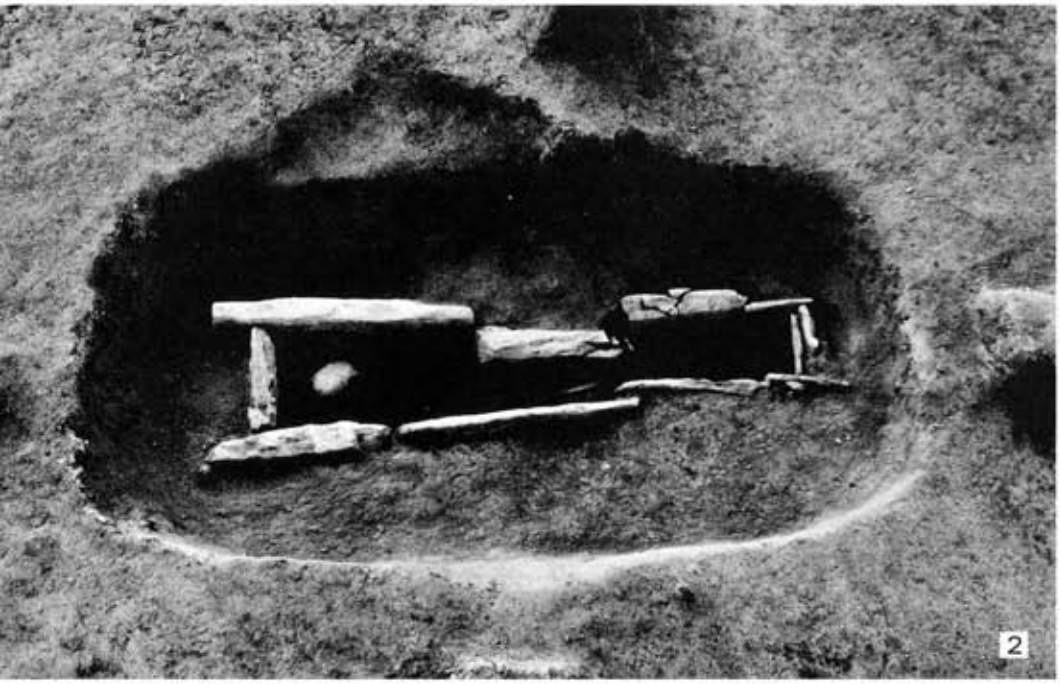
1　西一本杉ＳＴ006古墳航空写真〈南から〉　　2　同　古墳〈西から〉

1　西一本杉ＳＴ007古墳航空写真〈西から〉　　2　同　古墳〈南から〉

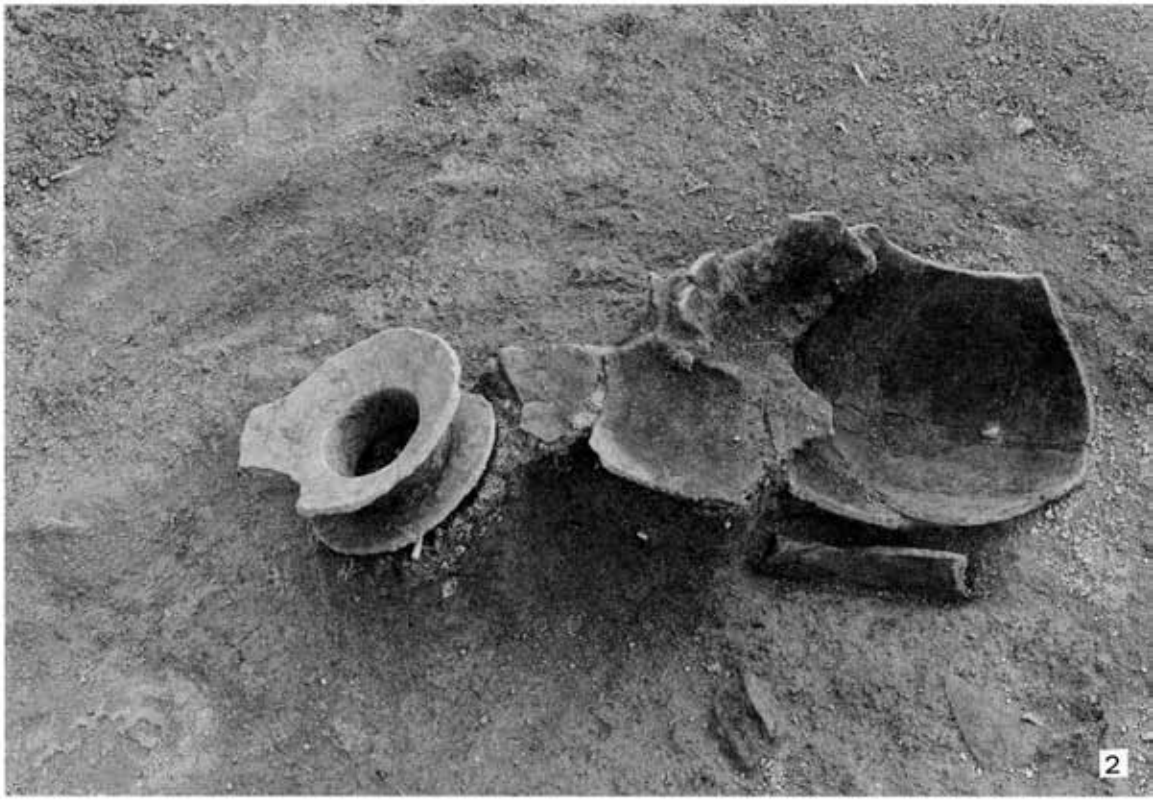
1　西一本杉ＳＴ008古墳航空写真〈南から〉　　2　同　古墳〈西から〉

1　西一本杉ＳＴ008古墳張り出し部調査前〈東から〉　　2　同　調査後〈東から〉



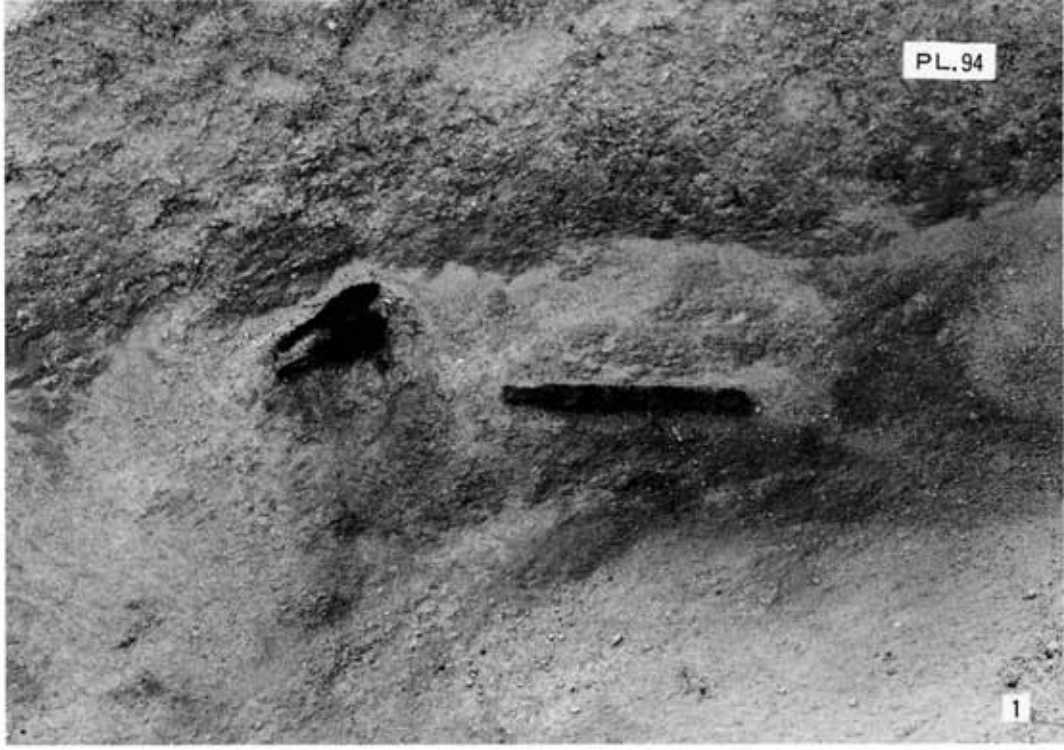


1　西一本杉ＳＴ008古墳内部主体　　2　同　古墳内部主体

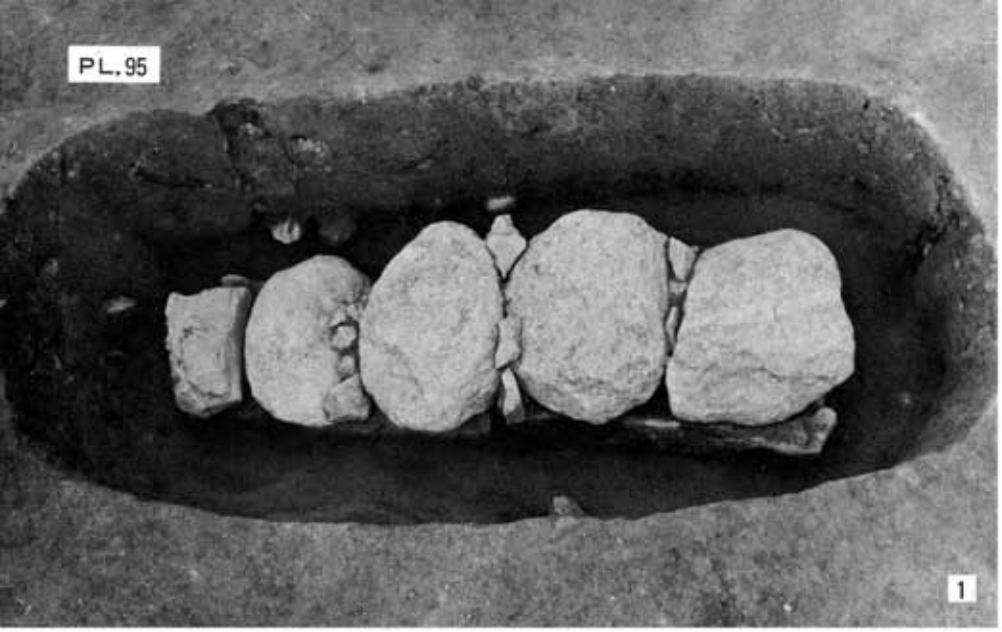


1　西一本杉ＳＴ008古墳内部主体　　2　同　古墳溝出土壺

1　西一本杉ＳＴ009古墳内部主体　　2　同　古墳遺物出土状況

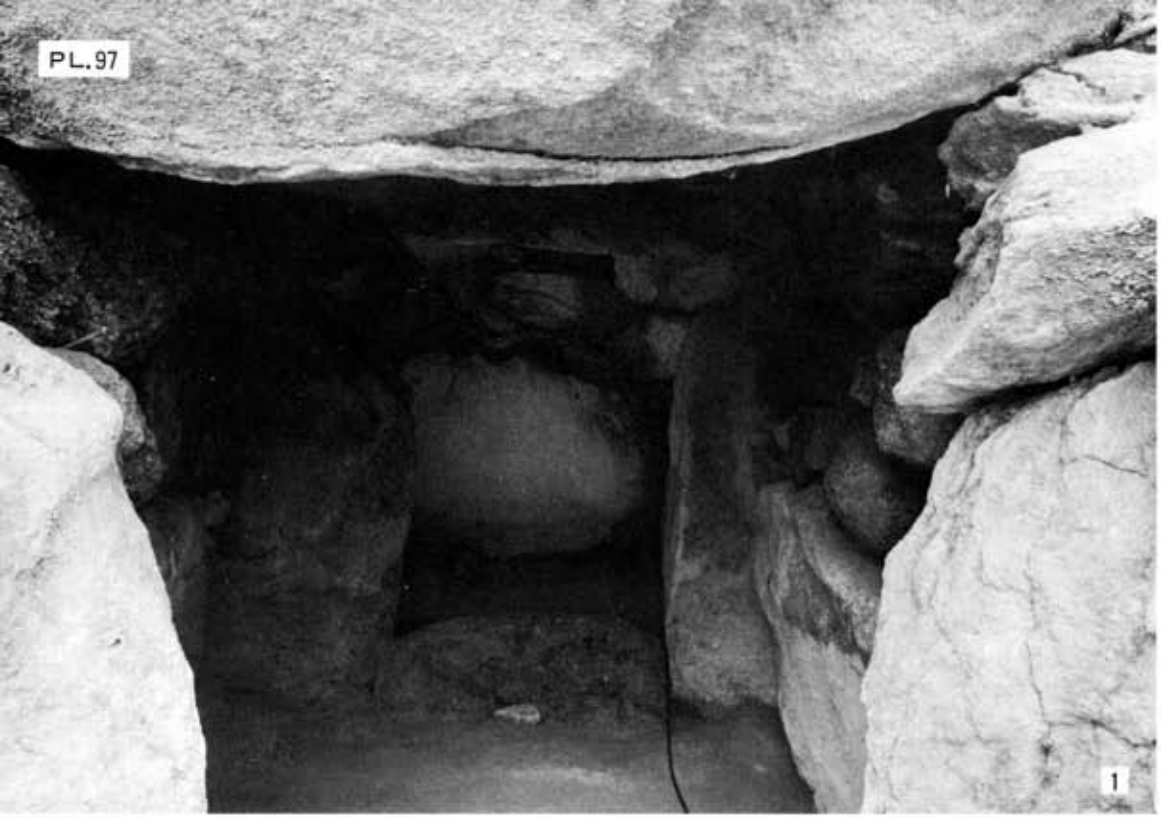


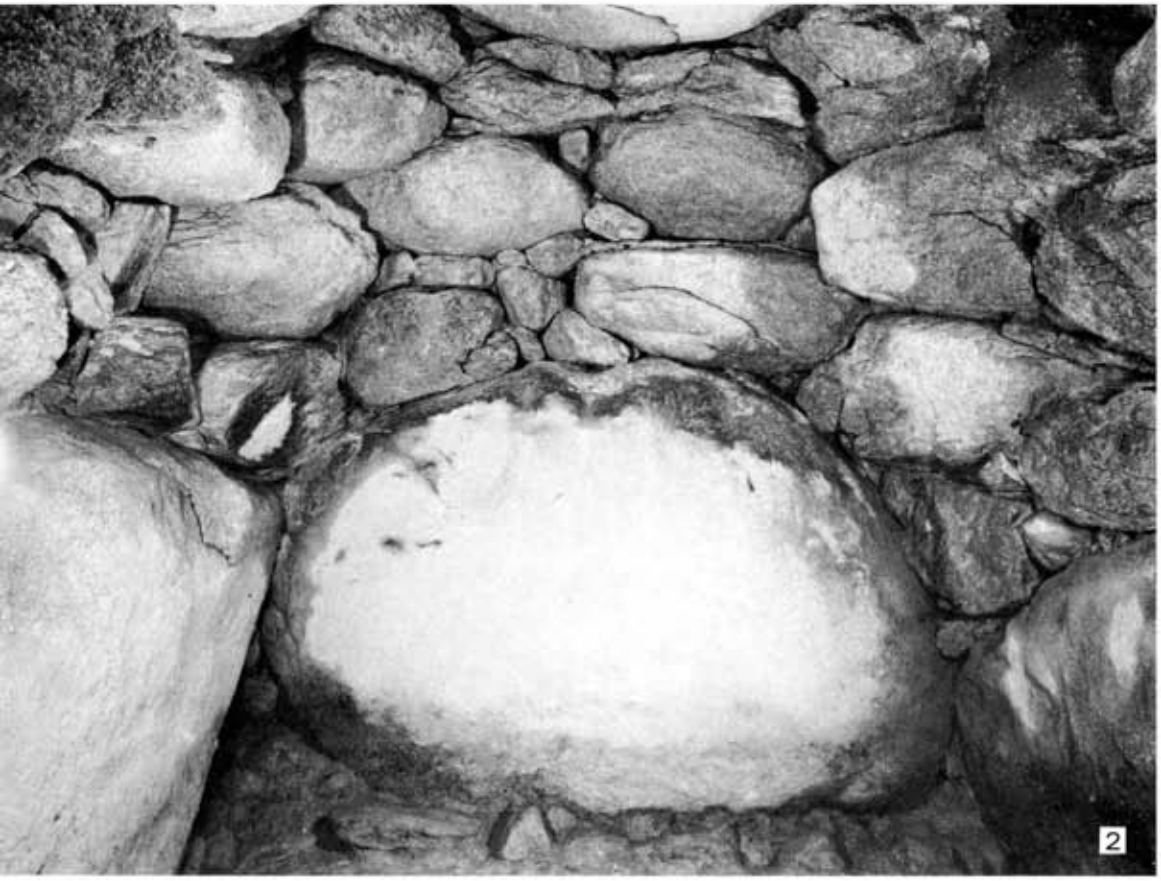
1・2　西一本杉ＳＴ009古墳出土状況



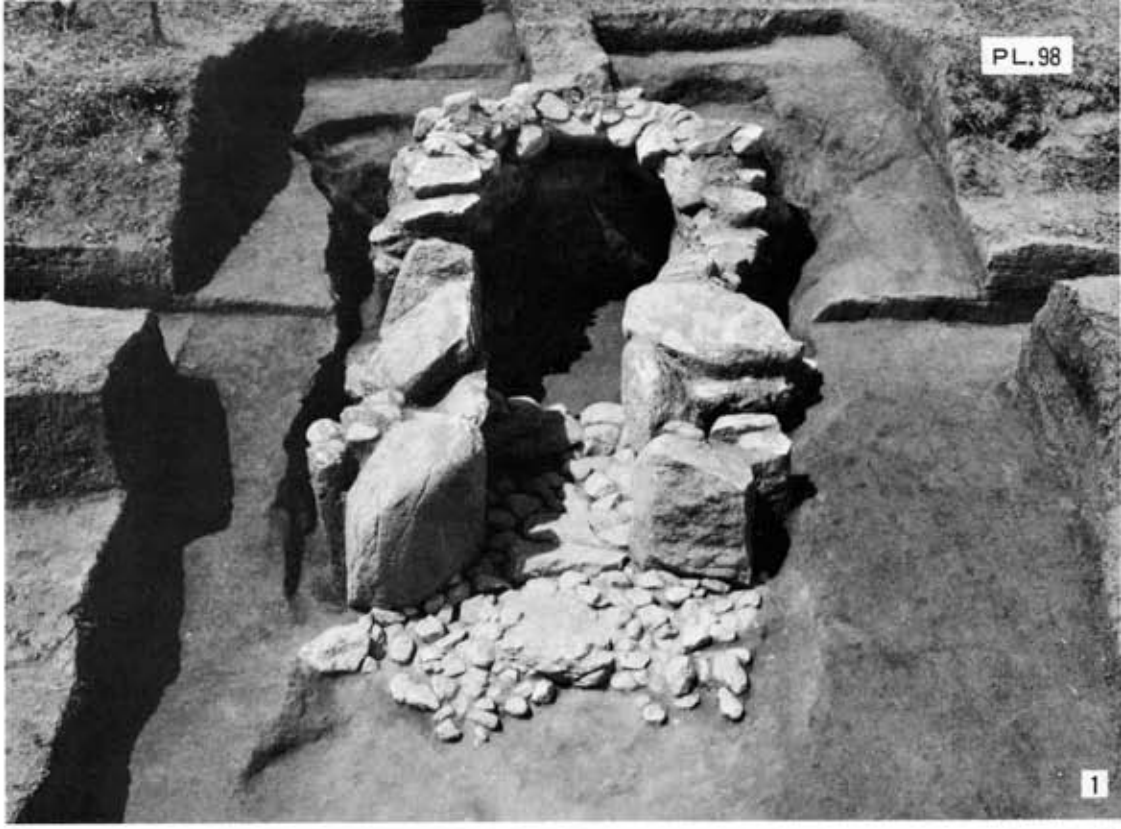
1・2・3
西一本杉ＳＴ010古墳

1・2　西一本杉ＳＴ012古墳全景





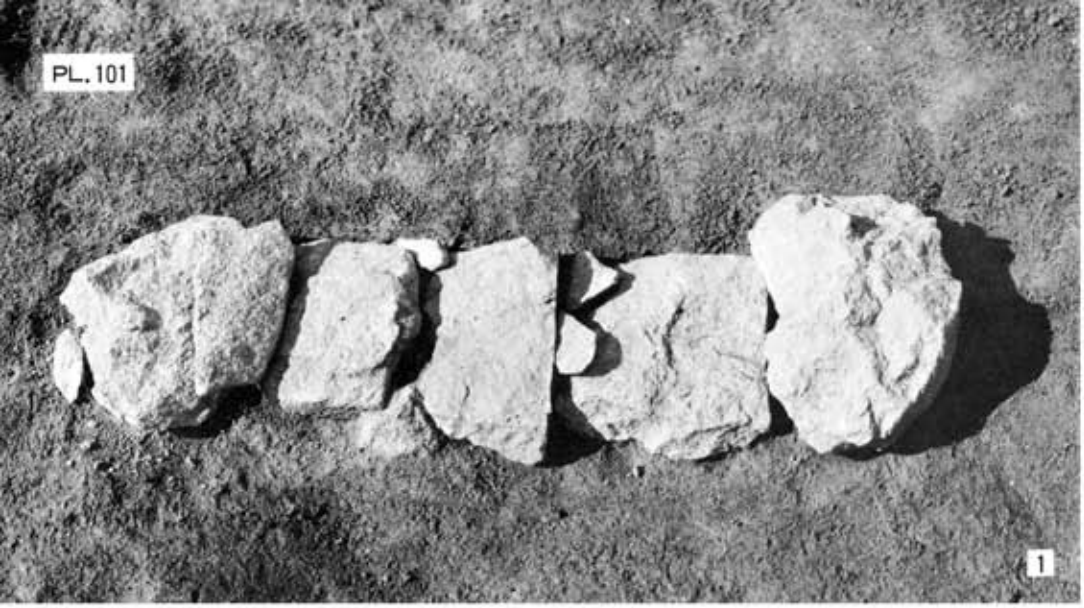
1・2　西一本杉ＳＴ012古墳石室

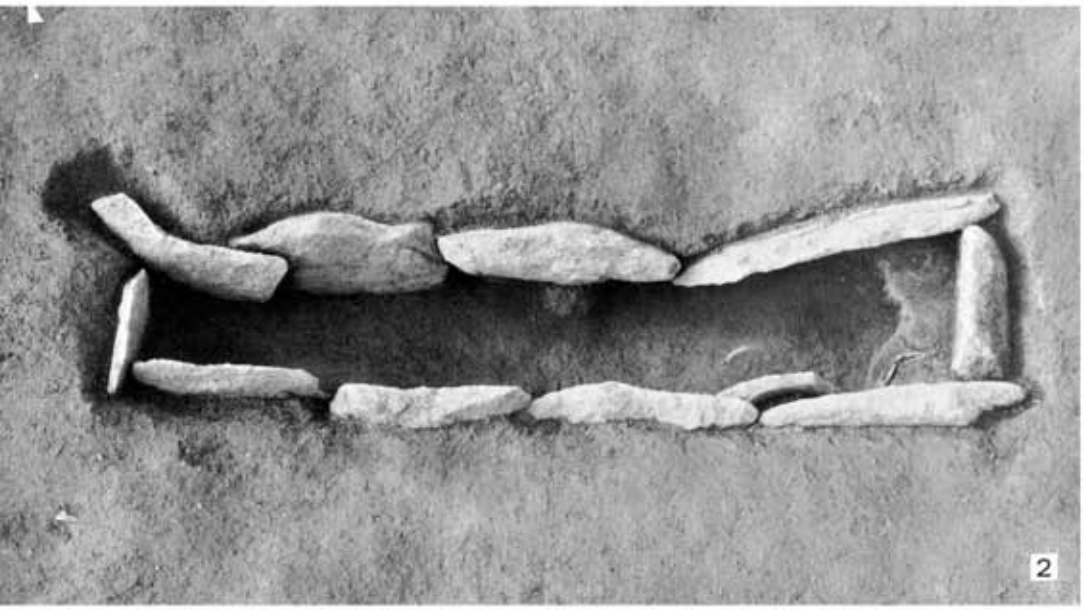


1　西一本杉ＳＴ013古墳全景　　2　同　古墳石室

1　西一本杉ＳＴ013古墳石室　　2　同　古墳石室内遺物出土状況

1・2　西一本杉ＳＣ003石棺墓

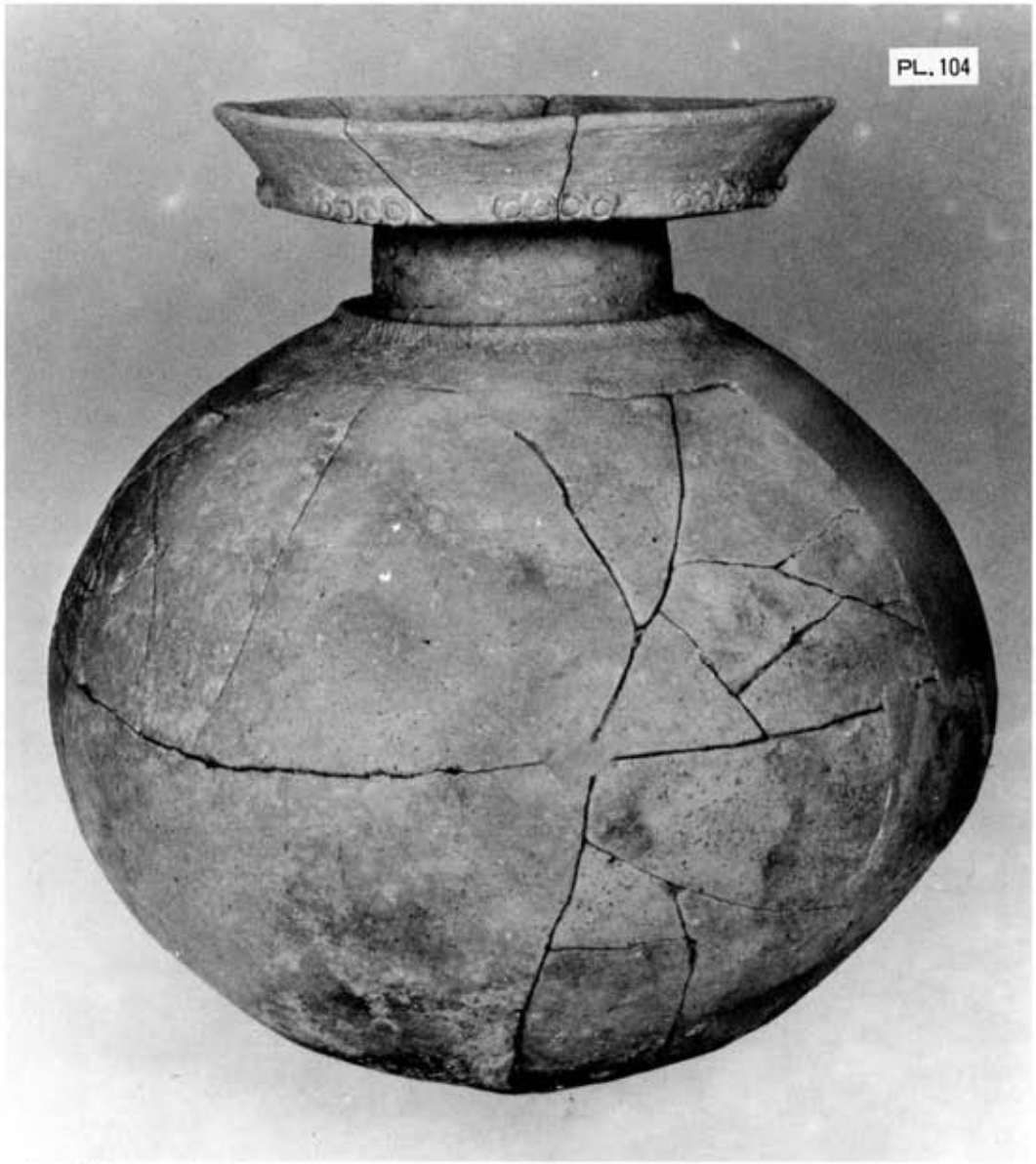




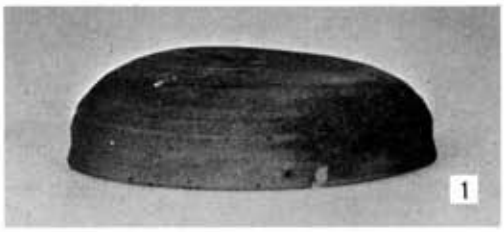
1・2　西一本杉ＳＣ004石棺墓

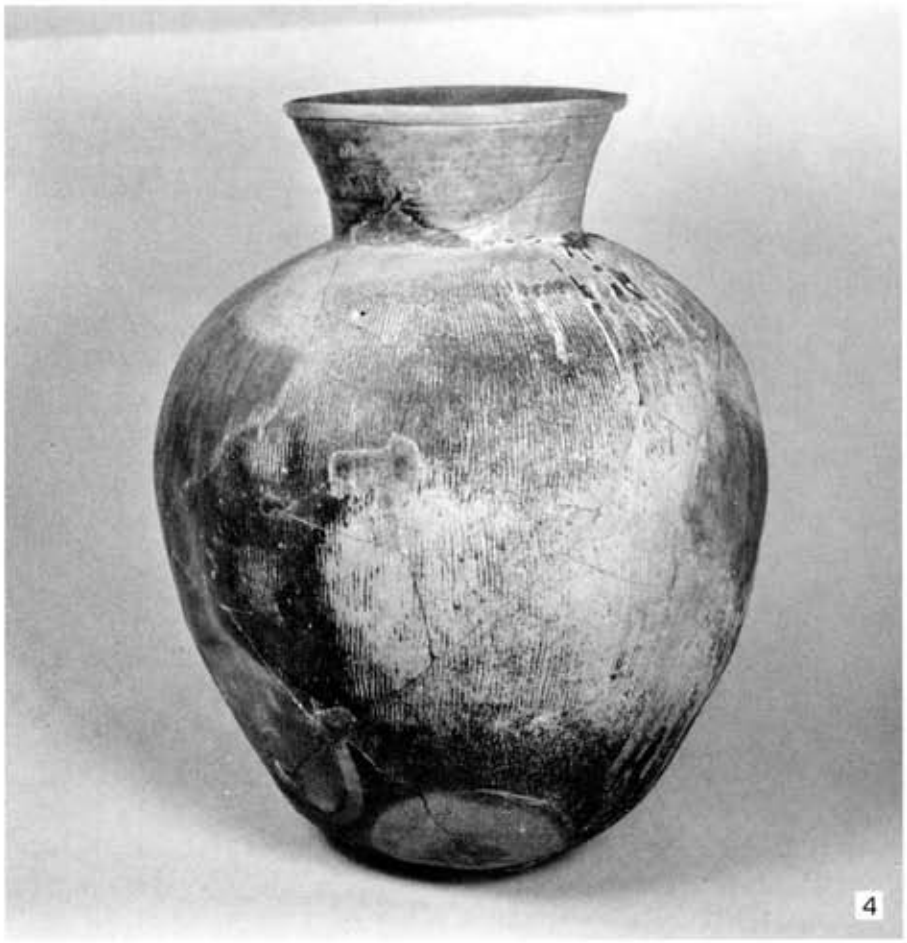
1・2　西一本杉ＳＣ005石棺墓

1　西一本杉ＳＪ001壺棺墓　　2　ＳＪ002壺棺墓

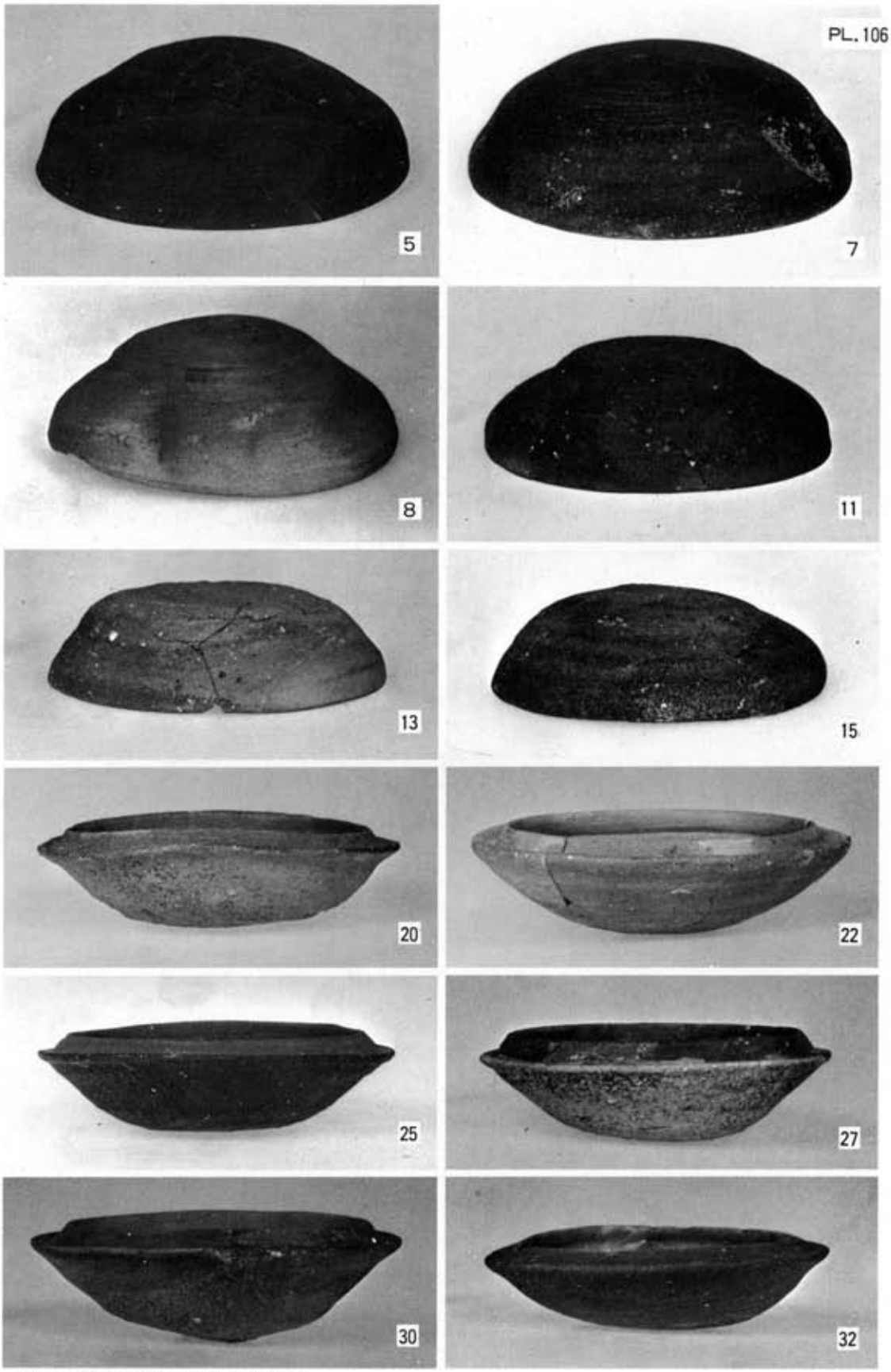


西一本杉ＳＴ008古墳出土土師器壺

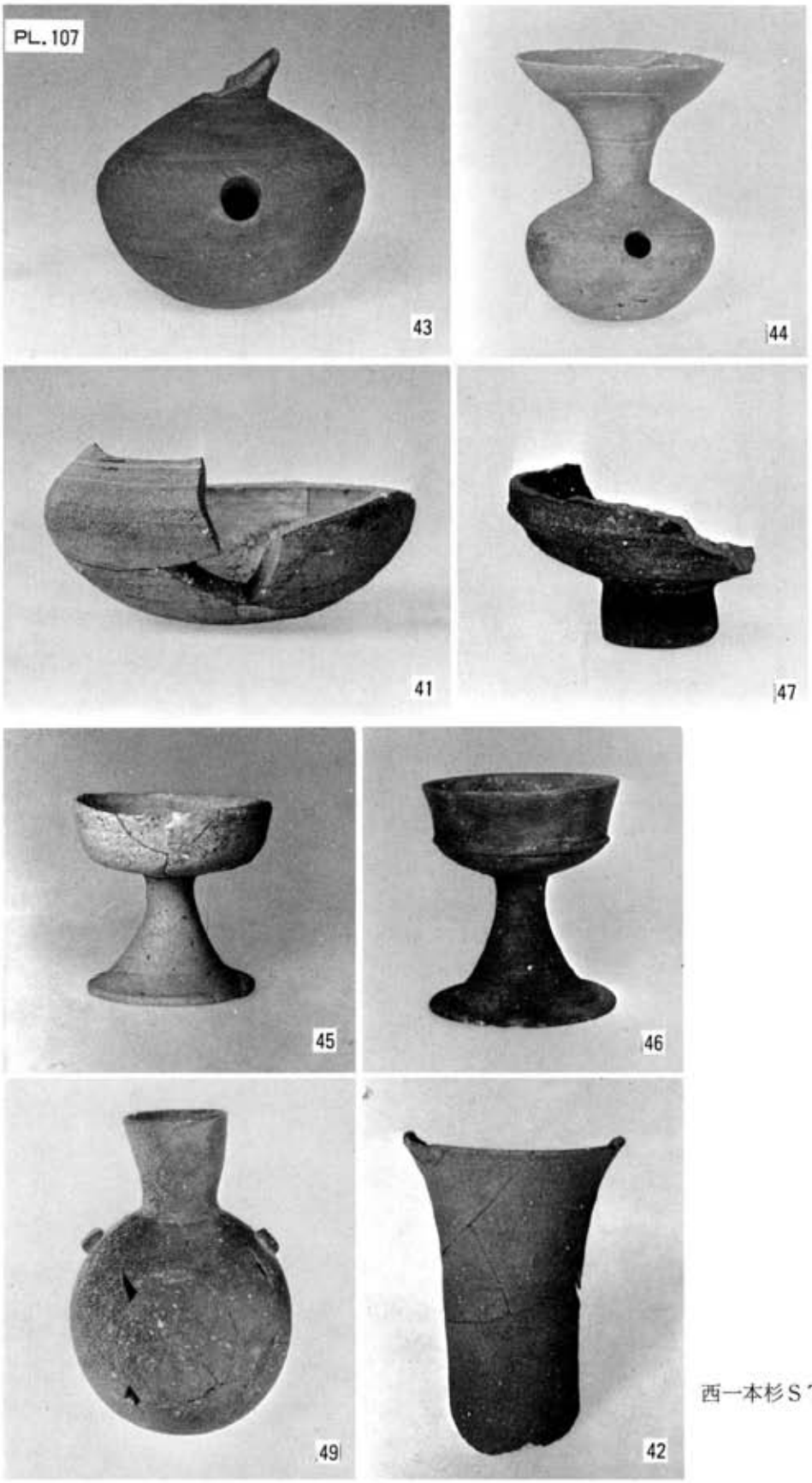




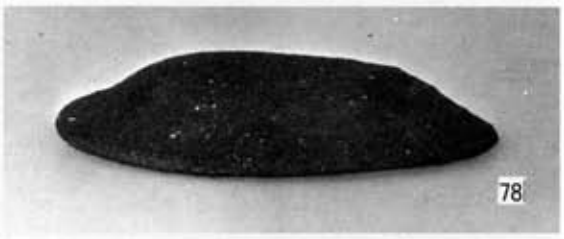
西一本杉ＳＴ007古墳出土須恵器

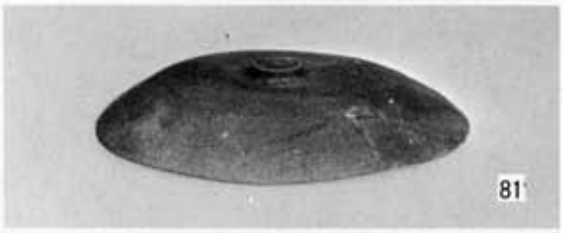


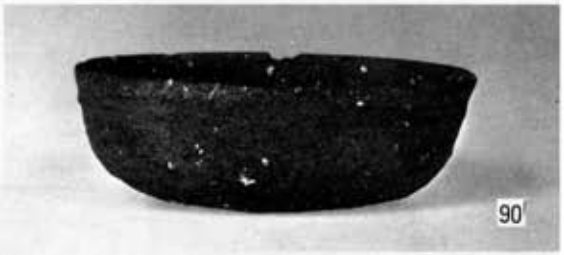
西一本杉ＳＴ012古墳出土須恵器

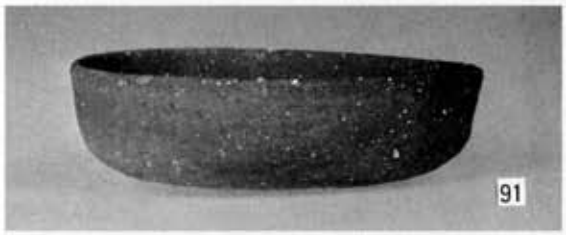


西一本杉ＳＴ012古墳出土須恵器



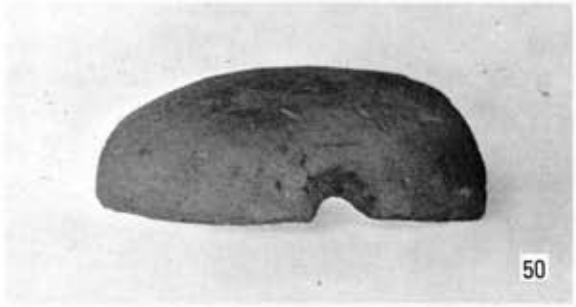


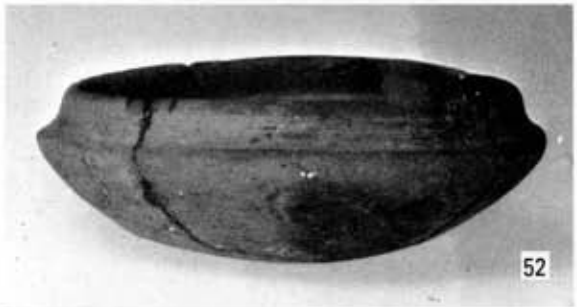


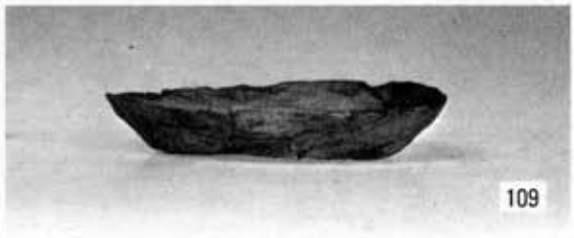


西一本杉ＳＴ013古墳出土須恵器

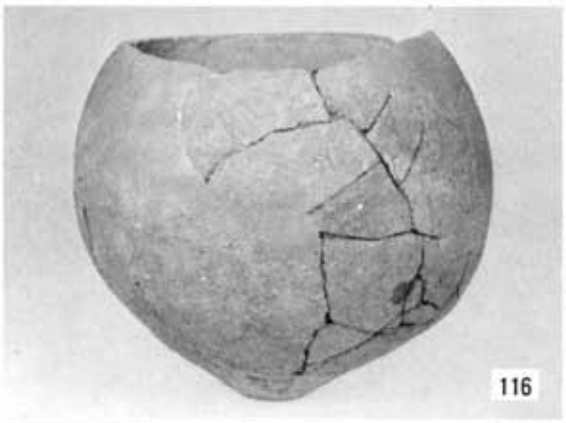
西一本杉ＳＴ013古墳出土須恵器

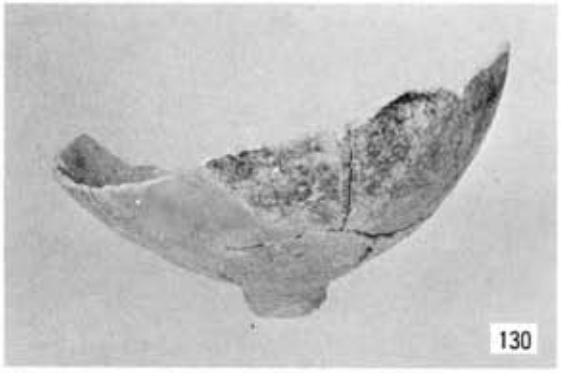




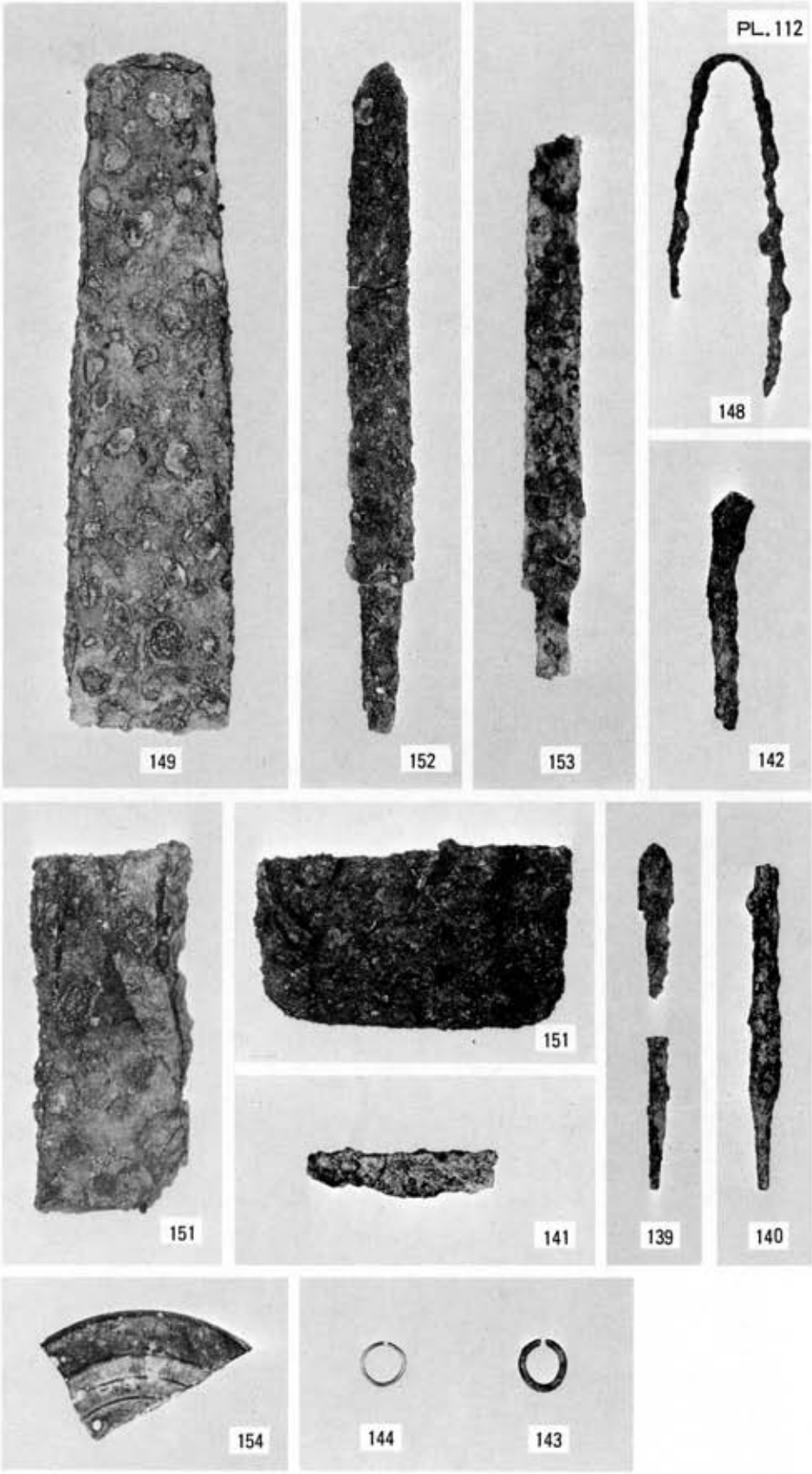


50・52・54・56・57・59　西一本杉ＳＴ012古墳出土土師器
109～111　同　ＳＴ013古墳出土土師器



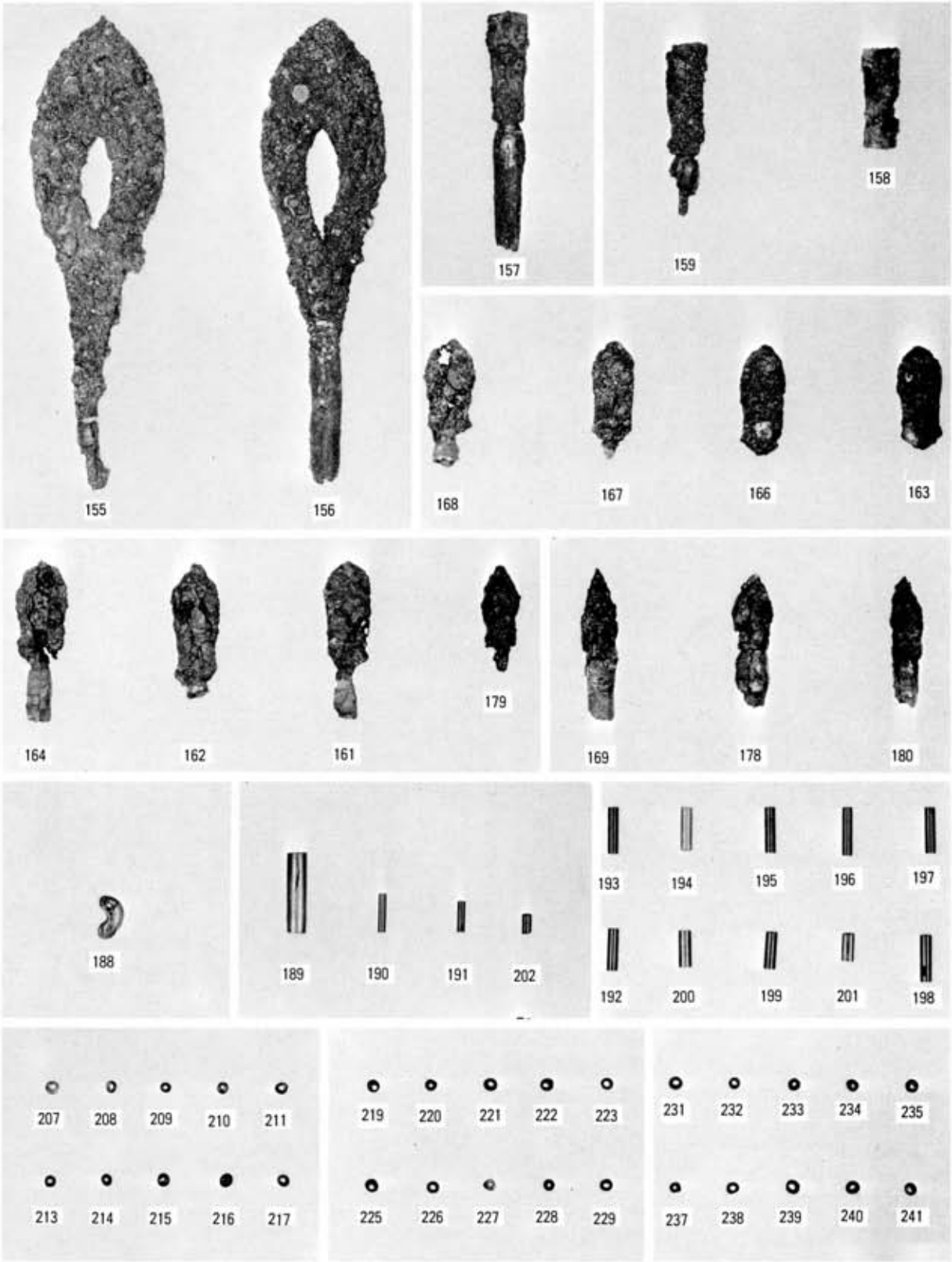


115　　西一本杉ＳＪ002壺棺
116　　同　ＳＪ001壺棺
118・121・130　　同　西丘陵南斜面出土一括土師器
123　　同　ＳＴ008古墳出土土師器壺



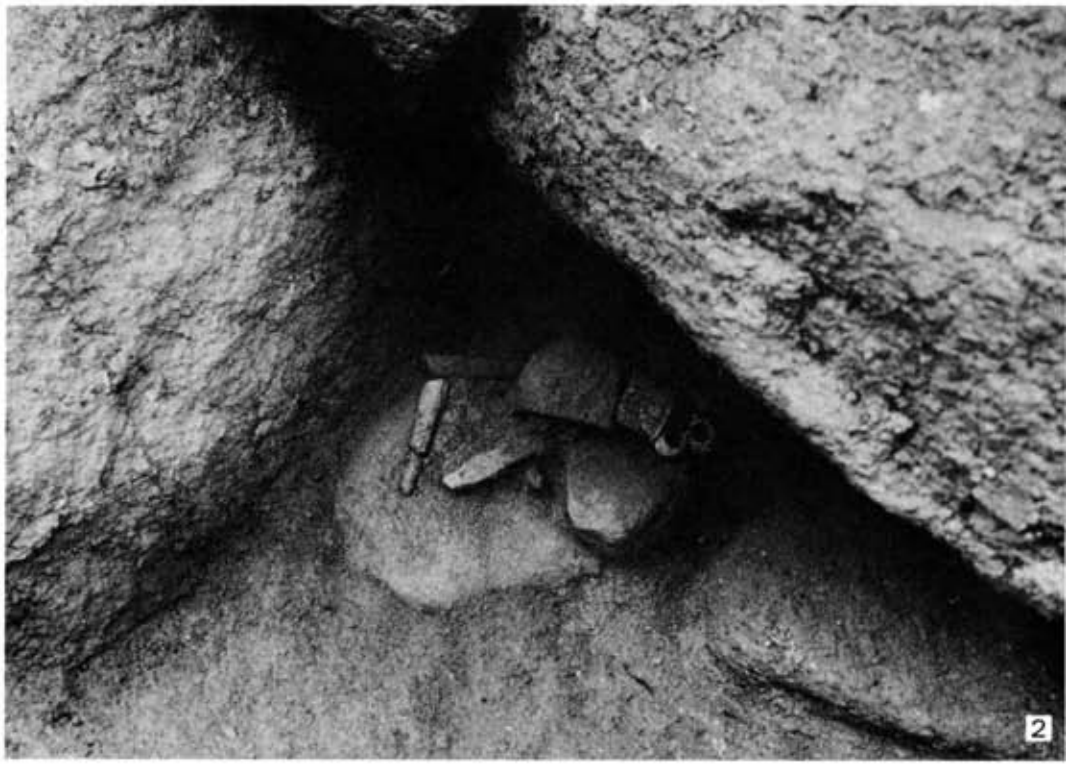
西一本杉出土鉄器・鏡・耳環

139・140・143・144　ＳＴ007古墳出土
148　ＳＴ008古墳出土
149～154　ＳＴ009古墳出土

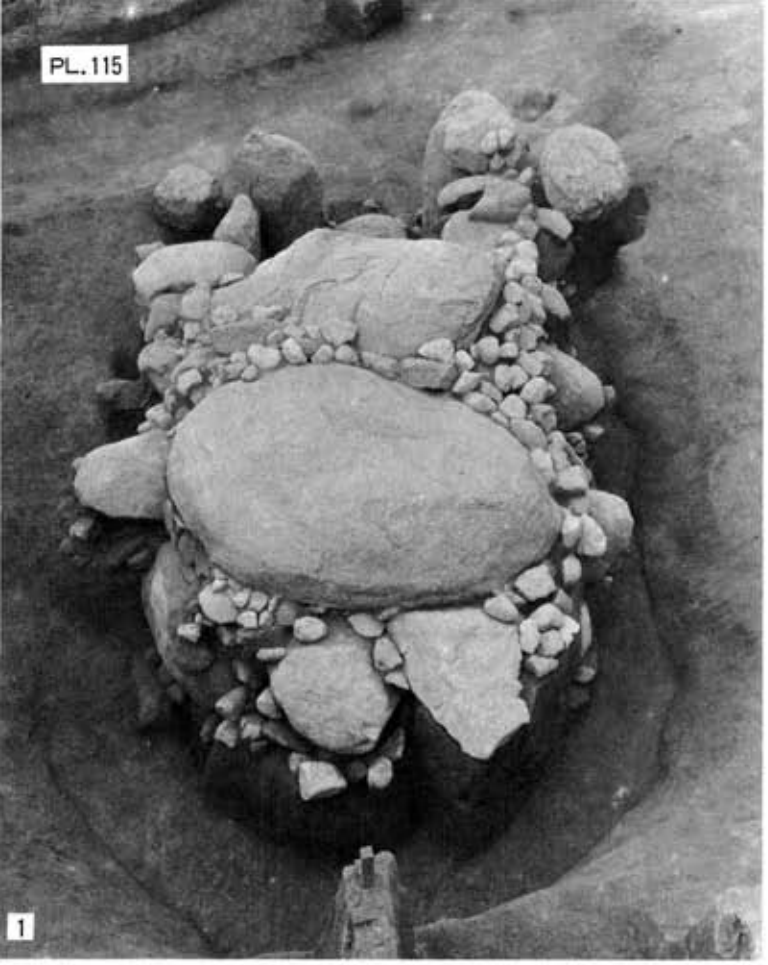


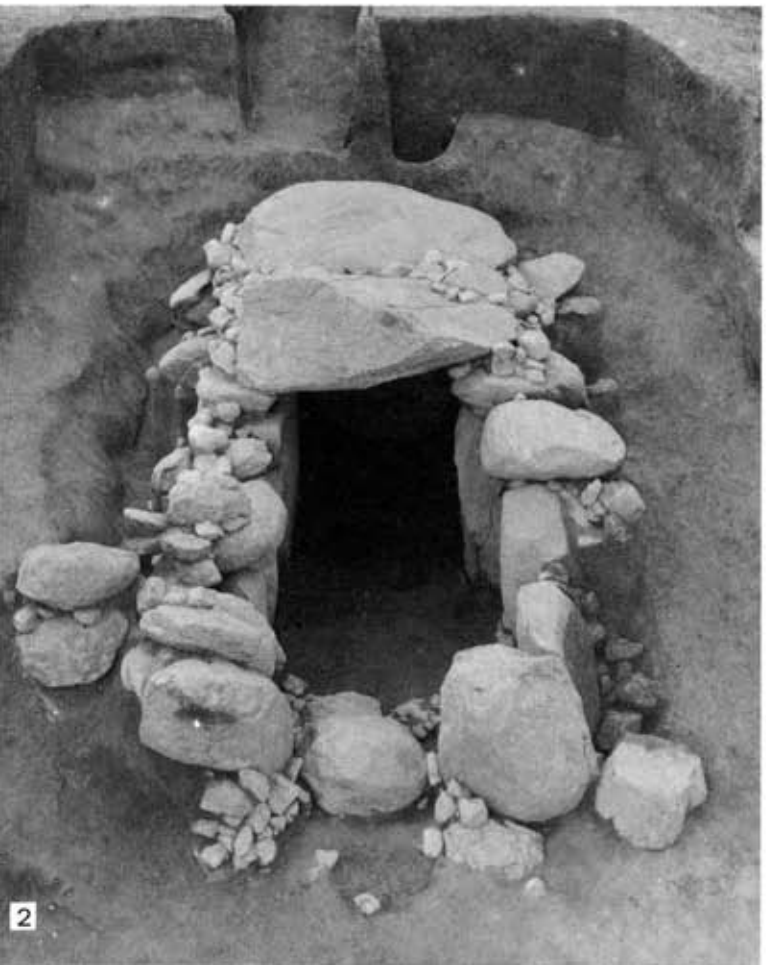
西一本杉ＳＴ009古墳出土鉄器・玉類

上三津栗原遺跡

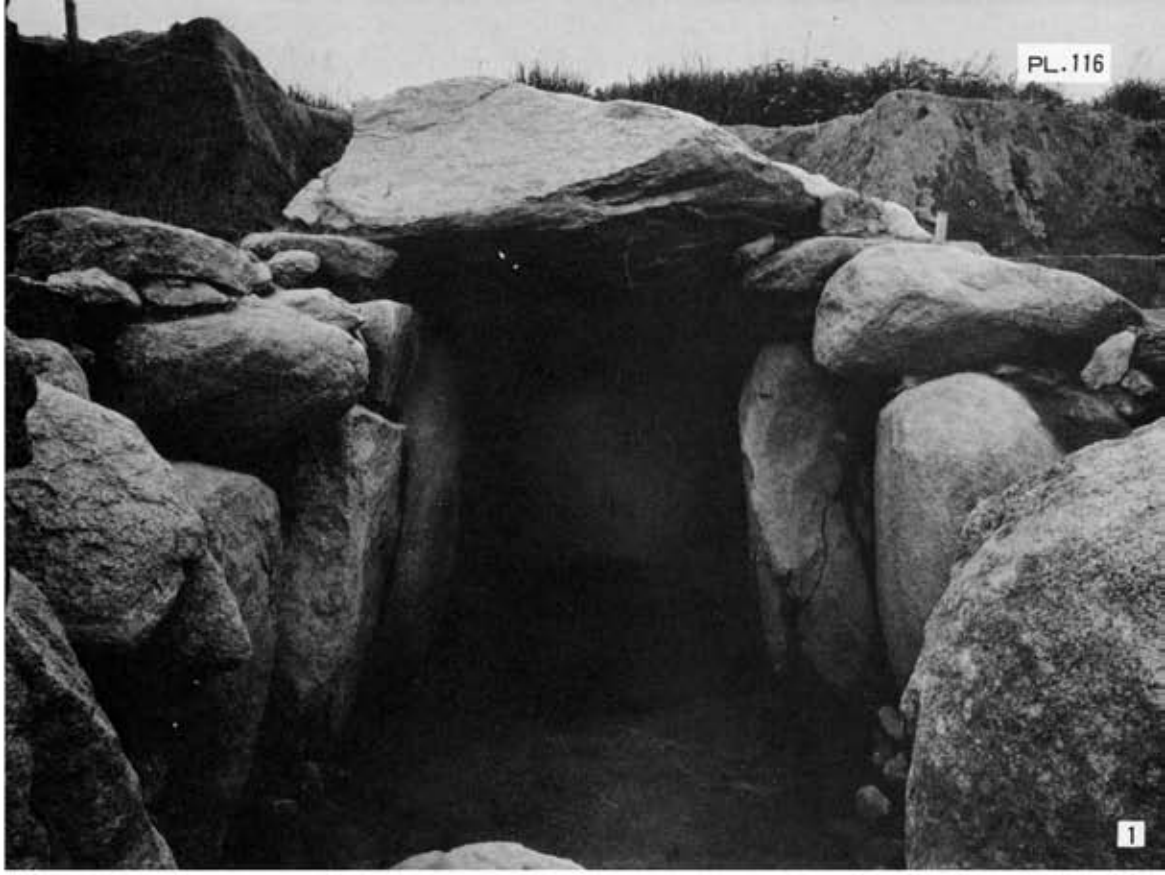


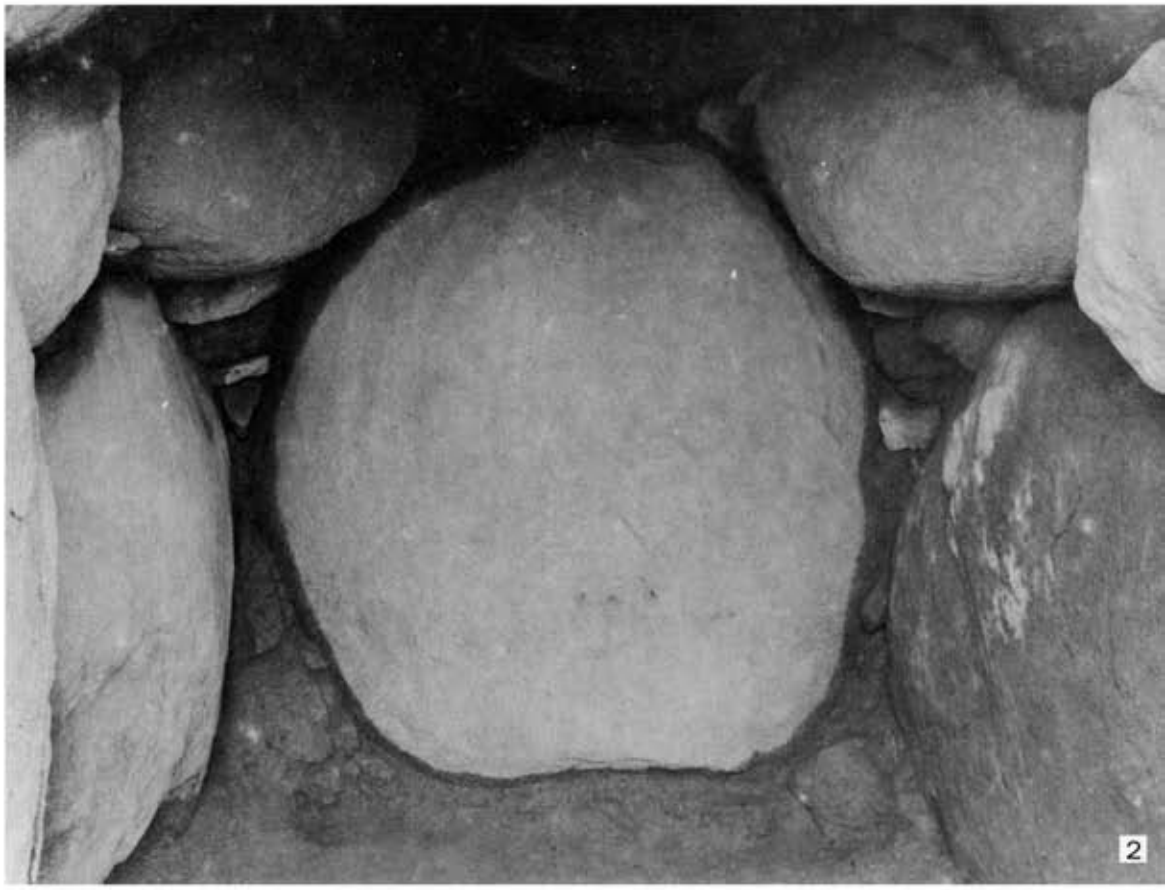
1　上三津栗原ＳＴ001古墳玄室内遺物出土状況
2　　同　　羨道内遺物出土状況



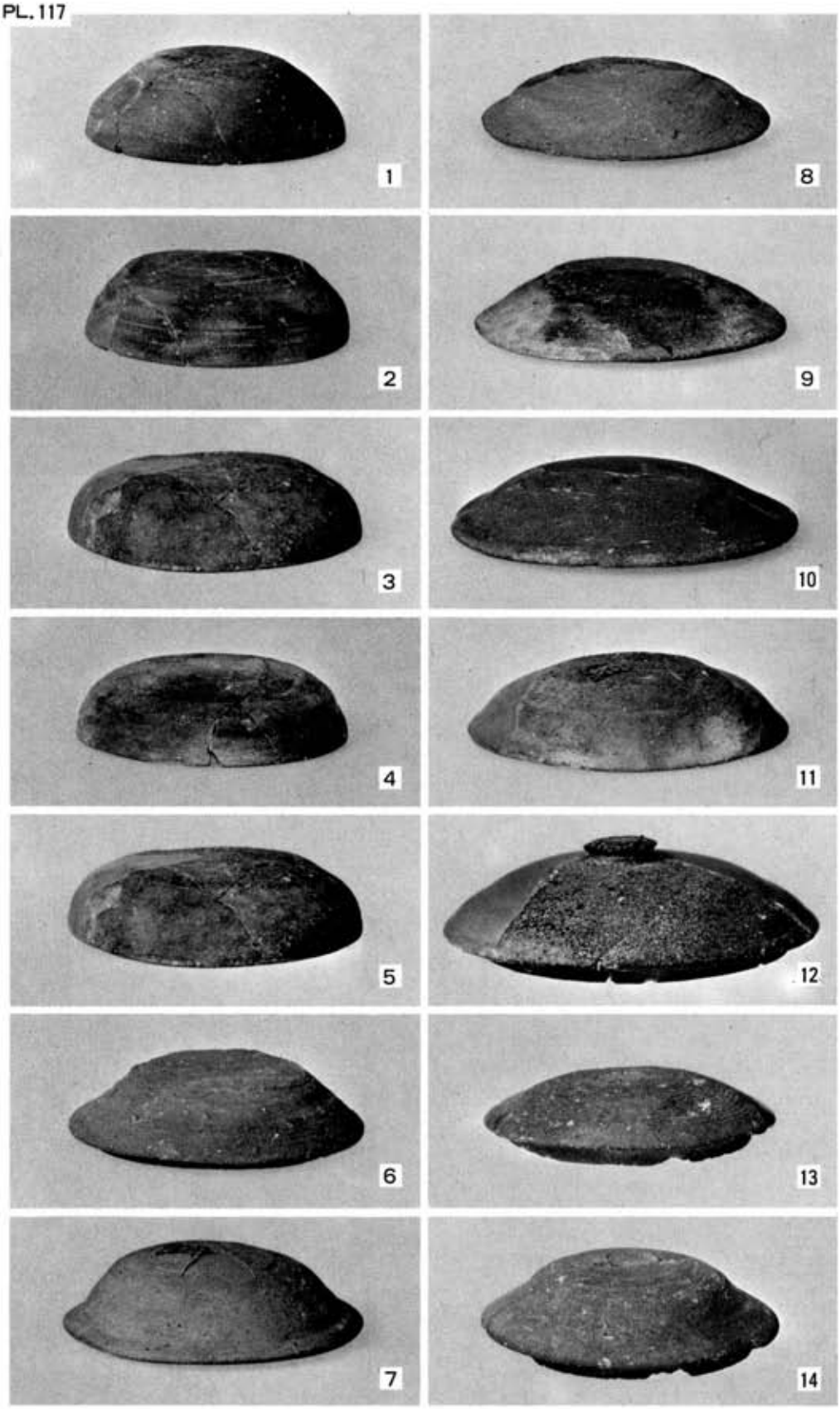


1　上三津栗原ＳＴ002古墳石室全景（北から）
2　　同　　（南から）





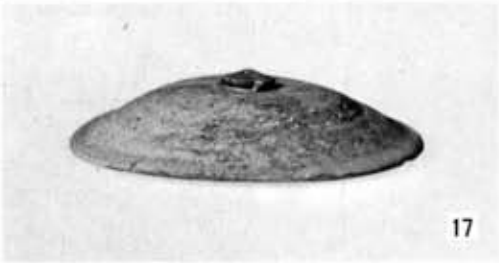
1　上三津栗原ＳＴ002古墳（羨道から玄室を見る）
2　　同　　玄室奥壁



上三津栗原ＳＴ001古墳出土須恵器

16

24


17

27

19

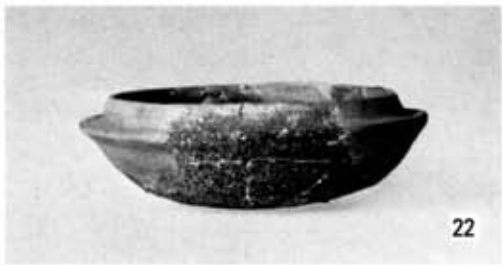
28

20

29

21

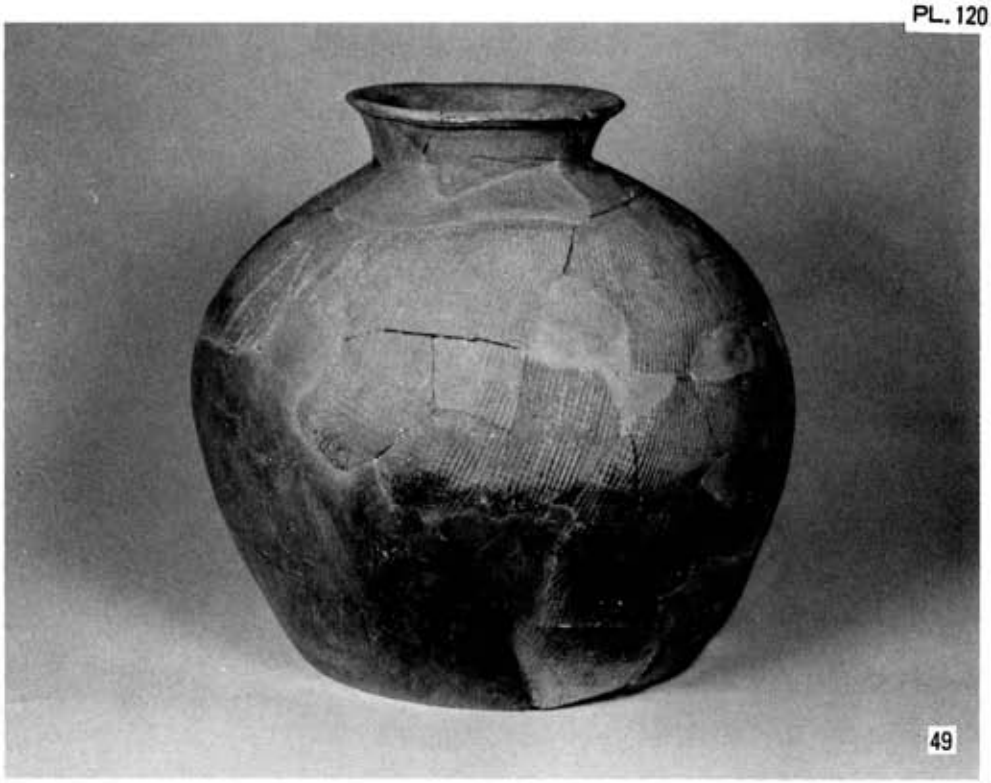
30

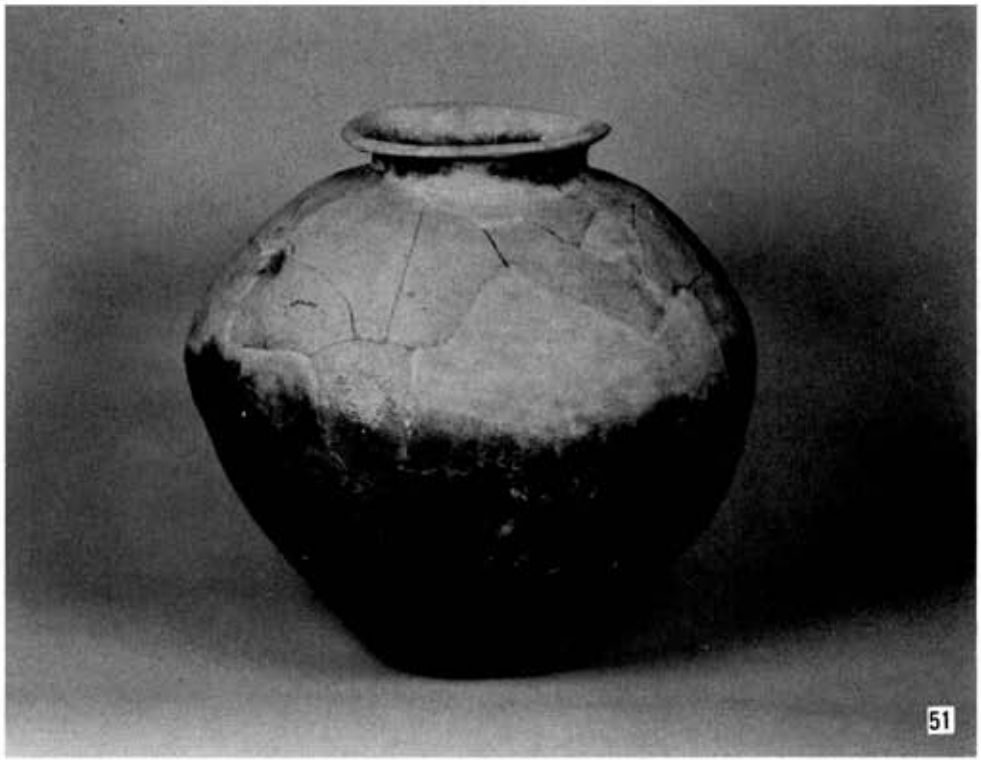

22

31

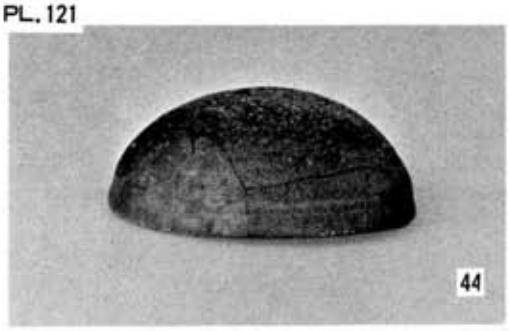
上三津栗原ＳＴ001古墳出土須恵器

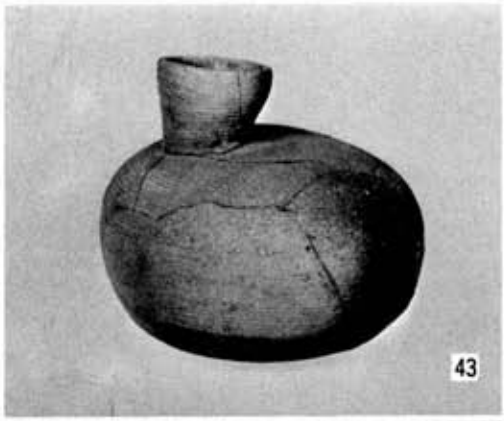
上三津栗原ＳＴ001古墳出土須恵器



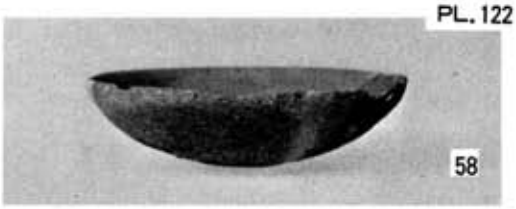


上三津栗原ＳＴ001古墳出土須恵器甕

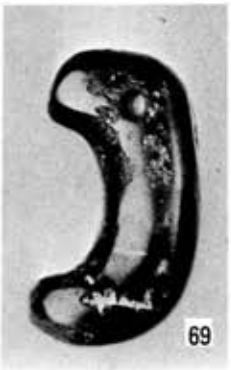


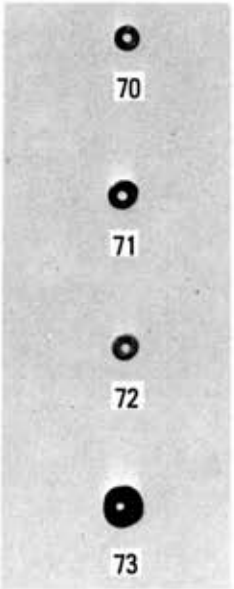


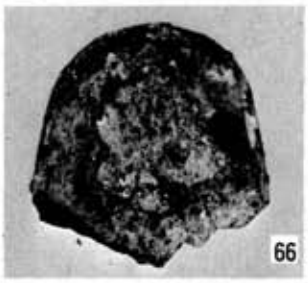
43～46　上三津栗原ＳＴ001古墳出土須恵器
53～56　　同　　土師器



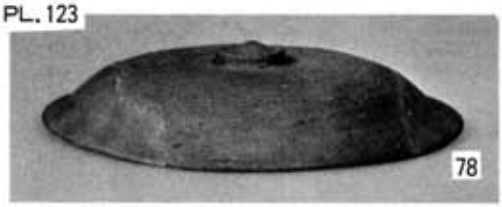
57・58・60　上三津栗原ＳＴ001古墳出土土師器

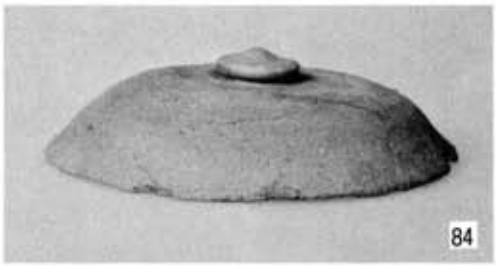


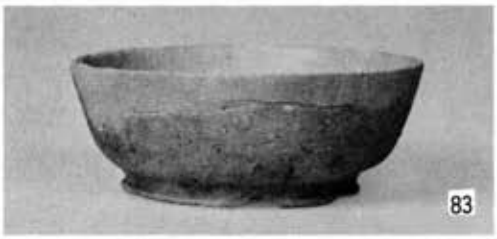




63～73　上三津栗原ＳＴ001古墳出土鉄器・青銅製品・装身具類

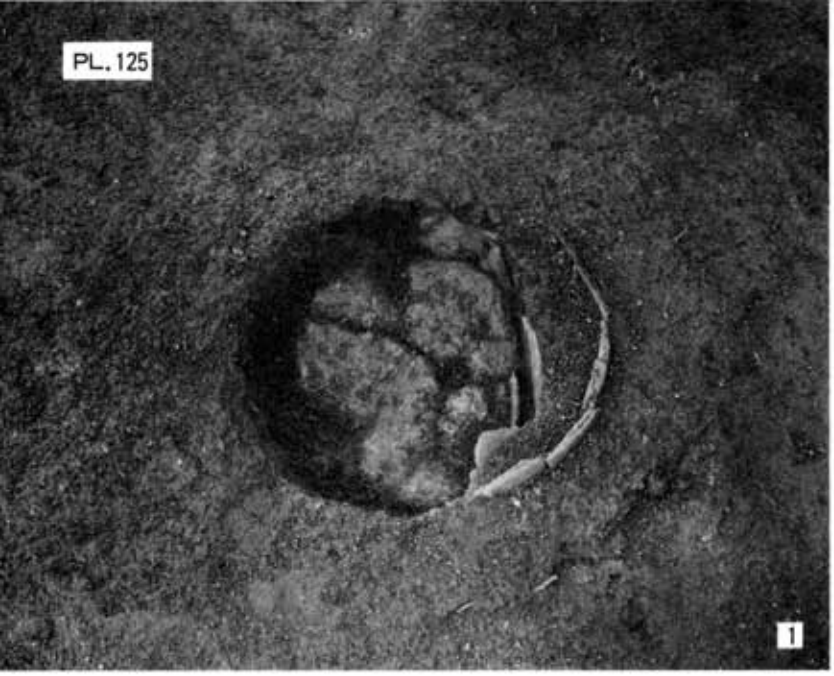




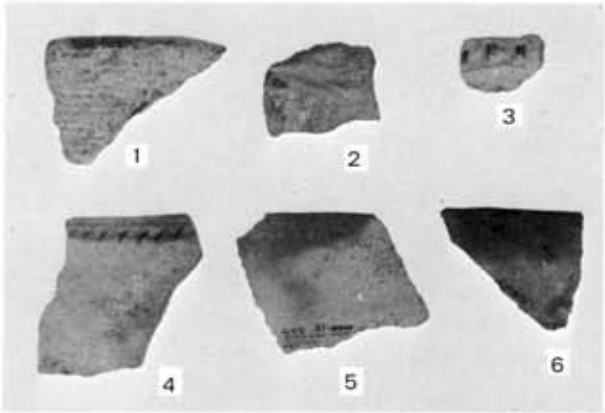


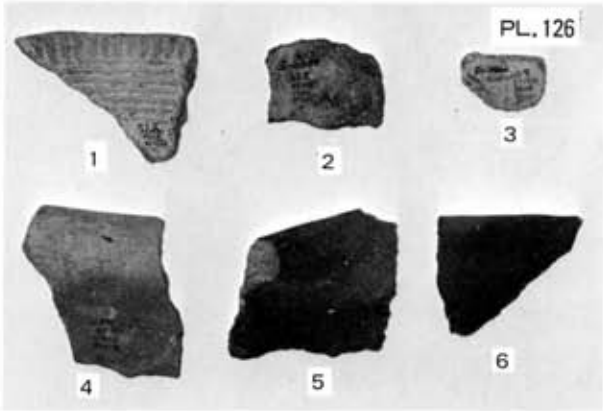
78・80・82・83　上三津栗原ＳＴ002古墳出土須恵器
84～89　　同　　出土土師器

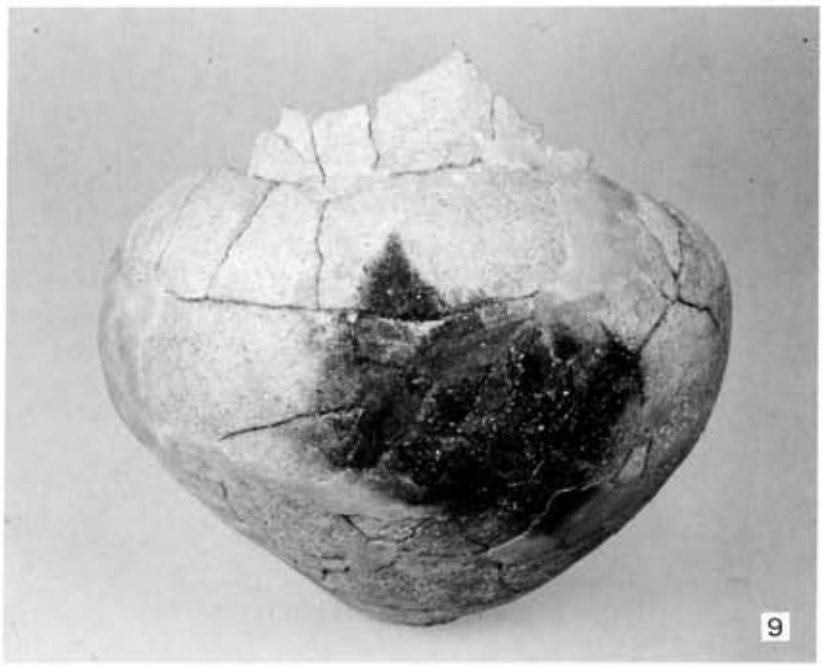
1　上三津栗原遺跡
2　山古賀遺跡
3　西一本杉遺跡



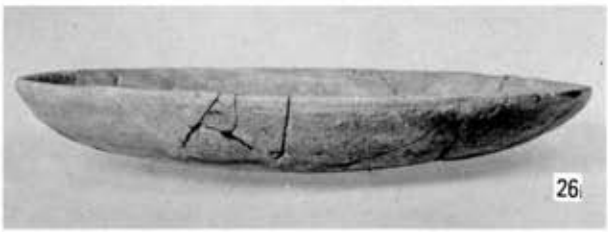
1　山古賀ＳＪ001壺棺墓〈南から〉
2　　同　ＳＴ004古墳石室〈南から〉

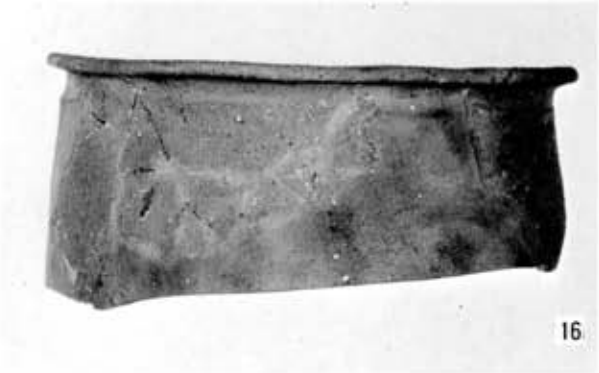


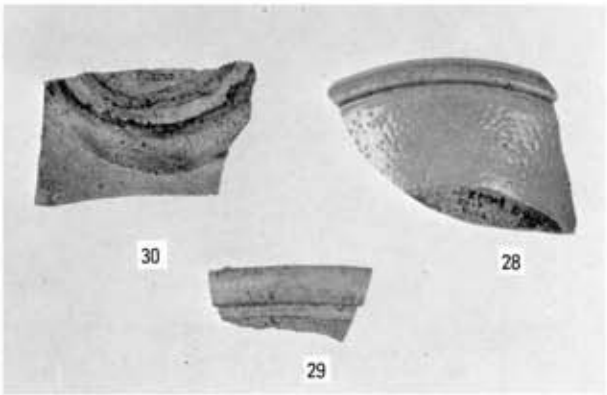




1～6　山古賀出土縄文土器（上左一外面、上石一内面）
8　　同　ＳＪ001壺棺（鉢）
9　　同　　（壺）







13～17　山古賀出土弥生土器
26　　同　　土師器
28～30　同　　白磁

佐賀県文化財調査報告書第66集

西　原　遺　跡

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書 3

昭和58年3月30日印刷
昭和58年3月31日発行

編集
発行　佐賀県教育庁文化課
佐賀市城内1丁目

印刷　㈾佐賀印刷社
佐賀市高木瀬町長瀬1136
大和工業団地